
ミリオン

おこき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミリオン

【Nコード】

N5596J

【作者名】

おこき

【あらすじ】

死なない存在、忌むべき存在、嫌悪の象徴『魔女』

死して残留する存在、称えられる存在、誉れの象徴『英雄』

二つの伝説が交差する時、物語は始まる。

古代人より継承され続けて来た技術“魔術”。

現代人が生み出した技術“科学”。

両者が対立する世界で、地表より発掘された人型兵器メタルフレーム【MF】は両技術の集大成『魔科学』とも呼べる逸脱したものだ

った。

英雄を志すMF好きの少年リオンは、ひょんなことから不思議な全裸少女セレネと出会い、旅に出ることに。

脆弱な主人公が時には七転八倒、時には七転び八起きしながら成長する物語です。

混沌とする非情な社会で青い少年は何を求め、蒼い少女は何を見つけるのか。

重要

・タチバナナツメさんにファンアートを描いて頂きました！
一章に飾らせて頂いております。

・『不定期更新』です。

何年掛かっても必ず完結させたい物語ですので、先は長くなるかもしれませんが、今後ともよろしくお願いします。
・ご意見、ご感想、ご質問など何でも気軽にどうぞ。
全てがおこきの肥になりますゆえ。

プロローグ

人を殺す。

それは悪いことだろうか。

憎しみや怒りから人を殺すことは確かに“悪”なのかもしれない。しかし、何かを守るために譲れない何かを守るために、殺すならばそれは“悪”なのか。

もし、世界平和のために人間を殺せと言われれば、その抽象的過ぎる考えに、戸惑いを覚えるだろう。

だが、愛する人を守るために敵を殺せと言われれば……敵を殺すことで世間から褒め称えられる世界ならば。

戸惑いながらも一人が敵を殺す。

後悔と罪を感じていた彼もしくは彼女が世間から英雄と扱われる様を見て、敵を殺す者が殺到する。

そこに迷いなどない。

戸惑っていた彼らは、名誉と大義名分を盾に殺戮を繰り返せるだろう。

その場に限り、“悪”は“正義”という名を被る。

数が多い方が“正義”。勝った方が“正義”。権力を持った方が“正義”。

“正義”を守った者が英雄。“悪”を駆逐した者が英雄。“正義”を前に潔く死ぬ者が

英雄

これは、殺戮そして……正義（英雄）と悪（魔女）の物語。

プロローグ（後書き）

処女作です。

この作品と共に成長していきたいと思います。

いきなり過激な表現があります。ご了承下さい。

徐々に表現がオブラートになっていきますので、ご安心を。

そして、拙作に2分もの時間を割いて下さってありがとうございます！
す！！

拙作は文字数だけが增える一方です。

2分が20分に、20分が20日になって行く事を切に願います。
小説書くのって……難しいです。

第0章 紅蓮の悲劇

〔帝国軍基地・ジャスティス計画研究所〕

月 夜空に気高く咲く孤高の花。

その白く非情な光が射るのは逃げ場を失った獲物の心臓。月光から逃れられるものなどいない。

赤く咲き誇るは血糊、そして非常事態を知らせる警報ランプ。

朱に染まつた無機質な通路。各ブロックを隔離するために灰色のシャッターが次々と閉まって行く。

灰色の檻から逃げ失せるは白衣を着た人間達。

研究所の一室。ガラス張りの部屋には少女がいた。

彼女を一言で記すならば“キカイ”であろう。

およそ人とは思えない美貌を持て余している少女。

腰のくびれ辺りまで垂れ下がる髪は月光のような蒼、深海のごとき澄みきった蒼を宿す双眸。

綿のような白い裸体には魅惑の魔術が掛けられており幾多の男を虜にする。

蒼い髪から垣間見える純白の背中には、狼を模した刺青が刻まれていた。

「来るな……来るなあ、化物おお！」

雄叫びと共に無闇にハンドガンを乱射する一人の兵士。耳を塞いで床を這い回る研究員達など構っている余裕は彼にもはや無い。

血飛沫を上げて痙攣を起こしている同胞ごと少女を蜂の巣にしてもなお、鉛弾を打ち込む。が、彼女の進行は止まらない。

「ひ、っひい……つく！ 早く弾を、早く！」

撃鉄が虚しく音を立てる中、震える手でカートリッジを装填しようとする。しかし、焦りが彼の手際を素人同然にまで劣化させてしまった。

「テキがイル、テキがクル、テキがイル、テキがクル」

仲間を血祭りに上げた少女の声が、ひたひたと音を立てながら死の宣告のように近づいてくるのだ。最後のカートリッジを迂闊^{うかつ}にも落してしまつのも無理は無い。

「はっ
」

カートリッジを拾い上げた兵士の眼前には少女の胸があつた。熱を持った銃口が胸に当てられているというのに進行を止めない魔女形の良い胸が銃口で挟られていく。

「ああ！ ああ！！ 死ねええ！！ 死んでくれえ！」

鳴き声に等しい兵士の叫び。

ゼロ距離からの発砲ならぬ空砲。弾が入っていないハンドガンが楽器のように少女の胸で音を鳴らす。

胸を挟つたお返しと言わんばかりに、顔面を挟られ兵士の動きは止まつた。

乱暴に兵士の死体を引きずる少女は、研究室の外を目指す少女は死体で埋め尽くされた通路に一つだけまだ動いている人形を発見した。

「……ふん、すい」

「な、何を…… あはっ、ひゅう」

何人分の血液を浴びたのか赤色に染色された白衣を着る男。

怪我で上手く呼吸ができないわけではない。恐らく、恐怖で上手く呼吸ができないだけだ。

死体に紛れ込むように倒れていた彼の目の前には、魅惑に満ちた白い素足が二本ある。

少女の右腕に引きずられてきた死体が無ければ、この地獄に天使が舞い降りて来たと言えれば彼は信じたかもしれない。

少女の真つ赤な指先から、秒を刻むように落下する血。

くびれた腰には赤い液体が白いキャンバスを汚すように伝っている。

塗りつけられた乾いた赤が……少女の血に塗れた裸体は一種の芸

術作品であつた。

「や、めろ！ やめろ、やめろお！」

腰を抜かして後ずさりをする男に歩み寄り、何の予告も無く胸を貫く。

即死だつたであろう。だが、人間は死しても数秒間は生きていると言われている。

心臓を抜き取られた彼に意識があるかなど定かではないが、生気の無くなった彼の眼球にはこれから光景が写っていた。

元気よく脈を打つ心臓。血を求めて動き続けるポンプ。断線した血管から血が溢れ出す。

「ふ、ふふ。ふふふ」

少女が無邪気に笑う。天使のような頬笑みも血と肉で出来た地獄では魔女のそれと言われても仕方が無い。

蒼い髪をも朱に染め、赤色の噴水を眺める少女。

少女にとつて初めて見る噴水は 生温かく赤かつたのだ。

「つくそおお！！ 手遅れだつたか」

少女の背後、ガラス張りの一室を破壊して研究室に転がり込むフルフェイスヘルメットを装着した兵士。

表情こそ見えないが、叫び声から怒りを露わにしているのがわかる。

男と魔女が対峙する。男の腰には帝国軍人に支給されているハンドガンがあるが、構える気配を見せない。

「お前の敵は……ここにはいない」

両手を挙げて哀れむような声で男は魔女へと慎重に歩み寄る。

「テキ……いない。ニンゲンいない」

「ああ、そうだ。敵はいない。人間は敵じゃない。お前も人間、俺も人間、みんな……味方同士だ」

共和国と帝国が戦争をしている中、こんなことを軍人が言うなど皮肉としか言いようが無いだろう。

しかし、少女は男に敵意が無いことを理解したのか手にした肉塊

を床に落とす。

「……少女に手を出すとはな、良い大人が聞いて呆れるぜ！」

警戒を維持しながら、男は窓の外……格納庫を眺める。

発掘人型兵器メタルフレーム・通称：MFの格納庫。

バイザーの奥にある二つのカメラアイ。騎士の様な重厚かつ清楚な甲冑に身を包み、両手両足には杭打ち機のような武装が一本ずつ。歴戦の英雄と言った風体だが、この機体は戦闘を行えない。

MFが両国共に実戦投入されて以来、戦闘ができない機体は資材となるのだが、この機体、帝国にとって特別だった。

現代稼働するメタルフレームの性能を凌駕するであろうと言われた新種のMF。それがこの蒼い騎士の正体だ。

秘めたる性能と構造が人知を超えていたため“神の落とし物”というジョークが関係者内で飛び交う程である。

「何が“神の落とし物”だ……コイツは悪魔の類の兵器だろうに」「蒼い少女と蒼い機体を交互に見やり、苦虫を噛み潰したように言葉を飲む男。

人知を超えた蒼い機体が発見されたことで、帝国の軍人、貴族、考古学者の発掘は拍車が掛った。

掘れる土地があれば掘り返す、森林を破壊し、川を汚し、海を黒く染めていくことに帝国の科学者達は何も感じない。

“自然の力が全て治してくれる”そんな身も蓋もない理論を鵜呑みにし、彼らの夢と希望に溢れた行動は星を汚しただけに終わったのだ。

唯一誇れる事と言えば、“神の落とし物”の解析が進み、コックピットに凍結されていた男の前に佇むこの少女を救出したということだろう。

機体内に人が凍結されるなどあり得ない技術だ。

未確認のこの技術を聞きだそうと今度はこの少女に科学者達は食いついた。

遙か古代の機体から救出された少女。

彼女は年数から察するにタイムマシンを利用したようなものだ。そんな稀有の存在を研究対象として見ない科学者はいない。

ただ、少女は言語・学習能力に障害有りと判断され、研究施設で面倒を看ることになった。

彼女の脳に機体の全ての情報がある。そして、新たな進歩に繋がる技術がある。

それが科学者・技術師による答え。

「タイプ・ミリオン……」

男の悲痛な声。指に付着した血を舐め取っている少女もまた国の犠牲者である。

推定百万年前の代物とされる“神の落とし物”が動き出せばたちまち帝国は共和国に勝利を収めることができる。

長年、魔術師に虐げられてきた技術師達が頂点に立つ。科学が魔術を追い抜くという歴史的瞬間が生まれようと言っただ。

しかし、そんな技術師達の願いは、いつまで経っても叶わない。コックピットが開いたのは良いが、蒼い機体は戦闘はおろか起動すらできなかったのだ。

現代技術では、“神の落とし物”を解析することなど不可能。人間風情が扱って良いものではなかった。

帝国の技術師にとって屈辱だった。

帝国の貴族にとって金の浪費だった。

そして 保護していた少女を“解析”することになった。

よかれと思って日夜、研究に明け暮れ、スポンサーから無理やり資金を奪い、帝国の明日のために全てを投げ出した研究員。

新しい技術を世のために発見しようと研究を重ね、危険を顧みず発掘現場に向かった考古学者。

彼らはその日 歴史から消された。

ジャスティス計画研究所など存在しなかった。

そこはただ《・・・》の魔科学を研究していた施設だ。

不運にも、当時、世間を騒がせていたフェンリルというテロリストに襲われ、跡形もなく爆破された研究所である。

当時救援に向かわせた、百に近いメタルフレーム部隊は壊滅。生存者はいない。

コックピットを鋭利な兵器で一突き。軍のパイロットは原型がなくなつた状態で絶命しているものばかり。

帝国が何故、テロリスト退治に百もの大部隊を向かわせたのかは歴史上でも永遠の謎とされている。

ただ、研究施設の跡地には空から鉄球が降ってきたかのような穴が無数に残されていた。発掘の穴にしては小さ過ぎるため、何のため空けられた穴なのかは不明。

人々は言う。

フェンリルのリーダーが罪も無き人々を虐殺したその事件を“紅蓮の悲劇”と。

血も涙もないテロリスト達が研究施設に爆弾を仕掛け、全てを焼き尽くしたのだと心の悲痛を叫ぶ。

しかし、この事件に関する資料は一切残っていない。

メタル・ラッシュと呼ばれる風潮の中、極秘で母なる大地に穴を開けまくつた結果、人間は触れてはいけないモノを見つけてしまったのだ。

これから起こる殺戮の幕開けとも知らず、人々は紅蓮の悲劇を妄想の域で語り継ぐ……。

ただ確かなことは、紅蓮の悲劇の生存者はゼロである、ということだ。

汝、見つけし者よ

汝には力を 汝には勝利を

汝、血肉の杯を手にし 世の神となる

妾、見つけられし者

古より目覚め、汝の剣となる

死して尚、戦場に赴き 勝利を掴む

故に、不死なり

神の子ら 妾を“魔女”と云う

第1章 風車の村（前書き）

> i 1 1 0 9 9 — 7 3 8 <

タチバナ ナツメさんに描いて頂いたフアンアートです

第1章 風車の村

大きな風車が、荒野の中にひっそりと存在する。

科学と魔術が融合した“魔科学”の時代、ただ風を受けるだけの風車はレトロであった。しかし、科学も魔術もあり発達していないこのウインド村では、なくてはならない生活の要である。

この村には風車以外に特徴が何もない。それ故に、ここ十年間、盗賊や他国の侵略を受けることはなかった。襲う価値すらない村だった。

ごく稀に旅人が立ちよるか、年に一度の治安調査に来る軍人だけが、村の唯一の訪問者だ。

荒野の果てから、平和な村に近づく一つの影がある。

短く切った黒い髪、輝く黒い瞳、荒野を行く旅人と判断するには、あまりに身なりが整った少年である。

「あつち。メタルフレームのありがたみが身にしみるぜ」

声変わりしたての声を放ち、汗で張り付く肌着に空気を送りながら、炎天下の荒野を歩く少年は水筒の水を飲み干す。

魔科学の結晶であるメタルフレームに乗らず、荒野に出ることは無謀に等しい。

リオン・オルマークス。

ウインド村に住むこの青年は、荒野の太陽と戦っていた。

村外れにある遺跡には、彼の父親専用の墓がある。いくら自分の父親の墓参りといえど、大人の足で一時間はかかる道中に、若者が文句を言うのは当然であった。

いい加減、村の墓場に移して欲しいと思うが、彼の父親に関してそれは許されることではない。

少年が村に帰った頃には、太陽は真上に登っていた。

村に入るや否や、広場の方向から女性の怒鳴り声が聞こえてくる。恐らく広場で、魚屋の子供たちが悪さをしているのだろう。墓参

りから戻ったりリオンは、そのように予想していた。

そして、十年程前に自分が姉や八百屋のおばさんに酷く叱られていたことを思い出す。今となっては何故、洗濯物を燃やしたのか、よく覚えてはいない。

洗濯物を早く乾かしてあげようと火を炊いたのか、それともただの好奇心か。

そんな悪ガキだったリオンが、新世代の悪ガキに対して馬鹿げていると感じるのであった。

「あつ、お帰り、リオン。お墓参り……お疲れ様。ご飯、もう少し待ってて、買い物に行ったらすぐに作るから」

村の入り口で買い物籠をぶら下げた女性が少年に声を掛ける。

少年の首筋ぐらいの身長で、少女というよりも大人の女性としての品がある。

墨を通したような黒い長髪に、春のような暖かい声の彼女は、清楚な顔立ちに似合わず煤まみれすすになっている。

暖炉の掃除をしていたことは一目瞭然だった。

彼女の名は MARIA・オルマークス。真正正銘、リオンの姉にあたる人物だ。

「ただいま姉ちゃん。買い物なら俺が行くぜ？　姉ちゃんは少し休んでなよ」

「え？　でも、リオンは父さんのお墓に行ってくれていたんだし」

「村外れにある墓に行くのと、暖炉掃除をするのでは、暖炉掃除の方が仕事量多いって。言ってくれば俺がやったのによ」

姉の反論を聞いていたら日が暮れる。買い物籠を奪い、リオンは村の広場まで駆ける。

「リオン！　ちょっと待って！」

「大丈夫、大丈夫」

ポケットの中を探ることに気を取られている姉を置いて、リオンは広場への道を駆けて行った。

「もう、どうしてお姉ちゃんの言うこと聞かないのかな」

マリアはメモ用紙をポケットから取り出し、溜息を一つする。

広場は村の中心ということもあって、人が集まっている。大都市では人が邪魔で歩けないくらい賑わっているが、過去にこの村でそんな様子を見たことがない。

晴天の空の下、露店にある八百屋にリオンは顔を出す。

社交辞令のようなものだ。

広場に來たらリオンは必ず四件の露店に顔を出す。買い物の時もあれば、単に店主と話がしたいという時もある。今日は前者だ。

「お、リオンじゃねえか。珍しくマリアちゃんの手伝いか？」

「まあ、そんなとこだよ。おっちゃん、儲かってる？」

野菜を売っている大男のカーストは、筋肉で岩のように膨れ上がった腕をリオンの肩に乗せ顔を近づける。

「それがだな……。今日は帝国軍の動きがあつて人が流れてこねえんだ。商売上がったんだ。まったく、あいつらまた戦争でも起こそうつてのか。商売の邪魔をするな！ 商売の邪魔をお！ 捻^{ひね}りつぶすぞお！」

唸る大男の影から女性が顔を出す。

「人が来ないのはいつものことだろ。まあ、あんた落ち着きなよ。それより、腕解かないとリオンがのびちまうよ！」

カーストの妻、ナタリが食材の入った買い物籠を、夫のカーストの脳天にぶつける。怒り狂うカーストの剛腕は、いつの間にかリオンの首に食い込んでいた。

「おっ？」

大男はすつとんきよんな声を出して腕を解き、目の焦点の合わないリオンへ一喝入れる。

「リオン、男ならこんなことぐれえで倒れてどうする。ガッツだガッツ！ どわっ」

「何が『ガッツだ』よ！ お客さんの首絞めて何言つてんのさ。大丈夫かいリオン。これ何本だかわかるかい？」

大根を夫の頭に叩きつけ、ナタリはリオンに駆け寄りながら問う。

「一、二、三、……さ、三十本？」

「お、おかしいわね。今日は、おまけしてあげるから、勘弁してくれね」

ナタリは自分の人差し指をまじまじと観察して、リオンの買い物籠に野菜を適当に放り込む。

「冗談だつて。ガキの頃におばちゃんの回し蹴りを何発も食らった俺が、これぐらいで倒れるわけないだろ？ おまけは、ありがたくもらってくぜ。へへへん」

待っていたかのようにリオンは立ちあがり、八百屋夫妻に舌を見せて、次の店へ駆け去った。

「こらあ！ 明日は御所望の回し蹴りをくれてやるからね！ 覚えておき」

ナタリは力いっぱい叫んで少年の背中を見守る。

「まったく、リオンはいつまで経っても子供だのお」

顎をぼりぼり掻きながら、カーストは少年の走り去った後を見る。「そうかい？ ほら、見てみなよ」

優しい顔をしたナタリが商品棚を指さした。

野菜を並べているおんぼろ棚の上に、白い花が一輪置いてある。

「サヤが好きだった花……だな。今年もこの日が来たか」

「リオンなりに気を使って来てくれたんだよ。今日のはあの子の命日でもあるからね。父親に比べて、あの子は優しい子だよ」

八百屋の夫妻はユリの花を見ながら、愛娘のことを思う。

「すみま、せん。リオンが……来てませんでしたか」

「そんなに息を切らして、どうしたんだいマリアちゃん？」

満身創痍で走ってくるマリアに、ナタリは水を渡してやる。

「はあ、ありがとうございます。リオンが買い物に行ってくれたんですけど……また買い物メモも、お金も持たずに行っちゃって」

小さな紙切れをポケットから取り出して、マリアは顔を赤らめながら白状した。

「あんた……やっぱりリオンは、いつまで経っても子供だわ」

深い溜息をついて、ナタリは夫の意見が正しかったと素直に認めた。

「あつ、その……花」

ナタリが大切そうに手にしている花を見て、マリアが気まずそうに俯く。

「リオンが持つてきてくれたんだよ。毎年あの子はね、この日に摘んできてくれるだろ？」

マリアの心情を察してナタリは暖かな口調で言った。

「サヤが死んだのは、あなたたちとは関係ないよ。私たちに力がなかっただけさね」

語尾を小さくしてナタリは花を花瓶に活けた。

「ナタリ、ちょっと出てくる。店、頼んだぞ」

さつきまで轟々と騒いでいたカーストが逃げるように去って行った。不規則なリズムを刻みながらカーストは店を出ていく。

彼の右足は十年前の事件以来、メタルフレームと同じ材質になっている。硬くて温度の無い足だ。

その広い背中を、マリアとナタリはただ見送るしかできない。

「おばさん、ごめんなさい……おじさんの足も、サヤちゃんのことも……きつと父にも何か、理由があつたんだと思います」

頭を垂れながら、マリアは声を詰まらせる。

「うちの旦那は、もうそんなこと気にしちやいないさ。メタルフレームに乗るのも潮時だったしね。そんなことより……やっぱり、まだ親父さんのことを信用しているのかい？ 親父さんは……」

責めるでもなく相談に乗ろうとする母のような口調の問いに、マリアはお辞儀をしてその場を去った。ナタリの口から、次に続く言葉を聞きたくなかったからだ。

村を裏切り、家族を見捨て、自分だけ助かるうとした父親の存在は、マリアにとって村で生活する障害となった。それは、弟のリオンとて同じことである。幼い時に言われた村人からの言葉が頭を過る。

裏切り者

お前達が死ねばよかったんだよ

よく、笑っていられるわね、人殺し

小屋のガラスに映る自分の姿を見た。

捨てられた野良犬のような人間の顔は、実に滑稽こっけいだった。

こんな顔をしたまま弟に会えば、何かあったのかと心配されることだろう。自分も大変なくせに、内気な姉のことをいつも気にかける弟。

姉思いの優しい弟だと胸を張って言う自信はある。しかし、それ故に、マリアは自分の弱さに落胆する日もあった。

そして、その度に自分も姉として、弟を守っていける立派な人間になろうと心を奮い立たせてきた。

リオンという弟がいなければマリアの心は死んでいたであろう。

今でこそ、何不自由なく生活しているが、母が生きていた頃、村人からの仕打ちは酷いものだった。思い出ただけで、胸の中が冷たくなる。

「姉ちゃん？ 何してんの？」

能天気な声が後頭部からして、飛び上がる。

「ふえっ！？ リ、リオン？ な、何でもないの。何でも！ ちょっと入ろうか迷ってただけで。お姉ちゃん、ほら、優柔不断でしょ。ダメだよ、こんなことで悩んでちゃ」

胸の鼓動につられて、マリアはそわそわ動く。

「何を悩んでんのか知らないけど、そこ男子便所。やるならあっちだろ？ っていうか、そんなこと悩むなよ」

一銭も持つて行っていないのに、野菜やパンで一杯になった買い物籠をリオンは肩からぶら下げ、親指で隣にある女子トイレを指さす。「え…… あ、ああ。どうしよう。どうしよう。 私つたら」

お金も持たずに、どうやってそれだけの食材を買ってきたのか。という疑問よりも、自分が男子トイレに半歩侵入していた事実を知って、頭の中がパニックになる。

「いいから、さっさと行って来いよ。思春期の少年少女には、トイレを間違うなんて……よくあることだ。……たぶん」

三つ年上の姉に少女という言葉はあまり適していないが、弟の腕にしがみつく姉は少女そのものである。

「違うの！ 誤解なの！ 気が付いたら男子トイレの前に立っただけなの！」

必死に弁解してくる姉に対して、弟は赤面していた。

「姉ちゃん、それはそれで危ねえよ。って、くつつくな」

育ち盛りの胸がりオンの腕を加圧する。間違っても姉にそんな気はないが、生理反応という性^{さが}に勝てるわけがない。

「忘れて！ 私がここにいたことは、忘れて！！」

「ああ忘れるから！ 忘れるから！ ああ！ 引っ付くなあ！ 人、見てるし！ 集まってるし！」

村の中でも一、二を争う美人に成長した姉の必要以上のボディタッチは、リオンの思考を暴走させようとしている。

村人から仲のいい姉弟と評判な二人だが、弟離れできない姉は、弟にとって嬉しくもあり、気恥ずかしい存在である。

何もない一日、何もない日常。

それを平和と言うならば、この村は実に平和だった。

それはこれからもずっと続く、リオンは明日も同じ毎日がやってくると信じて止まなかった。いや、平和以外の一日など少年に想像することすらできなかったのだ。

第2章 カッパとヘルメット

公衆男子トイレが姉弟の喜劇場となった後、リオンは再び荒野に出た。

太陽に熱された地面の上を発掘用二足歩行機械が通過していく。

「やっぱ、メタルフレームはいいなあ。　　楽ちゃん楽ちゃん」

幼少の頃から世話になりっぱなしのカーストから、発掘用メタルフレームを借りてきたリオンは、メタルフレームの便利性に歓喜していた。

「おっちゃん、このデイスカバリー。　　そろそろくれねえかな」

デイスカバリーとは、発掘用メタルフレームの総称である。機体の八割が科学技術で出来ているため、特に才能が無くとも乗ることが可能だ。戦闘用メタルフレームと違い、鈍足かつ頑丈であり、最近の子どもならば十才前後で操縦をしている。シンプルかつ安全性に特化した機体、それがデイスカバリーなのである。

リオンは現在乗っているこのデイスカバリーを、七才の頃に盗み出そうと目論んでいた。

当時のウインド村で、メタルフレームを所持していたのは八百屋のカーストだけだったのだ。来る日も来る日も、メタルフレームの前を行ったり来たりしている挙動不審の子どもを、カーストはいつも遠目で見守っていた。

「お前も、同じ遺跡ばっか掘らされて、飽きてきただろ？　このまま、どっか行っちゃまわねえか？」

リオンは、物言わぬ機械に冗談をかけながら、目的地の遺跡をデイスカバリーの複眼カメラで観察を始めた。

いくら世話をしてくれたカーストと言えど、メタルフレームという高額な物をくれるはずがない。万が一、くれると言ってもリオンは断るつもりだ。

この発掘用メタルフレーム・デイスカバリーを貸してくれるだけでもありがたいことなのだ。それ以上を望むことはリオン自身が許せない。だから、彼は自分でメタルフレームを捜すことにした。

自分で山を掘り遺跡を見つける。そして、メタルフレームを掘り当てれば千年前以内の一般モデルならば、自分の物としていいという各国の法律が適応される。

リオンは、グレーゾーンである千年前のモデル“サウザンド”が狙いだ。

現代の最新機種というわけで、性能が段違いなのである。

魔術や科学の集大成ですら作りえなかったメタルフレームは一種の「オー・パーツ」と言われており、メタルフレームから科学と魔術の融合学問「魔科学」が生まれたと言っても過言ではないかもしれない。

現代に存在しないこの機械は、過去に遡れば遡る程、新しい技術が採用されているため古い物程高く売れる。発掘屋などが、地面という地面を掘り返し、血眼になってメタルフレームを捜した時代もあった。俗に言うメタル・ラッシュである。

“発掘屋は男のロマン、汗は心の涙、メタルフレームは男の勲章”

これがメタル・ラッシュと呼ばれる時代の風潮であり、元発掘屋のカースト家では、未だにこの風潮は有効である。

メタル・ラッシュを経た現在、メタルフレームは、もはや珍しいものではなくなった。しかし、サウザンドともなれば、軍が実戦配備しているモデルである。軍備強化のため、ほとんどの遺跡が掘り起こされたため、リオンが、ウィンド村周辺の遺跡と遺跡を掘り尽くしても一機どころか、パーツすら姿を見せない。もぬけの殻とい

う状態だ。

メタルフレームならば百年前の“ハンドレット”でも、“鉄屑”と呼ばれる現代技術で作られた、市販のボロメタルフレームでもいいとリオンは考えている。

要は、家計が火の車なため、タダでメタルフレームを手に入れることが少年にとって一番肝心なのだ。

発掘屋程の知識はないが、リオンは母が生きていた頃から、メタルフレームという物にお熱だった。

カーストやナタリに、世話を焼いてもらう程仲が縮まったのもメタルフレームがきっかけであつたのだから、リオンとメタルフレームは、切っても切れない縁で結ばれているのかもしれない。メタルフレームの操縦・発掘を夢見る少年の心は、メタル・ラッシュを生きた大人の心に響くものがあつたのかもしれない。

だからと言って、リオンは発掘屋になる気はない。新種のメタルフレームを捜し求めて、発掘屋になる者もまだいるが、リオンは発掘屋以外になりたいものがある。

――いつか、メタルフレーム乗りになつて“英雄”になる――

それがリオンの夢であり、彼の全て。淡い少年のただ一つの憧れだった。故に性能の高いサウザンドを欲している。

「ああゝあ。今日も出てきてくれねえのか。やっぱ軍が掘り尽くした遺跡からは、何も出てこねえか。俺も相棒と呼べるメタルフレームが欲しい。欲しい。ああゝ、欲しい！」

今日の発掘ポイントを掘り終え、酷使させていたディスクバリーの動力を遺跡の外で休ませる。暗い遺跡内部と違い、辺りは空の青と荒野の黄土色以外何もない。

遠くを見つめると空の青と地上の黄土色の境目が見える。この果

てに、未だ見ぬメタルフレームが山ほど存在するのだ。想いを馳せながらリオンは、デイスカバリーのコックピットから青空に向かって伸びをする。

「はあーう。こんな怠けてていいのか、俺。もつと、こうなんだ……刺激が欲しいっていうか、メタルフレームを使って何かしてえよな」。それこそ英雄みたいに誰もしたことがないような凄げえことをよお。はあ……相棒のメタルフレームさえいればな」

ブルーシートのような青空を見上げて、自分の相棒のメタルフレームを思い描く。

「ああ、勿論。お前も俺の相棒だぜ？ でもな、お前はやっぱり、おっちゃんの相棒なんだよ。ここ数年間で追いつける程、お前とおっちゃんの絆は浅くねえだろ？ なんだって、メタル・ラッシュを共に駆け抜けたんだもんな」。大変だったろうけど、俺もその時代に生まれたかったぜ」

相変わらず、発掘用機械は何も言わない。これはリオンの癖だ。メタルフレームは生き物と同じだと考える彼なりの作法だ。

「お前は、誰と話をしているんだ？ アホか？」

「誰って、デイスカバリーだよ。って……おおあ！」

デイスカバリーのコックピットに張り付く見知らぬ人物が、ガラス越しに声を掛けてきた。

「機械と話ができるのか。おもしろい奴だな。そして、お前は変な奴だ」

「どっちが変な奴だ！ えええ？ お前は誰だ？ 何者だ？」

コックピットのロックを解除して、蒼いカッパにフルフェイスヘルメットを被った人物に攻め立てるリオン。機械との会話を奇怪な人物に邪魔されたうえ、初対面の変な奴に、変な奴扱いを受けたことが気に食わない様だ。

「ふむ、変な奴はお前だ。どこからどう見ても、変な奴だったぞ」

腕を組んで一度頷くカッパの人物。ヘルメットでくぐもった声は、中性的で、カッパをマントのように羽織っているため、体格からも性別判断ができない。

「なんなんだよ、お前……。なんか用かよ？」

リオンは冷静になろうと話題を変える。

「腹が減ったぞ」

「おい、言葉通じるよな？ 話、聞けよ」

ヘルメットを左右に振り、遺跡周辺で食物を探し始めた不審者に、リオンは苛立ちを覚える。この炎天下、空と同じ色のカッパを着ている様は、見ている側まで暑苦しさを伝導させる。

「お前、何か持っていないのか？ 見たところメタルフレーム乗りのようだが」

声や身なりだけでは、男か女か判断できない。口調から男ではないかと予想は付くが、肩幅が小さ過ぎる気もする。

一方で、憧れである“メタルフレーム乗り”という響きに悪い気はしないが、不審者に渡す物は何も無い。

リオンは、この不審者の正体を近くに身を潜める盗賊の一味と判断した。

大方、下っ端の盗賊で、十分な報酬が貰えなかった。苦汁を舐めた蒼カッパは、満足いかないまま近くの村まできた。そこに、メタルフレームを持った馬鹿な子供が来たから、油断させて奪ってやるうという魂胆に違いない。カーストの相棒であるデイスカバリーを奪われるなど、リオンにとってあつてはならないことである。

「顔も見せない野郎に、やるもんなんかねえよ」

リオンは、勿体ぶつたような口ぶりで会話を長引かせた。気づかれないように後ずさりしながら、コックピットのハッチを閉める隙を覗うのだ。閉めるタイミングは、相手が目を逸らした瞬間。

「ああ、すまない。食べ物に分けてもらつのに確かに失礼だった。許してくれ」

話が勝手に進んでいる気がするが、リオンにとつてもはやどうでもいいことだった。

ヘルメットを取つて、相手の視界が外れた瞬間が逃げるチャンス。まず、相手を“ナタリおばさん見よう見まね回し蹴り”で蹴り飛ばし、反動を利用したままコックピットに着地、ハッチを閉めて全速力で逃げる。これがリオンが頭の中で考えた作戦だ。もっともナタリの蹴りならば、一撃で全て解決してしまいそうだが、生憎リオンには、あの無尽蔵の破壊力を秘めた回し蹴りの原理はわからない。きっと、人類でわかる者はいない。

デイスカバリーの動力も逃走するだけなら大丈夫であろう。ヘルメットに手が置かれ、いよいよヘルメットが外される。リオンは不審者を蹴り、コックピットに滑り込んで逃げる。はずだっ

たー

リオンの思考は、踏み込む最初の段階で、麻痺してしまったのだ。ヘルメットから溢れ出た蒼く滴る髪に感嘆し、澄み切った翡翠のごとき蒼い瞳に吸い込まれた。どこにでもある飾り気のない蒼カッパも何故だか、今この瞬間だけは蒼いドレスである。

リオンと同じ年ぐらいの彼女は、その言葉使いからは想像できない程ただ、ただ……綺麗だったのだ。

「あつ……」

「ぷはあ、これで文句はないだろ？ もう、無礼はないはずだぞ」

あどけない声でありながら、どこか芯のある口調で話す少女は接近してきた。踏ん張った状態で硬直したりオンに顔を近づけてくる。

「えっえ……ちよつ、と」

「ん？ どした？ まだ気に食わない所があるのか？」

少女は顔を引っ込めて、納得しないリオンに対して眉を曲げる。リオンは思考を呼び戻そうと頭を振るが、認めざるを得まい。不覚にも見惚れていたということ。

「ああ、そうか。私に見惚れていたのか。その気持ちはわかるぞ。 もっとと見てくれ。私は、女の子らしさ溢れる女だからな。その程度の恥辱は受けて立つぞ」

リオンの思考を読んだかのような的確な台詞にリオンは、焦りを覚えた。両手を腰に当てて胸を張る女の手がカッパを押さえつけており、括れた腰の輪郭を露わにするため、妙に魅惑的に見える。

「見られること自体が恥辱って、俺はどんなやましい生物だ！ あ

あ、男だから仕方ねえよ！ 生理反応だろうが！ それと、女らしいなら受けて立つな！ っていうか、その意味のない自信はどっから湧いてくるんだ！」

息を切らせながらまくしたて、股下を隠しながらリオンは縮こまる。そして、少年の顔は流れる血流で火照っていた。

「そう……褒めるな」

恥じらいを隠すように、両手でほつぺを押さえる蒼カップの少女。

「誰かこいつの思考回路を翻訳してくれませんか！ 今のどこに褒め言葉が隠されてんだこらあ！」

誰かに解説を求めるが、少年の願いに応えてくれる人間はおろか、遺跡にはリオンと謎のカップ少女の二人しかない。

「とにかく腹が減ったんだ。これだけ打ち解けたんだ。飯の一杯や二杯貰ってもバチは当たらないだろ？」

「知らねえよ」

これ以上、少女の空気に吞まれることが気に食わない。目線を逸らしてリオンは反撃に出る。これは油断すれば取って食われる戦闘であるとリオンは認識を改めた。

「女の子が今にも倒れそうなんだぞ？ お前は、そんな薄情な男なのか！ だいたい、一人で飯を食うより、大勢で食べた方がマズイ飯も旨くなるだろ？」

少女の口車に乗るわけにはいかない。しかし、聞き捨てならない

ことがある。

「お前は、いちいち失礼なことを抜かしやがるな。食ってもいないのに、なんでマズイなんてわかるんだよ。俺の姉ちゃんが作った飯は最高なんだ。馬鹿にする奴は許さねえ！」

リオンは姉を馬鹿にされたように感じ、つい熱くなってしまった。

「ん？ お前にはお姉さんがいるのか？」
「ああ！」

少女が目をパチクリさせてリオンに問いただし、少々不機嫌そうにリオンはそっぽを向いた。

「お姉さんの飯は旨いのか？」
「ああ！」
「私も食べに行つていいか？」

片眼を開きじらすように少女と睨めつこをするリオン。少女は、今か今かと返事が待ちきれないのか、両手を握りしめて体を小刻みに揺らしている。

そして、リオンが笑顔で少女を見やる。

「ぜつつたい、ダメだ。食べさせる理由がない。お前とはここでお別れだ。さよ～うなら～」

笑顔が一瞬で消えたと思えば、コックピットがいきなり閉じられ、デイスカバリーの動力が音を立てて目覚める。少女は、ただぼかと閉じられたコックピットを見つめている。

「まったく、ただの変質者かよ、盗賊だと思ってた自分が馬鹿みたいだぜ」

リオンは少女と姉の接触だけは回避したかった。こんなわけのわからない人物を、内気な姉に会わせたらどうなるか一目瞭然だ。考えるだけでも恐ろしい。

「そうかあ……残念だ。無理を言っただけだった」

「あ、ああ……残念だったな」

きゅるる、と情けない音が鳴る。これはデイスカバリーのエンジン音ではない。これは少女の腹の虫だ。残念だ、と連呼しながら心底残念な顔でガラス張りのコックピットを覗く少女。眼には涙がうるうる溜まっている。

少年は、感傷を抱くまいと目と耳を閉じた。

「無視だ無視だ、何にも見えない何にも聞こえない。目の前にいるのは、コックピットのガラスに張り付いているのは昆虫だ。そう、新種の昆虫！ハラノムシだ！！」

どうしてこの少女は、こんなにも寂しい顔をするのか。散々言いたいことを言っただけなのにこんな顔をするなんて反則だった。傍から見れば、リオンが一方的に悪いことをしたようにしか見えないであろう。しかし、いくら盗賊だとしても、少女を見捨てるようなことをしていいと言うのか。

「ああ！だから女は嫌いだよ。めんどくせー」

リオンは愚痴を零す。

「ほれ」

頭を掻きながらリオンは、コックピットを開き、姉に作ってもらった携帯食料“握り飯”を優しく投げた。

変質者や盗賊だとしても、こんな少女が、餓死している姿は想像したくなかったのだろう。リオン自身、自分が何故このようなことをしているのか理解していない。盗賊など助けてもいいことなど一つもないであろう。

「ん？　なんだこれは？」

「ああゝあ。手が滑って食料がどっかいつちまったなあ。仕方ねえ、さっさと帰るか。姉ちゃんの旨い飯が待ってるし。それと邪魔だからさっさとそこから降りろ」

“旨い”を大きめに発声した後、地面を指さしてまじまじと携帯食料を観察している少女をどかせるリオン。

よっぽど見るのが珍しいのか、なかなか口につけようとしない。食料を失くしたといった手前、見守るしかない。

「おい」

「ん、どうした？　カップパ女」

カップパ女のぶっきらぼうに声に、不機嫌な声で返答するリオン。

「お前が落とした食料はこれだろ？」

「ああ、そうだけど」

何の確認か全く理解できず、リオンはただ少女の意図を探る。説明するまでもなく、落し物というのは建前だ。目の前の相手がキヤッチした物を、どうしたら落し物になるというのか。“早く

どこかに行ってくれ” それだけがリオンの願いであった。

「ん。 私が、拾ってやったぞ」

「ああ、そうだな」

ん、と言いながら握り飯を差し出す少女。 だから何なのだ。 お前は変質者が盗賊くずれだらう。 盗賊らしくさつさと奪って行ってくれよ。 変質者らしく奇声をあげて喜んでくれよ。 そんな思いがリオンの頭の中で巡る。

カップの少女は、満足げにリオンの顔を見て高々に言った。

「礼を言え」

「はあ!？」

少女が何故か威張る。 リオンは目を見開いて食料と少女を見比べた。

「言葉だけでいいぞ。 私は親切な女だからな。 食料を失くした哀れなメタルフレーム乗りからは何も取らん」

またしても満足げに胸を張る少女。 リオンは脳内で、少女を殴り飛ばしたいという衝動に駆られながらも、女を殴ることは男として絶対にダメだ、と理性が拳を縛り上げる。

「なんで……んなこと言われなきゃいけないんだよ。 っていうか俺が分けてやったのにい」

「どうしたんだ。 何故、泣いているんだ？ 感極まったのか？ これからは失くすんじゃないぞ」

よしよしと、頭を撫でつける少女を屈辱の涙で見返すリオンに、

反論する気力は残されていなかった。

「このご恩は一生忘れません。お礼と言っては何ですが、食べて下さいますでしょうか！これでいいのか、クソカツパ女！さつさとどっか行けえ！」

「なに、もともとはお前の持ち物だ。少し分けてもらえればそれでいい。私は小食な女だからな」

溢れ出る涙を飲みながら、頭で開き直りと言う自己防衛が発動するリオン。

少年は潔く負けておいた。これ以上彼女と口論しても無駄だと判断したのだ。

変質者や盗賊に道理は通用しない。故に、一般人はそういった部類の人間と関らない方がいい。しかし、少年は関ってしまった。

彼女と関わってしまったのだ。

第3章 狼と刺青

「はあゝ？　自分が誰だかわからない？」

リオンはディスカバリーの足元で少女を凝視した。成り行きで簡単な自己紹介を済ませ、相手のことを聞こうとした矢先の出来事だった。

青カツパを着こんだ少女は、自分のことがわからないと言う。目が覚めたら、この遺跡にいたというのだ。

「名前ぐらい、覚えていないのか？」

「リオンだ」

「それは、俺の名前だろうが。　ええ！」

この頭の悪そうな少女が、盗賊なんて芸当ができるわけがないと、リオンは結論づける。

盗賊ならば最初にコックピットを開けた時、リオンは殺されているに違いない。

盗賊とは、相手の荷物に用があるだけで、不必要な物は全て破壊する。

……十年前のウィンド村のように。

「じゃさ、ウィンド村に来いよ。　村長とか神父さんとかに、事情を説明すればきっと村に置いてくれるぜ？　働けば飯は食える村だ。体が動くななら心配しなくても大丈夫だ」

確証はないけれど、頼みこんで村中を説得すれば、きっと村の皆も受け入れてくれるだろう。

裏切り者の子供達を受け入れてくれた村だ。記憶喪失の女の子――

人ぐらいなんとかなる。

リオンは樂觀的にこれからのことを考えていた。

「そうか。宿もなくて困っていたんだ。少し世話になろう。
お前、実は良い奴なんだな。変質者かと思っていたから、正直、
驚いたぞ」

「お前がそれを言うか？ この炎天下にカップパを着たお前が！？
……いや何でもないです。早く帰りましょう」

また泣かされると思いリオンは、さつさとコックピットに逃げ込んだ。

少女も後に続く。

「おい、狭いぞ。お前、降りろ」

「随分、横暴ですね、あなた！！」

まさかのジャイアニズムを見せつけるカップパの少女。

デイスカバリーのエンジンをいつもより強めに噴かせて、少年と少女は、仲良く村に向かった。

「ただいま！」

「おかえりなさい。あら？ お客さんかしら？」

リオンが自宅の扉を開くや否や、マリアが出迎えた。背後に立っている青カップパの少女にさっそく興味を持っている様子だ。

「ああ、遺跡で迷子になってただけど、記憶喪失みたいで。こいつ宿もないし、金もないらしいから……さ」

何か頼みごとがある時リオンは、左上を見る癖がある。この癖を熟知しているマリアは直感していた。

「その子をこの家に置いて欲しい、というお願い？」

「あ……うん」

捨て猫を拾ってきた子供のようにリオンは、姉の顔色を覗っている。

「リオン」

「は、はい？」

唐突に名前だけを姉に呼ばれた弟は、さらに縮こまる。

いきなり、記憶喪失の女の子を家に置いてくれという頼みごとは、軍からの圧力があっても拒否したいことだろう。

得体の知れない人物と一緒に暮らすことになる上に、食費もかかる。屈強な少年ならば、力仕事をするということで、働かすことも可能だが、肌が白く、華奢な体格をしている少女にそんなことは望めない。

マリアとリオン。2人で食べていくのがギリギリだということこの家に、住人が増えることは不可能な依頼である。

暫しの沈黙。

お腹の音を鳴らしながら、キョロキョロ部屋を見回す少女は、姉の視界には入っていない。

姉の真剣な眼差しに目を背けたくなりながら、リオンは姉の言葉を待つ。

「人が困っていたら助けてあげる。お姉ちゃんとの約束、ちゃんと守ってくれてるんだね。さすが英雄さん」

姉が、今となつては背伸びをしなければ届かない弟の頭を撫でる。

「えっ。 てことは」

「いいわよ。 毎日の食事がもっと質素になるかもしれないけどね」

皮肉ではない。マリアは冗談めかして、新しい住居人を迎えてくれた。

「許可してくれたのはありがたいけど、頭撫でるのはもう、やめてくれ」

事の次第を見守っていた蒼髪の少女が目に見え、リオンは慌てて姉から逃げる。

「まあ。 私にとっては、いつまで経っても、これぐらいの小さい弟なんだよ」

「なるほど、リオンはそんなに、小さい生き物だったのか」

「ちっさ過ぎるわ！ なんだ、そのバツタみたいなでかさは！ 俺は哺乳類ですらないのか」

マリアが人差し指と親指で、リオンの小さかった頃の大さを表した。

「リオンが小さかった時の話は、また今度にして、あなたのお名前は何？」

部屋の奥にある本棚を見つめている少女に、マリアは優しく微笑

みかける。

「セレネだ」

「お前！ 名前を思い出したのか？」

リオンが驚きの声を上げて少女に振り向く。

「そんなわけないだろ。 名前ぐらい覚えている。 お前、 “アホ” という人種か？」

「俺、何か悪いことしました？」

「セレネね、良い名前。 私はマリア、よろしくね」

リオンを置いて握手を交わすセレネとマリア。

「ところで、そのカップは何か理由があるの？」

「いや、寒さと暑さを凌ぐのに、適したものがこれしかなかっただけ。 もっといいものがあれば、貸してもらえると助かる。 い

やゝ暑くて堪らないな、この服は、蒸れるゝ」

「暑かったなら、さっさと脱げよ」

リオンが口ごもる。

そして、セレネと名乗る少女は、カップを脱ぎ去った。

唯一、身を守っていたカップを、だ。

「おおおい！ なんで、なんで？ ちょっとまで、まで、までえ！」

リオンが慌てふためくのも無理はない。 セレネはカップの下に、下着すら着ていなかったのだ。

艶めかしい肩から腰の緩やかなライン、そこに蒼い髪が簾のよう^{すだれ}に流れる。 体格はやはり、華奢^{きゃしゃ}であり、綿のような肌がより一層、

女々しく感じさせた。

彼女の体型は、女のマリアでさえ、ただ綺麗だと、神秘的だと、思う程である。

「まて！」と叫びながらもリオンはまたも、目を奪われていた。

「こんな女の子がこの世にいるのか」と心の中で呟いている。

ただ、蒼髪の少女の背中には似つかわしくない、大きな狼の入れ墨が、新雪を踏み散らかした足跡のように存在する。

「裸を見せたのは……リオンが、その、……初めてだ」

「なんでわざわざ俺の目の前で脱いだ？ 白昼堂々脱いで、目がない方がおかしいだろ！ それから、照れながら紛らわしいことを言っな！」

「思考回路は回らないが、ろれつは回るんだな。 おっ、あれはなんだ？」

「いいから早く服を着ろ！！」

セレネは裸で堂々と室内を歩きまわり、部屋を物色する。

マリアが後ろから追いかけて服を着せる。この妙な追いかけっことは、リオンにとって刺激が強すぎた。

鼻から、だくだくと血を垂らしながら、高ぶる血流を冷やそうと、リオンはメタルフレームの型式番号を唱える。

「メタルフレーム・タイプ“ハンドレット” “サウザンド” あ

あ！ あんなもん見せられたら、前の方も想像しちまだろうがあゝ。 くっそゝ。 忘れる忘れる！ あいつは今日から家族だぞ？

家族に欲情するなんて英雄らししかぬ行為だ。 あつと、まだ血が止まらねえゝ」

リオンは、次から面と向かってセレネと会話が出来ると不安であつた。

十七年間、一緒に姉と暮らしてきたが、今まで女性のある姿を、生で見たことがなかったのだ。

田舎育ちだが、品のある姉が、あんな姿をしてリオンの前に現れれば、リオンは寝込んでしまふに違いない。

リオンだけではない、カーストは猛牛のように暴れ狂うだろう。ナタリは、コンパスのように回りながら、惜しみなく回し蹴りを何故かリオンにお見舞いするだろう。

そんなことを想像しているリオンは、顔が青くなりつつあった。血の流し過ぎのようだ。

リオンの頭の中では、セレネに刻まれた異様な入れ墨は、忘却の彼方へ消えていた。

第4章 メガネと神父

「胸がきついぞ？ 脱いでいいか？」

「頼むから止めてくれ。俺が捕まる。お前が勝手に脱いだのに、だ」

出るところが出ているセレネにとって、マリアの服はサイズが合わなかった。

背丈はほぼ一致していたが、問題となったのは体の正面にある魅力的な2つの山である。

明らかにセレネの方が質量を持っていた。

今は強引に詰め込んでいるらしいが、傍から見ても……苦しそうに見える。家を出るときに、マリアが泣いていたのは、間違いなくこの少女の胸のせいだ。

リオンは想像する。

これから向かう神父の元で、「胸が苦しい」と言いながら倒れ込み、神父に悪霊払いをさせているこの少女の姿を。

（フツーにありそうだよな、こいつの場合）

きつと神父に悪霊払いまでさせたこの胸は、天国には行けないだろう。

マリアから貰った握り飯を、2つも口に詰め込んでいるセレネを盗み見るリオン。

大きな目をキョロキョロとさせて村を見回すセレネ。リオンから見れば彼女は拳動不審であった。この村に特に珍しいものなんて無い。ある意味、製粉用の風車は珍しいのかもしれないが、風車自体どんな村にもある筈だ。最近の風車は、主に空気中の魔力を町や村に循環させることが役割であり、魔力の源の一つである霊山付近

の土地には必ず設置されているとリオンは聞いている。

（そんな珍しい物なんてないだろうに。　　っていうか……こいつ、ちゃんと咀嚼^{そしゃく}できているのか、リスかよ）

リオンは、なるべく人目に付かないよう、ひっそりと村の裏手にある教会に向かった。

マリアの勧めで、最初の挨拶は、元軍医であった神父だ。村、唯一の医者でもある神父は、眼鏡をかけた優男である。

常に優しい笑顔をしているため、神に愛されている人間を模倣したような人物だと、村人なら誰しも思うことだろう。

この神父は、カウンセリングから外科治療、内科治療など多岐にわたった医学知識を持っているため、大陸の真ん中に位置する首都・サマルカンドでも十分に重宝される人材であることは間違いない。

何故こんな村に優秀な医者が来ているのかなど、誰も追及しない。理由は簡単だ。

村人全員が神父のことを愛しているからである。

聡明で優しいこの神父が何かの理由で首都に行ってしまうと、次にここへ派遣されてくる神父は確実に幻滅するような人物であろう。この村のボロ教会に住んでいる神父は、とにかくパーフェクトな医者でもある。

つまり、記憶喪失であるセレネの診断を兼ねての挨拶回りなのだ。

「神父さ〜ん。　重症患者を連れてきました〜　もう、頭が、ぐっちゃぐつちゃで、神父さんじゃないと治せませ〜ん」

リオンがボロボロの教会に向かって声を張った。

内部から、駆けてくる足音。

教会の床が軋む、軋む、軋む、破れる、神父がこける。

「患者はどこだい！？ 様態は？ 消毒はしてあるのだろうか？ 頭部の傷は命に関わる！ 早く中あ……え？」

法衣を纏^{まと}った優男が、足を纏^{もつ}れさせながら出てきた。肩で息をし、痛そうに足を引きずっている。

20代後半に見える神父の眼鏡には健康体そのものである、黒髪の少年と蒼髪の少女しか映っていない。

辺りを見回して、重傷患者を探すが神父の想像した怪我人はどこにもいない。

「あつ、怪我じゃなくて、重症、症状の方」

「また、変な奴が出てきたな」

リオンが、神父を指さすセレネの頭を押さえて、気まずそうに笑う。

ただ、一言。

神父が「魔女……」と漏らしたことに、リオンは気が付いていなかった。

「どうも私では、彼女の症状はわからないな。下手に刺激すれば、彼女の人格が壊れてしまうかもしれないからね」

リオンは、“すでに壊れていますよ”とは口が裂けても言えなかった。

神父は簡単な質問を繰り返し、「困った」と一言呟く。

「こつも綺麗さっぱり、リオンと会う以前のことを忘れているとな

ると、手掛かりがね。頭部外傷を負ったとも思っただが、彼女の頭部に傷らしいものも見当たらない。それに、言語力にも学習力にも異常はない」

神父から投げかけるような視線が、眼鏡越しに送られてくるのに対して、リオンは何となく首を縦に振る。

「ご家族が見つければ、慣れ親しんだ音楽を聴かせたり、身近の人物の写真を見せることで、回復が見込めるかもしれないだが、あの遺跡の近くに、村はここぐらいだから、家族を探してこれをするとなると、気の長い話になるね」

神父は立ちあがる動作を兼ねて、セレネの肢体に視線を送る。そんなにセレネと目を合わせることが嫌なのか、神父はセレネと視線をあまり合わせようとしない。

「そうか。でも、俺ん家で面倒を看ようって姉ちゃんと言ってるんだよ。こいつの記憶が戻ったら、故郷に帰せばいいかなって……あれ？神父さん？おいそんなに、セレネの足ばっか見てどうしたんですか」

リオンは、話の途中から目が虚ろになっている神父に手を振る。

「あ、あつ。そうだね。その方が彼女のためにも、記憶のためにも良いかもしれないね。私にも協力できることがあれば、協力するよ」

神父はセレネを横目で何度か見て、リオンに笑いかける。

「ありがとう神父さん。次は、村長か……言わなくちゃいけない

よな」

この村の最高権力者は、仙人のような長い白髭をした老人である。今、その片腕である神父の許可を得たのだが、村長はとにかく頑固なのであった。

そして、リオンが頭を抱える最大の理由がある。

村長は、リオンの父・グレンのことをよく思っていなかった。

当然、村を裏切ったことでその溝は、修復不可能とまでになったが、死んだ人間に人間関係など関係ない。

しかし、その子ども達には関係があった。

村で、リオンとマリアを吊るし上げていた張本人は、何を隠そう村長である。

「村長には、私の方から頼んでおくよ。 ちょうど今から何う用事が出来たからね。 そして、教会に来るものは神の子である限り誰であろうと、保護するからね。 安心して暮らしてくれていいよ、お嬢さん」

神父は入口の方へ手をやり、診断終了を告げる。
爽やかに笑顔を向ける神父は文字通り、輝いていた。神父でなければ、一体どれだけの女性が、この男の周辺に集まってくるのだろうか。

笑顔が眩しい。それは神の御加護なのだろうか。それとも彼の素質なのだろうか。

これだけの笑顔を向けられても眉一つ動かさないセレネは、やはり一般的な女性ではないのかもしれない。“お前には興味がない”といった様子だ。

神父に促されて、リオンとセレネは、教会の出口へと歩き出す。

「ああ、ところで」

神父が少年少女に背中を向け、手にした十字架を見つめながら最後に、こう言った。

「君は、『神』を信じているかい？」

どちらに向かったの質問が戸惑い、リオンは咄嗟に答えようとする。

「えっと……」

「少なくとも、今は信じている。 記憶を失くす前は、知らん」

神父と少女の背中での会話。

意外にも、先ほどから沈黙を維持していたセレネが淡々と答えた。
「そうかい、今は信じているのか」と呟いて、神父は奥の間に消えて行く。

床の軋む音が遠ざかって行くのを確認し、セレネは歩を進めた。
リオンは、さっきの問診の仕上げだと思うことにした。神父が、あんな感情の無い声で何かを言うとは思えにくい。恐らく、そういう手法の治療法なのだと勝手に納得する。

しかし、セレネにとって、この会話はどこか、身に覚えのある内容であった。

記憶のピースが一つ埋まる。

それは、鉄で出来た記憶。

メタルフレームだった頃の記憶。

彼女が彼女であった断片。

彼女が　であつた頃の記憶。

お前は、神を信じているのか

戯^{たわ}けが、お前は神の子ではない

お前は　だ

第5章 鉄の心

「はあ、メタルフレームに乗りたい？」

村で四機しかない“ハンドレット”を保有しているトングの家へ、リオンはいきなり申し出た。

「おっちゃん、頼むよ！」

「頼もう！」

リオンが両手を合わせるのをセレネも真似しながら続く。

「いや、別にダメじゃねえよ？ リオンならいつもの通り乗ってくれ、と言いたい所だが、その嬢ちゃんが乗れるのか、俺は心配してるだけだ。素人じゃ乗れねえって、リオンが一番よくわかってんだろ？」

家主・トングが困った顔をしながら、家の奥に顔をやる。

「別にいいじゃないのさ。最近の若い子は、みんなアレに乗ってるだろ？ それに、毎日メンテナンスしにきてくれるリオンのお願いだよ？」

部屋の奥から大きなお腹をしたトングの妻・イロがゆっくり玄関に向かってくる。

「イロ、あんま動くんじゃない！ 腹の子に障る！ わかった。そんなわり、リオン。ちゃんと面倒見てやれよ？ 女の子に怪我させたら許さねえからな」

トングはもうすぐ生まれる子が女の子のため、やたらと女の子の扱いにうるさい。

「それより、その嬢ちゃん……どこかで見たことがあるんだよね」

「本当かよ？ おっちゃん！ どこで、どこで！？」

頭を抱えて記憶を巡らせるトング。

「あー！」

「どこで見たんだ？」

「忘れた……」

「おい！ ボケるには早いぜ！ おっちゃん」

肩の力が抜けて、リオンは玄関に座り込んだ。

「いや、まあ、忘れるってことあ。それぐれえの付き合いだった。ってことだな」

「そーだよ。家の人が、こんな可愛いお嬢さんとお近づきになれるわけがないでしょ？」

トングが手を打ち笑う、その横でイロがリオンに耳打ちをする。

「俺だって若い頃はなあ」と夫婦の痴話喧嘩が始まるのを確認し、リオンは裏庭へ向かう。

「ともかくサンキュー、おっちゃん。お礼に今日は念入りにメンテしといてやるよ!」

「あ、ってことは……いつもは手抜きだったってことか?」

リオンはトングの皮肉を「いつも一二〇%の仕上がりだって」と気軽に返し、駆けて行った。

「どうしていきなり、メタルフレームに乗りたくなっただんだ?」

「わからん」

リオンは事の発端であるセレネに尋ねた。

「だが、乗れば何か思い出しそうなんだ。私はメタルフレームだったと思うから」

「はあ……メタルフレームね」

メタルフレーム乗りの間で、最高の乗り手は“メタルフレームになった”と極端な比喩表現をすることが暫しある。

自分の意のままに操れている時、魔科学兵器が体の一部となっている錯覚を感じるのだ。リオンは、セレネも一流のメタルフレーム乗りだったのかと推測する。

頭は覚えていなくとも、体が覚えていることはあるだろう。そこから、セレネの記憶を少しでも取り戻せるかもしれない。

そのようにリオンは目論んでいた。

「どうだ？ 乗り心地は？ 最高だろ？」

家の窓からトングが叫び声をあげている。

「まだ、起動もしてねえよ！ おっちゃん、気が早過ぎだったの！」

リオンは叫び返す。何故か、トングは満足げにうなずいて、親指を前に突き出して笑っている。

……完全に意思疎通ができていない。

「どうだ？ 何か思い出したか？」

「メタルフレームが好きな女の子なんて、また良い子を拾って来たな！」

トングの声を無視して、リオンは目を瞑ったままの少女に問いかける

「違う……これじゃない」

コックピットに深々と座ったままセレネは目を開けた。

「違うって？ 何が？ 正真正銘のメタルフレームだぞ？ しかも、ハンドレット！」

「うん、でも……違う。こいつは成長しきっている。もう、育たない」

セレネの言葉に首を傾げるリオン。

成長も何も、メタルフレームは身長が伸びたり、筋肉が付いたりしない。あくまでも機械だ。

「お前、さっきから様子がおかしいぞ？ 何かあったのか？」

気遣うリオンに、少女は答えない。

少女自身も自分のことがわからないため、どうしたいのかわからないのだ。

「わからない。ただ……」

「ただ？」

セレネは、一呼吸してから続ける。

「こいつは、凄く、お前のことが好きのようだ」

セレネは母が子を寝かしつかせるように、ハンドレットのコックピットを撫でた。

その後、ハンドレットを所有している残り3件の家に行き、同じようにセレネをコックピットに乗せたが、結果は変わらず。

「こいつは、お前が私を連れてきたことに焼きもちを焼いている」
や「しばらく、手抜きでメンテナンスをしたことを根に持っているぞ？」など、メタルフレームの感情を読み取ったかのような言葉を残していた。

リオンも雑な整備状態を見て、メタルフレームが怒っているだろうと思うことはあるが、セレネのように、コックピットに座っただけで判断するのは難しい。

彼女の当てずっぽうという可能性もあるが、彼女がコックピットに入ってから伝わってくる“メタルフレームが安心している”雰囲気を感じ、リオンは言葉にできない愉快な気持ちになった。

第6章 剣と蛇

メタルフレームに乗りたいというセレネの急な要望があったため、広場への挨拶はまだ、終わっていないかった。

少年少女は商人達が集まる広場へと向かう。

「早く、マリアの飯が食べたいぞ。 まだ、あいさつする家があるのか？」

「まったく、お前は本当にマイペースなやつだな。 来る前、姉ちゃんから握り飯食わせてもらっただろ？ サクヤさんからもバケツもらったし、トングのおっさんからもパイナップル、ハイネの悪ガキからチョコレート……おい、お前どんなけ食うんだ？」

先ほど訪れたザラ夫妻から頂いた、リンゴをかじるセレネに詰め寄る。

訪問した先々でセレネは何かを食べていることにリオンは今、気が付いた。

リオンが事情を説明している玄関口でセレネは、物欲しそうに食べ物を見つめる。 記憶喪失かつ身寄りのない少女。

何かを恵んでもらうためには、この上ないステータスだった。

「ふえるときに、ふえるだけたあえる。 おっ」

「ちゃんと飲み込んでから話せ。 それと俺の顔面に物を飛ばすな」

リオンはリンゴの破片を顔から払い、セレネの頭を鷲掴みにして右に向ける。

「乱暴な奴だな、お前は。 食える時に、食えるだけ食べる。 腹が減るのは、生理現象だ。 排尿と同じだ。 おい、何をする……痛いぞ」

「女の子がそんな下品なことを言っちゃいけません」

そのまま頭を加圧してみるリオン。 小さい子供にしつけをしている気分である。

「文句の多い奴だな。 言い直せば満足なのか？ つまり、排便だ」

「違いますよね？ さっき排尿って言うてましたよね？ 何で、レベルが上がってんだ？ それより、出すのと食うのをイコールで結ぶな！ 他にあるだろ！ 睡眠とか、消化とか……睡眠とかよ！？」

「同じのがあったぞ？」

何食わぬ顔をしながら、しゃりしゃり、リンゴを食すセレネの頭の上で、リオンの手がプルプル震える。

悪気はないのだろう。 この顔を見ればわかる。 不満そうな顔だ。 先ほどのメタルフレームの件でセレネを見直したが、その気持ちは無くなり、妙に整い過ぎている顔が恨めしいと思うリオン。

「まあ、しっかり勉強してからものを言え。 私は、逃げも隠れも、隠しもしない！」

「お前に、言われたくねえよ！ 逃げも隠れもしていい。 でも、隠せ！ 全力で隠せ！ お前のことだから、絶対よからぬことになる」

裸で堂々と村を歩いているセレネを思い浮かべてしまい、鼻から血を噴射するリオンは、近くの柱で自ら頭を打ち付けた。「邪心よ消えよ」と何度か言いながら柱に頭を打つ。

ふと、視線を上げた所でセレネと目が合った。そして、その胸が奇怪にモゾモゾ動き始め、白い鶏の頭が飛び出した。

「コケ……コツコツコ、コケ」

首を上下させている鶏とも視線が混じる。そんな鶏の頭を押さえつけて胸の中に押し戻そうとするセレネ。

「こ、こらぁ顔を出すんじゃない。あいつに見つかったら何をされるかわからないぞ。見ての通りの変質者だ。あわわわ、そんな所で暴れるな」

「あ、てめえ、どこから鶏盗んできやがった！どこに鶏隠してやがんだこら！そんなとこに押し込まれたら窒息するだろうがよ！没収します」

リオンは、鶏を没収して先ほど訪れたザラ夫妻の家まで戻る。「その子だけは、その子だけはご勘弁を！お情けを下さい」と腰にしがみつくセレネを引きづりながら、リオンは鶏を返しに行った。

「はぁ……コツコ、必ず迎えに行くからな」

「鶏に変な名前を付けんな。家にも鶏ぐらいいるからそれで我慢しろって。何で人様の鶏を胸に詰め込むかね」

「白いのが良かったんだ」と、うなだれるセレネ。
離れて眺めれば、どこかの御息女に見えないこともない容姿をし

ているくせに、言葉づかいは酷いし、食い意地は大男のカースト並み、おまけに品がない。

神様が平等に人間を作った証かもしれない。

この容姿で言葉遣いも、食事量も、品もあれば全国の女性が背徳心に目覚めるに違いない。

（神様、あんたもちゃんと計算して人間作ってんだな）

リオンは胸の中で、そつと神様を尊敬した。

セレネの入居に関する挨拶周りは、もう終りに近い。後は、広場にいる商売人達に顔合わせをする程度で、セレネの存在は村全体に知れ渡る。

すでに、「美人が村に来た」と言う声が出回っているが、直接紹介しないわけにはいかない。

リオンも最初に比べて、彼女を紹介することが手慣れてきたと実感している。

村の中心に位置する広場に近づくに連れ、ガヤガヤした声が聞こえ始めた。少し早足になったリオンは突然の衝突に尻もちをつく。

「あつ、すいません。少し急いだもので……」

家の角から飛び出た人影は、柔らかで落ち着きのある声で言う。

ぶつけた頭を押さえながら、リオンへ手を差し伸べていた。リオンのように倒れはしなかったものの、頭に相当な痛みが走っている様子である。

「いて」。ああ、大丈夫、大丈夫。こつちこそ悪い、そつちこそ大丈夫かよ？」

リオンは、手を引いてもらいながら、人影の顔をようやく見た。

村では見なれない顔。灰色のターバンを巻き、頬に一本の傷、声からは想像もつかない鋭い眼光。目で人を殺す者がいるならば、彼ではないだろうかどさえ思われる。

「旅の行商人？ この村では見かけない顔……だな」

「いえいえ、行商人なんて大層な者では。 たまたまこの村に来ただけの者ですよ。 ここは、いい村ですね」

危険な地域を旅をしながら行商をするなら、この鋭い眼光に納得がいくと思ったりリオンだったが、違ったようだ。

ターバンを巻いた少年は笑いながらリオンを見ている。

「まあな、田舎で何もないけど。 科学か魔術、どっちかでも取り入れればもっと活気づくんだけどな」

「それは難しいでしょう。 この村は帝国でも共和国でもないのですから、ああ、名目上は一応、共和国側ですよね？」

「あんた……詳しいね」

「それなりに国政は勉強しているんですよ。 理解していないと僕の仕事はできませんからね」

リオンは、青年の知識に単純に感心した。 ウインド村は、特産物もないため帝国と共和国からほとんど野放し状態だった。

ごく最近になって、共和国が“下層階級の人間を救う”という大義名分を掲げて、ウインド村に国旗を刺したのだ。

文字通り、国旗を刺しただけだった。 援助も何もない。 長年培っ

た“魔術大国の技術”を教える気などない。

ただ、橋が欲しいと言えば、橋を作ってくれる。水が欲しいと言えばダムを作ってくれる。この村では到底払えない多額の借金をさせることを条件に。

そして、この村に軍人がいない最大の理由は、戦争の役に立つような立地ではないからだ。

守る必要もない、世間から忘れられた土地であり、見捨てられた土地。

何の利益ももたらさないこの村が、どうなろうと共和国には関係ない。

そこに村が存在しているだけでいいのだ。

技術がない村が生存している＝保護している共和国のイメージアップ。世間から見れば、ただそれだけのための村だった。

共和国では、捻じ曲げられた情報しか流されない、忘れられた土地の真相を知っているこの青年は、ただの国民ではないということだろう。

「ああ、失礼なことでしたよね？ すみません」

青年は黙りこんでいるリオンが、不快な気持ちになっているのだと思っ謝罪する。

「いやいや、失礼でも何でもないさ。俺たちは十分、幸せだしな」

「幸せ……？　そうですか。羨ましい限りですね……。　ああ、ところで、狼に気をつけて下さい」

「狼？　この辺りの荒野に狼なんていないぜ？」

リオンは、毎日のように荒野に出ているため、狼がいないことは

確かな情報である。

「いるんですよ。どこにでも現れる狼が……都心では有名ですよ？ ”フェンリル” って狼」

青年は苦笑しながら、「先を急ぐので、それでは」と、背中越しに手を振って去って行った。

手の甲には、“剣に絡みつく蛇”の刺青があった。

「フェンリルって……」

「おっ、リオン！ どこでそんな、かわい子ちゃん見つけてきたんだ？ お前も男になったんだな？ な？ そうだろ？ ちょっと見てない間に、大人になりやがって、おっちゃんは嬉しいぞ。今日は宴だ！ 俺ん家で宴だ！ グレン、見てるか？ リオンがやりやがったぞ」

青年と入れ違うように、八百屋のカーストが現れ、リオンに暑苦しいハグをする。

「わっ！ おっちゃん！ 苦しい、くるしい……くる……ぢっ」

ただのハグなのに、ゴキツと鈍い音がした。

広場がざわめく。中には悲鳴をあげている人もいる。

一般人から見れば、地から足が離れ、振り回されているカーストのハグをヘッドロックと言うのだろう縦横無尽に少年は振り回されている。

「やめなさい、って言うのが……聞こえんのかあ！」

妻のナタリが人ごみを蹴散らして、回し蹴りを夫の腹にめり込ませる。

ナタリの足が生み出した残像に風が流れ込んでいく、この村最強の男の妻、最凶の回し蹴りが放たれたのだ。

大男が真横に跳んでいる、もはや飛ぶと言った方がいいかもしれない。クジラが空を飛ぶぐらいあり得ない光景。

そのクジラことカーストは、リオンを抱えたまま飛んだ。そして、露店の間を矢のように通り抜けて藁の山に突っ込んだ。

「ナタリ！ 何しやがる！ 俺はあ、リオンにガールフレンドができたって……言うから、なあ？ あ？ リオンどうした涎なんて垂らして、腹が減ったのか？ そうかそうか、今日は旨い野菜をたくさん持つて行ってやるから楽しみにしておけよ！」

言い終わるや否や、泡を吹いているリオンに一喝入れて、カーストはリオンを肩車した。

豪腕に抱えられて、花畑を姉と走っている夢を見ている少年は、しばらくして目を覚ました。

その後、商売人達に事情を説明し、理解を得ることができ、ついに、セレネはこの村の住人となったのだった。

第7章 魔女

「神父さん、あの娘について話とは何かの？」

老人が広場にいる蒼髪の少女を優しい目で見る。

記憶喪失というので、村長もいたく心配しているのだ。

長い白い髭を撫でながら、老人は神父にティーカップを出す。

「どうかお気づかないなく。あくまでも、私の私見ですが、彼女は十年前に來た魔女と瓜二つです」

神父は軽く会釈をしてティーカップの中身を啜る。

「村を焼いた元凶がまた帰ってきたというのか！？ 何故じゃ！？ 魔女はグレンと一緒に死んだはずじゃ！ 帝国軍が仕留めたんじゃ、間違いない」

村長と呼ばれた老人が、杖を地面に叩きつけながら唸る。

老人の手の震えは衰弱からではない、恐怖からである。

「ええ、わかっています。魔女は十年前にグレンという男を誘惑し、岩山で死んでいるはずです。でも、魔女の死体は見つからなかった……と噂では聞きます」

「ま、魔女は、死ぬと灰になると言うではないか？」

「それは我々が、魔女を火刑にするからそういう迷信が生まれたのです。私も魔女狩りに立ち会ったことがあります……あれは酷いものです」

神父は、苦虫を噛み殺すように唇を噛んだ。

中にも男もいたが、何の罪のない少女が、魔女という理由だけで焼かれていく。

ただ、神父が目を開いたくなつたことは、焼かれる魔女の元・身内が罵声を浴びせて、喜んでいる風景である。

神父が、このようなことを思うなど、神への冒瀆ほうとくであると自負していたが、何度立ちあつても神父は、その光景を直視できなかった。神父としては、最低の人物だつたであろう。しかし、彼が信じていた神はそこにはいない。罪無き少女を焼くなど、できるわけがなかった。

だから、彼は、都心から離れた。

優秀過ぎる故に、事の真実を見極めてしまつたからだ。

あれは、ただの余興である。明確な“悪”を定めて、国民の不満を国家ではなく、魔女に向けようとした政策だ。

しかし、自分ではどうすることもできない。逆らえば、自分が焼かれる。理想論など唱えても国家は、目障りなだけだ。忠実に従い、忠実に神の教えを国民に教えている神父こそ本当の理想なのだ。

逃げるしかなかった。仕方なかった。誰もが止める中、辺境の地には医者がないことを理由に、この村へ辿り着いた。

少しでも遠くへ、魔女が発見されない土地へ。

「こんなことを言えば私は、神の御怒りをかうでしょうが……私は魔女狩りが正しいとは思いません」

「な、なんと……いう」

「ですが、あの少女は魔女です。十年前にカーストさんの娘の……娘の、サ、サヤちゃんの」

生き血を吸っていたのですから

十年前 ウインド村 深夜

燃える、燃える。

炎が燃える。

夜だというのに、空の下半分は朱に染まっていた。
まだ、この村に来たばかりだというのに、神父は試練に立たされていたのだ。

盗賊に村が襲われている。意味がわからない。
村人が八つ裂きにされている。理解できない。

何故、罪無き人が死ななければいけないのだ。神父は、逃げてきた自分への罰かとも思った。

村の男達が懸命に立ち向かったが、メタルフレームがたった一機加勢されたことで、村は地獄と化した。

一人でも多くの人を助けようと、神父は走り回る。
村の入り口付近。

日中、村にやってきた少女が倒れているのを神父は発見した。

「大丈夫かい！ 早く立つんだ！」

男なら盗賊に捕まったところで、殺されるだけだ。悔しいが……
それはそれでいい。

だが、女ならばそうはいかない。
はずか辱しめられ、もてあそ弄ばれ、売られる。生きながら地獄を味わうことになる。

昼間にやって来た、美しいこの少女なら間違いなく、死ぬよりも辛い思いをさせられる。

だからこそ、自分が囷になつてでも逃がさなければいけない。
神父は家が崩れ、叫び声が聞こえる中で確かに聴いた。

ブチッ、クチャ、ジュル、ジュズズ……

「君……？ 立てるかい？ 下にいるのは、サヤちゃんだね。怖
かっただろう、もう大丈夫だ」

神父は咄嗟に蒼髪の少女の名前が出てこなかった。サヤと少女を
安心させようと声をかける。

うつ伏せに倒れたままの少女の下にいるのは、恐らく発掘屋の娘・
サヤだ。

蒼髪の少女に妙に懐いていたため、日中、片時も離れずに一緒に
いた明るく元気な少女である。

この少女がサヤを守ってくれたのだ。

「君？ 聞いているかい？ どこに盗賊がいるかわからないんだ。
怪我をしているなら私に負ぶさるんだ」

再度声をかける。モゾモゾ動く蒼髪の少女。

声に反応してくれて安堵する神父。

少女は腰まである蒼い髪を重たげに揺らして、下敷きになっていた
女の子を持ちあげて佇む。

蒼髪の少女は、まるでゴミでも見るかのように神父を見た。

「え……」

神父は、昼間まで「神父様だーいすきー」と騒いで遊び回ってい

たその物体が何か認識するまで時間がかかった。

その物体は下顎から下が無かった。

その物体は捻じったかのように顔を歪めていた。

その物体は……サヤの首だった。

「問題……ありません。私は、……えます」

蒼髪の少女の髪は赤くなっていた。毛先が赤いのは、炎のせいではない。大量の血を吸いこんでいるからだ。雨に濡れたかのように髪の毛が滴っている。

白い肌が、黒くなっているのは、焼けただれでもなお、炎の中にいたから。

皮膚がめくり返り、顔中の皮下組織まで火傷を負った彼女が何事もなかったかのように会話している。これで生きているなんて、化け物だった。

既に神父の思考回路は断線している。

悪魔に遭遇したら人は、きっとこんな顔をするのだろう。

「……レ……エ！」

誰かが悪魔の名前を呼んだ。

赤毛の男が駆けよってくる。村長と折が合わなくて、何度も神父

に相談しに来ていたグレンだ。

神父は足の力が抜けている。

「ま、まさ……か。まさ……か、おまえは」

悪魔を前に何もできない神父は、腰を抜かして悪魔を指さす。彼とて、相手がただの小悪魔ならばいつも通りの冷静さを保っていたであらう。

しかし、目の前にいる悪魔は、究極の生物。
血肉を喰らい、生き血を吸い、殺戮という本能で動いているよう
な生物。

数あるどの書物でも最凶と呼ばれ、“悪”の根源として忌み嫌わ
れていた不死なる存在。

伝説が目の前にいるのだ、抵抗するだけ無駄だと体が叫んでいる。
人間ごときでどうにかなる相手ではない。

「ちくしょう！　ちくしょう！　ちくしょうっつう！！」

赤い髪をした男が泣き崩れながら吠える。

親友の娘が死んでいるのだから当然のことだ。

「一緒に来い！　これ以上は……お前の力が必要だ」

「あいつらを全員殺していいんだな？　こいつはどうする……」

少女は、地べたに座り込んでいる神父を蒼い邪悪な瞳で串刺しに
した。

「ああ、神よ。　神よ、お助け下さい」

神父はひたすら祈った。

「神父さんは、大丈夫だ！　カースト達がもうすぐここに来る。
あいつらに任せておくんだ。　早く行くぞ」

グレンは村の外へ向かって走り出す。

しかし、蒼い悪魔は立ち止り、神父の前で見下すように　こ
う告げた

「お前は、神を信じているか？ 私は信じていない。私は神が大嫌いなんだ、都合のいい時だけ登場するアイツは。証拠に祈っているお前の命を助けたのは誰だ？ フッフ、わ・た・し・だろ？」

不吉な笑みを浮かべう蒼い髪の少女は、神父の命を救ったのではない“見逃した”だけなのだ。

恐怖のどん底にいる神父はそうとしか考えられなかった。

神父が朦朧としている間に、赤い髪の男と蒼い髪の少女は、助けを求める無数の声を無視して、赤い闇に消えていた。

彼らと入れ違つように村長とカースト率いる男達が、気を失つた神父を発見し、近くの岩山へ避難させ命から生き残ることができた。

村は壊滅。

生きていても、必ず家族の誰かが欠けているという悲劇だけが残った。

数時間後、盗賊達は、当時、近くを巡回していた帝国軍によつて殲滅される。

帝国軍は、「魔女が災いを呼んだ」とだけ言い残し、去つて行つた。誰が魔女だったかなんて誰にもわからない。ただ、魔女は殺したと言つた帝国軍の言うことを鵜呑みにする他なかった。

神父の心の片隅にだけ、蒼髪の魔女が生き残っている。

人に話せるような内容ではなかった。

特に、復興を自らの力でやり遂げようとする村人に言えるような内容でない。

“裏切り者のグレン” 団結する村の中で、恨まれた人物は、人徳のあつたグレン・オルマークスただ一人に集まつた。

誰も彼女が魔女だつたとは知らない。

神父は今宵、見定めるともりだ。

彼女が人間なのか、それとも……魔女なのか。人であつて欲しいが、魔女ならば容赦はしない。

メタルフレイムを使ってでも殺さなければいけない。

もう二度と村を焼かれないために。

第8章 月と影

「昼間といい。 おっちゃん……無茶苦茶だぜ」

リオンは何度目かの台詞を呟く。

小一時間前程に、カーストが夕食と称した、宴をリオンの家で始め、リオンとセレネにあらうことか、酒を振舞おうとしたのだった。ナタリが阻止する前まで、カーストは聖水だと言いながら、リオンとセレネのグラスに、ごぼごぼと聖水を注いで、一人で盛り上がっていた。

「カーストは良いやつだ。 食べ物たくさんくれたぞ」

リオンよりもハイペースで食事をしていたセレネだが、まだ食後のデザートに MARIA に作ってもらった握り飯を、もしかもしや食べている。

「昼のお返しだ。 少しわけてやろう」

「もう、食べねえよ!」

食べさしの握り飯をリオンの差し、「そうか……」と寂しげに握り飯を頬張り直すセレネ。

「お前、絶対、前世は恐竜か何かだろ? しかも、肉食」

「さあ、今日より前のことは覚えていないから、何とも言えんな」

リオン達は自宅の屋根に上り、星を眺めながら、たわいのない会

話をしていた。

マリアが「風邪、引かないように」と言っ、二人に持たせてくれたホットミルクも、もう空だ。

都市と違い、荒野にあるウインド村は、遮る物がないため、星が一望できる。夜空に砂を撒いた。そんな表現がしつくりくる、星達が作った芸術。

「しっかしよ、神父さんがカーストのおっちゃん連れ出さなかったら、俺達、今頃どうなってたことか……」

「……神父。 あいつは何か様子が変だった」

「へっ？ そうか？ いつも通りニコニコしてたと思うけどな」

リオンは人差し指で、月に文字を書く暇つぶしをしながら言った。神父はいつものように笑顔で、オルマークス家にやってきて、村長からの呼び出しが掛ったと言い、カーストを連れ出して行った。恐らくリオン達が飲酒するのを止めに来たのだと、リオンは思い返して納得する。

セレネは沈黙を維持している。辺りからは何も聞こえない。

「どうした？ 何か悩み事か？」

記憶喪失の少女に悩み事がないわけがないと思いつながらも、リオンはこのような時にどんな言葉を掛けていいかわからない。

「腹が一杯になったな……と」

セレネは残った握り飯と睨めっこしながら、「うむむ」とさらに呟く。残すのが惜しいのだろうか。両手を添えて、ジツと頭の崩れ

た三角を見つめる。

「心配するような間を空けるなよ！　ほんと、お前はマイペースだよな」

リオンは拍子抜けして、屋根から落ちかける。そして、少女を心配することが、だんだん馬鹿らしくなってきたのだった。

「心配だったのか？　そうか、それは迷惑をかけた。　普通と言うのがよくわからないんだ。　許してくれ」

握り飯を包みに包んで、屋根の平らな位置に置きながらセレネは言う。

記憶を失うということは、今までの常識も失っているということなのかもしれない。

名前しか覚えていないという状態なら、常識なんて覚えていなくて当然だ。右も左もわからない女の子に自分は、一体何を言ってきた？　もつと優しく声をかけてやるべきではなかったのか。リオンは、些細なことでイライラしていた自分を見詰め直す。

「いや、俺の方こそ……ごめんな。　記憶喪失のやつなんて初めてだから、どう扱っていいかわからなかった。　これから、一つずつ思い出していけばいいんじゃないか？　今日から俺と姉ちゃんとセレネは……家族だからな！」

リオンは話している途中から、恥ずかしくなって語尾だけ強くなった。しかし、本心からそう思う。セレネはもう家族である。切っても切れない強い絆。

自分と姉と母そして、不幸しか残さなかった憎き父親グレン。岩山へ隔離された父の墓参りに毎日行くのも、絆を守るためだ。

父親が見捨てた絆を、リオンは頑固して守ろうとしていた。

村内にある母の墓と違い父の墓は、リオンが行かざるを得ない場所ということもあるのだが、行かないという手もあったのだ。

親父と俺は違う

絶対に裏切らない。絶対に見捨てない。自分が家族を、村を守って見せる。グレンが落ちぶれた裏切り者ならば、リオンは皆から称えられる英雄になると。

父親が放棄したことをリオンは守り続けてみせると頑なに思い続けてきた。

幼少時代に父親と被せられて、村全体から苛められていたため、リオンにとって父親とは反面教師の役割になっていたのかもしれない。

兎にも角にも、リオンは父親が嫌いなのだ。

リオンが夜の村を見渡している間、沈黙が続く。

父親の事など今、思い出しても気分が害するだけだと判断し、気持ちを切り替えるリオン。

「とにかく！俺が守ってやるから安心しろって！家族で男は俺だけだからな」

「よかつたな、ハーレムというやつだぞ」

「お前はどこでそんな言葉を覚えてきたんだよ！」

記憶喪失だと言うのに、余計な言葉や知識があるセレネにリオンは頭を抱える。

明日からはこの蒼髪の少女も家族の一員、村の一員として暮らしていくのだ。

姉の手伝いをしたり、向かいに住むカーストと馬鹿をしたり、悪ガキのハインを時には叱ったり。

リオンはこれからの生活を想像しながら、胸を高鳴らせた。科学も魔術も何もないこの村だが、リオンはそんな村の毎日が好きであった。自分の隣に行儀よく座っている少女もそう思ってくれるよう努力はするつもりだった。

そんな至福に満ちた場に、違和感のある耳障りを覚えるリオン。リオンは何となく村を眺めた。立ちあがって全体を見渡すように眺める。

「ん？　なあ、セレネ。あれ何かわかるか？」

いつもの夜景と違う異物がそこにあつた。

影である。人型をした影が岩山の近くに着地していく様子がリオンには視覚できていた。

月明かりで、遠くの物を視覚するリオンの視力は、この村で育った賜物だろう。

「むう。　メタル……フレーム・タイプ・サウザンドか？」

リオンの視力ではただの影にしか視えないものが、セレネには種類まで見分けることができていた。ディスカバリーと違い、戦闘用メタルフレームにはブースターが搭載されている。そのブースターの独特の音が、風に乗って耳に届いていたことをリオンは見逃さなかった。

「こんな時間にサウザンド……軍か？　一体、何してんだ？」

軍事演習が視覚できる程近くで行われるなら、日中に知らせが来ているはずである。

リオンは、岩山の周囲に集まる黒点を目で追う。ここでリオンはあることに気付いた。

「なあ、セレネ」

「ん？ どうしたんだ？」

岩山から自分の顔に視界を戻すセレネを待つて、リオンは言葉を貯めた。

「お前、軍人じゃないか？ あれはお前を探している部隊……とか」

軍と無縁のこの村にサウザンドが来ると言うことは、そう思わざるを得なかった。

セレネは、軍の作戦中に負傷して記憶を失った。そして、あの影達は、通信が途絶えた兵士を搜索に來ている搜索部隊ではないのか。

「私が、軍人……それはわからないが、あれは軍の部隊ではないと思うぞ。機種も武装も寄せ集めだ。まるで統一感がない。そして、あの部隊編成では、射撃戦は有効だが、白兵戦が留守だな。軍というのは、白兵戦もできるよう、バランスを考えた中量級装備をする。あのメタルフレーム達は、殲滅しか考えていない中量級装備……この辺りで侵略戦争でもあるのか？」

セレネの視力、知識には驚かされるが、それ以上に彼女のことを怖くなった。

記憶喪失なんて出鱈目ではないのかと思う程、彼女は兵器について詳しかったのだ。

メタルフレームが好きなリオンでさえ、そこまでの分析はできない。

彼女に色々問い詰めたいことがあるが、それは今すべきことでは
なのである」とリオンは割り切ることにした。

もし、セレネの見込みが正しければ、今夜どこかで侵略戦争が起
こる。

間違ってもこんな村を侵略するのに最新型のメタルフレームは、
そう何機もいない。

村にも四機の戦闘が可能なハンドレットが配備されてはいるものの、
サウザンドが機動性で負けるはずがない。相手は、本物の戦闘機体
だ。サウザンドが二機あれば、ハンドレット四機など十分に殲滅で
きる範囲である。

だが、リオンは、四機近くの影を確認している。
ハンドレットとサウザンドの一騎打ちなど、論外だ。しかも、搭
乗するのが戦闘素人の村人である。

今、侵略戦争は条例で禁止されている。条例違反を犯してまで、
この周囲に獲得する価値のあるものなどない。

帝国も共和国から無駄なペナルティをかけられたくないだろう。
まして、捨てられた村が目標などありえない話だ。

条例が通用しない盗賊団を除いて。

「やばい……やばいぞ！ あれ、盗賊じゃねえのか！ 早く皆に伝
えなきゃ」

盗賊が近くにいます。それも魔科学兵器を持った危険な一味が。

リオンは屋根を手慣れた様子で降り、村長の家へ走った。

魔女狩りが決行されようとしている村長の家へ。

第9章 魔女狩り（前書き）

本日は誕生日だったんで、気合い入れましたよ、ええ。

執筆速度は変わりませんがw

筆者の力不足でメタルフレームの大きさ管理に無理があると感じたので

大きさの詳細設定は未定にしておきます。

第9章 魔女狩り

“魔女”

それは、悪魔と契約し、特別な力を得た者

リオンは、夜の村を駆けまわった。盗賊が近くに来ているため、逃げると村人に呼びかけた。

“魔女”

それは、人間や社会に対して災いをもたらす存在

首尾よく村人は、村の西にある岩山へ避難できた。

幸いにも女性、子供の避難は、まだ盗賊達気取られていない様子だ。

“魔女”

それは、人間社会に在ってはならない存在

大人達はカーストの家で、盗賊を迎え撃つ会議を始めた。

会議の結果、メタルフレームを使用し、戦えない者を確実に逃がす。そして、避難が完了次第、村を守る徹底抗戦に出ると決まった。

“魔女”

忌むべき存在

リオンは、避難せずにハンドレットが集まるカーストの家へ戻ってきた。

カーストの家の前に到着し、不謹慎ながらも歓喜していたのだった。

父のように自分は逃げ出さなかった。最後まで村に残り、老人や子供の避難に全力を尽くした。非力な少年は、このまま女達と避難して大人達が戦いに勝つことを祈ればいいだけだったのだ。しかし、少年は村に戻ってきた。戦うために、大人達と共に村を守るために。英雄の一人になるために。

この家で、本当は何が行われているのかなど知らずに。

「おっちゃん！ 俺も何か手伝わせてくれ！ えっ……」

「な！ リオン……」

急に扉を開かれて、声を上げたリオンに、カーストは気まずい声を漏らしながら振り返る。

少年は自分の目を疑った。それもそのはずである。男達が寄って集って、一人の少女を囲み込んでいたのだから。

「……おっちゃん、これはどうゆことだ？」

リオンの声に殺気だったものを感じて、少女を囲んでいた男達が一步下がる。

少女は縄で縛られ、うつ伏せに倒れている。寝ているのではない。倒れているのだ。

「魔女を捕まえたんだよ。 万が一のことを考えて、村の人には避難してもらったんだ。 盗賊が近くにいてもかもしれないから、速やかに西の洞窟へ逃げるようにと魔女の策略にハマった振りをしてね」

神父が茶色の本を開けながら、男達の間から前に出てくる。相変わらずの優しそうな笑みで、倒れている少女に視線を戻す。

神父は乱暴にも、少女の蒼い髪を引っ張り、リオンに顔を見せる。

少女の額からは血が出ていた。よく見れば、白い肌には暴行を受けた形跡が幾つもある。

「早くリオンに使った魔術を解くんだ！」

「リオ、ン……か」

うわ言のように少年の名前を呼ぶセレネ。

神父はあくまでも、少女に冷たかった。矢のような視線からは、普段の優しさなど微塵も感じられない。

「神父さん……どうしちゃったんだよ？ 何でセレネをそんなふうに扱うんだよ。そいつは俺の……家族なんだぜ」

リオンの声は完全に震えていた。怒りと悲しみ、それ以上に理不尽な現状に思考回路の処理が追い付いていない。

「早く、彼の魔術を解くんだ。素直に解けば命までは取らない」

「ッ！」

神父がセレネの顔面を床に叩きつける。

カーストは、耐えるようにジッとリオンの顔を見ていた。

「彼を操ってここまで連れてきたのだろっ！ 早く彼を解放しろ！」

避難していて本来ならば、ここに来ないであろうリオンを見直し、神父は再度、セレネの顔面を叩きつける。

「止めるおお！！！」

リオンは叫びながら、走っていた。

理性なんて働いていない。ただ、本能で神父を殴り飛ばそうとした。故に、神父の周りの大人達など目に入っていない。

「リオン、止める！」

「誰かリオンを押さえろ！」

「つくそお！ リオン、早く目を覚ませ！」

男達がリオンを力で床に押し伏せる。リオンは罠に掛った動物のように暴れ、吠える。

「あああ！ ああ！！ 離しやがれ！ 絶対許さねえ！！！」

「くっ、リオンをここまで豹変させるとは、魔女め……」

神父は本を閉じ、少女の目の前に座り、呪文を唱え始めた。
セレネは動かない。

「おっさああん！！ あんたは、こうゆうのが大っ嫌いじゃなかったのか！」

リオンは押さえつけられながらも、椅子に座って様子を見ている。
カーストを睨みつける。

カーストは目を瞑り、リオンの言葉を無視した。

神父の入れ知恵で、魔女に操られた者の言うことに耳を貸すと、
貸した人間も操られると言われているため、返事をしないのだ。

「くっそお！ 何が魔女だ。女の子相手にここまでするアンタらの方が悪魔だ！ セレネは俺の家族だ！ 魔女なんかじゃねえ！ 昼間にそいつと話をしたアンタらが一番よくわかってんだろ！」

「リオン、俺達だつて……こんなことはしたくないんだ」

「カーストさん！ いけません、まだリオンは操られています」

前に出てきた神父を大きな腕でどけて、カーストは押さえつけられているリオンに近づく。息子同然の少年が錯乱している様子に耐えられなかったのだ。

銀色の義足が靴とズボンの間から垣間見えている、カーストをリオンは見上げた。

「リオン。十年前、この村が盗賊に襲われたことを覚えているか？」

「ああ、忘れるわけがねえ」

自分達が村から弾き出された原点をリオンが忘れるわけがない。リオンは病にかかり、母に負ぶさりながら姉共々、村外れの岩山に逃げ込んだ。

そしてカーストの娘……幼馴染のサヤは盗賊に殺された。他にもたくさんの知り合いが死んだ。

自分から大切なものを一瞬にして奪った十年前の事件。

各自が事件のことを思い出して、空気が重たく変わる。家族を失った者は、リオンとカーストだけではないのだ。

しばらくして、室内の重たい視線が、リオンとカーストに集中した。

「お前は病気ですつと寝込んでいたから、知らないだろうが、あの日、グレンが女の子を遺跡で拾って来たんだ。そりゃもう、べっぴんさんだった。蒼い髪の毛で目も蒼、人形みたいな子だった」

カーストがリオンの目を見て、“続けていいか”と目で確認を取る。

「その娘は、どうも身寄りがなくなてな。俺の家か、グレンの家で面倒を看ようとなったわけだ。でも、サヤが妙にその娘に懐いてな。グレンの家にはマリアちゃんとリオンがいるから、俺の家で面倒を看ることに決まった」

カーストは何気なく歩き始め、止まる。リオンは嫌な予感がし始め、唾を飲み込んだ。

「その娘の名前はなあ……セレネだ」

リオンの頭に衝撃が走った。

十年前にもセレネという蒼髪の少女がこの村を訪れていた。そして、話振りから村人達は新しい住民にとっても歓迎的だった。

これではまるで、同じだ。

リオンは恐怖、特に父親と同じことをしているという事実から鳥肌が立った。

「そして、神父さんは蒼髪の少女セレネが人の生き血を吸っているところを目撃している。……顔が半分なかったらしい。それでもその娘は立ちあがり、グレンを連れて村の外へ出て行ったそうだ」

しかし、それは十年も前の話。偶然、蒼い髪で蒼い目のセレネという少女が、この村を訪れてもおかしくはない。

「それは、偶然……」

「俺も偶然を疑った、これを見せられるまでな」

リオンの言葉を遮り、カーストは少女の服を掴み、背中を露出させる。

蒼い髪に隠れた狼の模様。

「これと同じ入れ墨が、当時のセレネにもあった……偶然にしては出来過ぎていると思わねえか？ 同じ名前、同じ容姿、同じ場所に同じ入れ墨がある。もう、同一人物としか考えられないだろう？」

カーストはそつとセレネの服を直してやる。だが、何かに脅えた目をしていた。カーストとて、神父の話を全て信じているわけではない。神父から娘のサヤの最期を聞いている時は、神父の妄想に殺意を覚えた。

顔の半分を潰されて、全身火傷を負った人間が立ちあがるなどあり得ない。

グレンがその人間の姿を見て、一緒に逃げようと思っただろうか。思わないだろう。

まず、そんな人間がいれば誰もこう思う。 化け物だ。

だが、信じざるを得ない。

先ほどから致命傷という傷を負わせているが、セレネの傷はすぐに塞がっていく。

リオンが、来る前に彼女は神父によって二回は殺されているはずだ。

一回目の時、カーストが身を呈して、阻止しようとしたが、間に合わなかった。

それなのにまだ生きている。頭を木材で思いっきり叩き割ったのに生きているのだ。これだけは説明ができない。

しかし、彼女が魔女ならば、全てに説明が付く。

魔女は歳を取らない、そして、灰になるまで焼かれぬ限り死なない。そして、悪魔と契約した証と言われる入れ墨を身体のどこかに刻まれているという。

グレンを悪魔による強力な魔術で洗脳していたなら、グレンの判断にも納得がいく。

「セレネは、魔女だ……」

空気が凍った。

そして、大きな衝撃がカーストの家を揺らした。

「な、なんだ！　魔女の仕業か？」

「嫌だ！　俺は死にたくない！」

「誰か魔女を殺せ！　早く殺すんだあ！」

男達が個々に慌てふためく。

「違う！　盗賊だ！　盗賊が来たんだよ！」

リオンの声で時間が止まった。

ここにいる者の誰が、魔女が言っていたことを信じるだろうか。しかし、紛れもなくこの振動はメタルフレームによる攻撃。

荒野の砂を巻き上げながら急接近している機体の音も徐々に大きくなり、部屋の中でも聞き取れる。

「ちくしょう！ 本当に盗賊まで来やがったのかあ！ 悪いことは重なると言うが、最低じゃねえか！」

カーストは、デジャブを見たようになり、頭を振る。

大きな体は、不規則なりズムを刻んでそのまま外に出て行つた。

そびえ立つ機体、特殊金属の骨格に緑色の装甲を纏った愛機メタルフレーム・タイプ・ハンドレットを見上げる。

カーストが村を守るため、発掘仲間を経由して手に入れた新しい相棒。

スペックでは、一世代前の機体だが、ハンドレットの中にも様々な種類がある。

カーストの機体は、中でもサウザンドに近い設計をされている言わば、『^{マーベリック}異端児』。

普段は野菜を近隣の村まで売りに行く程度にしか使用していなかった機械を、兵器として使う時が来た。

村は焼かせない。

魔女であろうと盗賊であろうと捻りつづす。

今まで、暴れるに暴れられなかった暴れ馬。

メタル・ラッシュを駆け抜けたメタルフレーム乗りが、本気を出す時が来たようだ。

敵が迫る地響きを聴いてカーストの目はギラギラと輝いていた。

彼は今一度、漢^{おとし}になる。

第9章 魔女狩り（後書き）

メタルフレーム・タイプ・ハンドレット：

人類が現れる百年前に作られたとされるメタルフレームの総称。

民間での利用も多く、民間での使用は運搬、移動など幅広い。

科学と魔術の両技術が採用されているが、片方の技術だけでも十二分に能力を発揮する。

第10章 デジャヴ

メタルフレームを起動させ、カースト率いる村の守り人達は次々と村を飛び立つて行く。

ブースターによる跳躍で、一気に村から夜の荒野に躍り出て行く。神父が止めるのを無視してカーストは戦いに赴いた。

熱量と砂埃が残ったカーストの家。

リオンは絶望の淵に立たされていた。

セレネは魔女だ　カーストからの言葉が頭の中でガンガンと反響している。そんなはずはない。そんなわけがない。この目の前で、呼吸が乱れたまま放置されている少女が魔女なわけがないのだ。魔女があんな幸せそうに握り飯を食べるだろうか……。魔女があんな優しいような表情をするだろうか。リオンの思考に“魔女”というノイズが混じる。

不協和音は、刃となり、リオンの頭をかき回す。そして、今まで彼女の姿をズタズタに切り刻んだ。リオンは自分でも気が付いていなかった。自分が泣いていることに。鼻水も涙も惨めに垂れ流していることに。

しかし、気付いてしまった。今の彼女には傷がほとんどない。神父を殴ろうとした、きっかけの傷はもうない。出鱈目な速度で治っているのだ。人間ならば治るのに数日掛かる怪我や打撲の跡が、巻き戻し映像を見ているように次々と塞がってゆく。

「っぐ、えっ……くう、う」

少年は嗚咽を漏らす。どうして知らないままに暮らせてくれなかったのだ。どうして自分にこんな現実を突き付けるのだ。そんな思いが目から生温かく溢れ出る。

「リオン、目が覚めたか？」

リオンを抑え込んでいる男が気遣いの声をかける。

リオンはただ、肩を震わせながら一度だけ頷いた。

何度目かの振動がカーストの家を揺らす。盗賊からの威嚇射撃もそろそろ殺意を持った鉛玉になる頃だ。ここに留まることを危険と判断した村人達が避難する態勢に入る。

「西の洞窟には行けない！俺達が逃げ込めば、女、子供が見つかる。遺跡に逃げ込めないのか？」

「馬鹿野郎！遺跡側から敵が攻めて来てんだ！なんにもねえ荒野で、メタルフレームに真っ向から突っ込む気か！？」

「じゃ、オラ達、どうすればいいんだあ！」

村人達が個々で言い合いをしている中、神父はいつも通りの笑みを見せた。

「大丈夫です皆さん、これは全て魔女が見せている幻覚。魔女は我々を混乱させ、逃げ失せるのを待っているのです」

セレネの元へ再びゆると戻り、神父は一息つく。

「魔女よ、こんなことをして満足か？貴様はそうまでして助かりたいのか？」

「私は、何もしていない……早く逃げないとお前も死ぬぞ」

乱れた前髪から、蒼い瞳を覗かせて神父に忠告するセレネ。

神父は鷹のような眼でセレネを一瞥し、「冗談ではない」と怒鳴り、少女を蹴りあげる。

とても神父の行いではなかった。だが、魔女が相手ならば、神父は何をしても許される。彼らは神に仇なす者に容赦はない。村人の“優しい神父さん”はココニハイナイ。

「神父さん、これは間違いなくメタルフレームの攻撃だ！ 幻覚がどんなもんか知らねえが、早く逃げねえと俺たちどっちにしても死にまうぞ！ 魔女はここに置いておけばいい！」

「ダメです。誰もいなくなれば魔女の思うツボです。皆さん、落ち着いて神の教えを思い出して下さい。そうすれば、幻覚は解除できます。魔女は一流の魔術師を遥かに超える魔術を使用しますが、防御に特化した教会魔術ならば防ぐことができます」

反抗する村人を諭し、茶色の本を開け、呪文を唱え始める神父。

ちなみに、神父は魔術師ではない。魔術を行使するためには才能か魔力を生み出す訓練、もしくは両方が必要だ。一般人の神父が何を唱えようとも、奇跡は起こらない。

才能ある魔術師に対抗するように姿を現した者が“技術師”であり、才能のない人間でも簡単に魔術と同等の奇跡を起こそうと科学が生まれたのだ。この神父は技術師になることは可能だが、魔術師すなわち魔術とは縁遠い人間なのだ。

彼がどれだけ防御特化型の教会魔術を唱えようとも塵一つ守ることは叶わない。

そう、神父はもう……壊れていた。恐怖からか、信仰からか、それとも別の何かが神父の心を破壊した。

それに気が付いている人物はこの部屋に一体何人いるのだろうか。神父も村人もリオンのことはもう眼中にない。

俯いたまま身動きしなくなっていたリオンは、大人達の一瞬の隙を逃さなかった。

拘束していた男達の腕から逃れ、神父と村人の間を四つん這いになりながらも走り抜ける。そのまま蒼髪の少女を抱き抱える。力が抜けてグツタリしているのにもかかわらず、少女は羽のように軽かった。そのため、リオンはほとんど止まることなくセレネを抱えながら、窓の側まで駆け抜けることができたのだった。

神父は呪文を読むことに気を取られ、リオンの不意打ちに反応するのが遅れる。

「リオン！ まだ操られていたのか！ 早く魔女を返すんだ！」

「魔女じゃ……ねえ」

まだ声が震えていた。リオンは異常な程冷たくなっているセレネの肌を感じ、神父を睨みつける。

夜は暖炉がいる程寒くなるこの荒れ地の気候を考えれば当然のことだが、少女から伝わるこの冷たさはリオンの中に染み込んでいく。魔女を助けるなど、英雄ざる行為。少年の心は、善意から生まれた悪意と悪意から生まれた善意で破裂寸前であった。

「家族だ」

黒い瞳を見開いて少年は大人達に声を放つ。抱きあげられた蒼髪の少女は一瞬、笑ったように鼻を鳴らす。

そのままりオンが窓から外に出る気であると理解した神父は、目を見開き、悪魔のような形相で駆ける。

リオンは身を翻して外への窓を足でこじ開ける、逃がすまいと神父は手を伸ばす。

その刹那。

神父の手は夜の冷たい空気だけを掴んだ。外と中の仕切りが邪魔をして神父はリオンを捕らえる事ができなかったのだ。

か弱い少女を守ろうとするリオン。社会の絶対悪を裁こうとする神父。両者の視線が強くぶつかり合う。

銃器の音、鉄と鉄が接触する音、地面を削る音が聞こえてくる。

メタルフレームの交戦が始まったとリオンは理解した。

しかし、神父には何も聞こえない。これは全て魔女が生み出した幻覚なのだから。

「リオン、君は何をしているかわかっているのかい？」

「わかってるよ。いつものお説教はやめてくれよ？ 俺は正しいと思ったことをしたつもりだ」

爆発音が神父の怒りのごとく鳴り響く中、両者は身動き一つしない。夜の冷たい風が火薬の臭いを運んで二人の間を通り抜けて行く。

“正しい事をせよ”と、村人に教えてきた神父に答えるリオン。

神父の“まだ神は、君をお許しになる”と言いたげな顔を無視してリオンは庭に急ぐ。

リオンの最後の頼りの綱はディスカバリー。

発掘用と言ってもメタルフレームがあれば、村からの脱出は可能だ。昼間に酷使したうえに、今日は整備を怠っていた。カーストが整備していることを期待してリオンは機体に取り込む。

コックピット内のモニターが、機体の各部の異常を検索し、“stand by”の文字を浮かび上がらせた。

「よし！ おっちゃんありがとう！」

小さくガッツポーズをした後、リオンはキーボードを叩く。ディスカバリーの複眼カメラが目覚めました。四つのカメラアイ

の視界は良好、村の外で繰り広げられていると思っていたメタルフレームの争いは、中にまで及んでいるとカメラから教えてもらう。間違ってもあの中に入ってはならない。戦闘用でないディスカバリーが入れば数秒で鉄の塊にされるであろう。

リオンは縛られたままのセレネを機体の腕で拾い、胸のコックピットまで寄せる。

「……大丈夫か？」

「ああ、三回ぐらい死んだ」

自分の語彙力の無さを痛感しながらリオンは、冗談のような言葉を呟く少女をコックピットまで運ぶ。

そして、腕の中にいるこの少女はやはり魔女なのかと胸を痛めた。

「とにかく、逃げるぞ、大丈夫だな？」

「ああ、お前の好きなようにしてくれ……」

リオンは、話題を変える。

今考えることは、生きることだ。セレネの身の上話ではない。彼女が魔女だとかそんなことは今、どうだっていい。このままどうだっていいことにして置きたい。

ハンドレットよりも小柄で重厚感のある機体を動かし、リオンは村を出ようとした。

しかし、灰色の機体が目の前に立ち塞がる。

「おつ、ディスカバリーじゃん？ しけた村だと思ってたら、ハンドレットは出てくるし、食料もそこそこあるし、おまけにディスカバリーかぁ。これで女がいれば文句無しだぜ」

肩に狼のロゴが入った、灰色の機体サウザンドから若い男の声がある。

継ぎ接ぎされた各部のパーツは統一性がまるでないが、それはカスタマイズされている何よりの証拠である。

バケツのような頭部に輝く黄色い単眼カメラ。胴体装甲と脚部は刃物のように鋭利。機動性を追求した結果、極限まで薄くしてあるため、縁が刃物のように鋭利になっていると思われる。

右手にはマシンガン、左手には魔科学兵器と思われる紫色の剣の鞘がある。中身はどこかに落として来たのか空であった。

ハンドレットとサウザンドの違いは、魔科学兵器が使えるか否かという点だ。

魔科学兵器には様々な特性がある。このサウザンドの鞘もただの鞘ではないことは、リオンとて承知である。いくら格下のメタルフレームが相手でも、使えない武器を持ち歩く程の余裕は盗賊にもないであろう。

しかし、人の数だけ指紋の種類があるように魔科学兵器にもメタルフレームの数だけ種類がある。リオンが知識として知っている物の中にあの紫色の鞘は入っていない。

「あれ？ 無視……か。まあそうだな、いきなり村を襲われてんだから意味わかんねーって感じ？ 降りるならさっさとしな、コックピットだけブチ抜くぞ」

サウザンドの銃口が、ディスカバリーのコックピットを指す。

「わかった……降りるから少し待ってくれ」

「うん？ もう、降りるのか？」

「馬鹿、発掘用のこいつじゃどうしようもないだろ」

リオンが慎重に言葉を選んだその後に、縛られたままのセレネが横から声を出す。

本来、一人乗りのデイスカバリーに二人も人間が乗っているため、シートベルトをしていないセレネは自由に動き回っていた。

これが災いしたのか盗賊の機体から飢えた獣のような声がする。

「女の声？ 乗ってるのか？ 女も置いていきな」

ニヤリと笑う様な声に、リオンは返事ができない。

ここまで来てセレネを渡すことなんて彼にはできなかった。

「魔女よお！ 私の魔術で滅びるがいい！」

「なんだありゃ？」

神父が屋根に上り十字架と茶色の本を掲げて、デイスカバリーに念を飛ばしている。

盗賊は単眼カメラをかししゃかししゃと拡大して神父を観察する。

「魔女よ！ 私はこのような幻覚にまどわあああつあ！」

「おおお、飛ぶね眼鏡野郎。神父辞めて、鳥になれよ」

神父が飛んで行った。右腕と右足と思われるものが屋根を転がり、地面にボトツボトツと落下する。一拍置いて、眼鏡の無くなった神父の頭と胴体が田舎道に落ちた。残りのパーツは夜の闇に消えて行ったため、どこに行ったかわからない。

リオンには何が起きたかわからなかった。あまりにも一瞬の出来

事で、神父が死んだという事実でさえ、認識できないでいる。サウザンドは直接神父に触れることなく、バラバラにした。

「あっあ、嘘だろ……神父……さん」

「面倒な魔科学兵器を持っているな」

リオンが放心状態にもかかわらず、セレネは相手の魔科学兵器の特性を計っていた。

「お前！　神父さんが死んだんだぞ！？」

「見たらわかる。あれで生きていれば正真正銘の化け物だ。私もあそこまで斬られれば死ぬ……と思う」

リオンは言葉にならない思いをコックピットにぶつけて、セレネの発言に反論できないでいた。

もう、こんな場所からは一刻も早く逃げ出したい。次にあなるのは自分達かもしれないのだ。恐怖で、筋肉が痙攣けいれんを繰り返す。人の死なんて見慣れたものと思っていたリオンであったが、目の前で知人がバラバラにされるという経験は初めてなのだ。

知識で知るメタルフレームの戦闘と生で見るメタルフレームの戦闘は別次元だった。十年前、あんなものが村に攻め込んだのだと思うと、今まで生きていたことが不思議なくらいだとさえ思われる。

「なんか、めんどいからやっぱ、お前らも死んでくれ。別に女はいくらでもいるし。世界の半分は女だもんなあ、一人ぐらい死んでも後悔しない、しない」

引き金が引かれた。人間にはあまりに大き過ぎる鉛玉の雨がリオン達に向けて発射される。

ブースターを噴かす音、リオンは盗賊がディスカバリーの爆発に巻き込まれないよう距離を空けたのだと悠長に考えている。

これが戦闘。

強い奴が生き残り弱い奴が死ぬ。

自分はこの十七年間で何をしてきたのか振り返る間も無く死ぬ。そんな自分を惨めだと思ふ少年。視界が一瞬にして真っ暗になった。

そして、渦を巻いて向かってくる鉛の雨を弾く音だけが残った。一発もコックピットには触れていない。

「俺の相棒と親友の息子に手を出してんじゃねえよ……ぶはあ！」

緑色の機体、ハンドレットであってハンドレットでない『異端児』がディスカバリーを守っている。

魔科学兵器“ラップアップ・シールド包み込む盾”をフルパワーで使用した反動で、魔術の素養が無いカーストの体内は拒絶反応を起こし、内臓を破壊する。

「いざつて時に使えるようにしていたんだがぁ、はぁ、はぁ……まさか本当に使うことになるなんてな」

「おっちゃん！」

フェイスウインドウ表情画面越しに吐血するカーストを見たリオンの声は、悲鳴に等しかった。

三六〇度全方位防御ができる盾が、ディスカバリーとハンドレットを包み込んでいたが、ただの古びた木製の盾に戻る。

「おおー。ハンドレットだよなそれ？　なんで魔科学兵器が使える

「たんだ？ 珍しい機体は高く売れるからよ、そいつも貰うぜ」

「仲間との友情の結晶を誰が、やるかぁいいい！！」

腰からケースが飛び出しナイフを抜刀するカースト。

灰色の機体に緑色の異端児がナイフで斬りかかる。

大地が揺れ動き、カーストの家にいた村人達は今がチャンスと慌てて散って行く。

ナイフは“何かに”払われ、ハンドレットの右腕がもげた。

他の武器を村の外にいる盗賊を仕留めるのに使いきっていたカーストは、残った唯一の武器を破壊されたのだ。

機械の右腕は宙を舞い、カーストの家に落下する。

「くつ、村一番の家に傷を付けやがったな？ 気味の悪い魔科学兵器を使いやがって、お前は魔術師か？」

「これが村一番？ 犬小屋かと思ったぜ？ 俺が魔術師い？ 冗談も程ほどにしてくれよ」

カーストが怒りを露わにして、態勢を立て直す。武装が無い状態でサウザンドを相手にするなど、無謀だ。

リオンは自分の無力さと情けなさに唇を噛みしめた。

「魔術師じゃなければ、技術師か……最近の若者は楽な道ばかりやがる。そんな三流鼻垂れ小僧が玩具を扱うもんじゃねえ。さっさと帰んな」

「言ってくれるねえ、今のはカチンと来たよ？ 手加減してやったらしい気になりやがってクソオヤジがああ！！」

「小僧があ！！　メタル・ラッシュを生きた英雄を舐めるんじゃないえ！　そんな悪ガキあ……お尻いい、ペンペンだあ！！」

カーストは村を奪われた、親友を奪われた、娘を奪われた……。これ以上彼から何かを取ることが許されるのだろうか。

両機の風を吸い込む機構が循環する。全ての動力がブースターに集中していた。

両機が行う動作は今までのブースターを一瞬吹かして行っていた“ダッシュ”ではない。ターボチャージャーにより、高温高圧の排気ガスを運動エネルギーに変換して利用、熱効率を上げ、通常時の三〇%増のダッシュを行う“ジェット”である。

空気を吸い上げては吐き出す、メタルフレームの深呼吸が始まる。そして、ガスが点火したかのような、爆音が鳴り響く。ブースターを全開にした両機が一瞬にして最高速度へ。

「ぬううあああ！！」

「ハンドレット風情があああ！！」

男たちの咆哮に応えるように、機体達は真つすぐ、真つすぐ敵を粉碎せんと突き進む。

巨大な鉄の塊同士の衝突。

耳を貫く衝撃音。近くにあるカーストの家は漏れた衝撃で倒壊する。

暫しの静寂……。

リオンは見た。ディスクバリーの複眼に映し出された光景を。

灰色の機体は鞘に手をかざしたまま、静止。

緑色の機体は左腕を宙に構えたまま、静止。

ハンドレットの右腕がバチバチとショートしている音が断続的に聴こえてくる。

「どうなっただ……」

「カーストの機体が……死んだ」

リオンが唾を飲み込んで一言吐き、すぐさま縄に縛られたままのセレネが答えた。

単眼の機体が目を光らせる。異端児は次の瞬間、神父のようにバラバラと吹き飛んで行った。

「^{カマイチタチ}構太刀って言うんだよ。こいつの魔科学兵器は“構えるだけで相手を斬り刻める”。白兵戦最強の魔科学兵器に丸腰で突っ込んでくる馬鹿がいるかってえな」

悪魔みたいな笑い声をあげて崩れていく異端児を見降ろす盗賊。そこに、茶色のハンドレットが乱入する。家や策を噴き飛ばしながら、鉄の塊が飛来した。

「カーストおお!!」

もうすぐ女の子が生まれると喜んでいたトングが怒涛の叫びと共に、ハンドレットをサウザンドに突進させる。

「っち、このクソオヤジ共があ!! ちっ!!」

数十メートル吹き飛ばされながら、盗賊の機体が豪快な音を立てて地面に倒れる。

村の中心である広場は、サウザンドが転がったことによって見る影もなくなってしまった。

「リオンか？ 早く逃げろ！ 一旦、外の連中は倒したが、まだ遺跡の裏に増援がいる。 もう……この村は終わりだ……若いもんには生きる権利がある。 この際、魔女でもいい。 ……俺達の息子、守ってやってくれ」

「逃げるぞ」

セレネがリオンの了解を待たず、勝手にディスクバリーを操縦する。

リオンの膝に座りながら、顔でレバーを動かし、両足で片方のペダルを踏みわけ、器用に村の外へ向けて逃げる。

「お、おい！ トングのおっさんを見捨てて行くきかよ！ も、戻れ！ 戻れよ！」

「戻ってどうするんだ？ 一緒に死ぬのか？ 私は死ねない」

そわそわ操縦するセレネに対して、目の前を行ったり来たりする長い髪の毛に顔が埋もれそうになりながら、リオンは反抗する。

背中にある狼の入れ墨が服から透けて下着と一緒に薄っすらと浮かび上がっている。

「こんな時に、馬鹿か俺は！ カーストのおっちゃん……死んでない、トングのおっさんも死なない！！」

「そんなことは関係ない。 あいつの次に殺されるのは私かお前だ。 逃げるのは安全的欲求だ。 排尿の次ぐらいに大切なことだ。 それにお前は私に逃げも隠れもしていいと言ったぞ」

リオンは、邪な心を振り払おうと頭を振り、カーストの生存とい

う一抹の望みを自分に言い聞かせる。縄をされたまま安全的欲求を主張する少女はあくまでも冷静だった。

「縄が邪魔だ。早く解いてくれ」

「わかったわかった、暴れるな！」

リオンの膝の上でもぐくセレネを抑えつけながら縄を解き始めるリオン。

セレネの体に触発されて、リオンは生理的欲求が爆発しそうになりながら、自分の不謹慎さを呪う。

親しい大人達が次々と盗賊に殺されているのに、どうして自分は……こんなことを考えているのだ。何もできないで、守ってもらってばかり、最後にはそんなことを考える。最低だ。

「うん？ また泣いているのか？」

セレネが振り向く。リオンは声を殺して泣いていた。

「ちくしょう……ちくしょう……う」

女の子に泣き顔を見られ、守られている。リオンが目指す英雄おとしこにあつてはならないことだ。一点の曇りもなく正義を信じ、悪に立ち向かう。弱者を守り、強者を正す。それがどうだ。どうして自分には力がない。どうして守れない。どうして怖気付く。英雄ならば、身を呈してでも村を守るだろう。力が無くとも、最後まで戦うだろう。

これでは

親父と一緒にじゃないかッ！

少年の苦痛の叫びを無視し、遺跡とは逆方向にディスカバリーは全速力で逃げる。

数分後、夜の荒野に爆発音だけが鳴り響く。

村の方面からの音だった。

村の広場で武器を持たないメタルフレームが破壊されたことを意味する音。

村は炎上している。

赤と黒の夜空が再びやってきた。

そして、リオンの父・グレンが力尽きていた岩山へディスカバリーが赴いていることは、何かの運命なのかもしれない。

何機もの武装した機影が後方から息を殺して付いて来ていることに、少年と少女は気が付いていない。

第11章 建前（前書き）

最近寒いです。 お財布の中も寒いです。
生きるって大変です。

第11章 建前

「ここは……」

あまり来たくなかったとは言えないリオンは口を閉ざす。ここは父・グレンが死んだ場所。裏切り者が生き延びようと村人を見殺しにして逃げ込んだ岩山。

父の墓がある崖の裏手に、入り組んだ洞窟があった。岩で入り口を隠されている洞窟は村人達も存在を知らないであろう。

毎日、早々にこの地を立ち去るためこんな所に洞窟があるとはリオンでも知らない。

「見覚えがある、ここは……どこだ」

「おい！ ちょっと待てよ！ 調べもしていないこんな洞窟の奥に行くなんて危険だ！」

リオンの言葉を見殺し、機体の複眼から写し出される映像をモニターで確認するセレネ。セレネはディスカバリーを洞窟の入り口へと進ませ、ディスカバリーの腕を洞窟の奥まで橋替わりに伸ばした。コックピットが開かれ、鼻を刺すような冷気が中に流れ込んでくる。

夜が更けてきた今、未知なる洞窟に足を踏み入れることは危険極まりない。

されど、セレネは何か確信した表情をしている。

「なら、お前はここで待っている。中には私が入る。ここは……懐かしい感じがするんだ」

「お前一人をこんな危険な所に行かせられるわけねえだろ！」

「なら、付いて来て……くれないか？」

リオンは言葉に詰まる。

その通りだ。セレネに付いて行けば彼の不満は解決する。だが、
どうしてか首を縦に振ることができない。

どうして、セレネと一緒に洞窟に入ってやらない。彼女に万が一
のことがあれば、自分が守ればいいだけの話ではないか。何度も自
分に言い聞かせる。ただ、身体が動かないのだ。

「やっぱり……“魔女”は怖いかな？」

リオンは咄嗟にセレネに怒りを覚えた。

「違う！ 魔女だとかそんなことは関係ない！ お前はお前だ、俺
の家族だ！ それにお前は記憶が無いんだろ？ 魔女かどうかもわ
からない。親父と一緒に逃げた女の子かも知らないだろ！ 何
で自分の身に覚えのないことを認めるんだ！ 何で……魔女だなん
て言っただよ」

リオンは自分で整理し切れていなかった想いを少女にぶつける。

言ったリオン本人も驚いている始末だ。

セレネは俯く。

少年がいるコックピットと少女が立っている外に遮るものはない。
しかし、何か壁のようなものを感じる。

少女は神父や村人から言われたことを全て信じている。

記憶が無い彼女にとって自分に過去はない。「君は過去に人を殺
したんだ」と他人から嘘を教えられても、そうなのかと他人事のよ
うに信じるしかないのだ。

なぜなら、反論するための情報を自分は持ち合わせていない。

自分のことがわからない。今は温厚な性格でも、昔は殺戮を楽しむ愉快犯だったかもしれない。規律正しい軍人と思っていたが、実は非人道的なことをやってのける盗賊だったという可能性もある。

セレネの場合、目撃者も多く、幾つもの証拠を突き付けられたのだから、自分が魔女だという話を信じるしかなかったのだ。

皆がそう言うのだから

そして、神父からの度重なる暴行があつたにもかかわらず、傷が治る。

この異常な再生速度を見た時は、少女自身も気味が悪かった。

「私はお前達とは、違う……人間じゃない。見てくれ、この体を」

リオンに白い背中を見せる少女。彼女の背中には狼の入れ墨の他、目立ったものは何もない。先ほど垣間見た下着以外、何もないのだ。

「人間ならこんなに早く怪我は治らない」

「そ、それは……でも」

リオンは傷一つない肌を見せられて、再び言葉に詰まった。「それは……」と段々弱々しくなる少年の言葉。

少女は少年の耳元まで接近して囁く

迷惑をかけたな、許してくれ

それだけ残して洞窟の奥へと消えて行った。

「待て！ 違う、俺は……俺は……なんで、震えてんだよ」

完全に見透かされていた。リオンが彼女の背中を見て、恐怖で足が震えているということ、これ以上の事実を受け入れたくないということを。故に少女はこの場を去った。少年をこれ以上傷つけないために。

少年の手はジンジンと痛み出す。

冷氣からか、手を何度も打ち付けた結果か。

「ばっか……やろう……。馬鹿野郎おお！」

少年はただ、叫んだ。

何もできない自分への叫びなのか、少女を受け入れないこの理性を破壊するためか、意味するところは少年にもわからない。

「何が……“家族”だ」

ただの建前でしかなかったその言葉。そう言えば彼女が安心するとも思っていたのか。自分が安心したかっただけなのか。真っ赤に腫れた両手を握りしめる。

少年は、彼女との繋がりを消すことが堪らなく怖かった。家族と言うことで彼女がどこにも行かないように縛り付けようとしていた。

なんて我が儘^{まま}。なんて最悪な関係。

無条件で信じ信じ合える、そんな絆が家族。無条件で信じ合えるならば「家族だ」なんて言葉はいらないだろう。周知の事実を口にする者はあまりいない。

どこか願い事をするかのようにリオンは家族という言葉を使用していたのかもしれない。

祈りは届かず結果、少年は少女を傷付けた。

俺がお前を守ってやるから安心しろって！

数時間程前の発言を思い出した。

今日から俺と姉ちゃんとセレネは……家族だからな！

なんて軽率な言葉を自分は吐いていたのだとリオンは唇を噛みしめる。

家族だと言っていた本人が、一番少女を傷付けたに違いない。家族の振りをして裏切った。拒絶した。

「なんで、あいつを守ろうとしたんだ」

カーストの家で神父を殴ろうとしたことを思い出す。

誰も答えてくれない。吹き込む風は少年の言葉を無視しながら通り抜けて行く。

「なんで、あいつのことを受け入れようとしていたんだ」

フルフェイスヘルメットに青カッパを着ていた姿を思い出す。

いかにも怪しい格好で、最初は盗賊と思っていた。

「なんで……だ」

遺跡の中で、腹が減ったと詰め寄ってきた少女の姿を思い出す。

あの少女が餓死する姿は見たくないと思った。

「……くっ！」

握り飯をリスのように口に詰め込んでいた少女の顔を思い出す。
メタルフレームを優しく撫でていた少女の微笑みを思い出す。

「……ただ、守ってやりたかったただけだ」

リオンは洞窟の暗闇を見つめ、保護されていたコックピットから飛び出した。

今から走ればまだ彼女に追いつくことができる。

「あいつは俺が守ってやらないと……違う！ 守ってやりたいんだ！」

少年が出した答えは理屈じゃなかった 家族だから守る、親しい人間だから守るのではない。

彼女はただ、守ってやりたいと思える相手だったのだと気付く。

「たぶん俺は……あいつのことが」

リオンは、自分の心に芽生えたこの感情が何か、まだわからない。
英雄を志す彼が、魔女の彼女にこの感情を芽生えさすことは許されない。

それは、世界を守る英雄ではなく、世界を殺す魔王になる者にのみ与えられた特権だからだ。

第12章 蒼い騎士

コックピットに仕込んであった懐中電灯を片手にセレネを追うリオン。

デイスカバリーを降りたというこの判断は、結果的に正しかった。リオンがデイスカバリーの腕を渡り切るか切らないかという所でデイスカバリーの鈍重な体が一瞬、ガクンツと上上がる。そして、デイスカバリーは小規模な爆発を起こして大破した。

「おお！！ ぎっ！」

リオンは咄嗟に跳んだ。洞窟の中に転がり込むが、岩だらけの洞窟は着地するにはあまりにも、不適切な場所であった。無論、懐中電灯もどこかにいった。

何回転したのか、頭の中がミキサーの中身のように、ぐちゃぐちゃにされたりオンは、足や腕から出血していた。

「今のは見せしめだ。隠れてるやつらは全員出てこい！ お前らの仲間がここまで案内してくれたんだぜ？ 次はどこに鉛玉をブチ込んでやるうか？ お前らの尻にしてやるうか？」

スピーカーを最大にして、黄色のサウザンドは声を拡張させている。

洞窟の入り口を囲むように、四つの機体がぐるぐると周囲を回っている。

（クソ！ おっちゃんのデイスカバリーをよくも！ ……おっちゃん達、生きてるよな）

リオンは、カーストとトングのことの安否が気になるが、今は自分の命を繋ぎ止めるだけで精一杯。

上手く逃げれたと思っていたのは、どうやらリオンだけのようだ。後方で待機していた盗賊達は、リオン達が村の避難場所に逃げ込むと踏んでいたため、敢えて泳がせていたのだ。

先に奇襲を仕掛けた仲間達から女がいないと聞いたこの黄色い機体のパイロットは、隠れ場所があると確信したのだった。

「逃げてても無駄だぜ？ 俺たちフェンリルから逃げられた奴は今までにいない。 大人しく命と体を超越しな」

黄色い機体の隣にいる茶色の機体からも声があがる。彼らはこの洞窟に村の女達が逃げ込んでいると思っている。

リオンとセレネしかないなんて微塵も考えていなかった。

他の盗賊二人はハンドレットを操っており、暇を弄ぶかのように機体同士が殴り合いを開始した。

リオンは構わず、洞窟の奥に逃げ込む。出て行けば殺される。それならば、中に入って活路を見出すべきだ。セレネを守るならば、尚更である。

暗闇で何も見えない洞窟は、身が締まる程寒かった。息の色も白くなっているに違いない。

「セレネ！ どこにいる？ 返事しろ！」

「お？ 来たのか？」

思いの他セレネは近くにいたため、リオンは安堵する。むしろ、あんな別れ方をしたのに、意気揚々としている少女に少年は面を食らった。

セレネも盗賊達の声の聞こえている。しかし、彼女に焦りというも

のが無い。

リオンは、目が慣れ始めてきた視界と声を頼りにセレネの元へ駆け寄った。

「ちょうど良い所に来てくれた。　これを見てくれ」

「こ、れ……って」

「メタルフレームの卵だ」

セレネの言う卵と生物の卵は違う。　メタルフレームが格納されているケースと言った方がこの場合は適切であっただろう。

巨大な長方形のシルエットが洞窟の暗闇をその部分だけ濃くしている。

その脇では赤いランプがポツリと点灯している。

「この格納ケース、まだ生きているのか？　何でこんな所にメタルフレームを格納するケースがある？」

「わからん。　でも、こいつは生まれたがっている。　おっ！」

セレネが言い終わると同時に、洞窟が揺れ始める。

盗賊が全力射撃を洞窟にしているのだ。倒壊を恐れて出てきた人間を捕らえるという確かな追い込み方だった。

セレネは攻撃など気にせず、導かれるようにそびえ立つ長方形のケースへ手をかざした。

「止める」というリオンの声はセレネには聞こえていない。

少女の手が鉄の塊に触れた瞬間、ケースに幾つもの青色の筋が通った。まるで機械の卵にヒビが入るかのよう。

インターフェイスが起動する。システムの起動音が次々と鳴り響

き、機能が復活していく過程が始まった。

「……おい、何をやらかしたんだ。お前」

「お前が触ったんだろ！ 俺が悪いのかよ！？」

セレネはジトつとした目でリオンを見つめた。

セレネの背後で、格納庫の隙間から全方位に蒼い光が漏れ始めている。

メタルフレームが誕生しようとしているのだ。

正確には、復活であるが……。

「セレネ危ねえ！ 下がるんだ！」

「わぁ！ おい！」

耳をつんざく破裂音を洞窟内に響かせ、ケースの破片が飛び散る。光の衝撃からセレネを守ろうと押し倒すようにしてリオンは、地面に伏せた。

巨大な長方形のケースが割れ、ケースの中心から光の束が飛び出し、洞窟の天井を突き破る。

月に登る蒼く輝く光の束は広がり、六枚の羽のようにも花びらのようにも見えるものが展開されている。

蒼い光の束は白色の粒子を撒き散らし、その粒子は雪のようであった。

洞窟という蛹むすめから蝶が生まれた。蒼い羽を広げ、ジツとしている。粒子を撒くそれはウインド村周辺の人間が全員確認できる程、広く、大きく、美しかった。

月の下に咲く花。

月の下に羽ばたく翼。

やがてそれは、雪が解けるように夜空から消える。

「これが、メタルフレーム？」

声を出したのは寝転がったままのリオン。メタルフレームが発見されるのは、大抵土を被っていて整備しない限り使えない。いくら格納ケースに入っていたからと言っても、放置されていた年月を考えると初期起動などあり得ない。

破れた天井から差し込む月明かりが、その機体の全貌を照らし出した。

一言で言うなれば、蒼い騎士。

蒼兜からは装飾である束ねた蒼い髪が伸びており、頑強そうなプレートには幾何学な文字が刻まれている。そして何より目立ったものは、騎士のような外装に関わらず、両手両脚部には一本ずつ杭打ち機のようなものがあつた。

頑強そうな装甲、そして全てを穿つような鋭い杭打ち機バイルバンカーから推測するに、接近戦を得意とするメタルフレームだ。

清潔さと気高さを象徴するかのように、蒼と白で統一された機体がそこには佇たたずんでいる。

月の下に参上したその騎士は、主君を待っていたかのように膝を曲げてコックピットを開く。

「……かなり重量級の機体だな。整備されている所を見ると軍の極秘機体か？ いや、それとも全く新しい新種のサウザンドか？ こんなやつ見たことねえぞ」

「……こいつはずっと待っていたんだ。生まれる日を」

首だけを機体に向けて、リオンとセレネは声を漏らす。

「待っていた？ あっ……。 おおああ！ すまない……」

「いや、構わんど。 私は心の広い女だからな！ もっと引っ付くか？」

「冗談は止めろ」

リオンはセレネを組み伏せていた。 倒されているセレネは何故か威張る。

「やばいな。 崩れかけている」

「お前の理性がか？」

「お前は俺に喧嘩を売ってんのか！？ 洞窟がだよ！ こんなところで、そんなことする馬鹿がいるかって！」

リオンは手を差し伸べて、セレネを立ち上がらせて逃げ道を探す。

盗賊の攻撃だけでも十分に倒壊していただろうが、内部で未確認の機体が洞窟の天井に穴を空ける程の衝撃を与えたのだ。

リオンとセレネが、まだ生き埋めになっていないのは運がよかったとしか言いようがない。 だが、先ほどからパラパラと石が落ちる音が響いている。

リオン達にもう考えている時間はない。

「あれに乗る、生身より生きる時間が長くなるかもしれない！ 来い、急げよ！」

「おおおい！ そんなに引っ張るな」

リオンはセレネの腕を引つ張り駆ける。
メタルフレームの中なら生身より安全だと判断したのだ。
ディスカバリーならば倒壊にもある程度耐えられるよう設計されているのだが、奥で膝を付いている蒼い機体は見た限り戦闘用である。

倒壊に耐えられるかなんてわからない。

「早く乗れ！ もうここも崩れる」

「……私は魔女だ」

少女の眼差しが少年には痛かった。

今は、この少女から“魔女”なんて言葉を聞きたくない。

「魔女だから何なんだよ……馬鹿！ 俺は英雄になるんだ。助けれるならどんなやつだって助けるんだ！ それに、女の子を見捨てたなんて知ったら、姉ちゃんに殺されるつうの！ だから、早く乗れ！」

セレネを強引に引つ張り上げてコックピットを閉じる。

魔女だから、瓦礫の下敷きにしていいなんておかしい。助かるかもしれないのなら助けるべきだ。

「お前は、俺が守ってやるから。 大人しく守られろ」

「ああ……わかった」

しおらしく後部座席に座るセレネ。

リオンは吹っ切れていた。セレネが魔女だろうと構わない。

自分が弱くて何もできなくても構わない。

理屈なんて抜きで彼女を守ってやりたいと思った。

（守ってやるよ。俺は、親父とは違うんだ！ 誰一人見捨てたりしない！）

人を殺すのに理由はあるのかもしれない。でも、守ることに理由はないし、あつてはならない。

なぜなら彼は英雄を目指しているのだから……。

今したいことを、正しいと思ったことをすればいい。

その先に何かが見えてくる。

そうすることで“正義を守る英雄”という姿が、いずれ見えてくると少年は信じることにした。

第12章 蒼い騎士（後書き）

少しキャラクターのお話を。

リオンは企画当初よりおもしろきり性格が変わってますw
セレネはそのまんまで……。 何故か不動の少女です。

リオンという名前はたまたま目に止まった「エヴァンゲリオン」の
リオンからとらせて頂きました。はい、適当でごめんなさい。
タイトルと奇跡のシンクロを果たしました。

第13章 月花

天井の岩と地上にある岩が衝突し合う音が鳴り響く。洞窟の倒壊が始まったのだ。

蒼い機体に取り込み、助かる算段を模索するリオンは吠えていた。

「くっそ！ こいつのデバイス、どうなってやがんだ！ なんで、このプロセスで起動しない！ 格納ケースが生きてたんだからお前も動けるんだろ！」

物言わぬ機体は膝を着いたまま、崩れる洞窟の中で主の帰りを待っている。

リオンは、何度目かの起動プロセスをもう一度打ち込む。ピーっというエラー音がリオンの焦りをより一層強くした。

「なんでだ。 何が足りない？」

「ちょっと膝を貸してくれ」

「おい、危ねえから後部座席に……お前」

セレネがシートベルトを外しリオンの膝の上に座り込み、キーボードを占領する。リオンは口を空けたまましばらく硬直していた。少女があり得ない速度で演算していたのだ。モニターにはプログラムと思われる文字の羅列がびっしり表示されている。これだけの量を一度に処理するなど人間技ではない。記憶喪失の少女がこれだけの演算ができるのか。演算するために無駄な記憶を消去したのではないかとさえ思われる。

「お前……わかるのか？」

「何となく。こいつとは相性がいい気がする」

リオンを超える高速の手さばきで、モニターを見ながら何かの処理を続けるセレネ。

コックピット前方の画面に暗闇を映し出す。カメラが起動した証拠だ。その後続けざまに、機体の各部が音を立てて目を覚ます。モニターの中心に大きく“stand by?”の文字が浮かび上がった。

「すげえ……お前は一体……」

思わず目の前に座っているセレネを眺めるリオン。

続けざまに前方のモニターにはコードネームらしき言葉が現れる。それはリオンの見たことのない特殊な文字だった。

「……これ何語だよ？」

「ゲツカ」

「ゲツカ？ そんな言語聞いたことないぞ？」

「違う。月の花……げっか月花だ。こいつの名前だ」

メタルフレームの外では、雨のように岩が降り注いでいる。

幸いにも、リオン達が乗り込んだ“月花”と呼ばれる機体の装甲は厚い。落下してくる岩を次々とその頑強な鎧で全て破壊している。

「月の花……？ おわっ！ これ以上はまずいぞ！ 何とか外に出

ることはできないか？」

「うう……操縦できん」

大きな岩の塊が月花に衝突し、機体が揺れる中、セレネはリオンの膝の上でしょぼくれたようにレバーをガチャガチャと動かす。きよとんとするリオン。時間が止まった。

「嘘だろ？ あれだけ何か処理して、起動までやってのけたのに何で操縦できないんだよ！？ 昼間も村でハンドレット乗ってただろ？ 俺もこんな操縦系初めてなんだよ！ 頼むから動かしてくれ、願うから動かしてくれ、祈るから動かしてくれー！」

「うがうがうが、わからんものはわからん。私を責めるな。……責めるならそゆう時に……優しく責めてくれ」

リオンはセレネの肩を掴んで前後に揺らす。顔を赤らめる少女を後部座席に放り込みリオンは操縦系を見直した。大いに魅力的なお誘いだ、死んでしまえば元も子もない。ハンドレット以上の機体に乗ったことがなかったため、まるで操作がわからない。

明らかにハンドレットより複雑な操縦系である。村にもサウザンドを所有している人物がいれば理解できたかもしれないのだが、今さらそんなことを嘆いても仕方が無い。

「……俺が何とかする。腐ってもメタルフレーム乗り志望だ。何とかしてやるよお！！」

リオンはハンドレットを扱うようにペダルを踏み込む。月花の鎧から隠されていたブースターが飛び出した。

両肩、両足、背中、各箇所につつ収納されていたブースターは倒壊の音に紛れて音を上げる。

「すげえ、これがサウザンドのブースター……跳べるなら、跳ぶしかない！」

跳ぶ先は頭上にある月。月光が流れ込む先に向かって跳躍すれば外に出られる。しかし、格納ケースの爆発で空いた穴は月花より若干大きいぐらいのサイズである。もし、操縦を誤れば、転落し洞窟に閉じ込められる。言いかえると、生き埋めである。

「セレネ、お陀仏にならないように祈ってくれ」

「ああ、もう……死ぬのか。短い人生だった」

「マイナス思考禁止！ 跳べ、月花！」

後ろに乗るセレネに叫び、リオンはゆっくり機体を浮上させたつもりだった。

月花と呼ばれた蒼い機体は、命令を待っていたかのようにブースターを吹かし、勢いよく飛び立つ。岩を砕き月光に向かって最高速度で跳躍する。

惜しみなく六つのブースターを使用した結果、洞窟は二度目の強い衝撃を受けて完璧に崩れ落ちた。蒼い閃光が荒野の夜を流星のごとく流れ落ちる。

リオンの心配をもとめせず、月花は洞窟の天井を突き破り、外の世界に躍り出たのだった。

「うひょー。 見るよ、やっぱお宝じゃねえか。 女達は出てこなかったが新種の機体が出てきましたってな！」

「こいつを売れば女なんて当分いらねえぐらい遊べるぜえ」

脱出したのも束の間、盗賊に包囲される月花。

蒼い羽を目撃した盗賊達が全てこの場に集結していた。その数実に、八つ。神父を斬殺した灰色のサウザンドも中にいた。

新種の機体と言われた月花が捕獲されるのも時間の問題である。村人に過ぎない少年が血も涙もない盗賊達を相手に何ができるであろうか。

「……くそ。 どうすればいい。 どうすれば……逃げられる」

「頭が……痛い」

退路を探すリオン。気持ち悪そうに呻くセレネが気がかりだが、この状況では彼女に構っている暇はない。強い衝撃があったため、どこかで頭をぶつけたのだろうとリオンは、気に掛けないよう心かける。

カーストですら敵わなかった機体が目の前にいるのだ。それに加え、戦い慣れた大人達が自分たちを囲い込んでいるのだ。狼に狙われた獲物の気持ちがよくわかった。羊が狼に勝てるはずがない。

「早く降りろ。 新種の機体は高く売れるからな、できるだけ傷を付けたくないんだ」

盗賊の一人が月花の背中に銃口を突き付ける。いつ引き金を引いてもおかしくない。

「お前らが遊んでる間に女共を見つけたぜ？ 女とこいつを売りやますます、俺たちはますます力を付けれるなあ。 ああ、早く味見

してえ。　今夜は最高の宴ができそうだな。　ハッハハ！」

「何だ……と？」

「リオン、早く降ろしてくれ……頭があ、頭があ！　何かが頭に」

リオンは頭が真っ白になっていた。セレネの声も今は聞こえていない。

洞窟、女達。これから導き出されるものは西の洞窟が見つかったということだ。

「早く戻らねえとボスが先に味見しちまうぜ？　ああ、いい女がいたよな。黒い髪はやつなんて堪まらねえだろ？　泣いてた顔が特になあ」

「あれは俺のもんだぞお！　お前はその隣にいたジジイとやってろ！」

「あのジジイも馬鹿だよな。　大人しくしてりや後5年は生きれたのによ。　何が下衆だっつーの、お前の顔の方がよっぽど下衆だぜ。　アハハハ！」

もう何も感じなかった。

村は炎上……盗賊がここに集まるということは親しい大人達は皆やられたのだろう……そして、姉が隠れていた洞窟までも見つかった……。

何もかも奪われた。

どうしてこんなカスを軍は野放しにしているのだろうか。

どうして静かに暮らしている自分達が攻められて、戦争を起こす首都は攻められないのだろうか。

耐えて耐えて、耐えて耐えて……大人達がここまで村を復興させてくれたのに。

耐えて耐えて、耐えて耐えて……村人との溝を埋めたのに。
耐えて耐えて、耐えて耐えて……幸せを掴みかけたのに。
リオンの中で黒く渦巻くものが溢れ出そうになる。

妾を出せ

「姉ちゃんを……返せ」

「はあ？」

盗賊達がリオンの声に気のない返事をする。獲物からのまさかの一言に笑いが起こった。

「あつはははは！ ばっかじゃねえのか？ 盗賊が盗んだものを返すわけがねえだろ？ そうかそうか、お姉ちゃんがいたのでしゅか」。今日から俺がボクのお兄さんになるからよろしくねえ」

「村を返せ……おっさんを返せ……俺たちの幸せを返せ！ このクズ野郎！！」

もの凄い剣幕で少年が叫ぶ。いつも優しくかった姉、命懸けで自分を守ってくれた大人達。それをこんな連中に奪われた。

目の前のクズ野郎を抹殺できるなら、悪魔とでも契約してやってもいい。生かしておいていい人間じゃない。リオンは生まれて初めて本気で人を殺したいと思った。いや、願った。

「乗ってるのがガキだと思って優しくしてやったらよあ。あんまり調子に乗ってんじゃねえぞ！ 返せだ？ 盗られる方が悪いんだ

ろうが？ 被害者ヅラしてんじゃねえぞガキ！ ……死ぬ」

殺したいのだろう……妾を出せ

「殺したく……ない。止めてくれ私は……あっあ！」

「セレネ？ どうした！？」

セレネが頭を押さえて、リオンの座っているシートを握りしめた。セレネの顔色が悪い。血の気が引いたように青白くなっている。

「しっかりしろ！ おい！ セレネ！」

その時、引き金が引かれた。コックピットに弾丸がめり込み、少年と少女を守っていた機体は爆発する。それがタダのサウザンドであつたならば。

「なんだと……」

引き金を何度も引く盗賊。シールドを貫通するライフルが機体の装甲を突き破らない筈がない。

弾は確実に蒼い機体に当たっている。何故、貫通しない。何故、爆発しない。いつもならば、爆発した骨組みを見て、興奮状態になる盗賊達も焦りから唾を飲み込む。

そして、この機体を心底欲しくなった。

「無粋な挨拶じゃの。妾は完全に目を覚ました。そんな武器では傷を付けることはできんぞ」

後部座席に座る少女が機体各部をモニターで確認しながら言い放

っ。

システムエラーの修正を行い、機体状態を整えている。落下の衝撃で脚部に負担が掛かったため、ポテンシャルダウンしている月花。

「一応、オールグリーンにはなったがの。魔力不足……予備も無し。魔女よ、まだ完全ではないのかえ。召喚してそれはないじやろう。ん？なんじゃ？うるさいのが吠えとるのかや？」

セレネが盗賊のうるさい声を目障りに思いながら、外の様子をモニターに映す。

「ふざけんな！ たかが数発弾を弾いただけで何ができる！ お前は俺たちフェンリルに喰われるんだよ」

「さつきから気になっておったのじゃが、貴様らは本当にフェンリルかや？ とも、彼の気高い狼がするような行動ではないぞ。ハイエナの間違えではないのかえ？」

「嬢ちゃんよ……後で泣いても許さねえぞ……」

幼さの残る声を聞き盗賊達は目の色を変えた。怒りと欲望の目の色だ。

狼が牙を剥きだしにして、月花の周りに身構える。後数秒もすれば跳び付いて、機体をバラバラにするであろう。

「安心しろ。妾も」

貴様達が血の涙を流しても許さない

月花の背後にいるハンドレットがナイフでコックピットを貫こう

とブースターで突進する。対銃火器用の分厚いシールドを構え、速度を上げている。先ほどのライフルもこのシールドの前では何の役にも立たない。

それを振り向きざまに右腕にある杭打ち機・パイルバンカーでシールドごと機体を貫通させる月花。

腕の長さ程あるパイルバンカーの先が手の甲の辺りまで瞬時に引き戻ってくる。そこには汚らしい肉片がべったりと張り付いている。摩擦で焦げた風穴から、蒼い騎士の片眼が邪悪に笑った。

「セ、セレネ……？ どうやって動かしている……操縦系はこっちにあるのに」

「……妾はメタルフレーム、月花。魔女の召喚に応じ、参上致した。しかし、余も腑抜けよの。命令するだけで妾が動くと思っておったのか？ 妾は傲慢な男は嫌いじゃ」

リオンの質問に答えながら、月花は次の獲物に狙いを定める。黄色いサウザンドを視界に捕らえた。ブースターを噴かし、空高く舞い上がり、急降下して頭から食らいつく。

接近させまいと空に向かってマシンガンを撃ち続ける黄色の機体。蒼い機体は石を払うかのように硬く覆われた鎧の腕で弾きながら突進する。左腕を開き狙いを付ける、狙うは一番分厚く設計されたコックピット。

「く、くるなあー！！ げえあつー！！」

「メタルフレームは命令するのではない……」

右腕の杭をコックピットにめり込ませて、リオンに告げた。

「感じるのじゃ、妾らがどう動きたいのか理解するだけでいい。特に妾の場合はな。人間風情が命令など……笑止千万！」

爆煙に包まれた蒼い騎士の兜からカメラの光が漏れる。どこか笑っているかのような邪悪な輝きに盗賊達は脅える。

数秒でハンドレットとサウザンドが破壊された。それも、武装が接近武器しかない機体に。

「くそお！！ よくもドドとグンをお！！」

「ほあく。貴様達にも仲間を思いやる感情があつたのか……以外じゃな」

「セレネ、止める！」

殺す

リオンが叫ぶ頃には発砲してきたハンドレットのコックピットには穴が開いていた。紛れもなくセレネだが、セレネではない。彼女がこれほどまでに残虐に人を殺せるの筈がない。そう信じたい。

「何故止めなければならぬ？ 奴らは“悪”じゃろ？ 悪を殺す者が悪いはずがない」

言いながら機体をバラバラに引き千切るセレネ。手で引きちぎる様子は、例え相手が機械であるとかわかっていても酷い。

メタルフレームの腕に張り巡らされた配線が血管のように、ブチブチと断線し、蛇のように踊りながら、オイルを撒き散らしている。

「どうしちゃった……セレネ……なんでそんなに笑っている。お

前はそんな奴じゃないだろ！ 元に戻れよ！」

愉しい

「アーハハハッ！ 弱い！ 弱いのお！ “悪”は滅びよ。星の汚れは消えよ！ そして、腸をぶちまけて生まれたことを後悔せよ！ 簡単には死なさんぞ」

リオンが必死に操縦系から停止させようと機体に命令を送るが、全く止まらない。操作の仕方わからないのに、どうして止め方がわかるうか。例え止まったとしても盗賊に殺されるだけだ。このまま月花に盗賊を倒してもらうことが、生きるためには最善の選択であることは間違いない。間違いないのだが……。

「逃げろお！ こいつは化け物だ！」

「くっそお、化け物め！」

盗賊達が四方八方に散る。しかし、言うてはならないことを口走った。

化け物？

「妾は化け物じゃない……化け物なんかじゃ……ない……」

「月花ああ！ 止まれええ！！ やめろお！ これ以上、セレネに……セレネに殺させるなあ！！」

少年の叫びも虚しく、月花は怒涛の唸り声を出し、逃げ行く機体を四つとも串刺しにした。

機体から漏れ出たオイルがだくと蒼い機体の腕を緑に染める。時折、痙攣をするようにサウザンドが波打ち、まだ生きている人間を思わせる。

それらをつまらなそうに岩山に機体を投げつける頭部を拳で粉砕し続ける蒼い騎士。

そこに騎士道も何もない。鎧を被った野獣が、その爪で機体の脳味噌を引きずり出し、描き回し、握り潰す。

見るも無残なメタルフレームの残骸が、いくつものパーツに無理やり分解され辺りに散らばる。

「はあ、はあ……逃げないのか？ ハイエナよ」

「止める！ お前も、もう下がれ！！……下がってくれ。殺される……」

「ここまでやられて、引き下がる……わけねえだろうがぁ！！」

ただ茫然と立ちすくんでいた灰色のサウザンドが紫色の鞘を構える。魔科学兵器“カマイタチ構い・太刀”に技術師による疑似魔力が注がれる。鞘がぼつと塵気楼を漂わせた。

「フルパワーで粉々に、粉々にしてやる！」

「厄介な魔科学兵器を持つておるの。構えるだけで敵を斬る。彼の武者の愛刀じゃが、何故、貴様何ぞが手にしておる？ これは何か臭うの……。貴様では斬れるものの限界も知れておるう。そして貴様はその本当の使い方を知らない」

満月の夜、星達が辺りを照らし、風が砂を運ぶこの荒野で。蒼い機体と灰色の機体が対峙する。

騎士と武士を思わせる両機は睨みあい一步も動かない。

「うるさい！　くたばれ！　化け物！」

盗賊が魔科学兵器を発動させる。目に見える程の斬撃の軌道。一筋が交互に絡み合い無数の筋へとなる逃げ込む隙間などない。少しでも触れれば文字通りバラバラである。

その中へ月花は最高速度で突進していく。魔力による燃料の爆発が六つのブースターから発生し、機体が風を切る。

いくら装甲が厚い月花と言え、魔科学兵器の攻撃は弾けない。防火服を着込まずに火中に跳び込むようなものである。

「突っ込むとは、血迷ったかあ？」

「妾は生まれてからずっと血迷っている。血が流れる所に赴き！」

左足に仕込んであるパイルバンカーを地中に埋め込み、突進方向を九〇度変更する。

力任せの緊急回避。されど、接近戦のみを追求した月花の重厚な体を動かすためにはこれしかない。

次に、右足に仕込んであるパイルバンカーを地中に埋め込み方向を正す。直角に何度も機体を動かせて、蛇が地面を這うように急接近する。

月花の脚部がねじ切れないのは、胴体と同じ素材で構成されているからであり、元来このように使うことを想定した造りだからだ。

古代兵器屈指の接近戦用メタルフレームに近づけない敵はいない。

「くっ！　これならどうだ！」

「血を吸い！」

盗賊の更なる斬撃の群を大胆な回避運動を駆使し、紙一重で避ける。リーダーに写らない暗殺剣は、月花には見えていた。目標は敵のコックピット。

「ひい！」

「血を流し！ 血に飢えていた！」

蒼い機体の六つのブースターは常に最大出力。最大出力を維持しないと脚部によるパイルバンカーの回避行動は意味をなさない。速度が落ちれば回転が遅過ぎて機体が真つ二つになる。

月花は地を走る流星のごとく接近をする。

「だから……人は妾を封印した！ だが、星は妾を必要としている！ 星の願いは“悪”の消滅！ 魔女は我々の仲介者！ 人間何ぞが踏み入れている領域ではないわ！ 下種^{けす}は滅びるがいい！」

月花の間合いに入ったサウザンドは祈るしかない。メタルフレームが慈悲の心を持っているということ。

盗賊が目をつむる。しかし、衝撃が来ない。

「う！ あっ？」

盗賊のモニターには月花の姿は無かった。

次の瞬間、モニターが割れる。

月花は、敵を通り過ぎた瞬間、左足のパイルバンカーを地中に埋め込み、地表を滑るように回転し、渾身の右腕による一撃を背後から灰色の武士の首元にめり込ませた。

武士はそのまま吹き飛ぶが、吹き飛ぶ瞬間にパイルバンカーが射

出されそれを阻止される。まだ、終わらないということだ。

月花は串刺しになった機体を片腕で持ち上げ、左腕のパイルバンカーで何度も何度も機体を貫いた。

盗賊は目の前を通過する巨大な死の杭を見て、叫び声を上げ続ける。

蜂の巣のようになった灰色の機体は完全に機能停止した頃、パイロットは放心状態であった。

爆発しなかったのは、月花が爆発しない個所を狙っていたからであらう。

「月花……もう止めてくれ」

「マ、リ、ア、はどこだ？」

「あああ……あ！」

苦しげに声を絞り出すセレネと裏腹に、月花は機体を地面に叩きつけて足を乗せる。脚部のパイルバンカーが怯える盗賊を剥き出しにした状態のコックピットに当てられた。

もう椅子しか残っていない。

「魔女よ、其方そちは下がっておれ。 魔女の言葉では伝わらんようだから、言い方を変えてやろう。 貴様らが捕まえた女子達おなこはどこじや？」

「女たちなら、岩山だあ……岩山の側にい」

言い終わる前、生身に杭を打ち込まれ、地面が決れる音と共に盗賊はこの世を去った。

すぐさま、月花は西の洞窟へ去る。

幸い土煙でモニターが曇ったため、盗賊の最期を見ずに済んだりオンだが、震えが止まらない。茫然と眺めている画面には、“mission start”と書かれているのだ。まだ、殺し足りないらしい。

セレネの表情は、もう見れない。こんな惨事を見て笑う彼女を見たくない。

鶏を見て優しそうに笑う彼女はもういない。

彼女は今、幾つもの戦場を駆け抜けて、岩山に封印された血に飢える蒼い騎士になっている。

彼女は、メタルフレームの意志を呼び起こし同調している。

蒼い騎士が任務を終えるまで、彼女は身が弾けても笑い続けるだろう。“悪”と称する人間をその腕で串刺しにして。

その日、彼女はメタルフレームになった

第14章 兵器の息

セレネ（月花）は止まらない。西の洞窟に辿り着き、盗賊の本隊が一斉に攻撃を仕掛けてきた。

しかし、月花は止まらない。

「妾を討ち取りたいかや？ それならば、今の3倍の戦力を用意することじゃな。これでは、弱い者苛めをしているようではないか」

高速で接近する蒼い機影に対処できずに、前線のハンドレットが3機破壊された。

田舎村と舐めて掛ったことを後悔する盗賊達は、全勢力を持って蒼い機体を破壊しようと火力を集中させる。

「月花、もう止めてくれ！ これ以上殺すな！ こんな一方的な戦闘……」

「たわけ！ 兵器に殺すなじゃと？ お前は息をすると言われて息を止めれるのか？」

リオンは今となっては面影がなくなったセレネに懇願する。しかし、月花はそれを拒否した。

「そんなこと……息をするのと、これとでは！」

「同じじゃよ……妾のような兵器はな。殺している時が一番自然なんじゃ。殺さない兵器など、息が出来ない人間同然。欠陥品

じゃ」

言いながら月花は、5機目の機体から両腕の杭を引き抜く。爆風を受けてそのまま次の獲物に跳びかかる月花。それはもはや騎士ではなく、暴君というべき殺戮の舞이었다。

「勘違いしておるようだから言うておく。妾はこの魔女と契約しておるのじゃ。お前ではない。魔女との利害が一致しているから力を貸してやっておるだけのこと」

セレネの声で月花が契約について説明した。

機体を操る少女は後部座席で、座っているだけだが、月花自身が機体を動かしているため問題なく戦闘が続けれる。彼女が月花の意思を召喚していると言ってもいい。

今回は自分の身が危ないと感じたため、月花が一方的に些細な契約に応じたそうだ。

そして、セレネはメタルフレームの意志をリオンに伝える翻訳機のようなものとなっている。

無論、召喚者セレネの意見・願いも多少なりとも理解しているとのことだ。

「セレネは何を望んでいるんだ？　そして、お前の望みは？」

「お前たち村人を助けることじゃ。それ以外は特に望みはなかったな。無欲なやつのお。妾にとっては”悪”を消滅させることができれば何でも構わなので、加勢しておるだけよ。今回は自分の身を守れば何でもよかったんじゃが、魔女が女子達も助けたいと言うもんでな」

セレネの体に乗っ取り、機体が暴走していると思いこんでいたりオンにとって意外な回答であった。遠まわしに月花を召喚したセレネは、殺戮を許容していることになる。村を襲ってくる盗賊達には殺意を覚えたりオンだったが、目の前で虫を殺すように杭で人を貫く月花の行為は純真な少年の目に余るものだった。

荒野に目をやると、脅えた村人達が蒼い機体を見ている。

盗賊達を追い払っている月花は神には見えなかったらしい。残虐にも戦闘不能になった機体のコックピットまで鉄の杭で貫いているのだから、真つ当な人間がみればただの殺戮者である。次は自分達ではないのかと肩を震わせるのも無理はない。

「これは……正しいのか」

「“悪”を殺す者が正しくないわけがなかるうに。そんなこともわからんのか？ お前は本当に阿呆じゃな」

次々と爆発していくメタルフレーム。残ったのは無駄な装飾だらけの黄色い機体。盗賊達のボス・グッソの機体である。この盗賊は決定的なミスをした。慌てて逃げようとしたため、人質というものを回収し忘れたのだ。盾が無ければあの機体は止められないことは重々承知しているが、もう人がいない。

「待った！ 待ってくれ！ 降参だ、女達も食料も全部返す！」

武器を捨てて、降伏を主張する盗賊。リオンはその行いを見て虫唾が走った。謝れば何でも許されるわけがない。村を焼き、大人達の命まで奪い、姉達を弄ぼうとした。月花ではないが、“悪”を殺す者は悪くないとさえこの瞬間だけと思う。

「降伏するのかや？ 根性の無い男じゃな」

「あんたに勝てる気がしない。 身を引くのもお頭の役目だ」

何故それをもつと早く行わなかった。 何故、周りの手下が絶命してからそれを行う。 お前を信じた仲間達が一体どれだけ殺されたと思っっているんだ。

リオンの心は徐々に吐き気がする程にまで、怒りで溢れていた。 側にいて止めることができなかった自分も悪い。 だから、何も言えずにただ拳を握ることしかできない。

「そうか……でも、妾は弱い男は嫌いじゃ」

死んで詫びよ

パイルバンカーが機体を貫こうとした瞬間、月花は止まった。

黒い髪をした女性が盗賊の機体を守ろうと地上から腕を広げていた。

「もう止めて！ この人はもう戦えない！ これ以上殺さないでえ
！」

肌けた服に構わず、マリアが蒼い機体に叫ぶ。 セレネの願いにはマリアの保護も含まれているため、杭を射出できない。 もし、放てば爆発に巻き込まれて殺してしまうことになる。

「姉ちゃん！ 何してんだ！ 早くそこをどけ！ ここは危険なんだよ！」

予想外の声にマリアは耳を疑った。 弟があれに乗っている。 人を殺

していたのは弟なのか。そんな疑惑が頭を垂れる。

「り、リオン……が乗ってるの？ 女の人に乗っていたんじゃない……まさか、セレネが？」

ペタンと腰を落とし、放心状態になるマリア。今すぐ降りて姉を抱きとめてやりたかったが、それは叶わない。まだ、戦いは終わっていない。ここで下手に動けば月花の足を引っ張ることになる。恐らく、強制ロックがかけられているため、出ることもできないだろうが。

一方で、盗賊としては、願ってもいないチャンスであった。人質が自分から人質になりに来たのだから、神を信じたくもなる。

「へ、へへ……」

盗賊がマリアを拾おうとしたが、月花からの一言で動きが止まる。

「その女子に触れてみよ？ お前の骨を一本ずつ剥ぎ取ることになるぞ。ゆるりと時間をかけてな」

盗賊は逃げた。

何も考えずに逃げた。命があるだけマシだと言い聞かせて。

まだ追いかけてトドメを刺そうと動いた月花だったが、強い頭痛に襲われて行動不能に陥った。

（フツ……魔女よ、従順なやつかと思えば意外と強情なやつよ。妾の記憶は見れたかの？）

「姉ちゃん！ 大丈夫か？ しっかりしてくれよ！」

「リオンだよね……うつつうつつ」

荒野に降り立ち、涙するマリアを抱き締めるリオン。服を整えながら、怪我をしていないか確認する。村は駄目だったが姉は無事だった。それが何よりも嬉しい。しかし、村人の反応は違った。

「悪魔よ……」

「リオンが……これを全部……」

「いや……あの昼間に来た子よ。あの子が悪魔なのよ」

コックピットから顔を出したセレネは、気まずそうに俯く。

自分が何をしたのか薄っすらしか記憶にない。だが、この惨状を見ればだいたいの見当はついた。

（私が……殺したのか）

荒野に降りて、砂利を踏みしめる。セレネは夢を見せられていた。蒼い髪の少女がここではないどこかで、メタルフレイムの軍勢を虐殺している夢を。

隣に座っていた人の顔が思い出せない。いつも頭を撫でてくれていた大きな手の持ち主。あれは一体誰だったのだろうか。

少年と少女のおかげで、助かった村人も大勢いた。しかし、強大過ぎる力を前に村人は畏怖する。また、溝が深まった。もう、修正が不能になる程にまで。

荒野に爆発音が響く。

それは少年の心に突き刺さるかのように、深く、冷たく、悲しげな音だった。

第14章 兵器の息（後書き）

次は最後に爆発音がした理由を書きたいと思います。
脱線する予感ですよ、気を付けてください。

第15章 嫌悪と憎悪と絶望を

崩壊した洞窟周辺には変わり果てたメタルフレームの姿が残っている。

惨状の原因である蒼い機体は西の洞窟に向かったため、静かなものである。

「ああゝあ。彼女を怒らせたね。せつかく僕の魔科学兵器を貸してあげたのにこれじゃ……ねえ」

ターバンを巻いた青年がサウザンドと思われる機体から顔を出した。彼はここでの一方的な暴力を眺めていたのだ。今頃、現れたのは、盗賊に貸した魔科学兵器を回収するためだ。

剣に絡まる蛇の入れ墨をチラつかせながら、両手を広げてメタルフレームの墓場を見渡す。

「しかし、噂に違わぬ強さ……あれだけの強さを持っていれば世界は変わるよ。そう思うだろヘリオス？ まさか、ここに眠っていたなんてね」

青年は機体の奥に座っている誰かに同感を求めた。

「私は……殺すことが正しいとは思わない。あなたは殺し過ぎた」
「またまた、ちょっと神父さんが困ってたから真実を教えてあげただけだよ？ あの子は魔女ですよってね？ ちょっと暗示魔術も使ったけど、よっぽど魔女が憎かったんだねゝ君の魔術ならいざ知らず、僕の魔術であそこまで信じ込むなんて。そんな神父に同情するなんてヘリオスは優しい子だね」
「あなたは心が痛まないの？」

「痛むよ？ そりゃ僕だつて、まさかこんなことになるなんて思っ
ていなかったよ。 でも、世界を救うなら殺すしかないよね？ 僕
は君と契約したんだよ？ 世界を救うために“悪”を葬り去ること
はいいことなんじゃないかな？」

穴だらけの灰色のメタルフレームから魔科学兵器「カマイタチ構太刀」を手
に取り、腰に付けるメタルフレーム。

そのメタルフレームは紅であつた。血を伸ばしたような紅に墨を
練り込んだような黒。鎧武者のようなその外見に紫色の鞘は実に一
体感がある。

「やっぱり、これを貸すんじゃないかな。 月花が相手じゃ何を
使つても死んでただろうし、マシンガンでも渡しとけばよかったよ。
あ、僕がこれを貸してあげたのも彼が生き延びる可能性を高める
ためだよ？ ってことは、僕はやっぱり人が死ぬのが堪らなく嫌
なんだよ。」

「あなたが魔科学兵器を下っ端のあの人に預けたのは、反旗を翻さ
せるため……盗賊団同士で殺し合わせるためでしょう！？ 弱つた
神父さんの心につけこんで、魔女騒ぎを起こして！ そんなに人が
殺し合う所が見たいの！？」

コックピットの中で少女の怒りが響く。この青年は殺し合いを愉
しんで見ていた。蒼い機体、月花がパイルバンカーを機体に何度も
貫通させていた時、彼は愛しい人を見るような目で眺めていた。

「まあまあ、落ち着いてよヘリオス。 僕も君の役に立ちたいんだ
よ。」

「それじゃ、もう人を殺さないで……！」

涙を堪えるように悲痛の叫びをあげる少女。両手でメタルフレームの残骸を視界から隠し、肩を震わせる。

「それじゃ、君の使命は達成できないよね？ まさか、放棄しちゃうの？　ここまで来て？　泣き叫ぶ子どもたちを踏みつぶして、町を破壊して？　今さら辞めちゃうの？　君に殺された人たちは気の毒だな。今やめちゃったら、君の娯楽で殺されたようなものだよ？　あの時は、星のために殺すしかなかった。でも、今は飽きたから殺さないなんて……君は最低だね」

青年の黄色い眼が少女を貫く。にやりと悪質な笑みを浮かべて舐めるように少女の全身を見る。

太陽のような長く長い髪、宝石のような紅い瞳、締まった白い色の体が魅惑的なラインを作り上げている。

「違う！　……私をそんな眼で……見ないで……下さい」

「君は何をされても僕には抵抗できない。僕が主導権を握っていることを忘れないでね。可愛いヘリオス、僕の……魔女」

脅えて眼を瞑る紅い髪の少女を愛おしそうに撫でる青年。少女は抵抗しない。この少女はこの少年にだけは抵抗できないのだ。

「さあ、用は済んだし、早く帰ろうか。怖い黒い騎士様が来ないうちにね……おっと、もう来てたんだ……」

紅い武者が振り向く。

その先に騎士はいた。

全身が黒のサウザンド。憎しみ、怒り、憐れみなどあらゆる感情が合わさって最終的に生まれた感情^色。マイナスの感情を全て内包した黒が佇んでいた。

銃火器などは一切ない。あるのは背中に背負われた巨大な両刃剣
ただ一振り。

「ソレを返せ……」

低い声が漆黒の機体から漏れる。氷のような冷たさを含んだ声。
真つ当な生き方をしていれば、このような声は出せないであろう。

「ゼロ!？」

「“それ”とは随分な物言いだね、ゼロ？　女の子をそんな風に呼
ぶと嫌われるよ？」

「俺に……名前など無い。　あるのは嫌悪と憎悪」

ゼロと呼ばれた男は、漆黒の機体に嫌悪と憎悪の象徴である血塗
られた両刃剣を背中から抜かせる。

「そして……絶望」

機体の等身程ある剣を一振りして、紅い武者に切先を突き付ける。
漆黒の騎士が死の宣告をした。

「侮らないで欲しいな。　残念だけどヘリオスは今、僕のパートナ
ーなんだ。　都心では随分暴れ回っているようだけど、今の君では
勝てないよ？　何せ、魔女を味方に付けた」

青年は手の甲にある蛇と剣の入れ墨を一目見て、由々しげに微笑
む。

武者は紫色の鞆に魔力を送り、構える。　鞆の中は空。　されど、
一步接近すれば音速の斬撃で首が跳ね飛ばされる。　遠い島国で、
迎撃用に使われた居合を昇華させた機体がここにいる。

機体の名は焰^{ほむひ}。焰の手に返った鞘は膨大な魔力により、斬れ味を増している。この武者に斬れないものはこの世に存在しない。そして、この魔科学兵器に射程というものはほとんど意味をなさない。例え、数十メートル先の風車でも動かずに切断することが可能である。近づく前に分解された者は万を超えている。無論、生身の間もその数に入る。

「凄い破壊力だよ？ 君も、分解されてみるかい？」

武者が声を放って刹那、岩山が吹き飛んだ。大きな鉄球にでも直撃したこのように麓から決り取られている。

この圧倒的な破壊力を見せられても、漆黒の騎士は動じない。むしろ、斬撃が山に至るまでの秒数を数えていた。

「約一秒……」

呟きながら両刃剣を降ろし、両手に持ちかえる。途端に、両刃剣が二本の剣に組み換える騎士。一撃の破壊力と流れるような連撃を実行する両刃剣よりも、圧倒的な手数で打ち負かす二刀流に戦闘スタイルを変えたのだった。

「それで？ 剣を二本にしてどうするのかな？ お手玉でもしてくれるの？ 別に僕は、君の芸が見たいわけじゃないんだよ。まさか、斬撃を受け止めるなんて言わないよね」

「お前を殺す」

言つや否や、ブースターで急接近を試みる騎士。黒い弾丸のような速さ。サウザンドの規格を明らかに無視した速度で、紅い武者に接近する。

「フン、斬り刻めえ……構太刀いい！」
カマイタチ

青年の叫びに呼応するかのように、斬撃の群れが黒い騎士に襲いかかる。それに対抗するかのように騎士は言葉を紡ぐ。

「アインス 嫌悪の剣・ツヴァイ 憎悪の剣」

火花が散る。あろうことか、騎士は二本の剣で予測不能の斬撃を相殺している。メタルフレームの限界を超えていた。剣筋を認識しているのではなく、感じている。直感で危機を感じ取り、薙ぎ払う。彼は最適の行動を最速で行っているだけだった。数十という斬撃を二本の剣で受け流す。騎士は最後の三連撃を低い姿勢で払いのけた。これが死神と呼ばれた男の強さ。

これが悪魔と呼ばれた機体の強さ。

そして、“嫌悪と憎悪の魔科学兵器”の恐ろしさ。

騎士は片膝を付け静止、武者は鞘に手を置いたまま静止。手を伸ばせば届きそうな位置に両者はいる。

暫しの静寂。

荒野を抜ける風だけが、両者の間を通り抜けることを許された。

「へえ……以外。魔女の補助なしでそこまで動けるんだ。やっぱり君はすごいね、ゼロ。昔からそうだったね。何でもそつなくこなす……ハッキリ言っとうざいよ」

青年から憎しみを込めた声が漏れる。

そんな言葉も聞こえていないかのように、剣を武者の目の前に突き付ける騎士。

まるで、「お前の負けだ」と言いたげな騎士の態度に青年は怒りを露わにする。

「僕はまだ、本気じゃない！ 魔女を使役した僕が本気を出せば山の二つや三つ簡単に吹き飛ばせるんだ！ お前なんか、このネロが負けるものか！ 劣るはずが無い！」

「お前に用はない。 ソレを渡せ」

重たげに騎士が呟く。ネロと名乗った青年がどれだけ山を吹き飛ばそうが、目の前にいる騎士の首は吹き飛ばせなかった。ヘリオスという魔女を味方に付けてもなお、ゼロという騎士と互角なのである。本来の実力差をありありと見せつけられ、ネロは声を上げたのだった。

「お前があ！ お前が！ 弱いから！ ちゃんと魔力を送らないから遅れをとったんだ！ 僕があいつに負けるはずがないだろ！？」
おい！？ 聞いているのか！！」

「これ以上の戦闘は無意味だよ……離脱準備……」

ネロの言うことをなるべく聞かないようにしてヘリオスが操縦系を奪い、武者を退却させる。漆黒の機体はそれを逃すまいと追撃に出た。

まずは右足を切断しよう左腕の剣を垂直に振る。

紅い武者は紙一重の跳躍で斬撃を逃れた。しかし、まだ攻撃は終わりではない。剣を振った勢いをそのままにして、両刃剣に組み換えた騎士は、一回転して逆袈裟斬りを行う。

早過ぎるその剣筋は紅い武者の胴を両断したかに見えたが、寸前の所で鞘による防御で難を逃れる、

「出力全開！」

「チッ……」

両手で構えられた鞘は光を放った。

ヘリオスの叫び声に反応し、咄嗟にその場から離れた黒いサウザンド。ギロチンのように落下してくる剣筋を寸前で避けた。土煙が登る中、紅い武者は離脱していく。

“lost”という文字をモニターで確認したゼロはつまらなそうに剣を背中に背負い、メタルフレームの墓場を去る。

ウインド村の西に位置する洞窟付近で、蒼い機体が盗賊の残党を破壊していた。

ボスと思わしき装飾の派手な黄色のサウザンドが蒼い機体に追い詰められている。後は周りに朽ち果てている機体と同じようにあの杭打ち機で穴を空けられて終わりだろう。

しかし、どうゆうわけかトドメを刺さない。あげくの果てに、盗賊に逃げられるという始末である。

黒い騎士はすぐさま、進路を変更した。

×××

盗賊の親方・ゲツソは必死であった。

得体のしれない蒼い機体に一味を壊滅させられたのだから立つ瀬が無い。フェンリルという伝説の盗賊団の名前を盗み、悪事を働いて来てこれほどついていなかったことはない。

どうして自分がこんな目に合わなければならぬ？今夜は活きのいい村娘でたつぷり愉しむはずだったのに何故こんなことになった？全て、あの蒼い機体のせいだ。

どこからともなく現れ、手下達を串刺しにしていた。たった一機であれだけの数を……。

「じよ、冗談じゃねえ！俺はまだ名を上げていないんだ！これからの男なんだ！こんなところでくたばってたまるかあ」

その通りである。だから、幸運にも一人だけ助かることができた。手下はまた集めればいい。フェンリルの名前を出せば、馬鹿な連中がすぐさま集まる。そうして力をつけて、あの蒼い機体に復讐を……ふ……くしゅ……うを。

何故だか機体が倒れた。どうやら脚部が無くなったようだ。そして、カメラが明確に捉えていた。漆黒の機体……見てはいけない死神を。

「嘘だろう……ああ、ああああ！　なんでこんな所に帝国の悪魔が！」

背中のブースターだけを噴かせて地面を滑るグッソの機体。彼の必死の努力も虚しく、黒い騎士の目の前をグルグル回るだけで全く前に進まない。

両刃剣を構え、死の宣告を告げられる。

「お前に嫌悪と憎悪……そして、絶望をくれてやろう」

盗賊の断末魔が途中で消え去り、音も無くコックピットを貫通した剣。

爆発音が夜空の荒野に鳴り響く。

それは、黒い騎士の胸の内のように深く、冷たく、悲しげな音だった。

第16章 二粒の雨

焼け崩れた小屋を目の前にした。

振り返ると普段は見えない広場が一望できる。カーストの家が崩壊しているため、最初はここが自分の家だと気が付かなかった。こんな骨組みが剥き出しの我が家は今まで見たことが無かった。

村の地形は意外な程デコボコしている。知らない土地に足を踏み入れたのではないかとさえ思う。昨日まで、人が暮らしていたとは想像もつかない荒れた土地。どこからが村で、どこからが荒野なのかを判断するものは土の色だけだ。

「リオン……」

セレネがリオンの背中を眺めて悲しそうに呟いた。

リオンは今何も考えていない。考える余裕が無かった。

「……親父。あんたのガキも結局、同じことをしたよ」

魔女と呼ばれる少女と父の眠る山に逃げ込み、最後には村が焼けた。父親とは違うと言い聞かせていた自分は結局、何も守れなかった。

ただ一つだけ違うことがある。村を救ったのが帝国軍ではなく、側にある蒼い機体であったということだ。

これはとんでもない兵器だった。たくさんの人間を殺したが、村人が生き残るためには仕方がないことだったのかもしれない。それでも、それが正しいかなんて少年にはわからない。

殺さずに盗賊団を退けるだけの力が月花にはあつたはずだ。それなのに月花は殺した。人間を“悪”と言い、星を守ると叫び。

「なあ、セレネ。お前は親父のことを知っているのか？ あいつが何をしようとしていたのか知っているか？」

「すまん、私にはわからない。お前の父親と私が関わっていたとしても、今の私にはそれが思い出せない。カーストや神父が言っていたように十年前に私が村に来たということも思い出せない。

私は私のことがわからないんだ」

すまんと謝るセレネ。それに対して謝るリオン。

リオンは月花を見上げた。

「生きるって大変なんだぜ？ 人間恨んでるなら殺すよりも生かす方がよかったと思うけどな？ 機械のお前にはわからないよな！ おい！ 答えるよ！」

物言わぬ機体に嫌味を言う。あれつきり月花はセレネに乗り移らない。

月花は召喚と言っていた。喚起ではなく召喚。

召喚とは超越的存在（神や天使など）に呼びかけ、来臨を願うことだ。

喚起とは下位存在（四精霊や悪魔など）に命令して、呼びつけること。

月花は超越的存在であるということが、ここからわかる。しかし、超越的存在があれだけの虐殺をするだろうか。あれでは悪魔だ。とても神や天使の類ではない。呼び寄せたセレネ自身も何故、月花が呼びだせたのか原因がわからないままだ。

そもそも、召喚陣が無いのに召喚魔術が行える時点で異常なのだ。いくらセレネが魔女といっても術式がわからない魔術が使用できるだろうか。

あいにく魔女の知り合いはセレネしかいないためその点は不明だ。魔術に対して無知の自分が恨めしい。

「謎ばかり残しやがって！」

やり場のない感情を地にぶつける。

言うまでもないが、生きる方が大変なのだ。魔女狩りのために村に残っていた男達のおかげで、奇跡的に救出されたカーストとトングだったが、メタルフレームによる激戦が繰り広げられる中、安静にする場所が見つからず西の洞窟に運び込んだ頃にはトングが息絶えていた。

トングの妻はこれから生まれてくる女の子を一人で育てていかねばならない。住む家も財産も何も無い状態で、子育てをしていくことになったのだ。一瞬で殺してもらえた盗賊よりも、明日死ぬかもしれない状態で生き続ける村人の方がどう考えても辛い。

生きていれば何とかなる。それは身の安全が保障されている状態で初めて効力を持つ言葉。どれだけ懸命に生きていても明日死ぬかもしれないし、一時間後に死ぬかもしれないという不安の中では何を言っても偽善にしか聞こえないだろう。

昨夜は酷かった。

脅える者、家族を探す者、死のうとする者さえ現れた。その中で命からがら生き延びた者もいたが治療する術がなく息絶えた。トングはその一人にしか過ぎない。

盗賊達から取り戻した食料でしばらくは過ごせるかもしれないが、夜の寒さを防ぐ家がない。洞窟で風は防げているが、5日間も暮らせば体の弱い人から倒れていくことだろう。

共和国軍へ救援要請を出したため、後数日すれば軍がこちらに到着するだろう。

領土という建前上、何かしらの援助はあると思うがどこまでしてくれるかわからない。

「戻ろう。ここには何も無い。これだけ見回って誰も見つからないんだ……」

セレネが少年の肩にそつと手をやる。セレネとてここに長く居たくなかった。

自分には力がある。しかし、使い方がわからない。さらに、守る力ではなく、侵す力しかない。使えば使う程、人々から笑顔を奪う力。

記憶が戻ればこれらの悲劇を打破する奇跡の魔術を使用できるかもしれないが、相変わらずメモリーは空だ。悪魔と契約した魔女とはよく言ったものだ。

魔術が使えない魔女に存在価値はあるのだろうか。

自分が魔女であるということはもう理解した。しかし、何をするべきなのかわからない。

セレネはリオンを月花に乗せて、西の洞窟まで戻った。

月花が体を使用してから、セレネは自然とこの機体の操作がわかるようになっていた。と言っても、昨夜のように一機で盗賊団を仕留める程の操縦技術はない。せいぜい移動させるぐらいの理解である。

洞窟に戻ると赤ん坊が泣く声や、子どもたちが喧嘩する声が鳴り響いていた。疲弊した心にこのノイズは好ましくない。

大人達も徐々に余裕が無くなってきている様子がヒシヒシと伝わってくる。

「また泣いているのか？ いい子だから静かにするんだ。あ……」

セレネが頭を撫でようと一歩赤ん坊に踏み寄ると、母親が一步下

がる。足を震わせ、今にも赤ん坊を持ったまま崩れ落ちそうである。彼女は生で見ていたのだ、月花が盗賊を串刺しにする瞬間を。

「また泣いているのかい？ 私に貸してごらん。ほら、どうしたのさ？ お母さんがそんな顔してたら、この子だって不安になるだろ」

ナタリが間に割って入り、何事もなかったかのように赤ん坊をあやし始めた。

「セレネ、そんな怖い顔してちゃ子どもはあやせないよ。笑いな。アンタは可愛いんだから笑っている方がいいんだよ。そうだセレネ、お腹減っただろ？ ご飯あるから食べておいで。あ、食べ過ぎちゃだめだよ？」

赤ん坊を抱き抱えながら笑顔を向けるナタリ。セレネはこくと頷いてその場を去った。

パンと牛乳そして、握り飯が皿に置かれていた。恐らく、握り飯はナタリがセレネのために余分に付けてくれた貴重な食べ物だ。月花を使って救助作業をしたり、怪我人を何度もこの洞窟まで搬送したため、セレネは疲労が溜まっていた。物を食べる時間すら無かったので、食べ物を見ただけでよだれが垂れそうになっている。ふと目をやると、隣から物欲しそうに女の子が食べ物を見つめていた。

「く、く、食うか？」

今度はできるだけ笑顔を心掛けて声をかけるセレネ。四、六才と思われる女の子は首を何度も縦に振り、きらきらした目できこない笑みのセレネを見た。

「食べていいぞ……私は腹が減らないんだ」
「まじよ」だから？」

ボロボロの服を着た短髪の女の子が強張った顔のセレネをまじまじと見て聞く。

「そうだ、私は魔女だからな！」

「なら、わたしも“まじよ”になりたい。もう、お腹減るのいやだもん」

手に腰を当ててセレネが威張る。

女の子は無邪気に笑ってセレネの側に座り込み、パンを小さくちぎって食べる。セレネは、懸命にパンを食べている女の子の姿を見ながら頬が緩ませた。

が、気を抜いた瞬間、きゅるるとお腹が鳴る音が漏れる。

「ああ！ うそつきだ！ お腹減ってるう！」

「ああ、嘘だ。本当は死にそうなぐらい腹ペコだ、半分くれ」

女の子は首を横に振って、パンをセレネの口に突っ込む。

「んが、たべえないのかあ？」

ふごふごとパンを口にくわえたまま女の子を見る。

「だってえ、お姉ちゃんがお腹減ってないって言うから食べてあげようとおもっただけだもおん。お腹減ってるなら私はいらないもおん」

セレネのように口を膨らませてふて腐れる女の子へ、握り飯をお返しとばかりに口へ突っ込む。

「おあん！？ んがんが」

「んが、んうんが」

「お前ら、何やってんだよ？」

呆れた口調でリオンが間に入る。手にパンと牛乳を持っている様子から、食事を取りに来たということだろう。

「「んがんががああ、あつ」」

「物を飲み込んでから喋れ、窒息すんぞ？」

少女二人の頭に弱めのアイアンクローをかまし、リオンは笑う。

まだ、村の平和だった頃の気持ちはここにある。この気持ちがある限りウインド村は無くならない。リオンはこの少女達を見ていると少し希望が持てた。

「こおら、女の子を苛めちゃダメでしょ？」

リオンの頭が本家本元のアイアンクローに捕まれる。両手で。

「いだい いだい いだい！ 姉ちゃん、なんで両手なんだよ！？」

「割れるかなあと思って……」

「俺の頭をリングとか何かと思ってるだろ！？ 弟にする仕打ちじゃねえよ」

照れ笑いをするマリアが頬に指をついて首を傾げる。

弟の影で顔がよく見えていなかった女の子に目がいき、マリアは溜息を吐いた。

「サキちゃん、神父さんが言ってたことちゃんと覚えているかな？」

マリアは女の子の名前を呼んで同じ目線まで腰を降ろし、今は亡き神父のように聞いた。

「おほしさまになるために人は生きるんだよ」

「そう、そうだね。サキちゃんのお母さんね……お星様にね、なつたんだよ。だからね、褒めてあげ……ようね」

マリアはサキを抱きしめて泣くのを堪えた。「えらいえらい」と楽しげに口ずさむこの子の家族は、もう誰も残っていない。さつき程、看とった母親が唯一の家族だった。この洞窟では大きい怪我の治療はまず不可能だ。痛み止めがないまま、壊死した足を切るわけにもいかないし、誰もそんなことできない。神父が生きていれば、少しは死者が減らせたかもしれないが後の祭りである。

リオンは、マリアが泣いているのが見てとれた。泣き顔を見せまいと洞窟の壁側を向いてサキを抱きしめているのだ。

しかし、肩の震えや鼻をすする音はマリアは隠し通せなかったらしい。

「姉ちゃん、ちょっと相談があるんだけど……」

深刻そうな顔をしたリオンが首を洞窟の外に向けて合図を送る。振り返った姉はいつも通りの笑顔だった。

「ん？ どうしたの？ 改まって」

外は相変わらずの青い空と強い日差しだった。村は無くなってもこの風景だけはそのままである。

マリアはある予感をしていた。リオンが左上に視線を泳がせているからだ。

「あのさ……俺さ　村、出るよ」

この言葉はマリアが望んでいなかったことなのだろう。笑顔が一瞬で凍りついたのだ。しかし、受け入れさせるべきなのだろう。リオンはもう一七歳だ。旅に出るには遅すぎるという人もいるであろう。

「いいんじゃない？　リオンの人生はリオンのものだよ。　お姉ちゃんのことには気にしないで大丈夫だから」

凍りついた笑顔をどうにか解かして、突き放すように言葉を発する姉。

今では背伸びをしないと手が届かなくなってしまった弟の頭を見ながら遠い目をするマリア。父親が生きていた頃、姉の後ろに隠れていて頼りなかった弟は、母親が死んで以来変わった。

何かを守ろうと、守りたいと頑なに英雄というモノを追いかけるようになったのだ。姉を追いかけていた男の子は、自分の夢を追いかける男になったのだ。

姉は追いつけなくなれば手を貸してくれる。しかし、夢は手など貸してはくれない。

姉を追いかけることから卒業できた弟と姉の距離はちょうど頭一つ分程度だ。弟が少し大きくなり姉がぬかされた。これからもそれは変わることが無い。

「リオン、大きくなったよね。　昔は、私の背中に隠れれるぐらい

だったのに……今は私が隠れちゃう」

「姉ちゃんのおかげだ」

旅立つ彼には向かう場所がある。だが、帰ってこれる場所はない。

「帰ってこれる場所がなくなっちゃったね」

「ウインド村は、ずっとここにある。人が生きている限り村は無くない」

泣きそうな声でリオンが声を上げた。

その言葉を聞いてマリアは何かを決心したように優しく微笑む。

家も金も何も無くなってしまったが、彼が帰ってくる場所をここに作り直すことはできるのだ。また、十年かかるかもしれない、また盗賊が来るかもしれない。しかし、ウインド村の人間がいる限りこの場所はウインド村なのだ。

軍が整備してくれば、また住めるようになる。仮に今は共和国領土なのだから、何もしないということはないだろう。それに盗賊に襲われたことは紛れもない事実。盗賊が野放しにされていて、村に何の援助も無かったこと今までの扱いを本部から送られてくる軍人へ指摘すれば、今より待遇はマシになるかもしれない。

「姉ちゃんも旅に連れて行きたい。でも、また……危険な目に合うかもしれない。姉ちゃんにはもう危険な目に合って欲しくない。それにあの騒動を起こした張本人達がここに残るとまた危険な目に合う……皆も俺たちを怖がってるし」

「セレネには話したの？」

「いや、姉ちゃんが最初だ。たぶん、あいつは賛成するだろうし、あのメタルフレームのこともあるからどっちにしろって感じかな。カーストのおっちゃん達には後で言いにくいよ」

「……そう。確認していないのにセレネが賛成ってわかるのかあ。」

お姉ちゃんがリオンの考えていることがわかるのと同じなのかな
あ」

拗ねたように頬を膨らませ、片眼でリオンの様子を盗み見るマリア。明るい声を出してはいるが心の中は決してそうであるとは限らないのだろう。下手をすれば二度と会えなくなるかもしれないのだから。

そんなマリアへ、リオンは後数日すれば軍は到着すると教えた。つまり、セレネと蒼いメタルフレームが連れていかれる。恐らく、都心でもセレネのような魔女という存在はあまり知られていない。事実を知られば軍人に何をされるかわからない。そして、リオンがそんなことを見過ごせるはずがない。そういう教育をマリアはカーストや村の人々としてきた。

用件を理解したマリアは用事を思い出したと言って、この場から逃げるように振り向く。

「姉ちゃん……」

「ん？ なぁに？」

「今まで育ててくれて……ありがとう」

突き抜けるような青い空、雲もなくカラッとした空気が漂う。

この空模様ならば当然、晴れが続くであろう。

しかし今日だけは、二粒の雨が降った。

第16章 二粒の雨（後書き）

物語が始動します。

え、今から！？っと思っただ方、すみません！

第17章 ナンセンスだ（前書き）

今回は番外編みたいな感じですよ。
気楽に読んでください。

第17章 ナンセンスだ

「ウインド村の崩壊から数日後」

共和国の支援部隊が到着した。

「こいつは……不法侵入した帝国の軍隊とやり合ったか？」

軍服を着た茶髪の勇ましい男が部下の兵士に確認をとる。男の外見から年齢は二十代後半に見えるが、あっけらかんとした話振りからもっと若く見える。

「いえ、どのMFメタルフレームからも帝国軍の型式は発見されていません」

十数機の武装集団を相手に一人も犠牲が出ないなど、部隊を動かす立場としては尊敬したくなる。

茶髪の男は近くにあるメタルフレームの残骸を何となく見上げた。

（穴？ コックピットを一突き、即死だな。搭乗者の原形が残っているかは……聞かない方がいいか）

「ゲハルト少佐……まさか“帝国の悪魔”が我が領土に……」

「違うだろうな。斬られた跡がない。奴の手口は魔科学兵器による切断と聞く。これを見ても。決り取られたようにコックピットに穴が空けられている。それも……ここの機体全部だ」

部下が生唾を飲んだのを見て、男はニヤリと笑った。

最初は帝国の悪魔を疑ったが、報告に上がっている殺し方と全く

違う。帝国の悪魔は切断による攻撃で機体を破壊する。ご丁寧に自分がやったと言わんばかりに現場には必ず逆十字の傷跡を残している。

それに引き換え、奥にあるメタルフレームは頭部、胸部、脚部と蜂の巣のように穴だらけだ。

彼の帝国の悪魔ならあんな無駄なことをしないであろう。悪魔のやり口とは全く違う。

そこへ調査を終えた部下がロイの下に写真付きの資料を持って来た。

「少佐！ あちらにもメタルフレームの残骸の山がありました。

村人が避難している洞窟の裏と少し離れた山脈付近のものです」

「どれどれ……フツ」

爆発で変形はしているが、装飾のもげた機体が十字に両断されたと思われる一枚目の写真を見て、ロイは寒気がした。

写真をめくるがどれも、致命傷となっているのは全て十字の斬撃。発見場所から察するに、最初の機体はここから逃げようとした所をやられ、他の数機はたまたま近くを通った盗賊団だろう。最初の機体は狼のエンブレムなのに対して、残りは全部鳥のエンブレムだ。

「逆十字……噂をすればなんとやらだ。これだけの戦力を持っていた盗賊にも驚きだが、帝国の悪魔もここにいたみたいだぞ。よく村人が生きていたもんだ」

村人が無事だったことは奇跡以外なんでもない。

これだけの殺戮を成し遂げる者と帝国の悪魔がこの場にいて、生き残るなどあり得ない。

帝国の戦力を激減させている帝国の悪魔はありがたかったが、自分達の領土にそれが渡ってきたとなると恐ろしいものだ。

次に逆十字の傷を刻まれるのは自分かもしれないと写真を食い入るように見るロイ。

最近では、“帝国の悪魔”に呼応するかのようには“共和国の武者”という者まで世間を騒がせている。二大強国の統治に異議がある者の仕業か、それとも盗賊崩れが思想を持ちだしたか定かではないが、テロリスト撲滅に共和国も動かざるを得ないだろう。

「最近ではテロリストってのが流行ってるのかねえ。……ナンセンスだ」

「それを阻止するために我々がいます！」

髪をかき上げながら皮肉を言うロイに部下が威勢のいい声で答える。

ロイは村人に状況説明と今後をどうするかとの会談をすと言い残しメタルフレームを避難所の洞窟へ走らせた。

（俺らがいてもお上が動かないんじゃない意味もないんだよ……ここも気の毒な村だな）

村の跡地にカメラを向けると人の姿が見えた。焼けた土地で何かをしている。

（墓を掘ってるのか？ 見ちゃったもんなん。仕事上行くしかないか）

「おい、ここはこれから軍が調査するからどいて……」

ロイはメタルフレームから声をかけて詰まった。華奢な体の少女が懸命に土地を耕していた。一人で。

「私たちの村ですから。 自分達で、何かしなくちゃいけないって思っただんです」

「君一人じゃ何もできないと思うよ。 こうゆうことは男か軍にやらせればいいんだ。 早く乗りな。 避難所の洞窟まで送ってあげるから」

「ここに帰ってくる子がいるんです……泣き虫で頭が悪くて、世間知らずの子が。 だから、あつ！」

黒髪の少女が、瓦礫につまずき倒れた。 ロイは両手を返してやれやれと息を吐き機体から降りる。

「まずは君が休まないといけないだろ？ 村は必ず元に戻す。 このロイ・ゲハルト少佐が約束する。 だから、休むんだ」

ロイは土だらけになっている女性を見たことが無かった。 都心ではそんなことをしなくても暮らせるのだ。 魔術の素養がない者でもそれなりの暮らしができる街で、土地を耕していれば馬鹿にされるに決まっている。

「ほら、手を貸して」

「あ、ありがとうございます」

少女に手を貸してやるロイ。 意外な程に整った顔立ちをしている土まみれの少女に少し気を取られ、手を握ったまま顔を見た。

少女は、よたよただった。 恐らく、ろくに休んでいないのだろう。 もっと早く出勤命令が出ていればここまで衰弱していなかったかもしれない。 つくづく行動の遅い上層部に反感を覚えるロイ。

「あ、あのお」

「ああ、ごめんごめん。 つい、綺麗なお嬢さんだったから見惚れ

てしまった」

「ふええ？」

少女は直接的過ぎるロイの感想に対処できなかった。

（わた、わた、私が綺麗な、おじよ、おじよ、お嬢さん！？どうしよう、どうしよう）

「はははっ、君はおもしろい子だな。名前を聞かせてくれないか？」

（名前？ 誰？ 誰の名前？ 父さんの、違うよ！母さんの……でもなくて！）

おろおろする少女の行動が面白くてしばらく観察するロイ。

今時この程度でここまで混乱する子は珍しい。どれだけ色沙汰のない人生を歩んできたのか手に取るようにわかる。自分が二十代になるまでに抱いた女の数は、帝国軍の一個小隊より多いと部下に伝承しているロイは、天然記念物を扱うようにゆっくり少女の様子を眺める。

「は、はい。マ、マリアと言います」

「マリアちゃんね。了解。マリア大佐！ お迎えに参りました！ これより私、ロイ・ゲハルト少佐が会談の席にご案内致します！」

「は、はい！ っえ……？」

敬礼をするロイの大き過ぎる声に驚いて思わず返事をしてしまったマリアは、しばらくたってから、きょとんとする。

「承諾したね、じゃ乗って」

「ええ！？ そんなの反則ですよ！ 誘導尋問です！」

「チツチツチ……。この世の中は言った者勝ち社会さ。嘘でも本当だと言えば本当になる。本人の意思にそって無い発言でも言えは本当と見なされる。君はもつと社会を学ぶべきだ。共和国は……そんな国だ」

だから、後日見回りに来る共和国の役人の前では発言に注意するんだよと付け加える。

「はあ、あなたは軍人さんですよ。ロイ……ゲパルトさん？」

「ゲ“パ”ルトじゃない！ ゲ“ハ”ルトだ！ そっちは意に反った通り名で……って言ってもわからないか」

「はあ……」

ロイが血相を変えて訂正を申し出た。マリアは何が違うかよくわからないまま、ロイの背後にあるメタルフレームを見上げる。

黄色と黒色の二色でペインティングされ、爪のような鋭利なブレードが両手両足に装備されているそれは、獲物を狩る肉食動物のような外見である。

「可愛い機体ですね。モデルは……シマウマさんですか？」

「違うだろ！？ あれは白と黒だろ？ こいつは黄色と黒だぞ？」

虎とかネコ科の動物をイメージしてくれよ！ シマウマさんがこんな爪してますか！？」

「そういえばそうですね。ロイさんは、虎さんが好きなんですか？」

「そう、虎いいよね。百十の王に成りそびれてる所とか最高だよ。でも、通り名がゲパルトと間違えられてチーターなんだよ……何なんだよチーターって。俺はゲハルトだっつーの！」

一喜一憂するロイに対してマリアは笑っていた。泥だらけの手で口を覆いながら声を抑えて肩を震わす。

「こ、こら。 年上の男を笑うなんて感心しないなあ」

「いえ、すみません。そんなつもりじゃないんです。 ちょっと私の知っている子と反応が似ていたんでつい、ふふふっ」

あの子は今どうしているだろうか……建前上、リオン・オルマークスという少年はこの村には存在していなかったことになっている。魔女も現れなかった。それが、残った村人全員で決めた最初の決まりだ。無論、マリアもそんなことを承諾できるわけがなかった。

しかし、そうすることが村の復興に繋がるのならそうする他ない。そして、一刻も早く村を復興させ、彼が戻ってこれる素晴らしい村を作ろうと毎日土地を耕していたのだ。

「あれ？ なんで涙が……おかしいはずなのに……」

マリアは自分が泣いていることによく気が付いた。弟のことを思い出すとダメだ。我慢できなくなってしまう。泣けばナタリ達に気にするから、あの日以来、泣かないと決めていたのに。

弱い自分が嫌になる。

「あっ」

「辛かったんだよ君は……。すまない、俺たち軍人は何もしてやることができなかった」

マリアは気が付くとロイに抱きしめられていた。ゴツゴツした体は何故か凄く安心する。

ロイは敵を撃てと言われれば敵を撃った。自害しろと言われれば

自害もしていただろう。共和国のために死ぬことが自分の役目だと思いい、迷わずここまで駆けてきた。

しかし、何かが違う。自分は何故、敵を撃ってきたのか。自分は何故、命を掛けるのか。

負傷した仲間達は迷うことなく自爆もした。命を差し出すことに抵抗などしていたら軍は務まらない。だが、それは何のためにしていたのか。

帝国との一時休戦条約が結ばれて、ロイは完全に冷めていた。

（自国の村も助けられず、何が軍人だ……）

幼い頃に正義の味方に憧れて軍に入隊し、人を殺し、国を守ってきた。引き金を引くたびに何かを失った。偽りの大義名分を掲げて人を殺している自分はこの村に現れたテロリストよりも質が悪い。彼らは裁かれる。しかし、自分は褒められるが裁かれない。違いは何か。国にとって都合のいい大義名分が頭にインストールされているかないかだけ。

「下層市民を救うと言いながらこの始末か……ナンセンスだ」

ロイは泣き叫ぶマリアを落ち着かせながら、毒を吐いた。

役人が到着し、メタルフレームの残骸を全て回収した後、この惨事を起こした者がどんな人物か問いただしたが、村人は誰ひとり知らないと答えた。

盗賊に村が焼かれたとなれば、立つ瀬がないのか、共和国はウインド村の再興を全面支援することを決める。完全な復興までは時間も金もかかるが、村は元に戻る。

MF第四部隊所属のロイ・ゲハルト少佐の提案で、ウインド村にはゲハルト少佐の部隊が一部駐留することになった。

「じゃ、マリアちゃん。生きてたら時々様子を見にくるわ。俺の手練れ共を少し置いてくから、面倒を見てやってくれ。アイツらマリアちゃんのファンだから。お前ら鼻の下伸ばしてねえで、ちゃんと仕事しろよ！俺も残りたいたいんだぞこらあ！」

立ち並ぶメタルフレームの前で部下を叱咤するロイ。部下達は声を揃えてマリアさんは自分達が守りますと言い放つ。

「ちげえよ！村を作るんだよ！勿論、守れよ？俺が来たときに村がなかったらお前ら上腕二頭筋が潰れるまで腕立てさせるからな。……んじゃ、戦争屋は退散するとしますかね」

村人が会釈する中、黄色と黒のメタルフレームに向かって歩き出すロイ。

「ロイさ〜ん。次来た時はご飯食べてって下さいね〜！私、料理だけは自信があるんです〜！」

ロイがコックピットに乗る頃、マリアが叫んでいた。慰めてくれたのお礼ができていなかったたので、何かしてあげたかったが、今は何もない。次に来る時にご飯でも御馳走しなくては。そんな思いがマリアの胸の中にあつた。

「フツ……ナイスセンスだ！当分、死ねねえなこりゃ。よおし、全機帰還する！」

モニター越しに黒髪の少女を見て、ニヤリと笑い、洞窟を去って

行くゲハルト部隊。

荒野を走るチーターは今日も共和国のどこかで、大義名分を掲げて敵を撃つ。彼らはそうすることしか、国を守れないのだから。

第18章 隠密部隊

ウインド村を出発して、三日。リオンとセレネは、首都に向かっていた。

理由の一つとして、セレネの記憶を取り戻すためには、田舎に行くよりも人の集まる都心の方が、刺激や情報が多いと判断したからである。

だが、一番の決め手は、あれこれ考えたが結局振り出しに戻るの
で、セレネの「旨い物が食べたい」との要求に応えるためだったりする。

ただ、細心の注意を払わなければいけないことはある。セレネが逸脱した存在であるということだ。万が一、本物の魔女であるとバレれば、混乱を招き……ウインド村のような結末を各地で迎え兼ねない。

魔女狩りや軍隊から追われるのが自分たちだけならばそれでいい。しかし、周りの人間、特に関わった人間が巻き込まれて死んでいくことだけは阻止したかった。

今を幸せに生きる人々を犯すことだけはしたくない。

それらを蹂躪していい筈がない。

蹂躪された側でもあり、蹂躪した側でもあるリオンは失う痛みを痛感している。

もう、人が死ぬ所なんて見たくない。死ぬなら幸せに生き抜いて死ぬべきだ。

好意にしていた神父が、バラバラに吹き飛ばされるような「異常な死」は起こってはいけないのだ。

ただ、メタルフレームを使っても、そう簡単に都市に行けるわけではなかった。

ウインド村は大陸の最南に位置するため、中心に位置する首都サマルカンドまで村や街、山を幾つか横断せねばならない。

旅をする以上、村や街との関係を遮断することは死を意味する。何らかの形で人と関わらないと自分達は死んでしまう。

滞在期間を三日ぐらいに留めれば、人と深く関わることなく次の街へ移動する準備もできるであろうとリオンは見込みをつけていた。

見込みをつけたのだが、現在 道中、道に迷った挙げ句、食料難になっていた。

地図を持っていないのだから迷うのは当然の結果である。今まで気が付かずに旅をしていた少年少女は、それに加え、とんでもない方向音痴であった。

「おい、なんでだ？」

「むう？ なにあどうした？」

リオンは、こめかみの血管をみきみきと現し、セレネの小刻みに揺れる頭を鷲掴みにする。

「な〜ん〜で、一晩の間に食料が無くなっている？」

「ん？ 食ったからだろ？」

少女は口にある物を飲み、リオンの手をどけようと両手を頭の上に乗つける。が、クレーンのようなアイアンクローは動かない。

「なんで！こんなに早く無くなるんだよ！！」

「だから、食ったからに決まっているだろ？ そんなこともわからないのか……やっぱり、お前は“アホ”という人種だな」

「アホはお前だろう！ 旅してんだよ？ なんで満腹になるまで飯を食う？ いや、百歩譲って、満腹まで食っていいでしょう……なんで、俺が寝ている間に二日分の飯が無くなるんだよ、おい！ 何か言えよ！ 説明してくれえよ！」

膝を着いてすぐるようにリオンは、気まずい汗を流す少女に説明を求める。

「いや、残そうとはしたんだ。 したんだが、気付いたら残ていなかった。 その……うう……許してくれ」

「そんな顔しても、許さねえよ？ もう、その手にはかからねえよ！？ 吐き出せ！ 今すぐ吐き出せ！ 俺の朝飯を吐き出してくれ！」

目が泳いでいるセレネの“許してくれ”は、リオンにとって最強の魔科学兵器だった。

しかし、それは日常であればの話。今は非常事態。道に迷った拳げ句、食料が今……無くなった。

セレネの肩を何十回か揺すり、リオンは残った気力で太陽に吠える。

「朝食、カムバアック！」

そよ風が荒野の真ん中で叫ぶ少年の肩をなだめる様になる。
腰まである蒼髪を揺らしながら、リオンの側まで寄るセレネ。少年の肩に手をそっと置き、少女は満面の笑みで言った。

「よし、リオン。 百歩と言わずに千歩譲れ。そして、餓死すればいい」

「お前は鬼か！ 悪魔か！ 開き直るんじゃないよ！ っていうか、よくも笑いながらそんなこと言えるな。 お前の血は絶対紫色だ！」
「違う、魔女だ。 開き直っているのではない、ポジティブ的発想だぞ！ 良い行ないをしたんだ。 来世は必ず“バカ”として生まれ変わる。 よかったなりオン、“アホ”から“バカ”に昇格だぞ！ それと私の血は赤だ。 初めての色だ」

「すまん、疲れるからしばらく黙っててくれ」

「……」

「だからと言って、そんな汚い物を見るような目で見るな！ 見るんじゃない！！」

少年は、蒼いメタルフレーム・月花の足元で泣いていた。

「飯の一つでうるさいのお……」

しゃがれた声がボソツと言う。

「一つじゃねえだろ？ 六つだ、六つ！ 朝・昼・晩、が二日で六つだ！ ったく、どんなけ食うんだよ。 って、どっからそんな声を……セレネさん？」

「……」

セレネは黙っている。リオンの背中をゆっくり通過する老人をまじまじと見ていたのだ。

振り向いたリオンは、老人と視線が合った気がした。しかし、老人は懸命に杖を付きながら前に進む。いわゆる、無視だ。

荒野の真ん中、老人がせつせと歩いている。

仙人、神様というイメージがいいだろうか。染みだらけで、腫れたような顔は、伸び過ぎた眉毛と髭が顔から垂れており、荒野の風に揺られている。それに比べ、頭の上の毛は絶滅していた。綺麗に絶滅していた。

そして、物凄く小さい。腰が曲がっている云々ではなく、小さい。老人の身長は、リオンの膝ぐらいまでしかない。机の上にもディスプレイできそうなサイズである。ただ、間違っても老人をディスプレイしてはいけない。

トボトボ歩いているが、ほとんど移動できていなかった。

奇怪だった。

奇怪だった。

奇妙な物語りだった。ジッと老人を見つめるセレネ。

「んぬお！」

「お前！ 老人に、なんてことしてくれちゃってんだ！」

セレネが老人を思いつきり踏み付ける。老人が逃れようと必死に抵抗するが、「うぬう、ぬぐう」とプルプルもがいて 動けなくなつた。

「ああー！ 人殺し？ いや、これは人か？ …… 老人殺しい！」

この白状者！ 何やってんだよ！」

「お前の朝食……ゲツト」

「何だソレは！ 止めなさい！ そんな得体の知れないもの食べれません、早く降ろしなさい！」

老人の服を掴み、ぶらんとリオンに差し出すセレネ。

苦労の末、釣った魚が食べれないと知った子どものように、渋々、老人を地面に離す。

「死んだ……死んだのか？」

「安心しろ、急所は外してある。 子種は無事だ」

老人に子種の心配はあまり必要ない気がするが、リオンは敢えて何も言わずに老人を揺らす。

「爺ちゃん大丈夫か？ 爺ちゃん？」

「うう……」

小さな体を揺らすと、老人が苦しそうに声を漏らした。

「よかった！ 爺ちゃん立てるか？」

「安心しろ、ちゃんとタツ。 子種は」

「お前はもう黙ってる！」

蒼髪の頭をガシツと掴み、黙らせる。その下で老人が目を目を覚ました。苦しげに口をパクパクさせている。

「もっ、お」

「も？ どうした、何か伝えたいことがあるのか？ 俺にできるとなら言ってくれ」

「もつと……踏んでくれい」

深呼吸をしてリオンが遠い目をする。どこか達観したかのような顔立ちに見えるため、今の彼の顔を見れば英雄に見られたかもしれない。

何かを悟った顔をし、雲行きを観察しているのだ。

今から干し物を作れば絶好の食料になるに違いない。ちょうど、お腹が空いていたことを思い出したリオン。

「なあ、セレネ。“干しジジイ”って食ったことあるか？」

「そんな食べ物があるのか！？ 是非、食べてみたいぞ！」

「ああ、きつと吐きそうなぐらい旨いと思うぜ、きつとコレは魔物だ。 世界は広いからな、こんな魔物がいても不思議じゃない」

老人を踏み付けながらリオンが暗い声で言う。

老人に優しくしると姉に教わってきたが、恐らくこれは老人ではない。きつと新しい生命体だ。もしくは、この状況を見た神様がリオンを助けるために寄こした食料だ。でなければ、こんな真剣な顔

で“もつと自分を踏め”など言わないだろう。

「小童、わしゃ男に踏まれる変な趣味はない！ 女じゃなきゃダメなんじゃ！ 細くて白い足でないとダメなんじゃ！ できたら素足で」

「てめえの存在が既に変なんだよ！ それとどっちにしても頭おかしいだろうがよ！」

ズコツ、ズコツと洗濯物の汚れを落とすように踏み付けるリオン。

「こ、これは惜しいい、絶妙な踏み加減じゃ！ 小童が女子ならば是非わしの嫁に」

「なんか言ったか？ 変態爺さん？ 次はこのメタルフレームで踏んでやるうか？」

「おおゝ痺れるのぉ！ 何故男に生まれたのじゃ！ 神め、何てもつたないことをしよったんじゃ！ わしは背徳に目覚めるぞい」

「おい、セレネからも何か言ってやってくれ。この爺ちゃん、暑さでおかしくなってるぜ」

リオンの靴の下で、くねくね曲がりながら喜ぶ小さな老人を見下ろしながら、少年は少女に声をやる。

「老人を粗末に扱うなんて……鬼……」

「俺をそんなに陥れたいのか！？ 人聞き悪いことを言っな！ 喜んでるから……いいんだよ、な？」

我に帰り、老人を踏み付けている自分の行ないを冷静に分析するリオン。

若者の靴の下に老人が呻き声を出しながら、地面に顔面を擦りつけているのだ。

勢いで踏んでしまったが、この状況を第三者が見ればどう思うだろうか。

「おじいちゃん！？ 止めてください！ おじいちゃんが死んじゃう！」

という具合に、通行人が関係者が現れて、悪者扱いされることになるのだろう。

とうよりも、既になっているようだ。

リオンは身が固まり、言い訳と状況説明を考える。が、何も思いつかない。

「いや、これはその……」

「すまない。この男を全力で止めようとしたんだが、止めれなかった」

「おめえが最初に踏み付けて、食べようとしてたんだろがよ！ お前、俺一人に罪を押し付ける気だな」

リオンが力強く地面を踏み付け、セレネを指差す。

「そんな……おじいちゃんを食べるだなんて……鬼……」

「鬼だな」

「鬼じゃな」

現れた通行人の少女と声を合わせて、最初に踏んだ者と踏まれて喜んでいた者が声を揃えて頷く。

「ごめんなさい、むしろくしゃしてたから……つい、やってしまったんだ。踏む気なんてなかったんだ、頭がカツとして」「これだから最近の若いもんは困るんじやよ。我慢という言葉を

知らんのか？ そんなことで社会に、んぐうわ
」

更生したと思われたリオンだったが、老人を踏み直す。 リオンの顔は笑っているが、心は笑っていないかった。

「っていつかアンタら誰だ。 そして、この爺ちゃんは何でこんな悪い趣味をしている？ 暑さのせいなのか？」

リオンは、海老反りしながら喜ぶ老人をグリグリと踏みつけ、奇妙な生物を指差す。

ローブを頭から被った少女は重たげに口を開く。表情は見えないため、怒っているのか、泣いているのか判断しかねた。

「私は身内の者です。 おじいちゃんの趣味は……私が原因なんです」

「家に帰ると縛り上げたブタと呼ばれる男共がいる、危ないお嬢さんってことはないよな？」

まくし立てて、リオンは唾を飲んだ。この老人の身内なのだから、とてつもないことを言いそうなので、心の準備をする。

喜ぶ老人を放置し、話の通じそうなローブの少女の前に移動する。

「豚はいませんよ？ お爺ちゃんは、家で私に踏まれ、吊され、鞭で奴隷のように扱われています。 家族なんです……だから返して下さい！」

「それはどんな絆で結ばれた家族だ！ んなこと聞かされて、はいそうですかって返す人間いねえよ！ むしろこのまま生き別れになった方が、爺ちゃん幸せじゃねえか！」

リオンは悪気が無い少女の言い方に苛立ちを感じ始める。

会話をする二人の横で、セレネは老人を踏みつけて遊んでいた。何故か、様になっている。

「聞いてんのかよ？ ただの拷問だろうがよ。早く軍に捕まれよ」
「いえ、しつけないので特に問題ないかと」

「どこの誰がしついで鞭なんて使うんだよ？ アンタは猛獣使いか」
「私はともかく、おじいちゃんは今でも猛獣使いですよ……」

「健全なお話をお願いします」

「チツ……絡みにくい男ね、と言う訳でおじいちゃんを返して貰います」

「絡みにくいのはあんたの方だろう！ もう勝手にしてくれ、家庭の事情まで突っ込んですみませんでした！ セレネ、行くぞ！」

リオンの言葉を最後に、静まり返る一同。

日差しだけがジリジリと音を立てている感じがする。

「待ちなさい……この音、気のせいではないわ」

口調の変わった少女の声とほぼ同時に地面が揺れる。

地震が起きたとは思えない激しい揺れ、支えるものも無く、老人を含めた一同は倒れ込んだ。

「ほおーエライことになったのおー」

老人が地中から現れる機体を眺め、やはり、くねくねして喜んでいた。余程、セレネの靴の下が気に入ったようだ。

「なな、何だよ！ 地震か？ これはメ、メタルフレーム？ 地面から出てくるなんて、ディスカバリーでも聞いたことねえぞ？」

「ジャミング等を備えた施設潜入用の機体……恐らく、サウザンド

よ」

ロープを押さえながら少女が言う。相変わらず表情が見えないため、何を考えているかわからない。

一方で、サウザンドということは、搭乗している者は、魔力を扱える魔術師が擬似魔力を作れる技術師。

リオンとセレネが、どちらかに狙われる理由はないはずだ。自分たちの存在を消すことで、復興することになったウインド村から情報が出たとは考えにくい。

以前逃げた、フェンリルという盗賊の残党という線も考えられる。親玉は月花に殺されず逃げ切ったのだ。二人に報復しようと仲間を集め直したのかもしれない。

リオンの思考回路を余所に、その機体は、人に向けるには大き過ぎる銃口を、慌てふためく四人に突き付けた。

「敵……だよな？ セレネ！ 月花に乗り込めるか！？」

「無理だ、囲まれている！ 乗り込めない」

「え！？ 敵はどこにも」

リオンが目を凝らして蒼い機体の周辺を見渡すが、何も見えない。しかし、そこに敵はいる。見えない敵が確かにいるのだ。おかしい方向から機械音がしているのが何よりの証拠だった。

「仕方ないわね、使いたくないのだけど、全部……“撃ち取りなさい”！」

名前も知らない少女が、入れ墨の走った右腕をバツとロープから水平に突出し、術式の発動合図を唱える。

刹那、空に閃光が走った。

一本の光の筋、空間が切れたかのような錯覚を起こす。

荒野の果てから現れた光の筋が、目の前のメタルフレームの頭部を直撃した。

メタルフレームのカメラアイを光が貫通したため、頭部には背後の景色が見えていた。

続け様に、四本の閃光が蒼い機体の周辺を通過し、何もなかった景色から煙が噴出していった。恐らく、地中から現れた機体と合わせて、五機のメタルフレームに囲まれていたのだろう。

その煙達は逃げるように宙を移動しながら、遠ざかっていく。戦況的に不利と感じたのか、少女の意外な力に驚いたのか定かではないが、この場合はローブの少女のおかげで助かったのだ。

そう、彼女は魔術師だった。

「こんなところまで、追手が来るなんて。ドクター、どうしましょう。」 “身内の振りをして、若い男女を村に案内しながら逃げる村娘作戦”が見破られていました」

「いや、迂闊じゃったのお。ちいと面白そうな機体があるんで、寄り道したのがまずかったのお。しかし、何が問題じゃったのかの？どこからどう見ても優しい村娘と村の優しいお爺さんにしか見えぬ筈なんじゃが……」

老人が立ちあがり、ローブの少女と真面目な会話を小声で始めた。幾何学的な文字が書かれた少女の右腕は、怪しげに文字だけ光を放っている。そして、「何だ、その舌が絡まって結び目ができそうな作戦名は！どっからどうみても怪しいだろうがよ！」とリオンが懸命に噛みつくが、二人の会話に少年の声は届かなかった。

肩で息をしながらリオンはセレネを何気なく見た。いつになく真面目な顔である。

「今のは何だ？ 察するに、あれはメタルフレームの砲撃だな？」

セレネは既に分析を始めていた。何も無い所へ閃光が走ったのではなく、メタルフレームの砲撃だと推測するには何か理由があるのだろうか。

「あら、意外ね。この国であれを見せるとまず魔術を疑うと思うのだけど？ あなた帝国側の出身？ それより何故、メタルフレームの砲撃だと？」

「いや、何となくだ。私は魔術というものがどんなものか詳しく覚えていないから、メタルフレームで可能かどうかを想像しただけだ。どこかに待機させているメタルフレームに狙撃させる方が魔術を使うよりメタルフレームアンチ・マジックに対して有効と考える。ハンドレットなるともかく装甲にアンチ・マジック対魔術が標準装備されているサウザンドに、人間の魔術は効果がないと思うんだ。この辺りは岩場が少なく平地だから、狙撃は容易いはずだ。それなりの腕なら標準機だけで狙えるだろう？」

セレネが少女の放った閃光について、答え合わせをするかのように語る。老人は黙ってセレネを見ていた。

「あなた、かなりのプロね。私のこのデモンストレーションを見てそこまで、言い当てたのはあなたが初めてよ、蒼髪のお嬢さん。だいたいの方は魔術でMFを倒したと勘違いして“魔女”なんて言ってくれるんだけど。それと種明かしをすると、“魔術でMFを遠隔操作した”それが私の使った魔術よ。一応、魔術で敵を倒したことになるから、あながち“魔女”も間違いではないと思うのだけだね」

顔を隠していたローブを脱ぎ去り、少女の顔が露わになる。

少女と思っていたその人物は少女ではなく、一人の女性であった。黄色いポニーテールに、片耳にピアスを空け、ローブの下に軍服

のようなグレーの服を着ていた。女性はそのまま、胸ポケットにある眼鏡を装着し、タバコに火を付ける。

「ノーションよ。 ちよつとしたメタルフレームの研究をしている者です。 こちらはドクター・M。 略して、ド・エム。 これでもこの方は、業界ではかなり有名なもの。 本当なら穩便にあなた達を巻き込んで村に行きたかったのだけど」

「全然、穩便じゃねえし！ 巻き込みが前提かよ！ 後、どんな略称付けられてんだよ爺ちゃん！」

「だって、何だか困ってそうだったから放っておけなかったのよ。

“朝食カムバアック！”なんて叫ばれたら放っておけないでしょう？ でもまさか、追手が来ていて“身内の振りをして、若い男女を村に案内しながら逃げる村娘作戦”んぐ……が失敗するとは思っていなかったもの。 追手もやるようね」

「今、絶対噛みかけただろ？」

「作戦名なんてどうでもいいのよ、飾りだから。 それより、あなたのお名前は？」

リオンを斬って捨て、セレネの方に向き直るノーション。

「……リオンだ」

「違う！ なんでそこで、しょーもない嘘を付くんだお前は！ コイツはセレネ、リオンは俺です」

シレッと嘘を付く少女にゲンコツをお見舞いし、リオンが会話に飛び込んだ。 相手が大人であるかわかり、思わず敬語を使う。

「フフツ、セレネにリオンね。 覚えてたわ。 光栄に思いなさい、あなたは私に名前を覚えさせた最初の二人よ」

「見た目は美人なのに、友達少ないんだな」

「違う、あいつは頭が悪いんだ。次の日に忘れるんだ、きっと」

「ああ、なるほど」とヒソヒソ話でない声の大きさに、ヒソヒソ話す少年と少女。

「あの、凄く不快な内容が聞こえているんだけど……オホン、とにかく、こんな所で立ち往生していても仕方ないし、近くに村があるからそこでお話しない？ 危険な目に合わせたお詫びに、ご飯ぐらい御馳走するわ。いいですよ、ドクター？」

「わしは構わんよ。さあ、好きに踏んでくれ。思う存分踏みしめてくれ」

名前もさることながら、老人はドMだった。

「ほら、ドクターも“一緒にご飯食べる方がおいしい”って喜んでいるわ」

会話でない会話が行われた気がするが、恐らくこの二人の間では成立しているのだろう。会話というものは、意志を伝えたいと思う相手に意志が伝われば成立する。だからこの場合、特に突っ込む必要はないのだとリオンは心を落ち着けた。

食料難に陥り、道に迷ったりリオン達にとって悪くない話である。次の村まで案内してもらい、出発と同時に別れば問題にならないだろうと、この話を受けることにするリオン。

そして、村に着いたらまず地図を買おうと心に決めたりオンであった。

「やった！ 飯だ！ 危険に合わされた分しっかり、食わせてもらいます」

「飯に釣られるなんて、ダメなやつだぞ？ お前にはプライドがな

「いのか？」

「お前が食料全部食ったからこんなことになってんだろがよ！」

セレネが不服そうに顔をしかめているのを見て、リオンが言う。

「まあまあ、そんなに警戒しないで。私たちは帝国軍と共和国軍に技術提供している研究チーム“スコラ”の者よ。顧客のプライバシーに関わるから、内容は言えないけど少女少女を騙して、喜ぶような活動はしていないわ。困っている時はお互い様っていうですよ？」

ノーションがセレネの頭を撫でながら言った。なんだかノーションが急に大人に見える。

丁寧の名刺まで差し出すのだから、信じてもいいかもしれない。ただ一つ文句を言うならば、何故、普通に声をかけてくれなかったのだという点であろう。

メタルフレームに襲われたのは、不運だったとしても“村娘なんちやら作戦”の必要性が皆無だ。得体の知れないこの二人を信じ込み過ぎるのはよくないのかもしれない。

必ず彼らには裏がある。

なぜなら彼女達が理由もなく、サウザンドを保有する軍の隠密部隊に追われるなんてありえないからだ。

第19章 クリフォト・ドライブ

「いや、こんなにいっぱい食べたのに本当にタダでいいんですか？」

「えっ、ええ。構わないわよ。珍しい機体を見せてもらったしね」

腹を擦り今夜の分まで食い溜めをしたリオン。

財布の中身を「一、二、三、四……ええ！？、と数えるノーシヨン。ノーシヨンとドクターMが土下座をしながら、月花を見させて欲しいと頼むので、セレネの了承を得て、点検をしてもらい“問題無い”との返答を貰う。

研究者の血が騒いだのだろうか、その後も月花に張り付いてノーシヨンはメモを取っていた。その後、村の食堂に行き約束の飯を頂いたリオンとセレネ。プロに機体点検をしてもらった上に、飯まで奢ってもらったのだから、リオンは幸せの絶頂であった。

「セレネはよく食べる子じゃのお。だから発育がええんじゃんべう」

「セクハラって単語知ってるか？ セクシャル・ハラスメントだよ？ セクシャルなハラスメントなんだよ」

机の上で正座しながら野菜をむしゃむしゃ食べる、ちっさい老人をエルボーでごりごりする。

ド・エム老人は何故か喜んでいる。それは何故か、彼がドMに他ならないからだ。

「まあ、お腹いっぱいになった所で、一つ聞きたいことがあるのだけれどいいかしら？」

リオンは本題が来たと悟り、気持ちを切り換える為にもハイ、と返事をして身構える。

「そんなにカタクならないでいいわよ？　まだお昼だし、ほら、子どももいるわ。　夜にゆつくりしましょう」

「健全なお話をお願いします」

「チツ……」

「だから、何で舌打ちするんすか！」

舌打ちするノーションが信じられずリオンは、隣の席にいる少女に目をやる。

「うむおうんむうもう」

「だから、てめえは食ってから口を開け！　もうもうもう！　牛かあー！」

「うんうん、なるほどあなた達は首都に行くつもりなのね」

「ええ通じた！？　どうして通じんだ！？」

リオンが一人でリアクションを取り続け、セレネとノーションの会話はスムーズに始まっていた。

「何をしに行くの？　首都なんて何もないわよ？」

「子作りだ！」

「う、嘘ですよ！　何を言ってんだこのキテレツ娘は！？」

胸を張ってセレネがシレッと、とんでもないことを言う。顔を真っ赤にして訂正するリオン。

それに対して金髪メガネの女性は、

「なるほど……記憶喪失、か」

「つて、だから！ 何で今の文脈からそうなるんだよ、会話のキヤツチボールができただよ？ 今のはメタルフレームでクッキー焼くぐらいあり得ねえ展開だろうがよー！！」

何故か理解していた。摩訶不思議なこともあるものである。

ノーシヨンの理解力に納得できないリオンは店の中で叫ぶ。当然、周囲の目が槍のように突き刺さった。

「ちょっと！ あなたうるさいわよ？」

「お前、うるさいぞ？」

「見てるこつちが恥ずかしいわい」

世間の目は冷たく、同席している人間はもつと冷たかった。シツシと手を仰ぎ、リオンから距離を取ろうとする同席した三人。

『おう、兄ちゃん！ 裏で話しいつけようやあ』

「申し訳ありません。深く反省している所存ですう！ 痛い！ どうか摘み出さないで下さあゝい！ いやあゝ！ 嫌だゝゝ！ セレネゝゝ！！」

『うん？ 嬢ちゃん、この坊主は知り合いだったのかい？ 違うよな？』

店の裏から現れた、身がしまり過ぎて皮膚が破けそうな腕をした巨漢が、ギロリとセレネに言った。

“今すぐ悪党を退治してやる”とでも言いたげな鋭い眼。

「……知らない家の子」

巨漢に圧倒され、セレネがボソツと呟く。

「あつ、てめえ！ この野郎！ 何の恨みがある！ 何で嘘を付くう！ 嫌だああ！」

ウインド村のカーストのような巨漢は店の裏へ帰って行った、リオンを指で摘み上げて……。

店に静寂が訪れた。今日も平和だった。

『坊主、ナンパは余所でもらおうか？ ああん！ どこ見てんだコラあ、目を見て物言わんかい！』

木材が壊れる音がする。相変わらず今日も平和だった。

「ナンパも何もしてないですよ！ 本当です本当です！ ただ、会話がおかしかったから、いやあああ！！ 死ぬ死ぬ、死にますよ！今のなんですか、包丁でしょ？」

木材がまた壊れる音がする。

『女性が嫌そうな顔してたらナンパだろおうがあ！』

「どんな理論ですか！？ そんなめちゃくちや 後で覚えてるよ、あのキテレツ魔女」

『覚えていろなあ？ 誰に口きいてんだ！ こっち向かんかあいナンパ野郎！』

厨房で何が起きているのか、客全員が見守る中、ノーションが口を開く。

「で、話を戻すけれど、記憶喪失というのは本当かしら？」

ノーションはテーブルに目を戻し、セレネの口に付いたソースを

ナプキンで拭いてやる。

「ああ、どうも自分が誰だかわからないんだ。首都まで行けば私に関する情報があるかもしれないと思って、旅をすることになった」

抵抗もせず素直に拭き取ってもらいながら、セレネは続ける。

「あいつは私を守ってくれた。だから、あいつに迷惑はかけたくない。何が聞きたいんだ？ 私たちのメタルフレームの動力についてか？」

「ッ！？ 察しが……本当にいいようね。というより、聞かれるのを待っていた、といった様子ね」

ノーシオンは眼鏡を掛け直し、タバコに火を付ける。仕事に入る彼女なりの合図である。まさか、自分達が機体本体ではなく動力に興味を持っていることまで、見透かされるとは思っていなかった。本気で向き合わなくてはならない。

「MFは本当に面白くてね、あなたの機体のようなサウザンドは、自然界にある魔力を機体内に取り込んで、エネルギーに変えているのよ。そして、内部にあるセフィロト・ドライブによって全身に魔力が供給され、初めて動く。でも、魔力を供給し続けたらどうなるかしら？」

「破裂して……パイロット共々、吹き飛ぶのお」

ドクターMが机の上から答え、それに頷いてノーシオンは続ける。

「そうならないために、存在するのがクリフォト・ドライブ。余分な魔力を外に排出する大切な機関よ。魔科学兵器を使用するためにも必要な機関でもあり、大きな力を使用する機体には必ず大き

なクリフト・ドライブが搭載されているわ。でも」

月花を点検していた時に書き込んでいたメモに軽く目を通し、眼鏡越しにセレネを睨む。

「どうしてあの機体には、エネルギーを放出するクリフト・ドライブしか搭載されていないのかしら」

「……わからん」

セレネが自分の太ももに視線を落として呟いた。

「いえ、あなた程の知識があればわかっているはずよ？ セフィロト・ドライブ抜きで自然界からの魔力供給ができないのなら、どこから魔力が供給されているのか」

「……知らん」

「あなた！ 惚けるのもいい加減にきなさい！」

ノーションがテーブルの水が零れる程の強さでテーブルを叩いて立ち上がった。さっきまでの女性の声ではなく、兵士を叱る教官のように。

店内が静まりかえる。

「ご、ごめんなさい。別に怒っているわけではないのよ。ただ、そのことを知っていて知らないフリをしないで欲しいの、リオン君は……知らないのでしょうか？ あの機体の動力源が何か」

「あいつはアホだからな」

ノーションが落ち着きを取り戻そうと再度、タバコを取りだす。何故セレネが笑っているのか見当もつかない。自分が死ぬかもしれない代物だと言われて何故笑える。あんなものに乗れば命が幾つあ

っても足りない。

「はあ、とにかくあの機体で旅するのは止めなさい。あれは新婚旅行には不向きの機体よ。もっと他にあるでしょ、あれを売って、移動に特化したサウザンドかハンドレットを買いなさい。それで、目的は果たせるでしょ？」

金髪の頭を掻きながらノーションは機体のパンフレットを差し出す。

「いや、月花も一緒じゃないと意味が無いんだ。あいつは、もう一人の私だ」

セレネは召喚した月花の感触をまだ覚えていた。彼女が自分の記憶の鍵の一つであると踏んでいる。月花が見ていた蒼髪の少女は恐らく自分。黒く変色した無数の残骸を踏みつけていたのは月花だ。

そして、隣にいる人物が誰だか思い出せない。全てを包み込もうとし、全てに弾き出された男。

あの男はまだ生きているのだろうか。それとも死んでしまったのだろうか。いずれにせよ、記憶を取り戻す鍵の人物であることは間違いない。

「何言っているの！ あんな燃費の悪い機体で、首都まで行けるわけないでしょう。ここからどれだけ掛かると思っているの？」

「まあまあ、落ち着くんじゃ。普通の人間ならあの機体は動かせれん。動かすことができるセレネは、特別なんじゃよ。だから一般人のわしらが何を言っても無駄じゃ……彼女にしかわからんことがあるのじゃろう、のお？」

テーブルの上を移動して、優しげに微笑む老人。その顔に表裏は

ない。

「ああ、私は特別な存在だからな！」

威張るセレネを余所に、ノーシオンは危うい物を見るように視線を流した。

「一晩だけ待ってちょうだい。MFを扱う者としてあの機体をあのままにしておくことは見過ごせないわ。多少燃費をよくする道具ならあるから」

「あまり弄ってやってくれるな。あいつはそうゆうことされるのを嫌うんだ」

「大丈夫よ、ちょっとした魔石を置くだけだから。お守りだと思っ
てちょうだい」

魔石に魔力を込めるには時間がかかるらしく、準備のためにノー
シオンはすぐさま店を出て行った。

「あいつは、いいやつだな」

誰に言うわけでもなく、走り去った女性の後を見つめてセレネが
言う。

あやつも色々あったんじゃないよ、と返し老人は目を瞑った。

ノーシオンは宿へ走る。

宿屋の受付や客達もあまりの速さで部屋に駆け込むノーシオンを
二度見した。しかし、そんなことノーシオンには関係なかった。

「はあ、はあ、んがぁ。はぁ〜私、何やってんだろ〜」

ベッドに跳び込み、大の字に寝転ぶ。面白そうな機体に釣られて、ちよっかいを出したことが悔やまれる。知らなければこんな面倒なことをしなくてよかったのだから。

それにあの少年少女はとにかく食べる。いくら新しいお客の依頼で財布が膨らんだとはいえ、今後の旅は厳しくなりそうだ。少年はともかく、少女の食事量が異常なのはMFの構成を見る限り仕方がないのかもしれない。

「はあ」

ますます関わるべきではなかったと思うノーション。ふと彼の顔が見たくなった。胸にぶら下げているペンダントを引っ張りだす。

「あんたはいつも笑ってるわね……憎たらしいわ」

金色の装飾が施されたペンダントの中には、写真が入っていた。ここにあるべき写真は本来ならば2人のツーショットや彼の笑っている写真なのだが、集合写真である。

軍服を着てみんな歳以上に増せて見える集合写真で、一人だけ馬鹿みたいに笑っている少年がいた。彼だけ敬礼も逆だ。

この写真は廃盤だった。故に世界に一つしかない失敗作の写真。軍校の隣にある研究室へたまたま通りかかった少女が、たまたま貰った集合写真。帝国の技術で縮小し、ペンダントに納まる程の大きさになったが、何故そこまでのか今は思い出すだけでも恥ずかしい。

恐らく戦地で想像を絶する経験をしてきたのだろう。彼は年に一回の集合写真を取る度に、笑わなくなっていた。元々、軍の集合写真で笑う人間なんていない。でも、彼だけはずっと笑っていて欲

しかった。

「あんたに似ている変な子、見つけたわよ」

今朝、出会った黒髪の少年を思い浮かべて笑う。荒野の真ん中で「朝食カムバック!」と叫ぶ様は実に滑稽だった。

彼も軍に入らなかったらあのような少年のままでいられただろうに、何故、軍なんかに入隊したのだろうか。正義の味方に憧れたなんていつまでも堂々と言い張るものだから、散々馬鹿にすることができたが、それが彼の本心だったのだろうか。

何故、男は正義の味方だの、英雄だの目立ちたがるのかノーションは、その時から理解できなかった。

(夢ばかり見てないで、たまには女を見ろつてのよ!)

ボスツと枕に細い腕を叩きつける。

「ああ! こんなことしている場合じゃないのよ! 魔石を準備しなくちゃ……はあ、本当に何やってんのよ私は」

パチンとペンダントの写真を閉じ、魔石の準備に取り掛かる。メタルフレームのクリフォト・ドライブ。この機関は彼女にとって思いの出の機関だ。いや、自分の作った薬が、クリフォト・ドライブに関わっているだけで、彼女が望んで作った思い出ではない。

クリフォト・ドライブがなければ、ドクターMが言っていたようにメタルフレームは破裂する。あれらは二つで一つなのだ。どちらが欠けてもいけない、愛し合う男女の様な関係である。

ノーションが作った薬は、パイロットの魔力で人為的にクリフォト・ドライブをこじ開け、大量の魔力を流し込むものだった。

魔力とは生命力と同意である。自分の寿命に害が無い程度の放出

は、日常でも行われているし、休息すれば回復もする。しかし、ノーションは限界を超える薬を作ってしまった。

パイロットの魔力が吸いつくされ、戦闘後にミイラのようになる恐ろしい薬。戦後、前頭葉にダメージが残り、自発的意識のなくなる奴隷人間を量産する

ゾンビ・パウダー
屍の薬と呼ばれる悪魔の薬を。

そして、その薬が写真の彼をゾンビへと変えた。

彼はもう笑えない

第19章 クリフォート・ドライブ（後書き）

日々加藤でございます……いえ、日々葛藤です。

第20章 クソ野郎

夜。

ノーシヨンとドクターMの紹介で、同じ宿に泊まることになったリオンとセレネ。リオンは、まだ昼間のセレネの行動を根に持っていた。

「おい、どうしたんだ？」

「フンッだ」

部屋でそっぽを向くリオン。

「そうか、糞^{ふん}なら外でして来るんだぞ」

「なんで便所行くことを女の子に報告しなくちゃいけないんだよ！俺は、そんな羞恥を楽しむ男じゃない！これは、鈍感なお前にわかるよう言葉を付けた怒りをだな」

「すまん先に、糞に行つて来る」

「止めてえ！もう、そんな汚いこと言わないでえ！！女の子でしよう！」

男女平等なのだろう、ならば気にするなと、呟きながら部屋を出ようとする少女に幻想を抱いていた少年は心が折れた。耳を塞いでいやいや、と部屋の隅で首を振るリオン。

「それより……お前の相手は疲れる」

セレネが溜息を付いてダラダラと、部屋を出て行く。糞に行つたんだろう。

「激しく俺のセリフだよ！」

ボタンツと閉まるドアに声を放つ。が、一秒も経たない間にまた、ドアが開いた。そして、何故か、鍵まで閉められた。

「なんだ？ 忘れもんか？ お前こそ糞は外でしろよな！ フンツ！」

トイレに行くのに何を忘れたらいいのか疑問だったが、ベッドで仰向けのままりオンは投げやりに言う。しかし、返答がない。

「おい、キテレツ魔女さ〜ん、って、ぐうあ！？ 何、くつろいでんすか！！ あんた、部屋隣りでしよう！」

ノーションが正座をして、ズズズツと、お茶を飲んでいる。キテレツな女はここにもいた。

湯気で眼鏡が曇り、真っ白なレンズを付けた女性がニタリと笑った。口が裂けている危ない笑みからは嫌な予感しかしない。

「いや〜、あなたと話があつたから、部屋の前でずっとクラウチングで待ってたのよ。喉、渴いちゃってね〜」

「そら、喉渴くだろうよ！ 普通に入ってきて来て下さいよ、なんでそんな格好で待ってるんですか！？」

セレネはその怪しい女性がドアの前にいたのに、無視してトイレに行った。

自分なら口が先に反応してしまつて、トイレ所ではないであろう。改めてセレネの感覚のズレに畏怖するリオン。

「で、話って何かしら？」

眼鏡を掛け直して、深刻な悩みについて相談されるような声を出す。キラリと怪しげに眼鏡が光った。

「こつちが聞きてえよ！ 何カッコつけて眼鏡、光らせてるんですか！ こらそこ、人の話を無視してレンズにワックスを塗るな！ 用が無いなら帰れゝ帰れゝ」

突張りを繰り返し、ノーションを部屋の外に追いやる。

「冗談よ、冗談ゝ。 セレネについての話…… あなた達のMFの話 と言えばいいかしら」

部屋の仕切りに、しがみつきながらノーションが言った。眼鏡が油でテカテカしているうえに、へっぴり腰という説得力が皆無な姿勢だが、この話題、リオンにとって効果はバツグンだった。

「詳しく聞かせて下さい」

突張りを止めて、リオンはノーションの目を見る。

「じょゝ」

“だんよゝ”なんて言ったらこの油、飲ませますよ？」

笑いながらノーションが持ってきたメタルフレーム用のワックスを持ち出すリオン。

「えう…… 上段よゝ上段！ あなたの突張りは上段が甘いわ」

セイツセイツと、言いながら突張りの指南をする金髪の女性を見

ていると、虚しくなるリオンであった。

「さて……遊んで貰ったし、そろそろ教えてあげるわ。あなた、魔力とMFについてどれくらい知ってる？ ……ええ！？ ここ禁煙なの！ ちえゝ」

煙草を吸おう啞えたノーシヨンだったが、リオンに没収された。仕方ないので、側にあった植物の枝を折り、啞えるノーシヨン。余程口寂しいようだ。

「メタルフレイムはともかく、魔力というより魔術自体……俺はあまり詳しく知りません。召喚について話を聞く機会があって、召喚と喚起の違いは知ってますけど、それも上辺だけです。田舎村の出なんです」

幼い頃、マリアが「犬が欲しい」と言って、召喚魔術で犬の使い魔を呼び出そうとしていたため、リオンは必死になって勉強していた時期がある。勿論、魔術のイロハも知らない子どもが使い魔を呼び出すことなど不可能であり、犬などの動物を模した使い魔は、ある程度の魔術師でない限り使役できない。そして、ペットにできる程、気安いものでもない。

そんなことを知る由もないリオンだったが、村中で召喚について聞き回る少年を見かねたカーストが、ヒヨコを一羽オルマークス家に渡すことで、この件は落着となった。

「また召喚とはマイナーな魔術について興味があつたのね。召喚なんてMFが世に出回ってから、見る影もないわよ。手間もかかるし燃費も悪い、魔術師の実力以下の使い魔しか命令を聞かないわで、戦時中、召喚しかできない魔術師は戦力外通告よ」

枝を口で揺らしながらノーションが言った。

帝国の人間ですら魔力の基礎知識くらい知っている。かつては技術師も魔術と共通する研究をしていたため、魔術師程ではないが理解はしているのだ。更に、メタルフレームの登場で、魔力について研究をせざるを得なくなっただけのため、魔術師を捕まえて洗いざらい吐かせていたという黒い歴史もあつての知識であるが。

「今時、魔力について知らない人間がいたなんて意外だけどあなたは原始人？ まあいいわ、いい？ 簡単に言うと、MFにとって魔力とは、人間にとっての空気みたいなもののなの」

「ないと、死んでしまつてことですか？」

「死ぬというより、動かないだけよ。ハンドレットなら無くても動くんだけど、サウザンドになると明らかに燃料不足よ。科学技術だけで動かすなんて不可能だわ。サウザンドになると真正正銘

“本物の魔科学兵器”だからね」

続けてノーションはセフィロト・ドライブとクリフォト・ドライブについて簡単に説明を続ける。自然界の魔力を取り込む機関セフィロト・ドライブ。魔力をエネルギーに変える機関クリフォト・ドライブ。

その他専門的なことを話したが、開始二秒でリオンの頭がクラッシュした。

そのため、

セフィロト・ドライブ＝呼吸の吸う動作

クリフォト・ドライブ＝呼吸の吐く動作

とわかりやすくリオンの認識させ、リオンの質問してみた。

「もし、あなたが今から息を吐き続けることしかできなくなれば、どうなると思う」

「死にますよ、ね？」

壁にもたれ掛かりながら、腕を組むノーション。口に咥えているのが木の枝ではなく、タバコならばかなり絵になっていただろう。余裕を持ったノーションに比べ、頭の中を整理しながら会話する少年は混乱しながら答えている。

「そうね、死ぬわね。全身に酸素が周らなくなって、脳死するわね。体は壊死するだろうし、心肺停止もするわ。極論だけど、人間は酸素で動いているようなものだから」

リオンは、息を意識的にしてみても話を聞くことを続ける。

「MFにはパイロットから魔力を供給する場合と自然界から供給する二パターンがある。自然界から供給するためにはセフィロト・ドライブが必要なの。で、本題なんだけど、あなた達の機体には、私が見た限り本来セフィロト・ドライブがあるべき場所にもクリフ・オート・ドライブが取り付けられていて、正に、息を吐き続ける人間の状態なのよ。ここまで言えばわかるかしら？　今までどうやってあの機体が動いていたのか」

息を吐き続ける人間ということは、いずれ死ぬ。つまり、メタルフレームは機体内の魔力を吐き続けていずれ動かなくなる。供給する魔力がなければ動かないのがサウザンド。

（……動かない？　嘘だ。月花はウィンド村からここまで何の不具合も無く動いていただろう）

記憶にある限り、魔力を補給した覚えはない。そして、自分は供給の仕方也不知道。貯蔵されていた魔力などが存在したのだろうか。月花は稼働して、まだ一週間も経っていない。あの格納ケース

で魔力を貯蔵できていたなら、今まで動くのも納得がいく。

しかし、盗賊との戦闘を繰り返した後、一度も補給というものをしていない。ディスカバリーならば、半日の発掘作業で燃料はほとんど底を付く。戦闘用の月花はもつと燃料を食ってもいいはずなのだが、月花は今まで一度も補給をしていない。

時折、セレネが月花を休ませようと提案してきただけで、魔力をどうという話は全くしていなかった。メタルフレームについてはセレネの方が詳しいため、ほとんど彼女に任せっきりだった。

だが、今の話を聞いて思い当たることがある。もし、貯蓄魔力がなくて空のまま月花が動いていたならば、どこから魔力を供給されていたのだろうか。

彼女にしかできない、荒療治が一つだけある。

「まさか……」

リオンの心臓が跳ね上がった。脈拍が数えれそうぐらい激しく胸を内側から叩いてくる。

「俺は魔力の送り方なんて知らないド素人だ。そして、月花には自然界の魔力を集める機関がない。となると、今まで月花は……セレネの魔力で動いていたってことですか？」

覇気の無い声が、ポツリと漏れる。その解答を聞いて、ノーションは眉を上げた。

「あら？ 意外に頭は回るのね。補給してあった魔力の残りで動いていたなんて言うだろうと思っていたのに、セレネに行きつくとは思っていなかったわ」

セレネが普通ならば、その線でリオンは確信していただろうが、

生憎彼女は普通じゃない。彼女は魔女だ。魔力を無尽蔵に保有する、悪魔と契約した者。

しかし、いくら魔女と言えど機体を動かす魔力を常に提供し続けなければならないのだろうか。

「すみません……魔力って何なんですか。魔術師にしかない特殊な力ですよね？」

ノーションには一言もセレネが魔女であると話をしていない。そして、セレネは記憶を失っていて魔術の扱いもわからに。ならば何故、セレネに魔力があるとわかったのだろうか。

リオンは、おずおずと真顔の女性に聞いた。

「いいえ、誰でも持つてるものよ。魔力って、つまるところ……生命力なの」

「ッ!？」

魔力は生命力、最低な回答だった。ならば、魔力を使えば死ぬというのか。セレネは命を削ってあれを動かしていたのか。

一方で、朝に見せられたノーションの魔術も命を削ってのものだったのかと認識するリオン。少量とはいえ、魔術を使用する度に命を削っていれば、いつ死ぬかわからない。

そして、そんなもので共和国が発展しているとは思えないことに気が付いた。

「魔力を使う魔術師も命を削って魔術を使っているけど、生きていますよね？　ならセレネが魔力で月花を動かしていても問題ないんですよ!？」

ノーションは、こめかみを押さえて溜息をついた。まさか、そこ

から話をしなくてはならないと思ってもしなかったようだ。

いくら魔術に疎くてもこれから話すことは一般常識だ。ノーシヨンは、目の前の少年をもう、原始人と見なすことにした。原始人ならば仕方ない、髪を掻きながらノーシヨンは口を開く。

「ああ、違う違う。生命活動に必要な魔力っていうのはセーフティが掛かっていて、通常、手が出せないわ。体が止めるのよ。手を握って開いてを千回ぐらい繰り返していると、握ろうとしても筋肉が動かなくなってくるでしょ？ あれと同じよ。生命活動分の魔力を使おうと意識をしても、セーフティーがあつてできない。筋肉は超回復して更に強くなるけど、魔力は使った分しか回復できない点で違いがあるけどね」

ノーシヨンは、手を開いたり閉じたりするのを止めて、講義を続ける。

仮に筋肉同様、生命力でもある魔力が超回復すれば人間は魔術を使って寿命を延ばすことが可能になる。そんなことはあり得ない。寿命を延ばすなど、神の領域である。それこそ、かつての技術師が目指した石が必要となるだろう。

「いくら一流の魔術師でも、回復する程度の魔力しか使用することができないわ。要するに、人によって大小の違いはあるけど、貯水タンクが二つあると考えるとちょうだい。一つは、生活するのに絶対必要なタンク。もう一つは、自由に使えるタンク。で、魔術に使う魔力は、自由に使えるタンクからしか取ってこれないの。そこからどう上手く効率的に、術として編み込めるかが、三流と一流の違い」

「じゃ、自由に使える貯水タンクがデカイ魔術師が優良ですよ？ コップ一杯分の貯水タンクとダム並みの貯水タンクじゃ圧倒的に差が出ますよ？ どんなに上手く編み込んでも、量で負けますよね、

努力するのも馬鹿みたいです」

生まれつき決っている才能によって魔術師は、優等か劣等か決められるということになる。

「そうね、名家と呼ばれる魔術家系は、それこそダムのような魔力を蓄えられるタンクを持っている場合が多いわ。その上、練り込む技術も頭二つ分飛び抜けている独自の魔術式まで編み出しているから、そりゃ生まれた瞬間に魔術師として勝ち組に入ったようなもんよ」

ベッドに座り込み右手の入れ墨を露にしてノーションが言う。そして、顔を沈めてゆっくり言った。

「ただね、落零れが天才を抜く方法があるのよ」

リオンは、ノーションの声が怖くなったのを感じた。ノーションが木の枝を噛み砕く音が響き渡る。

「自然界にある魔力を体内に取り込んで、体内加工をする。それで自分の魔力を一切使用せずに魔術の行使ができるわ。セフィロト・ドライブとやってることは同じね」

「なんだ。じゃ、加工技術さえ磨けば才能が無くても魔術師として一流になれるじゃないですか」

リオンが穏やかに笑った。努力が報われなければそれは嘘だ。そんな世界は酷過ぎるだろう。そんな思いがあつての笑顔である。しかし、今はそんなことはどうだっていい。リオンが気になる部分はこのまま月花を動かして、セレネが死ぬのか死なないのかという話だ。魔力が生命力ということは、やはり死んでしまうのだろうかとかネガティブな考えが頭をよぎった。

「それがMFならまさにその通りよ、何の問題もない。ただ、人間がこのやり方ばかり使っていると自然界の莫大な魔力が癖になって、自分の体が自由に使えるタンクの持ち分を錯覚するのよ。いざ自分の魔力を使った時、セーフティーの仕切りを突き破って……いつも通り自然界に魔力を出し尽くす。生きるために必要なタンクの魔力も根こそぎ外に、ね」

「出し尽くすと、どうなるんです……」

静寂が訪れた。外で誰かが歩いているのか、砂を擦る足音まで聞こえてくる。

恐らく、二丁三人が宿屋の前を通過したのだろつ。通過するのを待って、ようやくノーションが口を開いた。

たった数秒がリオンには、長過ぎる沈黙に思えたのだった。

「死ぬわ。ミイラみたいになつて」

リオンは何も言わずに、ノーションの右腕に彫られた幾何学的な文字を見た。あれが魔術を発する術式。そして生命力を削って、力を行使する紋章。魔術について考えを改める。

「安心して。わきまえて使えば何の問題もないのよ。扱えない魔術を無理に使うとするからそうなるだけ。編み込み方を工夫すれば大抵の魔術は使えるようになるわ。ズルをした罰ということかしらね」

詰まらなさそうにノーションは、折った植物の枝を見て黙り込んだ。何かを探るようにリオンの瞳をその緑の瞳で覗く。

リオンの早く答えをくれ、という顔にノーションはようやく気が付き話を戻す。

「とまあ、魔術についてのお話はここまでよ。ただ、MFを丸ごと人間の魔力で動かす場合、人間三人分は優に超える魔力がいるわ。名門中の名門魔術師や、体中を魔力に特化させたホムンクルス人造人間でも自由に使えるタンクは一般人四人分が限界よ。命を懸けて六人分に届くかどうかといった所ね。重量といいパワーのありそうな月花を動かすには普通の倍の魔力、最低六人分の魔力がいると見ているわ……セレネは人間ではないわね？ 名門魔術家系のお嬢様がこんなところを旅しているとも考えられないし、ただの名門魔術師やホムンクルスならそこらへんでミイラになってるわ」

彼女はもつと強力な何かだ、ノーシヨンの研究者としての勘がそう言っている。

吸血鬼や魔女といった類かもしれない。もしかしたら、精霊が具現化した可能性もある。“世の中にはあり得ないことがあり得ている”それが、彼女の師匠の教えであるため、ノーシヨンは様々な可能性を考慮する。

「はい、彼女は……特別な存在です。今はそれしか言えません」

恐らく隠しても無駄だと悟ったリオンは、セレネを遠まわしに人間でないと認めた。

「特別な存在のセレネでも、魔力の使い過ぎで……死ぬことはあるんじゃないか」

ノーシヨンは透き通るような赤い石を何も言わずにポケットから取り出し、石をレンズのようにしてリオンを見る。

「“賢者の石”って知ってるかしら？」

賢者の石。

それは、あらゆることを可能にする万能の石。魔術師と対立する存在である技術師の昔の姿、“錬金術師”が追い求めた最大の目標である。

黄金变成、不老不死、人間の霊性の完成、宇宙の完成、など全てを可能にする夢の詰まった石。

ところが、錬金術師は魔術師のあまりに早い発展に焦りを感じ、派生した化学と科学の発展に力を注いだのだった。

そのため、当初の目的だった賢者の石は、空想の理論として放棄され、語り継がれているだけとなっている。

今では、技術師の一派として、ごく一部の人間が錬金術師と呼ばれ、賢者の石の生成を研究している。

尚、魔術と錬金術は共通点が多かったため、錬金術師が共和国に骨を埋め、共和国の発展に一躍買っていたことは皮肉としかいえない。錬金術師の目的は帝国の繁栄ではない。あくまでも賢者の石の生成なのだから、より可能性の高い共和国で研究するのは当然のことなのであった。

「賢者の石……願い事が叶う石ですよ。昔、絵本で読みました」

綺麗とも不気味とも言える濁った赤い石を見つめながら、リオンは石についての情報を思い出す。最初に原始人と呼ばれたことを気にしているようだ。

「差し詰め間違いではないわ。これはそんな大層なものじゃないけど、私たちの組織が開発した魔石よ。これを月花に付ければ、魔力の供給の手助けをしてくれるはずよ。帝国風に言えば、魔力の電池ね。ハッキリ言ってあんな胡散臭いのより高性能だけど」

ブツブツと自分達の手がけた石を褒める眼鏡の女性。生憎、リオンには何が凄いのか全くわからない。とりあえず、あの石があれば、セレネが死ぬことはないのだろうと認識する。

「ありがとうございます！」

石を取ろうと手を伸ばすと、石が上に逃げた。追いかけて掴もうとするが、今度は下に逃げる。

「あのお……くれるんじゃないんですか？」

「ダメ」

「ケチ」

「うるさいわね！ あなた達のお昼代で、今後の旅が苦しいのよ、タダじゃあげれないわ」

じゃ、なんでご馳走してくれたんですか、と抗議するリオンを無視し、ポケットに石を戻して再度ノーシオンは腕を組んで壁にもたれ掛かる。

巻き込んだから奢ってくれたんじゃないのかよ！と、リオンは唸るが欠伸をしながら聞く耳を持たないノーシオン。

都合の悪いことは聞かないという大人げない態度を取り続ける。

「これつけてあげるから、私たちの追っ手を倒してくれない？」

眼鏡をキラリと光らせて、ノーシオンは取引に出た。

「本当にアンタは糞野郎だなー！」

「おゝい、糞がどうかしたのかゝ。早くここを開けてくれゝ」

何も知らないセレネが部屋のドアを叩いている。

これから一波乱起こりそうな予感がする。いや、絶対起こるであ
ろう未来にリオンは肩を落とした。

第21章 勘違い、すれ違い

ノーションから月花の魔力供給を手助けする魔石を条件に、追手を撃退して欲しいとの依頼をされたリオン。

この依頼を簡潔に糞帰りのセレネへ伝えたところ

「追手退治か。リオン、頑張るんだぞ……生身でも諦めなければ、例え相手がメタルフレームでも勝機はある」

と、親指を立てて幸運を祈られた。遠回しに死んでこいと言われた。

当たって砕けるレベルではない。近づいて踏みつぶされるレベルだ。そう、当たる前に死ぬ。

「お前も頑張るんだよ！ 月花からの魔力消費を軽減するためには、あの石が必要だろ？」

「そ、そうなのか？ あいつは魔力で動いていたのかー。なら、その石が必要だなー。それならそうと早く言ってくれー」

少し戸惑った後、棒読みになり、やれやれと掌てのひらを上にあげるセレネ。悪戯がバレた子どもの様な反応だ。

その様子を見てリオンは、目を見開いて詰め寄った。本気で彼女のことを心配しているリオンにとって、はぐらかされてはいけな内容だ。

「真面目な話だ……しっかり聞いてくれ」

更に一步詰め寄る。セレネの石せっけん齟みそみたいな匂いにおいがする距離。

「昼間、お前を知らない家の子と言ったことか？　そう、怒らないでくれ。女は鈍い方が可愛いと言っただろう？　あれが“天然”という技だ。どうだ、効いたか？」

「そんなこと聞いてねえし、効きたくもねえ！　お前は、もう十分天然なんだよ、それ以上天然を極めたら悟りの境地だな！　そんなことじゃない。俺に何か隠しているだろ。それかなり重大なことを」

更に一歩詰め寄る。瞳が確認できる距離だった。

セレネはその蒼い瞳を泳がせて動揺しきっている。セレネが動揺したのは、食料を食べ過ぎたことを言及した時ぐらいだったが、今回はどこまで逃げても見逃すわけにはいかない。

「腹が減ったな、何か食おう」

「はぐらかすな。お前に関わる大切なことなんだ。もう、ノーションさんから聞いたぞ。お前……魔力、後どれくらい残ってた？」

肩で息をしながらリオンは我に返る。少女の両肩を捕んでいる手が肩に食い込んでいたからだ。セレネも脅えているようにみえる。ウインド村で暴行を受けてもケロッツとしていた彼女が目を潤ませている。

「リオン、手が痛いぞ。ううん……残っている魔力がどれくらいか自分でもわからないんだ、本当……だぞ？　私は記憶が無い、魔力の扱い方も忘れている。でも、月花は悪い奴じゃない。だから、問題無いんだ。……お前は気にしなくていい」

悲しそうな眼差しを浴びせてくるセレネを見ると力が抜けた。

今、「死んで来てくれ」と、お願いされれば、リオンは実行しそ
うなぐらい心が揺らいでいる。

気が付くのが遅かったのだ。リオンはセレネの目と鼻の先で、口論している。こんなに近くに彼女の顔があると上手く思考が回らない。そして何より、こんな悲しげな顔をさせてしまった自分の行いが許せない。

「気にしないでいいって……そんなわけ！」

機械を信じて自分は信じてくれない。一度だけ姿を見せてアレツきり音沙汰ない機械をどうしてそこまで信用できるのだろうか。アレは間違いなく危険なものだ。

力を入れ過ぎたら折れるんじゃないかと思うセレネの華奢な肩に残った自分の手形を眺め、「俺は部外者……か」と独り言を言うリオン。

セレネは何も言わずにただ、黒髪の少年を眺めている。その相手を氣遣う視線が、リオンをより不快な思いにさせているとも知らずに。

少年の背後では、腕を組みながら忙しなく人差し指を動かす女性が、眉をイライラと動かしている。

話が進まないことに我慢できなくなったノーションが二人の間に割って入った。

「セレネ。ごめんなさいね。知らないままにしておくのは、やっぱり可哀そうだと思ってリオンにあなたと月花のことを話したわ。あなた達のプライベートに首を突っ込むわけじゃないけど、あなたがいくら凄いタネを持っていたとしてもね……あの機体にそのまま乗っていれば普通、死ぬのよ」

最後だけ先生のような口調に変えて、少女の様子を見るポニーテールの女性。

セレネは窓の外を見て聞こえないフリをしているが、聞き耳を立

てていることがうかがえる。

「お金は入らないわ。私の趣味で付けるだけだからね。その代わりに、魔石を取り付けたら、私たちの追手を撒いて欲しいの。時間稼ぎだけでいいわ。私たちのMFじゃ、逃げるのが関の山。燃料を買うお金も底を尽きかけているし、今朝みたいに騙し打ちができるとも限らない。あなた達の月花は、敵のMF達に遅れをとっていない。見たところ、一対多数を前提に規格されているMFだし、装甲も厚い。こそこそ隠れて奇襲する輩には天敵なのよ」

ノーシヨンは本音を吐く。思わぬ食費が飛び出たことは確かに失敗だったが、このまま滅多に出会えない大きな戦力を利用しない手はない。

機体自体に欠陥はあるが今時、あれだけ性能が高いサウザンドを保有しているのは、交渉が困難なプライドの高い金持ちか軍人だけだ。

この根っこからお人好しカップルには、なんとしても追手を追い払ってもらおう。

ノーシヨンは、髪を研ぎながら考え込んでいるセレネの蒼い瞳をジッと見つめている。

「セレネ……何をそんなに悩んでいるんだ？ お前、魔力が無くなれば死ぬんだぞ！ 俺はノーシヨンさんに魔石を取り付けてもらうべきだと思う」

怒りに等しいリオンの声がだんだん弱くなっていき、最後には虫の無く声より小さくなった。言っている間に少女の息絶える姿を想像したため気分は最悪だった。

嫌だと言うからにはそれなりの理由がある。一般人が介入できない何かがあるといううことなのだろう。

「どうかしらセレネ？　急なお願いで悪いんだけど、追手退治をやってくれるかしら？」

ノーシオンは窓に腰かけ足を組む。セレネの命に等しい魔石をチラつかせて。

そして、脅迫にも等しい鋭い金色の瞳で蒼い髪の少女を捉えた。ドクターMと正反対の性質を持つノーシオン。

彼女の趣味は“弱った生き物をカイゴさせること”。

趣味の欄にこんなことを書かれていれば、すっかり母性溢れる優しい女性だと男は騙されてしまいそうだが、よく見て頂きたい……カイゴさせることが趣味だ。

ちなみに、介護ではない。悔悟^{かいつ}である。

自分のした事を悪かったと悟り、後悔させる方の悔悟である。

骨折した人物にドロップキックをすることが大好きな“痛い^{いたいけ}気”のある女性、それがノーシオンの本質であった。“痛い^{いたいけ}気”どころではない、もはや病気である。

その彼女の視線にも動じずセレネは淡々と言った。

「飯の恩もある。気が進まないが、追手退治……やってもいい。でも、知っておいて欲しいことがある」

「何かしら？」

生唾を飲み込むノーシオン。

セレネはボスツとベッドに腰を降ろし、そのまま寝転ぶ。そして、交渉決裂間違いなしの台詞をばやいた。

「私たちは、戦い方を知らない。恐らく時間稼ぎにもならない。戦闘なんてしたら殺されるだけだ」

セレネの言葉をゆっくり噛みしめるように聞き入れ、噓だと言いたげな表情で黒髪の少年に向けるノーション。

顔は笑っているが、明らかに怒りを秘めている。

「は、はい……俺達、戦いなんてできません」

沈黙が流れた。

隣の部屋のドアがバタンと閉まる音が、やけに大きく聞こえるぐらいの静けさ。嵐の前の静けさというべきだろうか。

「アツハハ！ そうなの？ 戦い方、知らないの？ アツハハハ」

ベッドの角で頭を何度か打ち付けた後、いきなり笑い始めるノーション。

何故か涙を流しながら笑っている。頭の打ち所が悪かったのではないかと真剣に心配するリオン。

ノーションが聞き間違をしているのではないかと思い、確認のためにもう一度言う。

「あの……俺達、戦うなんてできません。どうやって追手退治をー
ーぎえやああ！」

次の瞬間、リオンの顔が潰れた。何かが物凄い速さで、顔面に飛んできたのだ。

ドシャリと落下したのは“メタルフレーム戦闘論”と書かれた分厚い辞書のような本だった。上半分がへしゃげているが、これは今し方へしゃげたのだらう。へしゃげたてはやの辞書には血痕が付いている。

「戦えないなら追手退治なんてできるかぁ！！ リオン！ もっと

最初に戦闘はできないって言いなさいよ！ まさか、私を騙して魔石だけ取り付けさせるつもりだったのかしら？ 社会の厳しさを教えてあげましょうか？ それともストラックアウトして遊ぼうか？ 次は、お腹と腰の二枚抜きを狙うわよ」

物騒な宣言をして投げるモノを探すノーション。お腹と腰を二枚抜きするためには、貫通しないと不可能な現象である。

ただ、頭の打ち所が悪過ぎたのか、何故かノーションは壁に語りかけていた。

あれだけあの機体にこだわるセレネの様子から、長年愛用してきた愛機であると思っていたノーションは、当然彼らが戦闘も難くこなすメタルフレーム乗りだと思っていた。

「もう一人の私だ」などと言うから、絶対そうだと思っていたのだ。それに加え、月花を乗り回しても生きているという人外の魔力を持つている者である。

この条件から叩き出されるセレネとあの蒼い機体の戦闘力は、計り知れないと踏んでいたのだ。

確かに、少年少女の戦闘力は計り知れなかった。

戦闘ド素人なのだから、計りにも乗っていない。間違いなく計り知れないだろう。

周りの光を全て眼鏡のレンズに吸いこませ、ノーションが不気味に笑っている。

室内も外同様の暗い雰囲気が漂った。眼鏡が輝いている、月が嫉妬する程の輝きである。

「や、止めて下さい！ 今、羽の生えた人が俺の手を引っ張り上げている幻覚が見えました！ 次、食らったら、なんか持つて行かれますよー！」

「あなたが行くのは天国そうちじゃないわ……地獄じじくよ。さあ、いらっしやい。私の八つ当たり……付き合ってくれるわよね？」

蜂蜜のような甘ったるい声で、金髪の悪魔が少年を誘惑する　頭の可愛らしいポニーテールも、今はただ怖いだけの悪魔の角だ。

悪魔の可憐な右腕には、次弾が装填されていた。本のタイトルは“タワシとMFと資本主義”

関連性が想像を絶するタイトルだが、弾としての性能は想像できる。当たれば首の骨が折れるであろう。

「いい？　魔力を使えばこゆうふうに、魔力放出で辞典を弾丸のように扱うことも可能なのよ？　邪道で野蛮だからプライドの高い魔術師は使わないけど、私がそんなプライド持っているようにみえるかしら？」

ノーションを起爆させたセレネは、ボーっと枕を抱きしめ、ベッドの上から事態を見守っている。

リオンは、冷や汗を流しゆっくり相手の出方を見ながら後ずさる。残念ながら、ガラス張りの窓があつてそれ以上、逃げることはできない。

魔術とは魔力を術として扱うことの総称なのだから、ノーションの使う“弾丸飛ばし”は正確には魔“術”ではない。ただの“魔力放出”だ。

普通の魔術師からすれば、魔力を魔法陣や術式に送り込む時に使う魔術の基本だが、彼女はそれを武器へと昇華させてしまった。

魔力放出を極めた彼女が行う放出は、あらゆるものを吹き飛ばすスイッチ、銃のトリガーを意味する。

「土下座……」

「へ？」

振り返るノーションのドスの効いた声に、我を失うリオン。今度

は壁じゃない、窓に張り付いている少年に告げている。

「いいから早く！ 土下座しなさい！」

「はは、はい！！ すみませ」

轟音と共に凶器を発射するノーション。ガラスを突き破り、何かに衝突してボタンと外に本が落ちた。

破れた窓から夜風が吹き込み、カーテンを揺らしている。

「でした！！」

恐怖から土下座をすぐさましたリオンは、何が起きたか理解していない。

少年の後頭部を“タワシとMFと資本主義”が通過して行き、何かに当たったことも知らない。ただ、ガラスの破片が周辺に飛び散っていることだけ理解できた。

戦闘ド素人ならば、自分達と関わりを持たすべきでなかった。興味本位でとった軽率な行動が、力の無い少年と少女を殺しかねない事態になる。とにかく、今ならまだ引き返せる。魔石をさつさと渡して関係を断つべきであると考えるノーション。

「チッ……」

しかし、窓の外を見つめて、憎たらしさを込めた舌打ちをした。せめて一時間前に知っていれば引き返させることも可能だった。だが、もう遅い。

敵はすぐそこ、窓の外にいる。

「やばいわね。戦える戦えない関係なく、もう、あなた達を巻き込んでるわ。たぶん今回は、洒落にならないわね。チッ、動く

な！　しばらく土下座してなさい！　本当に死ぬわよ！」

顔を上げようとするリオンに怒鳴りつけるノーシヨン。言うや否や、部屋の電灯が消えた。

「うわぁ！　何ですか！？　何が一体？　電灯が消えてますよね、ノーシヨンさん。な、何が起こっているんですか？」

床に顔を付けたまま、慌てるリオンに食べ物の名前を教えるお姉さんのような口調で、ノーシヨンが言った。

「何って？　ころしあいよ、ころしあい」

シガレットケースから取り出したタバコを咥えながら話す。

入れ違うように鏡のようなメッキをしたライターを取り出し、ヘッドを片手で器用に空けて、瞬きする間にタバコに火を付けた。

眼鏡を外す金髪の女性。そのポニーテールは、金糸を思わせる。

タバコを吸うのは仕事の合図、眼鏡を外すのは殺しの合図

それが彼女の癖であり、スイッチだ。

非常事態だと言うのに、身長一六八センチという女性にしては長身の体を曲げず、堂々と窓の外を見ている。暗闇に写るそのモデルのようなシルエットからは、獲物を見るような、背筋が凍るような黄色の眼がガラガラと不気味に浮き上がっている。

魔力を送りこんで、視力を強化、単純に視力を数倍上げて索敵開始。

しかし、この女性は自身の癖から徹底的なミスを犯している。外からは暗闇の室内に浮かぶタバコの火　赤い点が丸見えなのだった。タバコの火がノーシヨンの頭部の位置を教えてしまっている。

外で獲物の動きを観察している集団は、それを見逃す程甘い相手

ではない。必殺の一撃を向かいにある小屋から発射する。

それが彼女の狙いだとも知らずに

赤い点を目掛けて放たれた一発の銃弾。まさにこの時を待っていたと言わんばかりに、的確な一発がノーシヨンの頭部を目掛けて突入してくる。

ガラス窓の骨子を通り抜け、金髪の女性の顔を抉ろうと螺旋を描いてドリルのように勢いを増す弾。

「release、release、リリース！ 全部……ブチまけるおお！」

予測していたとしか思えない程素早く、華麗なる詠唱……もとい、ただの品の無い台詞をブチまけたノーシヨンが、右腕から膨大な魔力を放出させ、銃弾を室外へと弾き飛ばす。

「ふう……」

とにかく、自分が囷になることで、少年を狙われる最悪のケースはクリアした。

後は、ストーカー共にお灸を据えればいい。今の一撃で、少し相手も出方を考え直すだろう。

MFならば遅れをとるが、生身の戦闘なら周回差をつける自信がある。アンチ・マジック対魔術装甲さえなければ、MFが相手でも負ける気はしないというのがノーシヨンの持論である。

ノーシヨンは金の髪を豪快に掻き上げて、土下座したまま動かない少年をフミツと踏み台にし、壊れた窓をまたぎ外に出る。

先ほど射出した本に直撃して、サングラスが砕けた短髪、ポロシヤツ男が道で倒れていた。それを足の先から頭の上まで、眺めて由々しげに踏む。

『ぐつ、……人形……め』

憎しみを込めた眼差は、灰色の軍服を着て、気だるそうにタバコを吸う金髪の女性を写していた。

大人の男性の低い声、恐らく過酷な試練を突破した優秀な兵士だろう。声に重みを感じる。

ノーシヨンは、敵である男が生きていることを喜んだ。彼の仲間が彼を見捨てて逃げれば、楽しいパーティーに招待してあげるつもりだからだ。

楽しくて、嬉しくて、涙と涎よだれと叫び声が絶え間なく人体から垂れ流し状態になるパーティーを。

手厚く歓迎すれば、勢い余って仲間の居所を教えてしまうかもしれない。この屈強な男が。この頑丈そうな男が。この頑固そうな男が。想像するだけで胸が高鳴るではないか。

それにこの強情そうな軍人顔……上からの意見をそのまま鵜呑みにして何人も人間を殺して来た人間の顔だ。

ペンダントの“彼”に死ねと命令をした上層部、それを疑い無く実行し、実行させる軍人。

吐き気がする。

自分も何十という人間を殺して来たが、いつ見ても軍人というものは、胸焼けを誘う。

一時間でも一日でも一週間でも、いたぶり、首謀者の元へ生首を届けてやろう。そんな盛大な計画を考えていたノーシヨンは、辺りの視線を感じた。

舌打ちを更にする。

今日は舌打ちを何回しただろうと冷静に考える一方で、この状況を打開する手法を考え付くだけ頭に並べる。

一般人の波に紛れこんで、隠密部隊がこちらを見ているのだ。

まだ、夜の十時である。小さな村とはいえ、それなりに栄えているこの村は、近々、街へと名前を変える予定だ。

夜更かしをする若者、飲み倒れている大人、夕食を楽しむカップルなど、人は今でも多い。

敵のターゲットは自分。

自分のターゲットは何人いるかわからない、住民のフリをした帝国軍人。まんまと誘き出されたのだ。

いくら魔術師でも、背後から斬られたり、頭を撃ち抜かれれば死ぬ。

かといって、防御魔術を展開し続ければ、魔力を消費し過ぎて、いざという時に魔術を使えなくなる。

（全く……さすがプロフェッショナル、舐めるんじゃないかった）

ここにいる無関係の数十人と紛れこんでいる標的数人を殺すのは容易いが、虐殺が共和国軍に見つかるマズイ。

共和国軍は、かなりいい加減な機関だ。

首都圏ならばまともな軍人がいるが、この辺境の地に追いやられている軍人は人間的にも、社会的にもカスだ。公の力がなければ何もできない、二の次には「軍に刃向かうのか！」と吠える犬である。ただ、ウジ虫から進化した犬なため考えることが汚い。

生物学的にも物凄い進化であるが、それがこの国の軍であり、戦争から得た平和の果てだ。

平和は人を腐らせる

戦争は人を狂わせる

万が一、そんな口くでもないウジ虫に捕まれば、何もしていかなくとも永遠の奴隷犯罪者としての烙印を押されるだろう。

そうなれば、指一本触れる前にその軍人は、この女性に殺されるだろうが、軍人をこんな公の場所で殺せば、それこそ彼女の目的が果たせなくなる。

となれば、敵は一匹ずつ丁寧に殺さないといけない。

誰の目にも付かず、誰の助けを呼べない状態にして存在を抹消す

る必要がある。

人ごみを三六〇度見回し、怪しい人間がいないかチェックする。相手はプロだ。そんな目立つ人間に化けているわけがない。疑えば疑う程、周りが全員敵だと思い込んでしまう。

疑心暗鬼、被害妄想。

周りの人間全員から見られている気がする。周囲の人間全員が自分を殺そうとしている。そんな心理状況に陥りそうになる。

だが、実際はただ、「これからどう彼女を落とすか」、「今日もいい一日だった」、「居酒屋のやつが気にいらねえ」など、何気ないことを考えて道を歩く人ばかりである。

いくら訓練を重ねた帝国軍の隠密部隊でも、生身で彼女には勝てない。彼女もまた、セレネと同じく人間ではないからだ。

一般人四人分の魔力タンクを持つ人工的に作られた特別な存在である。しかし、直接戦うから負けるのだ。

隠密らしく、寝首を狩ればただの女　ただの人形

ただ、魔術師の寝首を狩るのはほぼ不可能だ。魔術による探知やトラップが寝床にまかれているため、暗殺成功率はかなり低い。

ならば、トラップにはめて、背後から殺す。遠方から狙い撃つ。敵が、逃げ失せると踏んで外に現れたノーションだったが、殺意のある視線は、人影や屋根、小屋の影からこちらを突き刺す。

逃げる気など更々ないと言った様子だ。どうやら、ここで寝ている彼は、部隊にとつても、もう用済みらしい。

本で顔を打ち抜いた男の腹には爆薬が巻き付けられていた。

（カミカゼ……だったかしら。　たかが人造人間ホムンクルス一体に必死過ぎるわね）

まだ、こんなテロ紛いな戦法を続けているなんて、呆れて物が言えないノーション。

怒りでつい、魔力を込め過ぎた。男の顔面へ。

男の顔が脳味噌に吸われたように内側にめり込む。若干残った、口から血の泡を吹いていたが不快だったので残りも全部潰す。顔が無くなったソレを、酔っ払いが寝ているように路地裏に吹き飛ばす。

口に啜えた煙を肺いっぱい吸いこんで、吐き出し、ついでに一言吐き出す。

「で、次は誰が私を　　気持ち良くしてくれるのかしら　　」

魔力放出を極めた例外的な魔術師がニタリと笑う。霧の様な白煙が舞う中、魔女と勘違いされても仕方がない程……残虐に。

第22章 油断（前書き）

「あれ…タグにロボットってあつたんだけど」というお話です。

第22章 油断

（魔力量……良好。 心拍数……異常なし。 この辺りの霊脈は……私、好みね。 ふふふ、ちょうどいいわ、人形……舐めんじやないわよ）

路地裏に吹き飛ばした隠密を一瞥して、ノーシオンは鼻で笑う。
地面を踏みしめて、霊脈の大きさを計った。

霊脈が良ければ、外界に散布されている魔力が大きく、より多くの魔力を体内加工し、魔術として使うことが可能だ。

故に、霊山など魔力の根源となる地に魔術師が立てこもると、要塞と化する。

ただ、メタルフレームのセフィロト・ドライブよろしく、分を弁^{わきま}えない魔力の取り込み過ぎは、魔力タンクを破裂させることになる。体内で爆弾が爆発するようなものだ。

幸か不幸か、この地の霊脈は、霊山が近いこともあってかなり優秀である。 一般的な魔術師ならば、人間爆弾になるだろうが、ノーシオンにとつては、ちょうどいい大きさである。

この霊脈ならば、魔力を失敬しても、地が枯れるという事態にはならないだろう。

持久戦になったとしても自分が圧倒的に有利であると、ノーシオンは考えている。

この村を監視している軍人に悟られては不味いため、あまり派手な魔術は使用できない。

炎を出したり、MFを遠隔操作させたり、光を放つ魔術は論外だ。戦争でもないのにいきなり攻撃魔術が使用されたら、住民は通報するに決まっている。そうなると住民も敵と見なすしかない。通報される前に殺せば問題ないのだが、一人が目撃すれば、二人に伝わり、三人が叫び声を上げ、四人が通報する……。

ノーション一人で、処理しきれない情報の伝達が人の社会にはある。

そして、ノーションの使用できる魔術は、大軍向きではない。一人ずつ着実に殺すタイプだ。

無数にいる民間人を証拠隠滅のために殺すことは得意ではない。

魔術師は殺すことに躊躇^{ためら}いを持つてはいけない。

魔術師は犠牲を生け贄と考えなければならない。

他人が死んでも、目的を果たすために必要だった血と肉だったと考えるのだ。故に無駄死にという概念は存在しない。

ただ、自称修行中のノーションは、理想的な魔術師像から遠くても仕方がない。誤って、殺すことに躊躇^{ためら}いを持ったり、生け贄を助けてしまったりすることも多々ある。

彼女がいくら魔力放出を極めた魔術師でも「修行中」の身なのだから。

（やっぱり、私の十八番で仕留めるのがベスト。 魔力放出 音も出ないし、光もあまり出ないし、瞬殺だし うん？）

若い男女が舗装されていない道からこちらに歩いてくる。男に腕を絡ませた女の方と目があった。何故か満足そうにノーションに笑いかけている。勝ち誇った笑みだ。

カップルだろうか、妙に密着している。イライラする。

（……上等じゃない。あなた、良い根性しているわ）

すれ違う瞬間、女は男の腕の隙間からノーションを横目で見ていた。

ノーションが苛立っているのは、女の方ではない。

男の方だ。

ノーシヨンは、自分の容姿をイケていると自負している。

艶やかな金髪ポニーテール、知的な顔立ちに加えて、身の締ったボディーライン。スラッとした体格に、服を押し上げている女らしさ。

これらの魅力が盗んだ軍服を着ているからといって見劣りするとは思えないし、思っていない。

男ならば、まずチラチラとノーシヨンに視線を飛ばしてくる。

尻尾を振りにやってくる。

それがどうだ。

正面から歩いて来たにも関わらず、決して美しいと言えない彼女を連れたフードを被っている男は、チラッどころか全くノーシヨンを見ていなかった。いくら彼女に一途でも、軍服を着た人間がいれば、言い掛かりをつけられて、彼女に危険が及ぶかもしれないと少し警戒ぐらいするだろう。

ここにはまともな軍人などいないのだ。

フードの彼が興味も無く、ただノーシヨンの側を通り抜けた理由、それは

彼女の正体を知っているからとしか考えられない。

ノーシヨンは身構えた。必ず背後からの攻撃が来ると確信して。風を斬る音がわずかに聞こえた。

（なっ！？）

空気を斬る二つの音が、村の賑わいに紛れてかき消える。

それらの切っ先は、まるで再開を喜ぶかのように、ノーシヨンの体に向かって接近する。

右側から飛来したナイフを、体を後退させて避ける。ノーシヨンを目隠しするように、通過して行く銀色のナイフには、強化の魔術で黄色く輝いている自分の目が写っていた。

カッという音と共に、宿屋の壁に突き刺さるナイフ。

予想外の方向からの攻撃を間一髪で避けたのも束の間。もう一本、死の軌道に乗っているナイフが残っている。

予測していた背後からのナイフだ。

左足を軸にして半回転し、強引に避ける。すぐ反撃できるようこの回避方法を実行したが、予想外の真横からの攻撃に気を取られてしまい、背後の攻撃に対して反応が遅れている。避けるだけなら十分に間に合うが、カウンターをするには遅過ぎた。

反撃は先送りにするしかない。

ただ、最大の予想外は、背後のナイフがノーシヨンの避けるであろう場所へと、あらかじめ投げられていたということ。

（チッ！ お見通しってやつ？）

頭一つ分横を狙って投げられていたナイフの軌道に気が付き、ノーシヨンは、慌てて体を元居た場所に返ろうと捻^{ねじ}り返す。ナイフに当たりに行こうとする体を巻き戻すかのように。

柔軟があったおかげで、こめかみに直撃することは免れた。

しかし、ポニーテールを作りだしていたリボンが切断され、金の髪が溢れるように広がった。

闘牛士のマントのように、ナイフを華麗に通過させる金の髪でできたマント。

バランスを崩して、ドシャツと倒れるノーシヨン。体を捻ったま

ま夜空を見上げるように地面に寝そべる。

人が倒れたと思い込んだのか周囲の視線を集めいた。

「姉ちゃん、酔ってるのか？ ひくつ、ふらふらあゝじゃねえか」

「あの、貧血……ですか？」

「馬鹿、軍人よ、関わない方がいい……」

等と呑気に声をかけてくる村人に囲まれる軍服を纏った金髪の女性。

「だ、大丈夫です。 ちょっと貧血でね、軍人といえど、私も……女ですから」

苦笑いして、村人から離れるノーション。

人形と言われた通り、彼女には女性としての機能はない。

寝起きは最高に機嫌が悪いが、貧血が起こる程体が悪いわけでもない。だが、村人に接近されるのは不味い。

目の前にいる彼、彼女が隠密かもしれないからだ。

正面から勝てないとわかっていするため、敵はどんな姑息こくそくな手段でも使ってくる。まさか、あのフードの男がフェイクでもあり、本命でもあったとは。

立ち上がり、フードの男を探すが、どこにもいない。

恐らく、隣にいた女性は村人だ。声をかけて一緒に歩かせたのだろう。さっきの女性の目は、平和しか知らない初な目であった。

仲間達が魔力を吸われミイラ化した姿も、愛する者をバラバラに吹き飛ばされたこともないのだろう。

かつて、ノーションにあった輝きを彼女は保ったままであったのだから。

恋愛ができる体でもない。

特定の人物を思いやる意志も摩耗した。

残ったのは、人を殺すことに特化したこの器だけ。
たくさんの命を撃ちとつてきた彼女が出した結論、

“人を殺すと目が死ぬ”

「死」を肯定するために「生」という概念を忘却したため、見るものの全てを「死」という真実に関連付けてしまう。

どこを撃てば死ぬか、どこを破壊すれば動かなくなるか、どれを殺せば陣形が乱れるか。脳裏にあるのはそればかり。

そんなことばかり考えていたため、彼女の目には、死が明確に見えるようになった。

「生」という偽りを「死」という真実が塗りつぶす。世界の幻想を破壊する。

魔力による補助が必要だが、ノーションに見えないモノはない。

熱源を感知できたり、建物が透けて見えたり、暗闇でも人の顔が見えたり、目の前にある偽りを無視して、彼女が求める真実という名の標的を見ることができる。

兵士としては最高の視神経と思考回路、しかし、一人の女としては異常な視神経と思考回路だ。

偽りに、平和に、溺れることができない。視覚が拒否する。脳が拒絶する。今日の味方は明日の敵、数時間後には自分が的にされていることさえある。

故に、絆を深め、共に歩める人間など存在しない。

彼女の見る世界は、ただの男では理解できない。

そのうち、人の心の内まで見えるようになるかもしれない。そうになると生きてなどいけない。

魔力を込めることで殺意や嫉妬、欲などの感情さえ視覚できるかもしれないのだ。彼女にはそれだけの才能がある。

心が壊れる。そうなった彼女の肉眼で見る世界は、残酷で、汚く

て、殺してしまいたいものばかりだろう。

今は、メガネのレンズによって、「生」というフィルターを掛けている。

何の変哲もないレンズだが、今は、数ミリのレンズが彼女にとって、「生」「死」を隔てている境界線だ。

「敵もやるわね……」

野次馬をやり過ぎた後に呟く。

勿論、フードの男が隠密であると視覚から理解できていた。

しかし、フードの男が、隠密の仲間と接近してこなかったことが、ノーシヨンの判断を鈍らせたのだ。

あれが二人とも隠密ならば、すれ違った時に肋骨を粉碎する圧力で魔力放出をかけていただろう。

しかし、ノーシヨンはそれをしなかった。いや、できなかったと言った方が正しい。

ノーシヨンに正体がバレて、さっきの隠密のように殺されたとしても、隣にいる一般人である女性と関係を持つておくことで、どの可能性をとつても軍を呼ばせることが可能である。

男だけ殺したとしても、隣で人が死ねば村人の彼女が生きている限り、軍に連絡するだろう。あれだけ密着させていれば、女性に気付かれず暗殺することも不可能だ。

かといって、女性もろとも抹殺した場合、彼女の帰りを心配した身内が軍に連絡してしまうかもしれない。

ノーシヨンとて、犯行現場を見られる可能性が高いこの場で、人との繋がりがある隠密以外を殺害することは、愚策であると考えている。

二段構えの周到さ。そして、先の先を見越した先ほどの一手。ノーシヨンが軍を頼ることができない状態を巧みに利用している。密入国している帝国軍の隠密が、こうまで敵地で巧妙に動き回る

とは思ってもいなかった。

「ここでの戦闘は絶望的に不利……か」

相手の位置がわからない、自分の位置は相手から丸見え。自分が相手の状況ならば願ってもない狩り場なのだが、逆の場合何もできない。

そして、自分の行動パターンまで読まれている。イレギュラーな何かが起こらない限りこの場を突破することは難しそうだ。

しかし、彼女は祈ることをしない。神など信じていない。神秘を祈る神父ではなく、神秘を解明する魔術師であり、MF研究者でもあるため、当てにならない不確定要素は信じない。

されど、彼女は「可能性」を信じる

肩まで下りた髪の毛を耳にかけて、分析しなおす。

この状況を打破する「可能性」を導くために。

（この中から隠密を探すことは、透視魔術でも不可能。状況を讀みながら、周囲360度全てを警戒することは、かなり神経を使う。焦りと苛立ちで、心拍数に乱れも出ているわね。霊脈のバックアップがあっても殺す相手がわからないんじゃ、何の意味もないわ！）

落ち着け、落ち着け。

何か、何か解決策を出さねばならない。

戦場を変えるのが最も勝率の高い選択だが、今この場を離れれば、宿屋にいる少年と少女は誰が守る。戦闘素人がプロの殺し屋を相手に3秒も生きていられる筈がない。

それに自分達と話しているところを見られているだろうし、連れ去られて拷問漬けにされるのがオチだ。

彼らを見捨てるという選択がノーションにはなかった。ノーション自身もそれができない自分をもどかしく思う。

（つくづく甘いわね……関わったから殺せない、関わらなかったから殺せるなんて、横暴な神経してるわほんと。極力、人との接触を避けてきたのに、この様とはね。興味本位で関わりを持つべきじゃなかったわ。はあ……どうしようかしらね。ただの移住民だったら共和国軍様に助けを求められるのだけど）

打つ手がないと頭を悩ませていたノーションに終止符を打つ存在が現れる。

ノーションは全く気が付いていない。

バン！

銃声が一つ鳴り響いた。

「オラ！ オラ！ さつさと家に戻りやがれ！ 今から集金だ。1人当たり1万だ。払えない者は体で払ってもらおうか。入隊意志のある者は路上に残れ」

道行く村人達は、悲鳴を上げて店の中に全力で逃げ込む。入隊とは永続的に軍の雑用をさせられることを意味している。

軍に所属する奴隷になりたいものは、路上に残れという意味だ。ノーションは、流れ来る住民に紛れ、咄嗟に先ほど始末した男が寝ている宿屋の路地裏へ身を隠した。

あれだけの人の波に紛れていたのに、隠密からの攻撃がなかったということは、彼らも状況が掴めず身を隠すので精一杯だったということだ。

軍人が民間人に牙を剥くなど、自由と平等を謳う共和国で行われ

ていると思っていなかったのだろつ。

概ね、愛国心に溢れた帝国の隠密は混乱している。

ノーションがどこの家に入ったのか、どの路地裏に入ったかなど、あちらはわかっていない。

軍もそつだが、隠密から身を隠すことができれば、こちらのものである。

いや、ほぼ勝ちと言っても差し支えない。

本当の狩りがこれから始まる。

第22章 油断（後書き）

会話文……少ないですね。

拙作はどうかやら会話文36%で構成されているらしいです。

第23章 銀の魔弾

「軍人様の集金部隊がお出ましですか。やることは最低だけど、今だけ感謝してやるわ」

顔の潰れた隠密から何か武器になる物を物色し、ナイフを二本見つけた。

一つは重みのある万能のコンバットナイフ、もう一つは、先ほどノーシヨンの顔面に飛んできた左右対称のスローイングナイフ。爆薬が巻き付けられているため、こんな男の側にいつまでもいたくないのだが、状況が状況だけに迂闊な行動が取れない。

集金部隊が現れず、あのままの状況を維持されていたならばノーシヨンは仕留められていただろう。

（乱れた社会万歳、歪んだ社会ありがとう！ なんてね）

ノーシヨンは、スローイングナイフとコンバットナイフを交互に空中で回転さ、重さを計る。

傍から見ると遊んでいるように見えるが、これは彼女にとって敵を倒せるかどうかを計る大切なことなのだ。

（……まあ、細い方は微妙だけど、太い方は十分な重さね）

二本のナイフを宿屋の壁に突き刺し、狭い路地から周囲を見渡す。今、建物内に入っていない人物の中に隠密はいる。

路上で見つかれば軍の奴隷。それがわかつている村人ならば無駄な抵抗はせず、賢く建物内で身を震わせるはずだ。

では、自分と同じく路地裏で身を隠す者は何者か。

一つ、税金が払えない村人。

ちょうどノーシヨンの前を大急ぎで、横切っていったみすばらしい少年はそれだろう。

二つ、軍に一矢報いようと、自由と平等を掲げ武装した村人。幸いそれに該当する者は狩り尽くされていて、もういないだろう。今頃、村の隣にある軍施設で本当の自由と平等を叩き込まれているに違いない。

三つ、共和国軍に身元がバレると不味い人間。他国の隠密とか、隠密とか、隠密である。

休戦状態とはいえ、敵国からの隠密は、戦争の起爆剤になる恐れがある。それを知っている隠密達は、隠密とバレる前に自決するだろうが、死にきれない結末が待っている。

勿論、偽造の身分証明があるため簡単な検問ならば身元はバレないだろうが、隠密部隊がいくら完璧な身分証明をした所でどうしようもないことがある。

標的の暗殺を目的としているため、体の至る所に武器を隠し持っているのだ。

廃棄すればいい話だが、上手く共和国軍から逃げ延びたとしても、丸腰で魔術師と戦うなどガトリングガンにナイフで挑むぐらい無謀である。

武器を持っていて軍に見つかったならば、共和国に対する（この村に対する）反乱分子として殺される。丸腰で軍に捕まり、装備を整えようと帰ってきた所を魔術師に殺される。隠密に残されている道は二つに一つである。

任務を達成して死ねるならまだしも、何もしていないのに死ぬなど彼らにとってあり得ないことだ。仮にも選ばれた精鋭部隊。無駄死になど、名誉も何もない。

一方で、魔術師の武器は自分の体だ。

補助道具があるに越したことはないが、無くても何とかなる。そして、武器である体を弄られても、魔術師である証拠など見つからないし、体が武器であること自体わからない。

魔術師同士ならば、魔力を感じることと判断も可能だが、MFに乗ることができない下っ端軍人は凡人で編成されているため、ノーシオンが武器を持たない一般人という嘘は通せる。

殺されることはないだろう。

これらのことを踏まえ、隠密部隊は、自分以上に人目の付かない所に隠れている筈であると推測するノーシオン。

「魔力量……良好、熱源探知……開始」

重ねた魔術によって変質した目がノーシオンの観たい「真実」を写す。

サーモグラフィのように青と赤でできた世界が視界に広がった。その頃、集金兵が最初の民家に取り込み集金を開始する。ノーシオンが隠れている路地まで五つ離れた民家だ。

軍に見つかるにしても、まだ時間はある。

発見された時の適当な言い訳を考えながら、民家に密集する赤を流し、路地裏に視線を移す。

民家や飲み屋は、赤い人影が溢れかえっているが、路地裏には数える程しか人がいない。

どれが隠密かまではわからないが、これでいい。まずは絞り込み、どこに人が潜んでいるかを大まかに捉える事ができればいいのだ。

そして、屋根の上を走り抜けている黄色い影が一つ、何かしているのがわかった。

夜中に低姿勢で屋根の上を走るなんて、どんな村人だろうか。

軍から見つからないよう逃げるため、屋根の上を走るのならばまだ理解できる。

が、何故この黄色の影は集金現場に向かって疾走しているのだろうか。集金現場など見ても楽しいものではない。

ただ、帝国にとっては、共和国のおいしいスキャンダルである。相手の弱みは持って置いて損することはない。

隠密は、今この瞬間だけ、スキャンダル回収に動いたのだ。
それが、命取りだった。

（これすると目がチカチカするのよね。　　気持ち悪う）

壁にもたれ掛かり、こめかみを押さえるノーション。

熱源探知から、透視と視力強化に「目」を切り替え、屋根の上からこちらに走ってくる人物を見る。

小型カメラで接近しているかのような感覚で人を拡大して映し出す。

共和国軍を匿う気など皆無だが、この機会を利用するしかない。

隠密は、誰にも気取られていないつもりだ。　　現に、黒っぽい服で村人に擬態していたため、屋根上に人がいるとは誰も気が付かないだろう。屋根を走る彼は夜の闇に隠れている。

しかし、ノーションの目に夜の闇は通用しない。

壁に突き刺したコンバットナイフを抜き取り、魔力を込める。

今この瞬間、強化の魔術によってナイフは弾丸へと存在を変える。

余談だが、動く標的を狙うのは困難極まりない。　　更に、家と家の間つまり、路地裏から垣間見える屋根の上、そこを通過する標的を狙撃することは不可能だ。

姿を現した瞬間に引き金を引くだけでも難しい。

マシンガンを連射し続けて待っていても、通過する瞬間に一発当たるかどうかといったレベルだ。

それをノーションは、一本のナイフでやろうというのだ。

（せめてもう一人、殺せてもらおうわ。　　ロック……オン）

銃のように右手の人差指と親指を立てる。

壁に向かって、右腕を構え、弾倉に弾薬をセット

イメージはそう、撃鉄。弾丸を発射する装置の一部。

ガン、ガン、ガン、ガン。

体内に眠る魔力という撃鉄^{タンク}を、今、起こしていく。

目標通過まで後十秒

左腕で右腕^{ライフル}を固定。透視により見える標的へ、銃口を向ける。

本来、魔力放出は、手で仰ぐ程度の風しか発生しない。

しかし、人知を超えた魔力量、放出という魔術過程を極めた魔術師の魔力放出は暴風を超える。

それを抑え込んで、発射という動作に収束させるとどうなるか。

体内に眠る四つの魔力タンクを目覚めさせ、命じるのは単なる“放出”

弾丸^{ナイツ}が飛ぶ弾道をイメージし、発射のタイミングを心で唱える。

目標通過まで後八秒

魔力^{火薬}準備完了。

発射^{コッキング}準備完了。

後は、引き金を引くだけ。集中し、コンマ数秒の発射タイミングを待つ。

ノーシヨンの吐息が漏れる。緊張を解そうとするが解れない。しかし、疾走する標的が急に止まった。

（チッ、バレたか！？）

違う。軍人が一件目の集金を終えて家から出てきたのだ。今、近づけば屋根に潜んでいることがバレると考えての停止。

まだ、バレていない。

修正、目標通過まで後9秒

軍人が民家に入る。再びゆっくりと動き出す、標的。

（早く来なさい！）

ジリジリと音を立てる魔弾。

これ以上魔力をセーブするとナイフが壊れる。

目標通過まで後五秒

弾が碎けるのが先か、目標が通過するのが先か。息を止める。

四

（……まだ）

三

（まだ、早い）

二

一

魔力放出

撃鉄作動！

（行きなさい！ 女を待たせた不届き者をブチ抜くのよ！！）

ダッシュ、という小さな音と共に放たれた必殺の魔弾。

魔弾は呻き声うめを上げて、空に加速する。

空気を突き破り、風を斬り進み、刹那で通過する目標の頭部へ、その切っ先を突進させる。

早過ぎれば目の前を通過する。遅過ぎれば後頭部をかすめる。コンマ一秒の狂いも許されない狙撃。

その時、隠密は見た

地上より放たれた銀の魔弾を。高速、否、音速だったかもしれない。

自分の頭部にそれが通過していなければ、存在すら認知できなかったであろう銀の魔弾。

頭部にナイフが貫通し、思考するパーツを根こそぎ奪われた隠密は、空を舞っていた。

力の抜けた隠密は、そのまま屋根から数メートル吹き飛び、地上の丸太を倒して派手にこの世を去った。
ガラガラガランという音が鳴り響く

「ナイフは……」

タバコに火を付け、メガネを胸ポケットから取り出し、肺をニコチンやタールで満たす。

白煙を吐きだしながら、ついでに一言吐きだす。

「……こうやって使うのよ」

誰に宛てた言葉か、肩まである金髪の女性はそれだけ呟いた。
混乱し始めた表通りを背に“金色の狙撃銃”は宿屋の裏口へと消える。

それは白煙のように、風に撒かれて夜の闇へと姿を消した。

第23章 銀の魔弾（後書き）

いつも読んで頂いてありがとうございます。
次回、主人公が出てくる予定です。

第24章 某国の犯罪者（前書き）

室内で行われていた主人公のお話を少し追加しようとしたら、量が凄いことになってしまいました（汗）

消そうかと思ったんですが、掛けた時間的に消すことが惜しいと思ったので、載せておきます。

外では生死をかけた戦闘が行われています。

第24章 某国の犯罪者

リオンはノーションが窓から外に出た後、セレネと共に隣の部屋にいるドクターMを訪ねた。

彼なら何か、この非常事態に知識を貸してくれると考えたのだ。一緒に旅をしている仲間が殺し合いに身を投じていると知れば、何か解決策を教えてくれるかもしれない。

「爺ちゃん！ 大変なんだ！ …… いないのか！？」

ドアが破れんばかりの勢いでリオンは部屋に入る。
静まり返った部屋は真っ暗だった。

「…… 静かにせえい。壁に張り付きながら、ガッツポーズを三回、屈伸運動を五回、最後に人生で最高の笑顔でここまで来るんじゃ。決して間違えるんじやないぞ？」

枕ぐらいの大きさの老人は、息を殺しながら、ベッドの下から顔だけ出して二人を手招きする。

言われた通り、ガッツポーズを三回、屈伸運動を五回、満面の笑みで老人の元へ寄る。直線距離でおそらく五歩程で到達できるベッドに、何故こんな回りくどいことをしなくてはいけないのかと内心で思いながらも、リオンは指示に従った。

「ころしあいよ、ころしあい」と言っ外に出て行ったノーション。

確認できなかったが、恐らくノーションは自分達を助けてくれたのだ。

本当に殺し合いが始まっているのならば、戦い慣れしていると思われる女性の相方の言うことを聞くのが賢明である。

「ははは、これでいいのか？」

リオンはノーションのことを気がかりに想いながら、笑顔を無理やり作って老人の側に駆けよる。

「うわ、本当にやっておるの。あやつは……痛い子か？」

「許してやってくれ。頭が……悪いんだ。でなければこんな状況で笑ってられない」

後から部屋に入ったセレネが一足先に老人の側に座り、ヒソヒソ話をしながら、満面の笑みで接近する少年を一瞥していた。

「アンタがやれって言ったからやってんだろぅが！！　こんな状況だ。何か意味があると思うだろぅ！」

「あやつは、思い込みが激しいのか？」

「ああ、私も手に負えないんだ」

怒涛の叫びと共にリオンが、老人を引きずり出した。

老人にゲンコツを三十回程叩き込んで、はあはあと、肩で息をするリオン。

頭にヤドカリのようなコブを連ねたドクターMは、上機嫌でベッドの下に再び潜り込む。

リオンのせいで頭がおかしくなったわけではない。　そうゆう個性なのだ。

元々、特別なオンリーワン。

一方で、セレネは、モグラ叩きのように“もっと叩いてくれ”と目をウルウルさせている皺だらけの顔を好奇心から踏みたい衝動に駆られていたが、理性で我慢した。

リオンに怒られるから我慢したのだろぅ。

リオンとセレネはベッドの隣にしゃがみ込み、老人の顔に近づく。長いまつ毛を動かして、何も言わない。

「爺ちゃん、一体何がどうなってるんだよ。“殺し合いだ”って言うてノーションさんが出て行っただよ！ あり得ねえ、共和国軍が管理している村のド真ん中で殺し合いなんてしたら」

「だから、声が大きいわい、静かにせえ。彼奴等^{きやつひつ}は相当焦っておるの。ちなみに、お主も標的に入っている可能性が高い。よいか、今からワシの言うことをよく聞くんじゃ」

更に声を殺してドクターMは、リオンの黒い瞳を覗きこんだ。

生唾を飲み込むリオン。

まさか、自分にノーションを助けに行け、とでも言うのだろうか。それとも敵がすぐ近くにいたため、囷になれとでも。

いずれにせよ、受けて立つ。老人や女の子に守ることは当然のことだ。体を張っても守って見せるつもりのリオン。

「……お主は素足で踏まれるか、ヒールで踏まれるかどっちがふぎゃんん!!」

「ごめん……突然過ぎて、最後まで聞ける気がしなかった」

真顔で老人の顔を踏む若干十七歳の少年。英雄志望でも難しい選択だった。

ドクターMの顔は、何故だが踏み心地がいい。巨大なマシュマロを足で踏みつぶすような未知なる感覚、足を突っ込んだ時に帰ってくる程良い弾力、そしてこの効果音……^{老人の声}余韻に浸るリオン。

こうやって不良や親父狩りが生まれて行くのだと実感した。

「うん？ どした？ セレネ……」

リオンは服の裾がクイクイと引つ張られ、顔をやると……目を輝かせて、お座りをしている犬セレネがいた。

尻尾があれば、ワイパーの代わりが務まるぐらい左右に揺らしていることだろう。

“次は、私がやりたい、是非やらせてくれ” そんな顔をしているセレネ。

あえて無視するリオン。

“きやううん”と寂しげな声を出すセレネ。

（なんなんだよ、あの反則的な目使いと声は！ こいつにこれ以上おかしな性質を与えると……とんでもないことになる、だから無視だ、全力で無視だ。心を研ぎ澄ませろ！）

奥歯を噛みしめて、セレネの視線から目を逸らす。

どうやらドクターMは、人をドSにする才能があるらしい。

さすが、ドM。

リオン自身、ウインド村にいた頃、老人にはそれはもう優しく接していた。今、この姿を姉にでも目撃されたら、“一週間ご飯抜きだよ！の刑”に処されるに違いない。

この刑罰は、なんだかんだ言って“ちょ、ちょっとだけだからね”などと言って、気が付けば初日から晩御飯を普通に食べさせてもらえる、マリアらしいと言えばマリアらしい刑罰だ。

方位磁石にS極とN極の間が無いように、人間もドSとドMのどちらしか存在しないのかもしれない。

“ドクターMを踏んだ人物はドSになる” 一種のジンクスや呪いにならなければならないのだが。

「しゅんおんらい、しゅんおんらい」

「あつ、ごめん。爺ちゃん！」

踏まれたまま、ドクターMが口を動かしたため、リオンは慌てて靴を退ける。

「やはり、お主はいい線をしておる。何故、女に生れなかつぎゃんうう!!」

「ごめん、頼むから本題に入ってくれ。そろそろ本気で人殺しになりそうだ」

この後、セレネがりオンの袖をまた引つ張ったことは、言うまでもない。

「まさか、軍の管轄している村で襲ってくるとは思っておらんかったわい」

「だいたいなんであんな奴らに爺ちゃん達は狙われてんだよ!」

顔に靴後を付けたドクターMが正座しながら、「うむ」と頷く。

「心当たりが多過ぎてわからん、ハハッ!」

「爽やかに、とんでもないこと言わないでくれますか!　じゃ、なんだ……あいつらは、爺ちゃん達を捕まえようとしている……軍の部隊で間違いないんだな。あんたら、やっぱり犯罪者か?」

老人は眉をピクリと動かした。少年が今朝の混乱した状態で、どうやって軍のMFと判断したか定かではないが、この少年を侮り過ぎていたようだ。

少年達を下手に刺激して騒がれると不味い。

リオンは一步後ろに下がり、右手でセレネを庇うように身構えている。

「リオンよ、お主は二つ間違えておる。彼奴等はワシらを捕まえようなどと考えておらん。殺そうとしておるんじゃないよ。そして、もう一つ。軍に追われるから犯罪者だという安直な考えは止めた方がええ。今の世の中、罪もなく軍に殺される者はたくさんおる。ワシらもその内の一人かもしれないじゃろ？」

ツルツルの頭を撫でながら老人は、続ける。先ほどのヤドカリのようなコブはもう治っていた。

「それに犯罪者なら、村に入った瞬間、共和国軍が全勢力を持って押し掛けてくる。大義名分があるならば何故、こんな姑息な手段を取る？ それができんということは、彼奴等に非があるんじゃないかの？ 人目に付くと不味い何かがの」

ドクターMはベッドの下から、顔だけ出してリオンの顔を見る。

「……確かにそうだけど。共和国軍がそんなこと、国を守っている軍が民間人を暗殺しようなんて！ そんなことするのかよ！」

「ん？ 追って来ておるのは、帝国の軍人じゃろ。共和国軍なら、それこそ村に入った瞬間、蜂の巣にされとるわい。それにお主が思っている程、共和国も帝国も、まともではないぞ？ 国は守っても、民衆を守らん軍人がそこらを歩き周っておる。現に、お主らも殺される所だった。恐らくノーションがどうにかしたんじゃないが、あの部屋にあやつがおらんかったら二人とも死んでおったかもしれない。巻き込んでしまったことは、ワシから謝らせて貰おう。じゃが、どっちの国にしても、軍は信用せんほうがええ」

帝国の軍人が敵国に潜入してまで暗殺しようとする人物とは一体何者だ。ただの凶悪犯ならば両軍共に協力体制を敷いて、捕まえるはずである。ならば、犯罪者ではないというのか。

しかし、リオンはまだ納得がいかなかった。犯罪者が軍のことを悪く言うことは当然だし、彼らの素性があまりにもわからな過ぎる。軍の隠密部隊から狙われる一般人なんていないだろう。

それに、共和国は民主国。軍が何もしていない民衆に危害を加えるなんてあり得ない。

ならば、やはり彼らは犯罪者なのか。

「爺ちゃん達は……犯罪者じゃないんだな？」

「犯罪者も何も、何もしておらんよ。ただ帝国にとって目障りな仕事を頼まれたから、こうして命を狙われておるじゃろうな。いや、引き受けるじゃなかったわい」

仕事の内容までは聞いても教えてくれないだろうし、知りたいとも思わない。

リオンはセレネの記憶を取り戻すことが目的なのだ。余計なことに首を突っ込んでも仕方がない。

とにかく、月花の魔力消費を抑える魔石さえ貰えればそれでいいのだ。

「ノーシヨンさんが魔石の話をしてくれたんだけど、あれで本当に月花の魔力消費は抑えられるのか？ その、セレネは」

ふと隣に座っているセレネに目をやる。豪快な欠伸をしていた。とても女の子が男の前でするような行為ではなかった。

「うーん……にゃ？」

（“にゃ？”じゃねえよ。少しぐらい意識しろよな。どうせ俺は、原始人だよ、嫁はアウストラロピテクスだよ）

リオンがいじけた。セレネは首を傾げて、暇そうにもう一度欠伸をする。

「その件に関してはワシも聞いておる。大丈夫じゃろ。本物の魔女ならどっちにしろ死なんて」

「なっ……！」

リオンは思考が止まった

セレネは欠伸が止まった。

何故、この老人はセレネが魔女だとわかった。

ウインド村の神父と違い、かつてセレネに似た魔女を見たわけでもない筈だ。

ますます、この老人の実態がわからなくなるリオンとセレネ。

第25章 嘘の嘘（前書き）

連休だったので調子に乗って更新してしまいました。
ロボットはしばらく出てきませんw

第25章 嘘の嘘

「な、なに言っただよ。本物の魔女なんて伝説上の生き物なんだから。こ、こいつが伝説っぽいかな？ 明らかに変な奴だろ？ ほら、伝説っぽくない！ 魔女じゃない！ 爺ちゃんの勘違いだつて」

リオンは、セレネの顔を老人にクイツと向けて狼狽する。そして、リオンは壊滅的に嘘が下手だった。原始人は伊達じゃない。セレネ自身、この老人にはいずれ正体がバレると思っていたが、まさか欠伸をしている時にカミングアウトされると思っていなかった。舌を嚙んでしまい、涙を流している。

そんな2人を余所にドクターMは、につこり笑って答えた。

「踏み方が、以前出会った魔女の知り合いによく似ておったんじゃない。あの力加減にワシは、一目惚れしたんじゃないよ」

最低な判別のされ方だった。

「あ……さいですか」

呆れたリオンの顔を見て、疑われていると認識したドクターMは、更に付け加える。

「ほれ、頭は忘れても体が覚えていると言っではないか！」

何故か必死に弁解する老人。あえて言おう、そこじゃない。普通の人間なら1秒でも早く忘れておきたい記憶だった。

「うん？ 以前って……昔、セレネに会ったことがあるのか！？」

いつ？　どこで！？　セレネの記憶について何か知ってないか？

どこで会ったんだ、爺ちゃん！　思い出してくれ爺ちゃん！！　まさかこんなところで知り合いに会えるなんて！　よかったなセレネ」

リオンは、老人を持ち上げて揺さぶる。

ドクターMの首が前後にガクガクガクとヘッドバンキングしている。

「わわ、ワシが出会った魔女は、紅い髪じゃ。　名前も知らんし、スリーサイズも知らん。何年か前に会ったから、まだどこかにあると思うぞ。　ハハッ！」

首がゴキゴキと、おかしな音を立てているのに、何故か幸せそうに声を出すドクターM。

それは何故か。

彼がドMに他ないからだ。

「紅い魔女……　本当にそいつも魔女なのか？」

「魔女じゃろうて。　着替えを覗こうとして、改造した魔力探查機をカメラの代わりに使ったんじゃが、計測機がイカれてしもつたよ。あれはMFの魔力も計れる計測機じゃ、MFより多い魔力を所持する人間などあり得んで　　かつは！」

その魔女に代わりに鉄拳制裁をして、リオンは思った。　自分も人を殴ることに慣れてきたなど。

思わぬ手掛かりを見つけたことに喜んだが、結局何もセレネに関することはわからなかった。

（魔女は、セレネだけじゃない……。　会うことが出来れば何かわかるかもしれないな）

「っていつか、色んなやつに踏まれてるんだな。爺ちゃん今何歳だよ？ もっと体を大事に扱わないと死んじゃうぞ？」

先ほどまで顔面を踏みつけ、顔面にパンチをめり込ませた少年が言う。

いくら頑丈な体でも歳を取れば弱ってくる。見た所、80歳は優に超えているであろう老人の体が心配になったりオン。

「今年で364じゃ、そろそろ歳じゃで、気を付けるとするよ」

老人の体は頑丈過ぎた、そして80歳を優に超え過ぎていた。

「何を食べたらそんなに生きれるんだ？」

セレネが興味津津に尻尾を振りながら、自称：364歳の老人に問いかける。

「落ち着け。普通死んでるだろうがよー!!」

「いや、こうして生きているぞ？」

「嘘なんだよ、あり得ねえって！ 常識的に考えたらって……あつ、すまん。そうだったな、お前は変な所で常識がわからないんだっただな」

騙されているセレネに言いかけて止めた。彼女は記憶と一緒に常識というものが欠落している節がある。今回もそれが災いしたのだと判断したりオンは、またやってしまったと自分を責めた。

「失礼じゃな。自分の歳ぐらい覚えておる。まだ、ボケてはおらんよ。間違いない、今年で368じゃ」

「……言ってるそばから、さっきの数字と違うんですけど」

リオンに指摘され老人が目を点にして汗を流す。

暫し、沈黙。

静かすぎて外の声が聞こえた。誰かが酔って倒れたとか、貧血で倒れたとかの会話で賑やかになっているようだ。

「から4引いた歳じゃ、ハハッ！ いや、縁起が悪いからやっぱり5引いてくれ」

「えらく変わった歳の教え方するんすね！！ って、な・ん・で・そ・ん・な・にコロコロ歳が変わんだあこらあ！！」

リオンがドクターMの頭を鷲掴みにして持ち上げた。

「100を過ぎた頃から歳何ぞ、管理し切れておらんよ。ワシはドワーフじゃ。人間の物差しで計らんでくれ」

「ドワーフ？ 嘘だろ……本当にあんなのがいるわけねえじゃねえか！？」

いや、こうして魔女がいるということはドワーフがいてもおかしくない。

空中で足をバタバタする自称：ドワーフのドクターM。
手先が器用で屈強な小人、ドワーフ。

鍛冶が得意で、刀や鎧を作って神々に提供していたと言われる伝説の種族、ドワーフ。

それが……コレかと、リオンは目細める。昔読んだ絵本の知識に誤りがあるのかもしれない。

いや、ドワーフの伝説は美化され過ぎた空想なのだ。だって、現実にご覧の通り醜い。

女性に踏まれて奇声を上げる小人、ドクターM。

細くて白い足が好みの小人、ドクターM。

踏む者をDSに目覚めさせる小人、ドクターM。

（誰だ……あの絵本を書いたやつは。出会った伝説がこうも変人ばかりだと他の伝説も恐ろしくなってきたぞ）

魔女はセレネ、ドワーフはドクターM。普通に生きていれば恐らく会うことができないであろう伝説の生き物達。今の所、100%まともな神経をしていない。

目の前の老人は、容姿からそれとなくドワーフの雰囲気はするが、彼らはもっと屈強な小人だった筈。そして、ドワーフがDMなんて認めたくない。DSでも嫌だ。

「本当じゃ。いいから降ろしてくれ。お主、今の状況がわかっておらぬのか？ ワシらは狙われているのじゃぞ！ こんな所で棒立ちになるアホがどこにおるんじゃ！！ はよ、座るんじゃ！」

その時、銃声がした。

表通りが騒がしくなっている。

隠密達が動き出したのかとリオンは、姿勢を低くして外の様子を見ようとベッドから窓を覗き見る。

「爺ちゃん……今の、銃声だよな？ まさか、ノーションさんが撃たれたんじゃない！」

血相を変える少年を宥めるように、老人が言った。

「大丈夫じゃ、あやつがそんなへまはせんよ。それに敵さんも見つけてくれと言わんばかりの発砲はせん。村人も武器は押収されておるじゃろうし、恐らく、軍の威嚇射撃じゃろ」

老人はカーテンを開けて、窓を一望する。

「よく見ておくんじゃ、これが、軍の正体じゃ。お主が考えている軍の姿かどうか確かめるにはちょうどいいんじゃないかの。魔女の件はこれが終わってからじっくり話してやるとしよう。ワシもさつき思い出したことなんでな、魔女とは積もる話もある」

「ちょっと！ 外は危ねえんじゃねえのか！」

リオンは窓に近づいて、外の成り行きを観察している老人を抱え込もうとした。

「なに、彼奴等とて共和国軍と鉢合わせになることは避けよるて。下手をすれば戦争がまた始まるからの。そして、戦争が始まると今の帝国に勝機はない、隠密共は今頃、一目散に姿を隠しておるじゃろう」

悲鳴が止み、表通りに静寂が訪れている。

気味が悪い。

物音を立てれば何かに襲われるのではないかという強迫観念に駆られる程静まり返った夜の村。

ウインド村を思い出す。

そんな中で、外でガラガラガンと大きな音を立てた馬鹿がいる。すぐさま、静まり返ったが、軍人が声を上げて通りは瞬く間に混乱状態に陥った。

「爺ちゃん、一体この村で、何が起こってんだ」

「集金じゃよ。生かしてもらえる代わりに税を納めるのがこの村のルール。納めれん者は、足りない分を働いて支払う」

自称：ドワーフが、窓とは反対側にある部屋の入り口へ向かってゆっくり歩き始めた。

「そんな税金ありかよ！ そんなルールがまかり通ってるのか？ 上層部は？ 官僚達は何してんだ！」

ウインド村にも軍が統治に来ている筈だ。もし、軍の統治がそんな横暴なやり方ならば、金の無い村人は全員死んでしまう。曲がったことが大っ嫌いなカーストなんて真っ先に殺されるだろう。

リオンは一刻も早くウインド村の状況を確認かめたいと思った。盗賊に襲われない代わりに、軍の家畜になるだけなら今から戻って……。

（戻って……どうするんだよ）

何もできない。家畜が1匹増えるだけだ。それにセレネの存在をひけらかす愚行だ。

そんなリオンの気も知らずに老人は、楽しげに答える。

「税金で気楽に過ごしておるんじゃないかの？ いや、国のために日夜何かを考える公務をしておるのか。 “有言不行”が共和国大統領の統治の仕方じゃでな。官僚も目の前で違反せん限り軍の行動を規制せんし、軍人ともなれば公の機関、エリート階級。エリートのことには間違いはない国、共和国。前回の大統領の独裁から勝ち取った“自由と平等の国”じゃろ」

言い終わると鼻で笑って老人は、ドアの前で立ち止まる。

リオンとセレネは、今までこの老人が本気で怒っている姿を見たことがなかった。

怒鳴りつけたり、物に当たっているわけではない。しかし、2人は何も言えないぐらいゆっくりと言葉を並べる老人の気迫に圧倒されている。

これが長く生きた老人の怒り。後から込み上げてくるマグマのような熱さがこの老人にはある。

「おっと、すまんの。お主らには関係の無い話じゃった……少し言い過ぎたわい。統治する軍人によって村は変わる。ここの村は軍の支援が来たおかげで、まともな生活ができるようになった人間もいるのも事実じゃ。軍で働かされても餓死することはないでな。どっちがいいかはこの村人が決めたこと、外部の人間が口出しすることではなかったの。ところで、お主に1つ頼みたいことがある。この場を乗り切る最も重要なことじゃ……頼まれてくれるか」

目を見開いて振り返る老人を見て、リオンは固まった。

「な、なんだよ」

リオンはそれだけ言っのがやっとだった。
殺気だった空気。

室内の暗闇が泥のように重たく感じる。
やはりこの老人　ただ者ではない。

「ドアを……開けてくれ」

ちみつ、と背伸びをしてドアノブに手を伸ばす老人。　手は辛^{かる}う
じてノブに届いてはいるが回せないようだ。

「普通に頼めんのかアンタは！　やれやれ」

リオンがドアに近づこうとした時、ドアが老人ごと吹き飛んだ。

「なっ！！　まさか、爺ちゃんを狙ってる奴らか！　年寄りを雑に
扱いやがって！　許さねえ……」

「あひゃ〜ん」と、嬉しそうに壁まで吹き飛ばされる老人。
前言撤回。訂正……何故、一撃で殺さなかった。

長い間、暗闇に隠れていたため部屋の外からの光が眩しい。　リオ
ンは老人を諦め、セレネだけを守ろうと身構えて、長身の影と対峙
した。

「たっだいま〜。　人の部屋に勝手に上がり込んで上等じゃ……あ
れ、あなた達だったの？」

クルクルと指先で回していた眼鏡がカツンと落ちた、部屋に入っ
てきたノーションは意外な入室者を見て呆気にとられた様子だ。

「ノーシヨンさん！ 無事だったんですか！ よかった」

「え？ ええ。 まあね。 ところで、どうやってこの部屋に入
ったの？」

リオンが眼鏡を拾いノーシヨンに近づく、ノーシヨンは部屋の四隅
を見渡していた。 何かを警戒しているようにも見える。

「どう？ って、普通に入ったんですけど。 それより髪の毛どう
したんですか？」

ノーシヨンは「普通に……ね」と接近しているリオンにすら聞き
とれない程小さな声で呟き、眼鏡を受け取る。

「あ、ありがとう。 髪？ やっぱ、変よね？ 敵さんにリボン切
られちゃったのよ。 お気に入りのリボンだったのに。 リオン、
何か縛る物、持っていないかしら」

肩まで伸びた金髪を指で流し、耳にかけて辺りを見渡す。

リオンは髪型で女性がここまで印象が変わる物なのかと唖然とし
ていた。

髪を降ろし、眼鏡をかけていないノーシヨンはまるで別人だ。

着用している服が軍服じゃなくエプロンなどの格好ならば、家庭
的なお姉さんである。

「縛る物ですか？ 別に括らなくても……そのままでも、いいんじ
やないですか？ 似合ってますよ」

つい思っていることをそのまま発射してしまったリオン。

その言葉を意外と感じたのかノーシヨンは、目が点になる。 そ

して、妖艶ようえんな笑みを浮かべ、人差し指をリオンの鼻の頭にチョンと置く。

「ふふ、私を攻略するのは後、5年早いわよ。大人になったらお付き合いしよう。お世辞でも嬉しいわ、まさか原始人さんに褒められるなんて。私も捨てたもんじゃないわね」

リオンの目の前でウィンクをして、眼鏡をかける大人の女性。

リオンは何とも言えない感情になった。なぜなら、目の前の金髪きんぱつの女性は、暗闇のせいか、とてつもなく大人びて幻惑的な美しさを持っていたからだ。こんな人と自分はこの数時間一緒に過ごしていたのかと思うと頭がクラクラする。

ノーシオンは、セレネが「ぬうう……」と、リオンの後頭部を見ていることに気が付き、更に付け加える。

「あらあら？ リオンは大人の女性の方が好きなのかしら。やっぱり“小食”で“しっかりした”“お姉さん系”が好みよね」

「は、はあ。そりゃ憧れたりしますけど。姉ちゃんがいるのでどうしても甘え癖があるというか……って、何の話しさせるんですか！」

「そうかそうか、甘えん坊なのね」とからかいながら、リオンの頭を撫でてみる。

それを見て、セレネがリスのようにほっぺ膨らませる。

（あらやだ……可愛い）

ノーシオンが、むくれているセレネを見て目を逸らす。ちょっとだけからかうつもりだったのに予想以上の反撃で、心が揺れた。

そんなノーシヨンの胸元にロープが差し出される。

更に下を見るとクワッと目を見開いている老人がいた。

何の特殊能力も発動しない、開眼。

「縛る物を持ってきたぞい！」

「あの……ドクターを縛るわけじゃないんですよ？」

言いつつも、老人を縛り上げてベッドの上に吊るし上げるノーシヨン。

ギシッギシッ、ゆらり、ゆらりと不穩に揺れる小さな人影……この暗闇であんなものを見ると首吊り自殺をしているように見える。極めつけに「ハヒツヒ！」と連呼しながら喜びを表している影。

もう、ホラーだった。この部屋の宿泊客は明日から激減するに違いない。

「まあ、いいか。髪は、しばらくこのままにしておくわ。鬱陶うつとう

しくて嫌なんだけど……とにかく部屋に戻りなさい。軍が来たら旅の者ですって言つて、それ以外何も言っちゃダメよ。世の中の体裁を気にして、旅人には寛大な態度で接してくれるからね。わかったらなるべく早く戻りなさい」

「わかりました」

髪を掻き上げて、ノーシヨンはリオンを部屋に戻す。

これからやってくる軍人をどうやって上手く撒くかが今の課題だ。今着ている軍服は処分した方がいいだろう。

本物の軍に見つかるその後々面倒臭いことになる。行方不明中である女性軍人の服を、どうして民間人が持っているか、などと聞かれたら新しい行方不明者を偽装するのに手間が掛る。

「動きやすいから、お気に入りだったのにな。また、どっかで調達すればいいか」

ノーシヨンは軍服を脱ぎ、鞆に突っ込んである白衣に着替えた。
今日から、軍人ではなく、医者だ。

「ドクター、念のために聞いておきますけど……敵がこの部屋に侵入しましたか？」

「ほほ、誰も入ってきておらんよ。あの子達以外はな」

少年と少女が部屋に入った音を確認して、ノーシヨンが尋ねた。

「そうですか。私の結界って、子どもでも解除できましたっけ？」

ノーシヨンは、天気の話をするように言う。

「最近の子どもは、賢いからのお。解除できるんじゃないか？」

「ご冗談を……自慢じゃないですけど、二流の魔術師でも私の結界は解除不能ですよ？」

ノーシヨンの結界は確かに強固なモノである。展開するのに時間が掛る代わりに、一度展開すれば、こちらから許可しない限り侵入は、ほぼ不可能。

中に入るためには、仲間のみが知る侵入コードを実行しない限り入れない。今回の結界で侵入コードを教えたのはドクターMだけだ。少年少女には教える時間がなかったため、不利な戦場に留まりながらも彼らを守る位置で戦っていたのだから。

「ドクターが侵入コードを教えたのですか？」

「まあ、教えたには教えたのじゃが……」

言葉に詰まる老人を見て確信した。

「結界を破壊して、張り直した……いえ、私の結界を浸食して、かなり高度な結界魔術に変質させた」

その通りだったため老人は何も言えなかった。少年が侵入コードを実行している間に、結界が張り替えられたのだ。あの時、老人は死を覚悟していた。

何の苦も無く、目の前で結界浸食をやつてのけた、魔女が恐ろし過ぎて。

「セレネですね？ あの子は一体何者なんですか？ まあ、今回の件で、だいたい検討は付きましたけど」

自分の結界を破るのならば、自分より一枚上手の魔術師だったと説明が付くが、人外の魔力、結界の浸食、そして、あの呪いに等しい美貌。

「魔女 ですね。あなたが目指した究極の生物。会えてよかったじゃないですか。前回とは違って本物ですよ、彼女

は」

ニヤリと笑って老人を見る金髪の女性。明かりが付いていないこの部屋ではどんな笑みも不気味に見える。

「ワシは、もうそんな気などない。どれだけの犠牲が出たかお主も知っておろう。魔女を造ろうなど夢のまた夢。いかれた妄想じゃ。人もドワーフも自分の領域から出ることはできん。“逆十字のクーデター”を忘れたか？ 魔女絡みの研究は全て失敗し関係者が全員死んでおる。ワシが生きているのは奇跡じゃよ、ワシもいつ殺されるかわかったもんじゃない」

「だから、やるんですよね、今回の仕事。今更、怖気付いたとは言わせませんよ。それに、私があなたを守りますよ、稼働している間わね」

ノーションが、老人がぶら下がっているロープを切断する。

「今日は、どれぐらい使ったんじゃ？」

「ギリギリでした、4分の3ぐらいですよ。ここの結界を張り直そうとしたので、かなり使いました。まあ、破るので精一杯でしたが」

ノーションが躊躇^{ためら}い無く、白衣と上着を脱いで背中を老人に見せる。

「魔力は大切に扱っくんじゃぞ。お主はまだ完全じゃない。ワシが生きている間はこうやって調整ができるが」

「あなたが死んだ時、私も死んでますよ。造り手と命を共にする

人造人間
のがホームクルスの運命。 あなた程の方がお忘れですか、薔薇十字団ローズンクロイツァーの錬金術師、マジョリティー博士」

「ほほ、ワシは今も昔もスコラの雑用係じゃよ。 うゝむ……最近、物忘れが激しくてのお、そんなけつたいな道理は、忘れたわい。 お主は死なん、ワシが保障しよう」

背中にある狼の入れ墨に赤黒い魔石を取り込ませ、伝説とも秘密結社とも呼ばれた薔薇十字の老人は、本日何回目になるかわからない嘘を付いた。

第25章 嘘の嘘（後書き）

薔薇十字団とか出てきました。

詳細は省きますが、主に錬金術による人間の变革を広げ、普遍的な变革を目指した組織らしいです。

名前がカッコいいので使ってしまった……。

第26章 夢（超自我）（前書き）

いきなり意味不明な展開ですが、次話ぐらいに繋がるお話です。

第26章 夢（超自我）

それは暗黒の様な夜だった。

空に満月があるにも関わらず、ソレの周りは暗黒。

闇に開いた外への世界へ繋がっている穴（満月）。

あの穴から零れ堕ちた天使。

ソレが歩き始める。　ぬちょ、ぬちょと音を立てる地面。

「ふんすい……、フンスイ」

ソレは、手に持ったポンプで遊んでいる。ご機嫌のようだ。数分前まで稼働していたポンプは、今ソレの玩具として活躍している。

ソレは食料を捜し求めて、巨大な軍基地の前までやってきていた。お腹が減り過ぎて眠れなかったため、軍に食料を分けて貰おうと考えているのかもしれない。

人気の無い無駄に整備が行き届いている道。昼間でさえこの道を使用する者はあまりいない。ここを通るということは、二度と村には帰ることができないという意味だ。

こんな場所を歩いていて、軍の見回りに見つければ何をされるかわからない。例えば村人で無くても許可なくここに近づけば殺されても文句は言えない。

「おい、貴様、止まれ。　外出時間はとくに過ぎている。　こんな時間に軍施設に何の用だ？」

ソレの背中を上から下まで舐めるように見て軍人が呼び止めた。小柄な体系、そして長い髪。誰が見てもその後ろ姿は女だと判断できる。軍の下っ端には厳しい規律があるため女に飢えているものが多い。この見回り兵も例外ではない。

だが、無視して歩き続けるソレは、ポンプに釘づけた。彼の声など聞こえない、興味無い。

ここがこの村を統治している軍施設であることなんて知りもしない。ただお腹が空いただけなのだ。

「貴様！ 軍に刃向かう気か？ 俺が止まれと言ったら止まれ！」

肩 からぶら下げたライフルを構える軍人。食べ物を探している少女に何の罪があるのだろうか。されど、ソレには彼の声など聞こえていない。銃の恐ろしさも知らない。

裕福な家計で育ち、貧乏人を見下して来た彼にとって、命令を聞かない下層市民は腹正しいものである。

「はっ、ルールを守れない悪い子は躑しつないとダメだよな？ 俺の躑しつはきつついぜ」。その体に深く刻みつけてやるよ」

軍人は組倒そうとソレの背中を力いっぱい握りしめ、草陰に連れて行くこうとする。

その時、ソレのお気に入りのポンプが地面に落下した。

グシャリ。見回り兵の思考が壊れた。

「な、なんな……何だそれは！」

男とは思えないヒステリックな声。

ソレの正面を見て軍人の威勢は消える。

男ならば威勢よくなるであろうソレの肢体を持っても、軍人は恐怖からそんな気など起こらなかった。

ただの血まみれの裸体ならば、血を見慣れている彼の精神は耐えられたであろう。

だが、ソレの正面は想像を絶するものだった。

内臓塗れ^{まみ}

彼女の内臓ではない。原形などわからない。

ただ、赤褐色とピンク色の臓器が血管で繋ぎ合わされ、悍ましい^{おぞ}形にねじ曲がった内臓が胸元で固定されている。

まだ動いている。“ハヤク……コロシテクレ”と微弱な脈を打っている。

正面に絡みついた血管と捻れた臓器の紐は、生温かい血をまだ噴射していた。

ソレは人間の内臓でできた前掛けをしていたのだ。

「ふ、んすい……フフ、フ、んすい」

「な、なにを言ってやがる……ばけもお

んく!？」

彼は口を塞がれる。しかし、本能的に引いた銃はソレの顔面目掛けて発射された。銃口にソレの細い指が詰まっているとも知らずに。

耳を劈く音を立て、銃は暴発。^{つんざ}

「んぐんぐ!! おわいううう」

見回り兵の情けない声が漏れた。

ソレの左手は銃の暴発と共に炸裂している。皮膚一枚でかううじて接着されており、手首と手の間で、動脈が蛇のようになうち回っている。

血流が噴水のように勢いよく噴出し、軍人の頭に降り注いだ。奇怪な方向に炸裂したソレの手首は、暴れ回る動脈の反動で地面

に千切れ落ちる。それだけで彼は意識を失う所だった。彼は戦争を体験していない。ただ、楽をして暮らせるから親のコネで軍に所属しただけなのだ。

無抵抗な村人を拷問したことはあるが、されたことなどない。これは精神の拷問。考え付く限りの惨い仕打ちを眼球に焼きつかされる拷問だ。

「ふうっう！！っうっうん！」

人間と思えない握力。訓練を毎日している軍人が両手で掴んでも口を覆う右手はビクともしない。

口を塞いでいる手が、そのまま軍人の体内に入っていく。人間がすることじゃない。彼の目からは恐怖で涙が出ている。

しかし、喉から侵入するソレの右腕は止まらない。彼の口には、二の腕が納まっている。指先は、もう胃袋を突破しそうだ。

「ぼおええおっ……おっ……えええ」

嘔吐するが二の腕が邪魔して上手く出せない。それどころか先ほど地面に落ちた筈の左腕が元に戻っており、処刑台のような掌が自分の喉を固定している。

“殺される”

ここに来てようやく頭が理解した。

幸か不幸か、彼の発した汗で手が滑り、処刑台から解放される軍人。右腕は体内だが首をへし折られることは回避できた。

ソレは、彼の口から噴き出てくる緑色の液体を不思議そうに眺める。

「ふん……すい、ふんすい、ふんすい」

「ツツツツ!!」

ソレは喜びのあまり、胃袋の中の腕を上下させた。胃袋の中で蛇が暴れ回っている。

“ 苦しい 苦しい 苦しい 苦しい、助けて…… う、助けてくれええ!”

言葉にならない呻き声が漏れる中、軍人は悶え^{もた}苦しむ。

出せる液体は上から下まで全て出し切っている。目を輝かせて噴き出す液体を眺めるソレは、もっと強く噴き出す“ ふんすい”を見たそうに妖艶な喘ぎ声を出している。

しかし、彼に残っている液体は、体内を巡る血液だけだ。

噴射が緩くなった緑の液体を残念そうに眺めて、ソレは内側から軍人の心臓を抉^{えぐ}り取る。

あらゆる手順を無視した切除。

胃袋を破り、肋骨を砕き、心臓を握りしめ、胸骨を内側からへし折りながらの切除。

痛みなんて感じない。“ 痛い” という感覚の限界を超えている。

バケツの水を撒き散らすように、胸から血液をソレに浴びせて軍人は…… やっと死ねた。

「…… オニク」

ソレは何事も無かったかのように、横たわるニクを貪^{むさば}り始めた。食事の後、お手製の内臓前掛けもその場に捨て、当てもなくソレは歩き始める。

夜が明けるまで後数時間、新しいニクを捜し求めてソレは彷徨^{たふさ}った。

朝が来た。

久しぶりの布団だったためか、どうやらリオンは爆睡している。昨日、隠密部隊に命を狙われたり、横暴な軍に色々聞かれたりしていたなど嘘のようだ。

「また、夢……酷い夢だ」

セレネは汗ばんでいる体を抱いて、夢のことを忘れようとする。

先日から嫌な夢ばかり見ていた。誰かを殺したくてウロウロする夢、少年を食べたいと思う夢。だが、いつも“ダメだ”という抑制の声が聞こえて目を覚ます。そんなことが旅に出てから、続くものだからまともに眠れる日は無かった。

今日のように、朝日が昇ってからの起床は初めてだ。

夜中に起きているため、お腹が空いてリオンに怒られるとわかっていながら、隠れて食事を取ったり、月花と会話してみたりなど夜が明けるまで時間を潰す必要も今回はなかった。

嫌悪感を抱く夢を見て気分は最悪だったが、グッスリ眠れたことにセレネは満足した。

抑制と覚醒の合図である声も聞こえることなく、夢は続いていたのだから体は休まっている。

「水を……飲もう」

喉がカラカラであったのもそうだが、気分を変えるために何か飲み物を探すセレネ。あんな不気味な夜の施設を歩いた感覚など忘れないのだ。

水筒を口に付けて水を流し込むセレネ。

「ッ！？」 「ほっ、ほ」

思わずむせ返った。水筒の水が錆びていたようだ。

「ん〜？ どうしたセレネ？ またあ、変なことやってんのか〜」

リオンが眠たそうに布団の中から頭を出す。

「いや、何でもないんだ。それより、この水！ 錆びているぞ！」

セレネは、ややむくれて水を入れてきたリオンに水筒を突き付ける。

「はあ？ 寝る前におっさんに入れて貰ったやつだぞ。んなわけねえだろ、どれどれ」

ゴクゴクと錆びた水を飲むリオン。

「旨いじゃねえか？ 錆びてねえよ。ああ〜、宿屋のおっさんがレモン入れてたからそれが変な味だと思ったんじゃねえか？ レモン水は口に合わなかったみたいだな。こっちにあるやつは、普通の水だからこっち飲めよ」

寝癖で鳥の巣のような髪型になっているリオンは、自分の枕元にある水筒をセレネに渡し、レモン水のおいしさについて語り始めた。

「んく……ああ、普通の……水だ。レモン水は、私の口に合わなかったようだ」

どこか残念そうな顔をするセレネ。

だが、その水も鉄のような味しかしていない。

まるで血の様な味だ。鉄の匂いがする液体が、喉を通過したせいで気持ち悪くなってきた。

「どうした？ 気分でも悪いのか？」

リオンが心配そうにセレネの顔を覗く。

「いや、別にどうもしないぞ？ 元氣過ぎて困るくらいだ」

どうもしている人物に限って、そう言うものだ。

リオンは、しばらくガッツポーズをしているセレネを見つめていた。

しかし、視線を逸らすセレネを見て、それ以上踏みこんだことが言えなくなる。

「まあ、具合が悪くなったと言えば？ 別に急いでどこかに行く旅でも無いんだし、俺は、お前の記憶が戻ればそれでいいんだ」

セレネが聞いているのかわからないが、これだけ伝えておきたかった。

伸びをする少年をチラリと見て、セレネが呟く。

「私は…… 本当に記憶を戻した方がいいのか？」

意外な返事にリオンは動作が止まる。

「当たり前だろ？ 記憶喪失なら記憶を戻したいって思うのが普通だろうし、お前の家族とかにも会えるかもしれないだろ？ 記憶を戻したくないのか？」

「戻したいけど……魔女に家族なんているのか？ 私を待っている人があるのか？ 魔女なんて……待っている人があるのか？」

セレネが、まくし立てた。今までこんなことが無かったため、リオンは啞然としている

沈黙を破ろうとリオンがゆっくり口を開く。

「本当にどうしたんだ？ いるかもしれねえだろ……お前の帰りを待つてる人。爺ちゃんが言っていた紅い髪の魔女に会えれば何かわかるかもしれないぞ？ だいたい、魔女に家族がないなんて誰が決めた。それに伝説に聞く魔女とお前は全然違う。お前を見て俺は確信した。魔女にも良いやつがいるって、伝説なんてそんなもの見てみないとわからないんだって。だから、俺は伝説を確かめるんだよ、魔女が悪い奴だっていう伝説を覆してやるんだよ」

寝癖でぼさぼさの頭を掻きながらリオンは笑った。

「だいたい、お前は怖くないのか？ 真夜中に私に殺されるかもしれないぞ？ 喰われるかもしれないぞ？ 魔術でお前を操るかもしれないぞ？ どうして私を助けてくれる？」

布団を握りしめてセレネが少年をうるうるした目で見つめる。セレネは今までの想いをぶつけている。夢の出来事をこの少年に当てはめてしまい、そんなことをしている自分が恐ろしくて、悲しくて……胸が苦しくなる。あんなことが現実で起こると思うと不安で堪らない。

しかし、リオンは、セレネが何をそんなにうるたえているのか全くわからなかった。

「怖くねえし喰われる気もしねえって。最初はその……正直怖か

ったけど、今は大丈夫だ。 お前はいいやつだつてわかってるからな。 それから、女の子助けるのに理由なんていらねえだろ」

即答されたが、セレネは納得できない様子だ。 今まで普通に接していて何の違和感も感じなかったが、最近この少年が異常であると思いはじめている。

ウインド村の村人のように魔女という存在を忌み嫌う人間がいる中、魔女と一緒に旅をする人間とはどんな神経をした人間だと考えるようになってきたのだ。

「お前は、女だったら誰でも助けるのか？」

「うわあ、俺がスケベみたいな言い方をするなよ。 俺はお前に、そんな気なんてないからな！」

リオンは顔を赤らめて、ベニヤ板で補強された窓を見る。 セレネは少年から視線を外さない。

「はあ……誰でも助けねえよ。 んなことできるわけねえだろ。 誰でも助けたいけど、俺にはそんな力なんてない。 お前だから助けてやりたいと思った」

「私……だから？」

首を傾げるセレネにリオンは振り返る。

「最初は女の子だから助けようと思ったけど、お前は、ウインド村の人がお前を怖がっているのに、月花で最後まで村の人を助けてくれた。 俺の家族同然の人達を最後まで諦めないで、寝る間も惜しんで捜してくれたじゃねえか。 そんな優しいやつが困ってたら助

けたくもなるだろ？」

黙り込むセレネを見てリオンが付け加える。それだけが理由じゃないなんて言っている本人でなくてもわかるだろう。ただ、セレネが無条件で助けてやりたい人物であるなんて、リオンには言う勇気がまだ無かった。

「あんまり言いたくないんだけど、笑うなよ……？」

どうしても信じようとしないう少女を見てリオンは、自分の夢を言うことにする。

「俺は英雄になりたいんだ、目の前の女の子一人助けられないやつがどうやって英雄になればいい？」

「英雄？」

「あれ、英雄ってわかんねえのか？ 英雄ってのはだな……えつとあれだ！ 正義の味方みたいなやつ……って、英雄がわかんないんじゃない、それもわかんねえか？」

リオンはセレネが英雄という言葉の意味を忘れていていると思い説明をする。

「困っている人を助ける人……だな。誰もできないようなことを俺はいつかやって、皆が笑っていられる世界にしたいんだ。ウィンド村を焼いた盗賊みたいな連中が生まれられないような世界にしたい」

子どもの理想論。誰に言っても鼻で笑われるような夢物語。社会の汚さを知らない彼の様な理想論者が、政治を行っていれば恐らく

共和国は、ここまで腐らなかつただろう。しかし、一方で、ここま
で発展はしなかつただろう。

輝く英雄を目指す少年に向かって少女は、言うてはならないこと
を言ってしまった。

「じゃ、お前はもう、英雄だな」

「は？」

目が点になるリオン。リオンは英雄と呼ばれる程人を助けていな
い。

「困っていた私を助けてくれたお前は、英雄だろ？」

確かにそうではあるが、彼の目指す英雄はそんなものじゃない。
規模が違う。

彼は世界中の人間を救いたいのだ。世界中の“悪”を取り除きた
いのだ。

「俺はお前を助けていない。助けようとしているけど、助けるこ
とができていない。いつもお前が一人でどうにかしちまうし、俺
が助けられてばかりだ。英雄とは程遠い」

ここ数日の事を思い出しても、リオンが決定的にセレネを助けた
ことなどない。セレネには一人でどうにかしてしまう力がある。リ
オンが自覚している通り、助けられてばかりだ。

「そうか、ならもうちょっとお前を頼りにする。困った時に呼べ
ばいいのか？」

「ああ、そうしてもらえるとありがたいけど……」

セレネが妙に素直だ。リオンは今まで見たことのない彼女の一面を見て少し戸惑っている。頼られることはこの上なく嬉しい反面、不安である。

自分の力で彼女をどこまで助けることができるのかと。

「じゃ、英雄よ。飯を買ってきてくれ!」

「パシリかよ!」

陽気に話す少年と少女だが、彼らは気付いていない。

『英雄』と『魔女』。それらが対極に位置する存在であるということに。

第26章 夢（超自我）（後書き）

ただ今、文章の書き方を勉強して今までの文を大改造しています。

- ・ 漢数字に統一

- ・ 段落

- ・ 表現

など修正しています。

内容は変わらないので、ご安心ください。

「ミリオン」をこれからもよろしく願います。

第27章 嫌な予感

午前中、ドクターMとノーシオンはどこかに出掛けていたらしく、昼前に白衣を着たノーシオンが部屋に戻ってきた後、月花に念願の魔石を取り付けてもらったりオンとセレネ。

「昨日は、あなた達を巻き込んで本当にごめんなさいね。とりあえず、命もあつたし、魔石も付けたし許してね」

言いながらノーシオンは、手慣れた様子で月花の胸辺りに赤い魔石を設置する。遠くから見ればどこがどう変わったかなんて誰にもわからない。まさか、重要な魔力供給を担当する魔石がコックピットにぶら下げただけなんて誰も考えないであろう。趣味で写真やアクセサリーをコックピット内にぶら下げるメタルフレーム乗りもいるが、それと大差ない。

銀の鎖で繋がれた二つの赤い石が、ふらりふらりとコックピット内を舞っている

「すみません、ノーシオンさんを疑う訳じゃないんですけど、あんなので本当にセレネの魔力は削られないんですか？」

「え？ ああゝ大丈夫よ。魔女なら魔力切れで死ぬことなんて無いわ。無限の魔力を持っている者が魔女と呼ばれるんですもの。セレネが魔女ならそうと早く言って欲しかったわ、回りくどいことしちゃったじゃない。魔石は、あなたが乗る時に使ってくればいいのよ。巻き込んだせめてもの償いにさせてちょうだい。

これであなとも技術師と同じ疑似魔力で機体を多少動かすことが可能よ。サービスして二つ付けたから多少の無理は聞くんじゃないかしら。まあ、戦闘なんてしないだろうけど、無茶させると五分

程度で石が粉々に割れるから気を付けてね」

「え？ 俺が月花を？」

予想外の言葉にリオンがノーションを見て目をパチクリさせた。

取り付けが終わった後、一行は昼食を取りに村の食堂へ来た。

リオンは、ノーションが自分のために魔石を付けたことがまだ信じられない様子だった。元々セレネのために付ける予定だったのだ。リオンのために付けてもらったわけではない。

「ノーションさん、さっきの話なんですけど、なんで俺のために魔石をくれたんですか？ あつ、俺は一番安いライスだけでいいです」

リオンは、注文を聞きに来た黒い髪の少女にそう告げて、話を続ける。黒髪の少女は訝しげにリオンを見て、ノーションとドクターMの注文を聞く態勢に入った。

「あつ、私とこの老人は、日替わり定食で。なんでって、セレネばかりに操縦させてちゃ、これからの旅でセレネが可哀そうでしょ？ あなたも男ならMFぐらい操縦しなさいよ。あなた、私から見るとただのヒモにしか見えないもん。魔術の知識は皆無、MF戦もできない、ならせめてセレネの足として働きなさい、地を這いつくばる奴隷のように！」

ノーションの弾丸がリオンの心を貫通する。再起不能であった。注文を聞きに来た少女がさらに険悪な眼差しでリオンを刺した。蘇生不能である。

「ヒモって何だ？ 私は、これだ。大盛りで頼む」

今日のオススメを指さしてセレネが、ノーシヨンの顔を覗いている。

「ああ、てめえ！ 何頼んでんだ！！ 金が無いつてわかってんのか！！」とリオンが慌てふためくのを女性陣は完全に無視している。

「ヒモっていうのは、女の子に働かせて能天気遊んでいる男のことを言うのよ。強いヒモと弱いヒモがいてね。女の子が男をシバキ回して“生かしてやっているんだぞ”って奴隷のようにされるヒモと、女の子がベタベタに甘えて“あなた無しでは生きられません”って奴隷のように尽させるヒモがあるんだけど、あなた達はどっちかしらね」

「どっちなんだリオン？」

「俺はヒモじゃない！ なんてどっちかが奴隷になるタイプしか用意されていないんですか！ 俺達はノーマルな関係です。健全な旅仲間です。わかったかセレネ」

リオンが猛反撃して、セレネに言い聞かす。

「はいはい、そゆことにしといてあげるわ。セレネを踏みたくないったら私に相談しなさい。女が喜ぶ踏み方を……教えてあげるわ」

「踏まれ方ならワシに任せておけ。相手に負担の掛からない踏み方を直接伝授してやるわ」

「もうこんな人達と飯食うの嫌だー！！」

ノーシヨンとドクターMの耳打ちに耐えきれず、リオンが叫んだ。そして、すぐさまテーブルの下に隠れる。昨日、厨房に連れ込まれて包丁を投げ飛ばして来た大男が来ると判断したからだ。

「セレネ、最初はこうやって優しく踏んであげるのよ。徐々にキツくね」

「こ、こうか？」

「何吹き込んでんだコラア！！　って、お前も照れながら便乗して踏むな！！」

テーブルの下に隠れているリオンの頭を金髪の女性と蒼髪の少女が踏みつける。そして、老人がリオンの隣で指を咥えて羨ましそうに眺めていた。

「ハイ、ヒモの兄ちゃん。　ライスね」

八才ぐらいの男の子がリオンの目の前にライスを置く。つまり、床下だ。

「あら、ありがとうねボク。　ほらリオン、餌よ」

ノーシヨンが満面の笑みで男の子に礼を言った。喜んで帰っていた黒髪の男の子。恐らく、さっきの少女の弟だろう。二重の目と整った鼻がよく似ていた。

「だから、ヒモじゃねえ！　なんで金払ってこんな扱いされねえといけねえんだよ！　痛ッッ！」

ドガンとテーブルに頭をぶつけるリオン。彼は相変わらず、今日も災難だった。

「昨日、襲ってきた連中は、どうなったんですか？」

ライスを食べながらリオンがノーシヨンに尋ねる。

「二人は殺したわ。昨日、確認したMFは五機だったから、恐らく最低五人の隠密が追ってきていると考えて、残り最低三人はどこかにいる。フードを被った男は確認できたけど、もう違う変装をしていると思うし、この情報はもう使えないわね。でもまあ、しばらく大人しくしてると思うから安心していいと思うわ。午前中のお出掛けはその確認も含めての事だったのよ」

ノーシヨンが簡単に“人を殺して来た”と言うことが信じられなかった。理由はどうあれ殺人だ。相手の一生を潰したのだ。命を奪ったのだ。戦争を体験していないリオンにとって、人の命とはとても重たいものなのだ。

「なんで……殺したんですか」

思わずリオンが漏らす。何を言っているのか理解できず、ノーシヨンは少年の言葉を心の中で反復する。

「ええ……と、殺さないで殺されるからよ。敵に情けをかけてたら死ぬわ。大切な人も守れないわよ？」

ノーシヨンは、日替わり定食の焼き魚と格闘しながら答える。

「でも、人の命をそんなに簡単に」

「あなた、好きな人の命と、どうでもいい十万人の命どちらか捨てるって言われたらどうする？」

ノーシヨンが眼鏡を掛け直し、リオンの瞳を見る。

「何ですかいきなり。 そんなの選べませんよ」

「それじゃ、どっちも殺すで良いのね」

「そんなこと一言も言っていないです！」

リオンがムキになって立ち上がった。この質問に何の意味があるのかと。気分を害したいだけなら止めてくれと。

「決断すべき時に決断できないようじゃ、どっちも助けられないわ。ちなみにね、好きな人を選んだ人は、罪人。 十万の方を選んだ人は、そうね……英雄と言ったところで世の人から評価されるわね。選べなかったあなたは、どっちも殺しちゃったんだから悪魔かしら」

「怒りますよ？」

「怒ってくれていいわ。 私も悪魔の選択をした内の一人だから」

ノーシヨンが再び焼き魚と格闘を始める。

「私は、現にそんな選択を迫られた時、選択できなかったのよ。結果的に両方殺したわ。だから、今さら一人殺そうが殺さないが私には関係ないのよ、私は悪魔なんだから」

「それでも人殺しは……よくない」

思わぬ人物からの言葉にノーションが顔を上げた。

「あら、どうしてかしら。魔女が人殺しを否定するなんて予想外だったわ」

ノーションが新しい発見でもしたかのようにセレネに言う。

「人を殺すと不幸になる。殺した分だけ元に戻れなくなる……と思う」

「元にね。あなたの場合はどっちが“元”なのかしらね？ 伝説上の殺戮を繰り返す魔女なのか、それとも今の人殺しを拒むあなたが魔女なのか」

「セレネは人なんて殺さない！ あんたは、学書しか読んでないからわからないんだ。こいつと一緒に過ごせば誰だってあんなの嘘だったってわかる！ 俺が死んでないのが証拠だ！」

リオンが声をあげた。大男でも何でも来いと言わんばかりに立ち上がる。魔女と知って平然とセレネと関係を保ってくれていたノーション達は、理解してくれていると思っていたのに、ただ興味本位で、研究目的で一緒にいたのかと、リオンは目の前の学者達を睨みつけた。

今のリオンならば、大男が摘まみだそうとしても、目の前の女性に立ち向かって持論を叩き込んでみせるだろう。

「リオン、落ち着いて。私が悪かったわ。ただ、そうゆう考え方の人物もいると教えてあげたかっただけよ。あなた達の考え方を理解してくれる人間がどれだけいるか考えて発言しなさい。でない……私と同じ所に来ることになるわ。世の中、綺麗事だけでは生きていけないのよ。残念だけど、私はもう、あなた達のような考え方ができる歳じゃないわ」

冷静なノーションがリオンを宥めた。^{なだ}リオンは怒りがまだ納まっていない様子だが、ノーションの言いたいことも理解しているつもりだ。自分の言うことを全ての人が受け入れてくれる世界ならば、ウインド村は今もあそこにあっただろう。神父だってもっと違う道を選んでくれていたかもしれない。

「こつちこそ、すみません」

「それでいいんじゃないよ、リオン。今の世界にはお主のような少年がおらん。権力と金で全てが決まる国で、お主の様な確固とした何かを持っている者はいなくなっただけだ。お主の親御さんはさぞかし出来た人なんじゃろうな」

「……母さんと姉ちゃんは自慢ですよ」

小声でリオンはドクターMに答える。リオンは、父親について絶対に言いたくなかった。グレンさえいなければ、母も苦しまずに暮らせたし、姉も苛められることも無かった。リオンは、生涯父親のことを許すつもりはない。生きていたら母の墓前で一日中土下座させてやるとさえ思っている。

「それより、昨日のカーストはどこに行ったんだ？　これだけ騒げば、リオンなんて八つ裂きにされているのに」

「カースト？」

「ああ、昨日の大きな男の人のことですよ。　知り合いのおっさんに似ているからセレネがそう言ってるだけです。　ほんとだよな、俺もいつ来るかビクビクしてたけど、今日は休みなのか？」

リオンは、ノーションに説明してカーストによく似た大男を探す。

「ああ……ここのオーナーなら、たぶん、軍施設よ」

「……何かあつたんですか？」

ここの軍の在り方を見たリオンは、嫌な予感しかしなかった。

第28章 早過ぎた英雄（前書き）

主人公覚醒！！

……となるときつと、アクセス数も伸びるのしょうね。

第28章 早過ぎた英雄

「昨日の晩、っていうか深夜ね。 軍人が四人殺されたのよ。 正確には三人だけど」

スープを一口啜り、ノーションがナプキンで口を拭く。

「殺されたって……まさかあのおっさんが？ 隠密の仕業なんじゃ」

「ワシらもそう思って調べたんじゃが、隠密ならば、そんな派手なことせん。 少なくとも三日間は生きてるように偽造しよるだろう。 それに昨晚の殺しは、人間技じゃないそужゃ」

食事中ということもあって老人は、それ以上口にするのを止めた。しかし、どうしても聞きたそうにしているリオンを見てノーションが続ける。最後に“知らないわよ”と片眼を開けてリオンを威嚇するが効いていない。

「はあ、内臓がね、全部取り出されて路上に放置されてたの。 犯人の意図が全くわからないけれど、いずれにせよ両名は死亡よ。で、軍施設の近くの芝生で股間から首筋まで真つ二つに引き千切られたのが一人、これは木の上に自分の腸で巻き付けられていたらしいわね。 余談だけど、発見者は最初、腸で出来た紐を木のツルかと思っただらしいわ」

強烈過ぎる犯行現場を想像してリオンは、食欲が無くなった。 ちようどお金も無かったので、腹が膨れて良かったと思うことにするリオンだが、当分、動物のホルモン類は食べれそうにない。

「は、はは。メタルフレームで犯行なんてまた大胆なことしたんですね。後一人の人もそんな惨い殺され方をされたんですか……」

リオンが苦笑いしながら、軍人の冥府を祈る。先ほどまで人殺しはよくないと言っていたが、こうまでめちゃくちゃな殺し方をされるとそれは、人殺しじゃない。ただの殺戮だ。そして、どれだけの恨みがあつての犯行なのかリオンは想像もつかない。

「それがね、MFを使った痕跡が無いのよ。共和国軍施設にMFなんて近づけばレーザーですぐバレるし、芝生の木に腸で縛り上げるなんて器用なことMFで出来るわけがないわ。木の幹に頭から突き刺すならわかるんだけど、それにね……リオンの言っている後の一人は見つかっていないのよ」

ノーションがスプーンを置いて代わりにタバコを手を持った。

「見つかつて無いのに、死んだことになっているんですか？」

リオンが生唾を飲み込む。バラバラにされて、全てのパーツが揃っていないから“見つかつていない”と表現したのだろうかとリオンは想像し、吐き気を堪えた。

「ええ、明らかに出血多量よ。彼が見回っていた所に彼の破れた服と暴発して変形したライフルが置かれていたそうよ。最初に言った二人分の内臓達と一緒にね、ちなみにこの二人も内臓しか発見されていないみたいで、“入れ物”が見つかつて無いわ。骨とか皮膚ごと燃やしたにせよ灰ぐらい残るし、臭いも出るのに周辺の村では異臭を訴える人もいない……彼らはどこに行ったのかしらね」

タバコに火を付けて、一息付くノーション。どうやら喋っていた

ノーションも食べる気を失ったらしい。食器にはまだ少し料理が残っている。

「な、内臓の人達はともかく、どこにいったんですかね、その見回りの人。実は、その人が反乱を起こした……とか、うん？ セレネ、また気分が悪くなったのか」

小刻みに震えているセレネを見てリオンが額に手を当てる。熱は無いようだ。しかし、震え方が異常だ。

「あ、あ、ああ。なんでも、なんでもないぞ」

「お前、朝食抜いてんだから、ちゃんと食つとけよ？ はは、まさか、ノーションさんの話が怖かったのか？」

少しからかいながら、リオンはセレネの頭を撫でてみる。触角の様な癖毛が、みよんみよんと跳ねては元に戻る。

セレネは「お腹がいっぱいだ」と言ってリオンが買って来た朝食を全く食べなかった。昨晚、たくさん食べたわけでもないのにセレネがそんなことを言うので、リオンはセレネの体調を心配している。

「ああ、そんなところだ。ノーション、一つ聞きたいんだが、そのいなくなつた男は、吊り目で、金髪ではないよな？」

セレネが恐る恐る尋ねた。全員が彼女の質問の意図がわからないと言つた様子だ。

「うーんどうだったかしら、ドクター。顔写真のあつた資料、くすねて来ましたっけ？」

「ちょっと待っておれ、今確認してみるわい」

老人は自分より大きなノーションの鞆をあさる。

「ああ、これかの？ うーん、吊り目で金髪……ではないの。茶髪でえ、どちらかと言うと、これは垂れ目じゃないかのぉ。どうしてそんなこと聞くんじゃない？」

くすねてきた資料を流し見て、老人がセレネに聞いてみた。

「いや、何となくそんな奴は吊り目で金髪な気がただけだ。　　ははは」

何故か安堵するセレネ。リオンは、それでセレネが安心するなら何でもいいかと思っああまり気にしないことにした。

「あつ！　ドクターこれ資料違いますよ。　これは、木の上に吊るされていた方でしょ？　行方不明者は……セレネの言う通り金髪で吊り目ね。　よくわかったわね、魔女の予知能力ってやつ？　まさか、どこかで見たとか！？」

突然、食器が割れる音がした。セレネが皿を落としたのもあるが、もう一つ明らかに別の方向からの音がしている。

「おうチビ、どうしてくれんだ？　見てくれよ、俺の服びしょびしょじゃねえか？」

端が尖った黒いサングラスをした軍服の男が、先ほどの黒い髪の男の子に言い寄っている。金髪のブロードヘアーが特徴的な軍人は、立ち上がり男の子に襲いかかりそんな眼つきをしていた。

そこにリオン達の注文を聞きに来た少女が庇うように間に入る。

「すみません……でも、あなたがこの子に……足を掛けたから」

「ちよつとちよつとちよつとー！ オーナーいないの。ここの娘さんめちやくちや言い掛かりしてるよ？ ああ、オーナーは今、軍施設だったな。殺しちゃったもんね、俺の部下を四人程」

下品に高笑いする軍人。明らかにこんな店に来るような階級の間じゃない。靴も服も全て見るからに高級品である。ただ、男の子が付けてしまったであろう水の染みがズボンに付いていた。

「なんだアイツは！」

「リオン、止めなさい。関わらない方がいいわ。アイツはこの村を統治している少尉よ。事実上、ここの村の王みたいなもんなんだから。それに、男の子も悪いわ。見てたけどあの子……わざと水をかけに行ったように見えたわ。馬鹿な子」

ノーションがリオンの服を摘んだ。ノーションの話が本当なら、男の子にも非がある。というか、男の子に非があるので、どうしようもない。「トイレに行くだけですよ！」と言ってリオンは、ノーションの手を振り払って揉め事と反対方向に去って行った。

リオンは、現場が見えないトイレに逃げ込み自分の気持ちを自制させるつもりだ。腕も足も震えている。正義漢が強過ぎるが、行動を起こす程彼には勇気が無かった。明らかに軍人の横暴ならば、掴み掛かって相手の非を認めさせようとしただろうが、男の子が先に手を出したとなれば……仕方が無い。

無様な姿。

英雄のような力があれば、どうにかできる。しかし、そんなもの

を彼は持ち合わせていない。

それに、軍も馬鹿じゃない。子どもがした事ぐらいで、怒るようなことは無いだろう。まして、この地域を統括している少尉ともなれば、人望もあるし面子もある。子どものしたことではいちいち構っている暇は無い筈だ。

だから、大丈夫。だから、何も聞こえない場所に行く。自分の心が“無能”という現実に殺されてしまわないように。自分が英雄を目指すだけの人間であると夢を見続けることができるように。

リオンの心は個室といたに続く、古びた木製のドアのように、摩耗していた。

「他のお客さんの迷惑になるから止めて下さい！ 父さんは誰も殺してません！ 昨日だって！」

「一緒にお風呂に入ってたんだから！ なぐんて笑わしてくれんのか？ ふざけんじゃねえぞ！！ てめえの親父が殺したんだろうが、俺がそう言ったらそうなんだよ」

少女の顔面を殴り、蹴りあげる軍人。髪を引っ張り無理やり立たせた。これはまだ、軍人の挨拶であり、社交辞令だ。彼の場合、女だろうと容赦はしない。そもそも、人間としてこの村の住民を見ているかさえ怪しい。

軋む音を立てながら、店の奥にあるトイレのドアが閉まる。

リオンは、すぐさま手洗い場の蛇口を力強く捻った。水が出る音が個室に響いている。外部からの音は、この水が出ている限り遮断できるだろう。

（何、やってんだよ……）

リオンは心の中で呟く。ウインド村でセレネを庇った勇敢な少年

の面影は、そこには無かった。あの行動はセレネだったから取れた行動だ。今のようには、何とも思っていない村人のために、自分の体を投げ出すなんて彼にはできなかった。

少年にも力があれば、できたかもしれない。英雄のように立ち振る舞えたかもしれない。

そんな中、水の音を突破して、男の子の声がリオンの耳に聞こえてきた。

「止める！ オレがお前の腐った頭に水をぶっかけてやろうとしたんだ！ やるならオレをやれよ！ 姉ちゃんは関係ねえ！！」

「ガキ、死んでみるか？ 俺がこの土地を統治しているハンス少尉と知つての発言かコラア！！」

「止めて下さい！ 弟は関係ないんです！ 私がかけて来いって言ったんです！ だから、お仕置きは私が受けますから！！」

足にしがみついて、弟を守ろうとする少女。しかし、少女を守ってくれる人はこの場に誰もいない。当然だ、誰が喧嘩を仕掛けた方を弁護することができようか。

例えば、喧嘩を仕掛けられたとしても三十人の軍人を顎で使える小隊長の少尉に刃向かう愚か者は、この村にはもういない。

少尉に刃向かう人間には、死刑より恐ろしい私刑が待っているのだ。

「へえーそう。じゃ、脱ぎな。今ここで」

「そ、そんな」

あり得ないと少女は思った。こんな顔馴染みの人がいる所で、服

を脱ぐなんてできるわけがない。助けを求めようと視線を飛ばすが、その視線を受信してくれる人は誰もいない。

見えないフリをすることがこの場にいる大人達の精一杯、“後で慰めの言葉を掛ければそれでいいだろ”。“弟の躰をしっかりしてなかったからこんなことになったんだ”。

各テーブルから発せられた音の出ない声が、視線によって少女に浴びせられる。

「できないなら、弟君を軍施設に連れて帰ろっかな。子どもは、一日耐えられるかな。うちは特に厳しいからな、死んだらごめんな坊主。ここで脱げなかったお姉ちゃん恨むんだぞ」

リオンと同一年ぐらいの少女が泣いていた。弟がいる前で涙なんて見せたくない筈なのに、泣いていた。

なんでこんな人が、この村を統治してしまえるのか。どうして、何もしていない父が軍に連れられていけないといけないのか。何も何も自分達は悪いことをしていないのに、どうしてなのかと。

その頬を伝う涙は、誰にも届かない。

見えないのだから仕方ない、知らなかったのだから仕方ない、関係無いから仕方ない、少女達に非があるのだから仕方ない。

少なくとも目の前の軍人は、涙なんて通用しない。むしろ、逆効果である。

「セレネ、目を合わせちゃダメよ。アイツはあの娘だけで終わらせるつもりは無いわ。お金を置いておいて外に出ましよう。すみません、黒い髪の男の子が帰ってきたら先に宿に戻ったと伝えてくれませんか？ 何であの子はこのタイミングでトイレ行くのよお、それに、いつまでトイレ行ってるの、早く出て来なさいよ！」

ノーシヨンが隣の席の男組に伝言を頼み、文句を言いながら荷物

をまとめ始めた。

ノーションとて、まさかハンス少尉が、こんな食堂へ直々にやってくると思ってもいなかった。

恐らく、部下に報告も無しに遊びに来たのだろう。軍との関わりを避けているノーションが知っていれば絶対にこの店には来ていない。成り上がりの若い軍人が、予測不能な行動をしたためノーションは、今にも少尉の頭を手元にあるフォークで貫きそうな勢いだ。

「泣き止むまで待つてるから、好きなだけ泣いてくれや。あんまり時間掛かると弟で玉転がして遊んでやるからよ」

慰めの言葉でも何でもない。気が変わったら弟を蹴り飛ばして遊ぶと言っているのだ。

「わか、り、ました……ひくっ、うう」

「そうそう、連帯責任だからね。子どもの無礼は、保護者が取る。これが大人のルールであり、マナーなんだよ。今日は社会勉強が出来て良かったね」

恐る恐る、ボタンに手を掛ける少女。震え過ぎるその小さな手は、ボタンすらともに外せない。もう、死んだ方がマシだとさえ思う。こんな村で、こんな人に虐げられて、見下されて、幸せなんてどこにも無い。少女は弟を守るためだと勇気を奮い立たせて、一つずつボタンを外して行く。

軋む音がしてドアが閉まった。さっきより力無く閉まったドアの音に気が付く者は、誰もいない。

「あの下衆な犯罪者からは、想像も付かない程君は、良いスタイルをしている。こんな店をするより、俺の施設の近くでアルバイト

をする方がもつと楽に暮らせるぞ？ いい働き先を紹介してやろうか？ 市民の富を向上させることも公務の一つだ、遠慮することはない。 ハーハッハ！」

満足げに衣服を緩めていく少女の姿を眺めて、高笑いをしている。逆らう者がいないとは、なんと愉快なことか。戦う前から負けを認めさせるこの快感だけは、何にも代えがたい。ハNSTAは興奮と喜びの絶頂にいる。

が、声が最高潮に上がる前に止んだ。
否、止められる。

止めざるを得ない状況が彼の身に起こった。

「げふあつ、ごは、ごっは！ かは！」

大きな口を開けて笑っていたハNSTA。そのため顔面に飛び込んできた大量の水をかなり飲み込んでしまったようだ。

ブロンドに整えた髪の毛がワカメのように垂れ下がっている。髪の毛の先から水が滴っていた。

「…………ふ、ふはははは！！ はあ…………ああゝあ…………顔までびしょびしょだ」

ハNSTAは、溜息を深くつき、服と頭を触り、笑顔のまま少女から視線を外す。

「誰だオラあ！！ この俺をハNSTA少尉と知っての行いか！！ 出てこいやあゝ！！ 店、ぶっ壊すぞお！ 今、名乗れば、鞭打ち一〇〇〇回で勘弁してやらあ！！」

怒鳴り散らすワカメヘアの軍人。各テーブルで口を抑えてハン

スタを眺める人々。彼らが小刻みに震えているのは、ハンスタの情けない姿を笑っているからではない。恐怖で体が勝手に震えているのだ。もし誰も名乗りでなければ、自分が濡れ衣を被せられるかもしれないのだ。つくづくこの店に来たことを後悔する大人達。

「どこ見て吠えてんだよ、おっさん……アンタ、頭あ……大丈夫か？」

血走ったハンスタの瞳には、黒髪の少年が空になった“トイレ用”と書かれたバケツをぶら下げて軍人ハンスタの前に立っていた。

武勇も魔術の才能も学も地位も金も無さそうな、少年。

否、ガキ。

「アンタが言ってることは全部……セクシャルなハラズメントなんだよおお!!」

リオンがノーションに怒った時よりも顕著に怒りを露わにし、ハンスタの前に立ち並んでいた。怒りと恐怖、そして逃げた自分への情けなさ、様々な感情が混じり合ってこの場にいる誰よりも震えている少年。

心臓があり得ない強さで自己主張している。“馬鹿”“間抜け”

“見栄っ張り”と訴えているようにリオンは感じた。

震える足は、立つのがやっとだったが、こうなった以上

英雄をやるしかない

力の無い少年は、早過ぎる段階で英雄になろうと飛び出て来た。力の無い者が英雄になれる筈がないと彼とて重々承知である。

リオンは、今までたくさんの嘘を言ってきた。悪戯をした時に言うこともあった。姉を心配させまいと言うこともあった。

されど、志だけは、英雄を目指す、志だけには嘘を付いてはならない

リオンの黒真珠のような瞳が、サングラス越しのハンスタの目を強く刺す。

（自分だけには、絶対負けられない。そして、それ以上に）

リオンがバケツを投げ捨て、心の内で呟く。
そして、憤怒するハンスタを指さして口を開いた。

「アンタだけには、負けられない」

「お前はああ、私刑^{リンチ}だ。 ミンチになるまで私刑^{リンチ}だ」

魔術師ハンスタの顔が怒りと屈辱で歪んだ。リオンは触れてはいけないこの村の逆鱗に触れてしまったのだ。

第28章 早過ぎた英雄（後書き）

リンチなるのかミンチになるのか、
今後のリオン君に期待してあげて下さい。

第29章 入る腹の中

リオンとハNSTAは、痛んだ食堂の前で対峙していた。

普通なら野次馬が集まるであろうこの場面であるが、誰一人立ち止まって様子を覗く者はいない。

建物の中から隠れて盗み見ている。巻き込まれないための用人なのだ。

故に、砂利道はハNSTAとリオンは荒野の決闘場となっていた。

「さあ、どうゆう風にいたぶって欲しい？ それとも、土下座でもして命乞いするか？」

サングラスを掛け直しハNSTAが言う。先ほどの怒り狂った態度とは一変していた。

相手が魔力に鈍感過ぎるのだから当然である。牽制として魔力を放出し威嚇してみたが、リオンはそれにすら気が付かない様子だ。魔術師なら相手の魔力が変動した瞬間、何かしらのアクションをする。魔除けを仕込んでいたとしても、ハNSTAの本気の魔術を直撃すれば、ただの飾りも同然である。

それらが理解できていない少年は一般人。戦闘初心者。ハNSTAが一番好きな部類の人間だ。

そしてもう一つ、軍人相手に十代の少年が喧嘩で勝てるはずが無い。まして、相手は大人を私刑にしている魔術師である。

ハNSTAの計算を余所にリオンは両手を前に構えた。

その行動を見てハNSTAは笑い声が漏れそうになるのを堪える。まだ、笑うには早い。相手が地に平伏し、言葉が発せ無くなっただけから一気に、盛大に笑うのだ。あの快感を、あの気持ちよさを味わうために今は堪える。

「くつく。 ふん、見ねえ面だなあ？ 旅人をボコると色々面倒なんだが……軍に刃向かったらそんなものは関係ねえよな？ 最近
は、抵抗する馬鹿がいなくなったら退屈していたんだ。 楽しませ
てくれよ！」

絶対有利。 絶対勝利。

それらしか頭に無いハNSTは、抵抗しようとする少年の行動が
滑稽で仕方が無い。

「いいね、その目。 ああ、ブチ殺してえ目だ。 今朝、捕まえた
ウジ虫と同じ目えしてやがる」

早く殴らせてくれ、早くその顔を踏みつぶさせてくれ、早く泣き
声を聞かせてくれ。 脈拍が上がるの を無理に抑えたため、かん高
い声で挑発するハNST。

「ウジ虫……この店のおっさんのことか？」

「そうだ。 俺の部下を殺した許しがたい罪人だ。 お前と共犯し
た男だろ？」

ハNSTがありもしない事実をたった今付け加えた。 これで万が
一少年が死んでも問題ない。

「俺は誰も殺してなんかいない！ そうやって、ありもしない罪を
被せて村の人達を苦しめて……何が楽しい」

「俺が“殺した”と言えば殺したんだよ。 お前は犯罪者だ。 目
には目を歯には歯を……殺人には殺人を。 どうだ、わかりやすい
教えだろ。 遺跡の石板に書かれていた、古代からのありがた〜い

教えた。お前みたいなカス野郎でも理解できるだろ？」

ブロンドヘアーの軍人は、ズボンのポケットに手をつ突っ込んだまま、ふつふつと笑う。もう我慢できない。餌が前にあるのにいつまでも焦らされ続けて、涎よたれの洪水ができそうだ。

チンピラのようにガニ股で、俯いたリオンの顔を覗きこむ。

リオンとてこの状況を簡単に打破できるなどとは、考えてなどいない。

真正面から戦えば負ける。ここでハンスタの挑発に乗って突っ込むわけにはいかない。

そう言い聞かせてリオンは、会話を続ける。相手の隙を付くしか勝機は無い。

「あのおっさんは、確かに物騒だったけど、人を殺すような人じゃなかった」

まして、軍人なんて殺さないだろう。残された家族のことも考えず、私利私欲で行動をするような男ではない。

一方的に叱られただけのリオンだったが、あの大男がそんな馬鹿なことをする筈が無いと信じている。そして、ノーションから聞いた現場の状態から、人間の仕業ではないと判断できる。

ハンスタは食堂の大男が殺したと言い張っているが、恐らく出鱈目に違いない。

リオンですら簡単に推測できることなのに、ここの軍人は一方的に決めつけて食堂の大男を連れ去って行った。

「おっさんを返せ。あのおっさんは、絶対にやっていない！もつとちゃんと調べろよ」

「アリバイがないだろ？　アリバイがあ？　それに、軍に刃向かつ

た罪人が指図してんじゃねえ！ お前はこれから私刑なんだよ、カス
が！」

「アリバイならあります！ お父さんは……父は、昨日の夜、私に
メニューの仕込みを教えてくださいました」

店の中から黒髪の少女が飛び出して来た。肩で揃えられた髪を揺
らし、ハンスタとリオンの間に立つ。

せっかくりオンが標的になったというのに、ここで飛び出せばリ
オンの努力は無意味になってしまう。

「てめえの意見は聞いていない。 どけ、今からお楽しみなんだよ。
私刑なんだよお、ショートタイムなんだよお！ 邪魔すんなよ、死
ね。 後で、肉親のお前も同罪ということにしておいてやるからよ
！」

何も無かった右腕から術式が浮かび上がってくる。そして少女を
指さし魔力を流し込む。ハンスタの右腕に書かれた術式が緑色に光
り輝き、魔術発動の過程を一瞬でクリアして行く。

「ショートカット簡易魔術よ！ 何が出るかわからないわ！ 逃げなさい！」

思わずノーションが店内から叫んだ。

民間人相手に魔術を行使するなんてノーションも思っていなかっ
たらしい。

しかし、“ショートカット”などと叫ばれても少女には意味がわ
からないし、どれほど危険かも理解していない。

「プレスPress」

笑いを堪え切れない軍人が叫んだ。

指先からは何も出てこない。しかし、指先にいる少年が膝を付いていた。

「かつつは！ ぐうつ」

血の味が喉の奥から込み上げてくるのを感じながら、向けられた指先を睨むリオン。

リオンには何が起きたか理解できていない。咄嗟に、少女の前に飛び出たが、何も見えなかった。

突然、鋼鉄のハンマーで殴られたような鈍い痛みが腹部を襲っただけで、ノーションが叫んだことと食い違っている。

目視できるものは、何も出てこなかった。炎でも電撃でも光でもない。痛みだけが出て来たようだった。

指さすだけで人の病を悪化させる呪いがあると聞いたことがあるが、リオンは健全な体だ。病状が悪化すると膝を付く程の病気など患っていない。

ただ、これだけの痛みを女の子に味合わそうとしたと考えると、リオンはますますハンスタのことが許せなくなった。

「あ……だ、大丈夫ですか！ きゃ！」

少女がリオンの肩を掴もうとした瞬間、乱暴に振り払われ店の入り口の前に倒れた。

「は、は、離れてろ……殺さ、れる」

それだけ吐き捨て立ち上がる。黒い瞳はずっと目の前の敵を睨んだままだ。

痛みも少しひいてきた。

「おお。女を庇うなんて正義の味方様だな。ところで、誰だ。さつき簡易魔術ショートカットのことを叫んだ奴は……女の声だったよな。」

手をパチパチと打って少年の勇氣ある行動を賛美しながら周囲を見渡すハンスタ。魔術師がいるとなると少し警戒せねばならない。魔力の探知では見つからない。となると、知識だけ知っている一般人の可能性が高い。それならば、大した問題ではないのだが、用心するに越したことはないだろう。

「アンタの相手は俺だ。それに俺は……正義の味方なんかじゃない。英雄見習いだ！」

腹部を押さえながら、地面を踏みしめ、真正面から拳を振り上げて突っ込むリオン。

これ以上、話しても無駄だ。次に誰があの指で激痛を味あわせられるかわからない。

「ああそうだった、先にお前の私刑だったな。しつかりやってやるから焦るなつて！ P r e s s ! P r e s s ! P r e s s !」
プレス プレス プレス

リオンの体が波打つ。しかし、接近を止めない。少年にとって理解できないこの衝撃は避けようが無かった。体中が軋み始め、痛みが全身に走る。痛みの稲妻だ。血液が痛みを全身に運んでいるのではないかとさえ思う。ただ、それだけだった。

「英雄なら、負け、ない。英雄なら負けないいい！ 英雄なら、負け……ちやダメだろおお！！」

リオンは空に向かって吠える。

もう、ハンスタの目の前に辿り着いていい頃なのに、距離が縮まらない。足の感覚が無くなり、走っているのかさえわからなかったのだ。

少年の足は痙攣^{けいれん}を起こし、指先から発射される衝撃をまともに受け続ける。

体が波打ちながら崩れていく。倒れようとしても次々と体に直撃する衝撃で前には倒れることができない。頑なに前に進もうとするリオンの体は、後ろには倒れることはなかった。

詠唱し続ける術者の命を受けて、目視できない弾丸は、膝を付いても尚前進する少年の体を何十と貫き続け、遂には少年の心を折った。

間近で少年がボロボロになっていく姿を見て、リオンに付き飛ばされた少女は悲鳴を上げ、両手で口を塞ぎ、目を伏せた。

乾いた地面から砂煙が巻きあがる。塵のカーテンの中で立っている影は見えない。

圧倒的過ぎる力の差。それは、努力や気持ちでどうにかなるものではないと思い知らされたりオン。

「プレエエスウー！ はーはー！ 指一本で勝つちまつたぜ？
ざまーねえなあおい。 楽しいなあおい。 立てよ！ 立ち上がれよ、
英雄さんよ！！ 倒してみろよ、俺を！ ハンスタ様をよお！」

砂煙が風で流され、頭から足の先まで砂まみれのリオン。時折、節々が震えているため、まだ生きていることがわかる。

しかし、立てる筈が無い。目は虚ろになり、悶える声すら出せないのだ。

口の中に砂が入っているがそれを吐き出す力もない。
今まで味わったことの無い恐怖が少年の心を襲う。今まで味わったことの無い痛みが少年の体を襲う。少年の体は小刻みに震えてい

た。

ハンスタとてどれくらいの攻撃を与えれば死ぬか承知している。恐らく、後ワンセツト同じ攻撃を繰り返せば、口から血と臓器を撒き散らして少年は確実に死ぬ。

今朝、連行した大男なら耐えられた攻撃でも、この少年ではワンセツトも持たない。

ただ殺すだけでは面白くない。せつかく子どもが手に入ったのだから、それ相応の対応をしなくては。ハンスタは笑いながらリオンの頭を乱暴に持ち上げる。

「なんだあ？ もう終わりか？ 情けねえやつ。これで終わりのわけねえよな。お前は英雄様だもんな！ 弱った生き物にはたっぷり恐怖を味あわせてやらなきゃいけないだろ！ “もう殺してくれ”と叫んでも人殺しは良くねえし、半殺しで我慢してれよ？ 殺さないのが俺の主義なんだ。勝手に死んだらそれは寿命だ。つてことで、続きは基地でやろうぜ。お前の寿命が尽きるまでな！」

「あつ……」

リオンの髪を鷲掴みにして、基地の方面へ引きずって行く。英雄を志す男には相応しくない女の様な声が漏れた。先ほど以上の拷問が待っていると思うとリオンは、血の気が引いていく。拷問が怖いと思う……そんなことを考える自分が情けない。誰か助けてくれと思う……そんなことを願う自分が惨めだった。カッコつけて喧嘩を売ってこのあり様。力が無ければ何もできない。

想いだけでは何も守れない。志が高くても何も守れない。自分の身さえ守れない子どもが誰かを守る。弱き人々を守るなど不可能なことだ。自分もその人々と同じ“弱い側の人間”なのだ。

少年ができることは守ることではない。誰かの代わりに犠牲になることだ。それが彼の限界だった。

英雄など……所詮は子どもの夢だった。

「くう……うう……」

気が付くと少年が泣いていた。頭を掴まれ引きずられている自分が許せなかった。

誰も助けに現れない。少年のような馬鹿なことをする人間はもう全員死んだ。

この村に残っている者は、賢明な判断ができる者達だけだ。

「おいおい、英雄が泣いてるぞ。ハハッ！ てめえら見てるか、英雄が助けを求めているぞお？ 助けなくて良いのかあ？ まあ、軍に刃向かった罪人を助ける悪い人は、この村にはいないよなあ！」

上機嫌で砂利道を歩く軍人を止める者はいない。いきがっている人間をどん底に突き落とすことは、やはり気持ちいい。この少年も自分の力を過信して、軍に盾突いた馬鹿の一人だ。

思わぬ収穫に心を躍らせ、ハンスタは早足になる。

「なんで……勝てない……なんで、俺はあ、弱いんだ……」

「ああ？ まだ喋る元気があるなら、もうちょっと痛めつけてやるうか？ なんで弱いんだあ？ 生まれつきだろうが！ 入る腹の中で人生は決まるんだよ！ 官僚か農民か、勝ち組か負け組か！ 自由に使える富！ 与えられる権力！ そんなもんは腹の中にいる時から全て決まっているんだよ！ 努力しても無駄無駄あ！ 勝ち組は定員が決まってるんだよなあ、今地べたで這いつくばっているお前は一生負け組だ！ 踏まれても文句が言えないクソ野郎だ。 潔く税

金を納めねえなら死ね！俺達を楽しませねえなら死ね！死にさせ！！」

顔面を膝で蹴られ、踏まれ続け、リオンの口内が切れる。そのまま地面に押し付けられ口さえ開けなくなる。

ハンスタは次に何をしようか考えながら腕を振り上げたが、ピタリと止まり、ピアスの付いた右耳に目が行く。

無線連絡が頭に直接流れ込んできたのだ。

そのままリオンを踏みつけ、耳の裏に片手を添えて無線に出る。魔科学によつて作られた無線機“マキ”。固有魔術で使用できる者が数少ない放出系魔術の“テレパス”を解明し、誰でも魔力さえ流せば、テレパスが使用できる代物だ。

「ああ？俺だ。兄貴か、今良い所なんだよ、話なら後で……何！？ゲハルトが来るだつて？何しに来やがるんだよ！例のやつ？ああ、兄貴に言われた通り高値で売りまくってるぜ！このままいけば兄貴は、少佐だろうが大佐だろうが何だつて……はあ！？冗談じゃねえ、俺の楽しみを奪う気かよ！……クソチーターが！わかったよ……兄貴がそう言うならそうするよ」

ハンスタは無線の相手と言い争い、舌打ちをした後、悔しそうに倒れているリオンを見る。

口を閉じてテレパスを効率よく使える者は少ない。それこそ、テレパスが元々使える魔術師ぐらいである。

テレパス魔術師と違い、他の魔術師は頭の中の事を全て相手に伝えてしまう危険性がある。自分の考えていることが相手に筒抜けになること程恐ろしいことはない。

口に出し、相手に伝える内容を自分の中で確認しながらテレパスを送る。この手順さえ守ればプライバシーは守れる。

「白けた……私刑は明日に持ち越した。てめえの顔は覚えた、逃げても無駄だぜ。俺が仕事を終えて消えてやがったら、凶悪犯として締め出してやるからな。せいぜい強くなってココで待っていてくれよ“英雄さん”」

それだけを言い残して、ハンスは村を去って行く。

意識が朦朧とするリオンには反応する力が残されていない。

ただ、自然と涙が溢れ、乾いた砂利道を湿らせていくだけだった。

「ちく、しょう……ちく、しょう……ちくうう」

リオンは、うつ伏せになったまま身動きできずに泣いた。

傍観している大人達が許せなかった。自分をここまで惨めにさせた軍人が許せなかった。

そして、脅威が去って心底安心して自分の心が一番許せなかった。

第29章 入る腹の中（後書き）

いつも読んで下さってありがとうございます。

おこきです！

わかつとるわ！といった感じでしょうか。

長らくお待たせしまして申し訳ないです。ようやく更新できました。

何かあればメッセージや活動報告で教えてやって下さい。

リオン君と同じくダメな子ですが、これからもよろしくお願いします。

第30章 友の起こし方（前書き）

ども、久しぶりの更新です。

いつも読んで下さっておりありがとうございます。

自分が言えることはこんなしかないですが、

「読んで下さっている皆様、本当に感謝しております！」

第30章 友の起こし方

“人が困っていたら助けてあげる。 お姉ちゃんとの約束、ちゃんと守ってくれてるんだね。 さすが……英雄さん”

懐かしい女性の声が聞こえた気がして、リオンは目を覚ました。

「姉ちゃん……いつてえ」

宿屋ではないベッドの上。腹部を押さえながら起きあがる。何故だか顔中も日焼けしたかのようにヒリヒリしている。

見渡すと花や使い古したぬいぐるみなどが置かれている部屋だ。よく見れば窓のカーテンもひらひらした物が付いて、乙女チックである。

「俺は……」

「あ、目が覚めましたか！」

ノックもなくドアを開けられ、ベッドの上で縮こまるリオンに少女が駆け寄った。

「君は？ 確か食堂のウェイターさん……無事でよかった、痛ッ」

「あまり無理をしないで下さい。眼鏡の女の人が言っていましたけど、軍人の使ったあれは魔術だったみたいです。呪いとかじゃないからほっといても死なないと言っていましたけど……。凄い暴力を振るわれていたし……他にどこか痛む所はありますか？」

「全身満遍なく痛いけど……眼鏡の人、ノーシヨンさんのことか？
そうだ！ ノーシヨンさんと爺ちゃんはどこだ？ まさか、連れ
て行かれたのか！？」

黒髪の少女の肩にしがみ付いて、二人の安否を確認するリオン。
あの軍人が魔術について詳しい女がいると怪しんでいたのを思い
出し、最悪の事態を考えてしまったのだ。

「お、落ち着いて下さい。少尉は、あの後すぐ基地に戻ったよう
です。眼鏡を掛けた人は用事があるからと言って、どこかへ行か
れましたよ？ あなたをよろしくと言われてまして、その、えっと……
顔が、近いです」

「ぬうわあ！ ご、ゴメン、悪気はないんだ、そんな気はこれっぽ
ちもないから！ 安心してえ、って、痛ッテ」

無理に体を捻ったため、傷に触ったようだ。どちらかの後頭部を
軽く押せば唇同士がぶつかるぐらいの位置に接近していた自分の行
いを認識し、痛さよりも恥ずかしさが増して、顔を赤くしたままり
オンが俯いている。

「全く無いって……逆にそんな風に言われても、なんだか複雑な感
じです……」

少女はしゅんとする。

どうしろと言うのだとリオンは、頭を掻きながら困惑した。メタ
ルフレームのことしか頭に無い日々を過ごして来たりオンには、女
の扱いはまるでわからない。

すると黒髪の少女が居直し、手に持った木製の箱を両手に持ち替
えて口を開く。

「あつ、私はシリスと言います。この度は、本当にありがとうございました。」

深々と頭を下げるシリス。ふわりと鼻に届く花のような優しい匂いがリオンには刺激が強過ぎた。何故、女性からはいつも良い匂いがするのだろうか。

姉のマリアからも良い匂いがしていた。年頃の女性は、体から良い匂いが出るようになるのかとリオンは推測する。

シリスは薄黄色のカチューシャで前髪を後ろにやり、ゴムで後ろにその長い髪を一つに束ねていた。エプロンをしていることから料理か何かをしていたのだろうか。背こそ少し低い、姉のマリアに負けず劣らない綺麗な女性である。

優しい弧を描いた眉、穏やかな光を秘めた黒い瞳、大人に近づきつつある唇や胸など、家庭的な雰囲気まといを纏いながらも、大人の女性としての魅力を内包したシリスはリオンの男心をくすぐるには十分過ぎた。

ウェイターをしていた時は、あまり気が付かなかったが、シリスはかなり可愛い部類の女の子であると認識させられたリオン。

ウインド村の人間と同じ、ここら一帯で着られている灰色の民族衣装をエプロンの下に着用していたため、清楚な雰囲気が出ているシリスは一層、故郷の姉と被って見える。

一方で、お礼を言ったのに返事がなかなか来ないため、頭を下げてたまのシリスが上目使いでリオンの様子をチラチラと見ている。

シリスからすれば、まじまじと自分の様子を見られているようにしか見えないのだろう。まさか、少年の姉と自分を照らし合わされているなんて思いもしない。

シリスの視線を感じながら、リオンは頭の中で言葉を検索するが、何も出てこない。

ただ、音の無い時間だけが過ぎて行く。そして、言葉が出ない理

由を思い知らされた。

リオンは礼を言われるようなことをしていなかったのだ。

“英雄”という二文字に釣られて、自爆しただけ。少女に礼を言われて言い筈が無い。シートを握りしめ、やり場のない気持ちをどうにか分散させるリオン。

（この子に礼を言われるようなこと俺は……してねえ。俺は、何もできなかったガキなんだ、弱え負け犬なんだよ）

浮かれた気持ちも消え去り、自分がいかに自惚れていたのかと思うと吐き気すらする。

シリスを守るために飛び出たのではない。少女を庇うという理由を付けて、自分の英雄としてのくだらないプライドを守りたくて飛び出ただけなのだ。

それをシリスが可愛いと認識した途端、「シリスのために飛び出た」と都合の良い動機へと塗り替えようとしていた。

そんな偽善で少女から好意を貰おうとしていたのか。

そんなとってつけたような理由で軍人に立ち向かったのか。

そんな腐った考えをしている奴が英雄になんてなれるのか。

リオンは、湧き上がる自己嫌悪で涙が溢れそうになり、ただ、“悔しい”という感情が脳裏で暴れ回る。

「一人にしてくれ」などと口が裂けても言えない。言うのも恥ずかしい。滑稽だ。

リオンは言葉を探し続けた。現実突き落とされた英雄見習いは、結果的に助けた少女に何か言わなくてはいけない。

そして、ようやく長い沈黙が破られる。

「あ、ああ。そんな頭を下げなくても……いいって。俺はリオン。リオン・オルマークス。お礼なんて言われることとしてねえよ。ただ……喧嘩売ってボコボコにされたただけだ、ハハ。穴が

あれば入りてえぐれえだ」

喧嘩を売って返り討ちにあうなど、男の面目丸潰れである。思春期の特に英雄を志す少年の場合、これ以上の醜態は無い。穴があればそこに入りたいと思う気持ちになるのも無理は無いのかもしれない。

リオンは目頭が熱くなるのを感じながら無理に笑って見せた。そんな少年を輝いた瞳で見る少女。その笑顔が人助けをして“当然のことをしたまでだ”と言わんばかりの笑顔に見えたのだろう。

シリスにとつてリオンは英雄だ。身の危険を顧みず、体を張って守ってくれた英雄。他の誰が“ただ見世物にされただけの少年”と言おうとも彼女には関係ない。

リオンの体には無数の包帯が巻かれていた。

手にしている救急箱から手当てをしたのはシリスと判断できる。

ならば、彼女を無下にしてはならない。彼女は、リオンにとつて命の恩人だ。

一方で、目の前の少女に、軍人に負けて泣いている所まで見られていたのではないかと心配するリオン。歳の近い女の子に無様に泣いている様を見られるなんて、英雄として失格だ。それ以前に男として失格だと思う。ますます気落ちするしかなかった。

「いいえ、誰も助けられない所をリオンさんは、助けてくれました。軍人相手に勇敢に立ち向かってくれました！ あ、リオンさんは、旅の方ですよ？ この辺りでは見かけない顔なので」

「ああ、うん。 ちょっとわけありだな」

「やっぱり旅の方だったんですね！ この村であんな馬鹿なことする人いませんもん、ああ！ すみません！ 恩人の方に馬鹿だなんで、私ったら」

悪気なく言われているため、リオンも反撃できない。自分でも馬鹿なことだと思っっているため、仕方なく溜息を付く。

自分を助けるために軍人に刃向かってくれたと疑いもなく笑顔で言われると、リオンは胸が痛くなった。

（俺は、そんな奴じゃない。君のためじゃ……ない）

俯いたまま布団を見つめるリオン。このシーツのように自分の心も汚れが無く、綺麗ならば、救いはあったのかもしれない。

「……父の知り合いの方でしょうか？ 村以外で父は知り合いがいなかったと思うのですが、あの軍人と言いついていた時に、父を信じて下さっていたので」

「いや、知り合いというか、昨日、この店でナンパ野郎と勘違いされて叱られたんだよ。包丁とか色々な物が飛んできて……正直死ぬかと思った」

「す、すみません……お父さん、私のせいで若い男の人を見たらナンパする人だと思う習性がついちゃって」

えへへ……と恥ずかしそうに父親のことを話すシリス。

人間、いつどんな習性が付くかわかったものではない。今まで何人の人間が自分のような目に合ったのか聞かないことにした。代わりに違うことをシリスの後に付け加える。

「でも、良い人だと思った」

「え？ どうしてですか？」

「料理が旨い人に悪い人はいないって、姉ちゃんに教えられたんだ。料理つてのは心で作る。だから、どんなに腕前がよくても心が綺麗じゃないかぎり不味い飯になるんだってさ。ここのおっさんの料理は旨かったし、叱ってくれる人に悪い人はいねえよ。俺の村にも、よく叱ってくれるおっさんがいたんだけど、そのおっさんと君のお父さんの雰囲気が何となく似ていたんだ。真っすぐで、悪いことは悪いと言える人じゃないか？」

「ああ、はい。そういう人です父は。あ、いけない。私、リオんさんの傷薬を代えに来たんです。ええと、その……上着をですね、ぬ、脱いでもらえませんか？」

こんなにも素直な笑顔ができる女の子を守れた。

ただの男ならそれだけで満足だったかもしれない。だが、リオンは完璧な英雄を志す。それ故に、ただ人を助けることができただけでは満足できないでいた。

しかも、助けた動機が自分のプライドのためだ。そこに英雄たる“心”が無かったとリオンは思っている。

英雄ならば、英雄という肩書きを守るのではなく、一番に少女のことを思っ て行動しなくてはいけなかった筈だ。それなのに、自分は肩書きを、いずれ手にしたい肩書きのために行動した。

英雄と同じ行動を取っていたのだとしても、“心”の在り方がすでに違う。今回リオンが取った行動は模倣だ。英雄“みたいな”行動だ。英雄の行動ではない。

「あの……やっぱり女の子の前で服を脱ぐのは嫌でしょうか？」

「へえ？ ごめん、ボーっとしてたから。ああ、服を脱げばいいのか？」

「……はい、お願いします」

何故、そこで照れるのだろうか？ リオンは疑問に思い、肌着を脱ごうと肩を上げる。

「いつてえー！！ マジでえ、痛えー。 クソ、あのワカメ野郎、本気で肩踏みやがって……よし、もう一回」

リオンは何度も肩を上げようとしては、口の中で「痛い」を連呼する。

「私が……脱がせましょうか？」

「いや、服ぐらい自分で、痛い……いてえー！」

「ほら、腕を私の前に突き出して下さい。 肩を上げようすると痛むんですから、ここなら大丈夫ですよ。 はい」

はい、と言われ胸の前に手を移動させられたリオン。 後、数センチ先にはシリスの控えめな胸がある。

リオンは手を硬直させ、全身を固まらせた。 不可抗力で触りかねない。

シリスは、気が付いていないのか、リオンの上着を脱がせるためにベッドへ前かがみになっている。

（しゃがむなよ！ 見えるだろ！ ダメだダメだダメだあ！！ それ以上は〜）

「リオンさん、そんなに目を瞑らなくても。 塗り薬ですし、少し

滲^しみるだけですよ」

笑いながらシリスはリオンの顔を見ている。薬を怖がるリオンを見て可愛いと思ったのか、シリスは「痛くないですよ」などと子どもをあやす様な声を出している。

口が裂けても初対面の女の子に「胸、見えそうだぞ」などと言えないのであった。

「や、や、やっぱ、薬とかいらねえよ。俺はこの通り元気だし、他の誰かが怪我したときに使ってやってくれ」

「無理はよくないですよ。せつかくお薬持ってきたんですし……」

この貧しい村では、薬はとても貴重に違いない。ウインド村では、薬草を栽培している家がほとんどであったため、さほど薬に困ることとはなかったが、この村を見た限り薬草ではない植物ばかり栽培されているのをリオンは目撃している。

気候や立地などの条件でウインド村では栽培できる薬草が限られており、同じような気候と立地のこの村で栽培できる薬草の名前と種類は、リオンにも馴染み深いものしか栽培できない筈なのである。通りすがりの旅人に薬を処方する余裕など無い筈だ。

「とにかく、いいって！ いいって！ 舐めとけば治る！」

「え？ どうやって全身を舐めるんですか……ま、まさか……私がですかああ！」

「ば、馬鹿！ 誰がそんなマニアックな……げふん！ そんなことしろって言うか！」

「じゃ、じゃあ……誰が舐めるんですか？ お薬、嫌いですか？」

「はあ……わかったよ。 そん代わり、ゲンロン草とタユタユ草を煎じた塗り薬だけでいいから」

一番簡単に栽培できる薬草の名前を条件に処方を受けることにしたりオン。臭いがキツイため、ウインド村にいる時からこの二種類の薬草は大嫌いだっただ、リオンは覚悟を決めた。

こんな目がクリクリした女の子に全身を舐められたらドキドキし過ぎて心臓発作で死ぬだろう。リオンは邪な妄想をしてしまい耳まで真っ赤になった。鼻からの血が噴射するのも時間の問題かもしれない。拷問された後のように白いシャツが血の海に染まることだろう。

そうこうしている間に、シリスの白い手がリオンのシャツをまくし立てていた。

「うわあ、肩幅……広いんですね。 す、す、すみません変なこと言って！ さ、さあ、もっと腕を前に伸ばして下さい」

「あ、うん……って！」

シリスの胸がやはり近い位置にあり、逃げようと後ろのめりになる。どうして、こんなに触って下さいと言わんばかりの位置に女性の胸はあるのだろうか。

それに腕を限界まで伸ばせば胸に当たるのではないかと不安になり距離を取ることにする。

（無我の境地だ、無我の境地。 こんな時はメタルフレームの型式を……）

リオンは目を瞑りながら余計なことを考えないように努めた。しかし、匂いがする。今思えば女の子の匂いがこの部屋には充滿していた。さつきから頭がシャッキリしないのはこの匂いと雰囲気のせいだともうやく気が付いたリオン。

リオンが下手に後ろに下がるため、「あれ？」と言いながらシリスは徐々に近づいてくる。リオンが遠のいていることに気が付かないのだろうか。自分の腕がまっすぐに伸びていることに気がついては、いそいそとにじり寄る。それを何回か繰り返したため、今やシリスはベッドに上がっている状態だ。

「あの……リオンさん、じっとしてますよね？ 私の腕、気が付くと伸びているんですけど……」

「へ？ ああ、大丈夫！ 大丈夫！ 成長期だろ、成長期！ 腕も伸びるもんだって、ハハハ」

胸を見ながら成長期と連呼している姿がドクターMと重なってリオンは泣きたくなった。

「おかしいな、腕も成長期なのかな……」とシリスは首をひねっている。

リオンは観念して、さっさと腕を伸ばした。世話をしてもらっているのにこんな態度では申し訳ない。何も胸がある高さで腕を伸ばす必要はないのだ。腰辺りに手を伸ばせば十分服は脱がせてもらえる。そんなことも考えることができない程今の状態に参っていた。

シリスは手慣れたようにリオンのシャツを脱がし、腹部に巻かれた包帯を外して薬を塗り直す。

「いい、冷たいい、しかも……ぬるぬるするうゝ。 何だよこれ、こんな薬草見たことねえよ、うゝえ、気持ち悪いいゝ」

「あ、すみません。声を掛けてからの方がよかったですよね。名前は長くて覚えていませんけど、傷にはこれが一番なんです。なんでも、軍人さんも同じものを使っているとか」

そう言いながら、リオンはジェル状の生まれて初めて見る“お薬”を塗ってもらっていた。

腹部には握り拳ぐらいの痣^{あざ}が無数にあり、見ているだけで痛そうだ。自分の体ではないような錯覚を起こす。今朝まで何も無かった部分に、これだけの痣ができるなんて、男でもシヨックなのだ。他の個所もこれから痣が浮かび上がってくるだろう。

「この程度で済んでよかったです。ハNSTA少尉に刃向かって生きていた人はいません……お父さんもきっと」

シリスの手が止まる。泣きそうなのを我慢しているような声だ。

「きっと大丈夫だって！ちゃんと調べれば、おっさんが犯人じゃないってわかる筈だ。昨日、シリスと一緒にいたんだろ？」

空気に触れたせいかわたわたと始める“お薬”に寒気を感じながら、頭を垂れる少女を何とか励まそうとできるだけ明るい声を出すリオン。無責任で、樂觀的過ぎる考え方だとわかっていながら、そう答えることしかできない。

なぜなら、リオンにシリスの父を助け出すことなどできないのだから。

「……あの人は何も調べてくれません。ハNSTA少尉の言ったことしか聞きません」

あの人達とは軍人の事を指すのだろうと思いいリオンは、続けて話を聞き入る。

「どうして、あの人はこんな酷いことをするんでしょうか……この国の軍人さんは皆あんな人ばかりなのでしょう。 私たちはただ、静かに暮らしたいだけなのに」

リオンは、ますます力が欲しいと感じた。 他を圧倒する力さえあれば、軍隊を一掃できる力があれば、目の前にいる少女だけでなく、この村を救えるのにと心の中で弱い自分を呪った。

「あ、すみません……リオンさんにこんなこと言うつもりなかったのに、酷いですよね、私。 命を助けてもらっただけじゃなくて、愚痴まで聞いてもらって……怪我までさせて」

「別にいいんじゃない？ 誰だって愚痴を言いたいことぐらいあると思うぜ？ 俺でよかったら聞くて。 そんな代わり、俺の愚痴も聞いてくれ、それでおあいこだろ？」

リオンには、その程度のことしかできない。 偽善で塗り固めた英雄。 真の英雄になる人物が助ける人間とおあいこでは話にならないだが、今はそう言うことが一番いいと判断したのだ。

「は、はい！ リオンさんの愚痴も聞かせて下さい。 リオンさんは……優しいですね。 リオンさんみたいな人が共和国軍にいれば、私たちも」

「え？ なに？」

何でもありませんよ、と笑顔を作って薬箱に薬を片づけていくシ

リス。

リオンは優しくなりたいのではない。強くなりたいのだ。誰よりも強く、誰よりも気高い英雄になるために。

一方で、シリスの元気が出た様子を見てホツとするリオン。返り討ちに合ったが、こうやって目の前の少女の笑顔を守れたのなら、飛び出したことにも何か意味があったのかもしれないと考えられるようになった。

さりげなく手を握られ、心臓を圧迫されたような気持ちになる。そして、ふとシリスの背後を見てしまった。

「ひいー！」

「キャッ、どうしたんですか、リオンさん？　ちよつとあつあ」

思わずリオンはシリスの体にしがみ付いてしまった。

シリスの体はリオンが思っていた以上にゴツゴツしていた。日々、家事をしているとやはり、これ程筋肉が付くものなのだろうかそれとも、親による遺伝なのだろうかなどと包丁を投げつけた男を思い浮かべシリスについて考える。

抱きついたシリスからは女の子の匂い……いや、焦げた臭いがしていた。部屋に籠った花のような優しい香りではなく、火薬か何かを燃やしたような臭いだ。料理をしていて何かを焦がしたのだろうか。殺意の波動が勢いを増すのを感じてそれ以上、何か考える暇などなかった。それに上半身裸で女の子に抱きつくなど、変態行為をしまっている。

リオンの中の英雄像が音を立てて崩れ落ち、変態の二文字が浮かび上がってくる。

ナイフの銀の部分を背中にピタリと貼り付けられたような、物理的な寒さと精神的な寒さを合わせたもの……悪寒を感じる。

「ぐ……ちょっと気分というか、立ち眩みが、その、えつとだな」

「リオンさん、その、あ、あ、あの。私、男の人にそのこんなに引っ付かれたことお」

声をドアに向けて放つが、シリスに抱きついた言い訳をシリスにしているみたいで、ますます不味いことになっている。

何故、もう一人重要な人物を忘れていたのだろうか。何故、半開きのドアの隙間にある闇を見てしまったのだろうかと後悔している。男は隙間があると垣間見てしまう。眼下にあるシリスの谷間や暗黒に繋がるドアの隙間など。これはもはや業なのかもしれない。

「ジー」

「よ、よお。どうしたんだそんなところで」

布団でこの現場をどうにか隠そうと目の前の悪魔から視線を外さず、布団を探す。ただ、抱き合っている自分達は隠しきれない。無理だ、いくらなんでも無理だ。

「あー！！ セレネさん！？ えつとこれはその！ 立ち眩みなんです！」

「うわ！」

シリスは、手をジタバタさせ、自分にもたれ掛かっているリオンを吹き飛ばして、逃げるようにベッドを下りた。さらに、真っ赤になった顔を両手で隠しながらモジモジしている。

「ジー」

「ど、どうしたんだよセレネ、そんなに見つめて」

腰まである長い髪を揺らし、若干猫背のまま少女はリオンの顔を下から眺めている。蒼髪の少女は大変ご立腹のようだ。リオンは彼女が怒っている理由は、何となくわかるが明確にわからない。別にセレネとは付き合っているわけでもない。だが、冷や汗が毛穴から滲み出て来ている。

「あ、ああ。なんだその、何か……」

“あつたか？”と聞けば恐らく月花のパイルバンカーで殺されると直感して、口籠るリオン。

「随分シリスと仲良くなったんだな、ヒモよ。シリス、ヒモに何をされたんだ？」

「は、はい、何もされていません。だ、大丈夫です、少し引つ付かただけです、引つ付かただけです……私、引つ付きちゃった、どうしよう」

セレネは、体を忙しなく動かしているシリスの肩を掴んで怪我を探るようにシリスの体を入念にチェックしていく。

「さりげなく名前みたいにヒモって言うな！それに、俺は獣じゃねえ！さっきのは、びっくりしてシリスに飛びついてしまっただけ、うがッ！」

「すまん、手が滑った」

「てめえ……どんな滑り方したら、薬箱が頭に直撃すんだよ！滑るといふ次元じゃねえぞ……くっそ、いってえ」

リオンはセレネに木製の救急箱で殴られた。しかも、角でいきなり飛びついてしまったため、シリスも驚いたに違いない。今回は甘んじてセレネからの鉄拳制裁を受けることにする。鼻を鳴らしてセレネが椅子に腰かけた。

「なあ、セレネ。どっかに買い物にでも行つてたのか？ あんま出歩くなよ？ ここの軍人連中を見ただろ」

「いや、ずっとこの部屋にいたぞ？ わけあつて部屋の外に出ていただけ。第一、村を出歩こうにも金が無い」

一問一答をするように淡々と受け答えるセレネ。

「はあ？ どうして外で待つてたんだ。ここには椅子もあるのに」

「ああ、それはセレネさんが……」

「シリス！ それは言わないと約束したじゃないか！」

しまった、と言わんばかりに椅子を倒して立ち上がるセレネ。

シリスの口を塞ごうと狼狽するセレネを見てリオンは、何かあると直感しシリスを見つめる。こんなに慌てるセレネは滅多に見られない。リオンは自分が寝ている間にどんな可愛いことをしてくれたのか気になつて胸を高鳴らせた。

「セレネが？」

「り、リオンさんの顔を見て、せ、せ、セレネさんが」

視線を逸らしながらシリスが声を絞り出す。口にするのははかれる内容なのか。よほど恥ずかしい内容に違いない。そう考えただけで、リオンの顔もセレネ同様に赤く染まる。

「セレネさんが、洗濯バサミをリオンさんの顔中に挟んで、悪戯するから出て行ってもらったんです！」

「おい！ セレネてめえ！ 怪我人に何してやがる！」

「うう、すまん、暇だったから……つい」

ポケットから青い洗濯バサミを取り出し、気まずそうに青い洗濯バサミをはむはむとして遊ぶセレネ。

「お前は暇だったら意識不明の怪我人の顔面に、洗濯バサミを挟むのか？ とんだ鬼畜野郎だな、お前は！」

寂しげな視線で見ただとか、手を握っていてくれただとか、オンの幻想は妄想で終わった。

そして、身に覚えのない日焼けのような顔面の痛さの謎も解決した。

「早く起きると思って……」

「そんな言い訳があ！ あ、……早く起きると思って？」

呟くようなセレネの声を聞いてピタリと口が止まるリオン。コクッと頷いてリオンの目を見ながら続ける。

「悪い夢から早く覚めるには、つねるに限る」

セレネなりにリオンのことを想ってやってくれたのだと理解し、それ以上何も言えなくなった。

だが、洗濯バサミでつねるのはどうなのだろうか。寝ていた自分の顔に洗濯バサミが無数に挟み立てられている姿を想像し、顔を思わず顔をしかめるリオン。

「……悪い。お前の気も知らずに怒鳴ったりして、でもな、洗濯バサミは止めてくれよ」

「ああ、すまない。シリスにも怒られた。いきなりで悪いんだが、リオン、一つ頼みがあるんだ」

セレネがリオンの瞳を見たまま懇願するように言った。

「私が悪い夢を見ている時……お前が私の頬をつねって起こして欲しい」

悪い夢を見ているかどうかなど、他人にわかる術などないのだが、リオンは頷く。

「わかった。お前が悪い夢を見ていたら俺が起こしてやるよ。ただし 洗濯バサミでな」

「お、お前は、過ちを繰り返すつもりなのか！ これでつねるのはダメなんだろう！？」

「ちげえよ、この場合仕返しだろ？ なあ、シリス？ まあ、せい

ぜい悪夢を見ないよう気を付けろって。 お前の場合、食い物を食
つてる夢しか見なさそうだけだな」

照れるシリスの肩を寄せて味方に取り入れ、リオンは笑う。
むくれた顔をするセレネと交わしたこの何気ない約束がどんな意
味を含んでいるのか、今のリオンに気付く術などなかった。

「ドクターこれはやはり……」

ノーシヨンは宿屋の自分達の部屋で植物の枝を机に並べ、観察し
ている。隣の部屋からは、先日破った窓ガラスを直しているため、
修復工事の物音がしていた。

「そうじゃな。 噂の村はここじゃったか、そりゃ共和国政府が血
眼になって探しても見つからんわいな、まさか身内の陣にあると思
わんじゃろて」

「そうですね、まあ、ここの少尉なら公認しているものだとは勘違い
していてもおかしくないですよ。 頭悪そうですから。 ご存じだ
と思いますが、全客室にありましたよ。 この分だと、村規模で栽
培していますね。 こうも堂々と置かれると逆に違和感ありません
ね」

ノーシヨンが枝の先に付いた赤い葉をもぎ取り、タバコの巻紙で
巻き付けて火を付けた。

「ふう……やっぱビンゴです。まさかとは思っていましたが、嫌な予感っていうのは当たるものですね」

「そんなもんじゃよ。これだけ大量に栽培されているとなると裏があると思えんが……リオンのように飛び出すでないぞ」

「そうですね。後、十年若かったら飛び出して宿屋の亭主をボッコボコにしていたと思います。でも、怒りよりも憎しみの方が強いですよ。まさか、こんな村でこれを目にするなんて。目を背けようとしてきた罰なんでしょうかね」

溜息を付き、静かなる怒りを拳に露わすノーション。

「ここの宿屋で栽培しているだけでも、あの薬を作るには十分。魔術薬品を民間人が調査できる筈がありませんし、仮に個人で葉っぱを燃やして楽しむには量が多過ぎますよね。それに軍の横暴が酷いこの村で自主的にこれを栽培できる筈がない。軍が戦争の終わった今にそんなものを作る理由がわかりませんが、見過ごせませんね」

「じゃが、ワシらには何もできんぞ。余計なことは考えるんじゃない。隠密が静かにしておる間に、村を離れるぞい。これ以上、罪のない少年少女を巻き込みたくないでの」

ドクターMが荷物の整理をしながら、窓の外を見る。

ノーションは煙を吹かしながら、気持ちを落ち着かせた。今は私事より仕事を優先せねばならない。わかっている。そんなことは、わかっているのだが

「ああ、それともう一つ嫌な予感がするんですよ、とてつもない嫌

な予感が」

口が勝手に話しを始めていた。

「なんじゃ？」

火の付いた葉を灰皿で押し消して、次にタバコを取り出すノーシヨン。

「近くの村に“帝国の悪魔”が現れました」

「勿論知っておる。今更、何の確認じゃ？」

「ここから先は私の憶測なんですけど、昨夜の軍人惨殺事件……彼の仕業じゃないでしょうか？」

「何十機ものMFを破壊するテロリストがそんな姑息な手を使うとは思えんのじゃが？」

「仮にですが、軍人惨殺事件は共和国の力量を計るものだとしたら？」

「あやつにそんな計算高いことができるわけがなかるう」

ドクターMは、話を早く切り上げようとしているようだった。しかし、ノーシヨンはまだ話を続ける。

「これだけは言いたくなかったんですけど　この村にはオリジナルがいます」

「だから、さつさと村を去るんじゃ、彼女がワシらのやってきたことを知れば生かして置く筈がない」

「ですが、幸いなことに彼女は重度の記憶喪失です。いえ、あそこまでいくと人格が変わったというべきでしょうか？ 私もまんまと騙されましたからね。世の中にはあり得ないことがあり得ている” 師匠の言葉は、まさにその通りだと実感しましたよ。

だから、いきなり殺されるようなことは無いと思います。現に私たちは生きていますし、リオンの話しぶりから人を殺すようなことはしていないようです。……ドクター、逃げないで下さい、あなたは私と同じく自分の業から逃げることは許されません」

隣の部屋から金槌を打つ音が響く。鳴り終わるのを待って、ドクターMは口を開いた。

「……… 荒野で彼女と出会い、魔女と知った時ワシは運命を呪った…… お前さんの言うようにワシも目を背けてきた罰なのかもしれない。いいじやろう、お前さんの好きなようにせい。もしかしたら、ナンバー0とロストナンバーも親の臭いを嗅ぎつけて、やってくるかもしれん」

「ありがとうございます」

ノーションが深々と頭を下げる。金髪の頭が上がるのを待ってドクターMはノーションに言った。

「ただし、ナンバー0とロストナンバーが姿を見せたら必ず殺せ、そのためにワシらはここまで来たのじゃからな」

「ナンバー0 “帝国の悪魔”とロストナンバー “共和国の武者”……。どちらも殺して差

上げますよ。私の命に代えてもね」

ノーシヨンは、自分の宿敵である赤い花を見つめ、ホムンクルスとしてドクターMの命令を受けた。

第30章 友の起こし方（後書き）

もっとテンポよく物語が進むよう修行します。

第31章 疑惑（前書き）

今回は前回のように長くありません。
気楽に読んでやって下さい。

第31章 疑惑

「いてえ、てて……ノーションさん、魔術で俺の怪我治せないんですか？」

「ムリ」

「そんな即答しなくても……」

リオンが怪我の様態を看ている白衣のノーションに尋ねてみた。ベッドの隣ではセレネが暇そうに本棚を眺めている。

ノーションがシリスの巻いた包帯を再度巻きなおしながら続ける。

「あのね……なんでも魔術でパツパツと治せたら医者いらないわよ。医者がいるってことは、そーゆーことでしょ？ 治すってことは、細胞や血管を復元するわけだから、破壊しかできない現代の魔術では逆立ちしたって無理。創造できるのは古代の魔術ぐらいよ」

「はあ、魔術も万能じゃないってことですか。ふうん」

医者白衣を着用したノーションが、壁にもたれかかって腕を組む。

「地水火風　つまり、四大元素以外の領域に関しては、魔術なんて大したことないわよ？　その他に言ええば、錬金術から化学と科学を開発した帝国の方が凄いいんじゃないかしら？　あつちではMF以外にも電気で動く乗り物とかこっちに無いものが沢山あるわよ」

ちよつと腫れが引いてるから問題なく治るわよ、と診察を終えノーションがさつそくタバコを吸おうとして手を止める。

ノーションは医者ではないが、心得がある。人体に関わることならば、潜りの医者よりも詳しいくらいだ。

目が点のままのリオン。四大元素はさておき、MF以外の乗り物など想像を絶するものだったらしい。

「いけなつ、ここ女の子の部屋よね？ はあ……我慢するか。時間もあるし、原始人のリオンに教えてあげる。乗り物が気になるの？ それとも四大元素？」

「乗り物って、帝国はメタルフレームみたいなのを作ってるんですか！」

興味深々で乗り物を選んだりオン。その言葉にセレネの耳がピクリと動く。その姿を見て思わず笑みを浮かべノーションは、部屋の中央に足を運びながら口を開いた。

「さすがにMFは作れないわよ。車とか船とか、まあ基地に行けばこつちでも見れる物だけど、民間用にも作られているわ。向こうでは、民間でMFを扱うなんてあり得ないわね。ただでさえ、帝国の土地はMFが見つかりにくいのに、民間に回す余裕なんて無いもの」

心の底から帝国に生まれなくてよかったと思うリオン。MFに乗れなければリオンは発狂しているに違いない。

「でも、前の大戦は戦力が互角だったんですよ？ メタルフレームが少ない帝国が共和国と同じ戦力って、おかしくないですか？」

「あなたって、ほんと」

何でそゆうとこだけ頭が回るのよ、と心で呟きノーションは言葉を選ぶ。

「社会の違いよ」

「社会？」

いつの間にかセレネも加わり首を傾げながらノーションの答えを待つ少年少女。

「そ、帝国と共和国では当たり前だけど国風も違うし国民の意識も違う。帝国は昔から階級社会だし、民間でMFを保有する者がいないから国民を統率するのに時間なんて掛からない、でも、共和国は違った。戦いを反対する国民がMFでデモを起こしたり、政治家の足元を見たりと……まあ、前大統領の悪政もあって共和国の中に反対勢力が出来ていたのよ。義賊なんてのも出てきて、『正義と仁義』を掲げてその辺りで暴れ回っていた時代よ、発掘が盛んだった時期でもあるからメタル・ラッシュとも言っかね。連中のやってたことは盗賊と変わらないんだけど」

カーストがあまり多くを語らなかつたメタル・ラッシュの裏の一面をリオンは思い出していた。

弱い者は強い者に食われても文句が言えない。カこそがメタルフレームの操縦テクニクこそが全て。しかし、そこに男達は夢を抱き、巨万の富と一流の“メタルフレーム乗り”としての称号を追いかけたのだ。

「いくら統率力の無い共和国でも、メタルフレームの数で勝ってい

れば共和国は帝国を圧倒できたんじゃないのか？」

「それに、帝国には魔術師がいらないんじゃないですか？ 俺みたいな一般人が動かせるのはハンドレットぐらいだ。 サウザンドと魔科学兵器で攻められ」

リオンが言い終わる前に人差し指で自分の口を押さえてノーションが場の空気を支配する。 セレネも押し黙るしかない様子だ。

「帝国も馬鹿じゃないわ。 捕虜にした魔術師を解体して魔術についで知識を取り入れていったの。 で、とある研究チームに疑似魔力装置《Fake Magic Device》を作らせたわけ」

研究チームの名前を敢えて言わなかったノーション。 リオンは、そんなことよりも非人道的過ぎる帝国のやり方に怒りを覚えた。 いくら勝つためでも捕虜を解体するような国があつていいのだろうか。

「ここからFMDを扱える“技術師”が登場するのよ。 これで人材は五分、後はMFを片っ端から掘りまくって質のいいサウザンドで敵を討つだけ。 ほら、内乱が勃発している共和国より帝国の方がスマートでしょ」

話し終わると同時に控えめのノックが聞こえる。

「皆さん、今日は遅いので、ご飯を食べて行って下さい。 何もありませんが、助けて頂いたお礼がしたくて ああ、一緒にいたお爺さんは今どこにいるんですか？」

シリスが弟を引きつれて料理をお盆に載せ、部屋に入ってきた。 姉の後ろをいそいそと付いてくる弟をノーションは鋭い目で軽く

追った。

「え、マジで！？　ありがとうシリス。　部屋借りて、怪我の手当でもしてもらって、飯まで……こっちがお礼をしなくちゃいけないのに。　爺ちゃんなら宿屋かな？　なんで？」

「リオンさんは私たちの命の恩人ですから、ご一緒の方にも御馳走したいと思っただけですよ。　あ！　タオ、リオンさんにお礼言っ
てなかったでしょ？　ほら、お礼を言いなさい」

タオと言われた男の子が首だけ頭を下げて「ありがとうございます」とお礼を言う。　緊張しているのか、動きがカクカクとしていた。

「すみません。　なんだかこの子、緊張しちゃってるみたいで」

「いや、だからお礼を言うのはこっちの方だ。　って……お前はなんでこの状況で自然

に飯を食ってんだよ！　ノーションさんからも何とか言っ
てやって下さい！」

肉にかぶりついているセレネの頭を鷲掴みにして、リオンが吠える。

「ああ、私ちよつとタバコ吸ってくるわ。　セレネ、もし、食べたかったら私の分も食べていいわよ」

部屋を後にするノーション。

「それじゃ、私、お仕事に戻りますね。　ゆっくりして行って下さい、ほら、タオ行くよ？」

ノーシヨンの後ろ姿を寂しそうに見送りシリスとタオも部屋を出て行った。

部屋を出てすぐの廊下は真っ黒だ。

リオンがいる部屋から漏れる黄色の光と、廊下の先にある窓から差し込む薄青の月光が唯一の明かりだ。

黄色と青のスポットライトが両者を照らす。

月明かりの下に金の髪をした女がつまらなそうに、部屋の明かりを見ていた。

ただ立っているだけなのに、近づく者を殺す 殺伐とした雰囲気
気を纏っている。気配を放っている本人さえも殺してしまいそうな
歪な空気を感じてシリスは息を呑んだ。

「……」

殺意の塊の横に階段があるため、側を通らざるを得ない。シリスは
無言で女の側を通過しようとした。

「あなた 臭うわね」

「は、はい？」

思わぬ一言に戸惑うシリス。

ぶつきらばうに言葉を紡いだ金髪の女性の表情は、髪の手で隠れてよく見えない。

「それから、そのボク あなたからも臭うわ」

「え？」

鼻を鳴らしながらノーションが月明かりをバックに笑う。

シリスの瞳に映るノーションの姿は、月光の作りだした影により、口元以外の特徴を全てその闇で隠されている。時折見える白い歯もこの状況下では闇を引き立てる色でしかない。

シリスから見たノーションは、白衣を着た悪魔と言ったところであらうか。

「一体何を言っているんですか？」

「私の職業　何か当ててもえるかしら？」

弟を庇うように抱きよせ、シリスがノーションを睨みつける。
得体の知れないモノ程怖いモノは無い。姉弟は目の前の悪魔が一体どんな答えを求めているかなど知る由もなかった。

「お、お医者様じゃないんですか？」

何故こんな脈絡の無い質問に答えなければならないのかシリスにはわからない。

さつきもリオンの診察をしていたし、何より白衣を着ている。医者以外に何があるのだろうか。

「ふふふ、お医者様か。　そう。　……正解よ。　私って医者っぽく見えないって言われるからちよっと聞きたかっただけなの。　そんなに怖い顔しないでちょうだい。　あ、それと……はい、これ」

「なんですか？　これ」

掌に乗る程度の小柄な瓶を渡されたシリリス。それがノーションの手から離された時、妙に重たく感じられた。

「リオンの面倒を見てくれたお礼。私が調合した香水、女の子ならそれぐらい付けておいた方が男に好かれるわよ？」

ウイंकをシリリスに向けるノーション。そこには、悪魔なんて思わせない優しい笑みがあつた。

ようやく顔を確かめることができ何故だか安心するシリリス。全て、月と夜が見せていた幻覚だったのだ。

「ありがとうございます！」

「ううん、いいのよ」

ぺこりとお辞儀をするシリリス。笑顔で階段を降りようとして、また呼び止められる。

「ああ、最後に一つ　あなた昨日もここで働いていたのかしら？」

「……は、はい。　ずっとお父さんのお手伝いをしていましたよ。」

それじゃ、お仕事があるので失礼します」

弟の背中を叩いて階段を先に降りさせるシリリス。また、先ほどの空気に一変する。一刻も早くこの不快な空気から解放されたかった。

「あなたとは全然関係ない話なんだけど……煙なんか焚かなくても、その香水で血の臭いも誤魔化せるわ」

「ッー!!」

シリスの目から生気が無くなる。

この女の人は何を言っているのだろうと何度も脳内で反復させる。自分は、血の臭いなんてしていない。している筈がない。わかる筈がない。

「私、血の臭いが大く好きな医者だからわかるの。きっとリオンの血があなたにもついちゃったのね……血の臭いがする女の子なんてモテないわ。ちゃんと香水使ってね」

「はい……使わせて頂きます」

階段の下の間を見ながらシリスが低い声で呟き、階段を駆け降りた。

シリスとて気が付いている。リオンを診察したノーションならば知っている筈だと。

彼の怪我は、魔術による打撲がほとんど。他人に血が付く程出血などしていない。

そして、シリスは自分の言ってしまった矛盾に気が付いていない。彼女が知っていなければおかしい事実がある。

昨日、ノーションは共和国の軍服でこの食堂に来ていたのだ。

例え、軍医と判断されたとしても、ハンスタに殺されかけたリオと軍関係者を会わせる筈が無い。

ノーションを拒絶しないということは、昨日のノーションを知らないということである。

それなのに、昨日、彼女は「お父さんのお手伝い」をしていたらしい。

店の中にいたのに、軍服のノーションに気が付かなかった。それも、親が突っかかって行ったテーブルの客なのに。

ノーションが共和国の人間でないとはあらかじめ知っていたのなら話は別だ。

「ああゝあ。 ナンバー “帝国の悪魔” といひ ロストナンバー “共和国の武者” といひ……人間の相手まで。面倒臭いことになってきたわね。悪いけど今あなた達に構っている暇なんかないのよ。邪魔するなら……殺す」

その強い言葉とは裏腹に、壁にもたれながら力が抜けたようにゆっくりと廊下に座り込んで、深呼吸をする。

今更、怖気づくなんて、そんな筈はない。自分は何度も何人も殺して来たではないかと、殺してきた人物の顔を思い出していく。

「邪魔する者は殺すのよ、ノーション。 例え相手が女子供であろうと、私は 悪魔なんだから」

ノーションは、自分自身に言い聞かせるように何度も呟き、冷たい廊下の上で髪を掻きむしった。

狙う側は敵を選べる。しかし、狙われる側は敵を選べない。目の前に立ち塞がるならば、殺すのだ。それができなければ殺される。

それが巨漢であろうが、人生の半分も生きていない子どもであろうが、等しく殺さなければ生き残ることができない。

命の重さなんてどれも同じ。そう決めた。そう覚悟した。 ゾンビパウダー 屍の薬を使った時に、心から悪魔になった。

それなのに いや、だからこそ。

「殺すのよ、ノーション。 殺られる前に」

第32章 始まりの夜

食堂で食事を済ませた後、リオン達は宿屋に戻ってきていた。

見送ってくれたシリスの口数は少なく、どこか暗い表情をしていたため、心配したリオンが声をかけた。

しかし、「お仕事が忙しかったんで……疲れただけです」と呟いただけで真意はわからずじまいだ。

満月の夜、乾いた空気と肌を撫でる冷気が世界を支配している。

青白い月光が舗装されていない道を薄っすらと照らし、人の気配を感じさせない。

宿屋の客室もほとんどの灯りが消え、その木造の家は静寂に包まれている。

ノーシヨンとドクターMの部屋の前で佇んでいる少女がいた。ノックをしようとするが何かがそうさせようとしない。

ロビーにこそ灯りが点いているが、ロビーから遠く離れた部屋が密集しているこの廊下は薄暗い。薄い扉の隅から光が漏れていることから部屋の主達がまだ起きていることは明白だ。

「ノーシヨン……まだ起きているか？」

軽く二、三回ノックをしておずおずとセレネが口を開く。

「え？ 誰え？ セレネかしら？」

「そつだ、少し話がしたいんだ」

中で声が何度か交わされた後、扉が開けられる。

「どうしたの？ こんな時間に？ まさか……リオンに襲われたとか？ ふあゝあう」

ニヤリと悪戯な笑みを零し、欠伸をする金髪の女性。頬が赤くなり、眼鏡もズレ掛けている。寝る寸前だったのか、いつものような知的な雰囲気は無く、むしろ少女の様なあどけなさが垣間見えるくらいだった。

「襲われてなどいない。あいつは死んだように寝ている。むしろ、私が襲えるくらいだ」

「ふふふ、そうね。どちらかというところの方が絵になるわ。で、何か用かしら？　まさか、襲い方を聞きに来たとも思えないし」

ノーションが手招きして、セレネを部屋に入れる。

机の上に紙が散らばっているだけで、隣の部屋と変わり映えしない部屋。視線だけで部屋を見渡していると、ドクターMと目が合うセレネ。

「よく来たのお。眠れんのか？　ホットミルクでも作ってやろうかの。ノーションや、ミルクを取ってくれんかの、さっき買っておいたやつがあるじゃろ？」

そう言いながらドクターMは、ボロボロのリュックサックから錬金術で使用するアルコールランプを取り出した。

「まあ、そんなとこに突っ立ってないで座りなさい。ベッドでもどこでも座ってちょうだい」

ノーションは、さりげなく鍵を閉め、ドクターMにミルクを渡す。ベッドに腰掛けセレネは、二人を交互に見る。

「すまない。すぐに、部屋に戻るから気を遣わないでくれ」

「まあ、まあいいじゃない。こっ寒いとホットミルクでも飲みたくなるでしょ？」

火が燃える音がしばらく部屋を支配する。

ノーシヨンはセレネが言葉を発するのを待っているようだった。そうしてセレネがようやく口を開いた。

「……魔術について詳しく教えて欲しいんだ」

「魔術？ どうして……？」

ノーシヨンはセレネの発言に首を傾げながら続きを促す。ホームンクルスが魔女に魔術を教えるなど、子どもが大人に歩き方を教えるようなものだ。

「昨日も言ったが私には記憶が無い。魔術のことなんて……何一つ覚えていないんだ」

「そりやそうでしょうけど、まさかあなたから教えて欲しいって言いに来るとは思ってもみなかったわ。まあ、教えてあげるのは構わないんだけど、覚えてどうする気なの？」

足をパタパタさせながらセレネは、カップを用意しているノーシヨンを遠目に眺める。

「魔術について勉強すれば何か思い出すかもしれない。それに、あいつを助けてやれるかもしれないだろう。英雄見習いの側に魔術師見習いがいても不思議じゃないだろ？」

「……やっぱり記憶、元に戻したい？ 言っちゃ悪いけど、魔女の記憶なんて思い出して楽しいものじゃないと思うわよ？ 魔女狩りって……知ってるかしら？ 名の通り、あなたを“狩る”行事なん

だけど、現代でも地域によれば魔女だと疑惑を掛けられるだけで、拷問の日々を味わう人もいるの。 正真正銘の魔女であるあなたが、魔女狩りを避けて生きて来たとは考えにくいわ」

そんな拷問の日々を思い出したいのかと、目だけでセレネに意見するノーシヨン。

それに魔女としての記憶が蘇ればノーシヨンとて困る事実があるのだ。 できることならば、世界の隅っこで静かに暮らしておいて欲しいのだろう。 殺せる存在では無いが故に、干渉されない場所に幽閉しておくのが最善の選択。 記憶が無いのならば、尚、好都合だ。 相手を想うフリをして、都合のいい方に話を持って行こうとする自分の行いをノーシヨンは卑怯だと思わない。 彼女は大人だ。 隣の部屋で寝ている少年とは違う。

一方で、セレネはウインド村の騒動を思い出していた。

昼間は優しく食べ物を分けてくれた大人達が、夜、掌を返したように殴る蹴るの暴行を死ぬまで繰り返して来たのだ。 ただ、魔女であるというだけで。 記憶も何も無い自分を…… 何度も何度も殺した。 誰も助けてなってくれなかった。

彼以外は 。

「拷問の…… 記憶…… すら、残っていないんだな」

震える声で襟を掴んで自分の服を伸ばすセレネ。 その隙間から自分の体を見下ろすが、何も無い。 記憶に新しいあの時受けた傷跡も残っていない。

どれだけの傷を負って生きてきたとしても、全て治る。 自分の記憶同様、真っ白で何も残されない。

セレネを見守る部屋の主達は、少女の何気ない動作を見て、心と同時に目を閉ざす。

「ごめんなさい……辛いのはわかるけど、恐らくそれが事実なのよ。あなたが悪いんじゃない。だから、過去の記憶を探すんじゃないくて、これからの幸せを探さない。魔術が使えないなら魔女だってバレル確率も減るわ、それに魔術なんて知らなくても生きていけるわよ？」

魔術を敢えて“記憶”と言わないノーション。ドクターMもノーションに全てを委ねている様子だ。

「……私は、それでも記憶が欲しい。私みたいな魔女が自分の記憶を探すことは、悪いことなのか？」

「あなたは……悪くなんてない。悪くなんて……ないのよ。悪いのは私達の方なんだから」

全てを打ち明けるだけで全ての罪が許されるならば、ノーションは今ここで全てを打ち明けていただろう。

しかし、全てを打ち明けることは何の意味も無い。腹の底から醜い膿を吐き出して自分が楽になるだけだ。そんなものを見せられる方はたまったものではないだろう。事実は何も変わらないのだから。例えばそれを良しとする神の前の懺悔ざんげは、神を信じ、人間の行いをしている者だけだ。

人の道を外れ、神を信じない彼女達に懺悔はできない。

ドクターMがカップにホットミルクを注ぎ、セレネの前まで持ってくる。

「自分の記憶じゃ、元に戻したいと思うことは当然じゃよ。お前さんが取り戻したいなら、取り戻せばええんじゃない。ほれ、熱いから気を付けて飲むんじゃないよ」

すまない、と前かがみになりながらカップを受け取るセレネ。手

先のカップから伝わる温かさが全身を温めてくれる。不覚にもセレネは、ほっこりと微笑んでしまった。

「魔術を教えてくれないか、基礎的なことだけでいいんだ。後は自分で思い出す、覚悟もある。だから、お願いだ」

我に返り、頭を下げるセレネ。“覚悟”という言葉にノーションは自分のことを言われている気がした。

「覚悟……か。わかったわ。それにこれも何かの縁よね。一朝一夕で身に着けるもんじゃないし、私達もいつまでもこの村にいるわけじゃない。とりあえず四大元素と魔術の仕組みについてだけ教えてあげる。後は、本を読むなりして勉強するの。あなたの場合、思い出すだけでいいんだから技術を教える必要はないと思うの」

「まあ、四大元素と仕組みさえわかれば、どの本を読んでも理解しやすくなるじやろうしな」

ドクターMは、次のカップをリュックサックの中に頭から入り探している。

ノーションは「ドクター、私のは砂糖入れて下さい」と老人の尻に注文を入れ、向き直り咳払いをした。

「おほん。じゃ、まず四大元素から。四大元素とは、地水火風の四つに分けられている魔力の性質のことを言うの。この性質を理解していないとどんなに才能や家系がよくてもまず、魔術が使えないわ」

言いながらノーションは、机の上に散らばっている紙を無造作に取り、ペンで図形を描き始めた。

火・風・水・地と時計反対回りに字を並べ、流れに沿って線を引
き地水火風のひし形ができた。

「はいこれを見て、魔術の全てはこれよ。　　言わば魔術の地図みた
いなもの」

「地図？　この汚い字が地図なのか？」

「うるさいわね、字が汚いのは遺伝なのよ！　これは走り描きだっ
たから」

言いながら紙を破り捨て、さつきより時間をかけて、新しい紙に
同じ図形を描き直すノーション。

「でね、人には必ずこの内の一つの属性が備わっていて、その属性
の魔術を扱えるってわけ。　誰もが持っている才能みたいなものよ。
私の場合は、“風”が主属性だからここから隣接する“火”と“
水”の属性までなら扱うことができるわ。　これが副属性って呼ば
れるものなの」

“風”を中心にして矢印を伸ばし、“火”と“水”を丸で囲む。
その隣にドクターMからノーションへ白いカップが差し出された。

「反対側の“地”は扱えないのか？」

「ムリね。　地図を見ればわかるように、“風”と“地”は接点が
ないでしょ？　橋が無い島には渡れないわ。　ちなみにこの反対側
にある属性は、対極する属性だから対属性というの。　私の対属性
は“地”ってこと」

「そうか、頭のおかしいノーションにも踏み込めない領域があつた
んだな、熱いッ！　な、何をするんだ！　おでこが焦げるところだ
ったぞお」

「頭の“いい”ノーション……でしょ？」

セレネのおでこに自分のカップで焼きを入れて、不敵に笑うノーシオン。

「ともあれ、主属性をものにするだけでも結構掛かるのよ。要領の悪い人だと半生掛かるらしいわ。まあ、よっぽどの馬鹿だと思っただけね。理論的には誰もが三つの属性を扱えるようになるって言われているんだけど、基盤になる主属性と副属性を二つ扱える魔術師なんて名門家系に数名いるぐらいよ。人間だと習得するのに圧倒的に時間が足りないわ」

「主属性と副属性を一つ、計二つの属性を扱える魔術師を二つ星、ダブル・センス、主属性と副属性を二つ、計三つの属性を扱える魔術師を三つ星と言うんじやが、ワシの知り合いにも三つ星は少ないのお。三つ星の連中はどやつも頭がおかしい、それだけは共通しておる」

確かにロクな人がいなかったですね、とノーシオンが笑いながらカップを傾ける。ノーシオンもそのロクでもない人間の一人なのだが、堂々とし過ぎている金髪の女性の姿を見てドクターMは何も言えないのであった。

「じゃ、私の主属性はなんだ？」

わくわくしながら尋ねてみるセレネ。

ノーシオンがカップ越しにドクターMと視線を合わせ何かの確認を取る。

「そうね、あなたが本当に魔女ならば、残念ながらこの中にセレネの主属性は存在しないわ」

「っ？ どううことだ？」

ノーションはカップを机に置き、眼鏡を掛け直しタバコに火を点ける。

「伝説と研究資料を読んだだけだから本当かどうか確証は無いけれど、魔女に主属性はないってこと。ダブル・センス・トリプル・センス二つ星、三つ星とか言うけどね。魔女にそんなクラス分けなんて必要ない。四つ全て使えるんだからね」

試す様にセレネを見て、甘いホットミルクを喉に流し込むノーション。

もし、セレネに記憶　魔術の知識が戻ればどんな一流の魔術師でも敵わない。

彼女に使えない魔術は存在しないのだ。古代から現代まで生きていると言われる魔女ならば、失われた古代の魔術も知っているであろうし、ただの下級魔術ですら膨大な魔力で放たれるため、ワンランク上の魔術と同等の威力を発揮する。

「私は、えらく凄い才能を持って生まれたんだな。四つ全部とはさすがに私も驚いた。三つぐらいだと思っていたんだがな」

「全国の実らない魔術師に殴られてきなさい。でも、四つ使えることが魔術の目指す所じゃないのよ。四大元素全ての理解は、第五元素エーテルを理解するために必須なだけ。魔術師の祈願はエーテルを理解できなければ叶わないし、エーテルを意のままに使用できることこそが魔術の真骨頂なの。火が出たり、風が出たり、魔術は副産物よ。皆が欲しい特産物はエーテルの方ってわけ」

「エーテル……四大元素を知らないと理解できないもの。そのエーテルというものを理解するなんて無理なんじゃないか？三つまでしかマスターできないんだろ、四大元素は」

リオンならば倒れてしまうであろう専門用語の羅列でもセレネは

ついてくる。

ノーシヨンは、つくづく魔女という存在に脅威を抱いた。記憶を取り戻すのも時間の問題であると。だからといって、説明をいい加減にするつもりはない。覚悟を決めた。ドクターMが止めに入らないということは、そういうことだとノーシヨンとて察している。

「そうね、ムリね。だから、トリプル・センスの魔術師は人間を辞めようとするのよ。魔術の本筋を理解し、無限の叡智にアクセスするために」

「そもそも人間があればアクセスするなど不可能だとワシは思っておる。アクセス出来た所で情報が多過ぎて脳が焼き切れるじやろな。じゃから、人間を辞めよるんじやろうが、辞めた所で人間は人間……わからんやつらじやよ」

ドクターMも話に加わり、いよいよ頭が付いていかなかったセレネ。目をパチパチさせて、老人と眼鏡美人を見る。

「ああ、ごめんなさい。いきなり色々言われてもわからないわよね。とにかく、人間じゃ辿り着けない理想的な無人島に行くため、人間を辞めるのが優秀過ぎた魔術師の末路、エーテルを理解するなんてまず不可能だし、その先のアカシック・レコードも迷信に等しい伝説よ。理論はわかるんだけど、確認できた者はいない。人が夢を見た証なのかもしれないわね。ロマンがあって結構なことだけ」

「そうか、それに関してはまた勉強し直してみる。とりあえず、私はどの属性も扱える才能はあるわけだな」

「伝説が本当ならね」

灰皿を探しながら、セレネの知識に補足を付け加え更に続けるノーシヨン。

思いのほか、いや、予想以上に飲み込みが早いセレネに教えるこ

とが楽しくなってきたノーシオンは、第五元素^{エーテル}について少し詳しく話したくなった。

飲み込みのいい教え子には何かと余計なことを教えてしまう。ノーシオンは自分の師匠の気持ちがあった気がして更に嬉しくなった。

「第五元素^{エーテル}は、四大元素の原料と物質を繋ぐ接着剤みたいなもののよ。この接着剤さえ使いこなせるようになれば、四大元素全てをいえ……理論上、物質を自在に変質させることも可能だし、無限^{アカシック・レコード}の叡知にアクセスできる術を見つけることができるというわけ。エーテルを見つけたら後世代々、偉業を成しとげた英雄と呼ばれるわよ？ 錬金術師の間ではエーテルのことを“賢者の石”なんて言ってるぐらいだからね」

「そんなに魔術師達は英雄になりたいのか？ 全員リオンみたいなやつだな。リオンもアカシック・レコードを見つければ英雄になれるのか？」

何度もベッドによじ登ろうと挑戦しているドクターMを摘まみ上げて、ベッドの上に載せてやるセレネ。

「いやあ、別に魔術師は英雄になりたいわけじゃないと思うわよ？ 私の言っている英雄とリオンが目指している英雄^{アカシック・レコード}って方向性が違うと思うのよね。それに間違ってもリオンに無限の叡知なんて見つけられないわよ……アホだから」

「そうか、うつかりしていた。あいつはアホだった」

暫しの静寂が流れる。

女達に認められたリオン。深い眠りに入っている彼が他人からの

評価を知る由もない。

「ごめんなさい、余談が過ぎたわね。四大元素についてわかれば、後は簡単。ちょっと待って今、わかりやすい絵を描くから。ここからが本番よーっと、面白くなってきたわ」

別の紙にペンを走らせすっかり先生気どりのノーション。

バレないようにセレネは欠伸を噛み殺す。魔女は、そろそろおねむの時間のようだ。

ここまで寝ずについてきた自分へのご褒美という意味を込めて、ホットミルクの追加をドクターMにお願いするセレネ。

夜は、始まったばかりだ。

荒野の岩陰に身を潜め、夜が更けるのを待っている影がいた。

科学で作られた偵察用カメラから情報を得て基地の様子を探っている。

「北、対MF用狙撃ライフル一六門……西、迎撃用ミサイルと対地空防御壁……東、オート・ガトリング・ガン自動回転式銃約二〇……南、村と対MF用狙撃ライフル六門」

どの方角からなら侵入が容易か考える。中規模の基地にしては無駄に武装と守りが堅い。帝国の基地とは大違いだと鼻で笑う。

北からの攻めは武装こそ問題無いが、身を隠す場所が無い、狙撃ライフルでハチの巣にされるのがオチだ、候補から外す。

西からの攻めは防壁突破に時間がかかり過ぎることと、平坦過ぎる地形からミサイルの直撃を受ける可能性がある、共和国のミサイル兵装がどこまでの性能か確かめられていない現時点では危険過

ぎる、候補から外す。

東、特に問題は無いが確認できただけで二〇近くのガトリングガンの弾幕を掻い潜る機動性は持ち合わせていない。

南……論外。

「フ……さすが共和国、平和ボケしていても兵装だけはいい」

偵察用のカメラの侵入を許している時点で、守備が甘いのだが、基地への侵入をして下さいと誘っている方角もある。

真意はわからないが、余程の馬鹿か、自信があるか、守る気が無いのだろう。

飢えた盗賊ならば、間違いなく飛びつくであろう餌だ。しかし、モニターを睨みつけている人物は、盗賊ではない。

モニターを消し、最後の機体調整をする。

頭部、胸部、腕部、脚部のフォルムが画面に並び「condition:100%」と情報を得る。

各ブースター、燃料も問題無し。

今まで何千何万と繰り返し返して来たプロセスに狂いはない。

ただ、この機体に出会ってから武装の点検だけはしたことは無かった。もはや自分の半身であるため、チェックする必要がない。自分のことは自分自身がよくわかっている。

コックピットを開けると、砂埃がフルフェイスヘルメットのバイザーに当たり耳をくすぐるような音が鳴る。

何となく立ち上がり岩陰から月を見上げ呟いた。

「満月……」

ヘルメットを片手で強引に剥がし、目を瞑り深呼吸をする。

服装の色とは正反対の白い髪が重たげになびき、彼は紅い瞳をゆっくり開いた。

戦いの前は、必ず空を見る。

彼は満月を包み込む様に片手を優しく伸ばした。母親を求めている赤子のようだ。

この広い、どこまでも伸びる空の果てから自分を見下ろす“家族達”に誓う。

「生きるために 破壊する」

漆黒の悪魔が月を握りつぶし、満月を背後に巨大な両刃剣を背負った黒い機体へ振り向く。

月光に映し出された刺々しいフォームは彼の生き方が、憎悪に満ちた紅いカメラアイは彼の怒りか、そして、傷付けることしかできない剣を背負うその機体は、彼そのものか。

答えは、この“帝国の悪魔”のみが知っている。

夜は、始まったばかりなのだ。

第32章 始まりの夜（後書き）

よくぞ読み切ってくれました！！

その忍耐力があれば、必ず目標達成できますよ！

活動報告で、のほほんとして雑談しているので、気が向いたらそちらもお願いします。

第33章 魔術と記憶（前書き）

一気に書き過ぎた感じがします。

後々解説を付けながら魔術の仕組みは何度も細切れに登場させますので、理解できない場合でもご安心ください。
この章、おこきが暴走してしまいました。

第33章 魔術と記憶

ひとしきり 鼻歌を歌いながら落書き、もとい魔術の説明図を描く
金色さらさらヘアの女性。数十分前まで、セレネに魔術を教える
ことを勿体ぶっていた様子が嘘のようだ。

「次は、魔術の発動までの流れを教えるわ。 魔術が発動するまで
には大きく分けて四つのプロセスがあるの。 とりあえずこれを見
て」

ノーシヨンは自慢げに描き上げた図形をセレネに差し出した。
棒人間が真ん中に立っており、両サイドには専門用語が箇条書き
で書かれている。

セレネは、子どもの様な落書きと専門用語を流し読み、とりあえ
ず顔を上げた。

「見た？ 四大元素は体内魔力にも含まれているわ。 勿論、霊脈
とかの土地関係で、バランスが偏ってしまう場合もあるけれど、大
抵一つの属性が約二五％の割合で含まれている。 で、そこに書い
てある棒人間“ボーちゃん”の主属性が“火”であったとしましょ
う。 彼が魔術を使うならまず、魔術が発動するように四大元素を
体内で調整する必要があるの。 イメージ的には…… そうね、外部
から魔力を取り込む機能を無くしたMFのセフィロト・ドライブか
な」

顎に人差し指を当てながらセレネに補足を加えるノーシヨン。 M
Fの例えを聞いた瞬間、セレネのつぶらな瞳が見開いたのを確認し
更に続ける。

「魔術つてのは、四大元素の比率を調節し、術式を使って思惑通りに四大元素が作用するようにしているだけで、原則として魔術師は、四大元素がなければ何もできないの」

「その言い方だと魔力は大して重要じゃないみたいだな、四大元素さえあれば魔術が使えるんじゃないのか？」

「魔力は、四大元素を含んだ水みたいなものよ。そして、四大元素は魔力の中でしか、性質を発揮しない。もし、魔力がなければ、四大元素が死ぬわ。魔力が大きい人つてのは、それだけ四大元素を豊富に泳がせることができる水槽を持っているんだから、有利よね？」

確認するように上目遣いでセレネに同意を求め、セレネはこくりと頷き続きを促す。

「オーケー。まあ、中には四大元素に左右されない、一族で継承している魔術とかもあるけど、それはそれ。後、生まれつき魔力が少なかったり、魔術の知識が無い人間が強引に魔力を扱えば負担が掛り過ぎて体を壊すわ。風邪を引く程度のものであれば、内臓破裂するものまでピンキリね」

セレネは目を左右に泳がしている。

「四大元素をどう調節すればいいんだ？　そもそも私は、魔力を感じることもできないんだぞ？」

笑いながらセレネを見やるノーション。

「最初はそんなもんよ。魔力を使っていけばなんとなく感じるこ
とができるようになってくるわ。頭で考えるより感じるの」
「うむむ、難しいな……どんな感覚なのかせめて教えてくれ」

「うーん、その例えこそ難しいわね。性格みたいなもので感じ方は人によって違うし。私は、ピリピリする感じかな、最初は痺れが切れる感じで魔術を使うと、スカーとエクスタシーが来た時みたいに」

「わかった。よくわからないから次の話をしてくれ。自分で頑張る」

ピシヤリと話を打ち切り、セレネは頬を膨らませる。あら、そう？と不思議そうな顔をしてノーシヨンは言われるまま次の話をする

「この棒人間の“ボーちゃん”は、体内にある元素“水”“風”“地”を主属性“火”で上塗りするの……これを付加と言っエンチャントわ。まあ、上塗りができる属性が主属性と考えると、ちなみに、二つ星なら二種類付加できる属性があり、三つ星なら三種類付加できるといった感じ」

「ふむ」

ノーシヨンの説明に一言反応するセレネ。両手を太股ではさみ、今にもベッドから乗りだしそうなくらい前かがみになりながら話を聞いている。

「例えば、相手を焼き尽くす圧倒的な火力を出す魔術なら、“火”が八〇%、火を強めるための“風”が二〇%と言った割合に微調整する。蒸し焼きにする魔術を使うならだいたい“火”が六〇%、“水”が四〇%。ただし、“火”が主属性のボーちゃんには蒸し焼き魔術は使えないわ。何故だかわかる？」

真剣そのものの蒼髪の少女を試すような笑みで、金の髪を耳にかけて問う。

「ボーちゃんの対属性が“水”で“水”を四〇%まで付加できないからか？ 確か、体内にはそれぞれ二五%ずつしか四大元素は存在していないんだろ？ 主属性以外、付加できないとなるとボーちゃんは、“水”を四〇%まで上げることはできないじゃないか」

ほぼ即答したセレネに、「ぬっ……」と声を漏らし顔をしかめるノーション。長い溜息を一つ付いて言った。

「なんか悔しいわね。 私とはできが違うわ……。 正解よ。 相手を蒸し焼きにする魔術が使える魔術師は主属性が“地”か“風”^{トリプル・センス}の三つ星ということもわかるわね。 “水”と“火”のエンチャントができるのは、このどちらかが主属性じゃないとできない。 “火”の魔術を使うからと言って必ずしも主属性が“火”とは限らない。 付加は字のごとく“元素を付け加える”としかできない”のよ。 見習い魔術師が引つ掛かる意地悪問題だったのになあ」

呆れた口調でセレネを恨めしそうに眺めるノーション。磨き上げたノーションの魔術もセレネならば何の苦もなく習得してしまうのかもしれない。 いや、『思い出す』と表現する方が彼女の場合、適切であるが。

「相手が使ってくる魔術をしつかり見れば、およその主属性が逆算できるわ。 蒸し焼き魔術なんて使ってくれば、術者としては相当の使い手だけど、戦闘素人ね。 対属性ってね。 どんなに勉強しても本人が体感できないし、耐性も無いに等しいからバレると対属性の魔術の嵐を受けてソッコー殺されるわ……ただの魔術師ならね」

ただ、という部分をやけに強調して補足を付けたノーションは、セレネから紙を取り上げた。

「さあ、続きよ。四大元素の付加もそうなんだけど、術式も体内で組み込む。魔術師の体は“魔術の工場”と言われるように、付加だけでなく術式の組み立てなども体内で行うの。ただし、簡単でよく使う術式は脳内イメージで組み立てることができるけど、大がかりなものや、複雑なものはイメージに綻び^{ほじり}が出てしまう。そこで文字と言葉の力を借りるわけ。いわゆる“魔法陣”と“詠唱”ね」

「魔法陣を書いたことがない、天才肌の魔術師もこの国にはおるらしいが、魔法陣を書くことで術の仕組みを再確認できるから、最初はなるべく書いて覚えた方がええぞ」

ドクターMが欠伸をしながら眠たげに言葉を投げている。

普段から開いているのか閉じているのかわからないまぶたが、小刻みに震えては止まり、船を漕いでいるように首がこくりこくりと揺れていた。

「そうね、魔術師見習いはみんな、本を見ながら術式を紙に書きまくったり、朝から晩まで同じ詠唱を連呼したりして頭に焼き付けるのよ。意外と地味でしょ？ 懐かしいな」師匠に一日、千枚ぐらい同じ術式をびっしり書かされ、夢の中で詠唱していた日々を思い出すわ」

こめかみを押さえながら思い出話をするかのように声を丸くするノーション。砕けた一面の中に確固たる自信が垣間見える彼女の態度は、想像を絶する努力で魔術を習得してきた経験があるからなのだろう。

「凄まじく……地味だな。魔術師の修業は、祈ったり、空想したり、もつと神秘的なものだと思っていたぞ」

「あのね、祈ったりするだけで魔術使えたら苦労しないわよ。祈

るのが好みなら教会に行つて神子^{みこ}になりなさい。名門家系なら適当にそれっぽいこと言つてれば儲かるし、帝国の巫女でいいならちよつと踊りながらお祓いすればガツポリよ。あの国は今、国勢が悪過ぎてそろそろ巫女の妄言に頼るしかないからね」

人差し指と親指で円を作つて唇を歪める金髪的女性。セレネは、表情を変えずにぎこちなく頷く。

「あいつらは、魔術の風上にもおけないもぐり野郎よ、何が起きても二言目には神。そんな便利なお方がいるなら、世界はもつと平和になつてゐるつちゅーの」

ボーちゃんの下に何か書き足しながら神子・巫女に否定的な態度を取るノーション。老人は完全に眠っていた。セレネは、またもやそれとなく頷くだけである。

「長々と話したけど、要するにこういうこと」

はい、と紙をセレネに再度手渡し、ノーションはセレネの反応を待っている。

ボーちゃんの下には矢印と一緒にこう書かれていた。

- 一、主属性を付加して他元素^{エンチャント}を調整。
- 二、術式を組み立てる。複雑な場合、魔法陣・詠唱で補足。
- 三、エンチャントで調整した元素が含まれる魔力を術式へ流し込む。
- 四、魔力を外に放出し、魔術発動。

「なるほど、これが魔術の仕組みか。これを一瞬で出来て一人前と呼ばれるのか、ふむふむ」

「絶対にこの手順は守りなさいよ。せこい奴がよく、体内魔力で

はなく大気中魔力を取り込んで魔術行使を行うんだけど、自然界の魔力なんて半端なモノは術者の制御下を離れて体の魔力と強く結びつく……最後は生命維持に必要な魔力まで食い尽くすわ」

いつになく真剣な目で蒼い瞳を覗きこむノーシヨンの剣幕に圧倒されたセレネが、唾を飲み込んでから尋ねる。

「その……生命維持に必要な魔力が食われたらどうなるんだ」

「生命力が外に流れてミイラみたいになるか、魔力供給が止まらなくなつて体中の血管が破裂、血の雨が降るかのどっちかね。つまるところ 死ぬわ」

嫌なものを見たかのように目を背けたのはノーシヨンだった。セレネは、ノーシヨンの爪が拳にめり込んでいく様子を見逃さなかったが、視線を戻し、口を開く。

「なんだ、その……私は良い子だからルールは守るぞ」

「ええ、私もそう願うわ。 魔女が魔力の扱いを誤つて死ぬなんて笑い話にもならないしね。 あなたが不死身という逸話は本当だと思うけど、生命力を抜かれて生きているかどうかなんて実験もしたことないから、魔力の扱いには気をつけなさい」

脅す様にドスの効いた声を出しながら、腕を組むノーシヨン。金髪眼鏡の女性に上から見下ろされ蒼髪の少女はせつせと何度も紙を上から下へ読み返し、頭に記憶を開始する。

満足げに笑うとノーシヨンは喉を鳴らしながら冷めきつたホットミルクを飲み干し、カップを力強く机に置いた。

「はえ、生き返る。 ドクター、追加お願いします。 ちなみに、そのプロセスの一と二は省くことができるわ」

「何！ 本当か！　じいじい、私にもくれ」

「んが、あのお、ワシ。　寝てたんじゃが……」

「「くれ」」

寝ていたにもかかわらず叩き起こされ、女性陣から声を合わせてミルクの追加を頼まれたにも関わらず、何故か上機嫌に文句を言うドクターM。

それは何故か。彼がドMに他ならないからだ。

「ところで、一と二を省略できるとはどうゆうことだ？」

セレネが急かすようにノーシヨンの白衣を控えめに引っ張る。魔術について勉強しているセレネは子どものように活き活きしている。

「はいはい、ちょっと待つて。　今教えてあげるから、一本だけ吸わせてちょうだい」

タバコを白衣の右ポケットから取り出し、銀メツキのライターで火を付け、一息ついた。窓際に移動し、夜空に向かって煙を吐く金髪的女性は、窓の仕切りに腰を寄せ、足を組みようやく口を開く。

「一と二の過程は下準備をしておくことで省略可能なの。　俗に簡易魔術ヨートカットって呼ばれているわ。　ショートカットにも色々種類があつてね。　自分の魔力の三分の一程度を常に主属性で満たしてストックしておけば、主属性一〇〇%で発動できる魔術ならエンチャントしなくていいでしょ？　四つのプロセスが『術式の組み立て・術式への注入・外部放出』の三工程で出せる」

ノーシヨンが確認するように細めた横目でセレネを見る。ぽかんと口を開けたまま呆気にとられた後、力強く頷くセレネ。

「で、もう一つ、体のどこかに術式を組み立てておく場合」

火のついたタバコを口でくわえながら、袖を巻くって右手に魔力を流し込み、入れ墨を浮かび上がらせるノーション。

しなやかな腕にびつしりと刻み込まれた螺旋状に連なる文字が、妖しげに青白く光りを放っている。

「術式だったのかそれは。どんな魔術が使えるんだ？」

「使える魔術がバレルのは、魔術師にとって致命的だからヒミツ。

でも、多くて三つ程度の魔術を刻み込むが限界よ。面積的な問題で体に魔法陣が書き切れないからね。それと、術式を体に刻み過ぎるとふとした拍子に暴発しかねないわ。言わば、弾の入ったバズーカ砲を常に振りまわしているようなもんだから管理するのも結構大変なのよ。今みたいに魔力を流し込まない限り、術式が浮かび上ることはないけど、この状態で間違って魔力を外に放出でもすればここの屋根が吹き飛ぶぐらいの風が起きるわ」

「わかった、わかったから、屋根を吹き飛ばしたそうに天井を見るでない！ ほれ、これが最後のミルクじゃぞ」

ドクターMは、ノーションの行動を見て完全に目が覚めたようだった。皺だらけのまぶたの下に、意外と大きい瞳が見える。ドクターMが開眼しているのだ。ただ事ではない。

それに対し、目を輝かせながら青白い光を眺めるセレネ。カップへホットミルクを注がれていることにも気が付いていない様子だ。

「冗談ですよ、ドクター。やりたかったら、もうやってますから。これ、灯りが無い時に便利なのよね。ほら、みてみて、綺麗でしょ？」

術式を見せびらかすように、控えめな光を放つ腕を振りまわすノーション。セレネはその威力を知らないがゆえに、縦横無尽に舞う綺麗な光を放つ腕を拍手しながら楽しそうに眺めているが、ドクタIMは、ノーションの腕が止まるまで血相を変えて縦横無尽に部屋中を舞った。

「つとまあ、主属性一〇〇%で発動する簡単な魔術の術式を刻んでおけば、術式を経由して放出するだけで、魔術の発動が可能よ。それができたら初級編クリアってところしら。理論上、刻み込む体の部分さえあれば、高難易度の術式も簡易魔術として発動することもできるわ」

魔力の供給を止めたのか右腕から術式も消え去り、魔術を放つ暗黒の腕は細くて白い腕に戻っている。

「ほおえ……寿命が六〇年縮んだわい。ノーションや、ワシはもう眠いぞい。寝てもええか？」

「はいはい、お先にどうぞ、魔術講義も終わったし、これからセレネと一緒にいけないこととして遊びますんで……ね？」

「終わりか？　じゃ、もう部屋に……なんだこの手は、手を離してくれノーション」

ズリズリとセレネに引きずられながらノーションは獲物を逃すまいと必死にセレネの肩にしがみ付いてくる。

「酷い！　教えるだけ教えさせて何のお返しもないなんて！」

「なんだ、有料だったのか？　なら、金はリオンが払う、あいつの体を売ってでも払わせるから安心してくれ」

「違うの！　セレネがここにいてくれればそれで満足よ！　ほら、夜は寒いでしょ？　一緒に布団で寝れば暖かいわ。若い子と寝る

なんてなかなか無いんだから逃がすもんですか、白い肌、張りのある肌…… ああ、たまらない」

旅仲間の体を勝手に売り物にするセレネに対し、ノーシヨンはそんなものはいらないとセレネの腕に頬づりをしている。

「きやう。 ど、どこを触っているんだ、やあ、やめろ。 じいじい、一緒に寝てやってくれ。 凄く嫌な予感がするから帰る！」
「ぐわえ。 待つて、今ならドクターの書いた“Mの書”と“ドMの書”も付けてあげるから、私と一緒に快樂と快感の」

ノーシヨンをベッドに投げ飛ばし、小動物のように小走りで部屋を出てドアを両手で力強く閉めるセレネ。 ドアの向こう側では、金髪の狼が「はっは」と息を荒立ててドアをがりがり引っ掻いている。

「お前さんは、若ければ見境なしか？ それと、ワシの著作物を勝手に配ろうとするでない」

「だって、だって！ お澄ましセレネの、みだらな姿が見てみたくないんですか！ 『きやう』だってえ…… ああ想像しただけでヨダレが」

「全く、男みたいなやつじゃ。 変なことを考えていないでさっさと寝るぞい、じゆる」

「ドクター…… 今、ヨダレ垂らしましたね？」

「……きやう」

しゃがれた声でドクターMが言った。

ドアの隙間から光が無くなったのを確認し、ほっと一息つくセレ

ネ。

「魔術……エーテル、四大元素、エンチャント……はあ、ややこしいな。意外とノーションが賢そうに見えたな」

蒼髪の少女は、薄暗い廊下で紙を読み直す。以前の少女ならば、こんなことを教えてもらうまでも無かったのだろう。

ふと、紙を優しく胸に押さえて目を閉じる。あの荒野に立つ男の姿を思い出すために。

途端に、セレネの眉が歪んだ。

「ッ！ また、頭痛……顔は思い出せない……か」

記憶を失った者が本能的に記憶を取り戻したいと思っても誰も責めることなどできない。

記憶と魔術が強く関連していると判断したのか、魔術についてあまり興味を示さなかったセレネが、自ら足を運び学ぼうとした。それは、今までに見られなかった魔術と積極的に関わろうとする彼女の姿だった。

それはきつと 悪いことではないはずだ。

「月花……どうしてお前は召喚されたんだ。 あれは私の力なのか、それともお前の力なのか、どうしてお前が私の記憶を持っているんだ」

老朽化が進み、今にも亀裂が入りそうな壁にもたれ掛かる少女以外言葉を発する者はいない。薄暗い廊下へ隙間風が流れ込み少女の前髪を冷たく揺らした。

天井の隅で蜘蛛の巣に捕らえられた青い蝶を何気なく見つめる。もがけばもがく程、糸は蝶に絡まり付き、青い羽根が白に塗るか

えられ、蝶が蝶でなくなつてゆく。

その一部始終を眺めていた蒼髪の少女は悲しげに目を逸らした。

「私は、お前を抑え込んで見せる。そして、お前が見せた夢を……ゆめ？」

部屋に戻ろうとドアノブを握った時、セレネの小さな手が止まった。

そして、指先が震え始める。血の気が引いたように、表情が青くなつていく。まるでバラバラ死体でも見たかのように。

「なんで……あれは夢で、うつ」

吐き気を堪えるようにしゃがみ込むセレネ。思考を止めようとしているのか、目を閉じてしばらく身を固めている。

呼吸のリズムが安定したところで、立ち上がる。水を飲みに行くというのだ。

手探りで一步一步暗闇を進み、床の軋む音を聞きながら、ロビーから漏れる薄黄色い光を目指しセレネは進んだ。

オーナーはもうとつくに寝てしまっている。それもそつだ、現在時刻は夜中の一時である。

セレネは、“水”と書かれたレモンスライスが中に浮いているボトルから水を出し、机に置かれていたコップで水を喉に流し込んだ。しばらく、遠くを見つめるように立ちすくみ、再びボトルを傾けコップに水を注ぎ、一気に飲み干す。

「あ……れ」

再度、水を勢いよく飲み込み、首を傾げる。

セレネは、焦りを目に宿しながら、手に持ったコップを祈るよう

に両手で握りしめた。コップの中の水面が小さな波紋を作っている。コップを机にゆっくり置くと気力の無い足取りで、色が剥げた木製のドアを押して外へ出た。

荒野を吹き抜けてきた砂の臭いがする冷たい風が腰まである長い髪を揺らす、セレネは気にも掛けず、意を決したように唇を噛みしめて空を見上げた。

丸くえぐり取られたような白い穴だけがそこにあった。まるで、別世界から哀れなモノを覗くために空けられたような白くて丸い覗き穴。

「満月……か」

その晩、セレネは宿屋に戻ることはなかった。

彼女は、軍基地へと続く砂道を歩いている。夢で見た殺戮現場へと続く道を。

遠く離れた岩場の影で血に飢えている悪魔と同じ満月を見上げた魔女は、新たな殺戮現場へ赴くことになるなど、彼女自身思ってもいなかっただろう。

彼女の渴きを満たすモノなど一つしかないのだ。それを理解した時、彼女は彼女のままでいられるのだろうか。

第34章 悪魔の咆哮

モニターに囲まれた広大な一室で、機材の上に足を組み乗せ、堂々と座っている男が部下の働きぶりを高い位置から見降ろしている。

ここは、ハンスタが受け持っている支部の指令室だ。共和国領土最南の支部であり、外敵の迎撃システムを徹底された軍施設の脳とも言える。

「ハンスタ少尉！ 作業、終わりました！」

「全部、流しただろうな？ ゲハルトがタダ、遊びに来るとは考えにくい」

先の尖がったサングラスから部下を睨みつけるハンスタ。蛇に睨まれた蛙のように兵士がすくむが、すぐさま靴底を短く鳴らし敬礼をした。

「ハ！ 今夜中に市場へ流しま ぶあはあ！」

「馬鹿野郎！！ おせえんだよ、今すぐだ。 スラッシュキック ゲハルトのMFの足の速さを知らねえとは言わせねえぞ？」

ハンスタが部下の顔面に拳をめり込ませ、倒れる前に胸倉を掴んで無理やり立たせる。そして、顔を近づけ、ゆっくり子守唄を歌うように続けた。

「いいか！ 早く始末しねえと……お前の首が飛ぶぞ。 物理的な意味でな。 今すぐ出発しろ」

「うぐ、も、申し訳ありません！ すぐに、すぐに手配してきます」

右頬を腫れあがせたまま、指令室を飛び出て行く兵士。

ハンスタが席に座ると同時にオペレーターが声を上げた。

「少尉！！ 高速で接近する物体があります！」

「今度は何だ？ ハッ、“少佐殿お”じゃねえのか？」

皮肉を込めて、鼻で笑うハンスタ。そんなはずはないですよと指令室は笑いに包まれる。ただ一人を覗いて。

「いいえ……スラッシュキッドではありません。それに……速過ぎます」

「全くだ。兄貴からの情報だと奴はまだ、ネツアク山脈を越えた辺り。ここに着くのは明日の」

「ち、違います！ 速度が異常なのです！」

「はあ？ モニター回せ」

後頭部で手を組んで深々と椅子に腰かけていたハンスタは弾かれたように立ち上がり、モニターに機体を写すよう命令する。電子音と共に一番大きなモニターへ異常な機体が映し出された。

「な、んだこりゃ……」

ハンスタが漏らした声は、他の兵士たちのざわめきでかき消される。

夜の闇に黒い穴が開いていた。

正確にはその黒い物体が立ち入り禁止地区の看板を吹き飛ばし、直進してきているため、影ができていただけなのだが、穴が開いたように歪な光景だったのだ。

夜よりも黒い カメラアイ 漆黒のダイヤモンドのようなボディ、魔獣を思わせる深紅の双眼、そして、背中に背負った鞘のない巨大な両刃剣。ほっそりとしたその機体と武装の種類から大した脅威ではなさそ

うに見えるが、背中から噴射されているブースターの赤い残留粒子が空気中を漂い横に広がっているため、悪魔の類の翼を思わす。

視覚的な恐怖を相手に植え付けるにはこのうえない演出だった。

「フフフフ……ハハハ！ 切断武器しか持ってねえし、単機で俺の庭に突っ込んでくる命知らず。おまけに、識別不明機とはあ……噂の“帝国の悪魔”のおでましかあ？ 戦闘員！ MFで待機。防御網を展開しろ！ こいつをブチ殺せばめえら、一生遊んで暮らせるぞ！ さつさと殺してこい！」

警報が鳴り響く。兵士達が一斉に行動を始め、基地内が足音で満たされていく。

「さてと……まずは、挨拶代わりだ。弾丸の雨をお見舞いしてやれ」

馬鹿が、と敵機を嘲笑うハンスタが右手を上げて軽く指を曲げる。それを合図に、東の荒野に岩と砂でカモフラージュされている機関銃が一斉に火を噴いた。警告も無しの一斉射撃、黒い機体が民間機である可能性を全く考えてなどいない。

「……当たりはしない」

漆黒の機体のパイロットがヘルメット越しに笑う。

自動機関銃の照準が自機に向けられ赤い文字で“warning”と正面の電子モニターが警告していた。背中 of ブースターを少し弱め、地面を踏みしめて空高く跳躍する。

踏み切った地面はえぐれ、上昇しながら右前方のブースターと左後方のブースターを吹かし、回転を入れながら弾丸の回避を繰り返す。黒い鎧を纏った悪魔は、弾丸の黄色い閃光を軸にして螺旋を描

くように上昇していく。

この機体、高機動で動けることが強みならば、打たれ弱さが弱みである。

接近戦を得意とする装甲の硬いサウザンドを持ってしても、容易く八チの巢になる自動機関銃が辺り一面に配置しているこの東方からの攻めは、この機体にとって鬼門だった。

しかし、この悪魔がこの鬼門を選んだことには理由がある。

高度を上げた黒い機体はブースターを切り、慣性に任せふわりと上昇する。そして、一瞬の静止。この一瞬で弾丸が当てることのできなれば機関銃達に勝ち目はない。

彼を止めるモノは彼以外いないのだから。

「^{アインス}嫌悪の剣・^{ツヴァイ}憎悪の剣！」

背中に眠る血塗られた魔科学兵器は名前を呼ばれ覚醒する。

赤い粒子を夜空に撒き散らした悪魔が重力に引かれ落下を開始した。

満月の白、残留粒子の赤、弾丸の黄、黒いキャンバスに描かれた絵は今、動きだす。

破壊が始まった

迫りくる弾丸の網へ真正面から突撃。背中の剣を抜き取り、ブースターで無理やり生み出した遠心力に任せ剣を投擲する。

ダガーやナイフの投擲ではなく、自機の半分以上もの大きさを持つ大剣を二本も地上に向かって投げつける。

一本の剣は弾丸のように地上にある機関銃に突き刺さり、もう一本の剣が基地内にあるMF格納庫の目の前に突き立てられる。

身軽になった漆黒の機体は、風の抵抗を少なくするために空中で直立し姿勢を維持した。風を斬るように設計された機体の頭部を地上に向けての急降下。

^{ラジエータ}放熱器へ夜風を通り抜けさせることで、基地接近と高度を上げる

まで酷使し続けたブースターの熱を効率よく冷却させることも忘れていない。

四方八方から機体に収束し始める黄色い点線を重心移動だけで掻い潜り、避けきれないと判断したものだけ最小限のブーストで射撃軸をずらす。落下速度を上げる黒い機体。さながら漆黒の隕石と言ったところか。

揺れ動く隕石に標準を合わせられる機関銃などいなかった。自動機関銃は動きを予測して発砲するスナイパーではないのだ。そこにいるものを認識してからしか発砲できないため、一定速度を超える物体に狙いを定めることができない。発砲してもコンマ一秒先は、ただの夜空。そこに破壊対象はいない。

唯一狙いを定める必要のない、黒い機体の直線上に配置されている機関銃には嫌悪の剣が突き刺さっている。^{アインス}

自ら作った安全地帯へ悪魔が半回転しながら着地、大地が震える。着地の瞬間、ブースターで多少勢いを殺してはいるものの、落下による衝撃が強過ぎて勢いよく荒野の土が天に舞い上がった。

鋭利な装飾が施された全身を月が背後から照らす。

すらっと天に伸ばされた刃のごとき左腕、ずっしりと低い姿勢のまま地上に根を張る右腕と両足。その構えは悪魔がこの世に現界した余韻に浸っているようにも見える。

大きい岩からゆっくりと落下し始める土砂の中、石つぶてが精一杯の自己主張として機体に当たっては砕けていく。

突き刺さる愛剣越しに赤い眼を光らせ、不気味に黒いMFが笑った。

全ての土と岩が落ちる前に、冷却し終えたブースターから恐怖の咆哮を響かせ一気に加速、漆黒の悪魔が乱暴に剣を抜き取り、侵入通路にある邪魔な自動機関銃だけを両断して基地へ易々と侵入する。

「MF隊！ 何してやがる早く奴を止めろ！ 単機で基地を落とさ

れたなんて一生笑いもんだぞコラア！！ 狙撃部隊、迎撃部隊、連携を取れ。絶対に一人で掛かるな！」

指令室でハNSTAは無線で各機に怒鳴る。その声には民間人を蹂躪^{うろうん}していた彼の声とは思えない程に焦りが含まれていた。

「俺の迎撃装置を三分で抜けやがった……クソが！ まさか跳びやがるとは…… あいつぁ本当に悪魔にでもなった気か。おい、お前！ 先週、発掘された新種の調整は終わってんだろっな？」

「燃料の補給は終わっていますが、まだ、関節部分に土とサビがありますし――」

「動きやいいんだよ、準備させろ。『ベルゼブブ』のお披露目にはもってこいの会場だ」

机を蹴り飛ばし、すぐさまハンガーに向かうハNSTA。防衛に送り込んだハンドレットとサウザンドをまるで信頼していないかのように舌打ちをし、誰もいない白い通路を歩く。

このままでは品物の横流しを任せた部隊も呼び戻さざるを得ない。この基地に向かっていているロイ・ゲハルト少佐に援軍を要請すれば、この場合は鎮まるかもしれない。だが、市場に流し切れていない違法物がゲハルトによって世間に晒されることは、共和国軍人としての立場が危うくなる。

エレベーターを待っている間、ハNSTAは、通路にあつたゴミ箱を蹴り飛ばした。

「クソがああ！」

ゴミ箱は狭い通路の壁に何度かぶつかり、横たわる。まだ攻撃は終わらない。

「クソが、クソが！！　クソ野郎があ！！　この俺が、この俺があ！！　ここで終わるわけにはいかねえんだよ」

ハンスタが地位を維持したままこの難問を突破するためには、現在の戦力で悪魔を倒さねばならない。

エレベーターが到着した音が鳴ってもしばらくハンスタが、エレベーターに乗ることはなかった。

同じサウザンド同士とは思えない圧倒的な実力差。一機ですでに前線に出ている五機を斬り殺している。

爆煙の中から飛び出してくる漆黒の機体はまだ本気ではない。彼の手には一本しか剣が無いからだ。

しかし、一本だからこそマシンガンの弾が当たらない。

元来、強襲用として設計された機体のため重量のある武装とは相性が悪い。巨大な両刃剣を背負って弾幕を潜り抜けることは、いくら悪魔と呼ばれるパイロットでも重量の面で無理があった。

故に、もう一本の剣を捨てた。

理論上では、自動機関銃よりも反動が強く、人為的な事柄から照準がブレやすいMFのマシンガンならば、剣の重量を足した今の黒い機体でも十分に回避できる。しかし、理論上ではの話だ。

水面に片足が沈む前に、もう片方の足を前に進めれば、水面を走れるという身も蓋もない理論と同じである。

彼は実践を繰り返すことにより、彼にしか適応しえない理論を作り上げてしまった。そう、『弾が当たる前に避ければいい』だけなのだ。

極限まで軽く設計された鎧、大型MFと同等の推進力を持つブースターにより発揮される圧倒的な機動力を余すことなく活かし、僅かな隙をチャンスに変える。

それが帝国の悪魔

並みのパイロットはMFの照準器に依存してしまいがちなため、ロックオンするまでの数秒とトリガーを引くまでの数秒に隙が出る。この機体に接近されれば、その僅かな隙が命取りになるのだ。

『あれがMFの動きかよ！』

『当たれ、当たれ！ 当たれよおお！！』

『東ブロック。部隊及び兵装は全滅！ もう食いとめられませんか！ 至急応援を 』

通信が途絶え、虚しい砂嵐だけが共和国兵士達のコックピットのモニターを満たす。

通信の一部始終を聞いていた中央区守備部隊の兵士が沈黙を破るように声を上げた。

「東ブロックの救援に向かう……各機、フォーメーションを組み俺についてこい。辺りの警戒を怠るな、敵機はマニュアル通りに動いてはくれん」

携帯性に優れたサブマシンガンとMFの装甲より数倍厚い実弾シールド、背中に折りたたみ式ブレードを背負った白いサウザンドが側にいる緑色のサウザンド二機に指示する。

声から推測するに決して若くはない。基地の中央ブロックの守備を任される者達だ。熟練したパイロットに違いない。

指揮官仕様の白いサウザンドに搭乗する中年の兵士は、煙が上がる東方を眺め、ロックオンカーソルを一八〇度動かし索敵を開始する。

コックピットに張り付けた、天使のような笑顔をした子ども達の写真を一目見て意を決したように真ん中の白い機体が前進を開始し、後方の緑の二機はすぐさま援護できるよう銃を構える。

「こちら 機、敵反応なし。 機、 機、援護は任せた」
「こちら 機、敵反応なし。 任せといて下さいよっと。 隊長、あまり出過ぎるしないで下さいよ。 敵はかなりの機動性を持っているらしいし、一瞬が命取りですぜ」

真ん中の 機を中心にVを描くフォーメーションを組み慎重に隊列を進める。

「了解した。 こんな状況なのに相変わらずだな、ピーター。 鼻たれ小僧だったのが嘘みたいだ。 機、敵機の反応は？」
「機、て、て、敵反応無し。 探せ、どこかにいるはずだ。 最短で基地を落とすつもりならここを通るしかないんだ。 悪魔だろうがなんだろうが、それだけは変わらない！」

声が裏返っている若い男の声が返してくる。

「 機、少し落ち着け。 焦りは命取りになるぞ。 実戦は初めてだったか？」

「全くだ。 母ちゃんがいねえとそんなもんかい？ これだから成り上がり小僧と組むのはごめなんだよ。 タイチヨー、こいつ返した方がよくないですか？ 大切なぼっちゃんを戦場で見殺しにはできませんぜ？」

「う、うるさい！ 私は、イースター家の人間だ！ 貴様達のような落ちこぼれの一生、前線兵とは違うんだ！ 本来なら指揮を任されている、後方支援を」

機のパイロットが茶化すように隣を歩く 機に音声を発信する。機のパイロットは高貴な家柄についてしばらく言いたいことを言っつてMFの速度を上げた。

一步、一步、東へ接近するサウザンド部隊。反応があればすぐさまマガジン全射で敵を八チの巣にする。マガジンが尽きるまでに撃破できなければ、彼らが死ぬのだ。

焼け焦げた機体と基地施設から発せられる煙で視界が悪い。今にも何かが飛び出してきそうな静けさだった。

『隊長！！ 上だ！』

機から通信が入り、空を見上げようとした 機だったが、もう遅かった。

武装を格納してあった大型コンテナの残骸を踏み台にし、黒い影が煙幕の中から飛び出している。

嫌悪アインスの剣の切っ先が悪魔の領域に侵入したサウザンドの頭部に触れる。

本来、力任せに装甲を叩き割るために設計された巨大な剣だが、漆黒の機体を巡る魔力を飲み込み、魔科学兵器としての機能が活性化している嫌悪の刃を受け止められる素材は同格の魔科学兵器ぐらいいだ。ただのサウザンドの装甲など紙を斬るよりも容易く切断してしまう。嫌悪アインスの剣は、こと『物体を斬る』と言う命令を難なくこなす魔剣なのだ。

頑強な頭部を切り裂き、埋め込まれたプログラムの網を一本一本切断する。カメラアイは膨張した熱源に耐えきれず内側から亀裂が走り、最も厚く設計されているコックピットに刃が侵入する。内部のモニターを斬り裂き内側から外の風景が垣間見え、冷却装置のある腰部を抜け、股下より火花を散らしながら刃が通り抜けた。

パイロットは即死だっただろう。

一度も詰まることなく真つ二つにされた機体が縦にスライドし、断線した個所から青い火花を散らし爆発する。

怒りを露わにしてサブマシンガンを連射する 機の兵士。突然の出来事に頭が付いていかない 機の兵士。

兵士達の脳内で走馬灯が過る。

彼らはマガジンを使い切る前に両断され一生を終えた。

「貴様達に嫌悪と憎悪、そして……絶望をくれてやるう」

漆黒の機体は、両手で赤黒い剣をMFの額の位置に構え直し、遥か遠方にいるMF部隊を睨む。

今、狙撃すれば倒せるのではないかと思われたが、誰も発砲しない。発砲すれば瞬時に斬り殺される。そんな恐怖から仲間が目の前で殺された共和国兵達は何もできないでいた。

『人を殺すのがめえらの仕事だ、人を殺すからめえらは飯を食ってこれた。殺さねえで何やってやがる？ 銃を持って何をしてやがる？ 早く撃て、撃てないクズは俺に撃たれる』

兵士達に通信が入った直後、後方のMF部隊よりも遙か彼方から弾が発射された。

味方機ごと黒い機体を狙った魔弾は、威力をそのまま、漆黒の機体を貫通せんと直進する。

咄嗟にブースターを全開にして回避行動をとった帝国の悪魔だったが、想定外の攻撃と弾速の速さに対処が一瞬遅れ、黒い機体は左肩を半分もぎ取られる。

魔弾はなおも貫通力を保っており、基地の外へと通り抜けていった。

黒い機体は姿勢を制御しながら、右手と両足でブースターのジェット噴射の勢いを殺し始める。鉄と鉄が擦れる音が鳴り響かせ、鉄の地面から火花が散らしながらようやく静止する黒い機体。

「……左肩損傷、戦闘に支障なし。砲台がまだ残っていた、いや………新型」

状況を確認するように眩き、悪魔はその音を聞いた。

昆虫の羽音のような不快音を鳴らしながら堂々と現れた茶と赤で塗装された不気味なメタルフレームを赤いカメラアイで睨む。

テンサウザンド・ベルゼブブ。

ハンスタが近くの遺跡から掘り起こした新種の機体。推定一万年前に作られたとされる古代兵器が悪魔の前に立ちふさがる。

調整こそ未完であるが、ベルゼブブは、サウザンドを凌駕する圧倒的な出力と前代未聞のホバーリング移動が可能なため地形に左右されない強みを持っている。そして、テンサウザンド最大の特徴は、機体自身が四大元素の主属性を持っていることである。

主属性と同じ属性の魔科学兵器を武装すれば、エンチャント付加により魔科学兵器の出力が跳ね上がる。

先ほど黒い機体に向けて発砲された兵器は、“風”を利用し貫通力を高めた魔科学兵器の弾だ。

そして、ベルゼブブの主属性は“風”。極限まで高められた、風の爆発と弾丸を纏う風の刃によって着弾する前に『切り裂く』能力が付加された弾丸は驚異的な貫通力を実現している。

この機体、魔科学兵器こそハンスタの切り札だった。

「仕留めれなかったか。クソが。俺の部下が無駄死にしちまつたじゃねえかよ。だが、MFを貫通させても威力はそのまま。能力テストは終了だ」

自分で殺しておいて、仲間の死を嘆くハンスタの声が炎上する基地に響く。

黒い機体のパイロットは、予想外の敵戦力が現れたにも関わらず笑みを隠さない。追い込まれることを愉しんでいるようだ。それとも、ハンスタの『取るに足らない自信』が悪魔にとっては滑稽だったのかもしれない。

未知数のテンサウザンドシリーズを実戦配備したのは、恐らくハスタが初めてである。同格のサウザンドならば二本の剣を駆使し、相手を翻弄できただろうが、データが無いテンサウザンド相手に武装が剣だけというのはあまりに無謀である。

最初に憎悪の剣をMF格納庫へ投擲したのは失敗だったのだ。物質切断しかできない嫌悪の剣^{アインス}だけでは魔科学兵器を使用するベルゼブブには勝てない。

刃に黄色の筋が装飾された黒い憎悪の剣は、ベルゼブブより後方約三キロメートル先に突き刺さっている。

「遠くに投げ過ぎた……か」

『チエツクメイトだな、カブトムシ野郎。悪いが俺の出世のために死ねや』

思わぬ戦力が追加されたことで回収し損ねた愛剣を一瞥し、ベルゼブブを中心に展開されたサウザンド部隊とハンドレット部隊の包囲網を赤い眼で見渡す。

一〇機近い数のMFが銃火器を構えながらハNSTAの合図を待っている。

嫌悪の剣・アインスでどこまでできるか定かではないのだが、絶対的な劣勢を悪魔は鼻で笑った。

第35章 脱出

突然の敵奇襲により村は混乱状態だった。真夜中に基地のサイレンを聞き付け、目を覚ました村人達は村から脱出を計る。宿屋の宿泊客も例外ではない。

「ちょっと！ リオン、早く起きなさい！　ねえ、起きなさい！
……起きろ」
「熱ッあつッ！！」

ドアを蹴り破り、胸倉を揺さぶってもなお寝ているリオンに、ライターの火を近づけ目覚めさせるノーシヨン。

「なんですか、なんなんですかノーシヨンさん！　……外が騒がしいですね？」

「今、基地が敵襲にあつてるとるらしいわ。逃げるわよ、早く！」

「そんな！　村じゃなくて、共和国軍の基地がですか？　一体誰が？　あり得ないですよ！」

「世の中にはあり得ないことがあり得ている……ところで、セレネはどこ？」

リオンの隣にある整ったままのベッドを見て、眉を潜めるノーシヨン。まるでベッドを使った形跡がないのだ。

ノーシヨンは、リオンが目をこすっている間に舌打ちを済まし、人影を探すように部屋を見渡す。

「え？　いないんですか！　部屋に帰ってから、ずっと隣で寝てたと思うんですけど」

「馬鹿！　ちょっと前に私達の部屋に来てたのよ……嫌な予感がす

るわ。とにかくリオン、村を出なさい」

「もう、ここも危険じゃワシらが村に入ってきた方角なら危険は少ない。はよ、動かんか。これだけの騒ぎならセレネも村の外に出ておるはずじゃ」

リオンの足を引っ張りながらドクターMは声を上げ、リオンは宿屋の外へ急いだ。

外の世界は地獄だった。MFのオイルの臭いと木材が焼け焦げた臭いが鼻にこびりつき異常事態を招いていると嫌でも実感させられる。

隣家には基地から飛来したであろうメタルフレームの部品が無残にも家に突き刺さり、基地の上空は夕焼けのように赤く染まっていた。もし、宿屋の位置が数件基地側にあつたなら、リオン達は即死だったであろう。

我先に同じ方向へ逃げ惑う人々、泣き叫ぶ子どもたち、倒れている女性を足で踏みつぶす人間はいるが、手を差し伸べる人間はいない。

「なんだよ……これ、どうなってるんだよ、クッ！　って、オワッ！」

基地の方角からの爆発音に思わず耳を防ぐリオン。目をつむったと同時に横から男が人の群から飛び出してき、道の隅で棒立ちしているリオンを吹き飛ばす。

ぶつかってきた男は、詫びる言葉も掛けずに植木鉢を大切に抱えて去って行く。

軋む体とぶつかってきた男を恨めしく感じながらリオンは立ち上がった。ハンスタにやられていなければ、さっきのような軽い体当たりで倒れることなどなかったはずだ。

何気なく後ろを振り返るとノーションが基地の上空を見上げていた。

「ロストナンバー、見つけた……。 リオン……。先に行きなさい。私、やることができたわ。 ドクター、なるべく遠くに逃げて下さい」

「……死ぬんじゃないぞい」

「ちょっと！ ノーシヨンさん！ やることつて、この状況で逃げる以外何をするんですか！！ ノーシヨンさん！」

ノーシヨンは基地の上空を飛来する巨大な黒い影を目撃した途端、眼鏡を外しMFの銃撃の音が鳴り響いている基地へ駆けて行った。リオンは人ごみの中、小さくなっていく金髪を見送ることしかできない。

リオンがノーシヨンに気を取られている僅かな間、ドクターMはボールのように蹴られて、人ごみに飲み込まれる。

「あれ？ 爺ちゃんどこだ！ ちょっと、押すな！ 俺はそっちに行きたいんじゃないじゃ ゴブツ」

リオンの腹部に黒い何かが衝突し、言葉にならない言葉を口から漏らしながらうずくまる。

人の足が交差する中、リオンと同じようにしゃがみ込む人影がいた。

「ああ！ すみません、大丈夫ですか！？ あ、リオンさん！」

「うう、シリスか。 無事でよかった……。そうだ、セレネ！ セレネは一緒じゃないか？」

真正面からリオンの腹部に頭突きをかましたシリスの肩を借りながら路地裏に避難し、腹を擦りながら確認する。ハンスタの魔術が直撃した部分にシリスの頭がめり込んだため、口の中に血の味がす

る唾をリオンは飲み込んだ。

「いいえ、一緒じゃありません。弟ともはぐれてしまつて、村を探しまわっていたんですけど、どこにもいなくて……ところで、リオンさんと一緒にいたお爺さんと金髪の女の人はどこにいるんですか？」

「爺ちゃんはさっきまで一緒だったんだけど、目を離れた隙にどっかいっちまつたし、ノーシオンさんは、やることができたって基地の方に行つちまうし、セレネもいなくなつちまうし！ もう何が何だか……わけわかんねえよ」

ノーシオンとドクターMの所在が不明とわかつた瞬間、シリスは眉を潜め冷酷な瞳で少年を見る。リオンは肩を貸してもらっていたため、少女の視線の強さに気付けなかった。

「とにかく、外に逃げて下さい。物がある所は危険です。きっと、村の人達が外に集まっていると思うので、そこに行けば大丈夫かと……私はもう少し探してみます」

「おい！ シリス待て！ おい！」

誰を探すか明白にしないままシリスは軽い足取りでリオンから離れる。

リオンは手を伸ばすがシリスには届かなかった。黒い髪を揺らしながら人ごみの中に戻って行くシリス。ここで、リオンがシリスの腕を取ることが出来ていたならば、運命は変わっていたのかもしれない。

「俺も……セレネを探さない」と

リオンは誰に言うでもなく、一人呟いて狭い路地裏から通りの様

子を見る。

逃げ惑う人の中にセレネがいるかもしれない。そんな期待をしながら覗く。大人が我先へと逃げ惑い、親を見失った子どもは大通りで泣き叫んでいるが、誰一人子どもを助けようとしらない。そして、奇妙なことにほぼ全員が植木鉢を抱えて走っていた。

「なんだよ……子どもより、その植木の方が大切なのかよ！！くそつたれ！」

腹を押さえながらリオンが通りに再び飛び出る。そして、人の波に押し流れそうになりながらも女の子の手を引っ張り、また路地裏に返ってきた。

「おい、君、大丈夫？ 怪我してないか？ お父さんとお母さんは？」

泣きじゃくる女の子は、拙い言葉を絞り出す。

「パパ、ずっと昔に軍人さんに、連れていかれちゃった。ママは、どこかに行っちゃった」

「そうか……お兄ちゃんが一緒にいてやるから、とりあえず村の外に出ような、きっとママも君のことを外で待っていると思うから」

リオンは関節の痛みを表に出さないようにいつも以上の笑顔を作って女の子の頭を撫でた。

女の子はゆっくり頷き、自分より遥かに大きいリオンの手を握る。女の子を連れてどこにいるかわからないセレネを探すことは困難だ。リオンは、セレネも外に脱出していると自分自身に言い聞かせ、後ろ髪を引かれる思いで、村の外を目指す。

第36章 激怒と憤怒

村の外に無事出ることができたリオン。右手に繋いだ手を離すまいと必死に握りしめていたせいか、右手だけがやけに汗ばんでいる。

「あ！ ママ！！」

右手を引つ張られる感覚を覚えてリオンは振り返った。女の子の指先には、地面に座り込んでいる女性の後ろ姿があつたのだ。

「よかったなあ。ほんと……よかったあ。早くママの所に行つて安心させてこい。もう、はぐれるんじゃないぞ」
「うん、ありがとう、お兄ちゃん」

リオンは涙を堪えながら女の子の頭を撫で、背中を軽く叩き母親の元へ行けと合図を出して見送った。

村の外に逃げ切れた大人達は疲れか絶望からか、力無く、糸の切れたマリオネットのように座り込んでいる。どの髪の色を見てもリオンが探している色をしている者がいない。リオンは、心臓を絞めつけられる思いで、荒野をもう一度見渡す。

どこを見ても糸の切れたマリオネットしかない。

「セ、レネ……セレネ！！ いたら返事をしてくれ！ 誰か、蒼い髪の子の子を知りませんか！ 誰か！」

疲れ果てている大人達から返答は一つも無い。リオンは気が付くと走りだしていた。そんなはずはないと、どうすればいいのだと、体中から樂觀していた自分へ怒りが込み上げてくる。

怒りを走力に変換し、リオンはただひたすらに走った。

村の辺りを何周も周るが鼓膜を破りかねないメタルフレームの銃撃戦の音が近くなったり遠くなったりするだけで、夜の荒野に蒼い髪をした人物はいない。

情報が無いまま、結局最初の避難場所へ戻ってきたリオン。全身を襲う魔術による痛みなどつくに限界を超え、何も感じなくなっている程だ。

「どこに、はあ、はあ……いるんだよ!! セレネエ!!」

リオンは最悪の状況を考えないようにしていたが、これでは考えざるを得ない。セレネは恐らくまだ。

膝で体を支え、肩で息をしているとズボンを引っ張られ我に帰る。

「お兄ちゃん、ママが……変なの……たずげでえ」

先ほど母親の元へ送りだした女の子が泣き枯れたような声で助けを求めている。恐らく、リオンが走り回っている間、この女の子もずっと助けを求めて辺りを走り回っていたのだろう。母親の元へ送りだした時に両方揃っていた靴が片方無くなり、靴下は破れ、小さな素足からは血が出ている。

枯渴しきったと思われた女の子の涙は、リオンの姿を見たせいかもしれない。また溢れだしていた。

リオンは、唇に穴が空く程強く噛みしめ、女の子をゆっくり抱きしめ母親の元へ足を運んぶ。

母親が怪我をしていたのかもしれないし、何かの病気なのかもしれない。いずれにせよ、女の子の挙動からただ事ではないと想像が付く。

リオンは頭に巡る蒼髪の少女の顔を断ちきれないまま、母親の様態を確認した。

「大丈夫ですか？ この子に連れられて来たんですけど」

背中を向けたまま女性は、力なく声を漏らすだけだった。リオンの言葉がまるで耳に入っていないかのようなようだ。

仕方なくリオンは背後から座り込んでいる肩を揺する。

「もしもし？ 俺の声が聞こえないんで なっ！」

顔面蒼白。

座り込んでいる女性とその顔を見た少年、二人の顔を表現するなら誰もがそう言うだろう。

咄嗟に手を引いてしまったりリオンは、倒れる女性を受け止めることができなかった。顔面から地面に着地した女性からは、反応が返ってこない。

「そつとしておくんじゃ、動かすでない」

側にいる女の子の背丈と変わらない老人が女性の影から顔を出した。聴診器のような物を首にかけ、女性の腕をまくり素早く脈を計る。

いつもふわふわしている老人からは想像も付かない真剣な表情にリオンは言葉を失った。

「無事だったのか爺ちゃん！ それより、これはどういうことだ。これじゃまるで死んで」

女の子の存在を思い出し、唇を噛みしめ口を塞ぐ。

「生命力が魔力と一緒に外に流れ出ておる。極めて危険な状態じゃ。お嬢ちゃん、君のお母さんは、この葉っぱを直接食べたのか

の？」

ドクターMは優しげに女の子の手を握って、植木鉢から葉っぱを一枚むしり取る。

「ううん。 ママ、葉っぱを燃やしてただけ」

「そうか、わかった。 ありがとう。 それならまだ手の施しようがあるの。 君のお母さんが恐らく……最後じゃ」

ドクターMは、ほとんど息をしない女性のおでこに手をかざし、目をつむる。

それはまるで魔法だった。

老人と女性の接触している部分が緑色に輝き、瞬く間に女性の顔色がよくなっていたのだ。

「爺ちゃん……一体どうやって」

「ワシの魔力を少し分け与えて、毒気のある魔力を押し流したただじゃ」

ドクターMはリオンに簡単に分け与えただけと言うが、他人へ魔力を分け与えるなど並みの魔術師には到底真似できない。

保有している四大元素の比率、魔力量、これらは全て十人十色である。数パーセントでも体に合わない魔力が流れ込んでくれば、外敵と見なされ抗体による拒絶反応が見られるはずだ。

ところが、ドクターMはものの数秒で女性の魔力を読み取り、自分の魔力を付加^{エンチャント}で調節して明け渡した。拒絶反応も今のところ無い。

「なんだか知らないけど、葉っぱが原因なんだな？」

「そうじゃ、これは手術などで痛みを和らげるための薬の元となる葉じゃ。 じゃが、使い方を誤れば、このように体内の魔力を垂れ

流すことになる。本来、そのような性質を持った危険な植物なんじゃ、専門知識が無い者が使ってええもんではない」

植木鉢を見つめる少年は納得がいけないと言いたげである。

「俺、これを持って逃げる大人達をたくさん見たぞ。なんでそんな危険な物を大切にするうとするんだよ」

「この葉は、高く売れる。そして、この村を見る限りこの葉は、生計を成り立たせる上で何よりも大切なものだったんじゃない……解毒剤を作ろうにも材料がない」

老人が周囲を見渡し、座り込んでいる人々を見て溜息をついた。その溜息は、悲しさや落胆からではなく、もう疲れたと言いたげな溜息だった。

「アレは麻酔以外にも使い道があつての。生きている間では到底感じる事ができん強い快感を生むんじゃないよ。強過ぎる刺激は依存性を生む。故に、共和国では違法とされておるはずじゃ。リオン、周りをよく見てみい」

老人が女の子の頭を撫でながら背後に立つリオンに言う。女の子は満足そうに恩人である老人へ笑いかけていた。

女の子には今の言葉の意味がわからないのだろう。世の中には知らない方がいいこともある。

「そんな、ここの人達……全員」

「服用し過ぎじゃ……もう助からん。ワシー人の魔力では、どうすることもできんし、村の者を止めることもできなんだ」

小さな体で葉の魔力を求めた大人達を止めに入っただけであらう。

ドクターMの体からは暴行を受けた後が無数に見てとれた。

焚火の前に捨てられた糸の切れたマリオネット。それはもう息の切れたマリオネットとなっていた。

避難した村人達はリオンの声に返事をしなかったのではない。できなかったのだ。快楽に魅入られ、快感の絶頂を満喫している時に何を言われても反応する気すら起こらないであろう。

「お嬢ちゃん、お爺ちゃんに一つ教えてくれんか。お母さん達は毎日、この葉っぱを燃やしていたのか？」

「うん、軍人さんが持つて行く前に、こっそり燃やしてた。大人になるまで吸っちゃダメなんだって」

そうかい、とかぶりを下げて老人は呟く。

「どちらにせよ、この村はもう終わっていたのかもしれない。葉の度重なる服用で恐らく体は限界、従わない者は殺される村。この葉は、彼らに残された唯一の逃げ道だったのじゃろう」

「なんでだ！ この村の人達はなんで、軍の本部に訴えなかったんだよ！ この人達はやりたくもないことをやらされていたんだろ、なら……ならあー！」

「軍が行っていたとはいえ、違法物を栽培し使用していたとなると罪は重い。辺境の貧しい暮らしがわからん都市部の民衆は、遠慮なく重い判決を下すはずじゃろて。最悪の場合、大衆の前で盛大に処刑されるだけじゃぞ」

ドクターMは、無表情で言葉を紡ぐ。

少年は溢れだす気持ちを爆発させるように荒野の土を両手で叩いた。怖気付いて従ってしまった村人に一つ、世の理不尽さに一つ、ハンスタという悪魔に一つ、そして、悪魔に完敗した自分に……何も知らない自分に、口だけの英雄気取りに何度も何度も右手を乾い

た荒野の地面へ振り落とす。

たった一人の村娘を守るだけで命がけだった英雄が、村を救うことなど不可能だった。守れる数には限度がある。

目の前で何もできず、ただ朽ち果てていく人を見ることしかできない自分がどうしようもなく嫌になるリオン。

「じゃが、苦しい思いをせず死ねて、よかったのかもしれない。笑って死ねれば本望じゃろうって。 全く……馬鹿なことをしようからに」

犯罪者を優しく保護してくれる場所などどこにもない。

この村で、絶対服従を強いられ一生を終えるか、本部の留置場で葉の無い苦しみを味わいながら死ぬか。村人に残された道は限られている。

自由の国が自由を許すのは、金と権力、正義がある者だけだ。貧しく最下層の暮らしをしている犯罪者に与えられる自由などこの国に無い。

「ふざけんなよ……死ぬことが幸せだって言いたいのかよ。 爺ちゃんはやんは！」

老人は背中を向けたまま何も言わない。

「諦めないでくれよ……爺ちゃんは凄い人なんだろう？ どうにかならぬのかよ、助けることはできないのかよ！ 材料は俺が探すから、探すからさ……見殺しにしないでくれよお！！ さっき見て回ってきた時……まだ、皆生きてたんだよ」

老人は俯いて拳を震わせている。この荒野に解毒剤の材料など無い。

少年とて理解はしているが、この気持ちをどこにぶつけていいのかわからず声を上げる。

「なあ、爺ちゃん!!」

「黙れえい!!」

激怒する少年を一言で跳ね飛ばす老人。小さな体から発せられた怒鳴り声は女の子と少年の時間を止めた。

少年の怒りなど老人の感じている怒りに比べれば見るからに生ぬるい。少年が激怒ならば老人は憤怒だ。ただ、理不尽さを怒りでもみ消そうとするだけの少年とは違い、あらゆる模索の結果出口が見つからず、それでもどうにかしようと足掻きに足掻いた結果の怒りが一言に圧縮されていた。

「リオン。 お主は、英雄になりたいと言っておったな」

静かに、震える声でドクターMが言う。

放心状態のまま生返事をするリオンへ開いているか閉じているかわからない眼を向けている。

「医者であろうが英雄であろうが、人が一生に助けられる人数は決まっておる……限界があるんじゃない。 限界を超えた者を笑って死ねるようにしてやるのが医者の仕事。 そして、限界を超えて切り離された者達が残した愛しい人を代わりに守るのが英雄の仕事じゃ」

長年生きてきた老人の言葉には、リオンの胸をえぐる何かが含まれていた。それが何か、リオンは明白にしたくない。

それだけ言い残すと老人は泣いてしまった女の子をなだめに入った。ドクターMの背中を見つめリオンは否定の表情を露わにする。

そんなの英雄なんかじゃない

そんなの英雄なんかじゃ

リオンが口を開こうとしたその時、女の子の頭を撫でるドクターMの表情が何かを思い出したかのように止まった。

「医者と英雄が力を合わせれば助けられぬ人も助けられるかもしれない！ リオン、走れるか？」

第37章 力無き者1（前書き）

皆様、お久しぶりです。

ネタとネタが繋がらないという病氣にかかり日夜苦しんでいた、お金を稼いでいましたら、一か月も過ぎ去ってしまいました。更新を待つて頂いていた方、大変お待たせいたしました。

『ミリオン』ようやくの更新です。

第37章 力無き者1

夜の冷たい風に逆らい、リオンは全力で荒野の砂を踏みしめながら走っていた。

（助けられる。 まだ、間に合う！）

自分の胸に強く言い聞かせ、絡まりそうになる足に力を込めるリオン。

ドクターMは、魔力を使い過ぎたためこれ以上の人数を処方することができない。ドクターMの体内には、これ以上使用できる魔力は残っていないということだ。

しかし、魔術師の限界を超える石がある。ノーションが月花に取りつけた魔石だ。メタルフレームのエネルギー供給源として使用できる魔力の塊は、百にも満たない村人の毒気を押し流してもお釣りがくる魔力が込められている。

ドクターMが、どのようにして村人を助けるのかなどリオンに知る由も無いが、血液の流れが停滞し顔が真っ青になっていた女性が数秒の間に、顔色が良くなった様を目のあたりにしたのだ。老人の言う通りにすれば村人全員が助かる。ただそれだけで十分だった。

「クソッ！ もっと早く。 もっと早く！」

疲れ果ててジョギングするような速度しか出せない自分の足を呪い殺したいと思いつながら、リオンは月花を駐留させている岩場へ向かう。

目に入ってくる汗など、気にしている場合ではない。ドクターMは、村人を助けたければ全力で走れとリオンに言ったのだ。歩くわけにはいかない。

一歩歩けば、一人死ぬ。そう考えることでリオンは、走り続けることができた。

何より『走る』だけならば、リオンにもできる。村の女の子を魔術師から守れと言っわけでもない。

「間に合え……間に合え、かつは、間に合え!!」

何か口にすれば走力が落ちるように思われるが、少年の限界を超えた体を動かすためにはそうする他なかった。

魔力が無ければ努力で補う。体力が無ければ気力で補う。優れた力を持たないリオン・オルマークスのやり方。

「限界、なんてないんだ……限界なんて!」

拳を握り直し、腕を振る。腕を振れば足が動く、そう言い聞かせて腕を振る。腕を大げさに振る少年の様子は、ドクターMが言った『助けられる数の限界』を振り払っているようにも見える。

岩陰に待機させておいた蒼い機体が目に映り始め、少年の目は一瞬輝きを取り戻した。折り返し地点はすぐそこだ。

満身創痍で長い、長い、折り返し地点に辿り着いたりリオン。今では飲み込む唾ですら喉に痛みを走らせる。

巨大な杭打ち機を手足に装備した蒼きメタルフレーム、長い砲身を背負ったノーション達の白きメタルフレームがそこに健在していた。

「……お前ら、誰だ。その機体から……離れろ」

メタルフレームに向けて擦れた声を出したのはリオンだった。蒼い機体に取りつく黒いシルエツトが警戒心をより刺激する。

何より、メタルフレーム両機のコックピットが開かれているのだ。

この情報は、リオンがこの者達のことをタダものでないと判断するには十分過ぎた。

「俺たちは軍に乗っ取られたその村の人間さ。俺たちを知らねえってことは村の人間じゃねえのか。それとも軍に魂を売ったためえらは、俺たちのことなんて忘れてちまったか？」

コックピットから面倒そうに体を乗り出す太った体型の男。

「忘れられたら困りますねえ。もつとも、私たちは今の村の方々にとって忘れたい過去なのかもしれませんがあ。それはそうと、この機体はロックもされずにここに落ちていた物です。放置されているMFは、サウザンド以内ならば自分の物にできる。法律でもそう定められています」

腕の杭打ち機に片手を置き、メガネを掛け直す痩せ型の男。

「そうそう、これはオレたちが拾った物っちゃ。よそ者は帰っちゃ、帰っちゃ」

足の杭打ち機にもたれ掛かり、短い顎髭を撫でる背の小さい男。月花に取り付いている三人組の男たちが口々に言った。

「ちよつと待て！ それは俺達の……お前らのじゃない。勝手に触るな！」

俺達の機体だ、そう言いかけて口籠る。

機体に近づこうとしたリオンだったが、一本の赤い線がリオンの頭に付き付けられていることに気が付き、動きを止める。

眉を潜め、赤い線の先 機体の足元にいるチビを睨むリオン。

静止したリオンを眺めながらチビがはつきりとよく聞こえるように言い直した。

「いいや、オレ達の機体っちゃ。ここに落ちてたんちゃよ、ロックもされずに」

ロックもされず、ここまで整備されているメタルフレームが二機も落ちているわけがない。月花の整備状況を見れば、誰かの所有物だとわかるはずだ。

もし、セレネがノーションがここへ来てロックを解除したままどこかへ行ってしまったとしても、両機のロックが解除されているわけがない。何故なら、リオンとセレネそして、ノーションも自分達の機体のロックナンバーを一切教え合っていない。両機のコックピットが開いている状態などあり得ないのだ。

ノーションとセレネが村で合流し、二人でここへやってきたとしても二人揃ってメタルフレームを放置するとは考えにくい。

つまり、月花に乗り込んでいる三人組は、機体のロックをなんらかの方法で破り、盗み出そうとしている盗人である可能性が高い。

（こんな時に、盗賊……。基地を奇襲したのは、こいつらか！
いや……。でも人数が少な過ぎるし、わざわざ基地を襲わなくても月花は盗める。デブのおっさんが自分達のことを村人って言うてたことも気になるな）

両手を上げながら、推理を始めるリオン。

三人組みの言葉のなまりが、村で出会った何人かと似ていることと、まだ自分が生かされているということから、男達を村人と仮定することにした。

盗賊ならば、見るからに金目の物を持っていないリオンの容姿を見て、生かしておくだろうか。女だったらその可能性もあったかも

しれないが、男ならば騒がれる前に殺すだろう。男で遊ぶ盗賊などいない。リオンが男達に話しかけた瞬間、弾丸がその黒い瞳を撃ち抜いているはずだ。

それにもかかわらず、月花の足元にいるチビが持つ銃は、依然とリオンの額に向けられたままであるし、男達も意外な客が来たことで少し焦っているようにも見える。

「俺は、ただの旅人だ。村の人……なんだな？　なら、話を聞いてくれ。今、村の人達が大変なことになってる。人の命が掛っているんだ。今も死んでる人がたくさんいるかもしれない……俺は、その赤いペンダントを取ってくるように言われただけなんだ。それがあればみんな助けられるんだよ！　だから、今すぐそれを返してくれ！」

コックピットから顔を出しているデブの手には二つの赤い石があった。喉から手が出そうになるリオン。鎖で繋がれた二つのペンダントが村人の命を繋ぐ。静止を強いられる一方で、リオンは居ても立ってもいられない気持ちになっていた。

肩で息をしながら物欲しそうな眼差しを浴びせる少年をゆっくり眺め、男達はアイコンタクトを取り合い、満足げに三人が唇を歪ませた。

「……やれねえな」

デブが声を絞り出す。少年は呆気にとられたまま声を漏らした。

「信じてくれよ！　俺は本当に」

「坊主を信じるとか信じないとかの問題じゃない。俺の個人的な問題でな」

その発言こそ信じられないと言った顔をした少年を見て、三人組は笑い声を上げた。

「ふざっけんなよ、このデブ野郎！！　　うっ……」

リオンはもう我慢できなかった。怒りの炎が胸の中で燃え上がる。しかし、チラつくレーザーポインターを口に当てられ怒りの炎は蓋をされた。

「ふざけてなんていねえよ。坊主の話が本当だとしても、俺たちを見捨てた野郎を助ける義理はねえって言ってたんだ。これがアイツらの命握ってんなら、誰が渡すかってんだ。裏切り者はさっさと死ねばいいんだよ」

「……何、言ってやがる」

ペンダントを宙に投げて遊んでいるデブに聞き返すリオン。

この現状で見捨てているのは三人組の方である。意味のわからない発言、ゆっくり話すデブ、目の前を挑発するように行き来する赤いレーザーポインター、この場にある全てが憎たらしく感じ、静かに拳を握った。

「どうやら、坊主は本当に旅人らしいな、しかも相当の馬鹿だ。馬鹿なら仕方が無い、教えてやるよ、この村に住む奴らの罪を」

デブから馬鹿と言われて反論できず、齒を食いしはるリオン。決して自分でも賢いと思ったことはないだろうが、他人から馬鹿と言われることには腹が立つようだ。

そんなリオンの心境などお構いなしに続けるデブ。

「今、残っている村の連中は……俺達がハンスタと戦っている時、

一切加勢してこなかった腰抜け共だ。それどころか、俺達を捕まえてハンスタに売りやがった裏切り者なんだよ！」

「腰抜けが死のうが私たちには関係ない。村のために戦った私たちに厄介事を押し付け、自分達は悪くないとハンスタに村だけでなく、魂まで売った彼らを救う義理がありますか？彼らに返す義理は、裏ギリが相応しいでしょう？」

「裏切られたオレ達は、朝から晩まで血反吐を吐きながらMFの掃除から雑用をさせられてきたっちゃ。労働に耐えられず死んだ奴も……家族を目の前で殺されて自殺した奴もいたっちゃ。ハンスタの受け売りっちゃが、目には目を歯には歯を……裏切りには裏切りをっちゃ」

デブが唾を吐く、メガネが口元を歪める、チビが声を上げてちやっちやっとなんと言った。

そして、押し黙るリオンを確認し、デブが続けてのっそりと声を出す。

「それに……だ。どうして坊主はペンダントに固執する？ハンスタにそう言われたからか？村の連中が人質に取られているならMFで殴り込みに行けばいいだろう？そんな度胸もねえやつと言うことを聞けるかってんだ。殴り込みに行くから機体を返せと言う『男』なら、話を聞いてやらんでもなかったが、坊主は鼻っからペンダントの話ばかり、言われた通りにしかできない毛も生えてねえガキに協力なんてするか。まさかこれがMFを凌駕する魔法のペンダントなんて言わねえだろうな？」

茶化すようにデブが魔石をコックピットから垂らす。

黙って男達の言葉を受け続けるリオン。何も言い返さないのではなく、言い返せないのだ。螺旋状になった感情の渦が脳裏を貫き、摩擦で思考を焼き焦がす。煮詰まった思いと疲労が少年の判断を鈍

らせる。少年からは余裕と言うものが微塵も感じられない。

「治せる……爺ちゃんなら絶対やってくれる。みんな助けられるんだよ！ だから、ペンダントを……魔石をさっさと超越しやがれ！！」

少年は言うてはならないことを口にしてしまった。怒りで我を忘れてしまったのか、焦りで考えが追い付かなかったのか、いずれにせよリオンは、ペンダントのことを“魔石”と口走ってしまった。

最初から男達とリオンは話が噛み合っていなかったのだ。

一言もリオンがハンスタという人物の名前を出していないと言うのに、ハンスタという名前を何度も出していた男達は、まさか村人達が植物の毒で死にかけているなど想像もできなかったのだろう。ハンスタに抵抗していたという彼らが、ハンスタによって栽培を強要させられている植物のことなど詳しく知っていたとも育てていたとも考えにくい。

そんな男達は今や顔色を変えて、ペンダントを眺めている。メガネが満足げに鼻を鳴らし、声を上げた。しかし、リオンは未だに何が何だかわからないといった様子だ。

「なるほど。すみません、私たちは勘違いをしていました。

君は今“治せる”と言いましたねえ？ つまり、村の方々は揃いも揃って怪我をしていることになる。私たちはてつきり、人質にされているのかと思っていました。いや、ハンスタの手口はいつもそうでしたからねえ。基地であつた騒動の責任を誰かが取らされているのかとばかり……私としたことが、先入観はいけませんね」

リオンはメガネのインテリぶった話を黙って聞く。

「そしてあれは“魔石”だったのですか。君は悪い子だ。この状況で大人を騙そうなんて……君の口ぶりからするにあの魔石には、人を癒す力があるということになる」

全てに納得がいったと言いたげな声を出しながらメガネは首をゆっくり縦に動かし、デブが喜びの声を上げる。

「魔石はただでさえ計りしれない価値がある。それに人の傷を癒す魔石など聞いたことがねえ。例え、魔石が偽物だったとしても、この機体達を売れば、多少の金にはなるだろう。基地から逃げだせただけじゃなく、MFと魔石も手に入るとはツイてるんじゃないか言いようがねえ」

会話が続く中、デブがいやらしく擦れる声で確信をついたように笑った。

それを聞いたリオンは髪を逆立たせて叫ぶ。

「こんな時に金なんて関係ねえだろう！！早くそれを渡しやがれ！人の命、掛けてんだぞ！！それにさっきから、ハンスタ、ハンスタってム力つく野郎の名前ばかり呼びやがっていい加減にしろよ！村のために戦ったことがあるんだったら、少しは村のためになることしやがれ！困った人がいたら助けるって習わなかったのか？腰抜けで子どもは、お前らの方だ！いや、子どもでも人助けはする、あんたらは子ども以下だ！それに、人のメタルフレームに土足で上がりやがって、さっさと降りやがれ！」

溜まりに溜まった怒りが言葉になり、口から次々と発射されていく。言っているリオン本人でさえどこまで言葉が出るのか、どこで区切れればいいのかわかっていない。ただ、感情のままに腹から声を出す。

銃口が向けられていることすら忘れていた。怒鳴られている相手が盗賊ならば、すぐに引き金を引かれていただろう。しかし、怒鳴られている相手は幸いなことにすぐ引き金を引く類の人間ではなかったようだ。口から発射された弾には口から発射する弾で答える。

「黙れ、ガキがぁ！　これが金になる石と知って渡せるか！　どんな状況であろうと金が全てだ。金さえあれば力も地位も正義すら買える。軍人が何十人も村の人間を殺しても罪にならないのは何故だ！？　反攻した見せしめに仲間を八つ裂きにされたのに、文句が言えねえのは何故だぁ！！　俺たちがハンスタにコキ使われるようになった一番の原因は金が無かったからだ！！　俺たちはこの魔石とMFを売り払って力を手に入れるんだよ！　こんなクズと腰抜けしかいねえ村なんてどうなるうが知ったこっちゃない。……こんな村、さつさと無くなるべきなんだ！　何も知らねえよそ者が知ったような口を聞くな！」

言い終わるや否や、肩で息をする両者。メガネとチビは二人の剣幕を目のあたりにして呆気にとられている様子だ。

汗を吸い過ぎた衣服は、色が濃くなった場所が長過ぎる前掛けのように下半身まで広がっており、少年がどれだけの想いでここまで来たのかが見て取れる。

一方、デブは、過度の労働で皮が何重にも破けて硬くなった十本の指に力を込め、手を震わせている。その短く固そうな手はワニを思わせる。

『金』は『全』だと。ゼロの数と力はイコールで結ばれているのだと悲痛を叫ぶデブ。

そよ風の音が聞こえる程にまで静まり返る一同。夜空に一つの流れ星が流れた。まるで、誰かが零した涙のように線を引いて地平線へと消え去って行く。

「いいから石を返してくれ。　時間が無いんだ。　金はどこにだつてあるだろ……命は、今ここにしかないんだぞ」

俯いた少年が懇願するように声を漏らす。こうしている間に何人の村人が手遅れになつていいのかなど少年はわからない。ただ、見殺しにしている気分と極度の緊張で、吐き気が込み上げてくる。

事態は一刻を争うのだ。

「坊主。　人間、死ぬ時は死ぬんだ。　MFと魔石は渡せねえが、俺達も鬼じゃない。　機体と石をプレゼントしてくれた坊主には選択肢をやるう。　脳天をブチ抜かれて荒野に死体を捨てられるか、今すぐ目の前から消えて、命だけ助かるか。　できることなら俺達だつて人は殺したくねえんだ。　命は、今ここにしかないなら坊主の選択は決まつてるだろ？」

「そんなに、金が大切なのかよ……」

デブの寛大な提案を無視してリオンは月花を見上げた。デブは、少々呆れたと言つた仕草をして答える。

「ふん、大切さ。　他人の命よりは……な。　坊主も大人になりやわかる。　この世界を動かしているのは、人情や友情じゃない。　金だ。　人は裏切る……でも、金は裏切らない。　感情が無いからな。　それに、困つた時はお互い様、見殺す時もお互い様だぜ」

感傷に浸るデブとの会話はそれ以上続かなかつた。少年は逃げるような素振りを見せない。数秒が数分に感じられる緊張感の中、リオンは岩のように佇み、拳をゆっくり握りしめては開いてという単純な動作を繰り返している。

（おっさんらの気持ちはわかる……でも、でも、やられたからやり返して）

頭にレーザーポインターの赤い点を付けられたまま拳を力強く握るリオン。そして、ハンスタにやられた時と同じく、素人丸出しのファイティングポーズを取った。

「そんなこと繰り返してたら誰も信用できねえぞ！ 人は裏切る？ 当たり前だ！ だから、信用してもらえた時、嬉しいんじゃないかよ！」

周囲から冷たい眼で見られていた時、ウインド村で初めて、カースト達にメタルフレイム・ディスカバリーに乗せてもらった日のことを思い出してリオンは更に続ける。

「加勢してこなかったんじゃないかって、加勢したくてもできない力の無いやつのが持ちをあんたらは考えたことがあるのか？ 戦いたくない人がいたのに、あんたらは無視して戦っていただけじゃねえのか？ もしそうなら、あんたらはハンスタと同じことを村の人にしていたことになる。だから、見捨てられた。それを裏切ったなんて決めつけて……裏切られた、裏切られたって被害者は自分だけだと思いやがって！ 父親が軍から殺人者扱いされた上、服を脱がされそうになっていた女の子もいたんだぞ。あんたらだって辛かったのかもしれないけど、村に残っている人も十分に辛かったんだよ！」

月花の腕に乗っているメガネが眼鏡を掛け直してリオンを睨む。

「何も知らないよそ者がよくも吠えましたね。君が言っているのはただの推論と理想論です。村人でない君が何故、村の人の気持

ちがわかるのですか？ 村人の気持ちは村人だった私たちがよく知っている。私たちは君が言った少女のような被害者を二度と作りたくなかったから立ち上がったのですよ。それが、その有様ですか！ やはり村の存亡をかけてでもあの時、戦わなくてはならなかった。今やハンスタは軍のMFだけでなく遺跡からもMFを発掘し、力を固めている。彼を倒すなどとは不可能です。アイツさえ来なければ、アイツさえ！ いえ、私たちにもっと……力があれば！」

メガネが杭打ち機に拳をぶつける。鈍い音がはつきりと聞こえる程、力がこもっていた。

その様子をリオンは瞬きもせずに見守る。そう、力があれば力に對抗できる。それは力無き者の言い訳だと聞こえるかもしれない。しかし、力に勝るものは、また別の力でしかないのだ。

弱肉強食。この四文字こそ、世界のありかたなのである。いくら気高き志を持っていようと、いくら平和を祈るうとも力がなければそれは『肉』でしかない。

この事実をこの場の四人は、経緯は違えど同じ人物から身を持つて思い知らされた。

誰も動こうとしない中、一番高い位置にいるデブが何かに気が付いた素振りを見せる。

しかし、少年の背後から弾丸と変わりない速さで、月花の足元へ飛んで行く『石粒』を目視できた者などいるはずがない。

「つぐああ！！ ひう、いう、ひいう」

チビが突然声を上げ、右手を押さえながらうつろくまる。その様は勝手に暴れている右手を全身で押さえ付けようとしているようだ。チビの周辺にはグリップと銃口、照準器など粉々になった『銃だったもの』が散らばっている。当然、リオンの頭からもレーザーポ

インターは消えた。

「全く、男が情けない声で鳴かないでくれる？ あんまり情けないと……もっと、鳴かせてみたくなるじゃない？」

肩までの金髪を揺らし不敵に笑う女が堂々と姿を現した。この場に、彼女の敵などいない、まさに不敵。

「ノーションさん！」

「ずいぶん汗臭くなつたわね、リオン。臭いで集中力が乱れるからあんまり近づかないで。さて、盗人さん達、私の可愛いMF……アルテミスを」

返してもらおうかしら、と続けてリオンの足元に転がっている次^{つづ}の弾を拾う。次の弾を補充し、前髪を掻きあげこう言った。

「さあ、股の銃をブチ抜かれるか、ケツの穴を増やされるかどっちか選びなさい」

白衣の悪魔が鬼畜な笑みを浮かべ、その血のような赤色の唇で男達を誘惑する。

第38章 力無き者2（前書き）

すみません、結構な長文になっちゃいました。
主人公がダメ過ぎてすみません！

38章、楽しんで頂けたら光栄です。

第38章 力無き者2

形勢が逆転してしまった三人の男達は、たじろいだ。基地から脱出する時に、かろうじて手に入れることができた一般人に対する絶対的な力を石粒で粉々にされてしまったのだから仕方ない。もつとも、彼らには何がどう当たって銃がバラバラになったのかなど認識する暇などなかったであろうが。

「お前！ 何しやがっ」

「答える義理は無い。そんなこと考える暇があるなら、命の心配した方がいいんじゃない？ ねえ、盗人さん」

痛そうに呻きながら地面に突っ伏しているチビへ体を向けるデブは、奇怪な金髪に言葉を切られた。言葉を切った奇怪な金髪ことノーシオンは、喫煙しながら石粒を二丁三粒片手でお手玉している。

「ダメです、待って下さいノーシオンさん。この人達は村の人なんですよ！」

聞こえていないのかノーシオンは、リオンからの言葉には全く反応しない。ただ、目を瞑りながら煙草を堪能している。

「お願い……っというか命令なんだけど、その石と機体を返しなさい。私は魔術師よ。この石粒をライフル弾に変えてあなた達を殺すのに、十秒も掛からないわ。最初の一発は警告だったけど、次の一発は脳髄を貫通させてあげましょうか」

白煙を切り裂きながら石粒が闇夜に消える。目にも止まらぬ速さで真上へ飛んで行く石粒は、下から上へ向かう流れ星となった。

女の右腕には四大元素“地”によるオーソドックスな魔術“強化”が既に発動している。

強化と魔力放出を組み合わせることで、あらゆるモノを弾丸に変えるノーシヨンの戦闘スタイルは、接近されない限り一方的に攻撃できる暴君のような代物である。

銃を失った上、身動きが取りにくい機体の上にいるデブとメガネは文字通り『的』でしかないし、音速で飛んでくる石粒より早く行動が取れる人間などいないため、身動きが取れるチビといえど状況は同じだった。

クイーンの登場による完璧なるチェックメイト。盗人達は次の一手を打つことすら許されない。

魔術師の登場により、勝てる見込みが無くなったと悟ったのか、三人組は両手を上げていとも簡単にノーシヨンの言い成りになった。これが力のある者と無い者の差である。

「じゃ、太ってるあなた。そう、あなた、この指をよく見なさい」

三人を横一列に並べ、左端にいるデブを指さす。あのハンスタのように。

その動作でリオンはノーシヨンが何をする気か理解できた。魔術のことなど全く知らないが、あの指で何をするかなど少年にも大方の想像はできる。

「待って下さい！」

「って、何すんのよ！」

ノーシヨンの右腕にしがみ付き、石粒の軌道を変えたりオン。ノーシヨンの右腕にカタバルト乗せられた石粒は、男達の背後にある月花の腕部に直撃して粉々になった。腰を抜かしたデブは汗にまみれた顔を震えさせている。

ノーシヨンは怒鳴りながら少年の黒い髪を掴み、頭を揺さぶるが、少年は離れようとしなない。

「村の人だつて言つたでしょ！ この人達は、ハンスタに捕まつて逃げてきた人達なんですよ、元々悪いことをするような人じゃない！」

「そんなの関係ないわ、元々悪いやつなんていないの。悪いことするやつつてのは元々、善意の塊で出来てるもんだわ。それに、悪いことした瞬間、村人だろうが何だろうが罪人になるのよ。罪人に村人も盗人も軍人も関係ないでしょ？ あんたを殺そうとしてたやつらよ？ ここで殺して置く方が安全でしょ？」

「俺が、俺がこの人達のことは責任を取りますから！ だから殺さないで下さい！」

少年の叫びを受け、ノーシヨンは呆氣に取られたように目を見開く。少年の頭を押さえ付けていた左手は、ゆっくり力が抜けて行つた。

「はあゝ。一度敵意を向けた者は殺す。それが生き残るための秘訣。リオン、無抵抗な人を殺すことに抵抗を感じる？ でも、彼らは無抵抗なんじゃない、“抵抗できない”だけ。隙あらば抵抗する危険因子つてことを忘れないで」

そう言いながら術式が編まれた右腕を下ろし、詰まらなさそうにライターのヘッドを開けたり閉めたりし始めるノーシヨン。

「ノーシヨンさん……ありがとうございます」

深々と背を向けた白衣の女に頭を下げた後、リオンは月花に食料を縛り付けているロープで盗人三人を縛った。

「そんなことより、私はあなたに伝えなきゃいけないことがあるわ。顔は確認できなかったけど、セレネを基地の周辺で見かけたのよ」

銀メツキのシガレットケースに吸殻をしまい込み、デブから取り戻した赤い魔石を月に透かして眺めているノーション。その悠長な行動を遮るようにリオンが食い付いた。

「セレネを！ あいつ、なんでそんなところに。基地って、今一番危険なところじゃないですか！ セレネと会ったなら、なんでその時に連れ戻してくれなかったんです？」

「私もそうしたかったんだけど……ちよつと野暮用があつてね。気が付いたらもうセレネの姿はなかったのよ。まあ、彼女の場合、死ぬことはないと思うけど」

詫びているのか、悲しんでいるのか、どっちともつかない表情をしたままノーションは続ける。

「で、今から私は基地に向かうつもり。野暮な用じゃなくて、本当の用を果たすためにね。一緒に来る？　ちよつとばかし暴れるからアルテミスには乗せてあげられないけど、あなたには月花があるわ」

背後にあるメタルフレームを親指で指示し、リオンの瞳を見据えるノーション。

「……月花、俺に動かすことができるんでしょうか」

「大丈夫よ。そのために魔石を取り返したんだから。私は自分の命を守ることです。一杯だから、セレネを探す余裕なんてないわ。途中まで道を作つてあげるから、あなたが月花でセレネを探すの

よ」

話が進む中、リオンは自分がここに来た理由を何度も胸の中で復唱した。

だが、どうしてかセレネという名前を聞いた途端、村人を助けるという使命が揺ぎ始める。

「さあ、あまり時間が無いわ。行くわよ」

「ちよつと、ちよつと待って下さい。俺は、村の人を助けるために魔石を持って来いって爺ちゃんに頼まれたんです！」

振り返るノーションを引き止め、リオンはカラカラになった喉を鳴らした。

「村の人は、変な植物のせいで死にそうなんです。早くしないと皆死んでしまう！魔石があれば助けられるらしいんです」

「甘生樹かんせいじゅでしょ？状況はよくわからないけど、魔石があってもたぶん中毒症状までは治せないわよ？」

さらにと植物の名前と思われる言葉を口にされたため、リオンは戸惑った。

リオンにとって植物の名前などどうでもいいことなのだが、聞かざるを得ない。

「知ってるんですか？あの植物のこと？」

「知ってるって？そりゃ、私が品種改良した人工植物だもん。十年以上も前に」

まるで朝食は何を食べたのかという質問に答えるような、あっけらかんとした態度で返答するノーション。

その事実を聞きリオンの口から言葉が漏れる。

「ノーションさんが……作った……どうして」

「どうして、って……当時は戦時中よ？ 色々あったのよ。 人殺しの道具として使うつもりだったけど、今みたいな使われ方するとは思っていなかったわ」

呆れたような口調でリオンへ言葉を返す。そして、リオンはどこまでも得体の知れない魔術師を睨んだ。

「治してくださいよ、作った本人なら治せるんじゃないんですか」
「いや、作った本人だから治せないってわかってるのよ。 命は助かるけど、定期的に甘生樹が欲しくなる衝動までは治せない。 血を求めるゾンビのようになるか、魔力を吸い上げられてゾンビみたいな姿になるか、どっちかよ」

鷹のような目つきで少年の黒い目を見る。まるでここからが本題だと言いたげな目であった。

「魔石があれば確かに命は助けられるわ。 ドクターがいるなら何とかするでしょう。 今なら、中毒症状を治す薬だって共和国でなら開発されているかもしれない。 でも」

あなたが月花を動かすには魔石がいるわ、そう告げた金髪の女は、少年の掌へ重たげに二つの魔石を乗せる。

「じゃ……村の人はどうしたら」

「その場合、見捨てなさい」

即答だった。白衣を着た女性は、今、命を見捨てると言った。迷

い無く、ためらいなく見捨てると。セレネを助けたければ、村人の命を繋ぐ石をメタルフレームに繋げという意味である。

されど、リオンは月花を完璧には操縦できない。セレネの操縦を真似て移動させるのが関の山だ。戦場と化している基地内で呑気に歩行している識別不明のMFなどただの的である。戦場では自軍以外、全員敵なのだ。

しかし、混乱状態だからこそ基地内に容易く侵入できるという利点もある。アルテミスによる援護を受けて上手く立ちまわれば、自分の足で基地に赴くよりも、頑強な装甲を所持している月花でセレネを探す方が効率的かつ安全というのも確かである。

ノーシヨンの腕前こそリオンは知らないが、月花の半分程の厚みをした装甲を持ち、細身のフォルムをしている白銀のアルテミスからは、間違いなく月花より俊敏な動きが可能であると想像できるし、何より背にしている獲物は、折りたたみ式の大形MF狙撃銃、右手に鉄鋼性のシールド、左手にハンドカノンとそれなりの攻撃力と防御力を所持している。接近さえされなければ、ある程度戦うことはできるであろう。

白兵戦しかできない月花より頼もしいことは事実である。

問題はリオンの心だ。

もし、村人を選べばセレネを見捨てることになる。戦場のど真ん中、不死身の彼女は、炎やミサイルの爆風に焼かれ、銃弾や施設の破片が体中を貫いたとしても死なない。

しかし、彼女は痛みを感じないわけではないのだ。

体は死ななくともいつ終わるか分からない戦いの中、『死ぬ程の痛み』を味わい続けなければいくら魔女と言え、心が死ぬだろう。

“死なない”と言うことは、つまるところ肉体の限界を超えても痛覚を感じ続けるということだ。何度も蘇生する体を持っているからと言って、何度も蘇生する心があるわけではない。

視神経を引き千切られようと、また視神経が復活する。毛細血管を引き抜かれようと毛細血管が復活する。炸裂弾で内蔵を八つ

裂きにされても、また内臓が復活する。終わることのない痛覚を浴びせられる現実、地獄と変わらないだろう。

一方で、セレネを選べば村人が死ぬ。一緒に村を脱出した小さな女の子のように、親が死にかけている子どももいるはずだ。親に先立たれた上、生き残った大人達が毒にむしばまれた状態であるなら、村に残された子どもはどう生活すればいいと言っのだろうか。

最悪なケースは、村人を見捨てた上、セレネを見つける出すことができなかった場合である。両方殺すことになる。

「ふん、姉ちゃん、あんた……悪魔か？」

月花を盗みだそうとしていたデブは、縄で縛られたまま口だけを動かした。

「なんとでもどうぞ。今更、誰に何を言われても気にしないわ。それより、砂糖並みに甘いリオンに感謝しなさいよ。あんた達が生きているのはリオンが、私の気分を変えたから」

金髪の女性は、男達を一蹴りして愛機のアルテミスに急ぎ足で向かう。

これ以上時間がないと言うことだろう。リオンは決断を迫られている、

自分だけが時間に取り残されているような感覚を味わいながら、リオンは命の石を握りしめる。少年の握力で割れるわけがないのだが、石は亀裂が走って砕け散ってもおかしくない程震えていた。

「月花で魔石を届けて、余った魔力を使って基地に向かうことはできないんですか？」

「それは無理、月花を使えば魔石の魔力なんてすぐに底を尽きる。何人村人がいるか知らないけど、月花の動力として魔石の魔力を

使えば、村人全員を助けることは不可能ね。それに、この岩場からならまだしも、魔石を人助けに使った後、村の入り口から基地まで行ける動力に変換できる可能性はほぼゼロよ。MFは起動時に一番エネルギーを使うんだから短時間に二回も起動させれば、魔石の魔力は無くなるに決まっているわ。機体の魔力が回復するまで時間が必要。まして――

まして、クリフト・ドライブしかない月花が自ら大気中魔力を補給できるとは考えられない

ノーシヨンの口と同時にリオンは頭の中で月花の特殊性を思い出す。

目の前に佇んでいる巨大な蒼き甲冑は、『魔力を出すこと』しかできない。人間で言う呼吸が未発達なのだ。魔力の回復は希薄どころか、無いと考えた方がいい。

魔力を吐き続ける機体に、魔力を取り込むことは期待できない。勢いで動こうとするリオンに、ぴしゃりと現実を突き付けてくるノーシヨンは、最後に追い打ちをかける。

「……どっちかを選びなさい。これはあなたが悪いんじゃないのよ。だから、誰もあなたを恨まないし、恨む権利なんてない。リオンが気に病むようなことではないわ。ドクターには悪いけどセレネを迎えに行きなさい。本音を言つとね、周囲に衰弱しきった人間しかいない状況は、ドクターの身の安全がかなりいい状況だと言える。村人の不幸は、私にとって幸運だわ」

衰弱した人間しかいないということは、隠密が周囲にいないということを意味している。

しかし、ノーシヨンの言葉はリオンの耳には入っていなかった。そんな余裕などない。

セレネか村人か。

少年は目を閉じて考える。

人の命を天秤にかけていいものなのか

「俺は……俺は……」

唇を一度、強く噛みしめ時間を稼ぐように言葉を繰り返す続ける。
どちらを取っても後悔をする。 そんな選択をしてしまった

いいのか

握りしめられている赤石は、二つあるのに一つしか願いを叶えてくれない。

もう一度、自問自答する。

自分が選んでいいのか、と。 自分が片方を見殺しにしているのか、と。

英雄ならばどうするだろうか。 一騎当千、天下無双、そう呼ばれた生きた伝説ならばこの決断をどうする。

『仲間を助けるのは当然だ！』と言う英雄もいるだろう。

『多くを救うために仲間を切り捨てることも戸惑ってはならない！』と言う英雄もいるだろう。

顎を伝う汗が滴となって乾いた荒野に落ちる。

それを合図にしたように英雄志望の若者は、齒を食いしぱり、一息吐いてから決断を下した。

「俺は 選べません」

擦れる様な声で言い切り、リオンは崩れるように膝を付く。 文字通り“腰抜け”の姿であった。

「選べるわけ……ないですよ！ 選んでいいわけ……ないでしょう。俺なんか……」

安直にどちらかを選ぶとした自分に対してか、選択を迫らせた
ノーションに対してか、それとも神に対してか、地面に向かって叫
ぶリオン。

「俺は何もできねえ人間なんだ。英雄になれる程大そうな人間じ
やない。まして、助ける人の命を選んでいいような人間じゃない。
メタルフレームの操縦も上手くない、魔術師から女の子一人を守
るだけでも命懸けで、セレネのことだって……一緒に旅しているの
にまだ何もしてやれてない。だから、アイツを助けに行こうと思
った。でも」

地面を両手で挟りながら頭を地面にぶつける。

「それは俺の都合で、俺が弱いから何もしてやれないだけなんだ。
セレネに何かしてやりたいからって理由で、村の人を見殺しにし
ていい理由にはならない……ならないじゃねえか！」

そもそも英雄に該当する人物ならばこのような状況に陥ることは
ない。不思議な力、磨き上げた武術、蓄えた知力、信頼できる仲間
で必ず問題を解決してみせるであろう、英雄ならば。

「甘いわね……さっき砂糖って言ったけど訂正。リオン、あんた
合成甘味料並みの甘さね、吐き気がする甘さってことよ」

ノーションが白衣に手を突っ込みながら、リオンの側まで戻り感
情の無い目で見下ろした。

「何とでも言ってお下さい。俺は選べません、こんなこと」
「じゃ、私が選んであげるわ 自業自得の村人を見殺す」

リオンがノーシヨンの長い足先を掴んだ。魔石を持って行こうとするノーシヨンを行かせまいと力を入れて掴んでいるのだが、ノーシヨンは顔色一つ変える様子は無い。

「何か言いたそうね」

「どうしてノーシヨンさんは、そう簡単に人を殺すなんて言えるんですか！」

「じゃ、聞くけど片方を殺すと言って結果的に何人かの命を助け出す方が、全員を助けたいと言って全員殺してしまう方が、どっちが優秀な人殺しかしら？」

星を背にし、無表情のままノーシヨンがリオンに尋ねる。地に伏せたままリオンは魔術師から視線を逸らした。

視線だけ落とし、リオンをその銃弾の様な眼つきで貫き続けるノーシヨン。

視線を感じながらリオンは、ノーシヨンと反対方向に向き直り、盗人達に視線を移す。

そして、地に頭を付けてこう言った。

「助けて下さい……魔石を……村の入り口まで届けて下さい！お願いします！」

二人の言い争いを聞いていた盗人達は不審な顔をした。

「あんたらしいや、あなた達に……魔石を一つ預けたい。俺は仲間を見つたらずにもう一つの魔石を届けに戻るから、村の入り口で待っている背の低いお爺さんに届けて下さい。あなた達にしか頼めないんです」

少年の予想外の言葉に啞然とする三人組。彼らは村人より金を取

ろうとした人間だ。治癒能力などない魔石だが、売ればそれなりの値になる。このまま男達が村を後にしても誰も止めることなどできない。

例え今、目の前で少年が地に頭を擦りつけて頼みこんでいようが関係のないことだ。

ノーシヨンは少年の様子を見て怒りの臨界点を突破したようだ。

「……立ちなさい」

「俺は、助けられるのに助けられないなんて嫌だ！ 助ける力がここににあるのに助けられないなんてもつと嫌だ！！ 俺だけじゃ、誰も助けられない。でも、同時に行動すれば、誰かの助けがあれば、両方助けることができる可能性は高くなるでしょ！ だから、おっさん達に手伝って欲しい。手伝って下さい！ お願いします！」

お願いします、そう繰り返される盗人達。

英雄を志しているような気高い者がする行いではない。英雄とは単体で優れているが故に英雄なのである。それこそ、一騎当千という言葉通り、一で千の価値・能力を発揮する者のことだ。

英雄が膝を屈する時、世界は滅びるに違いない。千の力で対抗できない問題に一の力を加えたところで結果は変わらないのだから。

頭を掻きむしった後、ノーシヨンが吐き捨てるように言葉を出す。

「確かに魔石一つでも月花の起動はできるわ。でも、途中で燃料切れになるのが目に見えている。二つあっても戦闘なんてしたら、五分で石が粉々になるって前に言ったわよね？ 一個で戦場に行くなんて論外、防御機能まで動力に回してようやく動く計算だし、この重たい機体で逃げに徹することができてるの？ 帰りの燃料を積まずに特攻するのと大差ないわね。自殺するぐらいなら、村の方に石を全部渡しなさい。私の言ってる言葉の意味わからないなら、もう一度はつきり言っておける……あんたじゃ、どっちも

殺すことになるわよ」

論破してやろうと思ったのか声を押し殺しながらもリオンに説明をしてやるノーション。それに対してリオンは顔だけノーションに向けて反論する。

「早くセレネを見つけることができれば、魔石の魔力をほとんど使わず月花で村の入り口まで戻れます！ セレネは月花を魔石無しで動かしていたんです、上手くいけばほとんど魔石の魔力を使わずに持ち帰ることもできます」

リオンの剣幕を超える弾幕で言葉が乱射したノーションは、リオンの頭を摘まみ上げ、思いっきり顔面を殴り飛ばした。

腕力は女性ということもありそれほど威力は無かったものの、突然の出来事だったためリオンはそのまま荒野の砂を噛むことになった。

「男なら、割り切れ！ どっちも助けるなんて無理なの！ そんなことできたら私がやってるわ！ あの無駄に広い基地で、女の子一人探すのにどれだけ時間掛かるかあんたわかってるの！？」

「だったら……だったら！！ ノーションさんが石を届けて下さいよ！ メタルフレームの足で行けばすぐじゃないですか！ 俺が月花でセレネを探します、その間に石を届けてくれれば！ そうすれば、両方助けることだってできるんじゃないですか！ 本当の用ってなんですか！ 今、この時にこれ以上の用があるんですか！！」

自分でも無茶苦茶なことを言っているとリオンとて承知している。だが、少年が知る限り、この状況を解決できそうな英雄的人物は目と鼻の先にいる悪魔の様な思考回路を持つ女性だけなのだ。

「“帝国の悪魔”それが基地を襲ってるやつを通り名。神出鬼没で帝国軍隊が単機で壊滅させられるぐらい危険な……化け物よ。アレが通った後に生きているものはいないとまで噂が独り歩きを始めている」

胸倉を掴まれているリオンは、ノーシヨンと息が届く位置で冷たい声を浴びせられる。しかし、『譲れない』といった態度だけは変えていない。

「この村にアレが来た……今ここで殺さないとチャンスは無いかもしれない。ただ確かなことは、ここで殺さないととつと大勢の人が死ぬってことだけ。だから、私はこの村人全員を見捨ててもアレを破壊しなくちゃいけない。むしろ、この村であいつが殺せればプラスよ。帝国の悪魔は、誰を見捨てても破壊しなくちゃいけない」

「誰を見捨てても破壊しなくちゃいけないのに、どうして俺を助けてくれたんですか？ どうして、今すぐにでもアルテミスで基地に行かないんですか？ ノーシヨンさんだって、人が死ぬのを見たくないから、その“帝国の悪魔”ってやつを倒しに行くんでしょ！ 馬鹿な俺を止めようとしてくれるから、まだここにいてくれるんでしょ！ だったら、誰かを殺して助ける方法じゃなくて、純粋に人を助けて下さいよ！ 今、助けられる人を助けて下さいよ！ 力があるなら助けて下さいよ！！」

ノーシヨンが鼻息を荒くしているリオンの胸倉を解放したため、自然とリオンもそれに従う。

そして、ゆっくりと目を瞑り「そうね、私には力があるわ」と嘲笑いをしながら言った後、少年の顔に術式が刻まれた右手をめり込ませる。そのため、リオンは再度、荒野の砂を噛むことになった。

「助けて助けて助けて、ってそればっか。自分でできないから人に頼る。そんな甘ったれたガキが、何かを守るとか助けるとか、ほざくな！ あんたの言ってることは、何一つ間違っちゃいない。正論よ、気持ち悪いぐらいに正論だわ。誰がどう見ても正しいと、立派だと言ってくれるわよ。でもね、誰でも知ってる正論並べるだけなら、腐った貴族でも政治家でもできんのよ」

リオンはただ茫然と横たわったまま、ノーシヨンの言葉の弾丸を浴び続ける。

「偽善で守れるものなんて、地位と名誉だけ。本気で何かを守りたければ、それ以外の全てを切り捨てなさい。その覚悟が無いなら何も守れない、両手が塞がった状態で何を守れる。何も捨てずに何が得られる」

足元に横たわる少年を見下す様に、更に言葉を投げつける。

ノーシヨンは既に眼鏡を外していた。敵の前でしか外さない眼鏡をだ。

「自分には力が無い？ 弱い自分が嫌だ？ だから、自分は何にもできないの？ ……笑わせないで。あんたは“何もできない”じゃなくて、“何もしようとしない”だけでしょ。力って言うのは上から降ってくるもんじゃないの。下から積み上げるもんなのよ。捨てる覚悟もないのに力をねだらないでくれる？ 捨てる覚悟が無いのに物を選ぼうとしないでくれる？ ……そんな覚悟で、捨てられた方はたまったもんじゃないわね」

頭から浴びさせられる針の様な鋭い言葉を無心で全て受け止めるリオン。違うと言いたいが、言葉が出せない。

今までここまで少年の心を決る言葉を吐く人物がいただろうか、

いや、いなかったであろう。

「……あなたが、英雄を目指すことに文句はない。でも、“英雄ごっこ”は、家でやりなさい。外の世界に英雄なんて便利なやつはない。神様と一緒に架空の生き物よ。ただの人間に過ぎない今のあなたにできるのは、全員殺すか片方を助けるかのどちらかだけ……セレネは死なないだろうけどね」

鋭い目でリオンを一瞥し、答えを聞く前にアルテミスへ歩を進め始めるノーション。言い争っている間にも時間は流れているのだ。いよいよノーションにも余裕が無くなってきたと言うことである。

「時間よ、私はもう行くわ。後は、リオンが決めなさい。その石はリオンのものだからね。……最後に一つだけ」

アルテミスの前で立ち止まり言葉を切るノーション。立ち止まった時に発生した砂埃が空へ舞い上がり、星空と同化していく。

岩によって閉鎖された空間は、依然として静かなまま、虫の鳴く声すらしない。

「百かゼロの選択はしない方がいい。……全員殺してしまった時、自己嫌悪で死にたくなるから」

それだけ言い捨ててノーションはアルテミスに駆け込む。

ハッチを閉め、アルテミスの起動プロセスを完了させて力強くコックピットの壁を一つ叩いた。

「……私だつて」

ノーションは舌打ちしながら、少年を殴った右手をジッと見つめ

る。幾万の命を奪ってきた呪われた手、幾万の恨みを買ってきた憎しみの手を。

誰もいないコックピットの中、ノーションはアルテミスのブースターを乱暴に踏み込み、リオンを冷たい風で突き放した。

コックピットに閉じこもった彼女は、アルテミスのブースターを何度か吹かせて岩陰を去って行く。アルテミスから発せられる感情の無いブースター音が、嘆くように遠くで叫び声をあげていた。

第39章 百か零か

ただ、金髪を見送るしかできなかったりオン。

ただ、白銀の機体が跳躍して行く姿を見届けることしかできなかったりオン。

荒野に横たわったまま放心状態になっている少年。

天を向いている左頬の痛み以外、何も考えられない状態がしばらく続く。

甘過ぎるのか

大の字に寝ころび、満月と睨みあうようにしながらそれだけを思う。

両方を助けるということは、甘過ぎるのか

天に君臨する白き瞳と地を這いずる黒き瞳の視線が交差した。

「坊主……どうして村の奴らを助けることにそこまで必死になる。

仲間がいるならそいつを助けに行けばいいだろう？ 旅人なら村

の人間なんて、一期一会、一回出会ったら、もう二度と出会うことなんてないだろうよ。俺なら、そんな一回限りの人間、助けよう

なんざ思わねえぜ、お前は頭が狂ってるんじゃないか？」

アルテミスの風圧で吹き飛ばされた結果、仰向きで口だけ動かし
ているデブが半ば笑っている。その笑みは馬鹿にしているというよ
りも、呆れたと言った風に声をあげる。

しかし、リオンは大の字に寝そべり、月を視野に入れているだけ
でデブの声に反応を見せない。

「私にも理解できませんねえ。 私たちのこともそうですが、君に
は助ける意味がないじゃないですか。 人が人を助けることができ
るのは、自分に余裕がある時だけです？ まさか、この状況で君

に余裕があるとも思えませんが、セレネというお仲間のことが大切ならそちらを取るのが普通ですよ。さっきの金髪魔術師が言っていた通り誰も君のことを恨みません。この場合、恨むであろう人は死ぬんですからねえ」

うつ伏せになっているメガネは理解できない、意味不明だと眉を寄せている。言いたいことを先に言われてしまったのか、デブの腹の上に寝そべっているチビは、被りを縦に振るだけである。

そこでようやくリオンが口を動かし始めた。

「人が人を助けるのに意味なんていらねえじゃねえか……俺は、英雄になりたいんだ。弱い人を守るような、強いやつに虐げられないような、強い英雄になりたいんだ。両方助けたいって思っちゃうダメなのか。どっちか選ばないと……ダメなのかよ」

言葉が途切れ途切れになりながらも言葉を紡ぐ。何もできない。選択できないが故に何もできない。こうしている間にも時間は過ぎ去って行く。

十代後半の少年にはあまりにも荷が重過ぎる選択だったのだろう。自分の命の実感すらしっかり持てないというのに、自分の選択で他人の命が消えるとなると選択できなくなるのも無理はないのかもしれない。

「……だらしねえ」

デブが静かに言った。その発言にチビとメガネも何かに気が付いたかのように目を見開く。

「全くもってだらしねえな、オイ！」

今度はメガネとチビにアイコンタクトを取りながらデブがはつきりと言う。

「おい、アホ坊主。土下座に対する返事がまだだったな……坊主、縄を解け。その命の半分とやら、俺達が届けてやるよ」

「……俺が時間内にセレネを見つけることができなけりや、ノーシヨンさんの言う通り、両方殺すことになる」

ノーシヨンの言葉が蘇り、胸が重たくなる感覚を味わうリオン。しかし、デブは陽気に続けた。

「坊主、英雄がよお、誰でもできることだけして英雄になれたと思ってるのか？ 不可能なことを可能にしちまうのが英雄様なんだろうがよ？ なら、やってみせろや！ 英雄に大人も子どもも関係ねえだろう！」

デブが片目で右側だけ砂まみれになっているリオンの顔を覗いた。金が何よりも大切であると主張していた彼らがいきなり、精神論を唱え始めている。リオンに銃を向けていた者達がリオンに協力しようとしている。

英雄を志す少年の純心で真つすぐな想いが、大人達に届いたのだろうか。それとも、考え直した結果、村の仲間がみすみす死ぬことを善しとできなかったのか。

いずれにせよ、少年は男達のことを信用し切れないと言った様子である。盗人に協力を申し出たのはリオンだが、こうも協力的になると何か裏があると勘ぐってしまうのも当然だった。

「あんたら……なんで、協力してくれるんだ。俺は断られると思っていたんだ、あんたらは、村の人を恨んでるんだろ？ これは村の人を助けるための石だ、あんたらを裏切ったっていう村の人をな」

汗で張り付いた砂を払い落し、顔を隠す様にして英雄志望は立ち上がる。

「坊主には……命を助けられた。俺達が命を奪おうとしていたにも関わらずな」

デブが自分の出っ張った腹を見ながら呟く。リオンとてあの時、死を覚悟していた。これからの選択を考えるとあの時、重傷を負っていた方がマシだったとさえ思う。

無事だったが故に、どちらかを選ぶ余地が生まれてしまったのだ。瀕死の重傷でも負っていれば、後ろ髪を引かれる思いをさせられるだろうが、ノーションが無理やりにも村まで送り届けてくれたかもしれない。勿論、そのまま切り捨てられる可能性もあるのだが、今のリオンにとってそこまでの思考は回せない。

「それに、魔術師の言っている通りになるなんて、いい気はしませんね。 “力は積み上げるもの” とはよく言う。魔術が使える……ただそれだけで、二百も三百も力を積み上げてきた私たちの努力は、魔術師の一撃で無に帰される。アレは積み上げられる力を元々持っていた人間だから言える言葉です。積み上げる力が元々ない私たちに適応できるはずがありません。どこまで私たちをコケにすれば気が済むのですか、魔術師という人種は！」

メガネがデブの背後から憎しみを込めて言った。続けてチビが口を開く。

「話が逸れてるっちゃ、村の人間を恨んでいないと言うと嘘になるっちゃよ。でも、よくよく考えてみれば、皆、魔術師が怖かっただけなんだと思うっちゃ。戦うか従うか、その二つしかなくてそ

れぞれ違う方を選んだ。裏切られたというより、別々の道を選んだんだっちゃよ、きつと」

チビがまとめて三人の想いをリオンに告げる。それが嘘か本当か確かめる術などない。リオンとて、これ以上迷っている時間はないのだ。どれほどの時間が経過しているか明確にはわからないが、予想以上の時間を費やしているということをリオンとて承知している。村人の命も甘生樹かんせいじゅによって尽きかけているに違いない。

セレネを探しに行くとしてもノーシヨンの援護無しで基地に侵入し、基地の近辺を探索することになるのだから、時間はいくらあっても足りないくらいだ。

それ以上に、ここまで休憩無しで動き続けてきたリオンの体は、限界を訴えかけるように痙攣けいれんを開始している。恐らく、村まで走ることは目の前にいる盗人達にしかできない。

村人を助けるならば魔石の魔力を使っではいけない。リオンが自身の足で村まで帰らないと意味が無いのだ。

「神様……あんたは、迷わせる時間もくれないのかよ。……信じなきゃ何も始まらない。信じなきゃ、信じなきゃ……信じるんだ。俺は、月花でセレネを見つけて必ず合流する、“必ず”だ」

自分に言い聞かせるように“必ず”と強く言い直し、村人の命を半分だけ男達に託す。

「出来るだけ早く……月花の魔力が無くなる前に合流する。だから、村の人達の命……今はあんたらに預ける。絶対に届けてくれ、村の入り口に背が極端に低くて、ボロ雑巾みたいな服を着ている爺さんドクターがいるはずだから、その人に渡してくれ。その爺ちゃんドクターは、医者だ」

縄を解いてもらったデブ達は「あいよ！」と威勢のいい返事をし、真剣な眼差しをコックピットに乗り込もうとしているリオンとぶつけど合う。

その目をしばらく見つめ、意を決したようにリオンは、コックピットを閉じる。その瞬間、デブが笑ったような気がしたが、リオンは見なかったことにし、震える手で月花の起動プロセスを開始する。片方の魔石を月花にセットし、セレネ無しで月花を起動した後、岩陰の外へと歩を進めさせた。

岩を削りながらの無粋な前進をしばらく続け、月と星以外何も無い荒野に進み出る。

「不可能なことを可能にするのが英雄……俺にそんなこと」

できるのか

左脳と右脳が同時に問うてくる。その結果を考えると胸が冷たくなる。

「いや、やるんだ！俺が英雄見習いなら、やらなきゃ、俺がやらなきゃいけない。俺は選んだんだ。百かゼロの選択を……力を貸してくれ、月花」

祈るように操縦桿そうじゅうかんを握りしめるリオン。この世に神も英雄もない、架空の生物だと断言していたノーシヨンの言葉を振り払うように首を振る。

魔石により送られてくる魔力をモニターに映されているメーターで確認し、操縦桿を握り直すリオン。

エネルギー残量を頭わす円グラフは、時計で言う十二時二十五分を指している。十二と二十五の間が残りエネルギー。

ノーシヨンの言っていた通り、戦闘など激しいエネルギー消費をすれば、数分でエネルギーが尽きる量であった。

もう、月花を起動した以上あの盗人達を疑っても仕方が無い。魔石を持って逃げられればそれまでのこと。村人は誰一人助かることは無いだろう。リオンは盗人にみすみす村人の命を差し出したことになるのだ。

デブが一瞬、歪な笑みを見せたことが頭の片隅にこびりついている。あれは見間違えなのか、それとも角度の問題で笑っているように見えたのか。

月花のブースターを踏み込もうとする右足が固まる。

今ならまだ引き返せる。他に方法があるかもしれない。ノーションがセレネを見つけてくれるかもしれない。

そして、本当にこれでよかったのか　と自分の胸に目にならないナイフを挟り込む。

嗚咽に似た声を飲み込み、リオンは一気にブースターを踏み込んだ。

「迷うな！　迷うな！　迷うな！！　俺は、セレネを……セレネを助けるんだ！　それから、それからあ！　村の人達をお……っ」

少年はそれ以上言葉が出せなかった。その言葉を言ってしまえば、できなかった時、立っていられないから。英雄としてではなく、人間としてこの地上に立っていられないような気がしたから、嗚咽で言葉と思いを誤魔化した。

軋むような轟音を立てて荒野を突っ切る蒼き甲冑。それは今にも崩れ落ちそうな、重く、胸に響く音だった。

余談だがその後、盗人達の姿を見た者は　誰もいない

第40章 正義の死者

砂を、風を、そして、命をブースターで吹き飛ばしながら月花は共和国軍基地を目指す。

ノーシヨンは“基地の周辺でセレネを目撃した”と言っていた。村で別れ、先程の岩場でリオンとノーシヨンが再会するまで時間はそれほど経っていない。加えて、その短時間でセレネが徒歩で移動できる範囲を推測すると基地の北側でセレネが目撃されたとは考えにくい。村から一番近い、基地の南側が最有力候補であるが、リオンが盗人とトラブルを引き起こしている間も移動し続けていたとすれば、基地の東か西にも足を伸ばすことは可能である。

これらの情報を元にまずは岩場から一番近い、基地の東側から搜索を開始しようと考えたのである。

数分も経たないうちに東ブロックの入り口へ到着したりオン。

基地の東側は、嫌な静けさと鉄が焦げた臭いに満たされている。

“部外者立ち入り禁止”と書かれていた鉄柵は、歪なS字を描いたまま地面に横たわっており、二十近く設置されている自動機関銃は全て破壊され、メタルフレームの残骸と思われる金属の破片が、点々と黒く変色している荒野の上に散らばっていた。

月花の速度を一気に落し、立ち止ったため地面に散乱した何かをゴミのように吹き飛ばして行く。

「なんだよ、これ。 盗賊なんてレベルじゃない。 基地は軍隊に襲われているのか……いや」

“悪魔”か、と冗談のようなノーシヨンの言葉を思い返して息を飲むリオン。

基地内部にカメラアイを望遠してみると、周囲には焦げた軍服と赤褐色の肉塊が肉食動物の餌のように地面に転がり落ちていた。

基地施設からは灰色の煙が舞い上がり、火の手も周っているようだ。そこは、まさに戦場の後。

リオンは、モニター越しにここでの戦闘の激しさを想像する。

銃痕と空薬きょうで埋め尽くされた砂の上を一步、また一步と月花を進出させ、ひび割れたコンクリートへ鋼鉄の足が乗ったため足音が変わり始める。

基地内部に入るとカメラで目撃した通り、朽ち果てた機体と肉体が転がっており、先程より顕著になったそれらを直視できずリオンは目を背けた。背けた先にあるのは、月花の燃料メーター。これがゼロになった時、少年もこの墓場へ仲間入りすることになるのだ。

ブースターを使用せず、セレネの搜索だけに集中すれば、後十分程度稼働するだけの残量はある。しかし、この先に何かがあるかなど、少年にわかるまい。

基地の迎撃システムが壊滅しているここ東口より数キロ先、闇で閉ざされた中央ブロックで何が起きているかなど。

立ち尽くす蒼い機体の背後で突然、何かが炸裂する音が一つ響いた。

銃声 それは、少年にとって死と直結する死神の足音である。

「ッア！ ふ……う。 ほ、放電……か。 クソッ！ 手の震えが止まらねえ」

メタルフレームの残骸が荒野より流れ入った砂と触れ合い、ただ放電しただけであることを確認し悪態をつきながら安堵するリオン。今のが本物の銃声であつたなら考えると、背筋が凍り、緊張でそのまま神経が焼け千切れそうな思いがする。逆立つ毛を寝かせ付かせつように、ゆっくり、ゆっくりと周囲をカメラアイとリーダーで確認しながら操縦桿そうじゅうかんを強く握り返す。

「この機体のサブマシンガンと、ブレード……まだ使える」

何の装備も無しに戦場に赴いていることが急に怖くなったのか、放電したメタルフレームから武器を拾い集めるリオン。

これらの武器を有事に使用できるかどうかなど関係ない。使えぬ武器でも戦場を知らない少年の気持ちを紛らわせる程度には効果はある。

「……これだけの戦闘があつたなら、いくらアイツでもこの辺りに近づこうなんて思わないはず。でも、もし中に入っていたら……誰がアイツを助けてやるんだよ、つく！」

手で胸を押さえながら急ぐ気持ちを抑える。顔に力が入ったせいか頬の痛みが蘇り、それと同時に金髪の魔術師の言葉を思い返す。

ノーシヨンに指摘された通り、この広い基地内で女の子一人探すことは困難極まりない。まして、戦闘のプロが潜む未知なる土地へ踏み込むなど愚の骨頂である。ノーシヨンはセレネを基地周辺で目撃したと言っていたのだ。セレネとて、無意味に危険しかない基地の中に入るようなことはしないはずである。

ならば、基地周辺の南と西を月花で周り、セレネを探すことが一番現実的な手段ということだ。

だが、頭で理解しているつもりでも、最悪の事態ばかり頭を過る少年の脳内では現実的な手段が最善でないと思い始めている。

「俺は戦闘ができないんだぞ……武器があつてもこれ以上進むのは無理だ。無理なんだ！」

不可能なことを可能にする者が英雄である、盗人はそう言っていた。そして、リオンも心のどこかでそうであると、自分がそうでありたいと願ってきた。

不可能とも無謀とも言われる英雄的行動を起こし、人が助かる。それと引き換えに自分が死ぬことになったとしてもそれはそれでいい。人々に感謝されて散るなんてなんと英雄的な死に様だろうか。しかし、現状は違った。

身の丈に合わない行動をすれば、数え切れない、掛け替えのない人間が死ぬだけなのだ。今、月花が撃破されるようなことがあれば、村人を助けるための魔石も失い、セレネも救うこともできない。背負っている命の重さがリオンの突き走る気持ちをかろうじて抑え込んでいる。いや、抑え込むしかない。

「南側に……いてくれよ！」

リオンは、サブマシンガンを腰に鉄製のブレードを月花の背中に収納し、ブースターを吹かせ次の搜索ポイントに移動を開始した。

ちょうどリオンが立っていた基地の東ブロック。そこから基地内の闇を抜けた先、中央ブロックでは悪魔が待っていた。否、舞っていた。

「少尉い！」

もう幾つ目になるか、数えることすら忘れてしまう程の断絶魔がこの場にはあった。

黒一色。それは軍人の心理か、それは追い詰められても尚、人を殺し続ける機体の色か。

悪魔は、まだ生きていた。悪魔の右手には刃に赤色の筋が走った嫌悪の剣、半壊した左手には刃に黄色の筋が走った憎悪の剣が握られている。
アインス
ツヴァイ

そう、帝国の悪魔は窮地に立たされたにも関わらず、もう一振りの愛剣・憎悪の剣を回収することに成功していたのだった。

「絶対に殺すな！ アイツは、アイツは……生きて捕獲しろ。奴の言っていることが本当なら……お前らの命なんて何百あっても足りねえ価値があんだよ！」

『ですが、そんなことをしては我が部隊は……相手は“帝国の悪魔”です。ここで仕留めなければ 』

ハンスタに異論を唱える一機のメタルフレーム。兵士が言葉を言い終える前に、ハンスタは 魔科学兵器の引き金を引いた

「……二階級特進でたった今、あなたは私の上官になった。まだ、文句がおりでしたらお伺いしますが？ マグナス中尉殿？」

膝を付き、胸に風穴が開いたメタルフレームはハンスタに何か言おうと手を向けるが、時が来た。

「……なるほど、異論はないようですね」

爆発音が響く中、ハンスタは笑みを零す。人の皮を被った悪魔はここにもいた。

己が目的のためならば、味方であろうと殺す。ハンスタにとって部下はコマでしかないのかもしれない。

コックピット内で自機を蹴り飛ばすハンスタは、興奮で感情の臨界点を突破しているようだ。先の尖がったサングラスもコックピット内のどこかに投げ捨てており、露わになった吊り目でモニターに映る漆黒の機体を串刺している。

ハンスタは圧倒的数で悪魔を追い詰めることに成功し、トドメを刺そうとしたその瞬間、弾を外した。少尉ともあろう人間が新米兵

士でも狙いを付けることが可能であろう距離で魔科学兵器の弾を外したのだ。

その時、配下の兵士達は、ハンスタがいつものように殺せる敵を驚かせて遊んでいるだけと思ったことだろう。はたまた、時間をかけてゆっくりなぶり殺すつもりなのか、などと自軍の絶対勝利を信じて疑わなかったはずだ。

しかし、弾を発射した本人はそうでなかったらしい。

というのもハンスタが、“帝国の悪魔”の正体と目的を問いただした時、ゼロと名乗る人物はこう答えていたのだ。

『絶望の淵から蘇った、正義の死者とでも言っておこうか……』

四方から銃口を向けられた状態で、不敵に笑うゼロ。追い詰めているのはゼロの方ではないかと思わされる程、余裕のある笑みを見せる悪魔の声が戦場に響く。

「は！ 減らず口を。」

……あくまで俺の憶測だが……お前のその魔力
ホムンクルス人間じゃねえな。人造人間か？ いや、まさか……ヘクゼクルス人造魔女

か！」

『……さあ』

感情のない声、造りモノがただ言葉を並べただけのような口調の持ち主は、ハンスタの油断した瞬間を逃さず、急加速しながらハンスタの背後に刺さっている剣を抜き去ったのだった。

その後ハンスタは“撃破”から“捕獲”に命令を変更したため、隊は見る見るうちに壊滅状態になり今に至る。

テンサウザンド・ベルゼブブから黒い機体がどこまで戦えるのか性能テストをするような目で、悪魔の勇士を眺めているハンスタ。そして、部下が次々と殺されるという状況下で楽しそうに声を上げた。

「ああそうかあ。わかったぞ、カブトムシ野郎。お前、ハハツ！ヘクセクルスだろう？それならその強さにも納得だ。それに、帝国軍がめえを撃墜できなかった理由も恐らくソレだ。てめえを突き出す場所が場所なら、金なんて燃やして捨てるぐらい手に入る。だからよお、いい加減大人しく捕まれや！俺の悪いようにはしねえからよ！！」

目の前の敵を斬り捨てる正義の死者か、部下の命をも切り捨てるハNSTAか。

彼らの戦闘はハNSTAの優勢のまま続いている。

第41章 シリス

基地周辺南部。そこは変死体が見つかった場所であり、村唯一の舗装された道であり、基地と村を繋ぐ地点である。

そこに一つの機影が現れた。計六つものブースターを搭載した重厚な蒼きメタルフレーム・月花だ。腰に仕込ませた黒いサブマシンガンと背負っている鉄製ブレードは、機体の蒼色に溶け込めておらず、飾り気のない灰色が露骨に浮き出していた。

「燃料が勿体無い。この辺りまで来れば、歩行で十分だ」

ようやく月花の操縦に慣れてきたのか、リオンは手際よくブースターの速度を調整し、歩行モードに切り替える。こんな状況で念願のサウザンドの操縦に馴染み始めるなど少年にとって皮肉でしか無いであろう。

荒野の砂を巻き上げながら、舗装された道へ停止することに成功したりリオンは次に、リーダーで生体反応があるかを調べるため、キーボードを打ち込む。

東ブロックから南ブロックという数十分の移動中に思考錯誤した結果、リオンは、リーダーの切り替えを行う術を得ていた。月花の戦闘機能はまるで理解することはできなかったが、生体反応を探るリーダーなどが使えるようになったことは、リオンにとってかなりの進歩である。

データ取得中《loading》という表示がモニターの中を満たしていたが、しばらくすると電子音と共に映像が映し出された。

「三次元リーダー……生体反応探索って……どんな原理かわかんねえけど、やっぱお前はすげえよ。これがあれば、セレネを見つかるのもそう時間は掛からないはずだ。ここで見つけることができる

れば
」

村の人間も助けることができる　口には出さず、魔石の残量を一目見て、自らを鼓舞するリオン。

画面に映し出されている映像は、緑と黄色の線で描き出され平面世界。真ん中には、月花と思われる点が記されている。

リーダーから反応が返ってこないということは、今の探知範囲に人がいないということである。画面上に造り出された世界を見やりながら、リオンはさらに探知範囲を広げる。

「……反応があつた！　ん？　二つ？　これは、村外れの建物……か」

セレネしか眼中になかったリオンにとって、二つもの反応が出ていることは思ってもいなかったのだらう。しかし、冷静になって考えてみればセレネではなく、単に村から逃げ遅れた人である可能性もある。その中にセレネがいるかどうかは、別として人がいるなら避難の手伝いをするべきである。

すぐさま月花を動かし、人体反応があつた村外れの建物まで月花で移動をするリオン。

しばらく歩行を続けると、リーダー反応があつたと思われる木製の小屋が暗闇の中で目視できるようになってくる。そして小屋の前に佇む人影をカメラアイで確認したリオンは、月花に片足を付かせてコックピットから飛び降りた。

腰辺りまで長く伸びた蒼い髪は、二人としない。小屋の中に佇んでいる少女はセレネに違いない。

そう思うとリオンは叫んでいた。

「セレネエ！！　セレネ！　俺だ、リオンだ！　おい、セレネ！」

縛れる足にも構わず全速力で蒼髪の女性の元へ駆ける。探していた人物をようやく見つけた。そんな達成感や幸福感に満たされたのも束の間、視覚から流し込まれる情報に少年の体は強張った。

振り返ったセレネは血塗れで、血を吸いこんで黒くなった服と前髪が風でなびく。

リオンの顔を確認すると、セレネは助けを求めるようにリオンにしがみ付いて来た。

「リオン！ 早く来てくれ、血が……血が止まらないんだ！」

リオンは咄嗟にセレネの体を確認するが、胸の中にいるセレネは怪我をしていない。では、この生温かい大量の血液はどこから滴り落ちて来るといいのか。

「よかった……怪我はないんだな、心配かけやがって。じゃ、この血はどこから――」

思考を凝らしていると、血が付着した蒼髪の向こう側に黒い長髪の女性が一人、腹を抱えるように丸まっている。地面を見ると血で水たまりができており、水たまりから赤い足跡がリオンの前まで付いていることから、おおよその見当を付けることが出来たリオン。

すぐさま、うずくまっている女性の元まで掛けて行き、様態を確認した。

「っ……シリス……。おい、しっかりしろ！ セレネ、月花の後部座席に包帯とか薬草とか……。あれだあれ、救急箱！ あったよな？ それを持ってきてくれ！」

血を流している女性の顔を見て一瞬戸惑ったリオンだったが、すぐさまセレネに指示を出す。

セレネが持ってきた木製の救急箱を手にとったリオンは、考えられる限りの手当てを施した。

幸いにもシリスの腹にナイフが突き刺さっている以外、最近付けられたであろう外傷は無かったため、血止めの薬草と消毒作用のある薬草をありったけ使い切ることで一命を取り留めることが出来た。もし、この場にノーションかドクターMがいればと悲観していたリオンだったが、シリスの呼吸が安定してきたことを確認でき、安堵する。

そして、リオンとセレネはしばらく祈る様にシリスの回復を待っていた。

「……うう、あ、れ？ 私は……いたっ」

「よかった！ 一時はどうなるかと思っただけど、薬草がかなり効いたみたいだ。さすが、姉ちゃんが集めてくれた薬草達だぜ」

「私も薬草を塗った……私も褒める」

シリスが目覚めると同時に、物置と思われる離れ小屋内が賑やかになる。リオンは、程良い広さの台に乗っているガラクタを全て払い落とし、シリスをそこに寝かせていた。そのため、台の周辺には本や、穴のあいた籠などが散らかっている。

水汲み桶を逆さにして椅子代わりにしているリオンは、シリスの顔を覗き込んで、喜びの声を上げている。

ぬっ、とリオンに頭を差し出すセレネだが、頭を突き出し過ぎた結果、リオンの顎に頭突きをかましていた。

涙目になりながらセレネの頭を抑えつるリオンは、無理に起きあがろうとするシリスを止めに入る。

「まだ、動くなよ！ かなり深くまでナイフが刺さってたから、しばらく安静にしておいた方がいい。後は、月花で爺ちゃん連れてくるから、それまで大人しくこの小屋で待っていてくれ。つてえ、

マジでいてえ……このアホ、セレネ！ 俺に何の恨みがあんだよ」

シリスの頭に優しく手を乗せ、赤くなった顎を擦りながらにこやかに笑うリオン。そして、シリスの頭に乗っている手を恨めしそうに眺めるセレネ。

セレネを思いのほか早く探すことができ、月花の魔力もかなり残っている状態だったためか、リオンは心に余裕があるように見える。

「南側まで月花を移動させて、じいじいを連れてくればいいんだな？」

頬を膨らませながら、セレネが小屋の入口まで勢いよく行進していく。それを不思議そうに見送るリオン。

シリスが眠っている間、セレネに事情を説明しておいたリオンだが、念のため小屋の外に出向いて付け加えた。

「魔石を爺ちゃんに渡して、村の人達の治療が済んでから連れてくるんだぞ！ それまで俺がシリスを看病しておくけど、なるべく急いでくれ！」

「わかってるぞ！ 同じことを何回も言うな、私はお前と違ってアホではない！ ……私が心配だったというのは嘘なのか、全く」

リオンに聞こえない大きさで、いじけたような言葉を出すセレネは、素早く月花に搭乗し、コックピットを閉めようとした。

ふとセレネが視線を下ろすと、頬をかりかりと掻きながら視線のおぼつかないリオンがセレネを見上げている。

「セレネ……早く戻ってこいよ。 もう、あんな思いするのはこりごりだ」

「ん……心配をかけてすまない。 なぁリオン……後で、色々話し

ておきたいことがある。今はシリスの側に戻ってやってくれ」

見上げる少年と見下げる少女。二人がこうして言葉を交わし合うのは、数時間ぶりなのだが、リオンにとっては果てしなく長い時が流れたようにさえ思う。

村人のためとはいえ、せつかく再び出会えたセレネを一人で村の南部まで行かせることは不安であるが、やらねばならない。

村人を助けたいと思った、ドクターMに託された、そして、盗人達と約束した。

リオンは、少し大きめの操縦席に座る少女へ握り拳を向け、「また後で」と無事を祈る。首を傾げながらその動作を見やり、コックピットを閉めるセレネ。しかし、その顔はどこか満足げで、リオンの心を柔らかく、温かくさせた。

やがて月花は進路を定めブースターで去る。

一命を取り留めたシリスだが、まだ安心はできない。できることならば、医者に見せた方が良いに決まっている。

月花にシリスを乗せてドクターMが待っている南部まで運ぶこともリオンは考えたが、傷が深い人物を機体に乗せるなど危険である。万が一、戦闘でも発生すれば打つ手はなくなるだろう。

そこで、リオンが提案した案は、魔石を消費せず月花を動かせるセレネが月花で村の南部まで行き、魔石を渡す。その後、村人達の治療を終えたドクターMを月花に乗せてこの小屋まで来てもらおうというものだ。

シリスの様態は今や一刻を争うような事態ではない。出血も止まっており、恐らく会話も少し程度ならばできる程まで回復している。ドクターMが生命力を吸い取るかんせいじゅ甘生樹の毒を抜くまで数十秒掛からないことを確認済みであるリオンは、村人全員の治療にそれほど時間は掛からないと踏んでいる。

思考を巡らせ、セレネが戻ってくる時間を推測しながら、再びシリスが横になっている物置き小屋に入ったりオン。

「リオンさん、少しお話……聞いてくれますか」

シリスの側にある桶に腰を掛けた時、唐突に声を浴びせられ、戸惑いを覚え思考が止まった。

「ん？ 怪我が治ったらまた聞くよ。今は横になってた方が」

「いいえ、今でないと……忘れてしまいそうだから」

真剣な目つきをするシリスに負けて、シリスの手を引っ張りながら台に座らせるリオン。礼を一言述べた後シリスは、さっそく本題に入った。

「私が考えたお話を聞いて欲しいんです。　タオ……弟がよく私の作った話を楽しみに聞いてくれていて、リオンさんに今考えたお話を聞いてもらって感想を聞けたらいいなあ……なんて」

言うのがよほど恥ずかしかったのか、顔を伏せながらしどろもどろとしているシリス。あまりに真剣な目をして訴えかけてくるものだから、身構えていたリオンだったが、シリスの様子を見て顔がほころぶのであった。

「セレネと爺ちゃんが来るまで時間もあるし、シリスがそうしたいって言うなら。でも、気分が悪くなったり、傷が痛むようならすぐに中止してもらうからね」

リオンの言葉を聞いて心底嬉しそうに返事をするシリス。こんなことでよければ、いくらでもしてあげたいと思い、シリスの体をゆっくりと起こすリオン。

「では さつそく」

恥ずかしそうに咳払いをして、シリスは語り始めた。

それは傷を負い続ける少女の物語

物語の始まりは戦争で両親を失った少女とその弟が、街の片隅で支え合いながらも強くたくましく生き抜くという内容だ。

子どもに聞かせる話ということで、窮地に陥ると魔法が出てきたり、王子様が出てきたりと奇跡やロマンチックなことが起こり、少女を助けるものだとばかり思っていたりオンだが、登場するものは車や、姉弟に食べ物分け与えてくれる優しき街の人々、学校に通う子どもたちを遠くから眺める弟の話など、やけに現実的なものばかりだった。

共和国育ちのリオンにとって、何よりウインド村育ちのリオンにとつて、車というものは、魔法のそれと大して変わらないぐらい奇怪な機械であつたため、非現実的といえば非現実的である。

シリスの語り方があまりにも魅力的だったということもあるだろうが、貧しくも幸せに生きている姉と弟の話はリオンとマリアを思わせ、リオンはシリスの話の虜になってゆく。

辛いことがあっても姉である齡十才の少女は、弟に“神様がちゃんと見てくれているから大丈夫、お金がなくてもきつと幸せになれる”と言い聞かせていた。

しかし、そんな小さな幸せは長く続かなかつた。姉弟を引き裂く事件が起こるのだ。

貴族の少年が、自分の犯した罪をたまたま近くにいた貧しい少女に被せた。貧しく、学の無い少女と裕福で将来を期待されている少年の言うことでは後者の方が力を持っているのだそうだ。

少女は身に覚えのない罪を、頑なに認めなかつた。認めれば誰が弟の面倒を見るのだ、認めれば自分の将来はどうなってしまうのだと首を縦に振ることはしなかつたのだ。

だが、弟まで共犯者として扱われるようになって言われ、少女は

遂に犯罪を認めた。弟を盾にされれば、少女は首を縦に振るしかなかった。

冷静になって捜査をすれば、少女が無実であるとわかるはずなのだが、捜査は行われなかった。代わりに行われたのは情報の“操作”だけ。

自ら容疑を認めて釈放された少女に対して、世間の目は冷たかった。食べ物を分けてくれていた人々からも犯罪者として見捨てられ、少女達を保護してくれる人などいない。だが、彼女はそれらを全て受け入れた“神様からの試練だ”と思い、いつかわかってくれる人が現れるそう信じて。

しかし、神様は厳しかった。路頭に迷う姉弟は、更に身に覚えのない罪で捕まる。一度あることは三度あると街中の人間が少女に対して思った。そして、それと同じことを少女は貴族の人間に思った。そうして気が付いた頃には、少女は犯罪者としてしか見られなくなり、街を堂々と歩くことすらできなくなったのだ。

「馬鹿な少女はそこまで堕ちてやっと気付いたのです。“この世に神様は、いない”と。いるのは汚い貴族そして、少女をどう弄ぶかしか考えていない男だけ。それを打破できるのは、お金なのだ。神様は貢物が多い人達しか見てくれないのだと気付いたのです」

少女と一緒にいては弟までダメになってしまう。教会に行けば保護してもらえると知った少女は、弟だけ教会に残し、闇の世界へと帰った。お金を稼ぎ、いつか貴族をも凌ぐお金持ちになって堂々と迎え来ると小さな胸に少女は誓い、姿を消したのだ。

一方、光の当たる所では、学を付け、食べ物を食い散らかす本当の犯罪者が堂々と歩いている。

そんな姿を目にする度に少女は、殺意に駆られた。しかし、貴族達は簡単に殺されるような環境にいない。家のセキュリティも万全、

守衛がいる家だつてある。

「シリス……この話、本当に」

「お願いです。最後まで……聞いて下さい。聞くだけで構いません。聞いた後……忘れて下さつて結構です。だから……」

そう言うシリスにリオンは、頷くしかできない。恐らくこれは、弟に聞かせたい話などではない。リオンに聞かせたい話なのだ。そして、この名も無い物語の少女は。

「神様を信じなくなった少女は、お金欲しさにあらゆる犯罪を繰り返します。最初は軽いものばかりでしたが、結局、行き着いた最もお金を稼げる仕事は要人の暗殺。皮肉にもあれ程殺したいと思つていた貴族を殺すことでお金が貰える仕事を見つけてしまったんです。軍や貴族が公にできない暗殺を肩代わりする。一人殺せば二十万キャン以上のお金が貰えます。その世界では、過激な戦争は終わり、冷戦に移行したため、軍は実質的な戦力よりも邪魔者を排除してくれる人間を欲していました。体売るより遥かに高額なお金を貰え、仲間と呼べる人間ができたため、どんな厳しいセキリティも突破し、確実に標的を仕留める暗殺者として少女は裏社会で名を馳せました。五年もすれば少女にも弟を養うだけの十分なお金が集まりましたよ」

犯罪をしていなくても犯罪者になる。それならば、犯罪をしてもなくても変わらない。神様は貧しさに耐えながらもルールを守っている人間ではなく、堂々とルールを破る貴族達を守った。ならば、少女もルールを破り、金を稼ごうと思うのも無理はない。

そこでリオンは思う。それは幼き頃の少女が自ら求めた将来の姿だったのか。そのように成長した少女の姿を見て喜んだのは誰か。邪魔者を排除してくれる雇い主の貴族ではないのか、優秀な駒が使

える軍人だけじゃないのかと。誰も少女の幸せなど祈っていなかったであろう。せめて彼女の弟だけは姉の幸せを祈っていて欲しいと思うリオン。

「しかし、少女は弟と二度と会えなくなりました。少女は時間を掛け過ぎたのです。少女がお金を稼いでいる間に、彼は神父になっちゃったんですよ。殺人犯の姉と神父の弟、会えるはずがありません。それ以来少女は個人的な依頼は一切受けず、平和を守るため、国を守るため、軍に入りました。やることは同じ。命令を受けて、殺して殺して、また殺して……そうやって彼女なりに国を守り続けたのです。彼女にとって国を守る術は……弟を守る術でもありますから」

「そんなことしなくても、その女の子は堂々と弟を迎えに行つて二人で暮らせばよかったんじゃないか？ 弟だつて姉ちゃんの話聞けばきつとわかつてくれるだろ。まして神父なら、罪を許すはずだ」

教会の神父とはそういうものだとしリオンは理解している。かつてウインド村にいた神父もそうだったように。

しかし、リオンは次にシリスから帰ってきた返答に、何も言えなくなる。

「莫大なお金を抱えて少女が迎えに行つた時、すっかり成長しきつた弟は教会にやってくる貧しい子ども達に、笑顔でこう教えていたんですよ。“神様がちゃんと見てくれるから大丈夫、お金がなくてもきつと幸せになれる”って」

いつかの少女が彼にいつも言っていた言葉。まだ、少女が神という存在を信じていた時の言葉を彼は、未だに信じていたということか。

結果的に目に見えない多くの人間を救い続けてきた姉。目に写る全ての人間を救おうとしている弟。彼らの行いは似ているようで似ていない。月と太陽のような違いがある。

依頼次第で罪の無い人間を殺す者と無条件で罪のある人間を許す者。

一方で、彼女は薄々勘づいていた。今まで行ってきた軍の任務ですら、全て貴族の利己的なものばかりだと。国の正義などどこにもない。救われた目に見えない人間とは、全て、あぐらをかいている貴族。自分が本当に助けたかった部類の人間はそこにはいない。

彼女は金欲しさに殺しをしてきたとようやく気が付く。弟を守る手段など大義名分を掲げ、金を貴族から巻き上げていただけなのだ。なぜなら彼女は、軍に入ったというのに“共和国の人間を一人も殺していなかった”のだ。

そんな自分では弟に顔向けできないと悟った少女だが、もう後戻りはできなかった。その身は既に国に捧げたものだ。今更、犯罪者に戻るわけにもいかない。

「もう……いい。シリス、これはお前の話……だろ？ お前が辿った物語なんだろう？」

「そして、少女は生まれて初めて、敵国の共和国に入国することが決まります。帝国の脅威を殺すために入国したんです。今までとは違う！ 本当に、帝国に住む全ての人のためになる、そんな標的が現れたんです」

リオンが語りを止めないシリスの手を優しく握ると同時に、シリスの瞳から涙がこぼれ始める。

「でも、帝国の脅威を倒すために送り込まれた少女……は、失敗しました。だから、帝国百万の人達のために死ななければ……いけないんです」

「死なくていい！　どうしてお前が死なくちゃいけない！　シリスは幸せにならなくちゃ……そんな世界は嘘だろ」

強く手を握りしめるリオンに対してシリスは首を横に振る。

「隠密が入国したことが共和国軍にバレていました……完璧に私たちは入国したのに、あなたのおかげで共和国軍に悟られるのは、任務が終えた後だったはずなのに」

「それって、どういう意味だ」

「ハンスタ少尉……女の子を捕まえるとしばらく基地から出てこないですよ。だから、村の警備兵も気が抜けて、村にやってこなくなる。その間に、標的に奇襲をかけて倒すというのが人数の減った私たちの苦肉の策でした」

リオンがハンスタとトラブルを引き起こしたため、隠密達の策は失敗した。警備兵がはびこる村の中では隠密達は集団行動が取れない。魔術師相手に一对一では勝ち目はないのだから、隠密は集団で攻撃をしかけるチャンスが必要だったのだ。

「そんな……俺のせいで」

呟くりオンだが、もし、隠密が集団行動を取っていたならば、ノーションとドクターMが殺されていたかもしれないのだ。そして、恐らく二人と一緒にいたリオンとセレネも例外ではないであろう。

「でも、俺があいつを止めなかったら、シリスがどんな目に遭ったか！」

「国からの“任務”だから仕方ないですよ、それに何をされても……もう慣れてますから。治療して下さったリオンさんは、見たでしょう私の……体」

悲しげに声を漏らし、肩を抱くように縮こまるシリリス。その仕草はとても暗殺者には見えなかった。リオンには、ただ力の無い一人の少女にしか見えない。

そんな少女の姿を見て、リオンは咄嗟に声を上げた。

「そんなこと言うな……もつと自分を大切にしろ！ お前の弟もきつとそんなこと望んじやいない……姉ちゃんがそんな辛い目にあつて喜ぶ弟なんているわけねえだろ！！ 今すぐ弟に会いに行けばいい！ 命令とか任務とかよくわかんねえけど、シリリスがしたいようにすればいいんだ！ お前の罪は……許されないことかもしれないけど、許されるべきなんだ！」

血の付いたシリリスの服を見つめ、傷ついた体を思い出す。シリリスの体は傷跡だらけだったのだ。ナイフで抉られたものだけではなく、弾痕のような丸い形の後も無数にあった。

シリスの弟が神父であろうが関係ない。弟ならば、家族ならば、お互いに幸せでいて欲しいと思うことが自然だろう。

彼女の体を見れば、どれだけの修羅場を掻い潜ってきたのか容易に想像できるはずだ。心を痛めるはずだ。

シリスが怪我人ということを意識しているため、リオンもあまり問い詰める様な事は言えない。

真剣にシリスのことを考えての発言だったが、リオンの顔を見ながらシリスはくすくすと笑う。

「ふふ、やっぱり、リオンさんは優しい方です……私とは違う、光に溢れた世界の人。 不謹慎かもしれませんが、リオンさんが、ハNSTA少尉から私を守ってくれた時、嬉しかったんです。 私は今まで守ってばかりで、守られたことがなかったですから……ああ、こういうのが普通の女の子が思う感情なのかなあって、少しだけ思

うことができたんです」

言い終わるとすぐにシリスは吐血し始めた。リオンにもたれ掛かるように倒れてくるシリスを受け止め、傷が開いたのかと服をまくる。

「すみません……私の血、服に付けちゃいましたね」

「傷は広がってない。何でだ、何で！ シリス、他にも怪我してたのか！」

シリスの背中や腕などを確認し怪我を探すリオンの手を両手で包みこむように握るシリス。

「他にどこも怪我はしていませんよ。さっき飲んだ薬が……やつと効いてきただけです。つう、ふっ……戦争を止めることができます。魔法の薬、最後に神様が残しておいてくれたみたいです。こんな犯罪者にも慈悲の御心が頂けたようで」

呼吸が乱れ始めているシリスにリオンは成す術が無い。恐らくリオンがセレネを見送りに行っている間に、体のどこかに忍ばせていた自決薬を飲んだのだろう。

その覚悟に息を飲むリオン。国のために死ぬなんて到底自分にはできない。

「共和国から“隠密を見つけ次第、休戦協定を切る”と本部に連絡が来しました。帝国の隠密は、ここにはいなかったことにしなければ……いけません……。大半が魔術師に殺されたからいいのですが、ここに一人まだ生きている隠密がいます」

「馬鹿！ 国のために死ぬなんて……そんなこと」

「今の私は軍人です。私がもし、共和国軍に生きたまま捕まれば、

戦争が起こります。多くの人が……弟も死ぬかもしれない。姿を見ただけならば本国がどうか誤魔化すと思いますが、私が捕らえられて魔術で自白させられればどうなるか……。あの魔術師に殺されれば、身元不明の死体になれたのですが、私は死にきれませんでした。だから、こうやって……自決するしか、ないんです」

肩で息をしながら一気に言葉を言い終えたシリスは、リオンの腕を離れ、ぐったりと眠る様に柱にもたれ掛かる。口に付いた血を拭う力すら残されていないのか、虚ろな目でリオンを見上げている。

「国から……私に下された最後の任務は“村娘として自害しろ”……だから、“村娘”として、リオンさんに私のことを知ってもらおうと思うのは……欲張りだったでしょうか……記録には残らないけれど、せめて記憶に残ることができればいいと……なんだかこのまま死ぬと思うと……急に寂しくなって、勝手なことばかり……言っ
って」

ごめんなさい

そう口が動いたように見えた。少女の体から体温が失われていく。夜の空気が体温を全て吸い上げて行く。

黒髪の少年は黒髪の少女をゆっくりと温めるように抱きしめた。泣いてなどいない。決して、泣いてなど。彼女は、自らの使命を、助けたい人を、自らの命を犠牲にして守ったのだから。

それは幸せに違いないのだ。だからこそ、こんなにも安らかな顔をして眠りについた。だから、少年が泣く必要などないのだ。

「……ああ、忘れない。絶対に」

守ってばかりで、守られたことの無い少女。そして、最後は守っているモノに、死ねと告げられた少女。

国から捨てられた少女は、それでも最後まで国を、弟を守ろうとし、主の命令を全うした。

一人が自決することで、帝国百万の人間が守られる。実に、実に理にかなった犠牲ではないか。自らを犯罪者と言っていた少女の理念は本物だ。だが、大義を成し遂げた犯罪者の彼女が称えられることはない。

墓も、彼女の事を思い出す人もいない。いや、彼女の事を思い出す人物はいる。黒髪の少年と彼女の弟。彼らが生きている限り、彼らの中で少女は、“少女”でいられるだろう。

「シリス……お疲れ様」

リオンは傷を負い続ける少女からそつと離れ、祈りを捧げる。どうか、天国に行かせてやって欲しいと。

そして、後少しだけ、もう少しだけ世界が少女に優しくければと。

第41章 シリス（後書き）

ここまで読んで下さった方、本当にありがとうございます！

まだまだ、続くのですが、誠に勝手ながらしばらく更新を停止いたします。

卒業できないという状況に陥りまして……詳しくは10月11日（14時24分）の活動報告に載せてありますので、興味のある方はそちらをご覧ください。

拙作の物語は完結させたいですし、打ち切るつもりはありませんので、ご安心ください。

第42章 散りゆく者（前書き）

ご無沙汰しております！

拙作の更新をこんなに長い間、待って下さっていた方、心より感謝いたします！

ようやく更新することができました。

2万字を消して、書き直したのがコレですw

おこきの実力は、そんなものです

第42章 散りゆく者

月に照らされた闇が道を開く。その道の上に蒼はいた。

六つの大型ブースターを巧みに操り、静まり返った村の側を猛烈な速度で駆け抜けて行く月花。

見る見る内に景色が流れ月花は目的地に到着する。

背中のブースターから魔力による炎が消え去り、慣性だけで荒野を滑るメタルフレーム。両脚部に装備されたパイルバンカーを地に突き刺し無理やり速度を抑え込んでいるようだ。

地中深くで土の抉れる音をくぐもらせながら静止した蒼き騎士。そのコックピットから機体と同じ色の髪をたなびかせた少女が、颯爽と降りたつ。

「じいじい！ リオンに言われて魔石を持ってきたぞ」

「なんと、セレネじゃったか！ ぬっ、その血は何じゃ！ 怪我をしおったのか？ 早く手当てを」

「これは私の血じゃない。私の血であつたとしても私は……魔女だ。ん、これが預かって来た魔石だ」

血が付着して黒く変色している服を見てドクターMは声を強めたが、セレネの魔女という言葉聞いて察したようだ。

魔女から差し出される赤い石を両手で受け取り、話を戻す老人。

「魔女か……そうじゃったな。おお、これじゃこの魔石じゃ！ 待ちに待ったぞ。これで治療ができる。そういえばリオンは一緒ではないのか？」

荒野を走る蒼い機体を目撃し、村の入り口へ出迎えに来ていたハゲ頭の老人は目を丸くしている。

ドクターMが村人の命を繋ぐ魔石を取りに行くことを任せたのは、黒髪の少年だったのだ。行方不明だった蒼髪の少女が突然メタルフレームと共に、しかも魔石を持って登場したとなれば疑問を抱くのも無理はない。

「リオンは村の北側で見つけた怪我人を看ている。ナイフが腹の深くまで刺さっていたんだ。血は何とか止まったけど、ここが終わったらすぐに見て欲しい。私が月花でじいじいを運ぶ」

「あいわかった！ ここのもんを見た後すぐに行く。ところで……魔石はこれだけか？」

セレネから手渡された赤い石と少女の蒼い瞳を見比べながらドクターMは深刻そうな顔をする。

「ああ、そうだぞ。月花の魔石は私が乗った時には一つしかなかった」

「リオンから預かった魔石はこれだけなのか？ 本当にもう一つなかったのか？」

勢いよく足元に詰め寄り、肩や腰を這いまわりながら何かを探している老人の問いに対してセレネは冷静に答える。

「月花の魔石を届ければ、魔石が揃うと聞いていたぞ？ “協力してくれたおっさんが魔石を届けているはずだから”とか何とか言っていたが。……足りないのか？」

「そんな者は来ておらん。魔力も全然足りん。この魔石の魔力は尽きかけておる……。使いさしでどこまでできるかわからんが、やれるところまでやった後、リオンに事情を聞きに行く。リオンが看とる怪我人の状態も気になるでな。怪我ならば早急に手当てをする必要がある」

セレネに首根っこを摘ままれ、宙ぶらりんの老人は細い目を更に細めながら苦肉の策を提案した。

「セレネ、すぐに月花を発進できるようここでスタンバイしておいてくれんか。状態の悪いもんだけ治療したらずぐ戻る。リオンとその怪我人の元へワシを運んで欲しい」

「わかった。他にも私に手伝えることがあれば言ってくれ」

セレネの手から解放されたドクターMは、魔力残量が少ない魔石を両手で包むように持ち、村の中に駆けて行った。

「リオン！ 怪我人はどこじゃ？」

「爺ちゃん……」

村外れのボロ小屋に到着するや否や、勢いよく扉を開けて声を上げる老人。

埃が舞い上がり、夜の世界を照らしている月光がレースの様に部屋に差し込む。

「怪我人はもういない」

「どついう、意味じゃ？」

台の上で横になっている人物と、その手を握ってうずくまっている少年。二人を見比べ、部屋を見回すドクターM。

老人が人を探している様子を感じ取り、リオンは重たい口を開く

ことにした。

「少し前に」

死んだ、と喉の奥を詰まらせるリオン。

鉄の様に冷たくなつた彼女の手からもう生気を感じられない。

彼女は死んだ。それは間違いのない事実。

「そんな……どういうことだ。 どういうことなんだリオン！」

遅れて入って来たセレネが老人を抜かして、リオンに詰め寄る。

その声はどこか震えていた。

「出て行く前には、血も止まって会話もできたじゃないか！ どうして、なんで……」

リオンの肩を揺らして、ふと黒髪の少女を見たセレネはぺたりと床に腰を付く。

自身の袖口に付着している彼女の乾いた血を眺め、セレネは座り込んだまま両手を開いて見ている。

台をよじ登り、シリスの顔を確認したドクターM。

「今だから言うがリオン……この娘っ子は」

「……帝国の隠密だった」

老人が言い終わる前にリオンが発言する。ドクターMはリオンがその事実を知っていたことに大して驚きもせず、ただ頷く。

セレネは、わけがわからないとでも言いたげな表情で老人と少年の顔を見比べていた。

「爺ちゃん……いつから知ってた」

「最初にあつた時　　と言えは嘘になるかもしれんが、少なくとも、リオンが共和国軍少尉と一悶着あつた辺りには確信しておつたよ」

だから、リオンの見舞いにはノーションしか来なかつたのだろう。今、思い返せばシリスは頻繁にドクターMの居所について質問していたような気がする。そのつどりオンは、ドクターMだけいなかったため、気になって質問していたという程度にしか思っていなかった。

彼女は隙あらば目の前にいる老人の首を掻つ切るつもりだつたのだろう。

「爺ちゃん、あんた何者だ。俺達のことあまり詮索してこなかったから詮索しないでおうと思つてたけど、シリスは最期に“帝国の脅威を殺すために入国した”って言つてた。帝国に住む全ての人のためになる標的って何だよ！　何でシリスがそんなわけのわからないことで死ななきゃならねえんだよ！　そんなの………そんなの、おかしいじゃねえか！」

リオンの声が部屋中に響き、静けさが再び戻つて来る。静まり返る小屋の中では耳が聞こえなくなつたと言われても違和感がない。気味の悪い、音の無い世界。

そんな世界の視線を集める老人が意を決したように息を吐く。

「リオン、ひとまず落ち着くんじゃ。帝国の隠密に何を吹きこまれたかは知らんが、お前さんは感情的になり過ぎておる。こやつはお前さんの命も狙つていた可能性も高い『敵』じゃ。敵の言うことを信用することは危険じゃぞ」

「じゃ、誰を信用すればいいんだよ！　何を信用すればいいんだよ！　あんな真つすぐな目で、死にそうなのに懸命に話するやつ

話を信じないで何を信じればいいんだよ」

老人の言っていることもわかる。そして自分がどれだけいい加減なことを言っているかということも。

シリスの話が全て真実とも限らない。老人と共に旅をしている一味だと認識されていたのなら、仲違いをさせるため、感情的になりやすいリオンに嘘を吹きこんだ可能性もあるのだ。

だがしかし

「爺ちゃんとノーションさん、あんたらは一体何者だ……。あんならのせいで帝国がめちゃくちゃになるなら、俺にも考えがある」

最初から老人達が嘘を付いている可能性だって大いにあるのだ。乾いたリオンの笑いを見かねてドクターMは、しぶしぶ口を開いた。

「……時と場合、使われ方次第によるがワシが死ねば帝国に住む全ての人のためになる。じゃが 共和国に住む全ての人の厄害にもなる」

「一人の人間の命が一国の命運と同じなんてあり得ねえだろ。大統領でも国王でもそこまでの影響力はないはずだ。ふざけるのもいい加減にしてくれ！」

老人の胸倉を掴み、宙に持ち上げるリオン。シリスが死んだのに、命を掛けて帝国を守ろうとした少女がいたのに、そんな突拍子もない解答が許されるはずが無い。

何か、他に何か隠しているはずだとドクターMの全身を射抜くように睨むリオン。

そうしている間に、よろよろと立ち上がったセレネが老人をひつたくり、シワだらけの顔をまじまじと見つめた。

老人は構わずリオンの怒りにも似た叫びに応える。

「この世にはあり得ないことが、あり得ておるんじゃないや。魔術・科学の発展もそうじゃが、人はそれ以外にも“あり得なかったこと”を今まで重ねて繁栄しておる」
「時と場合、使われ方次第……」

ショックから立ち直り始めたのかセレネは小さな声のままであるが話を続ける。引き締まった顔つきをあまり崩さないセレネだが、表情は沈み、眉は下がっていた。

「世界を動かす程の禁断の知識、もしくは技術を持っていれば時と場合、使われ方次第で国が滅ぶんじゃないか？　じいじいとノーシヨンはメタルフレームの研究チームに所属していると言っていたなそれが本当なら、何かとてつもないモノを研究で作り上げた研究員であるとか」

ドクターMはセレネから視線をそれとなく逸らす。その様子はセレネの推察を肯定しているのと同じである。

「一体何を作ったんだ。魔科学兵器か！？　それとも、村の 사람들이苦しんでいるような危ない植物か！　それが原因で爺ちゃん達は追われている……それが原因で」

シリスは死ななくてはいけなかったのか、弟を迎えに行くこともできずにこんな辺境の地で自害しろと命じられたのか。

そう思うとリオンは気が気でいらなかった。一体何が原因で、どうして、そんなものがあつたからと知りもしない老人の研究を憎く感じる。

「これ以上は言えん。ワシらはこの忌まわしい知識と結果を消し去るために共和国にまで来たんじゃ。だから、これ以上他言することは……できん」

「爺ちゃん!」

問い詰めるリオンを余所にセレネの瞳がはつと開いた。

「今はじいじいの話を聞いている場合じゃない! リオン、魔石だ!」

リオンの胸倉を掴みながら、魔石と叫ぶセレネ。セレネの言動が理解できないとでも言いたげなりオンは戸惑っている。

「リオン、もう一つの魔石はどこにある。この老いぼれを信用できんと言うのならそれでいい。じゃが、今だけは信じて欲しい。まだ、患者があちら側に残っておる」

ハンマーで叩かれたような衝撃がリオンの頭の中に走る。リオンはドクターMが全てを終わらせてここへ来たものだとかかり思っていた。少年の頭の中ではシリスの死以外、全て上手くいっていると思っていたのだから。

「爺ちゃん……何、言っただよ」

助けを求めるようにセレネに視線を移すリオン。

「お前が私に渡した魔石だけじゃ足りないんだ! もう一つ魔石があっただろう。あれは今どこにあるんだ?」

セレネも何をするためにここへ来たか思い返した様子で、老人と

共にリオンに詰め寄った。

「だって……魔石は、おっさん達が届けて」

「……誰も来ておらんのだ。リオン、お前さんこそ事情を話してくれんか。誰に、誰に石を届けるように頼んだんじゃ？ そやつらは今どこにおる？」

「わからない……わかるわけねえだろう。俺は騙されたのか……騙されて……クッ！」

木柱を怒りと悔しさのままに拳で殴りつける。

手の甲からジンジンと痛みが伝導し始め、皮膚が破れる。

「っそお！ つくそおお！！ ああ！！！」

まだ足りない。自分の不甲斐無さが憎い。

何がいけなかったのか。どうすればよかったと言うのか。木柱を打つ拳の感覚が無くなるうともこの禍々しい感覚は無くならない。

「り、リオン！ 何をしているんだ！ やめ、ろ！」

セレネが肩を押さえて、リオンの暴走を抑える。

「俺は、俺は……どうすればよかったんだよ！ どうしろっていうんだよ！ 何で魔石が届いてない！ ……どうすれば」

「何があつたのか、事情を話してくれ。自分だけを責めるな」

セレネの瞳を横目で見て、力無くその場に崩れ落ちる少年。

少女の蒼い瞳は、リオンの心中に反してただただ、澄み切っていて優しかった。

そして、ようやく認めた。自分は村の人間よりも、この少女を優

先したのだと言うことを。

二人に岩場で起こったことを説明し始めるリオン。

ノーションが助けに現れたこと、盗人達とのやり取り、掻い摘んで話せば数分で語り切れた。リオンが身を裂く想いで辿った出来事はたったの数分の物語でしかない。

事情を説明し終え冷静になりつつあるリオンは、魔石のありかは不明だと答える。

またもや音の無い時間が過ぎていた。

それぞれ思う節があるのだろうが、誰も何も言おうとしない。魔石がないのだから、もうどうしようもないのだ。

「よわったのお……魔石が無ければ、どうしようもならん。そもそも石があってもほぼ賭けに等しい荒療治。どうするべきか」

いくらドクターMが優れた魔術師だったとしても、魔石がなければ手も足も出せない。

医者がいっても医療器具がなければ、治療などできない。

そもそも、ドクターMが弱った村人達に施していたものは治療ですらない。

魔術と医療は結びつかないのだ。壊すことしかできない現代魔術で中毒患者を治癒しようとする時点で、この計画は破綻していたのかもしれない。

だが、それでも何とか少年は足掻いて見せた。村の在り方を垣間見、決死の思いで魔石を求め、現実を突き付けられ、苦汁の選択を余儀なくされた。そして、目の前で守ってあげたかった少女が息絶えた。

もう十分に、十分に手を施したではないかと、慰めの声を差し伸

べれば少年は諦め切れたであろうか。

それとも、もっとお前が上手くやっていればこんなことにはならなかったのだと罵られれば、奥歯を噛みしめながらも心に火が付いたかもしれない。

荒野の様に乾き切った喉と心。そこに流し込まれるのは老人の一言。

「セレネ。 もう一度、ワシをあの場所へ連れて行ってくれ。 できるだけ村を満遍なく見渡す様に」

ドクターMは静かに口を開き、小屋の外へと歩を進める。

「あ、ああ。 だが…… どうしようもないんじゃないのか」

「どうしようもないが、どうしようもあるかもしれない」

振り返りリオンを見る老人。 老人の発言の意味がわからず首を傾げるリオンとセレネ。

「リオン、その者達は何かに乗っておったか？」

「いや、乗っていなかった。 たぶん徒歩で基地から逃げてきたんだと思う」

月花とアルテミスを盗もうとしていた現場を思い返しながら答えるリオン。 手には老人によって施された応急処置がされていた。

リオンの言葉に大きく頷きハゲ頭の老人は続ける。

「村を出るにしても足を確保する必要がある。 徒歩で夜の荒野を水も食料も無しで移動するなど自殺行為。 メタルフレームを盗もうとしておったのも足が欲しかったからじゃろう」

「村にはメタルフレームは一機も見当たらなかったぞ」

「じゃ、メタルフレームがある基地に向かったっていうのかよ？」

セレネとリオンが口々に言う中、ドクターMは二人を宥めるように両手を挙げた。

「そう、村にはMFは見当たらなかった。恐らく、村人でMFを持つている者はおらんのだろう。そして、基地から逃げ出したのに危険を冒してまで基地に戻るとは考えにくい。この村とてMFを持った行商人や、旅人がやってくることもある。現に昼間は結構な賑わいじゃった」

「爺ちゃん、つまりどういう意味だ？」

痺れを切らしたリオンがドクターMを持ち上げて揺さぶる。

「日が昇るまで、要するに、行商人や旅人が来る時間までどこかに身を隠しているかもしれん。MFを確保できない以上そやつらも村を出れんはずじゃ」

「じゃ」

リオンが身を乗り出しながら老人の言葉を待つ。

「その三人組みは、まだ村におる」

蒼いメタルフレームが再度、村の北を目指して発進して数十分後、夜の荒野から村に近づく三つの影があった。

先程まで道を照らしていた月は雲に掛かり、闇の先は何も見えな

い。

「ふう、やっと村が見えたっちゃ。誰かさんが、意固地のせいでとんだ時間を食ってしまっちゃよ」

「うるせえ！ 俺は、今でも反対だ。こんな村あ、こんな村どうなるうが知ったこっちゃねえ！一キヤンの得にもならねえぞ！」

「と言いながらも、はあ……はあ……あなたは魔石をここまで持ってきたではありませんか」

肩で息をしながらメガネの男が、汗を滴らせているデブの右手を指さす。完全に息が上がっているメガネは言葉を続けようと口を動かそうとしたが、声になっていない。

「それは、その……村を出るにしても足がねえだろう！ 医者か村人からメタルフレームを奪ったらそのままずらかるんだよ！ わかつたらさっさと坊主が言ってた医者を探せ」

「言われなくとも探すっちゃ。オレが先に行って村の様子を見てきてやるっちゃ。二人は後から来るっちゃよ」

ハッと右手を背に隠し、乱暴に声を張るデブ。デブの背中を軽く叩き、背の低い男が一足先に村の中へ入って行く。

この中で一番体力があつたのはどうやらチビだったらしい。

「まあまあ、村の人間に恩を着せておいて悪いことはありませんよ。上手くいけば、これをきっかけに同胞を立ち上げらせ、ハンスタを追いやる機会をまた作ることができるかもしれません。私も……

…ふう。 医者を探してきます」

呼吸が整ってきたメガネは、チビの後を追う様に駆けだした。魔石を持っているデブだけが荒野に残される。

くすんだ緑の木で作られた村の囲い、薄闇の先に確かに存在する家々。それらを眺めデブは口を緩ませた。

「医者見つけても、これがなけりや意味ねえんだろうがよ……全く、ここまで来てよお。それこそ一キャンの得にもならねえ」

デブが意を決したように村へ踏み出した。

村の中に入ると佇む影が存在した。それが何か見定めようと目を細めるデブ。

背丈、肩幅から推測するに影は男だと思われる。だが、屈強さで言えばデブの方が何倍も上であろう。ひよろ長い影が蜃気楼の様に揺れながらデブに接近しているのだ。

背丈から先に村に入ったチビではない。そして規律正しい歩き方をするメガネでもない。

手拍子をしながらステップを踏むその影は、どこか愉しげに見えた。

デブは慎重に一步一步、未知に接近する。

「隠滅、隠滅」と。証拠は隠滅しなきゃ、よっ、いけないよね？」

何か作業をしているのか、ぎこちない音をさせた後、影が誰かに尋ねた。

物が落ちる音に続いて、誰かがすすり泣きをしている。村の子ども達が泣いていると悟ったのかデブは今にも駆けだしそうな姿勢を取った。

だが、姿勢を維持したまま拳を作り、男の声に耳を傾ける。

影の正体が共和国軍人という可能性もある。万が一、軍人ならばデブはたちまち基地の牢獄へ逆戻りだ。ここまで決死の覚悟で逃げ延びたデブにとってそれは何よりも避けがたいであろう。

暗闇の中、音を立てずに村の入り口へと歩を進めるデブは、木の

囲いに隠れるようにしゃがみ込んだ。

幸いにも影はデブの存在に気が付いていない様子である。
影は、身をかがめて慰めるように優しい声で言っている。

「お嬢ちゃん。本当はね、僕だってこんなことしたくないんだよ？ ハンスタがすっかりやってくれないから、仕方なくこんなことしているんだ。だからほら、笑って。僕は人形が大好きなんだ」

デブが目を凝らして影の正体を軍人か村人か見定めようとする。
影の前で小さく丸まりながら泣いているのは、恐らく子どもが一人。

「一体、どのどいつだ。こんな時間に子ども泣かせているやつは」

胸内で小さく語るデブ。その声には怒りが聞いて取れる。

デブが息を殺して様子を盗み見ている間に、雲に掛かっていた月が顔を出し始める。

道を照らす月が未知を照らし出す。

「なッ！ う、おっんく」

咄嗟に手を押さえて声を押し殺したデブ。嘔吐しかけたが、何とか音を立てずに飲み込んだようだ。

今の僅かな声が聞こえたのではないかと横目で影の様子を確認してデブは安堵した。

そして、その周囲に広がるおぞましい光景に目を閉じる。

「ほら泣き止んで。ほら、君のお母さん。いや、これはさっき飛び出して来た変なおじさん達だったね。あれ？ 君のお母さん、

どこに行つたかな？」

死体の山から人形を取り出し、人形を横に投げ捨てる男。人形は頭が欠けていたり、腕が片方だけなかったりと不揃いな者ばかりである。

この世のものとは思えない、村人で形成された山にまた手を突っ込んで新しい人形を取り出していく。

耐えかねたのか女の子が大声を上げて泣いている。その声を聞いて頭を掻きむしり、苛立つた声で男が女の子に詰め寄った。

「全く……ヘリオスも面倒な願いを思い付いたもんだね。ほら！笑え！お前が笑わないと魔術が使えないんだよ！さつさと笑え、ほら、さつきから注文していたお前の母親だ」

右足が欠けた人形を無理やり子どもものの顔面に擦りつけて、男は叫んでいた。泣き叫ぶ子どもは男の声など聞こえていないかのように声を上げている。

「うるさいな……うざいんだよ。うざいんだよ……うるさいんだよ。たかが人間にどうして僕がここまで媚びらないといけない。しかも、ただのガキに」

手にしていた人形を闇へ投げ飛ばし、男はふつふつと笑う。

「ああ……屈辱的だ。まさに呪いだよ、ヘリオス。君の『願い』は僕にとって『呪い』以外何でもない」

手の甲を空に掲げて皮肉を言う様に笑う男。

デブは、ようやく現場の異常さが飲み込めてきた様子で、姿勢を低く保ったまま村から離れようとゆっくり動き始めた。

ここであの影に見つければ間違いなくデブも死体の山の一部分になることであらう。

「ああ……面倒だ。お前だけは生かしてやったのに、お前は笑わない。笑わないガキに用はないんだよ。ほら、笑え。ほらあ」

この惨状で笑う子どもがいれば、精神が病んでいるとしか言いようが無い。

肉片で出来た血まみれの道。薪の様に積まれた死体の山。子どもは助けを求めるようにただ泣いている。

だが、この惨状を作りだした男は片手で子どもの首を持ち上げて、力をゆつくりと掛け始めた。

次第に子どもの細い首に指が食い込み始め 鈍い音が飛び散る。

「はあ……はあ……嬢ちゃんを、返してもらうぜ」

忍び寄ったデブは子どもを殺そうとしていた男の頭を角材で思いっきり殴り飛ばしていた。

頭に当たった衝撃で角材が折れ、破片がどこかへ吹き飛んでゆく。男の手から解放された女の子は、むせ返っている。苦しそうにもがいているが、幸いにもまだ生きていたという何よりの証拠だ。

首があらぬ方向に向いた男が倒れるのを確認し、デブは女の子を拾い上げようと腕を伸ばす。

「ああ……屈辱的だ。今日、二回も頭割られるなんて……ほんと。まだ、残っていたのか？ 人間」

後頭部があらぬ方向を向いたまま立ち上がる男。人間は死んでも数秒間意識があると言われているが、デブの目の前にいるコレはそ

んな次元を超えている。

コレは、死んでも数秒間生きている

この光景に遭遇すればそう思うのが自然であろう。

呼吸のリズムが狂い始めているデブは、男の顔を見て息を飲んだ。デブの腕以上に太い角材が折れる程の力で頭を殴りつけられたというのに、男は平然と首が折れ曲がったまま会話をしているのだ。

道の端には血まみれで壊れた眼鏡が落ちていた。その隣には子どものように小さい死体が転がっている。

「お前が殺したのか……村人を、俺の仲間達を」

「僕以外誰がこんなことできると思うの？　っていうか、あんたい度胸してるね。さっきやってきた眼鏡を掛けた男なんて、腰抜かしてたのに」

思い出し笑いをしながら男は自分の手で無理やり首の位置を元に戻す。そして、血の混じった唾を吐き捨てた。

デブは女の子を庇うように、男と対峙する。

「この腐った村の連中は真面目だが……根性無しばかりだよ。魔術師が来た途端怯えて暮らす毎日。我が身かわいさで村長まで売りやがる最低な野郎だった」

俯いたまま角材を握りしめるデブは震えながら続ける。

「だがな……お前らに殺されてせいせいすると思える程、悪いやつらじゃなかった。お前らに殺されていいやつなんて、一人足りともいなかったんだあ！！」

デブは震える足を大きく上げて、地面に振り下ろす。先程までの目とは違う。意を決し、覚悟を決めた目で男を睨む。

それはまるで何十人という村人達を束ね、ここまで導いて来た村^{むら}長の目^め。

「やられた分はやり返す……それが俺の村の流儀だ！」

デブが折れた角材を抱えて首の曲がった男に向かって駆け出した。勝負は一瞬。

ズシャリとぬかるんだドブに腕を突っ込んだような音だけが、虚しく響くだけ。

デブが持っていた鎖の付いた赤い石が、宙を舞っている。宙を舞う石を取った手には、

蛇と剣の刺青が彫られていた

第43章 カミサマ

「なんだよ……これ」

村を迂回して入り口まで戻ってきた月花を降り、口火を切ったのはリオンだった。

搜索した結果、三人組の男達は小屋にでも隠れているのか、全く見つかる気配は無い。

このままではらちが明かないとセレネがドクターMに提案したことは、意識のある者だけを完全に治癒し、確実に助かる人間を救うということだ。

だが、今や生きている人間などこの場にいない。

寝込んでいるはずの村人達が無残にも人形のように捨てられている。まるでゴミを捨てたかのように。

幸か不幸か、夜の闇が死体の群を明らかにしないため、リオンはかろうじて正気を保つことができていた。

村の奥にいくつも横たわっている物体があるが恐らく

「まさか……魔石を渡したおっさん達が。村の人を恨んでたおっさん達が」

「いいや、これは……人間の仕業でない」

包帯の巻かれた拳を震わせる少年に続いて月花から降りて来たのはドクターM。

周囲を警戒しながらリオンの側まで歩み寄り、近くに転がる死体を観察し始めた。

「ただの人間にしては力が強過ぎやしないかの。体を引き千切ったような痕跡がこの者からも、あっちの者からも見て取れる。M

Fを使つたにしても機体の足跡が見当たらん。……魔術を使つたにしてもやり方が粗過ぎる。まるで
「昼間に起きた軍人殺しと同じ……」

セレネがドクターMの背後から声を漏らす。その判断が的確だったのか少々驚いたように老人は、うむと一言返して続ける。

「まだ、血が固まっておらん。元凶がまだ近くにおるかもしれん。リオン、セレネ。すぐに月花に戻るんじゃ。胸騒ぎがしよる……」
「じいじい……奥で、何かがこっちを見ている」

村内の闇を見ながら息を飲むセレネ。村には人が残っていないため、光が全くとっていいほど灯りが無い。村の少し上を見やると炎上している基地の赤色が夕日の様に浮かび上がっている。

セレネが感じた視線の持ち主は闇に消え去ったようだった。リオンは茂みに潜む猛獣を連想する。

勇気を振り絞り何かがいると言われた暗闇に向き直ってみる。

“早く月花に乗れ”と老人はズボンを引っ張りながら再度少年に忠告するが、リオンは夜道を凝視して動かない。

少年は瞳を小刻みに揺れ動かし、血が滲み出てきた包帯の手を振るわせて何か思い付いたように目を見開く。

「生き残った人が……そうだ……生き残った人かもしれない！ 生きてる人が村の中に逃げて……中にいるのかもしれない！ この奥に――」

「そう思いたいののはわかるが行くことは許さんぞ！ これは人間の仕業ではないと言っておろう！ 中にいるのが村人ではなく怪物である可能性を忘れるな。バラバラになる覚悟があるのなら……行くがええ」

「つく……」

ドクターMの言葉を受けて拳を宙に振り下ろすリオン。まさにその通りだ。

灯りはおろか、生物の気配すら失ってしまったこの村に都合良く村人が生き残っている可能性など無いに等しい。

黒髪短髪の少年の視線の先。人間だったモノが目を見開いて倒れている。苦しそうな顔をしたまま永遠に時が止まっているのだ。体の一部をもがれるなど……どれだけの苦痛だったのだろうか。

目を背けた先には小柄な人形が倒れていた。見覚えのある服、見覚えのある髪型。目を見開いたままの人形と合うはずの視線が合う。リオンは胸が内側から圧縮される感じがした。小柄な人形と同じように目を見開いて、揺れる瞳孔でしっかりとソレを捉える。

掃除機に心臓を吸い上げられているかのような、罪悪感からの圧迫。

鉄の様な足を一步、一步、その人形の存在を否定しながら接近する。

「……この子、俺が助けた……子だ」

村人達が甘生樹かんせいじゆを抱えて逃げている中、一人取り残されていた女の子。母親からはぐれて泣きじゃくっていた女の子。母親に再会し、ありがとうと言ってくれたあの子だ。

リオンが救った唯一の村人。

「んで……だよ……なんで、こんな子まで」

首を絞められたのか、細い首筋には黒い手形がはっきりと残っている。光を失った瞳に手を添え、まぶたを下ろしてやる。そして、メタルフレームのパーツのように冷たくなった体をゆっくり抱いた。

「神様は……」

涙を堪えながら震える声でシリスの言葉を思い出す。

「神様は貢物の多い人間しか救わない」

この惨状を目のあたりにしたドクターMとセレネはリオンの言葉をただ目を瞑って聞いている。

村人の中にMFを所持できる程の金持ちがいれば、あるいは膨大な金を費やして魔術を体得した魔術師がいれば、ここまで酷い状況に陥っていなかったことであろう。

金は力。金は力で得ることが出来る。力は金で買うことができる。片方があればおのずともう一方が手に入るという一見、平等に見えるこの世界。

だが、金も力も無い者はどうやってその平等を手に入れることができるというのか。

金が無ければ力を得ることが出来ない。力が無ければ金を得ることが出来ない。

そんな世の中は

「そんなの間違ってる。　こんなの絶対に……おかしいだろう！　力の無い人間を守ってくれるのが神様じゃないのかよ！　金が無くたっていざって時に……守ってくれるのが神様じゃないのかよ……なあ……」

この村の人間に神は微笑まなかった。代わりに微笑んでいたのは金と権力を蓄えた軍少尉。彼は自分の管理している村がこんな状況だというのに一人たりとも救助員を寄越していない。

神を呪った。シリスもこの村も救おうとしなかった神に怒りを向

けなければ気がおかしくなりそうだ。

「魔術を扱う者は神を信じておらん。帝国で異端とされた魔術で栄えた共和国に神は元々おらんかったのかもしれない。盗賊や軍人崩れ、このような事態を起こす人間は溢れておる……このような村はそこらじゅうにあるじやろう」

数々の救われない者を目にしてきたのだろう。皮肉めいた老人の言葉にはこれだけの惨劇を目のあたりにしても余裕が見てとれる。いや、本当は神と呼ばれる存在を諦めていただけなのかもしれない。だが、少年は諦めたくなかった。黒い瞳に涙と炎そして決意を宿す。

「だったら……だったら俺が助けてみせる。神様が見捨てた人も助けることができるくらい強くなつて。誰も……死なない世界に、誰もが笑っていられる世界に」

もっと強く、もっと力を。それは少年の切実な願い。

自分がウインド村という小さな世界で暮らしていた頃、外の世界ではこんなことが起こっているなど知りもしなかった。外の状況など時々街に出かけたカーストから聞く最新メタルフレーム情報だけだった。

カーストからは一言もこんな虐殺についての話を聞いたことなど無い。

だからこそ、ウインド村が襲われた時、どうして自分の村だけかと考えが走った。

ウインド村のように魔術の支援をされていない村が一夜にして消えることなど、この世界では日常的だったのだ。ただそれを知らず、幸せにのうのと十年間もあの村で生活ができたことが、今では奇跡のように感じる。

リオンは目を擦りながら肝に銘じた。

「俺は……本物の英雄になってみせる」

この程度の惨劇で子どものように涙を流し、打ちひしがれてはならない。英雄とは苦行を乗り越え、その先に多くの者を救った存在だ。

自国のために命を絶った少女。彼女のように強い心と覚悟を持てるかなどわからない。

無残に殺された人々を見て涙を隠し通せる程、自制を利かせることができるかもわからない。

だが、この日、少年は誓う。

どんなことがあっても涙を見せない、どんなことがあっても弱音を吐かない、そんな強い人間になると。

自分のような子どもでも、他人の命を救うことができるなどおこがましいことを本気で信じてきた。

今の自分では到底不可能な奇跡だ。これだけの惨劇を今の自分で止められるはずがない。それはウインド村の時に痛感している。

腕の中の女の子一人守れなかった。選択すべき時に決断しきれなかった。今、目の前に広がる地獄絵図が存在する場所は恐らく、ここだけではないのだ。

「爺ちゃん、セレネ……一つだけ頼みたいことがある」

この非常時にこんなことを頼むなど反対されるに決まっているだろう。しかし、リオンは一人でも行いう気でいた。誰もいなくなってしまう村には不要かもしれない。ただ、少年がそうしたいと思っただけのこと。

二つ返事のセレネに対して、リオンの頼みに少々頭を悩ませている老人が沈黙を破る。

「……わかった。」

ワシも協力させてもらおう」

第44章 憎悪の剣

「あり得ねえ……」

声を漏らしたのは、最新機テン・サウンドに搭乗するハンスタ。ハンスタの目の前ではあり得ない光景が広がっている。

漆黒の機体がまだ顕在しているのだ。損傷した左肩から青白い放電が発生していることなど気にも止めず、二本の剣を振り回し、緑色のMFを斬りまわっている。一体どれほどの時間戦闘が可能なのだろうか。

二個小隊に匹敵する数で包围したにも関わらず、俊敏な動きに翻弄され包围網は容易く崩されていく。

「剣を捨てたぞ！」

「腕が使えなくなったんだ！ 一本なら勝てる」

グリーンを基調とした軍用MF達から一斉に声が上がる。悪魔は切れ味の悪い憎悪の剣を邪魔だと感じたのか、せつかく回収した双子の愛剣の片割れをアスファルトに突き立て距離を取ったのだ。

ブースターで緊急回避を縦横無尽に繰り返す漆黒の機体にロックが重なり、MF部隊の射撃が再開された。

憎悪の剣を放置した悪魔だが、自らの細いシルエットを横に向けることで無駄に刃幅が広く、切れ味の良い剣を盾のように構えた。

「剣を、盾に……？」

「なんなんだよ、アレは！！」

「このまま撃ち続けろ！ 動きを封じることができている！」

誰が剣を盾に使うかと考えるだろうか、誰が剣を盾に使うだろう

か。

悪魔が操る盾は接近された瞬間、剣となり機体を斬り去る。悪魔の剣が魔科学兵器だからこそ剣の領分を越えた使用を可能にしていた。

「剣が邪魔だな……おいお前、突っ込んで、奴の剣をどけてこい」

ハンスタは部下に命令するが、その命令を誰が聞くというのか。味方からの弾丸ではあるが、一斉射撃をしている先に突撃しろとそれに相手の領域に自ら飛び込むような真似ができるはずがない。特に、自機に搭載されている小型のブレードよりも早く、あの大剣を振り回す怪物と斬り合うなど兵士達にとって「自害しろ」と言われているものと大差ないはずだ。しかし、行かなくともハンスタに殺される。現に異論しただけで殺された兵士がいたのだ。それならばと

『あああ！』

一人の兵士が勇敢にも機体のブースターを吹かせて突撃を掛ける。轟音を鳴り響かせ、銃弾が飛び交う中、緑の群から一つの光が黒点へと流れた。

緑色の機体が右に手にするブレードで嫌悪の剣を弾き飛ばすことができれば、悪魔は投降せざるをえまい。

『喰らええ！』

身動きの取れない機体、悪魔の最後の防壁である大剣目がけて鉄の剣が振り下ろされる。

『あ………』

突撃した機体は、振り下ろしたブレードもろとも切断された。居合抜きのように低い位置から斬りあげた嫌悪の剣が、無情にも機体の上半身を斜めに削ぎ落とす……いや、跳ね飛ばす。

空高く舞い上がるコックピットが垣間見える上半身。打ち上げ花火のように空中で破裂し、爆煙が視界を覆う中、沈黙が訪れた。

「……剣は必死に抜こうとするものじゃない、必殺で抜くものだ」

黒い煙から黒い甲冑がゆらりと姿を現す。

悪魔からの最初で最後の剣術指導を受けた兵士。もはやブレードで接近しようとする愚か者はここにはいないだろう。

漆黒の機体が手にしている一振りは魔科学兵器。対する兵士が手にしていた一振りはただの剣。つば競り合いなど望めるわけがない。黒い甲冑から赤いカメラアイを歪ませる悪魔。あまりの兵士の弱さを嘲笑っているようにも殺戮を愉しんでいるようにもみえる。

「チツ……使えねえ兵だな。足の一本ぐらい破壊してから死ねよ。各機陣形を乱すな！ こうなったら接近せず、射撃だけで動きを封じろ」

ハンスタの号令の下、緑の群の指揮をしている白のMFが手を上げてフォーメーションを組みなおさせようとしている。

が、悪魔がいつの間にか部隊の側に接近している。弾幕が止んだのは僅かな時間だが、爆発的な加速が可能な機体が距離を縮めるには十分な時間だったらしい。ゼロは欠員が出たことで穴の空いた陣形目掛けてブースターを一瞬だけ吹かす。

爆風である。超高温である紅の爆風が緑のMF達を吹き飛ばし、穴が道へと変わった。

それは漆黒の機体の“ジェット”。

強く短くブースターのスロットを回すことにより、瞬時に方向転換や加速などを可能にする操縦テクニク・ジェットが、フォーメーションを崩す。

基地に侵入する時にも幾多と使用された悪魔のジェット。この機体最大の弱みである装甲の薄さは、この規格外のジェットを最大限に生かすための設計だった。

軽量になればなるほど、急加速、方向転換の勢いが上がる。もちろん、パイロットに掛かる負担も大きくなるため、この漆黒の機体程重量を軽くする者などいない。

そして、機体の推進力を瞬時に上げるジェットというテクニクを彼のように陣形を乱す“攻撃”として使用するパイロットもいない。

「おいおいおい！ 包囲を固め直せ！ あんな風でやられてどうする！ 立ちやがれええ！ クソ共が！！」

高みの見物をしていたハンスタが焦りの声を出した。何故、あれだけの銃弾を避けられるのかわかるはずがない。

ハンスタも思い知らされたことだろう 悪魔に常識は通用しない。

「はっ！ 化物級の魔科学兵器にあの機動力……確かに厄介だ。

それなら 俺も厄介なモノをブチ込んでやるよ。 見物はもう終わりだ。 死なないように狙ってやるから感謝しろや！」

ベルゼブブの魔力を右に手にしたライフル、魔科学兵器“エア・スナ気砲狙撃”に流し始めるハンスタ。さながら、魔力の充電といったところだろうか、右手にした魔科学兵器は魔力が満ちたのか四大元素の“風”が視覚できる程溢れ出し、緑色のオーラを漂わせている。

「とっておきをブチ込まれる！ カブトムシ野郎お！！」

魔科学兵器のトリガーを引くハンスタ。たちまち貫通力の高い魔弾が地面を抉りながら戦場を駆ける。

エア・スナイプ 気砲狙撃からは“気砲”の名の通り、風圧を利用した超速の弾丸を発射する。

いくら剣の魔科学兵器を所有していようと魔科学兵器同士のぶつかり合いで、その領分を越えることなど不可能である。ハンスタが発射しようとしている「風の刃を纏った弾丸」を剣の盾で受け切ることは“帝国の悪魔”といえど、この世界で生きている限りできない。

「ツチ！ ハエのMFの魔科学兵器！ アインス 嫌悪の剣！ ぐっ……」

大剣を壁にして、マシンガンの弾丸から逃れながら叫ぶゼロ。ころうじて魔弾を回避することができたが、弾幕を捌きながら魔弾・エア・スナイプ 気砲狙撃を避けることなど不可能だ。

咄嗟に破損した左腕を使ったことで、ケーブルが露わになっている左肩から火花が散った。肩から腕が外れるのも時間の問題だ。極力、右腕だけで敵を裁いて来たゼロだが、この軍勢相手ではもう限界であろう。

「生きてるMF隊、そのまま弾幕を張って動きを封じとけ。俺がアイツを跪かせるまでな！」

弾丸の群の中、エア・スナイプ 気砲狙撃による弾がどれかなど見極める術などない。

身を縮め嫌悪の剣に身を隠しながらゼロは、被弾している左手も剣に添えた。魔力を流し込んでいるのだ。漆黒の機体を巡る魔力を両手からこの嫌悪の剣に。

弾丸の嵐をまともに受け続ける嫌悪の剣に魔科学兵器による魔弾が今まさに直撃しようとしている。

「嫌悪が、満ちた……！」

赤と黒の大剣に魔力が行き届いたことを確認し、ゼロは愛馬を蹴る。

悪魔の機体は暴れ馬のごとくアスファルトを抉りながら地面を滑走した。機体後方に残るものは地雷線。

ゼロはこの状況下、ハンスタに突撃を掛けようというのか、剣を横に向け盾にしたまま真つすぐに加速した。鈍重な剣を持っているため速度計が振り切れることはなかったが、三〇〇キロ近い速度が出ている。被弾を避けなければいけない軽量機体での突貫。

「はっははー！！ 血迷いやがったかあ！ カブトムシィー！」

ハンスタから見れば血迷ったとしか考えられない、ゼロの突撃。

しかし、数十というMFを相手に戦っていた冷静な悪魔が今更血迷うとも考えにくい。彼は本当にハンスタに死をも覚悟して突撃するつもりなのか。

左にはハンスタとその部隊、右にはゼロ。二つを結ぶちょうど中間地点。そこには悪魔が放置してきたもう一振りの大剣が突き立てられている。

眼前に迫ってくる死神を止めようとマガジンを空になるまで乱射するMF部隊。

これだけの弾幕の中では下手に旋回などできない。

「……じゃな、カブトムシ」

ハンスタが魔科学兵器の引き金を、引いた。

ベルゼブブは勝ち誇ったかのように羽音のような機械音を上げて魔弾に激励を飛ばす。

高速で突撃する機体と音速で直進する魔弾。

しかし、嫌悪の剣と気砲狙撃の弾丸がぶつかり合った瞬間、鉄のブレードでは実現できなかったつば競り合いのような状態が起こる。赤と緑の魔力が周囲に飛び交い暴風が発生する中、MF部隊は地面にブレードを突き立てて各自飛ばされぬよう耐えていた。

「つく！ 魔科学兵器の魔力同士をぶつけて相殺する気か？ とことんイラつかせてくれるな、このクソ野郎お！！」

部下のブレードを奪い取り、地面に這いつくばるベルゼブブ。

援護射撃こそ止んだものの、片や一振りの剣、片や一発の弾丸。

追加で弾を発射されれば剣は砕け散るに違いない。

魔力を帯びた両者は、敵を斬り殺そうと、敵を貫き殺そうと一歩も譲ろうとしない。

されど、機体のブースターを全開に少しずつ押し返すゼロ機。もう一振りの愛剣まで後、四歩程。嫌悪の剣は悲鳴を上げるように揺れ動いている。

片腕が満足に使用できない悪魔の機体が煙を上げ始める。

「撃て！ 害虫を駆除しやがれ！！ なんでも良いから撃ちやがれ！
！ ただし足だ！ 足だけを狙え！ 足以外に当てた奴は俺が殺す！
」

ハンスタの号令が再び掛った。残りわずかとはいえ大国の軍部隊。いくら悪魔に殺されたと言っても盗賊を追い払うぐらいの戦力はまだ残っている。

基地内の施設が吹き飛んでゆく中、ブレードにしがみ付きながら銃口を悪魔に向け始めるMF部隊。

嫌悪の剣にとって実弾は大した脅威ではなかった。しかし、ゼロの乗る悪魔にはこの上ない脅威なのである。剣が塞がれている今、ゼロを守る物は目の前にあるもう一振りの剣のみ。

暴風の中、弾がまっすぐ飛ぶとは思えないが、でたらめに撃つても数を撃てば当たる。

共和国軍の一斉射撃が始まるまで、後数秒も掛からない。

「^{ツヴァイ}嫌悪の剣！」

地上から抜き取り名前を叫ぶ。

黒の刃に黄の筋が装飾されている嫌悪の剣・ツヴァイ。黒と赤の嫌悪の剣・アインスが物質切断に特化した剣ならば、この剣は

「なに？ 風が止んだ……魔力を……吸い取る剣、いや、斬りやがったのか？」

漆黒の機体周辺からごつそりと魔力反応が消えた。よって、暴風も途端に消え去る。あり得ない現象をレーダーで確認しながらハNSTAは頭を掻いた。

ゼロの声に反応し、黒と黄の嫌悪が息を吹き返す。

魔力を斬れと、奇跡を斬れとそんな殺傷願望が剣身を覆い尽くす。左肩の放電などもはや気にならないのか、それとも魔科学兵器を保有するハNSTAが戦闘に参加してきた今、そんなことに構っている余裕が無くなったのか、悪魔は不完全な状態で二本の剣を構えた。

刹那の沈黙

「ほお……吸ったか斬ったか、何をしたか知らねえけど、もう一発！」

ハNSTAが容赦なくゼロへ“^{エア・スナイプ}気砲狙撃”を撃ち込む。またつば競

り合いによる魔力の暴風を起こそうと言うのか。

だが、魔弾は容易く弾かれてしまう。いや、斬られた

「んだと……この！ この！ このお！ この野郎おお！！」

一発、また一発、怒り狂いながら二発の弾丸を連射。ベルゼブブの放つ魔弾は黒と黄色の剣に阻まれてしまう。まるで、飛来してくる紙を斬るかのように魔弾の魔力を斬り落とす。その奇妙な武器を見せつけられて脅える兵士達。

『なんだあの剣……少尉の魔科学兵器を、弾いていやがる』

焦りを混じらせた声を漏らす兵士達。今までにこれほどの怪異に出会ったことなどなかったのだろう。

兵器とは人を殺すために作られるものだ。兵器の妨害をする物代表を上げるとジャミングなどならば共和国や帝国でも盛んに使われている。しかし“兵器を殺すための兵器”など存在しない。

原理や理由などは不明。

ただ確かなことは悪魔の機体が憎悪の剣を手ツバサにしている限りベルゼブブの魔科学兵器は通用しない。

ハンスタ自慢の魔科学兵器は、剣の一振りで無効化されてしまうのだ。いくら魔力を込めて発射しようが、魔力そのものを“殺す”剣の前では魔科学兵器としての役割を果たさない。

帝国の悪魔が帝国で『悪魔』と呼ばれた所以は、その恐るべき機動力でも、常識に囚われない戦術アインスでも、嫌悪の剣による圧倒的な攻撃力でもない。

“魔科学兵器をも殺す”憎悪の剣という異端の一振りにあつた。

「あり得ねえ……あり得ねえ！！ 人形風情が！ 模倣品風情がある！！俺がそんなモノに負けるなんてありえねえんだよお！！」

ハンスタがコックピットを揺らしながら吠える。それに答えるかのように、悪魔は教えてやる。

「世の中には、あり得ないことがあり得ている」

魔力を殺す黄と黒の剣を横に倒し正面に、物質を殺す赤と黒の剣を逆手に持ち背後に構える。古今東西聞き及ぶことのない、剣で自分を囲い込む奇妙な構え。

たった一機にここまで追い込まれている時点でハンスタの面目は丸潰れとなっているだろうが、帝国の悪魔はハンスタの面目を潰しに来たのではない。

「貴様に嫌悪と憎悪……そして、絶望をくれてやろう」

目が血走っているハンスタに死の宣告をする漆黒のMFのパイロット・ゼロ。ブースターに収束する風が今、解き放たれた。

爆風が施設を吹き飛ばす。突風が燃え盛る基地を消火する。規格外の速度で闇を疾走するは死神。規格外の爆音は亡者の叫びを連想させる。

帝国の悪魔はもう、止まらない。

「うぜえ！ うぜえぞお前！ お前はもう私刑だ！ 死ぬまで私刑決定だ！！ さっさと死にさせえやああ！」

魔科学兵器とマシンガンを両手で乱射するハンスタ。数を撃てば当たると考えたかロックオンする前にトリガーを引き続けている。

先ほどから酷使し続けてきた漆黒のMFの左腕は、機体速度に耐えきれず無残にも後方へもぎ飛んで行った。

「ツチ……憎^{ツヴァイ}悪の剣！」

もとより、速度も耐久力も規格外。完璧なコンディションであつたとしてもかなりの負荷が掛つていたはずだ。それが被弾し、長時間も重量のある剣を振り回していたのだから今まで機体に左腕がくつついていた方が奇跡ともいえよう。

この瞬間をハンスタは逃さない。

「腕と大切な剣が落ちましたよ、カブトムシさあん！！　くたばれええ！」

悪魔が正面に構えていた左腕と魔力殺しの剣が無くなった。

ハンスタは歪な笑みを浮かべて魔科学兵器・気砲狙撃をコックピットに狙いを定め、トリガーを引いた。

嫌悪の剣で魔科学兵器を防げないことはハンスタとてこの戦いで承知しているはず。故に、ゼロは慌てて憎悪の剣を回収するべく死を覚悟で突撃してきたのだ。

高速で接近してくる機体へ、音速で放たれる魔科学兵器の射撃。

これが意味するのは、回避不能な死。

一秒も経たない間に漆黒の機体は爆発し、空を朱に染めるという意味である。

しかし、空は依然と黒のまま、爆発は起きない。

「あり……えねえ、私……刑だ……あ」

火花が散っている。

ベルゼブブに深々と刺さった両刃剣それは先ほどまで二本の大剣だったものだ。

飛びゆく憎悪の剣は後方に構えていた嫌悪の剣と組み合わせられ、一対の剣となっていた。もげた左腕が両刃剣の柄にぶらさがってい

る。

「……………絶望^{ドライ}の剣……………ぶっ、くっ」

コックピットで突如として吐血するゼロ。機体に掛かった慣性によつて古傷が開いたのか、それとも何か^{ドライ}が胸を抉ったのか、黒一色の胸元から血が滲み出ている。

赤でも黄色でもない。青と黒の装飾をされている両刃剣・ドライ。悪魔が保有する第三の剣がハンスタの座っているコックピットを深々と貫いている。

能力が不明な両刃剣をコックピットから抜き取り、リーダーを失った部隊の前に向き直る。

悪魔の背後では村の神が爆発し、破片を飛び散らしている。その姿を見てこの場の全機が一步後退した。

「お見事あゝ。さすがゼロ。僕が殺すまでもなく完璧にこの軍隊をめちゃくちゃにしてくれた」

場違いなほど明るい声が緑色のMF部隊の背後から響く。

血を塗りたいくったような紅い機体。鎧武者のような外装をし、腰には中身の無い鞘を帯びている。

重量と装甲の分厚さを見た限りではパワー型のメタルフレームである。

「っ……………ネロあー!!」

片腕しかない漆黒の機体から機体色と同じ色をしている嫌悪と憎悪が滲み出ているかのようだ。

ようやく出て来たか　と今にも斬り付けそうな勢いで、ベルゼブブを貫いたばかりの左右対称の両刃剣を乱暴に地面に突き立てる。

悪魔の宴は終わらない。

それに反して、明るい声が紅のメタルフレームから発せられた。

「そんなに大きな声を出さなくても聞こえているよ」

漆黒の機体と紅の機体は睨み合っている。動けば殺される。そんな空気の中、紅の機体のパイロット・ネロが喜びを込めて声高々に笑った。

「家畜殺し、ご苦労さん。ゼロ」

第45章 狩獵の女神

ネロと呼ばれたその機体のパイロット。

紅いメタルフレーム・焰^{ヒール}は堂々と歩を進め、共和国軍のMF達の中へ紛れ込んでいく。

「どうしたんだい？ 生き別れの兄弟とまた出会えたっていうのに…… どうしてそんなに殺してしまいたそうな声で僕の名前を呼ぶかな、ゼロ？」

紅のメタルフレームから発せられる声は少年のもの。銃火器を一切持たないという点で紅と漆黒は似通っていた。

『お、お前は一体どこの部隊所属の者だ！』

『帝国の悪魔の仲間か！？』

『ハ、ハNSTA少尉がやられた今、早く撤退を！』

口々に言葉を交わし始める兵士達。紅いメタルフレームはそれらをうんざりしたように兜の下にあるカメラアイで見回す。

「仲間あか」。仲間っていえば仲間だよねえ？ 同じ人造^{ヘクセクルス}魔女同

士。ああ、そういえば」

ネロは言葉を一度切って、共和国軍に向き直った。

「お前らのボス、ハNSTAが言っていた命令ちゃんとやった？ 心配になってわざわざ見に来たんだよ。ここの実験物と資料を全て廃棄するっていうハNSTA少尉^{最期}のめ・い・れ・い」

馬鹿にしたような口調で共和国軍MFのコックピットを拳で軽く叩く武者。まるで、同期の仲間同士で会話をしている気軽ささえ感じさせる。

一方で両刃剣を地面に突き立ててゼロがぐぐもった声を出す。

「何をこの軍人に吹き込んだ……」

「さあ。何だろうね。甘生樹かんせいじゆに魔科学兵器が集う施設、それと大量の人間。ここまで言えばわかるかな？」

「人造魔女……」

「ご名答」

にやりと笑みを零すネロに対してゼロの表情は暗い。

共和国兵士達は相手の出方を覗っている様子で、人造魔女二人の会話を見守っている。

「でも、残念。ここの施設は全部破壊しないといけないんだ。鼻の効くチーターさんがやってくるから、ねえ！」

一人会話を進めるネロに対してゼロは斬りかかろうと刃を構えた。しかし、それを瞬時に掴みかかって阻止する焔。

ゼロの機体は限界点に達している。それに加え、左腕を失っている今、剣を存分に振るえない。

「ダメだよゼロ。君の機体はもうすぐエネルギー切れだ。魔科学兵器をあれだけ乱用すれば仕方無いことだよねえ」

仲間割れか、と銃を構えながら紅と漆黒を照準に捕らえたままざわつく共和国兵達。いずれにせよ、強敵である帝国の悪魔が圧倒されている姿を見れば、兵士の気も少し緩むものだ。

「ここは君が一人で襲ったことになるんだ。そしてこうなる……
“帝国の悪魔が遂に共和国に上陸し、罪無き村人を虐殺！！” 軍施設及び、村は壊滅！」 ってね。 だから、共和国軍の人達、安心して。 僕は共和国の味方だ。 この悪魔を共に倒そう」

言いながらネロは焰の後方に位置する共和国兵の群をその腰に備えた魔科学兵器で 斬り裂いた。
時が一瞬止まったかのような衝撃が場に走る。

『くっそお！！ 撃てえ！ あいつも仲間だ！』

突如として攻撃を仕掛けてきたネロに対して兵士達は一斉射撃を試みる。
が

「いいや、仲間だよ。 でも、証拠隠滅のために君達は生きて帰すわけにはいかないな。 共和国のためにここで死んでくれる？ 死ぬるよねえ？ 国のために死ぬのがお前たちの仕事だろう？ 僕が手伝ってあげるよおお！ 構太刀カマイタチい！」

狂気に満ちた雄たけび。

瞬時に紫色の鞘から斬撃が発生し刃が共和国兵のMFを斬り裂いて行く。空間を吹き飛ばす刃の風。焰が抜刀のポーズを取った先は斬撃の跡だけ残り、MF同士による大規模な爆発が起きた。

「あっはははー！ うれしいねえ、愉快だねえ、人間が死ぬ様はいつ見ても嬉しいよ。 ねえ、ヘリオス？」

紅の機体。その後部座席に搭乗している紅髪の少女に同感して欲しいのか、ネロは喉を鳴らす様に言った。

「……どうして、こんな酷いこと」

「どうしてだろうねえ？ 何故だろうねえ？ 僕もわからない。でも、愉しいんだよ、気持ちいいんだよ。君だって愉しくて気持ちいいことを止めるって言われてもやるだろう？ それと同じなんだ。嬉しくなるとついやつちゃうんだよ、家畜殺し」

モニターから目を背ける少女に対してネロは心底愉しそうに映像を眺めている。そして、右の甲に刻まれた蛇と剣の刺青に頼ずりをした。

「おおおっと！ 危ない、危ない。ゼロお？ ちゃんと大人しく見物してなきゃダメじゃないか。これは全部君がしたことになるんだから、目に焼き付けておいてくれない、と！」

絶望の剣を分解し、ドライ嫌悪の剣だけで紅の武者に斬りかかったゼロだが、ネロの所持する紫色の鞘で容易く受け止められてしまう。左腕が無いため、力が入らず容易く大剣を押し返される。そのまま悪魔と呼ばれた機体は紅の武者に頭部を捕まれ地面から持ち上げられ、地に足が着かない状態になった。

「ほら高い高いだよ？ 今から 花火を見せてあげるよ」

余った手で魔科学兵器・カマイタチ構太刀を発動させ、逃げようとするMFを背後から斬り殺す焰。

機体が真つ二つに、そこから更に細切れに刻まれていく。見えないうちに蹂躪されたMF部隊は音を立ててこの世を去って行った。

「ッチ！」

舌打ちをし、ブースターのスロットルを全開にするゼロ。たちまち漆黒の騎士は紅の武者を引きずる形で基地内を爆進を開始する。この鎧武者をどこへ連れて行こうと言うのか、基地の施設を破壊しながらただただ真つすぐ、誰もいない荒野の方角へ進む。

「パワーで焰に勝てるわけないだろお！！　ヘリオス！　受け止めてそのまま機体を分解しろ！」

焰は荒野に足を突き立て、巨大な鉄球を受け止めるかのように姿勢を維持すると悪魔の爆進を抑え込んだ。武者の背中に搭載されている大型ブースターにも火が灯り、漆黒の騎士を押し戻し始める。突然の反作用によってバランスを崩したゼロの機体は、首を捕まれコンクリートに叩きつけられた。

そしてそのままコンクリートを顔面で滑走させられる。

金属が削れる甲高い音、火花と焦げ臭さを放ちながら速度を上げる二機。何百メートルと進んだ後、炎を上げてもおそびえ立っていた電波塔に激突。

建築物が衝撃で崩壊し、瓦礫と灰色の砂煙が降り注ぐ。静寂が戻った。

「機体を分解しろと言ったはずだ！　ヘリオス！」

「頭部を分解したわ……」

「ふん、そうきたか。まあいいや、これで邪魔はされなだろうし。　さっさと残りの連中を斬りに　」

愛想無く返事をするヘリオスに、鼻で笑って対応するネロ。

土煙が舞う中、瓦礫の穴から焰が顔を出したその時、一発の弾丸が右目に値するカメラアイを射抜いた。焰のカメラアイから光が消える。

手に持っていた帝国の悪魔の頭部は、瓦礫の中に落下した。

「誰だ！！ 共和国の家畜！？ 家畜のくせに、家畜のくせにい！
！ 焰に傷をお！」

「違うこれは 狩猟の女神」

豹変して怒り狂うネロを無視し、ヘリオスがいち早く次の危険を察知。焰を瓦礫の中に隠す。コンマ何秒か遅れて焰のもう一方の力メラアイの残像を弾丸が通過、瓦礫を粉碎した。

砂煙の中で唯一の光が闇に消える。その様子を眺めていたある人物が舌打ちをした。

「チツ…… どんだけ頑丈なMFなのよ！ この私が一撃で仕留めれないとかあり得ないわ、っていうかム力つくわ！」

焰が潜り込んだ瓦礫の遥か彼方

荒野にそびえ立つ岩場の上で白銀のアルテミスが狙撃姿勢を維持している。自機と同じぐらいの大きさを保有するスナイパーライフルは、アルテミスの背中を覆うように折りたたまれていたものだ。

他の武器の搭載を捨ててまでこの巨大なスナイパーライフルを持ち歩いていたということは、アルテミス、いや、ノーションが最も頼りにしている武器と言っても過言でないのかもしれない。

基地東部と中心部を一望できる自然で形成された狙撃ポイントそこにノーションは身を潜めていた。

「上手く電波塔が倒壊してよかったわね。……でもそこはまだ私の射程圏内よ」

チャンスを再び覗うかのようにスコープを覗く金髪の女。愛用の眼鏡は胸ポケットにしまわれている。

「さあ、このまま隠れ続けて、タマ無しの共和国軍に包囲されるか、飛び出て私に撃ち抜かれるか。二つに一つ……ここで死になさい」

独り言をつぶやき乾いてきた唇を舐める。弾薬が尽きかけているであろう共和国軍だが、ノーションがしっかり援護してやればゼロもネロも下手に動けなくなるはずだ。彼らに逃げ場はない。

と、スコープに標的が映り込んだ。すぐさま狙いを定め、的を的確に撃ち抜くノーション。

「な！ デコイ？」

撃ち抜いたのは、もがれた漆黒の機体の頭部。砂煙の中から高速で飛び出て来たものは頭部だけだ。

頭部が小規模の爆発をしている間に紅の機体は反対方面へ一気に加速。アルテミスの視野から逃れる。

肉眼では点にしか見えない基地の内部。最大望遠では、視野が狭くなるため僅かな動きですら過敏に反応してしまう。

その狙撃手の裏をかいいたデコイ。

「あの動き……操縦しているのは口だけのロストナンバー……じゃないわね」

異常とも言える操縦テクニク。今の狙撃で完全にどこから狙撃をしているかを見切ったかのようだ。決定的な隙が生まれる着地などの硬直瞬間は物陰に機体を隠して行っている焰。焰はあくまでも鈍重な機体である。それをまるで、狩りをするトラのような俊敏さで基地内を駆け抜けている。

だが、これでは狙撃ができないと諦めるノーションではなかった。

「隠れるなら、隠れる場所を破壊してやるだけ……よ」

三発立て続けに大型狙撃銃から弾を発射する。

ノーションが狙ったのは、共和国ではあまり使用されていない軍用車。

巨大な鉛玉をブチ込まれた車両は瞬時に爆発。焔が次に身を隠すであろう倉庫施設が傾く。

紅の武者が立ち止った瞬間を遂に捕えた。
完全なる隙だ。

「……ぶっ飛びなさい」

アルテミスがトリガーを絞った。狙いは鎧武者のコックピット。荒野に響く一発の銃声。その後に金髪の狩人から声が漏れる。

「……外した？」

鎧武者の右腕を貫きはしたものの、標的はまだ動いている。狙おうと思えばまだ狙うことも可能だ。

だが、ノーションはもう無駄だと言いたげな表情をして、スコープから目を離す。

「砂嵐……ついてないわね。いえ、最初の一撃で仕留め切れなかった私のミスか」

悪態をついてすぐさま狙撃銃の薬莢やっきょうを込めるノーション。荒野を駆け抜ける砂嵐を横目で眺めながら、期待のない眼差しでスコープを覗く。

「やっぱ砂だらけで何にも見えないか。ドクターになんて言い訳すればいいかしら。それにしても、ナンバーゼロとロストナンバー

「の目的は何……どうしてこんな村に」

スコープで再度基地内を覗き見るが、ノーションが引き金を引かない辺りから紅いメタルフレームも漆黒のメタルフレームの姿も見当たらないようだ。

「逃げられたか……致命傷を与えたからしばらく出てこないでしようけど。そうなると探すのがまた面倒なことになるわね。またゼロからやり直し……か」

金髪の女性は、胸元にぶら下げた金色のペンダントを握りしめ、必ず殺してやる　と呟いた。

命からがら逃げ延びた共和国兵士の四名。MFはいたるところから火花を散らしている大破ぶりだが、命は助かった。あの帝国の悪魔と遭遇して命が助かったなど前例がないかもしれない。そして、その後共和国の武者まで登場したのだ。

神がこの四名を守ったとは思えなかったであろう。

『おい、アレックス。俺達、敵前逃亡の罪で……処罰されたり』

『ば、馬鹿言うな！俺達は帝国の悪魔と共和国の武者のデータを本部に持ち帰ろうとしているだけだ！こ、今後の対策に必ずこの機体のデータは役に立つはずなんだ』

『そ、そうだぜ……！ネツアク山脈までゲハルト少佐の部隊が来ているって言ってたよな？』

『ああ、ここからそう遠くない。あの少佐なら頼りになる。どうして俺はあんな基地に配属されちゃったんだあ！』

四名が口々に通信していると前方からメタルフレームの部隊が見えた。ライオンのエンブレムマーク。共和国軍のものだ。

『聞こえるか！　こちらハンスタ部隊の者だ！　基地が帝国の悪魔に襲われた！　至急救助を願う、繰り返す』

兵士の一人が無線を接近してくる部隊に送る。そして、返事が来た。

「ハンスタの部隊の者が……弟は無事か？」

声の主はハンスタの兄・シュナイゼルのものだ。ハンスタ部隊の兵士達はしばらく沈黙し、言った。

『シュナイゼル大尉……ハンスタ少尉は戦死されました。生き残りは自分達だけです』

「つく……そうか……生き残りは君達だけか」

弟が死んだという悔やみ切れない想いがあつてか、ハンスタ部隊の兵士達と合流することができたシュナイゼルの口は重たかった。

『大尉、自分達は……敵前逃亡した処罰を受けることになるのでしようか』

「いや、そんな必要がどこにある。君たちはあの悪魔から生き延びた稀有な存在だ。むしろ誇つていい！　弟の無念も……それで少しは晴れよう」

恐る恐る尋ねたハンスタ部隊の兵士の声が一瞬明るくなった。シュナイゼルは弟のハンスタと違い、冷静で計算高い戦術が得意

だと知れ渡っている。オールバックにした金髪を抱えて、悲痛な声を漏らす様を見る限り、兵を捨て駒とは思っていない。

兵士達に無意味な突貫をさせるなどシュナイゼルならばなかったであろう。

「敵機の戦闘データは取れたか？ 何でもいい得体の知れない脅威に立ち向かうためには君達の情報が不可欠になってくる。私の機体にデータを送って欲しい」

『ハッ！ ですが、何も今ここで送る必要はないと思うのですが、私共の機体は損傷していますし、データのバックアップを取れる施設に戻ってからの方が』

「いいや、奴らが追撃に来る可能性もある。万が一、そうなれば情報を共有している方が助かる可能性も高くなる。私も部下を無駄に殺したくないのでな」

生き延びた兵士達はシュナイゼルの計算高さに心を打たれたように、シュナイゼルへデータを送り始めた。

ハンスタ部隊の兵士達とて追撃される可能性を忘れていたわけではないであろう。ただ、頼りになる上官に巡り合えたことによって、思考が少し乱れたただけなのだ。

「……最後にもう一度確認しておきたいのだが 生き残ったのは君達だけなんだな」

『ハッ！ 我々以外は……皆、死にました』

再度確認するようにシュナイゼルが兵士達に問うた。悔やまれるような表情を見せ、そして

「それならば 後片付けが楽でいい」
「え？」

シュナイゼルの悪魔のような笑みと共に攻撃命令が響く。命からがら生き延びた兵士達は信じられないといった様子で。

『大尉！？ な、何を！！ ああー！』

四名の絶叫が爆発と共に途絶えた。

「昼間にハンスタから聞かなかったか？ お前達は頭が悪いからもう一度だけ言つてやろう。 私は弟にこう言った。 “ 全ての実験物と資料を廃棄しろ ” とね。 “ 全て ” だわかるか？ 勿論、資料のことを知っている君達兵士も。 弟のハンスタ共々一緒に処分されるという意味だったのだが…… この様子だと上手く伝わらなかったようだね」

シュナイゼルの機体が片手を上げて射撃止めの合図を部隊に送る。

「弟は頭が悪いからなあ…… 兄の意図が伝わらなかったとしても仕方無いことかもしれないな」

できの悪い弟を持つと困るよと両手を返し、部隊の人間を笑わせるシュナイゼル。

そして、おもむろに右耳のピアスに手を当てて、何者かと連絡を取る。

「聞こえるかな？ ヘクセクルス 人造魔女ゼロ…… 大した兵器だ。 いや、人種と言った方が良かったかな？」

部隊に今迎撃した味方を回収するように指示を出しながら、嫌味らしく笑う。

「いやいや……援護しなかったんじゃない。君のように我々は戦えないんだよ。下等な種族だからね。そう、それに我々は今、ロイ・ゲハルト少佐の命令で先行して基地の様子を見ることになっている。わかるか？ 見るだけだ、戦闘しろとは一言も言われていないんだよ」

憎まれ口を言われたのか、相手をなだめるように声を柔らかくして鼻で笑った。

「ふん、どうとでも言ってくれ。私は人間だ。君達、人造魔女とは違う。まあ、いずれにせよ、君達のおかげで馬鹿な民衆をようやく動かすことができる。共に悪魔を倒す。目的が一緒なのだから多少のおいたは私が何とかしよう」

言いながらシュナイゼルは、先ほど破壊したMF部隊の残骸を踏み潰す。

多少のおいたはな　と通信先の何者かにも伝わるように機体をグリグリと挟り込みながら続けた。

「そうさ、我々共和国はギブ・アンド・テイクの関係が大好きなんだね。使える者は使う、使えない者は壊す……ネロ、君が使える者であることを切に願うよ」

右耳から手を離し通信を切る。

そして、作業を開始している部隊の人間たちをモニターで見やるシュナイゼル。

「さあ、今から少佐には残念な知らせをすることになる。我々は、迅速に基地に向かったが基地に生き残りはいなかった……破壊され

た機体からは戦闘データの抽出は不可能だったと。 実に嘆かわしい悲劇だ!!」

拳を振り下ろしながら、心底残念そうな声を出すシュナイゼル。部隊の人間はシュナイゼルの元に集まり、指示を待つ。

「皆の者、ご苦労。 各機基地に赴き、生き残りがいないことを確認しろ！ 生存者は発見次第、殺せ」

緑色のMF部隊がマシンガンを構えながら一斉に基地へと向かう。その姿を眺めながら、シュナイゼルは親指を噛みながらハンスタの部下から送られてきた戦闘データを見ている。

「……データを拝見した限り、ゼロという人造魔女……あのネロより強い。 是非とも捕獲したいものだ」

第45章 狩猟の女神（後書き）

M F 焰の魔科学兵器・構太刀の表記を『構い・太刀』から『構太刀』に変更しました。

きつとこつちらの方がスマートな気がします。スマートフォンな気がします。

読者の皆様、今後ともよろしく願います。

第46章 矛盾

荒野を疾走する蒼い機体。月花が地平線から零れる朝日に向かって直進している。

最高速度に達したこの機体に付いて来れるMFなど、共和国でも数機だけであろう。

「セレネ、機体反応はもう無くなった。……撒けたみたいだ」

前部座席で月花を操縦している少女に向かって声を飛ばすリオン。村の惨状が頭を過り、言葉に活きが出ない。それを見通したのか蒼い機体を華麗に操縦する少女は長い蒼髪を手で払いながら返答する。

「そうか。少し速度を落そう。リオン……大丈夫か？」

「ああ……大丈夫だ」

ブースターを弱め、パイルバンカーの付いた両足で月花に歩行させるセレネ。

セレネに心配される程にリオンの声は弱々しかった。いつもなら無理にでも元気にみせようと努めるだろうが、脳裏にこびり付く映像がそうさせてはくれない。

助けたかった少女が自害した。助けた女の子が殺された。そして、死体の山を見せつけられた。

「……無理はするな」

そう言うセレネの声にも全く張りが無い。

何かを振り払うかのように首を振り、声を張って彼女は不満そう

に続ける。

「ところで、なんで私達が軍隊に狙われるんだ？ 私達はむしろ保護してもらってもいいぐらいだぞ！ あいつらは私が頑張って作っていたものが見えなかったのか！」

「わかんねえよ……あの村の軍少尉を見ただろ。腐ってんだよ、軍そのものが。俺達を守ってくれていると思っていた軍は自分達しか守らない。爺ちゃんが言った通り逃げて来たけど、これじゃ俺達が村を壊した犯人みたいじゃねえか！！」

座席に拳をぶつける少年。村で別れた老人に巻いてもらった両手の包帯。少年の心のように今や土塗れで黒ずんでしまっている。

リオンとセレネ、そしてドクターM。この三人は突如として軍に襲われた。

ただ村に残っていただけなのに、MFによる攻撃が警告も無しに開始されたのだ。まるで、最初から自分達を殺すためにやってきたかのような容赦のない攻撃であった。

そんな中、MF部隊の跡を付けて来たというノーシヨンのアルテミスが月花と合流。その場の敵を大型狙撃銃による超長距離射撃で蹴散らしたのだった。

ドクターMもアルテミスに乗り込んでしまい、リオンとセレネは逃げるとだけ言われて村から遠く離れた今の荒野に辿り着いた。

リオンにとって全くわけのわからない事態。どうして自分達が殺されなければいけない。

そんな張り詰めた想いが手を震わせる。

リオンの緊迫した表情を見て、セレネが声をかけた。

「ノーシヨン達が……私達を囷おとしにしたとでも言いたいのか？」

「ならどうして、アルテミスは別の方向に逃げたんだよ！ 逃げるなら一緒にいた方がいいだろ」

「それは、アルテミスと月花では速度に違いがあり過ぎる。アルテミスに合わせて逃げれば、月花は逃げ切れない。だから、じいじいは先に逃げると言っただんだ」

「それも……嘘かもしれねえだろ!!」

「リオン……」

両手で頭を抱えて声を震わせる少年。黒い瞳は潤み始めている。

「もう、誰を信じて良いかわかんねえんだよ……どうしてこんなことに」

虫の鳴くような声。リオンの心と体はとくに限界である。特に精神の疲弊は尋常ではない。

裏切られ、騙され、志の高さゆえに苦汁を飲まされた。いくら真つ当に生きてきたリオンと言えど、優しくなどなれるはずもない。いや、真つ当に生きて来たリオンだからこそ、ショックが大きいのだ。

静まり返るコックピット。動力音が規則正しく音を刻む。

「なら、私を信じろ」

「えっ？」

リオンは両手から少し顔を出し、前部座席に座る蒼髪の少女を見た。何故かムスツとしている魔女。

「だから……私を信じろ。ノーシオンは私達を囿になんか使わない。色々怪しいところはあるが、私達を助けてくれたことに間違いはないじゃないか。ノーシオン達が信じられないなら、私を信じろ」

「セレネ……」

荒んでいた気持ちが自然と和らぐ。茶色く濁った感情の汚水に浄化の波紋が広がって行く。

ノーションが信じられないならば、私を信じると、清々しい程胸を張って言うセレネ。

感情の汚水が押し流される先は目と鼻。

「っず……ああ。泣かないって決めたんだけど、ダメだ……ありがとな」

「な、泣くな！ わ、私は、お前の……か、家族なんだろう？ 礼なんていらないぞ。こ、これぐらい、じよ、常識の範囲内だ！ 任せる！ 私は死なないんだ！ あはっ、あはははー！」

あたふたしながら支離滅裂な言葉と棒読みの笑い声を上げるセレネ。いつも冷静にズレた言葉を残すセレネが珍しく挙動不審に陥っている。

その様が逆に安心感を与えてくれる。

「お、お前は英雄を目指すと言ったな。でもまだ、英雄じゃない。だから、そんなに気負いしなくてもいいんじゃないか。お前は英雄どころか、人間にすらなれていないぞ」

「どういう意味だよ、それ？」

「つまり、そういう意味だ！」

「だから、意味のわからんところで威張るな！」

旅に出た時の賑やかさが月花に戻っていた。リオンが身を乗り出して唸った後、セレネは振り返る。視線がしばらく合ってしばしの沈黙。

何故だか笑いが堪えられなくなり、リオンは笑い始める。それに釣られてか、セレネも笑い声を上げた。

腹の底から悪い気を追い払うような大笑い。

息が切れる程笑い、落ち着いてきたのを見計らってセレネが言う。

「と、とにかく今は安全なところまで逃げるぞ。盗賊のように見るも無残に逃げ失せるんだ。それから色々考えようじゃないか」
「ああそうだな。セレネ、今、ノーションさんと連絡は取れないか？」

「それは無理だ……。アルテミスの通信番号は教えて貰っていない。向こうは月花を隅々まで調べたから知っているかもしれないが、距離も随分と離れているから通信を受けるのも難しいな」
「そうか……」

蒼瞳の少女は通信機器を弄って溜息を付く。それと同時に言葉を漏らしたリオン。

ノーションと連絡が取れないということは、助けを当てにすることはできない。

すなわち、この先、自分達でどうにかしなくてはいけないということだ。

それを察してか、冷静な声でセレネが続ける。

「共和国軍製のマシンガンとブレードは持っていても、月花ならともかく私は軍人相手に勝てる自信は無い」

「……ああ」

俯くりオンから笑顔が消える。

月花を操縦している少女もそれは同じだった。透き通るような蒼い瞳には深い悲しみが見え隠れしている。

メタルフレーム・月花。

脅威的な強さを誇るこのメタルフレーム本来の力を以ってすれば、恐らく軍用MFが束になってこようが切り抜けることは可能だ。

「軍に囲まれたら……どうすれば来るのかわからないが、月花を呼ぶしか」

「呼ぶな！！ 呼ばなくていい…… 呼ばないでくれ」

「あ、ああ。 じゃ、どうすればいい？」

「……俺達が命を狙われる理由がわかれば、戦わなくて済むかもしれない」

お互いに顔を背け、月花が歩く音だけが耳に入ってくる。

短い黒髪を掻きむしりながら、胸の内に宿るもやもやも掻きむしる。

少年と少女の表情は暗くなつたままだ。

軍人達は自分達のことを盗賊と思つて攻撃を仕掛けて来たのだろうか。あの村を破壊したのは自分達であると認識されたのかもしれない。事情を説明し、誤解を解くことができれば殺し合うようなことは防げるか。

だが、軍人達はこちらの話を一切聞く気などなかった。“敵”と見なされていることは間違いない。敵の言うことは信用しないだろう。

答えの見えない出来事にリオンは何度も思考を巡らせた。すると息を短く吐いて、急にセレネが重たげに声を出す。

前に座っている少女の表情は見えない。だが、緊迫した空気がコックピットを満たしている。

「月花は呼ばない。 っと言っても勝手に来るかもしれないが、何とか抑え込む。 もし、軍に追いつかれたら、私がこれで相手を撃つ。 それでいいか？」

「……ああ」

力の無い返事が勝手に漏れた。撃つということは、殺すということ

とだ。

月花が背負っているブレードと腰に付けているマシンガン。蒼い機体色には不釣り合いな灰色と黒の異物に目が行く。

月花が身に纏っている物は、どちらも人を殺すモノだ。それだけではない。月花自体が人を殺す殺戮兵器なのだ。今まで、MFを乗り物としてしか見てこなかったリオンは、ウインド村の事件からずっとそこに違和感を覚えていた。

一方で、ノーションが兵器としてアルテミスを使って敵を殺していなければ、こんなことを考えることすらできなかっただろう。

MFは乗り物である前に兵器なのである。

リオンの気の無い返事を気にしてか、蒼髪の少女が申し訳なさそうに目を瞑った。

「すまん、人を殺すのは……いけないことだったな」

「違う……確かにいけないことだけど、こんな時は……」

仕方ない　　とも言えいいのか。彼女に仕方ないから人を殺してもいいと言うのか。

感覚が、倫理観がおかしくなり始めている。

リオンの脳裏には殺戮を愉しむ“あの彼女”の顔が浮かんでいた。MFを串刺しにし、口元を歪ませる彼女。

もし、あの時の彼女になってしまったら誰が止めればいい。あんなセレネなど見たくも無い。だからといって、セレネに人を殺せと言うのか。手にした銃と剣で殺せと。

一方で、シリスがいたあの食堂で、ノーション達ともめたことを思い出す。リオンは勿論、セレネも人殺しはいけないと主張していた。

ところが今はどうだろうか。血も涙も無い金髪の女性に反論した自分が、殺すことを必死に考えている。

どこを狙えばMFは爆発するのか、この盗んできたマシンガンは

しつかり弾が出るのか、無骨な鉄製ブレードはコックピットを潰す程の威力を持っているのか。そんなことを彼は黒い瞳の奥で考えている。

リオンと同じことを考えていたのか、前髪で自らの表情を隠そうとするセレネ。

彼女が引き金を引かなければ、自分達が殺される。

人を殺してはいけない。命を狙われているこの状況ではそんなこと、ただの偽善だ。

まして相手は殺しのプロ、軍人である。そんなことを気負いしながら逃げられる程甘くない。

そして、リオンを追い詰める警報がモニターから発せられた。

「な……セレネ！ レーダーに反応がある！ 正面で……待ち伏せされてる」

第47章 鬼才

人を殺すことが悪いとか、悪くないとか考えている暇などない。敵は待っていたが、攻撃は待ってくれないであろう。

銃を向けられたら銃を向け返す。撃たれたら撃ち返す。

それでは遅い。

「数は三つ。ハンドレットが二、サウザンドが一。……逃げれるか？」

「逃げようにも、この距離ならどっちに逃げても先回りされて囲まれる……この武器で突破する！」

逃げるという最後の希望を口にするも、セレネに否定された。意を決したように操縦桿を握るセレネ。

瞬間、月花に搭載された六つのブースターが展開される。

蒼い魔女から蒼い騎士へ送り込まれた膨大な魔力が魔力放出機関クリフオート・ドライブを満たす。

機体の息吹が聞こえる

「つうぐー!! 突破するって」

背もたれに体が押さえ込まれているような感覚をリオンが味わっている中、月花は最大速度に達した。

前部座席に座っている少女はリオンの言葉に何の反応も見せない。

「セレネ、お前こそ無理すんなよ! 操縦はできても戦闘はできねえだろう? それに、お前だって殺しはよくないって」

「じゃどうすればいい。人殺しはよくない、そんなこと私だってわかってる。でも、戦闘をしないと殺される」

銃を向けられる前に殺す。撃たれる前に撃ち殺す。殺される前に殺す。

それが、生き残る最善の手段。最善に偽善など不要。

最後まで善人ぶっている自分が情けない。彼女に殺しをさせて、自分は“殺しはよくないですよ”と否定している。

自分の味方になってくれた少女に対して掛ける言葉ではない。

自分はこんなにも捻くれて汚い性格をしていたのかと思い知らされる。

そして、覚悟の違いを思い知らされた“シリス”のことを思い出し、リオンの自己嫌悪は奈落の底に繋がる螺旋階段のように渦巻いて、深く、深く根付いていった。

「……悪い」

「いや、たぶんお前のような反応が普通なんだろう。私は……普通じゃないんだ」

“きつと……何人も人を殺してる”加速による震動音でセレネが口にした言葉がかき消された。

黒髪の頭を垂れて身動きしないリオン。

セレネは死なない。彼女が言う“殺される”という言葉の前には“リオンが”という言葉が省略されているはずだ。

こんなにも卑怯な自分を守るために彼女は操縦桿を握っている。故に、リオンはこれ以上何も言えない。守ってもらっている者がこれ以上何を言えようか。

強くなると誓ったにも限らず。誰かを助けたいと願っているにも限らず。自分自身を守ることすらできない。そして、口だけは正論を唱えている。

何も変わっていない。

「相手のセンサーはかなり優秀だな！ ロックされた！ リオン、揺れるぞ！」

数キロ先の地面に何秒か射撃を行い、土煙を発生させるセレネ。舞い上がる土煙に月花は突入した。恐らくセレネは 戦い方を知っている

土煙に入った瞬間、敵の三機からの一斉射撃。弾痕が蛇のようにうねりながら機体を追っている。

止まれば蜂の巣。

「く！ 月花！ ちゃんと、曲がれ！！」

蒼い髪を乱しながらセレネが叱りつけるように唸る。

月花の重心が右へ、左へとバランスを失ったように大きく揺れ動いている。かろうじて直撃を避けているが、被弾するのも時間の問題だ。

月花に俊敏な動き、特にマシンガンの弾を避けるような芸当はできない。初撃を避けることができたのは土煙と、セレネが早めに方向転換を開始していたからだ。

相手との距離が格段に縮まっている今、弾を避けることなどできない。

そんなことはリオンよりもMFに詳しいセレネの方が重々承知のはず。ならば、彼女が何故こんな戦い方をしているのか。

その答えをリオンは確信していた。

「セレネ、俺に構うな……被弾してもいい。真ん中にいるオレンジ。あのサウザンド目掛けて体当たりしてやれ！ 月花でこの戦い方は無理だ」

「相手は三機だ。……かなり危険だぞ」

「危険でも何でも関係ない。お前が覚悟を決めているのに……俺

が覚悟を決めないわけにはいかねえよ！」

今のパイロットがセレネではなく“月花”だったら真っ先に突っ込んでいただろう。ウインド村を襲った盗賊を一機で返り討ちにした凶悪なメタルフレーム。

あの戦い方に同乗者への気遣いなど微塵も無かった。弾丸飛び交う中、真正面から接近し、コックピットを決る。

一切の無駄がない殺戮術。

「ははっ、いや違うな……ほんとめっちゃこえよ。俺はお前を信じることしかできない。情けねえけど、それ以外何もできねえクソッ垂れだ！でもな、お前の重荷にはなりたくねえんだよ！」

彼女の重荷にはなりたくない。もう重荷になっているが、今彼女のためにできることは彼女を信じることだ。誰よりも信じる。そうすることで彼女の力になれるのならば。

「わかった……私を信じたこと、後悔はさせない！」

ブースターを更に吹かせて直進する月花。手にしたマシンガンを掃射しながら、背負ったブレードを抜き放つ。

砂煙の中から飛び出て来た蒼い騎士。月花の最大速度を持つてすれば敵機との距離はゼロに等しい。

月花のカメラアイを守る様に甲冑のバイザーが下りる。蒼い髪をたなびかせた騎士が明け方の荒野を切り裂くように走り抜けた。

「月花！真ん中のやつを……吹き飛ばせええ！！」

セレネとリオンが共に声を上げる。

弾が尽きたマシンガンを放り投げ、両手でブレードを右腰に構え

た。敵機は眼前。

被弾こそしているものの月花は、ほとんど怯んでいなかった。魔法の膨大な魔力が注がれている騎兵を怯ませるには威力が足りていない。

その様子を見て驚いたか、恐怖したか、固まっている敵機達は全速力で急接近する蒼い物体をどうにか止めようと腰に備えたナイフに機械仕掛けの手を伸ばす。

が、月花の重厚な左肩が真ん中に位置するサウザンドの胸部にめり込んだ。

鉄がひしゃげる鈍い音が荒野に吞まれ、敵機のサウザンドはトラップに跳ねられた人形のように地面を跳ねながら転がっていく。静止したものの、ぴくりとも動かない。

中のパイロットは無事ではすまなかったに違いない。

「おつてえ……セ、セレネ！ まだ残ってる！」

「わかってる！」

味方のサウザンドがベニヤ板のように軽々と吹き飛んで行く様を呆気にとられたようにいつまでも眺めているハンドレット両機。ちょうどオレンジ色のサウザンドと月花が入れ替わったような状態。

両手に花ならぬ両手に敵。

体当たりした月花のコックピットも想像以上の衝撃が伝わり、頭部を強打したが、そんなことを気にしている場合ではない。

殺さなければ、殺される。

「はああ！」

無造作にブレードを横薙ぎに払うセレネ。相手の青色ハンドレットは微動だしない。

直撃だ。そう確信したその瞬間　　リオンは信じがたい光景を目

にして声を漏らすことになる。

「なっ！？ 嘘……だろ」

月花から繰り出された一閃を一機のハンドレットが素手で受け止めていた。これはまぎれもない

「白刃取り……この青いやつ、かなりの乗り手だ。 くっ！」

白磁のような頬に汗を流しながら声を漏らすセレネ。

自由自在に操れる自分の肉体を以てしても白刃取りは難解である。しかも、横薙ぎを受け止めた。

パイロットは鬼才、もしくは相当な経験の持ち主に違いない。

腕と刃が軋めき合い、機体の関節が呻き合う。そんな中、月花とそのハンドレットは目が合った。

『武器を、武器を締めて下さい！ これ以上やると僕はあなたを殺すことになります』

青色のハンドレットから緊急通信が入る。親切なことにモニターフェイスウィンドウ横の表情画面に顔まで晒していた。

画面に映る同世代ぐらいの少年の姿を見て息を飲んだのはリオンだけではなかったらしい。

「っな！ 何だお前は！ あれだけ一斉射撃を浴びせてよくもそんなことが言えるな。 お前達、軍の言うことなんて信用できない！ 私は正当防衛をしたつもりだ」

『先に攻撃を仕掛けたのはそちらです！ これのどこが正当防衛ですか！ それに僕達は、軍ではありません』

栗毛の少年は、少し眉間に皺を寄せながら短髪を掻き上げた。
その言葉を聞いて、目が点になる少年少女。

「てめえ……俺達をあんなクソ共と一緒にするな」

月花の後ろにいた緑色のハンドレットが言いながら、マシンガンの銃口を突き付けた。

いくら魔力が全身に行き渡って防御力が上がっている月花とはいえ、ゼロ距離から発射される銃弾に耐えられるとは考えにくい。

「オイオイオイ、お前ら撃つなよ。頭冷やせ、蒼いの。誰がどう見てもチエックメイトだ」

栗毛の少年の横にもう一つ表情画面が現れ、血の気の多そうな声を発している。

月花の体当たりを食らって吹き飛んだサウザンドのパイロットだ。相当な衝撃があつたはずなのに、何事も無かつたかのようにハンドレット両機の間割って入った。

オレンジ色のサウザンド。胸部が痛々しい程にへこんでいるが、大した傷ではないといった様子である。

銃は突き付けられたまま、白刃取りもされたまま。月花は一切の身動きが取れないという絶望的な状態。

「お前の体当たり、シビれたぜ。シビれたついでに聞きてえんだけどよ、ハNSTAとか言う軍人が新種のMFを発掘したと聞いたが、これか？」

長過ぎる前髪から垣間見える左目の眼帯。青年と呼ぶべきかそれとも大人と呼ぶべきか、髪を女のように後ろで一つに縛っているサウザンドのパイロットは、子どもの様な笑顔で画面から月花を指さ

す。

「ち、違う！ これは俺達のMFだ！ ハンスタのMFなんか知るかよ！」

「そうだ！ そうだ！ 月花は私のMFだ！」

モニターに顔を近づけ、目を見開いて反論する少年少女。恐らく自分達が置かれている状況を飲み込めていない。

「なつ、ガキだと？ 共和国軍もこんなガキ共に新兵器を渡すわけねえ……か。だが、見た限りこんなMFは見たことがねえ。油断させるためにガキを乗せたか」

しばらく思考に更ける眼帯の男。

そして、閃いたと言わんばかりに見えている方の目を見開いた。

「ああ！ お前ら金持ちの坊ちゃん嬢ちゃんってところか！？ それなら納得だ」

突拍子もない発言に一同がコケた。この眼帯の男。脳味噌も片方しかないらしい。

「金持ちの世間知らずはお家帰って、ねんねしてな。追ってきたら殺す、以上！」

煮るなり焼くなり好きに出来る状況なのに月花の肩を軽く叩き、その場を去ろうとするオレンジ色。だが、

「ジエ、ジェノスさん！ 彼らは軍用マシンガンとブレードを持っていたんですよ！ いくら子どもだからと言って、軍と無関係とは

思えません！」

「そうですぜ！ こいつがさっき捨てた銃。 あれはきっとR-E^{アレック}Xの新型だ。 闇市でもまだ流れてえねえ最新モデル！ それに攻撃してきた連中を、はいそうですかって見逃すんですかい！」

息を荒くするハンドレット両機は、もつともな意見でリーダー格の機体呼び止めた。少し驚いたと言いたげな口笛を一つして、振り返るジェノスと呼ばれた男。

そいつらは絶対軍人じゃねえよ、と自信ありげに笑い、健康そうな褐色の肌をほころばせるジェノス。

「しっかしなあゝガキ殺す趣味は俺にはねえんだよ。 でも、お前らの意見も最もだ。 ウイツツはとりあえず、“侍姫”に通信しとけ。 それから、サイ。 お前は、ちよつくら相手してやれ “軍人さん”だ」

ジェノスは眼帯にかかった前髪を払い、猛獣のように凶悪な眼を月花が走って来た方角に向ける。

そこには、五機もの軍用MFの影があつた。肉眼でかろうじて見ることができるといふ距離。リーダーには捉えられているが、リオンには肉眼だけでそれが軍かどうかなどわからない。

そして、軍用MFはサウザンド。ハンドレットで太刀打ちできるはずがない。

それはウインド村で思い知らされている。盗賊などという半端な人間が使っているハンドレットはサウザンドに勝てなかった。日々訓練を受けている軍人の乗るサウザンドなど比にならないであろう。

「……相手にとって不足は無いですが。 僕の手に残りそうなら……よろしく願います、ジェノスさん！」

「まあ、余ることはねえだろ、期待してるぜ新人」

サイとは栗毛の少年だった。メタルフレームで白刃取りをする脅威の腕を持つ少年。

サイの乗る青色のハンドレットを見送り、ジェノスが呆れたように手を上げる。全く援護する気などない。それは、月花に銃口を向けたままのウィッツと呼ばれた緑色のハンドレットに搭乗する者も同じこと。

「あんたら、何考えてんだ！ ハンドレット一機であれだけのサウンドに勝てるわけない！」

「いんや、助けなんていらねえ、いらねえ。アイツは 天才だからな」

まあ、黙って見てろ、と月花からブレードを取り上げるジェノス。眼帯の男は、欠伸をしながら軍仕様ブレードの善し悪しをただ暇そうに見定めている。

リオンは、ジェノスという男の思考回路がまるでわからない。彼の目的は何なのか。

ジェノスの態度から今すぐここで殺されることは無さそうである。しかし、この気まぐれそうな男のこと。下手に刺激するのはまずい。恐らく白刃取りをする脅威のメタルフレーム乗りは軍に殺される。そうなれば、残る相手は二機。

この状況から隙を生み出せるかわからないが、隙あらばセレネが上手く立ち回ってくれるはずだ。

とりあえずモニターに向かって会話を試みる。

「あんたら……一体何者なんだ」

「俺達？ 俺達は……“義賊”。 んで、俺はその頭」

まさかここまで素直に答えると思っていなかったため眼を丸くする少年。その間抜けそうな顔を見て、爆笑するジェノス。

義賊。リオンが彼らの存在意義を知ることになるのは、まだ先の話である。

第48章 公に潜む影

「で、生存者はゼロ……だったと」

明朝、優しい朝日の光に包まれながら、村人のいない村を眺める茶髪の男。軍服の襟には少佐の証である正六角形の襟章が付けられている。

腕を組んでいるその男は部下からの報告を一通り聞き終え、鼻で笑った。

血痕、崩壊した基地、MFの破片、そして、喉に張り付くような死臭。これだけの惨状を目にしても涼しい顔をできるのは、さすが軍人と言ったところであろうか。

だが、彼、特有のちゃらけた雰囲気は微塵も無い。

そのことからこの惨状を善しとしていないことは、部隊の人間ならば理解できるであろう。

「報告ご苦労、下がっていいぞ」

「ハッ！」

先にこの村に到着していた隊員が敬礼をし、上官である彼に背を向け去って行く。

その姿が完全に見えなくなるのを見計らって呟いた。

「ポエム軍曹、お前はこの状況をどう見る。　　って……お前、いい加減にMF酔いを治せ」

勇ましい少佐の側で膝を付いたまま、げえげえ吐いている黒髪の軍人に視線を配る。

少々呆れたといったように片目に手を当てる茶髪の男。

「はあ……はあ、ハッ！ お見苦しいところを失礼しました！ シュナイゼル大尉を疑うわけではないですが……少し報告内容が完璧過ぎる、いえ、この短時間で作ったとは思えない程のできかと」

「いや、構わん。俺もそう感じていた。だいたい、一切の無駄を切り捨てるシュナイゼルがこんなものをわざわざ作るとは考えにくい」

「ゲ、ゲハルト少佐……それは少し言い過ぎですよ。大尉だって信仰する神はいるはずです」

唇に残った胃液を忍ばせていた布切れで拭き取り、ポエム軍曹はチャームポイントの黒縁メガネを整えてロイ・ゲハルトに意見する。とても軍人には見えない優男。人など絶対に殺せないであろう童顔の持ち主のポエムにロイは、さりげなく水を手渡す。

「シュナイゼルは、盾になって死んだ兵達の墓すら作らなかったやつだ。アイツは神なんて信じている柄じゃない。そんな奴が、村人全員の墓を作っただと？ 笑わせる」

ロイは村の入り口に並べられた数十もの墓を見やる。花こそ添えられていなかったが、全て共和国の国教であるセフィラ教の墓構えである。

「心外ですね、少佐。私とて、信じているモノはありますよ」

落ち着き払った声がロイの背後からした。革靴の音を鳴らしながら近づいてくる金髪オールバックの男。

「シュナイゼル、ちょうどお前に聞きたいことがあったんだ。戦死したハNSTA少尉についてだ」

「ああ、弟のことですか。 ええ、何なりとお聞き下さい」

ポエム軍曹が「少佐！ それはあんまりです。 少尉は大尉の
」と横で抗議したが、シュナイゼルがあまりにも涼しい声で許可
したため、黒縁メガネを整えて押し黙った。

「少尉は誰に殺された」

「“帝国の悪魔”です。 先ほど、同伴した先行部隊の者に報告さ
せたと思いますが」

「何故、それがわかる。 我々は“帝国の悪魔”ではなく、帝国の
隠密を探せと命令されて来たはずだ。 何故、隠密の仕業ではなく、
悪魔の仕業だと断定できる」

ロイが視線を逸らさずに、シュナイゼルの青い瞳を見つめた。 逃
がさないと、目でそう言っているようだ。

「なるほど、報告した者の報告の仕方が悪かったようですね」

仕方ないとも言いたげな溜息を付いて、墓の前を無造作に歩き
回る大尉。 鋭い吊り目の目は、上官の瞳から逸らしていない。

「まず、第一に、敵は大胆にも迎撃システムを正面から突破して来
たと思われます。 このシステムはハンドレットの小隊が一つあ
れば突破できる程度ですが、正体を明かしては不味い帝国隠密がそ
んなムダなことをするとは思えません。 よって、隠密以外の
何ものかの仕業」

じやりりと、砂を踏みしめ、首だけを上官に向け更に続けるシュ
ナイゼル。

アイコンタクトを取って続けた。

「第二に、基地内には“帝国の悪魔”の物と思われる破損パーツが幾つも発見されています。ここの基地に黒い塗装をした機体は置いていません。そして、決定的なのは、少佐はまだ目にされていないですが、禍々しい魔科学兵器が一本残されていました。恐らく悪魔が扱っていた物でしょう。基地内で奴が暴れた何よりの証拠です」

言い終わったシュナイゼルは、オールバックの髪を更に上げて髪を整える。

ロイは顎に手を当てながら、口を開いた。

「ほお、魔科学兵器か……後で見に行きましょう。では、質問を変えよう。シュナイゼル、隠密は現在どこにいますか。そもそも本当に隠密などいたと思うか」

「隠密は存在します。そして、奴らの目星も付いています」

そう言って一枚の写真をロイとポエム軍曹に見せるシュナイゼル。ポエムが写真を手に取り、爆煙の中で僅かに写っている機体をロイに指さして教えた。

「この写真に写る白銀の機体。そして、操縦者である金髪の女が隠密である可能性が高いです」

「大尉、何故パイロットが金髪の女だと思われるのですか？ その女の写真も見せて頂けますか？」

「残念ながら無い。これは殺される寸前に我が部隊の者が残した写真です。女の情報は、かろうじて生き残った者が最期に言い残した言葉から入手しました。優秀な兵達です。無駄死にしなかった」

爆煙から垣間見える白銀の機体をまじまじと見て、なるほど呟くロイ。

「よくわかった。ここまでの確かつ無駄の無い調査を既に終えているとは、さすが大尉だ。少佐を奪われるのも時間の問題だな。下がっていいぞ」

「ハッ！ ふふ、私などではまだ、少佐の地位に付くのは無理というものです」

微笑をして調査が行われている村の中に振り返って戻って行くシュナイゼル。振り返った瞬間にまだね、と残酷に呟いたことは誰にも聞かれていないであろう。すると、

「シュナイゼル大尉、止まれ！！」

腹の底から叱咤するような声がその場に響いた。名前を呼ばれた本人が肩をビクツと震わせ、振り返る。

そこには敵を見る様なロイの視線があつた。

「ハッ！ 何か他にもご用でしょうか？ ゲハルト少佐」

「墓を作るように命じたのはお前だったか？ お前が墓を作つてやるなど、少し以外だったぞ」

冷静なシュナイゼルとて、陰口を聞かれたのではないかと疑っていたのであろう。ロイの質問を聞いた瞬間に、彼の薄い唇が歪む。

そして、先程と同じような声のトーンで、

「はい、私です。罪無き人間があまりに無残に殺されていたので」「そうか、さっきは信じている神などいないなどと言って悪かった

な。少しお前を見直したよ」

「いいえ、気にしていませんよ。戦場で死んだ者を埋葬すること
も軍の仕事です」

仲間に見せる最高の笑顔。信頼の証をシュナイゼルに送り、背を
向けるロイ。

「なあ、一つ聞いていいか。村人はどのように殺されていた？」
「ハッ！……どのように、ですか」

シュナイゼルの息を飲む音がした。それ程の沈黙がロイの発言の
後に発生したのだ。

自分達が埋葬したのならば、絶対に知っているであろう事実。今
まで難解な考察を無駄なく答えていた大尉が、死体の状況を説明す
ることにどうしてこれほどの時間が掛るのだろうか。

「MFで踏み潰されている者が……ほとんどでした」

「そうか……そいつは酷い死に方だ。然るべき場所に埋葬する時、
俺も確認させてもらおうとするよ。俺達の力が及ばず殺してしまっ
た者達だ。死者全員と顔を合わせておくぐらいの誠意は見せねば
いかんだろ」

感情の無い声と眼で金髪の軍人を睨むロイ。相手の出方を覗つて
いる。いや、これは試していると言った方が適切かもしれない。

「いいえ、少佐がそのようなことをする必要はありません。我々、
下の者が責任を持って然るべき場所ができれば墓を移します」

シュナイゼルはそれだけ言い残して逃げるように去った。
貯め込んでいた息をゆっくり吐き、ポエム軍曹がロイの背中を見

上げている。

「はあ……少佐、あまり大尉を刺激しないで下さいよ。僕は
尉達とここに残って調査をするんですから」

「刺激？ 俺は大尉を褒めただけだ。そういった意味では良い刺
激だったかもしれないな　ところで」

してやつたり、と言った表情で笑うロイ。
が、表情を一変させ、横目で軍曹の黒い髪に視線を落した。

「悪魔が殺した相手の墓を掘るか、軍曹？」

「サービスの良い悪魔ですね。永眠させるベッドまで用意してく
れるなんて」

「隠れるので忙しい敵国の隠密が敵国民の墓を掘るか、軍曹？」

「とんだ残業ですね、僕なら掘りませんよ」

二人の意見が一致したと、目を合わせる少佐と軍曹。

「じゃ、一体誰が墓を」

「掘ったのか」

最後の言葉を軍曹に言われ、よろしく頼むと肩を叩いてその場を
去るロイ。その期待に応えると敬礼で意思を示す童顔の軍曹。

ポエム軍曹の敬礼に見送られて、ロイは並木のように並んだ墓の
道を堂々と歩く。

「どこぞの埋葬屋……早く見つけなければ消される。　ハンスタ……
奴はここで何をしていた。　シュナイゼルも一枚噛んでいると見
て間違いない。　そして、悪魔に隠密……つくそ、わからん」

一人になった途端、推理を開始するロイ。
苛立っているのか、どこに当てた人差し指がとんとん動き続けている。

「ん？ これは」

ロイは踏みつけた一枚の赤い葉を拾い上げ、指でくるくると回す。
棘が生えたような痛々しいフォルムを持つ特徴的な葉。荒野に生える植物の葉ではない。

何かを予感したのか、整った顔だちの口元を緩ませた。

「フツ……ナンセンスだ」

巨大な弾跡が残る家々、全ての弾痕はシュナイゼルの白銀のMFと蒼のMFを殺すために撃たせた軍によるものである。

廃墟の外れに人気は無い。差し込む朝日も瓦礫によってそこだけ影が出来ている。

金髪オールバックの男、シュナイゼルが凜々しい顔を歪ませていた。

「ただのぼんくらかと思ったが、わりと頭も回るようだ。少佐の階級は伊達ではないということか」

「大尉……他の者に聞かれます」

耳打ちで注意を促すシュナイゼルの部下。ロイに現状報告をしていた兵である。彼の耳打ちに軽く手を上げて下がれと命じる大尉。そして、シュナイゼルにしか聞こえない程の声で、

「大尉、逃げ出したもう一機の青いMFですが……迎撃に送った五機のMFは全滅です」

「青い方は戦闘もせず、驚異的な速度で逃げ切られたとふざけた報告を聞いたが？　なるほど、伏兵がいたのか」

シュナイゼルが遠くを見ながら、部下の反応を待っている。

「いえ、伏兵はおらず、単機で我が部隊と戦闘したもようです」

「ほう？　かなりの腕ということか。魔科学兵器を隠し持っていたか……あるいは、それに匹敵する武器を。それで、敵サウザンドの機体色以外の特徴は？」

言葉に詰まる兵士。よく見ると手が震えていた。

「は、ハッ！　それが、敵はハンドレットです。荒野に出た後、待ち伏せていたかのように舞い戻り……部隊の者を」

「ただのハンドレットにやられたと？　他に情報は？」

吊り目を更に吊り上がらせて怒りを露わにするシュナイゼル。ハンドレットがサウザンドに勝つなど有り得ないことである。まして、軍用MFは装備も行き届いており、武装した盗賊などでも太刀打ちできない強さを誇っている。

それを　ただのハンドレットにやられたと。

「て、敵はほとんど丸腰だったようです、ひっ！」

「丸腰のハンドレットに五機ものサウザンドがやられたと？　そしてそれ以外何もわからなかっただと？　はっ、屈辱的なことだよ、これは。理解しているか？」

「ハッ！　十分に！　十分に理解しております！」

「それならいい。知つてると思うが、私はムダが大嫌いだ。

君の給料、いや、君の命がムダにならないことを祈っているよ、君の代えはいくらでもいる」

にこやかに笑っているシュナイゼル。兵士はこの世の終わりに遭遇したような顔で地面に座り込んだ。

「白銀の機体は隠密としてゲハルトが探し出してくれるだろう。敵国とのデリケートな問題だ、白銀の機体の存在が表沙汰に出ることは無い。が、問題はこっちだ。青のハンドレット、君に始末することができるか？」

無言でやらなければ殺すと言われているようなものだ。この兵士に選択肢など無い。

「ハッ！ 始末してみせます！ あの……大尉。お言葉なのですが、白銀の機体は本当に隠密なのでしょうか？ 万が一、冤罪えんざいだった場合……そのように報告した私の立場は」

「つまり心配をするな。白銀が一般市民であった場合、それを裁いたゲハルトの首が飛ぶだけだ。そして、我々にとって白銀の機体が隠密であるかどうかなど、どうだっていい。ここで行われていた実験を知った可能性がある。それだけで十分な罪だと思わないか？」

「は、ハイ！」

冷や汗を流しながらも、悪魔の囁きに答える兵士。

シュナイゼルは、「他に報告は？」と手を翻す。その鮮やかな動作を見て、慌てながら報告を再会する。

「っあ、標的は恐らく“ハイエナ”の一味かと」

ズボンのポケットから一枚の写真を取り出す兵士。それはロイには見せていない青いMFの写真だった。

「このエンブレム……間違いない“戦争のハイエナ”。略奪・虐殺の限りを繰り返して来たハイエナ共……都合が良い。害虫駆除という名目で上を利用することも可能だ。君が死ぬ確率も少し減ったな」

写真を取り上げ、写真を破り捨てる金髪の男。
突然の出来事に兵士は言葉が出ないようだ。

「これでこの事実を知っているのは私と君だけだ。ここで行われていたことを口外されると非情に不味い。青のMFを見つけ次第そのムダな口を抉り取れ」

風に乗って消えていく、サイが乗っていた青いメタルフレームの写真。

「“戦争のハイエナ”を討伐する部隊は私が何とか要請する。部隊が揃い次第、君は精鋭を揃えてこの“青”を殺せ。いや、情報を共有している可能性もある。探し出して、皆殺しにしろ」
「皆殺し……ですか、ハッ！」

シュナイゼルの眼から寒気を感じたのか背筋を震わせ、敬礼をする兵士。

兵士を下がらせ、親指の爪を噛みながら言葉を垂れる金髪の男。

「青色のネズミは彼が。帝国の悪魔は国が探し出して始末してくれる。そして、隠密はゲハルト。……ふふふつ、実に、実にムダが無い！」

歡喜の声を上げ笑いを堪えるシュナイゼル。実の弟が死んだことなど、もう忘れているかのようだ。

村の物置きだったボロ小屋を一望し、側に作られた一つの小さな墓に視線を落す。

土の上には遺品と思われる黄色いカチューシャが備えられていた。いぶかしげに目を細めるシュナイゼルは、墓に近づき木に彫られた文字を読み上げた。

「“百万の命を救った英雄”……だと。ふん、笑わせてくれる。英雄様の墓だったとはな……どこの誰か知らんが、ムダなモノを作ってくれた」

文字の彫られた木を薙倒し、靴底で墓標を踏み砕く吊り目の男。

「この世に英雄など必要無い。時代はいつも魔女を求めているのだよ、魔女と言う強力な絶対悪をな！」

足形の付いた英雄の墓へ、唾と一緒に言葉を吐き捨てシュナイゼルはその場を去った。

第49章 眼帯の裏側

太陽が南中した午後。雲一つない青空の下。

自然で形成された要塞である岩山で、MFを風避けにしながら堂々と昼食を作っている一味がいた。

「つてことは、レオン。てめえら、意味もわからず軍に追われているのかあ？」

「レオンじゃねえ！ リオンだ！ あんた何回、人の名前を間違えんだよ！」

「細けえこと気にすんなって、“レ”だろうが“リ”だろうが大して変わんねえだろ？」

野営しているジェノス一味、こと“戦争のハイエナ”。

リオンは和やかにジェノスと会話をしていた。いや、和やかに尋問されていると言った方が正しいかもしれない。大方の事情を説明し終えたにも関わらず、必ずリオンの名前だけ間違える。

何度も名前を間違えた挙げ句、笑いながらバンバンと勢いよく背中を叩いてくる眼帯の男。むせ返っている黒髪黒瞳の少年にとって、違う名前を擦りこまれる誘導尋問になりつつあった。

「ジェノス、それは違うぞ。さっきから何度も言っているが、レオンの方が明らかにできる男だ。それに比べ、リオンは……ううつ、可哀そうに」

「だから、レオンって誰だよ！？ そんなことより、どうして俺達を……助けてくれたんだ」

架空の存在“レオン”と目の前にいる少年との格差を想像したのか涙ぐむセレネ。彼女をよそにリオンはおずおずとジェノスに疑問をぶつけてみた。

いきなり発砲し、尚且つ、軍に追われていた身である。普通の人間ならばあの時、軍に加勢するはずなのだ。今もこうして野放しにするのではなく、縛り上げて厳重に監視することぐらいされても仕

方ないであろう。

が、ジェノス一味はそれをしなかった。むしろ、歓迎的に昼食を取る仲にまで発展している。当然、この状態に疑問を抱くリオンだった。

少年の心境をより不安にさせる要因は他にもある。

緑のハンドレットを点検している髭もじやの中年男だ。コックピットから顔を出し、ジェノス達との会話中、ずっとリオンを睨みつけている。

泣く子も失神する強面。盗賊団の頭と言っても誰もが頷くであろう中年男と視線が合ってしまい肩を震わせるリオン。

すると中年の男は顔を更に強張らせて馬鹿でかい声を上げた。

「軍に襲われるやつは、だいたい俺達の仲間だあ。なあ、頭^{かしら}！」

笑っているのだろうが相変わらずの強面。目に力があるというよりも、眼球に筋肉があるかのようだ。

歓迎されているのか、怒っているのか判断に迷うリオンだったが、ジェノスからの陽気な声で前者であったと理解する。

「そう言うこった。俺達は軍の横暴で苦しめられているやつらの代表つてとだからな。ああ、あの髭野郎はウィッツ。お前らの機体に銃口突き付けてたMF乗りだ。キレるといきなり発砲し始めるからあんま刺激すんな」

長髪をなびかせ、親指で自分の背後を指さしながら簡単な紹介を済ませるジェノス。

その弾けんばかりの褐色肌の笑顔からは、つい先ほどまでお互いが殺し合っていた仲という実感は無さそうに見える。

リオンが一番衝撃だったことは、いかにも悪党という面構えのウィッツが十歳は年下であろうジェノスに対して敬語を使っている点だ。

ウィッツが敬語を使う相手であるジェノスは、ただ者ではないのである。

砂を踏む音が聞こえ、そちらに目をやると、

「僕は賛成しかねます。軍用のマシンガンとブレード、それに加えあの見たことも無い機体……あなた達は本当に軍関係者ではないのですか」

「よお、天才。ハンドレットの点検、終わったか。まあ、そこ座れや、飯にしようぜえ」

ジェノスの魔力によって燃えたぎる魔力コンロを挟んで、栗毛の少年がきちりとした口調で疑いの言葉を述べて歩み寄って来た。

ジェノスに言われるがままコンロの横に腰を下ろす少年サイ。背丈はリオンより小さいが、気迫というか、オーラのようなものが気高さや自信の色に染まっている少年だ。

勘ぐるような視線を浴びせるサイにセレネの蒼い瞳がはつきりと答える。

「私達が軍関係者？ それは誓って無い。私達は村に残っていたらいきなり軍のMFに襲われたんだ。……私は、何も悪いことはしていないぞ」

「何で今、意味深に俺の方を見た？俺もしてねえよ……軍の方が悪いことをしていたんだよ！だから、ハンスタに殴りかかろうとして……返り討ちにあって……それから」

そこまで言ってリオンの声は消えていく。胸に刺さった棘がまた深く食い込んだ。

思い出したく無い夜のできごと。だが、忘れてはならない小さな英雄の存在を。

「はは！あの王様気どりのクソ軍人を殴ろうとしたのか？肝っ玉は一人前ってとこだな！いや……タダの馬鹿か」

「失礼なやつだな、リオンは馬鹿なんかじゃない！……アホなんだ」

「うつせえ！」

「かつははは！お前らおもしれえな」

腕を組んでうんうんと頷く長髪ジェノスと蒼髪セレネ。

気に入ったと声を上げているジェノスを無視して、栗毛の少年サ

イがりオンに話を切り込む。

「率直に尋ねます。あなたは どうして軍用のMFとブレードを？」

「誰かが基地を荒らし回った後があったから、生きてる武器を拾ったんだ。自衛のためだよ」

「では、あの機体は軍が発掘した機体ではないのですか？」

「違う！ あれは、俺達が洞窟で見つけた機体だ。機体の詳細は俺達もまだわかってない」

「では」

「サイ……もう止めとけ。こいつらも軍に因縁つけられた仲間だろうがよ？ 新型を逃したのは惜しいが、お前がバラした軍用MFのパーツがある。それで今日の収穫は十分だ」

ジェノスがコンロの上にある鍋を開けながら、中身を分け始める。ほいつ、とりオンとセレネの手に羊の肉、黄身、野菜の端切れなど余りもの掻き混ぜてプチ込んだ雑^{かゆ}な粥を渡す。

栄養が取れることに間違いないが、雑な性格をしているジェノスが調理しただけあって、雑な料理である。

そして、器もかなり汚い。元は綺麗な木製食器だったのだろうが、目の前にあるのは染みや、へこみ、欠けた跡などが離れて見てもわかるものだ。

黄緑色のペースト状になった米の中に浮かぶ、茎と思われる緑色の物体をセレネは恐る恐る突っついてる。

食事を分けて貰っている手前、こんなことを思うのは不謹慎なのだろうが、リオンは食欲が湧かない。

火が通っているため、腹を壊すことはないだろうが。

「……これ、食えるのか。リオン、“あーん”してやろう」

「お前がしようとしてるのは“あーん”じゃねえ。毒見だ」

ひそひそと耳元で会話するリオンとセレネ。

そんな中、ジェノスから欠けた木製の食器を受け取るサイはさっさとスプーンで粥を食べ始める。

「わかりました。ジェノスさんが、そう言うなら僕はもう何も言い

ません」

「そうそう、頭の俺がオツケーって言うてんだからいいんだよ。新人」

「だから……ジェノスさん。僕はこの団体に入った覚えはありません。勝手に新人メンバーにしないで下さい」

「え？ あんた、こいつらの仲間じゃないのか？」

呆れたような声を出す栗毛の少年に思わず質問するリオン。隣に座っているセレネは、ふーふーと必死に粥を冷ましている。どうやら、サイが美味しそうに食べている様子を盗み見て、食べる決心ができたらしい。

「ええ、正確には仲間ではないですね。僕は人捜しをしているだけです。ジェノスさんが、一緒に来ればMFと人捜しの人員を貸して下さるというので、今は一緒に行動させてもらってるだけです」

「じゃ……青いハンドレットってあんたの機体じゃなくて借り物なのか！？」

「え？ あ、はい。MFなんて高額過ぎて買えませんし、メンテナンスのことを考えると僕にはちょっと」

リオンは改めてこのサイという少年の凄さを思い知らされた。借り物の機体であれだけの動きをしてみせる。そして、話しぶりから毎日MFに乗っているわけでもなさそうだ。

ハンドレットや発掘用MFだったとはいえ、幼少の頃からMFに乗って来たリオンだからこそわかる。

サイとリオンでは天と地程の才能による差があるということに。

呆気にとられているリオンを見て、ジェノスが褐色の顔を寄せながら自慢げに言う。

「なあ？ なあ？ こいつは天才なんだよ。是非ともウチに欲しい人材だかんよ、どうにか懐柔させようとしてるんだけど、興味は無いって言いやがんだ」

「僕には忠誠を誓った方がいます。生憎、この身は一つ。ジェノスさんの期待に応えることはできません」

「忠誠だあ？ おめえは、帝国の騎士様かつつの。頭あ！ 姐さんから連絡ありやしたぜ。“村は壊滅状態、ロイ・ゲハルト部隊、その他三部隊が在中”だそうですね」

緑色のハンドレットからサイを馬鹿にして叫ぶ中年のウィッツ。どうやら仲間からの連絡らしい。ジェノスは食事を中断し、ウィッツのMFまで出向いて指示する。

「そうか、“荒野のチーター”がうるついてやがったかあ。引き下がって正解だったな、アイツがいるとは聞いてなかったぜ。危なく全員お縄に付くとこだ。お姐さんにはバーバ・ヤーガ村に行けって言っとけ……それと“姐さん”は止めとけ、聞かれたらお前……殺されっぞ？」

通信機をさり気無く指さし忠告する若頭。恐怖の形相を浮かべながら髭もじゃウィッツは、通信を再会する。

ウィッツに指示した後、伏目をしてジェノスは物想いにふける。

「アイツも今や……少佐。いつまで馬鹿してやがる」

サイとリオンがそれとなく会話をしている様子を眺め、若頭が何か思い出したように声を上げる。

「おお、そうだ。サイの探している女、こいつらに聞かなくて良いのか？」

思い出したように義賊の若頭がサイの小さな肩を抱いて話題を変えた。

「は、はい。先程も言った通り、僕は人を探しています。金髪でわんぱくな女性なのですが、心当たりはありませんか？」

きちりとしたサイにしては、ジェノスのように荒い人物説明。

リオンの中では金髪わんぱく女と言えば一人しか該当者はいない。しかし、金髪でわんぱくな女性など、この世界に一体何人いるのだろうか。

「あ、あのさ。似顔絵とか無いのか？ 他に特徴を教えてもらわないと答えようがないぜ？ 髪が長いとか、目の色とか、体型、肌の色……なんかあるだろ」

「金髪の女と言えば、ノーションしか私は思い浮ばないぞ、ふもふもふも」

ジェノス特製“雑な粥”を口に詰め込みながら、ふごふごと口を動かし続けるセレネ。

「わけあって……写真などは持って来ていません。しかし、他の特徴と言えば、髪は長いです。それから……目の色は青で、体型は細身で、それから、背丈はセレネさんより少し低いぐらいで……あ、肌の色は白です。恐らく、日焼けもしていないでしょうし」

「ノーションは私よりも背が高かったな。んぐ、んぐ」

「そうだな……さっき話したと思うけど、金髪の女性っていうと俺達を村から逃がしてくれたノーションっていう女の人しか心当たりは無い」

村を脱出して以来、ノーションとドクターMの行方は一切不明である。

あの二人が簡単に捕まるはずもないが、老人の命が帝国と共和国の命運を握っていると耳にした事が忘れられないリオン。

口周りを汚しながら、底に溜まった汁を飲み干している蒼髪の少女を横目にリオンは短く息を吐く。

ノーションとドクターMのことについて、ジェノス達に相談しようにも誰がそんな突拍子の無いことを信じると言うのか。

そもそもジェノス達の目的がわかっていない以上、下手に情報を提供するわけにもいかない。

リオンは魔力コンロの青白い炎で煮え切る粥を見つめながら思考を行き詰らせた。

「そう……ですか。恐らくその方は違います。僕の探している方は、魔術師ではありませんから。貴重な情報をありがとうございます」

丁寧に頭を下げるサイ。生え際まで見事に栗色である髪をリオンとセレネに見せている。

最初の会話が戦闘中だったこともあって、リオンが抱くサイの印象はあまり良くなかった。が、本当は律儀で礼儀正しい人物だった

のだと考えを改める。

どこか高貴な気品すら感じさせるサイ。ボロボロの衣服からは浮浪者にしか見えないが、着せるものを着せればかなり様になるのではないだろうか。

外見ではなく彼の内面を垣間見た初対面の人間ならば、今のリオンのように畏縮してしまうであろう。

「え、いやいや、役に立てなくてすまない。俺達の方こそ礼を言わなきゃいけないよ。助けてくれてありがとう、おまけに飯まで」

「まったくだぞ！ 無能で不能だと自覚があるならもつとしっかりするんだ里昂」

「だから何でお前が威張るんだよ！ それと不能は関係ねえ」

にこやかにサイに返答し、余った右手で蒼い髪に指をめり込ませてゴリゴリと指圧する黒髪の少年。

そんな里昂の左肩に、ジェノスの鍛え抜かれた褐色の腕が励ますように乗った。

「レオンよ……不能だと色々辛いことがあると思うが、男なら……立ち上がれよお！！」

「耳元でうるせえよ！ 勝手に不能にするな！」

「里昂はともかく、レオンは良い男だ。不能じゃないんだ！」

「もう……不能でもレオンでも何でもいいです」

反抗することを諦め、肩を落とす里昂。両隣には励ます男と威張る女。

これでも片や義賊の頭、片や魔女である。

どうやら、里昂には力のある者に苛められる才能があるらしい。「まあ、レオンが不能かどうかなんてのはどうでもいい。そのノーションとか言う女。軍相手に銃乱射しまくって、今はトンズラいてやがるってわけだな？ しかも、軍に追われてる上に狙撃機を持っていると？」

ジェノスが里昂とセレネの顔を交互に見やる。

黙って頷く少年少女。すると不敵に笑いだすジェノス。

「くつくく、はーははっ！！ いいねえ！ その女最高だ！ 聞けば聞く程、ウチに欲しい」

「ジェ、ジェノスさん？ 何を言い出すんですか？ いくら僕でもその女性が危険だということはわかりますよ。それにこの人達が嘘を付いている可能性だって」

「サイよお、コイツらと一度戦ったお前ならわかるだろう。コイツらの腕じゃ、軍人は倒せない。三分で撃墜、バーン！ ってな」

ジェノスが魔力コンロをスプーンで突く。感情の無い声でただ事実を述べるかのように。

リオンは自分の力が無いと言われていることに何故だか虫唾が走った。

「コイツらが、生きてあの村から荒野に出られたのは、相当運が良かったか…… ロイ・ゲハルト級の腕をしたメタルフレーム乗りがその場にいたかだ」

真剣な視線をサイに向けて反応を覗っているジェノス。

「ロイ・ゲハルト級のメタルフレーム乗り……」

生唾を飲む込む栗毛の少年。あまり顔色を変えないサイが心なしに、動揺しているようにも見える。

MFで白刃取りをして見せる天才の彼でさえ、“荒野のチーター”と呼ばれる人物には敵わないとでもいうのか。

「いずれにせよ、軍相手に単機でコイツらを逃がしながら戦闘したとなると……相当の手練^{てだね}つてことに間違いはねえ」

攻めるよりも守る方が断然に難しい。MF乗りならば誰もが周知の事実。

「それは……そうですが」

「俺の勘がそう言ってんだ間違いねえ。それに、戦力はあるに越したことは無い。軍から追われてんなら、なおさらウチの戦力になりうる」

月花の戦い方を見ただけで、そこまで言いのけるジェノス。そして立ち上がり、リオンとセレネの前に手を差し出した。

「つと言っわけでお前ら、その女を探しに近くの村に行ってみねえか？　そこで残りの仲間とも合流する予定だ。なあに、悪いようにはしねえよ。物騒な話をしちまったが、お前らを取って食おうなんて思っちゃんない」

「おお！　それは助かる。ジェノスは良い奴だな、よろしく頼む。つて、うう！　な、何をするリオン！」

立ち上がった手を差し伸べるジェノス。セレネがまるで犬のように尻尾を振りながらジェノスに近づこうとするが、首根っこを掴んで阻止するリオン。

「セレネ、ちよつと待て。ジェノス、あんたの提案は本当に嬉しい。でも、何で得体の知れない俺達にそこまでしてくれる？」

リオンの眼はいつになく真剣で、敵意すら露わにしていた。

以前のリオンならば簡単にジェノスの手を取っていただろう。だが、現実には良い人間など絶滅機種の数ぐらいしかない。それに加え、ジェノス達の組織について何も聞かされていない。

ジェノスは和やかな雰囲気で、仲良くなった、仲間だ、という素振りを見せているが、こちらの情報が開示されるばかりで相手の情報は開示されていないと言ってもいい。

このジェノスというハイエナが、眼帯の奥にどんな感情を隠し持っているか見定めるまでリオンは心を許せないだろう。

今は先日の様に、村人の命とセレネを天秤にかけるような切迫した状況ではないのだ。慎重に相手の出方を覗うべきである。

「あんたらの目的が知りたい。俺達はあんたらのことを何も聞かされていいない。助けてもらってこんなことも失礼だと思っけど、いきなりそんなこと言われても……信用できねえよ。それにノーシヨンさんがその村にいない確率の方が遥かに高いんだ。俺達を匿ってその村に連れて行ったとしても、あんたらの得になるようなことはないだろ？　軍に追われてるやつが外から入ってくれば……村の人達だつて困るはずだ」

腕を組みながらリオンの見解を黙って聞くジェノスは、

「ああ、得になるようなことはないな」

なんだそんなことか、とでも言いたげな表情で、さっぱりと言いつ切った。

そして、表情を引き締めて

「だが、“徳”になることはある」

意味がわからないと表情に表れているリオンに対してジェノスは続ける。

「義賊“戦争のハイエナ”を動かすのは名前の通り“義”だ。そして、活動を支援しているのも“義”によるものだ。ガキを騙して陥れるなんて義に反することを俺達がすれば、支援もストップ、土気も乱れる。そのまま俺の一味は空中分解するってわけよ」

両手をパツと広げて何かが崩壊するジェスチャーをするジェノス。「逆に、俺達が横暴な軍人に命を狙われていた無力な子どもを助けて、保護したとなるとどうなる？」

後はわかるだろうと、人差し指でリオンの頭を突つつく義賊の頭。「俺達を軍から助けたのは……組織のイメージアップのためってことか」

「そういうことだ。ハイエナにも世の体裁つてもんがあるんだよ。だから、諦める。縛ってでも半殺しにしても、お前らを安全な村に“生きてる状態で”連れて行く。ついでにノーションっていう女を探すのを手伝ってくれるなら義に誓って、このジェノスが軍の怖いおじさん達からお前らを守ってやる。どうだ？ お互いに悪い話じゃないだろ」

ようやく眼帯の奥に隠されていた本質を垣間見せたジェノス。リオンは義賊と聞いて気に掛かっていることがあったのだが、明確にできないでいた。

しかし、いやらしく笑みを零す褐色の男を見てようやく思い出した。

以前、前大戦中の社会情勢について話をしている時、金髪の魔術師が義賊についてばやいていたことを。

“ まあ……前大統領の悪政もあって共和国の中に反対勢力が出来ていたのよ。義賊なんてのも出てきて、『正義と仁義』を掲げてその辺りで暴れ回っていた時代よ、発掘が盛んだった時期でもあるからメタル・ラッシュとも言っわね。連中のやってたことは盗賊と変わらないんだけど”

そう、彼らは盗賊と変わらない。それがノーションから教えられた義賊の在り方だった。

第50章 青々とした迷宮

岩山を後にし、荒野に出た四機のMF。

リオン達は今“戦争のハイエナ”の仲間が集まるという村に向かってる。逃げようにも逃げられないし、従っている限り軍から守ってくれるのだから逃げる必要もない。

軍がうろついている荒野を無防備に走り回るよりも、軍を振り返り討ちにする実力を持ったジェノス達に同行している方が遥かに安全である。

月花がブースターで移動すると先行しているウィッツ、サイのハインドレットだけでなくジェノスが駆るサウザンドまでも追い抜いてしまったため、月花はブースターを禁じられた。

しかし、重厚な蒼い甲冑を纏っている月花がブースター移動を行う他の三機に付いて行けるはずもなく、全員の足並みを揃えるため一行は“歩く”という結論に至る。

「まったく、お前らの機体は肥満過んだよ。って、レオン。ちゃんと付いて来れてるか？ 鍋も片付けねえとは、ほんと……どこのおぼっちゃまだよ」

「だから、俺はリオンだ！ だいたい、あんな“自分で火を噴く鍋”なんて見たことねえんだよ。あんなの片付けろって言う方が無理だ、もしいきなり火が付いたらどうすんだよ」

出発前、リオンに鍋を片付けるように言ったジェノスだったが、魔力コンロを初めて見るリオンにとってそれは爆破物を片付けると言っているようなものである。

胸部がへこんでいるオレンジ色の機体は、歩く速度を落とし月花と並ぶように歩く。

「魔力を流し込まない限り、火なんて付きやしねえ。お前、田舎の出だな？」

「ああ、魔術も科学も無い田舎育ちだよ」

少々言葉を強めるリオン。

「んじゃ、バーバ・ヤーガの生活を見てもそんなに驚かねえかもな。今から行く村も生活に魔術も科学も使っていないところだ」

「そもそも魔術も科学もある“村”なんてないんだろ？ どっちかがあればそれは“街”だ」

リオンとジェノスが通信し合っている中、セレネが前髪を軽く払って尋ねる。

「なあ、ジェノス。いまから向かう村に軍人はいないだろうな？」

月花のモニターに映るジェノスを見つめながら警戒を表情にしているセレネ。そんな少女に長髪の男は鼻で笑って答えた。

「ふふ、いねえよ。俺達義賊が軍人のいる村を集合場所にすると思うか？ 義賊と軍は犬猿の仲だぜ。ナアバリに入って来たらブチ殺してもブチ殺されても文句言えねえ。基本的に軍人が駐留してるのは“街”だ。高給取りで贅沢三昧の“エリート様”が好んで汚くてクソ不便な“村”に住もうなんざ思わねえから安心しろ」

犬猿の仲と言うだけあり、軍人に対するジェノスの評価は厳しい。「それに軍の野郎は、あの村に辿り着けない。今から行く村は別名“魔女の村”だ。普通の人間はまず、近づかねえし、見つけれないんだよ」

その別名を聞いて言葉に詰まるセレネ。一方で少年はシートに乗り出して声を上げた。

「ま、魔女の村！？」

「なんだ？ レオン、ビビってんのか？ 都市伝説なんて
「魔女の村って言うぐらいだから、そこには魔女がいるんだよね！？」」

からかうようなジェノスを声で押し切るリオン。

血相を変えた少年の姿をジェノスは無表情で見つめるだけ。

沈黙が続く。リオンは彼らに取って場違いな発言、もしくは、言っではならないことを口にしてしまったのだろうか。すると、一斉に笑い声上がる。

『リオンさん……魔女なんて本当にいると思っているのですか？
まさか、熱心なセフィラ教徒の方ですか？』

『ガーハハハッ！ ああ、怖い魔女がそこにはおじゃんとおるぜ？
よくガキの頃に聞かされただろ。“悪いことする子は魔女に喰わ
れるぞ”ってな』

サイとウィッツに馬鹿にされるリオンだが、苛立ちよりも驚きが
彼の胸を埋め尽くす。

「んだよ、あんたらは……魔女なんていないと思うのか？」

「ああ、いねえいねえ。魔女なんて実在するわけねえだろ？ あり
や、セフィラ教の過激派が勝手に盛り上がって作った架空の生き物
だ。今時ガキでも信じちやいねえよ、それをお前は……つくく、ハ
ッハッハ！ 田舎育ちも考えもんだな」

ジェノスの声を聞きながら深刻な顔を見せるセレネ。

魔女なんて存在しない。では、彼女は一体何だと言っただ。

ひとしきり笑うと、真面目な声でジェノスが言う。

「魔女なんていねえ……魔女として処刑された“人間”が、反吐が
出るほどいただけた。前大統領が“魔女”って単語を連発して何人
もあの世に送りやがっただろ？ つまるところ、力量の無いクソ以
下の政治家が民衆のクーデターにビビって用意した憎悪の捌け口が
魔女だ。……軍人どもを使って、片っ端から罪も無い人間を殺しや
がった」

腹の底で声を轟かせるジェノス。

信仰心が弱い人間にとって魔女とはそれぐらいのモノだった。

「今から行く村に、魔女なんていない。ただ、魔女として虐げられ
てきた人間がいるだけだ。村で“魔女”って単語を使わないことだ
なレオン。農具で脳味噌を耕されんぞ」

「ああ……わかった」

ジェノスの言葉を半分横流しに聞き、セレネの様子を後部座席か
ら覗いながら黙り込むリオン。

目の前に座っている蒼髪の少女は間違いなく、魔女である。

異常な再生能力、膨大な魔力量、そしてウインド村で殺戮の限りを行った。実際に信じられない光景を目にしたリオンだからこそ、魔女の存在が認知できているのかもしれない。

ただ彼女と話をするだけでは、ハイエナの一味のようにセレネが魔女であるなど気付きもしないのであろう。リオンも始めはセレネのことをただの盗賊崩れだと思っていたぐらいだ。

ならば、何故ノーシヨンとドクターMはセレネが魔女だと確信できたのか。

熱心な宗教家でもない知識人の彼らがどうしてあつさとセレネを“本物の魔女”として認めたのか。そして、魔女の存在を許容できたのか。

ノーシヨン達はウインド村の人間達のように魔女のような殺戮を繰り返す“月花”もセレネの異常な再生能力も見えていないはずだ。何を根拠に魔女であると信じていたのだ。

セフィロト・ドライブとクリフォト・ドライブ。ノーシヨンの説明を思い出しながらリオンの考えはそこに行き着く。

月花は人間の呼吸で言う“息を吐く動作”しかできない欠陥品。クリフォト・ドライブしか搭載されていない、言わばパイロットの命を糧に動く拷問器具である。それを何の苦も無く操るセレネを見れば……魔女だと結論づけられるというのか。

それだけの情報からセレネの正体を見破れるはずが無い。

ノーシヨン達はもつと何か、決定的な証拠を発見していたのではないか。ただ、それが何かまではリオンに導き出せるだけの知識は無かった。

そして、ジェノス達の話を書く限り実在するかどうかは不明だが、ドクターMが以前会ったことがあるという“紅い髪の魔女”。

金髪の女魔術師と背丈の低い老人。彼らには生きていてもらわねば困る。何がわからないのか、それすらわからない状態のリオンが、魔女について知る大きな手掛かりを彼らが握っているに違いないのだから。

現状、ジェノス達が魔女の存在を信じていないのなら都合である。セレネが魔女であることは金輪際、誰にも悟らせない。

『頭、^{かしら}見えてきましたぜ』

リオンが思考にふけっていると前方を歩いているウィッツから声だけの通信が入る。

月花のカメラアイには信じがたい光景が広がっていた。

荒野のど真ん中に緑一面の樹海が広がっている。

「どうして……こんな」

こんな、植物が育つはずがない砂の地獄で緑が広がっているのか。リオンの内心に答えるかのようにサイが通信を入れる。

『驚きましたか？ 共和国には想像を絶するものばかりあります。僕も最初に見た時には言葉が出ませんでした。この緑は魔力を吸って生きているそうですよ』

魔力を吸って生きている。どこぞのMFと同じである。

眼下に広がる青々とした樹海を煩わしく思うリオンだった。

第51章 樹海の弾痕

岩山を抜け、吹き荒ぶ砂塵をMFで掻い潜り、村があると言われる樹海に到着したりオン。

辺り一面黄土色の世界にまるで切り取られたかのように存在する緑色の木々。

通称、“魔女の森”。

緑、黄緑色の葉の群から空を見上げると、青と緑のコントラストが視界に広がる。木陰に吹き込む涼しげな風と木葉が擦れる音を聞いて誰が今、荒野にいますと思うだろうか。

ここは既に異常だ。

かれこれ木々をMFで押しのけながら樹海を進むが、未だ村に到着しない。そもそも村など本当に存在するのかすら疑ってしまう。

生い茂る木々はメタルフレームをも覆ってしまい、方向感覚を失わせるには十分。そして、自然界の膨大な魔力を循環させている“地脈”のせいで、メタルフレームのリーダーさえも狂わせるというありさまだ。

例えば村があつたとしても、一度樹海に飛び込んでしまえばどの方向に村があるのか全くはずもない。

そして、リオンは先ほどから通信に漏れているサイの怪しげな声を気にかけていた。

「なあ、サイ。身体の調子でも悪いのか？ さっきから何かブツブツ呟いてるみたいだけど、ジェノスに知らせるか？」

『え？ ああ、気になってしまいましたか。すみません。これは道に迷わないための呪いまじなです。この“魔女の森”は、一度迷うと同じ場所を何周するだけで抜け出せなくなるんですよ。方向音痴のジェノスさんが先頭を歩いていますし……まあ、気になさらないでください』

「って余計に気になるわ！ っていうか、アイツが方向音痴って知

つてたならお前が先頭歩いてくれよ！」

爽やかな笑顔でサイが一言。対して血の気が引くリオン。

先ほどから同じ風景ばかりの繰り返しであることによりやく気が付いた。メタルフレームの足跡が徐々に増えていることから、自分達は違う場所を歩いていると思っていたが、これらが全て自分達の足跡である可能性だって大いにあり得る。

「ジエ、ジエ、ジェノス！ ちょっと止まらないか。さっきも似たような場所を通ったぞ？ このメタルフレームの足跡って……俺達の」

『ああ？ 右の壁に手を付きながら歩けば……その内着くから黙って付いて来い。お、あつたあつた』

「それは迷路に入った時の最終手段だろ！ ここ樹海だよ！ 壁なんて無いんだよおお！」

リオンの叫びも虚しく、気だるそうに通信を切った長髪の男ジェノス。

自信満々に先頭を歩くオレンジ色のサウザンド。まるで、導かれているかのように深い森の中を歩いている。

『いやあ、姐さん達が先に到着していて良かったってモンです。ここは何回来ても迷いそうですわ』

ジェノスに向けて強面のウィッツが陽気に通信を飛ばしている。

リオンには迷っているようにしか見えないこの状況だが、着実に村があると言われている地点まで近づいているとも言っのか。

『ははは、驚きましたか？ ちゃんとジェノスさんは正しい道を歩いていますよ。リオンさん、ジェノスさんの前にあるMFの足跡をよく見ていて下さい。呪いよりも確かな効果があるものを先に村に向かった方々が用意してくれていますから』

月花の隣を歩く青色のハンドレット・サイからの通信。足元を拡大表示させて何かを発見したセレネが甲高い声で鳴く。

「あう……大きな……弾痕」

「セレネ、お前に他意は無いと思うんだ……でもな、お前が言うと

すんげえ卑猥^{ひわい}に聞こえるんだ」

「失礼だな、弾痕のどこが卑猥な言葉だ！　大きな弾痕もあれば、小さな弾痕もある。いきり立つ弾痕だって！　弾痕に罪は無い！」

「最後のは明らかにおかしいだろう！　いきり立つ弾痕ってどんな弾丸がめり込んでんだよ！　……とりあえず、前向いて操縦してくれ。ジェノス達を見失ったら俺達死ぬ」

溜息を一つするリオン。

むくれているセレネが連呼していた通り、ジェノスは大きな弾痕が打ち込まれている足跡だけを追うように進んでいた。先に到着しているという仲間が付けた目印なのだろう。

確かにこの樹海では目印でもなければどうにもならない。メタルフレームを使ってこれだけの時間がかかるのだから、徒歩でこの樹海に踏み込めば命の保証は無い。

こんな樹海に村を作った人物はさぞかし、屈強な体と精神の持ち主に違いない。

『樹海が開けて来ましたね。そろそろ、バーバ・ヤーガ村だと思います』

サイの優しい声がコックピットに響く。この戦いとは無縁そうな声の主がMFで白刃取りをするなど誰が信じるだろうか。

『おい、レオン。ノーシヨンて言う姉ちゃんを見つけたらとっ捕まえるよ。義賊の未来を担う大切な仲間だからな』

ノーシヨンに会ってもいないのに、もう仲間になっているジェノス。彼女がこの場にいれば、オレンジ色のサウザンドは魔弾による弾痕で更にデコレーションされるに違いない。

一方で、リオンはノーシヨン達が今から向かう村を訪れている可能性は無いと結論を出していた。

「いくらノーシヨンさんでも、こんな樹海に入り込んだら迷う……村なんて探し出せるわけない」

『ん……ああ。ノーシヨンっていう女じゃないにしろハイエナ以外の“誰か”がこの村に足を踏み入れているのは確実だ。メタルフレ-

ムの足跡がやけに多い。まるで、軍の追っ手がぞろぞろと……ん？
お前ら……散れ！！」

強い殺気を感じ取ったのか、眼帯の若頭は鋭い視線を樹海の奥にやり、跳躍とクイックブースターで射線軸から逃れた。

ジェノスが勘付いたのが先か、招かざる客が姿を現したのが先か。その刹那。

弾丸ではなく、弾丸となった“紫色のメタルフレーム”が突如として後方の茂みから高速接近。腰に付けた巨大な刀を構え、木々を全身の走行で粉碎しながら道を作っている。

待ち伏せ。大木が舞い散る中、リオンの直感がそう答える。

リオンは何かを叫ぶ暇すら与えられなかった。息を飲んだ瞬間、そこには紫色の鎧を着た処刑者が眼前に迫り、銀色に輝く長刀を構えていただけのこと。

それが軍の機体なのか、盗賊の機体なのかなど判断する猶予など無い。

ただ理解できたことは、この油断し切っていた瞬間に神速で抜き放たれた光の刃を止める術など無い。

頭の合図に反応したハンドレット達は瞬時に散開。が、月花の機動力でそれは不可能である。

最初からターゲットを絞っていたかのように、月花へと一直線に接近してくる処刑者。

今や距離は――。

「つく、頭あ！ 小僧達があ！」

ウィッツが叫んだのを最後に音が失われた。

鳥の鳴く声も風が木々を揺らす音も消え失せ、敵機による風圧が遅れて周囲を駆け抜ける。

音さえも切断した紫色の武者。

無音。

静寂。

沈黙。

リオンの呼吸は止まっている。緑に覆われた世界で走馬灯が通り、現実を拒絶するかのようにまぶたを強く閉じたまま。

「……あ、れ？」

リオンが恐る恐る目を開くと、依然として緊迫した空気が張り詰めたコックピットがまだ存在している。

セレネも操縦桿を握りしめるのがやっとだったのか、蒼髪が掛かった小さな肩が心なしか震えている。

月花は全く動けていない。ならば何故彼らは生きているのか。

すると、紫のMFから静かなる声が響いてきた。

「……思いがけない事態。背後から斬り付けるなんて、武士道に反する行為だわ。私はこんなことをするつもりでチョベリーを連れて来たんじゃない……」

その女の声を表すならば水が適切だったであろう。汚れも、味も愛想もない。

しかし、その声の主からは僅かだが怒りが聞いて取れる。

『うるさいねえ。お前はね、真面目過ぎるんだよアホンだらが。武士道なんて捨てちまいな！ 邪道の方が何倍も役に立つ。だいたいアタシの庭に土足で上がり込んできたボンクラを斬り殺すのに誰の許可がいるってのさ？』

イントネーションがズレた擦れ声。それでいてサバサバと人を斬り捨てるようなその口調。老婆のものと思われるその声は、同乗者の声に噛みついていていた。

『あ、あのお二方、とにかくこの刀……締まってもえませんか』

月花を庇う様に飛び出していた青いハンドレットが恐る恐る意見する。

超高速で抜き放たれていた反りのある細長い刀。

よつやくその全貌を見ることが出来た。

芸術品とも呼べるその一刀。森林の緑の中に、一筋の銀が陽炎のごとく揺らいでいる。刀身に映るは、サイが駆る青色のハンドレット。

身を呈して飛び込めるサイもさることながら、MFの武器で寸止めを行える紫のMFも普通ではない。

『……ごめんなさい』

擦れる様な声を口にした途端、鋭利な切先をいそいそと腰の巨大な鞘に納め始める紫色の機体。

機械仕掛けの兵の^{つわもの}双眼から敵意が消えた。

見る限り月花と同じく接近戦パワータイプのMF。装甲を極限まで高め、大型のブースターで鉄の塊となり接近する戦闘スタイル。この機体に接近されれば最後だろう。

助けを求めるようにジェノスの機体へとカメラアイを向ける紫色のメタルフレーム。

『ツチ。オイ！ 婆さん！ 随分な挨拶じゃねえか。ウチの姫さんを足に使った上、結構なことしてくれたな。リーダーが使えないとはいえ、カメラアイで俺達だとわかったはずだが？』

『はん。ほんの挨拶だよ。アタシが本気だったらお前たちが生きてるはずないだろ。……ババア舐めんじやないよ』

『へっ……上等だ』

通信を交わすジェノスと老婆は決して穏やかではない。今にも殺し合いが始まりそうである。

『ちよつと！ ちよつと待ってくれ！ もう、何が何だかわかんねえって！ この紫はジェノスの仲間か？』

『機体と機体の持ち主は仲間だ。だが、中にいるクソババアは違う』
リオンの言葉に眼帯の若頭は毛を逆立てるように返す。

『じゃ、何もんだよ』

完全な敵というわけでもない。かといって味方に奇襲をしかける馬鹿がいるとでも。

明らかに老婆の存在が、異質であった。

『ふん……バーバ・ヤーガ村の主だよ』

ジェノスはバツが悪そうに言い捨てる。

そして、月花のモニターに煙管^{きせる}を堪能しているガラの悪そうな老

婆が映し出され、煙を吹きつけながらこう言った。

『小僧共、よく来たね。ようこそークソ野郎共の集う村へー』
リオンがとんでも無い村に連れて来られたと思ったのは言うまでもない。

第52章 銀髪の少女

「おい、クソババア。最近、ここに新入りは来てねえか？」

「ハン、またこの村から貴重な労働力を奪おうつてのかい？」

村の主と呼ばれる老婆。村に到着するや否や、彼女の無駄に広い自宅へ招かれ、ジェノスは老婆と対談を始めた。

煙管を噴かせながら深々とソファーに腰掛ける威厳たつぷりの老婆。相手が義賊だろうが盗賊だろうが、軍人だろうがこの態度を変えることはなさそうである。

樹海の中には、確かに村があつた。いや、里と言つた方が適切かもしれないが。

「で、その小僧共はなんだい？ アタシへの手土産かい？」

短い足を机の上に乗せ、煙管を机にカンツと一叩き。壁側に立たされたリオンとセレネは上から下まで吟味するように眺められた。

「あんたへの手見上げは、軍用MFのパーツ数種類だ。サイがバラしたバリューセットをくれてやるよ」

鼻と口から煙を噴き出し、深い皺をめり込ませながら満足気に笑う老婆。骨に薄い皮が張り付いているだけのもはやミイラだ。

「コイツらが手土産だつたなら、お前達をブチ殺してるところだつたよ。で、他は？」

「ツチ、足元見やがつて…… ウイツツ！ R-EXもくれてやれ」
アレックス

頭、そりやないですぜ！とわめくウィツツだが、ジェノスの心底苛立った様子を見てとぼと外へ出て行つた。元々誰のものでも無い。リオンが護身用に持つて来てしまった軍用マシンガンだ。

しかし、老婆は兵器の名前を聞いた途端、眉をじわりと上げた。

「ほおう、R-EXかい。まあ悪くないね。で、何の話だつたかいね」

「この村に新しく誰か来てねえかつて話だ。アンタらが身包み剥ごうとしたヤツも含めてだ」

上機嫌になった老婆。ようやくジェノスの話を聞く気になったらしい。

「フン、ここをどこだと思ってんだい？　ここ当分、人の出入りは無いね。強いて言えば、お前の戯言に乗せられて、出て行ったボンクラが三人つてとこかい」

「そうか……。今、俺は女を探してる。ハンスタの村を荒らし回った……上玉だ」

歌うように言いながら眼帯の男はギラギラした目を細める。

「悪いがそんな奴ら来てないよ。しかし、物騒な話だ。そんな犯罪者がこの近辺をうろついてるってんなら、さつさとハンスタ様に駆除してもらわないとおちおち寝てもいられないね」

凄味のある老婆が興味なさげに言葉を吐き捨てる

そして、煙管を一叩き。

時空の切れ目でも叩き割ったかのような反響音。

木製邸宅全体の空気が凍り付く。

「でー森の外は、今やハンスタ率いる軍がうろついてるってことかい？」

蛇のように絡まったばさばさの白髪が声を低くして言う。

「……共和国軍のハンスタは殺されたそう。私達より先に事を起こした者達がいる。それがその女という可能性も」

紫色の鎧武者から発せられていたのと同じ、雪解け水のような儚げな声が邸宅を解かした。

ジェノスの背後に控えている少女が一步前に出て意見したのだ。

腰まで滴る雪のごとき白銀の髪。清楚などという言葉では足りず、もはや神聖とも言うべきその顔立ち。

そして、前髪から垣間見える新緑の瞳が、小柄な少女をより別次元の人間へと昇華させていた。

義賊“戦争のハイエナ”頭領・ジェノスの妹であろうか。

しかし、瞳色、髪色があまりに違い過ぎる。

謎めいた少女の腰には護身用なのか刀が帯びられている。ただ、

このか弱い体型では自分の背丈程ある刀を抜くことはまず不可能であろう。

帝国製には劣るが、共和国内でも流通している軽量ハンドガンを携帯する方がいくらか合理的であろう。

「ほお……リリイ、そりゃ確かかい」

リリイと呼ばれた銀髪の少女の声を受けて、神妙な顔つきになった老婆。

その後、老婆が部外者はお引き取り願うと言い出したため、リオンとセレネは必然的に村に放り出されることになった。

「まったく、横暴な婆ちゃんだな。セレネ、追い出されちまったけど、どうする。俺達、とんでもない村に連れて来られたぞ」

老婆の馬鹿でかい邸宅を後ろに、途方に暮れるリオン。

「ああ、ノーションもじいじいもいなさそうだし、早いところ逃げ帰った方がよさそうだ」

「お前、ウインド村で逃げも隠れも隠しもしないとか、言ってなかったか」

「……そこまで言うのなら仕方ない。今から一枚脱ぐとしよう！」
自分の服に手を掛け、服を脱ごうとするセレネ。いつもならばリオンが何かしら発言するはずなのだが、言葉は出ていない。

代わりに少年少女はアイコンタクトを取り合い、後方の人物に気付かれないよう小声で言う。

二人の後方。茂みの中から銀髪が漏れている。頭隠して尻隠さずをそのまま体现した状態だ。

「……おい、セレネ。お前、あの子に何か恨まれるようなことしたんじゃないだろうな？ さっきからずっと付いてきてるぞ」

「ふっ……私は“くーるびゅーちい”な女だ。過去にはこたわらんのだよ！」

「クールビューティーは一枚脱ぐとか言わねえんだよ。今さらお前のことをクールに思うやつなんていねえし」

コソコソと話をする蒼頭と黒頭。

「これ以上、勝手にどこかに行っちゃダメ。ここは危険」

背筋に戦慄が走る。

遙か後方で冗談のような身の隠し方をしていた少女とは思えない。気配を全く感じなかった。

いつの間にか、リオンのズボンをちよいと掴んでいる銀髪の少女。整った清楚な顔立ち、それに加え透き通るような声。少し年の離れた妹にされていると思うと顔が綻びそうなもの。

しかし、刀を半分抜き身になっている得体の知らない少女にされれば、恐怖しか湧き上がってこないであろう。体格的に抜刀することは不可能だとわかっていても、脅しにはなる。

「は、ははは……。ダメだぞ、そんな危な」

瞬間、リオンの顔面に銀が走る。

「いことしたら……って、ひいい、眉があ！俺の眉毛があ！」

ひいひいと転げ回る若干、十七歳。女に泣かされたのは一体何度目か。

そして、寝転ぶリオンは上下逆さまになった視界で確かに見た。

銀の少女が銀の刀を舞のごとく華麗に、抜き放っている姿を。

ぼん、と手を付いてセレネが一言。

「そうか。リオンに懐いているから付いてきたのか」

「なんでだ！ 懐いてる子どもが刀で人の眉毛を削ぎ落とすか！

っていうか、子どもがこんな刃物を持ち歩いていいのか！ 保護者はどこだあ！！ ごっふ」

鞘で“男の刀”をフルスイングされ、前屈みになりながら沈黙するリオン。一方的かつ圧倒的な暴力だった。

「子ども、子ども、子ども！……子どもじゃない！ 十六」

ムスツとしながら身体に対して長過ぎる刀を華麗に納刀する銀髪

の少女。

子ども扱いされたことに怒りを感じていたのか、更に愛想が無くなってしまう。

「なんだ。リオンと歳が近いんじゃないか？ フツ、私は……セレネだ！」

クールビューティーがマイブームなのか蒼髪の魔女はキザっぽく喋る。

「私はリリイ。……蒼色のメタルフレームはあなたの？」

「月花のことか。ああ、あれは私のメタルフレームだ。うん？ ああ……そいつか」

突っ伏している黒髪の少年を納刀した刀でツンツンと突くリリイ。コイツは何者だと言う意味であろう。

「コイツは……“犬”だ。名前はまだ無い」

「そう」

突拍子もない答えだと言うのに、真面目な顔で受け答える銀髪の少女。

「ちなみに、そいつの趣味は犬らしくアナを掘ることだ」

「そう」

「特技は犬らしく、絶倫チンチ だ」

「……そう」

無表情のままだが、リリイの絹のような頬がリンゴのように赤く染まっている。

「そして、犬らしく ん？」

「……この卑猥な頭は一度割るべきだと俺は思っんだ」

ぽむつ、と蒼髪に片手が添えられた。そして、

「うう！ リオン、指が食いこんでいるぞ、音を立ててるぞ！ めうゝ割れゝるゝう」

蒼髪に埋もれる五指は外れない。メタルフレームのように強固に固定された腕。

「誰が絶倫だ？ 俺は不能じゃなかったんですかね！ あっ！ 待

ちやがれ！」

「ひい！ まだ、根に持っているのか？ あらゆる意味で小さい男は嫌われるぞあ！ リリイ、助けてくれ！」

命からがらリオンのアイアンクローから逃れたセレネは、リリイを盾にして縮こまる。

「おい！ お前、それは危な――」

あたふたしながら、セレネに拘束されている少女リリイ。全速力で突進してくるリオン。

リオンは、急に止まらない。

リオンの突き出している掌。

それは見事にリリイの懐に入った。いや、発育段階のリリイにとって“入った”というのはいささか語弊がある。

掌が胸に“乗った”

「っ……あ」

消え入りそうなリリイの声音。小さくて白い手から長刀がカタリと落ちる。

服越しに感じる僅かな弾力、それを味わう余裕など無い。体が強張り、手を引くこともできないでいる少年は、髪色とは対照的に頭の中は真っ白である。

白昼堂々、リオンが触っているモノ。反発力と弾力に富んだ丘。

男の桃源郷。

通称……胸。

「いい……うう……っぐす」

セレネに固定されたまま直立しているリリイは、泣くまいと下唇噛み締めながら、薄らと涙を浮かべている。

「あ、ああ、あ！ こ、こ、これは！ っだな」

「まさか、“幼女”の胸を揉みしだくとは……まさに飢えた狼、狼少年リオンめ！ 許すまじ！」

震える手と声。両手を天に上げ、自然とホールドアップの姿勢をするリオン。幼女ことリリイの背後から魔女は余計なことを言う。

子ども扱いを嫌がる節があったリリイ。

幼女と言われもう我慢の限界だったのだろう。リリイの表情は歪んでいく。

「リリイ、本当にごめん！ 別にリリイの胸を触ろうとかそういう

」

「未発達の胸をこんなにして……リリイ、大丈夫だ。汚れた女はそれで需要がある」

リリイの耳元でささやく蒼い魔女。

そして、泣いた。澄ました顔をした少女が手に負えない程声を上げて泣いた。

よろよろと歩きながら肩を落とすリオン。リリイによる鉄槌で顔面は言わずもがな、体中が傷だらけである。長刀を安々と振り回す少女相手に命があっただけ運が良かったと言えるよう。

隣には大変ご立腹の様子であるリリイ。顔色一つ変えず、ただジツと横目でリオンを睨んでいる。

無言で圧力を掛けられているため、会話が発生する雰囲気も無い。「哀れだなりオン。リリイはお前のその醜い顔を見て言葉にならないそうだ」

「誰が原因でこんなことになったと思ってんだオラあ！ 勝手に言ってる！ このアホセレネ」

「む……。胸をく鷲掴みく幼女の胸をく鷲掴みく」

「はい、わたくしの顔は醜い豚のようでございます。異論はありません！」

姿勢を正し、ぺこりとリリイに頭を下げるリオン。

セレネの言葉から先ほどの出来事を思い出したのか、頭から湯気が出る程に顔を赤らめて両手を振り回す銀髪の少女。

「豚！ 豚！ ブタ！ 不潔、最低！」

あまり感情が入っていないように見えるが、彼女なりに精一杯声を出してるのだろう。

汗に構わず、ぽかぽかと黒髪の頭を叩くリリイの姿は兄に激怒している妹にも見えなくもない。

しかし、そろそろ彼女が自分達に付きまとう理由を尋ねなくてはならない。

パシッと片手で背丈の低い少女からの攻撃を受け止め、リオンは真剣な目つきのままりリイの新緑の瞳を覗きこむ。ただし、顔面は痣だらけだ。

「リリイ。何だって俺達に付いて来た？ お前は俺達の見張り役なんだよな？」

「え……」

邸宅にはジェノスと老婆がいる。

自分達が逃げ出さないよう監視するため、それが一番妥当な線だろう。

リリイの戦闘力を持つてすれば、リオンなど直ぐ殺すことが可能だ。

何か思い出したように眉を上げてリリイは、

「あ……。私達の新しい仲間を探す」

「え？ ノーションさん達のことか？ でも、さっきガラの悪い婆ちゃんは、二人とも来てないって」

ふるふると首を左右に振るリリイ。

「ジェノスは“女”としか言っていないのに、チョベリーは“そんな奴ら”と言った。チョベリーは、何か隠している可能性が高い」

チョベリー、恐らくあの老婆の名だろう。一方で、あの老婆の言葉の矛盾に気が付くとは、この少女やはり油断ならない。

服の袖からぐしゃぐしゃになった紙きれを取り出し、リオンとセレネに差し出す銀髪の少女。

緑の瞳に見守られる中、リオンは紙に目を通す。

「あ……えっと……これ義賊の暗号か何かか？」

「うっん、ジェノスの字。“時間を稼ぐ、村を案内するフリをして探せ”って書いてある」

どうして？ 読めないの？ という表情をするリリィ。

紙面に躍るように書かれた癖の強過ぎる字。これを解読できるのは、この少女ぐらいではないだろうか。

一方で、村を統べる老婆がアレだ。

村に住む住民達が、果たして普通であろうか。

樹海で老婆が言っていたことを思い出す、ここは“クソ野郎共が集う村”だ。

荒野に堂々と生い茂る樹海。

荒野では生息できるはずもない鳥や虫が無数に生息し、木々によって閉鎖されたこのバーバ・ヤーガ村。

問題が無い方が問題だ。

第53章 手掛かり

老朽化し、皮が所々剥げている木製の家々。庭には仕切りの柵と焦げ茶色の畑が点々と並んでいる。

樹海を少し歩けば共同で使用される水汲み場も作られており、贅沢はできないが生きていくことならば可能であろう。

耳を澄ませば小鳥のさえずり、波のように響く樹海の声が聞いて取れる。

外の世界から隔離され、時の流れからも隔離されたような、実に穏やかな時間がこの村には流れている。

風景の一部となっている家の一つ。そこにリオン達はいた。

「結局、手掛かり無しかよ。気のせいかわからないけど、俺達村の人達にめっちゃくちや睨まれてた気がするんだけど」

「大丈夫。私達といれば安全」

睨まれていたことを否定しない無愛想な少女。

結論から言うと、ノーションとドクターMの情報はこの村には皆無だった。

義賊の男共から“姐さん”と呼ばれる小柄な少女リリイに率いられて、村を探索したがそれも無駄足に終わってしまったということだ。村を探索し終えた三人は、リリイの案内で空き家の一室にて休息を取っている真っ只中。

空き家の外では、ウィッツやサイを含む義賊の面々がMFの点検や何気ない会話など個々に騒いでいる。

どうやらこの空き家はジェノスがあるものを担保に村長のチョベリイから借りているそうだ。

「私達は嫌われてるのか？」

「ここ人間は口が固いだけ。自分達のことも一切話そうとしない。例え何か知っていたとしても、余計なことと言わない」

セレネとリリイが会話する中、外の様子を窓から垣間見てリオン

は不安気に声を出す。

「ここは義賊のアジトみたいのところじゃなかったのか？」

「ん……ちよつと違う。ここはジェノスが好んで仲間をスカウトしに来る村。この村に流れ着く人は優秀な人が多い……国に対する恨みも」

背筋をピンと張りながら椅子に腰かけるリリーの姿は、まるで等身大の人形だ。こんな少女が義賊の面々から“姐さん”と呼ばれているとは夢にも思えない。

「だいたいさ。こんなわかりずらい村にノーションさんと爺ちゃんが逃げ込めるはずないと思うぞ。村じゃなくて、この辺りならイエソドとかに逃げ込むんじゃないか。街なら人も多いし、旅人に紛れこむことも可能だし」

バーバ・ヤーガ村に逃げ込めれば確実に軍の追跡を逃れることができるのだろうが、何せ外は樹海だ。

リオン達もジェノス達に出会っていなければ、荒野の中から樹海を探し当てることすらできていなかっただろう。

「この辺りから一番近いイエソドはハンスタの兄・シュナイゼルの管轄区域。下手に街に入れば捕まる」

リリーの言葉に返す言葉も無い。あのハンスタの兄と聞いただけで、反吐がでそうになるリオン。

軍事に詳しそうだったノーションとドクターMがそんな街に逃げ込むとは考えにくい。

この村にも手掛かりは無かった。もし、彼女達がこの村に潜んでいるのなら、月花が村に到着した時に何らかのコンタクトを取ってくるはずだ。

「あまり言いたくなかったけど……この村にいないければ諦めるしかない。今、樹海の外は軍が走り回っている頃。奇襲された基地にはロイ・ゲハルト少佐も来ていた。いくら強いMF乗りでも、彼に出会っていれば生きてる保障はない」

ロイ・ゲハルト。またこの名前。

「生きてる保障って……あのノーションさんと爺ちゃんなら大丈夫、だよな」

ノーションの強さがどれほどのものかリオンは正確には知らない。しかし、ジェノスに“ロイ・ゲハルト級の腕の持ち主”と言われるぐらいなのだからかなりの腕なのだろう。

ノーションの機体【アルテミス】もかなりのチューンアップが施されていた。そう易々とあの機体を捕獲することはできないはずだ。胸のモヤモヤを振り払うためにリオンは、話題を変えることにした。

「なあ、ロイ・ゲハルトって、そんなにすごい人なのか？」

ジェノスも口にしていた名前。共和国の軍人、ロイ・ゲハルト。彼についてリイから情報を得ておくのも悪くない。

「ん……彼はかつて共和国最強と言われた部隊“カミーチェ・ロツソ”に所属していた。中でも“カミーチェ・ロツソの三獣士”さんごうしと呼ばれた男の一人。今はアトランティ共和国軍・MF第四独立部隊の少佐」

「カーミチェ・ロツソ……赤シャツ。共和国軍の軍服は……赤かったか？」

今度はセレネが質問をする。

一般兵が着用している迷彩柄、指揮官などが着用している白の軍服。赤は無かったとリオンも認識している。

「彼らの部隊が出陣すると敵の返り血で白い軍服が朱に染まったという逸話から、赤シャツ……カミーチェ・ロツソと呼ばれるようになったそう。とにかくロイ・ゲハルトは極めて危険。ハイエナ内でもジェノスが側にいない場合、戦わずに逃げると言われてる」

ただ情報を提示するだけのリイ。それ故に正確な情報なのだと思われる。

しかし、返り血で服が赤く染まるなど、いくら何でも過剰な表現であろう。

魔術と銃器がぶつかり合った大昔ならば、生身同士の戦いのため

返り血を浴びることもあつたかもしれない。

現在、MFが実用化されている。返り血を浴びる機会などそうそう無い。そう考えると赤シャツなんて言葉は時代錯誤だ。

一方で、そんな逸話が生まれる人物とは一体どんな人物なのか。英雄好きのリオンは、より一層好奇心をくすぐられた。

「敵兵の返り血でシャツが赤くなる……そんな逸話を持つてる人間なら、共和国の英雄といったところか？」

逸話の数なら絶対に負けない魔女が呟いていた。

「英雄……多くの共和国の人間にとってはそうかもしれない。でも、彼は人を救わない。殺すだけ……軍人だから」

何故だがその言葉を聞いた途端、胸の高鳴りが風化していく。

英雄と呼ばれてもおかしくない強さを誇るが、やっていることは人殺し。

人を救わない英雄、なんたる矛盾。

殺すことでしか人を救えない。それは果たして英雄と呼んでいいものなのか。

ふとリリーの顔を見ると張り詰めた表情をしていた。何かを思い出しているような、遠い表情。

「あ、な、なあ！　そう言えば、この村には優秀な人が多いって言ったよな？　この村には魔女とか魔術に詳しい人っていないのか？」

天井に視線をチラつかせながらも何とか話題を絞り出すリオン。

しかし、天井に話題は転がってなどいない。思い付いたことは、この村では禁句だと言われていた魔女という言葉であつた。

「ん……魔女と魔術とは限らないけど、考古学者が一人いる」

「なんだって！　考古学者がいるのか！　その人はどこにいる？　MFについても聞きたいことがあるんだ」

考古学者ならば、魔女だけでなくMFについても何か知っているはずだ。現在リオンが知りたいのはMFの構造ではなく、MFの伝承である。

乗り手の精神を乗っ取るようなシステム、あるいは、魔術の掛け

合わせか何かで召喚される謎の意思。

そんな異常なMFに伝承がないはずがない。

「ん……？ チョベリーが現役の考古学者。でも、タダでは何も教えてくれない」

「ははっ！ ……冗談だろう？ あの婆ちゃんが、考古学者……？」

煙管を吹かし、義賊の若頭と対等に会話できる肝っ玉。学者のイメージとはかけ離れている。むしろ、あの風体から連想できるのは暴力団や盗賊一味の長であろう。

「今朝も樹海にある遺跡を調査しに行ってた。帰りにジェノス達と合流できて……っ！」

何かを思い出したかのように、つぶらな新緑の瞳をパチツと見開くりリイ。

「まさか……勝手に機体を動かしてリオン達を斬りつけるなんて思ってたいなかった」

ぼそぼそと申し訳なさそうに言いながら、そのまま床に視線を落とす小柄な少女。

「ああ。あの時のことか。そんなに気にしなくてもいいって！ 婆ちゃんにも悪気は……あつたようにしか見えなかったけど。リリイが悪いわけじゃない！ なあ？」

「死ぬかと思った、死ぬかと思った、あの時は死ぬかと思ったな。

ああ、怖かったぞ。確かに、怖かったぞ」

「ここでそう言う発言するお前の思考回路の方が俺はこえよ」

リオンの期待とは裏腹に、がたがたと震えながらセレネは呪文の様にただ言葉を並べる。

それを聞いてか、更にしゅんとする銀髪の少女。

ぼん、と銀の髪に手を乗せて言い聞かせるように言う。

「……気にすんな。ジェノスに頼りつきりで油断してた俺達も悪いんだ。アレは婆ちゃんから俺達への警告だったと思っとく」

そして、あることに気が付く。

「……ん？ ってことはあの婆ちゃん、魔力も扱えるのか！」

紫色のMFはスペック的にサウザンドであろう。リリーの魔力で動かしていたとも考えられるが、老婆がリリーの意に反した行動を取っていたとすると、魔力を遮断して強制停止させられていたはずだ。

「ん……魔力だけじゃない。全部我流らしいけど、魔術も扱える。チョコベリーに反抗した人を焼き殺すぐらいの魔術なら平気で使う」

いかにもやりそうである。リオンの表情は強張る一方だ。あの老婆、もはや怪物の類であろう。

「リオン……魔女に興味がある？」

「い、いや！ 別に興味があるわけじゃないんだぜ？ なんつーか、とりあえず知っておきたいみたいだな」

本当に？と小首を傾げるリリー。頭を掻きながら、視線を逸らすリオンは誰が見ても怪し過ぎる。

「いや、実は、私は考古学者を目指していてな。特に魔女や魔術について詳しく知りたいと思っていたんだ。チョコベリーはどうすれば自分の知識を教えてください」

壁にもたれ掛かっていたセレネからの気の効いた発言。

少し目蓋を閉じて、考え込む銀髪の少女。部屋の外では宴会でも開いているのかガヤガヤと輩の声が響き始めてきた。

頭の中で、チョコベリーの行動パターンを想像しているのだろうか、何故だか「うう……」と苦痛そうな表情を数回見せてリリーはパツと目を開く。

「もう一人、魔女や魔術に詳しい人がいる」

人差し指を立てて、あつさりとした表情で別の提案をするリリー。彼女でもチョコベリー攻略は不可能だったようだ。

「付いてくる」

ささつと、椅子から部屋の出口に移動するリリー。腰には椅子に立て掛けていた長刀が既に納まっていた。

「おい？ どこに行くんだよ？ そう言えば、この村では魔女って禁句なんだよな？ 村の人にそんなこと聞いたら脳味噌を農具で耕

されるって……ジェノスが」

「アルダインなら大丈夫。彼はそんなこと気にしない。それにいつも何か話したくてウズウズしている変人。それに……」

刀に手を添え、目に確かな覚悟を宿してこう言った。

「自分のミスは自分で取り返す」

ボタンと扉を閉めて部屋を後にする銀髪の少女。

リリイが外に出た瞬間、「姐さん！ どこへおでかけ」と言いかけた男が断絶魔を上げ、「お嬢！ 失礼しやし ひいいい！」と声を張る声が鉄の切断される音で掻き消される。

リオンとセレネが何事かと外に飛び出た矢先、肩を震わせている銀髪の少女が一人。

そして、怒鳴り声が火の粉のように降り注いだ。

「てめえら！！ “姐さん” を呼ぶ時は気を付けろってあれだけ言っただるおうがぁ！ てめえらの頭は“鉄屑” かぁあ！！」

“姐さん” の部分だけ吐き気がするぐらいのにつこり笑顔。

緑色のメタルフレームから声を拡張させて、髭面強面のウィッツが頭領顔負けの気迫で、迂闊な発言をした男共に一喝入れている。

ウィッツが小一時間前にさんざん“姐さん” と言っていたことを「すいやせん！！」と頭を下げている義賊達が知ればどういう顔をしただろうか。

鉄屑とは、現代技術で作り上げた格安MFのことである。ブースターもなければ、リーダーも無い。都内では子どもの遊び道具として使用される程度の代物だ。

メタルフレーム乗りの中で“鉄屑” と言うと“全く使い物にならないカス野郎” という俗語である。

「ウィッツ。私は……別に、何て呼ばれてもいい」

くるりと誰もいない方を向いて背中では語る銀髪少女。

特に気にしていない様子を繕っているが、この現場を見る限り十中八九気にしているのだろう。

腰にまで垂れている端然^{たんぜん}とした銀髪の後ろには男達が平伏せてい

る。

「あ、リオンさん、セレネさん。またどこかへお出かけですか？」
癖の入った栗毛を揺らしながらサイが汗を拭いながら声を掛けて来た。出会った時に比べ、こちらに向けられる表情が随分と柔らかくなっている。

「ああ、今からアルダインって人に会いに行ってくる。ジェノスが戻って来たらよろしく伝えてくれ。サイはメタルフレームの点検か？」

両手に汚れた軍手。恐らく、メタルフレームの内部装甲を開けたのだろう。熱量が溜まりやすい個所が多いため、彼の額を流れる汗の量にも納得が行く。

「はい、MFがいつ必要になるかわかりませんし。……と言っても、メタルフレームの中を見る本格的な整備はジェノスさんかウィッツさんの指示が無いとできないんですけどね。コックピットで行える各部の自主調整はできますが、回路や配線の話になってくると僕も義賊の皆さんもどうも」

「まったく、乗るだけ乗って整備ができねえとは……MFはメンテと改造が醍醐味だったのに、最近の若いもんはこれだからよお……」
呆れた口調のウィッツがコックピットで作業をしながらぼやいている。その拡張された声にリオンも同感だ。

メンテナンスが出来てこそメタルフレーム乗りと言うもの。

第一、自分の機体の状況は自分が一番よく知っておかねばならない。機体を知るには乗ることも必要だが、やはりフレームを開け、整備道具を握るに限る。

「二、四、六、八……義賊って、結構メタルフレーム持ってたんだな」
緑が生い茂る村の片隅には、ざっと十数機のMFが仰向けに寝かされていた。一機に付き四、五人の割り振りがされているが、鉄の巨人の周囲を行ったり来たりしているだけで手際が良いとはお世辞にも言えない。

「おっさん！ これ、いつ終わる見込みで作業してんだよ？」

「俺に聞くな！ 頭あゝ早く戻ってきてくだせえ」

無駄にでかい声が周囲に響く。リオンの質問をスパツと弾き、老婆の邸宅にいる若頭に助けを求めるウィッツ。

軍などに所属し戦闘をするだけのパイロットや機体専属のメンテナーがいるのならば、自分で整備する必要は無いかもしれないが、旅や商売に使用しているのならばメンテナンスはできた方がよい。

発掘屋を訪れば副業として格安でメンテナンスサービスを行っているだろうが、発掘屋の数が激減している現在、荒野で路頭に迷えば死活問題にまでなるだろう。

「機体は触りしかしらねえ俺でも応急処置ぐらいできんだぞ？ 俺の専門は武器だつてのに、ウチにはメンテナーがいねえからよお、くそお……」

左腕関節と五本あるマニピレーターの状態を確認しながら愚痴るウィッツ。

その様子を何気なく見上げ呟く。

「メンテナーねえ……」

「おい、リオン。置いて行くぞ？ 変人に会いに行くんだらう、変人に！」

遠方。いつの間にか小さくなっているリリーの背中を指さし、わくわくを抑えきれないセレネがいそいそと足踏みをしている。

セレネの目的が『変人に会いに行く』にすり替わっている気がするが、今はアルダインという学者から知識を得るチャンスである。

「おお！ 今、行く！」

頭を悩ます義賊達を後ろにメタルフレーム・ハンドレットとサウザンドの基本回路、そして、メンテナンスが必要だと思われる代表的な個所を思い浮かべるリオンだった。

第54章 血の盟約

バーバ・ヤーガ村に君臨している木造の大邸宅。

その大広間には二人の長が椅子に腰かけている。部外者であるリオンとセレネを追い出し、ジェノス、チョコベリー共に護衛の部下も下がらせている。

しかし、未だに会話が無い。お互いに出方を覗っている様子だ。

「ババア……何、企んでやがる」

「そっちこそ、使えないガキ共を拾って何を企んでんだい？ ハイエナの懷はそんなに広くは無いだろう？ カンガルーにでもなったつもりかい？」

煙管を堪能しながら、天井に向かって煙を吐き付ける老婆。

「ふん、あのガキ共は“徳”になるんだよ」

ジェノスの発言に疑いの眼を向けたままゆっくり頷くチョコベリー。そして、煙管を咥えたまま語る。

「ハンスタの基地がぶっ潰されたって言うじゃないか。“拷問のハンスタ”なんて呼ばれていたクソ軍人の基地だ 世間様に公表できない何かをしていても疑われないだろうね」

そうさね、と口から煙を噴き出し老婆は続ける。

「フーッ……差し詰め、あのガキ共は基地に飼われてた《実験動物》を知ってるってとこかい？」

眼帯の無い方の眼が鋭くなるジェノス。

そして、もうこの老婆に隠しごとは無意味と悟ったのか、ジェノスの表情からは溜息と共に気が抜けていく。

「火の無いところに煙は立たない……か」

やれやれと老婆の情報網に感心した素振りを見せ、掌を上に向ける。

「最近、街で出回ってる甘生樹かんせいじゅの出所を嗅ぎ詰めた思ったら、とんでもねえのが出て来やがっただけのことよ。あの基地、やっぱ普通

じゃないぜ。過剰なMF迎撃装置もそうだったが、人数が有り余っているしよばい基地だつてのに、人手不足を理由にして村人を雇用していたつても胡散臭い」

言いながら、懷に忍ばせていた一枚の紙切れを机に放り投げるジエノス。

チヨベリーは滑る様に向かつてくる紙を煙管の力強い一叩きで止める。

読む価値が無いというのか、一目見てそのまま床に払い落とされる基地の活動報告書。

「はん。こんなもんは……ハンスタが作った紙面上の理由だろう？ 村には入らなかったのかい」

「直接確認したかったが、ぶっ壊されてたんだよ……基地もろともな。俺達以外に動いた連中にはいないし、盗賊なんて半端な連中があそこを落せるとは思えねえ」

「まったく、使えないハイエナだね。あの小僧共はどこで拾った？ あの小僧の眼、ありや人を殺したことが無い眼だ。情勢もわからずたまたま村にいただけのアホの一人だろう」

「近くの荒野だ。アイツらと戦ったが、自力で軍の追跡を振り払うのは不可能だろうよ。そこで、俺は一緒に逃げたつていう女に目を付けたわけだ。アイツらのお守^{もり}をしながら村を脱出したつていう化物にな」

「女ねえ……自国の軍隊を嗅ぎ周るのも結構だが、バルバックス帝国がいつ宣戦布告してくるかわからないよ。帝国では王宮に引き籠つてる穏健派の連中が次々に暗殺されてるつて噂だ。“帝国の悪魔”つてのが首謀者らしいけど……どこまでが本当やら」

「無差別に軍へ攻撃を仕掛ける戦闘狂が帝国の悪魔だろ？ なんて戦闘ができねえ宮廷のジジイ共だけ殺されてんだ……臭いやがるな金と欲の臭いがぶんぷんと」

机の上にある足を組み直し、煙管を一吸い老婆が嘲笑う。

「共和国も帝国もこたついてるつてことさねえ。アタシらの国では、

わけのわからない義賊ってボンクラ共が国勢を乱してるしねえ。あ、早く死んでくれないかねえ」

顎でジェノスを指す白髪の老婆。

「悪いがまだ死ねねえな。共和国にこびり付いた腐った膿を絞り出すのは今しかねえ。この国はもう腐ってやがる。……汚れきって用済みになった膿共を絞り出さなきゃ新しい時代は来ねえ、伝説の義賊“フェンリル”がやったようにな」

私には関係ないとも言いたげに、天井を睨そうに見つめている
チヨベリー。

「そんなに膿を絞り出したかったら偉くなったらどうだい。……口
イ・ゲハルトのようにね」

「アイツは関係ねえ……偉くなったところで、何が変わる、何が変わった？」

暗い表情で眼帯を直し、老婆を一睨み。

「俺達の国は壊死^{えし}しつつあるんだ。街に住んでる人間、力のある連中は自分の地位と金のことしか頭にねえ……自分さえよければそれでいい。そんなやつらが国を動かしていけるとは俺には思えねえんだよ」

真剣で、且つ苛立っている様子の長髪眼帯の男。

「なら、平和ボケしてやがる街をぶっ壊してやんな。井の中の蛙も周囲が炎に包まれれば目が覚めるだろうよ。お前が担保にしているブツとお前のチンピラ共を使えば一つか二つはぶっ壊せるだろう？」

「街をぶっ壊したところで、考え方まではぶっ壊せねえよ。俺達が犯罪者として処刑されれば、平和になってまた同じことの繰り返しだ。それに」

椅子に深く座った眼帯の男は腕を組んだまま、前髪越しに視線だけを老婆に向ける。

「俺達は盗賊じゃない。義の無い戦い、無抵抗なやつとの戦いはしねえ」

力強い口調で言い切るジェノス。

「ともかく、軍が引くまでこの村にいさせてもらっぜ。家賃ならアレをバラせばまだ釣りがくる範囲だろ？」

椅子から立ち上がり、靴音を鳴らしながら邸宅を後にしようとするジェノス。

「ああ、そうだ、ジェノス。人造人間ホムンクルスつてのを知ってるかい？」

わざとらしく今、思い出したかのようにしゃがれた声を発する老婆。

「……喧嘩売ってんのか、ババア」

途端、ジェノスの瞳から生気が消え失せた。その形相はハイエナなんてものではない。

邪悪で黒い体毛を纏い、鋭利で金色の眼を持つ黒豹のようである。そんな人物相手に顔色一つ変えない老婆。チヨベリーはジェノスから一瞬たりとも視線を逸らさなかった。

胸の血管を押し潰すような緊張感。

痺れを切らしたのは眼帯の男。

「ツチ、大戦中に量産された人形……いや、兵器か。痛みも感じない感情も無い、まさに殺戮兵器。だが、あまりの強力さ故に、自我を持ったホムンクルスが反乱を起こすことを恐れ、ほとんどが処分された。以後、製造は禁止……これで満足か。胸糞悪いこと思い出させやがって」

背中越しに手を振りながら、急ぎ足で外を目指すジェノス。

良い回答だと満足げに微笑む老婆。人の不幸をまるで美酒のように味わっている。

「じゃ 人造魔女ヘクセクルスなんてのも知ってるかい？ 割と旬な情報だよ」

老婆の声を聞いたジェノスは動揺を瞳に宿したまま完全に固まっていた。

「なんだと……」

「人造人間でそれほど強力だったんだ。人造魔女なんてものがいれば、さぞ愉快なことになるだろうね。人体実験をしても公にならない村……そんな村が確かあったような」

「その情報元はどこだ！ 答える！！」

「まあ、話はここまでだよ。お前の得になることばかり、これ以上言えやしないね。アタシ達にも得になるモノをくれるっていうんなら考えてやつてもいいじゃないか……例えば、蒼いMFとか……担保にしている“黒い豹”とかねえ」

骨と皮だけの顔には、欲と勝利に道溢れた眼球が二つ。

ジェノスは深く息を吸い込み、短く吐く。

そして、意を決したように机に掌を強く叩き付け、老婆を下から睨む眼帯の男。

「上等だ……いいだろうババア。あんたの言う通り、あんたの得にもなることをしなくちゃフェアじゃねえよな。どうしても、アレが今すぐ欲しいってんなら……俺と勝負しな！」

記号の羅列が数行に渡って記入された羊皮紙、少し黄ばんだ白い羽ペンを胸元から取り出し、血液をペンの先端に滴らせるジェノス。慎重に何かを書き終えた後、親指の血印を押して乱暴に老婆へ突き出す。

「ほおゝ血の盟約かい。いいだろう。アタシが勝ったら、蒼いのと黒いのを頂くよ」

記号の羅列を隅々まで舐めるように見た後、ジェノスの血印の横へ自分の血印を押すチョベリィ。

魔術師同士で行われる血の盟約は、現在違法とされている。

法律など無い、無法地帯に近かった古代において、魔術に長けた古代人が相手に約束を守らせるために作った呪術の一種。

血の盟約においては、古代人が組み上げた術式・言語をほぼそのまま使用しているため、効力は絶大。内容によつては次代にまで影響を及ぼすものである。

決して違約のしようが無い取り決めを行う時だけに使用される、容赦の無い呪術。

「俺が勝ったら、洗いざらい知つてることを吐いてもらう。勿論、アンタだけじゃない 犯罪経歴がびつしり詰まったヤバイことに

関わって来た村人達も対象だ」

「そこに書いてる呪戒じゅかいを読んだからわかってるよ。まさか、こんな
ものまで持ち出してくるとはね。で」

「どうやって白黒付けようってんだい？　そう言う老婆の両手には、
魔術による炎が高々と燃えたぎっていた。」

「ふん、相変わらずだなババア……もちつとクールに考えろや。俺
達がドンパチやっても面白くねえ、だろ？」

椅子に掛ける老婆目掛けて歩み寄る長髪眼帯の男ジェノス。老婆
が攻撃しようものなら直撃は免れないであろう。

長髪眼帯の男は防御する気配も見せていない。

老婆の両手に宿る炎が音を立てる中、遂には老婆の眼前まで迫り、
小さくある提案をささやいた。

「ふん……面白いじゃないか。その話、乗ったよ」

二人の長だけで取り決められた契約。

最後に嘲笑うのはどちらなのか。

第54章 血の盟約（後書き）

久しぶりに後書きを書かせて頂きます。

はい、急展開ですが、甥っ子が生まれました。

おこき家は甥っ子の夜泣きやら家事育児の手伝いで毎晩賑やかでございます。

家に居てもなかなか疲れが取れないので、そろそろおこきも夜泣きしようと思います。

第55章 伝承

「一口に魔女と言っても色々な伝承があるよ？ セフィラ教の教えに出てくる魔女なんて、残虐無慈悲、欲望と本能に生きる怠惰と汚れを運ぶ怪物として書かれているし、あちらさん……帝国の国教であるクリファ教では、終焉の日に生まれる悪の化身とまで言われている」

魔女に関する資料を開けながら薄っぺらい声で気味悪く笑う男。骨格が浮き出る程やせ細った顔を飾るのは無精髭。艶の無い髪をガリガリと掻き耄り、黄ばんだ白衣にフケを撒き散らしている。

研究に没頭し過ぎて身なりを気にすることを放棄した研究者とは、恐らく彼のような容姿をしているのだろう。しかし、彼からは未知を解明する研究者としての希望や高揚感、向上心と言ったものが抜けおちている。

まるで、迷宮に迷い込み“道”を見失ったかのような男。それがバーバ・ヤーガ村のアルダインという男だった。

「こ、こ、これって」

「あう、あう、ああ」

黒髪の少年と銀髪の少女が資料に載せられている絵を見て顔を赤らめている。開いた口が塞がらない二人に取って、言葉にならない衝撃的な絵がそこにはあった。

「ああ、これは沢山の男を魅了している魔女の絵だね、魔女はこうやって男達から魔力の源である精を絞り取るとも言われているんだ……精を抜かれた男は魔女の言い成りになって、おっと次の資料は二人には刺激が強過ぎかな？ 僕はこの絵、結構好きなんだけどな」

「ふおお！！ なんと破廉恥な！ アルダイン！ こんな絵が好きとは中々のモノ好きだな！」

「ふふふ、モノ好きか……そうかもしれないね。人間の醜い部分がこの絵には滲み出ているだろう？ 誰でも隠しておきたい醜い部分

は一つや二つある。それを魔女の手に掛ければこつも簡単に醜悪さを晒してしまう……人間本来の醜い姿をね」

ポルノ写真として十分に機能するであろう“破廉恥な絵”をマジマジと見ている蒼髪のセレネ。

鼻息を荒くしながら気恥ずかしい絵を見入っている少女に、複雑な思い感じながら眼のやり場を探すリオン。

アルダインは、血色の悪い頬を引きつらせながらセレネを眺めていた。

目元の窪みが更に深くなり、動かなければ死体ではないかとさえ思わせる容貌からは喜怒哀楽など読みとれない。

「アルダイン。魔女は今も生きていると思うか」

資料を片手にセレネが途端に真面目な顔でアルダインに問うた。

意外な質問だったのか、アルダインの窪んだ骨格から僅かに白い眼球が漏れる。

「生きているか……君は魔女が存在していたことが当然のような言い方をするんだね」

この村に来る前、彼が人として社会に適応していた時代。

アルダインは数々の人間に魔女について講義をしてきたが、大抵の人間はこの少女のような質問にはならない。

せいぜい魔女は実在したかどうか、あるいは、こんな絵を描かざるを得ない程にまでその時代は混沌としていたのかという魔女の存在を否定した質問だ。

「魔女なんて実在しないよ……ただの空想さ」

容貌に似つかわしい諦めの声。机に広がる資料を腰を丸めながらまとめ始め、アルダインは立ち上がる。

「僕が教えることはこれくらいかな。こんな村じゃ新しい本も読めないから、まともなことを教えてあげられなかったかもしれないけど」

「いや、十分だよ。アルダインさん、ありがとう。えっと……資料はこの本棚に戻しとけばいいのか？」

「あ、いや……その本棚は違う!!」

部屋にいる少年少女が竦んだ。

突然の怒鳴り声もそうだが、気力の抜けたアルダインがこうも攻撃的な感情を自分達にぶつけてきたことに三人とも理解できないようである。

「あ……ごめん」

気を利かせて、本棚まで本を戻そうとしたリオンだったが、急いで机に本を戻す。

研究者を思わせる彼には本の場所にこだわりでもあるのだろう。

「いや……怒鳴ってすまない。資料は置いておいてくれればいいよ。見ての通り散らかっているからね、自分で戻さないとどこに何を置いたのかわからなくなってしまうんだ」

冷や汗とも取れる粒を顔に流しながら、冷静さを取り繕うアルダイン。

「久し振りに魔女についての会話が出来て嬉しかったよ、こちらこそ礼を言わせてくれ」

アルダインは枯れ木のような指で、いそいそと資料を元あった本棚に戻そうと手を伸ばす。すると、アルダインの背後、リオンが手を伸ばそうとしていた埃の被った本棚から一枚の洋紙がリオンの側に舞い降りて来た。

アルダインは音も立てずに落下した洋紙の事に気付く素振りを見せない。

「アルダインさん、紙が……研究資料？」

リオンが洋紙を拾い上げた瞬間、アルダイン宅のドアが鈍い音を立てて蹴り破られた。

「アルダイン、ちよいと邪魔するよ。……なんだ、ガキ共も一緒に」

煙管を咥えながら、床に転がったドアを踏み付けて顔を出すチヨベリー。

「チヨベリー。一体、何の用だ」

家主の虚ろな眼球には敵意が宿っていた。家のドアを蹴り破られたことに殺気立っているわけではなさそうだ。

仇敵が目の前にいるかのような、憎悪に満ちた眼を向けられている
「チヨベリーはハエを払うように返す。」

「アルダイン、お前に用は無い。ここに居候してる奴に用があんだよ。」

緊張感が充満する。

「彼は怪我をしている……何をさせる気だ」

「怪我なんて舐めたら治るだろう？　これから、ハイエナと戯れてもらうんだよ」

「馬鹿な！　彼を殺す気か！　お前は人の命を何だと思っている」
声を張るアルダイン。事態が飲み込めないリオン達は彼らを見守るしかない。

「フフン、お前に言われると心外だね。殺す気も何も、この村に來た時点で村の連中は皆、社会的に死んじまってるんだよ。それにアイツは私達と同じ臭いがする。小便垂らして布団に包まってるタマじやない、アイツにとっちゃそっちの方が死だ」

一歩一歩確かな存在感を纏いながら部屋を歩く老婆。
そこへ緊張感の無い声が蹴り破られたドアからする。

「リリイ、ちよつくら婆さんとこの三下と遊んでやってくれ……つて、ババア！」

過去最高の来客数を更新しているであろうアルダイン宅。

義賊の頭領までも颯爽と現れ、リオンは吠えずにはいられなかった。

「一体、今から何が始まるんだよ」

ジェノスとチヨベリーが顔を見合わせニヤリと笑う。

「決闘だ」

手にしている砂時計を見せつけるように揺らし、悪戯に口を歪めるジェノス。

拾い上げた洋紙をどさくさに紛れて懷に隠したりオン。

それに気が付いた者はいなかっただろう。

第56章 樹海の決闘

響くは大気震わす鉄音。

揺れるは樹海広がる大地。

対峙するは紫の武者、そして 蒼い騎士。

「リオン……これだけは言わせてくれ、お前は本当にアホだな!!」
「……うるせえ。俺も後悔してんだよ! 何であんなこと言っちゃまったんだって」

月花のコックピットで激怒するセレネを^{なだ}宿め、リオンはゆつくりと操縦桿を握る。

「でも……あんな怪我人を戦わせるわけにもいかねえだろ?」
チヨベリーは、立つのがやつとという重傷患者をメタルフレームに乗せようとしていた。

白髪に充血した赤い眼、アルダイン以上にくたびれた いや、世界に絶望したかのような顔立ちの男。

精神、肉体共に摩耗した様子の彼がコックピットに座ろうものなら、それは拷問椅子に早変わりだ。

「いかねえだろう?」じゃない! 何で私達がチヨベリーとジェノスの決闘に参加しなくちゃいけない? しかも、私の月花を使うなんて……破廉恥な!」

何が破廉恥なのか理解できないが、セレネが月花に同乗してくれていることから愛想を尽かされたわけではなさそうである。

月花はセレネがいなければ、ともに稼働できない。ノーションに造ってもらった魔石の片割れが操縦席にあるにはあるが、五分も戦闘すれば碎け散ると言われている。

「ん……本当に大丈夫? 私、ジェノスから手加減するなど……言われてる」

メインモニターに決闘相手・リリィからの通信が入って来た。
ジェノスとチヨベリーはどうやらお互いの身内から決闘をさせる

部下を選び、彼らの勝敗で賭け事をしているようだ。

ルールとしては、“機体が動かなくなるまで殴り合う”という単純明快なもの。

殺傷能力のある武装は外すように言われているが、何故か一番殺傷能力の高そうな巨大な刀が相手の腰に据えられていた。

当然、抗議したリオンだが、「刀を捨てる時……それは誇りを捨てる時」とリリイが断固拒否したため、使用する気は無いが念のためにこちらもパイルバンカーを装着したままの決闘となる。

リオンからの返事が無いことを心配してか、リリイが首を傾げて少年の名前を呼んだ。

「ん……リオン、聞いている？」

「ああ、手加減抜きでやってくれて……いや、やっぱり　ああ！
どんと来い！」

「ん……早めに降参して」

リリイの願うような言葉と共に通信が切られた。

アルダイン宅に押しかけて来たチヨベリーに、怪我人を使うのを止めるとリオンが言った途端。

「なら、誰が戦う？　お前が戦ってくれんのかい、小便小僧？」と極悪非道な老婆に脅し文句を吐き付けられ、引くに引けなくなったという次第でこの状況。

怪我人を無理にでも戦わせようとするぐらいだ。MFを操縦できる者が彼以外にいないのだろう。

実力がいくらあっても怪我人が戦うのとリオンが戦うのでは、結果はあまり変わらないはずである。

この試合、負けて当然。ならば、怪我人の代役をリオンが駆って出ても問題ない。

人選以前にこんな条件で決闘に応じた老婆に責任があると言うものだ。

「小便小僧……せいぜい頑張りな」

とても無理矢理決闘に参加させた人物の発言とは思えない。

義賊のハンドレットの肩に我が物顔で腰を下ろす老婆は、暇を持て余しながら煙管を吹かして空を見上げている。

怪我人に決闘させようとしたり、リオンのような戦闘素人を代理に立てるなど、彼女は決闘に勝つ気があるのか。

言えない文句を胸内で思っていると橙色のサウザンドから通信が入る。

「んじゃ、お前らのタイミングで始めてくれ。どっちかがスクランブルになるまでの“どつきあい”だから死ぬこたあねえだろ。まあ、秒殺だろうから安心しろレオン」

勝ち誇った笑みを隠し切れていないジェノス。彼の右腕であるリイとリオンとは試合にすらならないと嘲笑っているようにも見える。

名前を間違えるな、という抗議すら出来ないままリオンは生唾を飲み込む。

ジェノスが通信を切った瞬間、リイの駆るMF【夜光】の空気が変わったのだ。

決闘は始まっている。

構えるでもなく右手に愛刀を持ったまま仁王立ちをしている武者。赤いカメラアイが月花を捉えて動かない。

「リオン……来るぞ！」

セレネの声とほぼ同時、夜光が地を蹴り大きく跳躍。

木々よりも高く舞い、太陽を背にして落下してくる黒い影。

回転を加えた踵落としが、蒼い騎士を襲う。

「リオン、防御だ！ 防御、おお！」

セレネが先んじて防御を促したが、リオンは回避を選択。

機体重量に加え、落下速度を考えると防御できたとしても、腕が引き千切れるとの判断。

幸い高く飛び過ぎた夜光は、落下してくるまで時間がある。前方にブースターを吹かせ後退すれば

「なっ！ んでだよ！ おあぁっ！」

落下地点よりも余裕を見て距離を取ったりリオンだったが、夜光はブースターで落下地点の微調整を行い、月花の頭部に踵落としを見事に決める。

大地が陥没する音、そして首部の機械靱帯がミシミシと軋みを上げた。

加えて、着地と同時に振り上げられた武者の剛腕。

「ん！？ 意外と頑丈……これはさっきの……お返し」

リリーの悪戯な声の後、洒落にならないボディタッチが騎士の胸に食い込んだ。

リリーが行ったことは、“胸を触る”という次元を超えている。

魔科学装甲を陥没させているのだ。

歯が浮くような鉄の悲鳴が樹海に轟き、蒼い甲冑は水切りをする石のごとく“樹海”を転がり跳ねた。

十数本という大木を粉碎しながらようやく静止した蒼い弾丸は、木々をむしり取りながら立ち上がろうと試みるが、立ち上がれない。「ったたあ……だから、防御だと言っただろう！ アホリオン！ バカリオン！」

「つくう、いてえ、悪かったよ！ いっ！」

アホリオン、バカリオン。まるで呪文の様なこき下ろし文句。

既に全速力で駆けている紫の武者を捉えて声を上げたりオン。起き上がり様に更なる攻撃を仕掛けて“蹴り”を付けるつもりか。

「月花……ごめん」

武者を駆る少女の気遣い。圧倒的な力の前に成す術も無く月花はまだ、地を這いつくばっていた。

たったの二撃でこのありさま。

まさに秒殺。夜光はこのままボールを蹴り飛ばす様に、月花の頭部を蹴り飛ばし戦闘不能にするつもりだろう。

視界を失えば、降参するしかない。

「くそ……」

力の差が歴然過ぎる。

見様見真似で、月花の操縦を覚えたりオンと幾度の死線を越えて来たリリイ。

差があつて当然だ。しかし、納得行かない、納得したくない。わけのわからないまま決闘させられ。

さんざん馬鹿にされて。

たつたの一撃も与えられない。

良い見せものではないか。

「やられて」

ようやく立ち上がる月花。が、無防備な状態は変わらない。

「たまるかつてんだあー!!」

叫びながらリオンは操縦桿を乱暴に突き出す。

途端、蒼い騎士のカメラアイが輝き、頭部のバイザーが下りる。

ようやく、フルメタル騎士が戦場に赴く

完成された全身鋼鉄の戦装束。蒼い装飾を髪のようにたなびかせ

碧眼の蒼い騎士が目覚めた。

稼働を開始した全身のクリフト・ドライブが音を立て魔力を放出。

迫りくる敵は眼前。

蒼い騎士は大きく踏み込み、片膝を付いて右腕をフルパワーで解き放った。

鋼鉄の蒼腕に魔力がたぎり、肩部と腕部の接合ギアが勢いよく回転、爆発的な怪力が生まれる。

更にパイルバンカーと言う重りが、この一撃をより強力なものに昇華させていた。

「反撃の前に頭を……!!」

対するリリイも最大速度に達した機体から、回し蹴りを月花の頭部へ叩きつける。

地響きを思わせる衝撃音が二つ。

樹海に住む生物達が一齐に声を上げては逃げ失せる。

訪れる 静寂。

追撃に來た夜光の蹴りは月花の顔面に亀裂を走らせたものの、地面にしがみ付いている月花の体は衝撃を地に流せるため微動だにしない。

しかし、軸足の一本で機体を支えている夜光。月花の重た過ぎる一撃を受け止められるはずもなく。

衝撃波でも喰らったかのように、夜光は走って來た樹海を転がりながら逆走させられた。

爆発音にも近い騒音。その音を否定するかのように、唸り声を上げる眼帯の男。

「んだと！？ あの機体、化物みてえな硬さだ……それに、姫さんの懷を抉るとは」

「機体さまさまってとこだね。今のリリイの一撃、並みの機体だったら生首が吹っ飛んで試合終了だったろうよ」

「まさか……ババア。ここまで見越してあいつらを戦わせたのか」

「フッ……さあ、どうだろうね」

舌打ちするジェノスに対して、チヨベリーは煙管を咥えながら嬉々として砂時計を見つめている。

一方で、大事な大事な“姐さん”を吹き飛ばしたりオンに罵声の言葉を浴びせる義賊達。幸いだったことは、サイが今にもハンドレットを駆って飛び出しそうな髭面強面のウィッツを必死に抑え付けていることだろうか。

「今の……俺が？」

「ああ……まあ、咄嗟の判断としては良かったと思うぞ、凄く」

呆氣に取られているセレネから、彼女が操縦したわけではなさそうだ。

傷だらけの蒼い甲冑は、バイザーを再び頭上に戻し何事も無かったかのようにゆっくり姿勢を正す。

リオンは操縦こそしたものの、あんな低姿勢からの右ストレートを放った覚えが無い。まるで勝手に機体が自衛したかのような不気味な感覚。

「いや、月花が勝手に」

「リオン、リリーの逆鱗に触れてしまったようだぞ」

困惑しながら後部座席に振り返る少年は、そこに座るセレネに正面モニターを指さされ驚愕する。

武者と騎士によって切り開かれた一本道。その先には、ボディアイマーが痛々しく欠けた夜光が排熱作業を行っていた。

白い蒸気をフェイス、腕部、脚部などの各部から噴出する鎧武者の姿は、憤怒した阿修羅そのもの。

刀を支えにしてゆるりと立ち上がり、夕日の様な赤き双眸ソウを“敵”に向けた。

「手加減……つく、不要！」

感情を押し殺せていない声で銀髪の少女が言い放つ。

「やべえ！ 姐さんがキレたあ！」

サイの頭を掴みながらウィッツが絶叫する。

刹那　メタルフレイム夜光が抜刀。

峰を向けていることからルールの分別は付いているようだが、クリフト・ドライブを経由して放出される赤い魔力が視認できる程の魔力量。

魔力を主動力とするサウザンドの性能は乗り手の魔力量……素質に左右される節がある。

視認できる程、高濃度の魔力が機体から発せられる乗り手など、リオンから言わせれば異常である。

これが義賊“戦争のハイエナ”侍姫の力。

蜃気楼のごとく妖艶に輝く銀刀。魔力を送られることで輝きを増したあの刀、恐らく魔科学兵器。

ウインド村を襲った盗賊が使用していた“太刀”と同じ攻撃系統のものか、はたまた刀を思わせる防御系統のものか。

「セレネ、あれって」

「私にもわからん、とにかく刀には要注意だ」

スツと下構えに銀刀を構え、徐々に速度を上げて接近してくる紫

の武者。

その疾走には先程のような音は無く、まるで地を滑っているかのような軽やかさだ。

魔科学兵器の効力はわからないが、接近しなければ効力を発揮しないものと考えていい。

「リオン、こつちも何か武器を！」

「いや、武器なんて……」

月花の周辺に武器などない。ふと、両腕に搭載されたパイルバンカーが視界に入る。

しかし、コレは使えない。

万が一、射出した先がコックピットならば乗り手は即死だ。“月花”のように正確な射出がリオンにできるとは到底思えない。

それに先程の一撃がパイルバンカーの使用を恐怖させる。

先程の一撃、あれはリオンにとって覚えの無い一撃だった。

もし、リオンでない何者かが自衛のために行ったのならば、パイルバンカーの使用は搭乗者……リリィを殺しかねない。

だが、あの魔科学兵器に太刀打ちできる武器など他にあるはずもない。

降参してしまうか、それとも素手で魔科学兵器の相手をするのか。思考するリオン。そこに陽気な声が通信で入ってくる。

「レオン！ 使え、家の姫さんがルール違反した。お前も武器を持て」

軽々と軍用ブレードを投げつけるジェノス機。

高々と宙を舞い、無粋な音を立てて地面に叩き付けられた大剣。

それは間違いなくサイに白刃取りされた大剣だった。

「え……使って良いのか？」

「丸腰でウチの姫さんに勝てるでも？ それに騎士様が剣を使うのは当然だろ？」

敵が使って良いと言ってるのだから使って良いのだろう。

盛り上げればそれで良いと言うのか、現状、敵であるはずのジェ

ノスからの贈り物。

柄を両手で掴み、牽制として大きく剣を振り回す蒼い騎士。

が、一太刀浴びせようと駆けてくる武者に牽制など効かない。空を斬る大剣など恐れるに足りないのだ。

「それは、当たらない……隙を作るだけ」

悪魔の呟きが微かに聞こえたかと思うと、月花のコックピットは激しい揺れに襲われた。

まだ刀は振り上げられていないというのに。

「どうなつてんだよ。おおお！」

「あれは恐らく残像だ。レーダーを馬鹿にするんじゃない、肉眼までも馬鹿にする魔科学兵器なんだろう」

しろがね
銀の幻影が騎士を取り囲む。

熱量や魔力量でレーダー上に残像を残すことは簡単だ。しかし、カメラアイや肉眼にまで残像を残すことは、自然現象でも困難極まりない。

近接武器に残像が残るとすれば、白兵戦において絶対的優位に立てる。

“斬られたことに気が付かない名刀”とはまさに眼前の銀刀を指す。

峰打ちとはいえ、初撃で月花の装甲は更に陥没。

加えて、恐るべき速度で連撃を加えている紫紺しこんの荒武者。

荒々しくも太刀筋の整った剣の舞は騎士の重厚な鎧を痛めつける。幾多もの刃が眼前をうろつくため、もはや残像と実像の区別はできない。それ以前に、光速の太刀筋など視認も回避もできるはずがない。

幾度も鉄の挟れる音は、さながら剣撃の狂想曲といったところか。

「ぐうう！ リオン、距離を取れ！ ナマス切りにされてるぞ」

「ナマス切りだ！ ちくしょう、喰らえええ！！」

アラムが装甲ダメージの限界を知らせている。

いくら月花の装甲が逸脱していても魔科学兵器の攻撃には歯が立たない。

この窮地を一刻も早く逃れたくて、リオンは何も考えずに大剣を片腕で横薙ぎに振るった。

月花の圧倒的な怪力で強風を巻き起こし、大剣は木々を次々と薙倒して行くが、あるうことか振り切った大剣が強靱な大樹に食い込み、囚われたのだ。

ここは荒野ではない、周囲の状況をわからず闇雲に剣を振るえば少年のようなミスを犯す。

「な……しまった！」

「……私の勝ち」

気の抜けたリオンの声に続くは、透き通るリリーの声。

両膝を付いて、腕を全開に広げる蒼い騎士。“どうぞ斬って下さい”と言わんばかりの無様なポージングを決めている月花。

首筋にスツと振り下ろされる銀刀。誰がどうみてもチェックメイトであろう。

「つくそおお！」

考えより先に、ブースターをフルスロットルまで捻る。

六つの大型ブースターが膨大な魔力によって、点火。

「はっ」

リリーが息を飲んだその時には、蒼い騎士の頭部が夜光のカメラアイに激突。

蒼い甲冑から繰り出される、頭突き。

紫と蒼の装甲破片が空気中に舞う。

騎士とは思えない野蛮な戦術を見て、ジェノスは口元を緩めている。

「往生際が悪い野郎だな。さっきの一撃といい……単なる素人つてわけじゃなかったってことか　って、ババア、何してやがる」

「あん？　あんたにや関係無いことだ。お前は黙って喧嘩を見てりやいいんだよ」

夜光と月花の決闘を見ながら、紙にペンを走らせる老婆。その様子は学者そのものであった。

「へん、相変わらず口の減らねえババアだ」

「予想以上……」

「あつ、はあつ、マジで……マジかよ」

信じられないといった様子を見せるのは、リリイだけではなかった。

リオン自身、自分が無様なりにも戦えていることが信じられない。搭乗している機体が月花でなければ、秒殺だったであろうが、抜きん出た防御力を誇る蒼い騎士は、彼を形だけでも戦士として機能させている。

距離を取って相手の出方を覗う両者。

月花から眼を逸らさず思考しているリリイに対して、リオンはこの現状を乗り切ったことを認識することで限界。

次なる戦術など頭に思い浮かばない。

まず、あの魔科学兵器をどうにかしなければ、次の接近で月花は行動不能になるまで切り刻まれるだろう。

額に汗を滲ませる二人のMF乗り。

すると、突然、月花の体がガクツと、まるで糸の切れた人形の様ひねまわすにひねまわす跪く。

「え？ おい、どうした月花！」

へきがん碧眼のカメラアイからも光は失われ、月花は活動を停止。

コックピットの電源も落ちており、視界を照らすのは非常用バッテリーによる薄緑の光だけ。

先程まで半分は残っていた燃料ゲージが空になっている。ブースターの使用がこれほどまで燃料を喰うとも思えない。

「セレネ、月花が」

「むう……もう駄目だ」

後部座席から擦れた声。月花ではなく、魔力を送っているセレネの身に何か起きたというのか。

「大丈夫かセレネ！ 一体、何があった」

リリーの使用した魔科学兵器には、乗り手の体調に影響を及ぼす効果があったのかもしれない。

薄緑が広がる視界の中、身を乗り出してセレネの安否を確認しようとした矢先。

きゅーつと小動物の鳴く様な声、いや、腹の音がコックピットに響く。

「……おい、まさか腹が減って力が出ない、とか言い出すんじゃないだろうな」

「あ、あ……リオンよくわかったな、腹ペコだ」

照れを誤魔化すように頬をぽりぽり掻くセレネ。

すると突然、口元を抑えて苦しそうに声を絞り出す。

「うっぷ、残像を目で追っていたら吐きそうになってきた。ああ、もう吐く、吐く。もう決めた、よし、吐こう」

「勝手に決めるなよ、おい、やめろ！ 気をしっかり持て、早まるな！ ちょっと待て！ 待って下さい！ 待って ぎゃあああ！
！」

決闘結果。

月花 戦闘続行不可能なため、勝者・夜光。

第57章 決闘、その後

散々な結果に終わった決闘。

樹海の村に黄昏が訪れた頃、アルダイン宅に戻って来たリオンとセレネ。

資料で散らかっていたテーブルは、床に片付けられ三人分の食事が並べられている。

空腹のセレネがわめくため、アルダインが少し早い夕食をこしらえてくれたのだった。

「んも、んも、旨いぞアルダイン！ 料理の腕は見かけによらないんだな、んも、飯が旨い！」

「お前……よく食えるよな」

「こんな旨い飯、食えない方がおかしいだろ？」

首を傾げる蒼髪の少女。少女の汚物をコックピットでぶっかけられた少年にとって、目の前にあるクリームシチューは鬼門だった。

「俺だって、あんなもんぶっかけられなかったら……くう」

服が洗濯中のため上半身裸のリオンは、悔しそうに隣に座るセレネを見る。

「リオン、服乾くまでこれ……着る」

少年の体を直視しないように、もじもじと床を見ながら代えの服を渡す銀髪の少女リリイ。

「ん？ ああ、わざわざありがとうなりリリイ。下ばかり見て、ど

うした？」

「な、何でもない！」

首をぶんぶんと左右に振り、服をリオンに投げつけ、小動物のよう
に外へ銀髪は逃げて行く。

「へえ、結構良い生地服だな。こんな良い服貸してもらってって
……これ、は」

滑るような手触り。それでいて身体を包み込むような温もり。丹
念に織り込まれた生地からこの服が一級品であることは間違いない。
フリルの付いた白色の服を震える手で広げてみる。
リオンはネグリジエを手に入れた。

「って、んなもん、着れるかぁ！！ 明らかに男物の服じゃねえだ
ろっ！」

スケスケの布ごしに薄毛を被ったムチムチの肢体が包まれ、ふわ
りと風に煽らた足元から垣間見えるは……男の生足。

あまりの気色悪さから着用した瞬間、リオンは間違いなく監獄送
りであろう。

「おお……変態趣味なお前でもハードルの高い服を用意してくると
は、さすが義賊の侍姫だな。リオンがそれを着ている姿を想像した
ら……いかん、精神攻撃を受けた、吐き気が。リオン 出る！」
「出るな！ 屈するな！ 飲み込め、お前ならできる！」

セレネの口を片手でロックしながら、顔を反対側に向けさせる。

「うぐう。しかし、これはリリィなりの嫌がらせかもしれないぞ。

決闘が終わってから、リリイのお前に対する反応がおかしい」

「リリイちゃん、ああ見えてもプライドが高いんだよ。素人同然の相手に苦戦を強いられた、それが気に障っちゃったのかもしれないね」

「ご愁傷さま、と人の不幸を笑うボサボサ頭のアルダイン。」

すると、そそっかしい足音がアルダイン宅の前で止まり、バカンツと勢い良く扉が開かれた。

「あれ、どうしたんだい？ 忘れものかな？」

「た、大変なことが、起こった！」

物凄い剣幕の来客には、アルダインの質問など耳に入っていない。端麗な銀髪が乱れに乱れ、感情が高ぶり過ぎて肩で息をしている銀髪のリリイがそこにいた。

緑色のジャケットを両手で握り締め、呼吸を整えている。疲労からか、それとも焦りからか雪のような白さを持っていた顔が果実のように真っ赤に染まっていた。

リオンの手によって広げられている可愛らしいネグリジエを一目見て、目を見開くリリイ。

「あう……」

リリイから声にならない声が漏れた。それを合図に少女から同様が嘘のように掻き消える。

まるで、人質の救出を考える特殊工作員のように、新緑の瞳には一切の容赦が無い。

「何が起こったんだ！？ まさか、軍が」

「ち、違う。と、とにかく大変なことが起こった」

あくまでも冷静を装いながらリリイが告げる。

半裸のリオンは立ち上がり、状況を聞こうと少女の前に躍り出た。すると、リオンの上半身を直視したリリイは慌てて視線を逸らす。

「そ、そ、それは、危険。早く返さないと大変なことになるの！」

目を伏せて彼女が力強く指差すのは、リオンが椅子に掛けたフリル付きネグリジェ。

ネグリジェを鷲掴みにして、小柄な少女に提示してみる少年。

「……これが？」

「ひっ！ そんな、乱暴につ……、こほん。ん……早くそれを返す！」

「返す？」

「はっ！ わ、私のじゃない！ 私のじゃない！ 違う、違う違う！」

「いや、そんな必死に否定されても。今“返して”って　　がつは！」

嗚咽を殺しながら敵を殺す目で訴えかける。“見たこと、聞いたことを忘れる”と。

理不尽にもリリイの鉄拳を顔面に食らったリオンは、鼻を押さえながら椅子ごと床に転がった。

フリルの付いたネグリジェを大事そうに抱えて、男物の服をセレネの頭に被せた後、猛ダッシュでアルダイন宅を後にするリリイ。

「あれは……リリイの服だったんだな。きつとお前に渡す服はこっちだったんだろ。しかし、あんな可愛い服が趣味だったとは……ますます幼女属性が、ずずず」

ジャケットを頭から被せられたセレネは気にせずハーブティーをすすっている。

一方で、床に転がる少年はというと、

「いつてえ〜！　なんで俺は殴られた！？　何が危険って、アイツが一番危険じゃねえか。ったく、思いつきり殴りやがって……一瞬、視界が真っ白になったって」

理不尽な暴力を受けてのたうちまわっていた。

「幼女を辱しめた拳句、殴られてエクスタシーを感じるとは……やっぱりお前、変態　」

「気絶しかけたんだよ！」

心底気持ち悪そうにリオンを見つめるセレネに少年は、今夜も頭を悩ませる。

「アルダイン、馳走になったな。シチューは絶品だったぞ」
「いやいや、あのシチューを作ったのはリリイちゃんだよ。僕が作ったのは、その周辺にあった野菜ぐらいさ、あんな野菜でも育てるのに苦労したんだ」

食後、何気ない会話を行うセレネとアルダイン。

そこへ、リリイから貰った服を着用してきたリオンも加わる。ジャケットの背中には一味のシンボルであるハイエナの刺繡ししゅうが施されており、一味の一人になった気までする。

「あの料理は、リリイが作ってくれたのか。それで、リリイは？」
「君を張り倒してすぐ、義賊が借りている小屋に戻ったよ。リリイちゃんが戻るまで、僕が君達を見張るそうだ」

やれやれと言った仕草をしながら、アルダインは机の下にある資料をぺらぺらと流し見る。

そして、何か思い出したように苦笑した。

「ああ、それからリオン君に伝言。“あの服は、ジェノスの！”だそうだ」

「嘘であることを、切実に願うよ」

リオンは即答せざるを得なかった。

「それはそうと、ジェノスが集合をかけたらしい。何を支払うかわからないけれど、賭けに負けたチョベリーがそこで対価を支払うそうだ……」

言葉を吐き捨てるアルダイン。

そんな彼を見てリオンは、出会って以来胸に秘めていたことを打ち明ける。

「アルダインさんは……この村が嫌いなのか」

暫しの沈黙。アルダインは「うん」と自分を納得させるように頷くと語り始めた。

「昼間にチョベリーが言っていたと思うけど、この村に来る人間はね、皆、社会的に『死んでいる』人間なんだ。ほとんどは魔女狩りから逃れた無実の人間ばかりだけれど、中には自分の娘や妻を殺し

て逃亡して来た極悪人もいるのさ」

アルダインは、用意しておいたハーブティーを木製カップに人数分注ぎ始める。

「誰も自分の身の上話なんてしないけどね。この村の人間は他言できない深い闇を持っている。樹海という光の届かない中でしか生きれない人間の溜まり場だよ、この村は」

“そんな村を好きになれるはずもないだろう” アルダインの目はそう訴えているように見えた。

どうぞ、と二人の前にカップを置くアルダイン。

「得体の知れない極悪人が村に流れ着くなら、今日流れ着いた私達もその可能性が高い。そういうことになるな？」

だからこそ、村人達はリオン達を警戒していたのだろう。

まして、義賊などという武装集団が連行してきた者達だ。

「そうだね。最初は警戒させてもらったけど……極悪人が怪我をしている人間のために、賊の決闘に参加するとは僕には思えない。君達は加害者側ではなく、被害者側の人間だと推察させてもらった」

くたびれた顔の男は黄ばんだ白衣のポケットに手をつ込み、薄汚れたガラス窓からを眺めている。

彼が見ているのは外の闇か、それとも薄汚れたガラスに映る自分の顔か。

「そう言えば、怪我してた人は今どうしてるんだ？」

リオンが決闘に参加することになった原因の一人。白髪に充血した眼の男。

「ああ、彼なら奥の部屋で眠っているよ」

「胸あたりに酷い怪我をしていたな、あいつはアルダインの家族なのか？」

「ん？ チョベリーに部屋を貸すように言われて、部屋を貸しているだけの関係さ。それ以上でも以下でもない。どこの家も他人の受け入れはごめん被るからね」

ぼさぼさ頭の男は齒切れの悪い返事をセレネにする。

「む、一緒に暮していれば家族じゃないのか？」

「え……そうとも限らないような、限るような……家族つてのはだな」

首だけをリオンに向けて疑問をぶつける蒼髪の魔女。黒髪の少年は適切な言葉が見当たらないのか、腕を組んで頭を捻る。

外の暗闇に視線を定めたまま、ぽつりと黄ばんだ白衣の男が漏らす

「家族っていうのは、簡単に言うと一つの絆の証……じゃないかな」
「絆の……証」

首を傾げる少女にアルダインが木製カップを傾けながら続ける。

「そう……どれだけ離れていても通じ合える。理由なんていらないんだ……どんな時でも無条件で信頼できて愛せる相手、それが家族さ。だから、一緒に暮らしているだけでは家族とは呼べないね。彼は言っならば、ただの同居人だよ」

リオンとセレネに背を向けたまま、窓の外を見続けているアルダイン。

顔色こそ見えないが、自分の見解を口に掛ける男は、まるで自身に言い聞かせているように『家族』について語るのであった。

緑だった木々が月光に照らされ、蒼になる。

柔らかな光を灯すバーバ・ヤーガ村の家々。

しかし、義賊が集う小屋はその光とは対照的に緊迫した空気が経ちこめていた。

「ババア。約束通り、人造魔女つてやつについて話してもらおうか」

「ふふん、ジェノス。そう焦るんじゃないよ。焦りは判断を鈍らせるもんだ」

一室では義賊の頭領ジェノスと村のリーダーであるチヨベリーが再び会談している。

「俺が焦っているように見えるか？ 決闘に勝った今、俺はアンタから聞きたい情報を聞きたいだけ聞けるんだ。何一つ焦っちゃいねえよ」

左目にある眼帯を整えながら、鼻で笑うジェノス。

「さあ、人造魔女について知ってることを全部教えて貰おうか」

「……ふう」

“血の盟約”による呪術が発動しているにも関わらず、背もたれにふんぞり返っている老婆はため息を漏らすばかりで、情報を漏ら

さない。

「……どうなってやがる。まさか、盟約書を書き換えられた
いや、そんな暇は無かったはずだ」

額に手を当てて、原因を考えるジェノス。しかし、揺らぐ視線から原因を見つけられていないのであろう。

「だから、焦りは判断を鈍らせるって言ってるだろう？ 知ってることはアンタと“血の盟約”をする前に全部吐いちゃったさ」

ジェノスの視線が皺だらけの顔に定まる。

「……何の冗談だ」

「“血の盟約”の呪術を食らってるのに冗談なんて言えるかい。人造魔女について知ってることは、アンタに話したこと以外何も無かつたってことさね」

嫌味つたらしく笑う老婆はとんでも無い発言をした。

ジェノスの体が震えている。怒りからか、それとも殺意からか。ジェノスは、相手の賭け金がゼロの状態で賭けに応じた様なものだ。

老婆が勝てばMF二機が手に渡る。ただそれだけの決闘だった。

「そうか……あの時から俺をはめてやがったのか。レオンを使うのには何か理由があるかと思っていたが？」

深い皺に覆われた眼を細め、茶化すように老婆は答える。

「フン。決闘に参加できれば誰でも良かったんだよ。見ず知らずの

小便小僧に本気で期待していたと思うかい？ アタシにとつちや勝てば儲けもの程度のゲーム。強いて言えば、娯楽が無い村での暇潰しだ、あれは」

小馬鹿にするようにヒーヒツヒツと笑い声を上げる老婆。

ここは義賊が集う小屋。ジェノスは老婆と会談を始める前に、義賊を小屋に集結させている。

一度、ジェノスがチョベリーを殺せと命じれば、部屋のドアは蹴り破られ気性の荒い男達が老婆を殺そうと押し寄せて来るだろう。いくらチョベリーに魔術が使えるようとも敵陣のド真ん中では、無力に等しい。

義賊の若頭は何かの合図のようにスツと右手を上げ、テーブルに打ち下ろす。

「あつはつはつは！ やられた！ まんまとやられたぜババア！ あの時から決闘は始まっていたってことか。クソ、仲間に合わせる顔がねえな、ちくしょうが」

机を連打しながら、力を溜めに溜めて豪快に笑うジェノス。天にまで昇る笑い声は恐らく、別室に控えている義賊達にも聞こえているだろう。

「フン。だいたい、自分達の部下から決闘者を決めるっていうルール自体、お前の方に利があるじゃないか。アタシ以外ただの凡人共の村だ。アタシを封じられた時点でアタシに勝ち目は無い。本気でやり合う気だったなら、ルールの改善を申し立ててるってもんだ」

決闘を誘い出すため、チョベリーは触り程度しか知らない人造魔女のネタをジェノスに持ちかけた。しかし、ジェノスは自分側に利があるルールをチョベリーに提案してきた。

そのため、チョコベリーは勝ちようの無い決闘を強いられることになったのだった。

「話が上手く行き過ぎているから、何か仕掛けてきやがるとは思っていたんだが。まさかババアが勝負する前から全部話してやがったとはな」

「覚えときな『一のことを百に見せる』賭けの基本だ。だいたい、形の無い“情報”なんて代物を賭けに使うからそうなるんだ。アタシみたいにMFを賭ければ、お前は今頃、小躍りでもしてただろうね」

煙管を裾から取り出し、人指し指に魔術による紫色の炎を灯して葉を点火させる老婆。

「ここのMFなんていらねえよ、ウチの廃棄MFを婆さんがカスタマイズしただけだろ。この村で一番有益なものはアンタの情報ぐら이다、チョコベリー婆さん」

「そいつあ、結構なことだ。私の情報が義賊のクソ野郎にご評価頂き、誠に光栄だよ」

机を挟んで、深々と椅子に腰かける両者。

「なかなかの暇潰しができたよ。その点に関しては礼を言わせてもらおうかね、ジェノス」

椅子を引き立ち上がろうとする老婆。が、そこに低い声が静止を促す。

「婆さん、まだ話は終わってねえ。俺は知……知っていることを洗いざらい吐いてもらおうと盟約書に記した。別に『人造魔女についての

情報を洗いざらい吐いてもらう』とは書いてねえ。……まさか、人造魔女に熱くなってた俺に気を取られ過ぎて、見落としてなんていねえよな？」

老婆の足取りがピタリと止まった。

ジェノスは機械のような声音で再度、口を動かし始める。
絶対に破ることのできない呪術を、詠唱を。

「この村に女は来てねえか……いや、この村で匿っているやつはいるか。そして、人造魔女について知っていそうなやつの名を並べろ」

歪み無いジェノスの眼差し。

樹海の主、蛇のような白髪を持つ老婆は口を笑みで歪ませた。煙管を咥え、鼻から紫煙を漏らす樹海の老婆。

「たまには、戯れてやろうと思えば……このハイエナが。人のモノを奪うのはいっちゃまあかい。しかし、お前にハメられるとはアタシも老いたもんだ。お前はおいだが過ぎるがね」

ドスの効いたしゃがれ声。

彼女の喉は地獄の底へと通じている。

「『一のことを百に見せる』のは賭けの基本じゃない。『一のことを百にする』のが賭けの基本、だろ？」

義賊の頭領は机に手を付いて、ニヤリと不敵に笑っている。

鬼が出ようが蛇が出ようが、今の彼には関係無い。

「フン。世の中、何も知らず能天気にくたばる奴が一番幸せだったのに……お前も物好きなクソ野郎だねえ。……か弱いババアから物

を奪うとは、義賊が聞いて呆れるってもんだ」

「口の硬い婆さんの腹を割るにはこれぐらいしねえとな。それに見合った礼はするぜ、俺達は義賊だからな」

老婆の口が今、呪術の力によって抉じ開けられる。

第58章 表紙

リオンとセレネがアルダイン宅から出ようとドアに手を掛けた時、ドアが文字通り吹き飛んだ。

「おお、レオンじゃねえか。何だ、まだここにいたのか」

「だから……俺はリオンだ。この連中は、ドアを足で開けるのが習慣なのか？ ちゃんと手で開けるよ、手で！」

「開きやいいんだよ、開きや。ああ、それとお前。意外とMF扱えるじゃねえか。少し見直したぜ」

リオンの声を聞き流しながら、ズカズカとアルダインの座る椅子まで歩を進めるハイエナ。

「義賊の頭領が僕に何の用だ」

「そう邪険になるなよ、学者。ちょいと聞きたいことがあるだけだ……」

長髪眼帯の男はニタリと笑った。

リオンとセレネがまだいることに気がついたのか、顔だけに向けて、

「リオン、お前らの部屋はこっちで用意してやった。その辺にいるウチの連中捕まえて案内してもらえ」

「って、ジェノス。俺達は一切これからどう」

ジェノスが初めてまともに名前を呼んだこともあってか、指示に従わなくてはならない威圧感を感じる。

一方で、このまま自分達の身柄はどうなるのか、どうするつもり

なのか問い詰めておこうとしたリオン。

しかし、何気なくズボンのポケットに手をつ突っ込んだ瞬間、声を上げた。

「あ、ああー!!」

「ああ？」

気だるそうに首を傾げるジェノス。

「あ……！ ああ。ありがとう、ジェノス！ セレネ、行くぞ」

「うおおい！ 一体どうしたんだリオン？ ハッ、まさか！ 遂に変態神・リオンからのお告が来たのか！ 私としては」

首元を摘まれて、運搬される蒼髪の少女がその素晴らしき頭脳を用いて、リオンの挙動不審を分析する声が遠くなっていく。

「……一体、何だってんだ」

「さ、さあ」

回答を求めるジェノスにアルダインは苦笑いを返す。

ジェノスが用意してくれた部屋は埃っぽく、カビ臭い空間だ。しかし、外よりはマシであろう。老朽化していると言っても雨風からは守ってくれる。それに、こんな樹海に囲まれた村では夜中に野獣の一匹や二匹うつっていてもおかしくない。

「あゝ、わかんねえ！ 被験者Dの遺伝子配列？ マジョリティ理論を参考に魔力をつて……マジョリティ理論ってなんだよ！

セレネ、わかるか？」

乗るだけで軋むベッドに突っ伏している少女に言葉を漏らすリオン。

部屋に入っすぐ、リオンはアルダインの研究資料と思われるものに目を通していた。

上着を洗濯することになったため、ズボンのポケットという劣悪な場所に資料を入れていたものだから、資料はくしゃくしゃになっている。

研究資料のタイトルから推測するに、アルダインが魔女について何らかの研究をしていたのは確実である。

「……でっかい弾痕が一本、ちっこい弾痕が二本、でっかい弾痕が三本、長い弾痕が」

「その気色悪いカウント、止める。それと弾痕の単位は本じゃない」

「むう……馬鹿にしたな！ これをしないといい夢が見れるんだぞ？」

熟睡だぞ！？ ん？」

「お前、人が話しかけてるのに寝る気だったのか？ そんな催眠術、悪夢しか見れる気がしねえ！ って、ジタバタするな、埃が、ごっほっごほ」

枕に顔を埋めたまま、むくれているセレネは素足をジタバタしてリオンに埃攻撃を開始。舞い上がる埃を回避する術などない。

一から百まで何かの数を数えると眠れるという魔力を使わない子供騙しの魔術は、身近な家畜 特に羊の数を数えるのが一般的だ。ダンコンの数を数える人間は希少種であろう。

「人が真剣に魔女について調べようとしているってのにお前はつてえ！ な、何してんだ、お前！」

「ん？ いや、服が汚れ過ぎていてな。さすがの私も着心地がだな」

「だから、何で今ここで脱ぐ！」

「ん？ ああ、そうか。代えの服がなかったな。とりあえず、リリイに借りて来る」

「違う、そう言う意味じゃ……ちよ、ちよ、ちよと待て！！ お前、服はもう着てるんだろう ぶあ」

純白の下着一丁で、部屋を出ようとしていた少女を指の隙間から見て鼻血を垂れ流す少年。ベッドにぶつ倒れる。

女性耐性がゼロどころか、マイナス値を叩き出している田舎育ちの少年には、セレネの張りのある肢体は刺激が強過ぎたようだ。

「おい、リオン。大丈夫か？ いや、頭が大丈夫じゃないのは知っていたが」

「う、うるせえ。とにかく何か着ろよ」

汚れた服を床に放置したままリオンの側に駆け寄るセレネ。そこへ

「セレネ。セレネにも服、貸してあげ え！」

二人の部屋に入って来た幼女が……いや、リリイが絶句している。パサリと彼女の腕から落ちる女物の服だけが部屋に響く。

リリイの視界に写っているのは恐らく、ベッドにちよこんと座るほぼ裸の少女と大の字に果てている少年が一人。

「おお！ リリイ、ちょうどいいところに！ 服を貸してくれ、汚れてしまって困っていたんだ」

「ああ……ああ。お邪魔しまし、っ！」

何事もなかったように、リリイの手から滑り落ちた服を四つん這いになって拾うセレネ。

着用を始めるセレネの背中を見て、緊迫した顔つきになった銀髪の少女。

「大きな、刺青……」

「ん、刺青？ そんなものあったのか？」

「え？」

声を漏らしたのはリオン。

身を彫って刻む刺青。背中一面という大きさの刺青を彫って痛みを感じていないと言うのは、いささかおかしい。

いくら上手く彫れていたとしても、あれだけの刺青が彫ってあれば生活する上で時おり痛みを伴うはずだ。

当然、リオンはセレネが刺青の存在に気が付いていると思っていたが、本人の発言から察するにそうではなかったらしい。

首を目一杯捻りながら背中を見ようと試みるセレネにリリイは続ける。

「うん、大きい狼の刺青がある。どこかで見たことがあるような……」

「ううーん、よく見えん。狼の刺青か……まあ、私は彫った覚えが無いからわかん」

「彫った覚えが無い？ こんなに大きな刺青を……？」

「ああ、言うのを忘れていた。私は記憶喪失らしくてな。自分のことがよくわかっていないんだ」

さらりと証言する少女にリリイは目を一瞬だけ見開いた。

「記憶、喪失」

そんな人物が本当にいたのか、という眼差しでセレネを見る新緑の瞳。

「俺達はセレネの記憶が戻すために旅をしていたんだ。こいつの刺青に見覚えがあるなら教えてくれないか？ 何かの手掛かりになるかもしれない」

蒼髪の少女が服を着終わったのを確認し、ベッドからのっそりと起き上がるリオン。

「ん……うう。気のせいかもしれない。本で見たのか、街で見たのかすら思い出せない状態。そういった動物のシンボルは好まれるから」

確かに、動物を基調としたシンボルはどこにでも使われている。『戦争のハイエナ』も名前通りシンボルにハイエナを使っているし、武器屋、発掘屋、軍など数え出したら切りが無い。

「ジェノス……は男だからダメ！ チョベリーなら何か知ってるかも」

自分で言いかけて否定。リリイは考古学者の老婆に相談してはどうかと提案する。

「でも、あの婆ちゃんは見返りを要求してくるんじゃないのか？ 俺達、金もねえし渡せるものなんてないぞ？」

「止む負えない……足りない分は、リオンの体で払わ
「払わねえよ！」

「な、何でだ！ お前は熟女……じゃなくて、年上好みだと思っ
ていたんだが」

「上限はないのか、上限は！ 上過ぎるだろう！ それに婆ちゃん
は熟女じゃない。熟し過ぎてるから……強いて言えば腐女 げっ
！」

途端、リオンの顔が青ざめて氷結する。

「誰が腐女だい？ 毛も生えてないガキに言われたかないねえ」

「あ、チヨベリー」

「この婆ちゃん、いつの間に……」

リリーの背後にあるドアから堂々と入室してくる腐女チヨベリー。
銀髪の少女はそれとなく道を空ける。

白蛇のような白髪を揺らして、リオンにドスの効いた視線を刺す
老婆。

「フン、覚え時な。アタシは泣く子も黙る神出鬼没だ」

「そんな凄みのある言い方されても……明らかに言葉の意味わかっ
てねえだろ」

「冗談はさておき。お前らの声がか過ぎるから外までまる聞こえ
だ。話はだいたい聞こえちゃったよ。そうさね、鑑定なら例外なく
十万だ」

「じゅ、十万！？ 見るだけで十万キャンも取るのかよ！」

ベッドにドカッと座り込み老婆は煙管を一吹き。リオンの抗議な
どどこ吹く風のようにだ。

「無いなら働きな。十万分の働きをアタシに提供すりゃいいだけの
ことだ。体で支払いたいんだらう？ 先立つものがないなら、お前

のいきり立つのをちょんぎって売ってもいいね。アレは魔力の塊だから、良い値で売れるよ」

「そ、そんな無茶苦茶な！」

老婆の剣幕に押されるリオン。

すると、リオンのベッドに置かれた洋紙に老婆の目が止まった。隠そうとしたリオンだったが数秒の差で紙を奪い取られる。

「ほお、アルダインの研究資料じゃないかい。たった一枚しかくすねられなかったなんて、小物だねえ。ますます小便臭くなるっつもんだ」

「あの状況じゃ、一枚取るのが限界だったんだよ！……って、くすねてなんていねえぞ。借りて来ただけだ、ちゃんと後で返すつもりなんだよ！」

「つくならもつとマシな嘘をつきな、ガキ」

タイトルと補足説明しか書かれていない資料を見せつけられ、狼狽するリオン。

リオンは目に止まった“魔女”という単語に魅かれて資料を拝借してきた。何十枚にも及ぶ研究資料の表紙とも知らずに。

蒼髪の少女が首を傾げて老婆に尋ねる。

「で、アルダインは何の研究をしていたんだ？……チョコベリー？

おおーい」

「コイツは……リリイ、ジェノスは今どこにいる！」

小柄な少女に表紙を渡す老婆。資料のタイトルを見て息を飲むリリイ。

「物事には順序ってもんがあるんだよ。このことを何かの間違いで

知っちまったアイツが何をするかわかったもんじゃない」

リオンがくすねて来た研究資料の表紙にはこう書かれていた。

“ 人造魔女における魔力の向上、生命力の違いと問題点 ”

「ジェノスは今どこだ！？ 早く答えな！」

「うう、わ、わからない。さっき解散してからどこに行ったのか」

狼狽えるリリイを見かねて、リオンが言う。

「ああ、ジェノスならさっきアルダインさんの家に」

「不味いねえ。今一番会わせちゃいけないヤツの家にいるのかい。
アルダインの家に急ぐよ！」

瞬間、夜の村に爆発音が響く。

「アルダインの、家が……」

半壊している家を窓から眺め、銀髪の少女が力なく声を漏らした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5596j/>

ミリオン

2011年11月8日22時11分発行